
ドSな俺と、ドMなアイツ

下弦 鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドSな俺と、ドMなアイツ

【Nコード】

N3495D

【作者名】

下弦 鴉

【あらすじ】

平凡だけど、かなりSな少年瀬川慎吾と、ありえないほどドM森野美咲が繰り広げる、おかしなスクールライフ・ラブ(?) コメデイ!
【久方ぶりに更新を再開いたしました! 長らく放置してしまつてすみませんでした。これからは地道に更新していきますので、よろしく願います】

1、最強のドM登場!?(前書き)

1、最強のDM登場!?

数週間前のやっと卒業したのは小学校で、まだ三年、確実に義務教育を受けなけきやならない。もう最近、勉強に飽きを感じてきている今日この頃。いい加減義務教育を終わらせて、バイトをやってみたいものだ。

ただ決まった時間に起きて、勉強して、部活動して……って生活より、ハラハラドキドキの待っている、世の中に出て行きたいと思っています。もう本当に勉強はうんざりです。

おっと、自己紹介を忘れてた。俺の名前は、瀬川^{せがわ} 慎吾^{しんご}。吹野中^{ふきの} 学の1年、13歳。血液型はO型なんだけど、良くAB型って言われる事に疑問を持っています。剣道部に入ってはいるけど、かなり弱いです……。

ああ、余談でこんなに無駄な行使っちゃて……なんかごめんなさいね、次からちゃんと本文に入るのでご安心を。

……一応、ココも本文なんですけどね。

＊

本格的に暑い。暑いぞ、夏!そして太陽!たまには気を利かせて休んでくれよ。日射病で殺す気か!防具を取り外しながら思う、何でバトミントン部と一緒に時間帯で練習しないといけないの!?!窓閉め切ったら、『ここサウナ?』って思うしかなくなるだろおが!サウナの中で、剣道やらせるなっつの!

「おつかれえ、今日はもうあがっていいよ」
せんぱあい!有難うございますっ!こういう時だけ輝いて見えます!

「お疲れ様でしたあ」

さっさとこのメチャ暑いサウナから出たくて、ろくに荷物もまともせずに俺は外へ出た。夏の日差しには殺意的なものを感じたけど、風は気持ちよく吹いていた。

うーん、なんて気持ちいい風なんだ……神様、この世に風を創ってくれて、ありがとう！

「しいーんーごおー！」

うわっ！出やがった、俺の天敵、森野 もりの みさき 美咲が！

「会いたかったよお、マイダーリン」

初登場でいきなり嘘つきやがった！森野のに「マイダーリン」って呼ばれるような関係じゃねえし！

「ハートマーク付きで呼ぶな、それに、のっけからツツコませんな、ボケ！！」

「出た、私だけに浴びせてくれる罵声！ああ、なんて気持ち良いの……」

「キモいから！これ読んでくれる罵声！ああ、みんな引いちゃうからやめてくれない？ホント、やめてくれない？」

ええ、せっかく開いてくださった皆さん、ゴメンなさい。森野、キモ過ぎてごめんなさい。ホント、謝るんで、どうか閉じないでください……。

「ねえ慎吾、もっと言ってくれないの？いつもならもっと激しく言ってくれるでしょ？」

「だあかああ、下の名前で呼ぶなっつてんだろ！？ウザいから、マジで！」

「……。」

「聞いてんのかよ？ふざけるとぶっ飛ばすぞ」

「……。」

「あ、もうイライラするっ！何でお前はそんなに馬鹿なんだよ！その馬鹿、一生直らねえぞ！」

「……そうよ！それでこそ私が認めたダーリンだわ！」

「な……何だよ、急に」

森野が外通路の屋根の柱にもたれかかり、はあく深いため息をつく。そしてさすが演劇部、泣き顔も上手い。

「優しい言葉で疲れた女を誘い、そして厳しい言葉で励ましてくれるの。どんな時でも必ずツッコミを入れ、ボケた私に忠実なる愛を誓わせるの！！嗚呼、なんて美しい、あ・い……なのかしら……」

「あのお、すみません。お前殺して良いですか？」

「無理よ！私はもう死んでいるの！愛に溺れて……ね」

また『ね』にハートマーク付けやがった！キモいよ……どうしようもないくらいに、キモい！

「愛に溺れても死ねねえだろおが。馬鹿かお前、てか馬鹿だろ」

「死ねるわ！貴方の為なら、愛しい貴方の為なら、私は死ねるの！どんな事でも、死ねるのよ！ダーリンが……愛してくれるから」

「……って言うか、お前に『ダーリン』なんて呼ばれる筋合いねえんだけど！しかも、愛した事ねえし」

「ええ！嘘！どうして！」

「どうしたも、こうしたもねえよ！やめろよなその言い方。誤解されんだろ？」

さっきからここ通る先輩やら同級生が、俺たち見て苦笑してんだよ。恥ずかしい事山の如しだよ。

「分かったわ、サチコね、サチコのせいなのね！」

誰だよサチコって！！昼ドラかよ！

「サチコがあなたを譲らないって言うんなら、私だって譲らないわっ！許さないわよサチコ、こんなにもダーリンを傷つけて！」

傷ついてねえしっ！！どちらかと言うと謎のサチコさんより、お前の発言に傷つく！ついでにダーリンって言うなっ！！先輩達、ドン引きだろ！！

「出てきなさい、サチコ！私と勝負しようじゃないの！どっちがダーリンに相応しいか、白黒はっきり付けようじゃないもん！」

噛んだっ！一番大切な締めで噛んだよこいつ！！いつの間にか、

俺取り合いされてるし！妄想の中でだけどっ！！

「あ、あのお。私、葛野木^{くずのき} サチコって言うんですけど……お呼びですか？」

いたーーーーー！！謎のサチコさんいたよ！これどうなるの！？どうなっちゃうの、これ！？

さあ、森野どうする！ライフカード使うのか！？webに続いちゃうのか！？

「あ、あんたがサチエね」

名前違ってるから！『サチエ』じゃなくて『サチコ』だから！！突然のことにたじろいでるよ！焦ってるよ、森野。焦りすぎだよ、森野！

「あのお、私サチエじゃないんですけど……」

「何言ってるの！？私はサタンって言ったわ！」

誰！？新キャラ登場！？なんかドラゴン〇ールに出てきそうなんですけどっ！！て言うか、サチコさん先輩だったらどうすんの！？タメ語じゃヤバイぞ、森野！！

「……うぜなあ、早く用件言ってくんない？アタシそんなに暇じゃねえんだけどお！」

キャ……キャラが変わった！？怒ってるよねこれ！？マジキレてんよね！？

「あんた何様のつもり？私は、くずのり サチコよ！！」

なんか分からないけど、自分の名前間違えてるうーーーー！！わざとなのか？本気なのか？この緊張した空気の中で噛むなんて……テレビ的にはおいしいぞ。

「サチコでも、味のりでも、サッカーでも関係ないわ！私の慎吾は譲らない！！」

味のりとサッカーはどこから出てきた！？確かに関係ねえけど、サチコはかなり重要だぞ！！

「上等よ、かかって来なさい」

いやっ、上等じゃないよ？これ、かなり上等じゃない。悪乗りし

ないで良いんだよ、サチコさん!! 森野は馬鹿だから、そういうこと言ったら――

「いい度胸ね、私と殺^やり合おうなんて」

ホラ乗っちゃった!! あいつならやると思ったよ! どうなるのこのあと。何しちゃうの?

「いくわよ! 愛とLOVEは必ず勝つってところ見せてあげるわ!!」

愛とLOVEってほとんど同じ意味だから!! 同じ事2回も言うてるよ、サチコさん!!

「覚悟しなさい! 私と慎吾のきぞあに勝てる分けない事教えてあげる!!」

きぞあって何!? 何なの? 何? ……もしかして、絆って言いたかったのか、森野!!

このあと2人は殴り合いの喧嘩でなく、汚い口喧嘩を始めたのだ
った……。

……こんなんで終わらせちゃっていいのかな?

1、最強のDM登場！？（後書き）

最近恋愛小説を書き終えたのに、変な方向に突っ走っちゃって、新年から壊れ気味です。でも、気にせずこの変な世界に入ってきていただけると嬉しいです。

季節が夏ですが、気にしないでください……。

2、馬鹿は限りない!?

皆さん、お久しぶりです。瀬川^{せがわ}です。なんだか変な展開になりつつりと終わってしまった前回ですが、覚えているでしょうか？キモい森野と、謎のサチコさんの事です。あの事なんですが……

「へえ、そうなんだあ。美咲^{みさき}ってそんなに好きなんだあ、瀬川君のことお」

「うん!! そうなんだあ。……で、サチコには好きな人いないの?」

「ええ、いないよお (照)」

「ええ!! ずる〜い〜! ホントはいるんでしょう? 教えてよお (ニヤリ)」

「ええ〜……誰にも言わない?」

「言わないよお!! で、誰??」

「それはねえ……」

耳元で何やら囁く謎のサチコさん。そしてオーバーリアクションをとる森野。

何故、どんな風に転べがばこんなにも急に仲良くなるのか、さっぱり分かりません!! 女心って難しいです……。っていうか――

「何でお前ら俺の家に来てんの!?!」

そう、奴らは俺のベットで自分の家の如くくつろいでいた。

「いいじゃない、幼馴染なんだし」

「えっ、そうだったの?」

「騙されてるよ、サチコさん。そいつの言う事100パー嘘だから」

「なあんだ、つままないのお」

あなたその妙に間延びする言い方が無性にムカつくんですけど……。

つままないってなんすか? 何がどうつままないんだよ。

「サチコ、気にしないでいいよお、ダアリンのことお。ちよおつと照れてるだけだからあ」

うつってる！！サチコさんの言葉遣いが、森野にうつってる！！

「そうなのお、じゃあ美咲の言葉信じるよお」

「ありがとお、サチコ」

ベットの上で、嘔泣きしながら抱き合う二人。見ている方が、無性に腹立つ光景だった。

っていうか、こいつらいつになったら帰んの？

——数時間後——

うまい。ありえない。うまいけれど、ありえない。何で、うまいのにありえないっかって？それは——

「何でお前ら、人の家の飯食ってんだよ！！」

「えええ！！」

「ダメなの！？」

口をパクパクしながら、言うもんだから口の中のものが見える。

汚い。そう、汚い。口の中も、森野達も。

「ダメに決まってんだろ！とっとと自分の家に帰りやがれ！」

「めんどくさいから嫌です、隊長」

と、森野。

「左に同じでござえます」

と、サチコさん。

「隊長って俺のことか？何で隊長なんだよ！てか、お前らなんだよ！」

「私は森野切り込み隊長でござえますだ。かの新〇組の沖〇みたいな？」

「私は副隊長でござえますだ。かの新〇組の土〇みたいな？」

「じゃあ、俺はかの新〇組の近〇ってか」

「おお、さすが隊長！物分りがようござえますな」

「さすがだあ」

「何なんだよ、そのしゃべり方！なんかムカつくんですけど！」

「昔の人ってこんな感じのしゃべり方っぽいじゃないですかねえ？」

「ささ、隊長も一緒にいかがで？」

「もう、ウゼエよお前ら！このテーブルがちゃぶ台だったらひっくり返したいわ！！」

「まあまあ慎ちゃん、そんなに怒らなくてもいいじゃないの。ご飯はみんな食べた方が、美味しいじゃないの」

「慎ちゃん！？それって国民的存在のクレヨン——」

「違うわボケ！！」

バシツと森野の頭を叩くと、見事にテーブルに額をぶつけた。

うーん……なんだかスツキリ。

「アラ、母さんは暴力反対よ。大丈夫？森野さん」

「はい、大丈夫ですわ、お義母様」

「いつ俺の母さんが、お前の義母になった！！」

「いつって、そんなの慎ちゃんが産まれた頃からに決まってるでしょ」

「お前まで、俺を慎ちゃんって言うな！母さんも、森野の相手しなくていいから、あっち行って」

母の背を押しながら、森野を睨んでいるとそいつは嬉しそうに頬を赤らめていた。

母をキッチンに押し込んでからリビングに戻ってみると、森野とサチコはニヤニヤしていた。……殴っていいですか？

「何笑ってんだよ」

「何って……ねえ、サチコさん」

「ねえ、美咲さん」

何だお前ら、ゴミ捨て場によく溜まってるオバハンか？

「んだよ、はっきり言えよ」

「ですって、美咲さん」

「どうしましょう」

「……」

「言っちゃえばいいんですよ、美咲さん」

「そうかしら」

「……」

「ほおら、早く」

「でも……」

「……」

「勇気を振り絞って美咲さん！私、応援してるからあ」

「有難う、サチコさん」

「……」

「ホラ、王子様が御待ちかねよ」

「うん、そうね。」

「誰が王子様だ、ボケエ！ふざけた事、抜かしてんじゃねえぞ」

「アラごめんなさい」

何か、初対面なのに、かなりムカつくんですけど、この人……。

「あの……ダーリン……」

「誰が、ダーリンだよ！もう飽きたんだよ、そのネタ！いい加減他の事言えや！」

「気持ちいい罵声を有難う、慎吾様。でも、私はそろそろ帰らなければなりません……」

と、涙を拭う森野。その隣で肩を抱き、一緒になって涙を拭っているサチコ。……こいつら、うち合わせでもしたのか？

「帰ればいいじゃん、そんなもん」

「え？」

双子のように同じ反応だ。……いや、この例えはいささか双子の方々に悪かったか？すみません、全国の双子様方。以後気をつけます。

「帰ってえんだろ？だったらとっとと帰れよ、迷惑だから」

「引き止めて……くれないの？」

涙声で森野が言う。その隣で、口をパクパクさせているサチコ。
……魚みたいでウケるんですけど……。

「引き止める理由なんて、俺にねえだろ。お前は俺の何なんだよ」
「……恋人に——」

「決まってるねえだろ!!」

バシッと心地よい音が、俺の胸をスッキリさせてくれた。はたか
れた森野は、頬を押さえながら俺に向かって言う。

「酷い! 親にもぶたれた事ないのに!!」

「お前はガン○ムのア○ロ気取りか!」

もう一度頭をはたくと、森野は派手なりアクションで床に崩れ落
ちた。その倒れ方が、無性に苛立たしい。

「二度もぶった!」

「だから、何でアム○気取りなんだよ!!」

「だって、ダーリンネタに飽きたんでしょ!! だったら新しい快
感を求めて三千里しなきゃダメじゃない!!」

「三千里もしてねえだろ! 何だよお前、何なんだよ」

「マルコ・ポーロです」

「全然違う人物になってんじゃないか!!」

「えっ!? 嘘!? ホント!?」

「わざとだろ! 絶対わざとだ!!」

「そうよわざとよ! 何か問題ありますか?」

「お前の性格が問題じゃ、ボケェ!!」

なんだか疲れてきた。と言うか、疲れた。早くこいつら追い出し
て、寝たい。

「もう、気いすんだだろ? さっさと帰れ」

「冷たいのね、貴方って人は……。いいのよ別に。新しい女が出
来ただけなんですよ。そして私は、もう要らないのよね。……ただ、
一つ言っとくわ、女を甘く見ると怖いわよ!!」

「は?」

「そうやって、平気な面して何人の女をフツてきたんだか」

「フツてねえし、告られた事ねえし」

「嘘付いたって無駄よ！全部知ってたんだから。それでも私は……貴方を愛していたのよ。貴方を……心から愛してた」

「勝手に妄想を膨らませるのは、止めましょうね」

「貴方にとっては妄想だったかもしれない。だけどね……私にとっては、貴方が全てだったのよ！」

「……」

「さよなら……。私の愛しき人」

サチコがどこから取り出し、どこで作ったのかわからないが、カンを出した。それには筆で書きなぐったかのように、こう書かれていた。

『愛しき人から旅立つ女……完！！』

「なんだよ、それえ！」

サチコからカンを奪い、ずたずたに破り捨てた。それをサチコは悔しそうに見ていた。

「ああ！せっかくのムードが台無しじゃない！！」

「どんなムードだよ！」

「私と慎ちゃんの歩く道……みたいな？」

「どんなだよ！」

履いていたスリッパで、森野の頭をはたく。

「そんなベタなモノで私を殴らないで！やるんだったら、素手でお願います！」

「そんなの俺の勝手だろ！」

「私もベタなツツコミの仕方には、反対です！議長！」

「誰が議長だ！」

「私も反対です、議長！」

声を変えて、サチコは再び言った。その鼻を摘み、俺は言う。

「あのさあ、これ以上俺を怒らせないでくんない？正直もう疲れたわけよ。一日中ツツコミができると思うなよ」

「そうだったんですか、スンマッセェン」

「お前はどっかの、新人か！」

デコピンをして、突き飛ばす。鼻をさすりながら、サチコは苛立たしげに言った。

「チッ。俺だってこんな役やりたかなかったんだよ。今日は塾もあるってのに……ペッ！」

この人、またキャラが変わったんですけど！MからSへの大変身をとげたよ！しかも、人の家のフローリングに唾吐きやがった！

「だったら、帰れよ」

「あん？めんどくせえからやなんだよ。一晚泊めさせよや」

「あん？やなんですけど。自分の家帰れ。サボリ」

「あん？こっからの帰り方は分かんねえから泊めさせろって言うてんだろ、ドS」

「お前、実は馬鹿だったんかい！！」

「なにになに？新しいネタ？」

「お前は黙ってろ！てか、外で待ってろ！」

「ヤ」

「帰らねえと、もう突っ込んでやらねえ」

その脅しは効いたようで、森野はそそくさと部屋を出て行った。後は、この馬鹿だけ。

「森野と一緒にお前も帰れ」

「だから道が――」

「聞こえねえな？サブキャラは大人しくしてればいいんだよ！」

「……悪魔」

そうして、長い一日は幕を閉じた。

……本当に、長かった気がする……。

3、神出鬼没のM女!?

今日も暑く、くだらない一日が始まった。眠い目を擦り、洗面台で顔を洗う。酷い寝癖だ。それに今日は特別に、背後にお化けがくっ付いて来ている。日頃の行いが悪いせいだろうか。

……え？お化け？朝っぱらから？そな、あほな？どんなベタな心靈現象でも、朝っぱらからお化け出現なんてありえない？……うん。ありえない。きつとまだ寝ぼけてんだ、俺。昨日は散々な目に遭ったからな。

もう一度、よく冷えた水で顔を洗う。気持ちいい。

「おはよ、慎ちゃん」

お化けが話しかけてきた。しかも、母と同じ呼び方で。……何故か無性に腹が立つ。

「無視しないでよ、慎ちゃん」

あつ、そっか。わかったぞ。これ、母さんだわ。だってあの人、こういう事するの大好きだから。無視していこう。無視して。

歯磨き粉を歯ブラシに塗って、シャコシャコと歯磨きしながらリビングへ。その後ろを、母さんも付いて来る。

「慎ちゃん！クレ○ン慎ちゃん！」

「慎の字が違うよ、母さん」

「母さんじゃないわよ！愛しのハニーよ、慎ちゃん」

はあ？愛しのハニー？蜂蜜のCMのキャッチコピー？

「蜂蜜のCM、また新しいの始まったの？でも俺、蜂蜜嫌いだから関係ないや」

「蜂蜜のCM？何の事？愛しのハニーよ、ダーリンの！」

ダーリン？ああ、新生ユニットの新曲か？そういえば、そんな名前のユニットがいたような……。いたっけ？

「どんな曲調なの？いい歌詞？」

「曲調？歌詞？関係ないわよ、そんな事！何、慎ちゃん。新しい、

ツッコミ？」

ああ、新人の笑い芸人の事を言ってるのか。でも、愛しのハニーだなんて、ダサイ名前のお笑い芸人、いたっけ？……でも、ホントにいそうだな……。蜂蜜を全身に塗り付けてるみたいな感じ？

「もう、アタシよ。マイダーリン。貴方だけの、アタシよ」

このMな響きのある声は、いや、まさか。だって、今は朝だぜ？しかも、六時半だぜ？なのに、人の家にいるとか、ありえないだろうん、ありえない。てか、あったとしても、不法侵入だろう。

「どうして何も言ってくれないのよ、ダーリン。美咲はいつでも、ダーリンの事を想ってるのに……どうして!？」

美咲？……美咲だと!？

振り返れば、パジャマ姿の森野がそこにいた。頬を赤らめ、泣いている。

「な……」

「あれ？ダーリン。嬉しくて声も出ない？美咲、嬉しい!」

「嬉しくて声がでないとか、ありえないから、マジで。てか、なんでお前ここにいんだよ」

「ん？泊まったからに決まってるじゃない」

「泊まった？どこに？」

「ここに」

「ああ、地中か」

「地中じゃないわ、地上よ」

「地上のどこ？」

「ここに」

「ああ、俺の家か。……はあ!？俺んちに何で、勝手に泊まってるんだよ!」

「ダーリンの家じゃないわよ、詳しく言えば」

「そんなこたあ、どうでもいいわ!」

「どうでもよくないわっ!私とダーリンで、夢のラブ・スイートハウスを立てるのよ!」

「どこからそんな言葉が出てくるんじゃ、ボケ!!」

齒ブラシを奴の足元に投げつけて、そのまま自分の部屋へ飛び込んだ。ありえない。マジ、ありえない。どれくらいありえないかって言うと、地球の地軸が真っすぐになるくらいありえない!……ちよつと言いすぎかな……。

「……何で俺の家にいるんだ?どこから入って来たんだ?……あ、良く落ち着いて考えてみれば、怪しい人が、約一名。どっかに出張に行っている親父は別として、考えられるのは、やんわりと笑っている母だった。

「あんにやろお……森野だけ入れるなって、言ったのに……!」
ここでじっとしている暇はない。朝飯も食わずに学校へ行く気もない。森野と一緒に登校なんて、もっとありえない。絶対にない!

「かーーーーさーーーーーん!!」

思い切り扉を開けて、部屋を出、リビングに着くと、キョトンとした表情の母がいた。そして、平然と人の家の飯を食っている森野もいた。

「どうしたの? 慎ちゃん。……もしかして、体操服、なかった?」

「そんな事じゃなくて、何でこいつを家に入れてんだよ! 入れるなって、言っただろ!」

「そんなに怒る事ないじゃない。だって、こんなに朝早くから待っていてくれるのに、外で待たせておくのは、可愛そうでしょ?」

「その前に、何でこんなに朝早く来たのかを疑ってよ!」

「……ああ、今思えば、そうね。……ゴメンね、慎ちゃん」

「……もういいよ、飯は?」

「私の、手作りなんです! 食べてください、先輩!」

「だあれが先輩じゃ! お前は飯持ってきてんなら、自分の飯食えよ! 人の家の食費を増やすな」

「まあ、家庭的な慎ちゃんも好きよ。美咲は、全てを受け入れます」

「受け入れて欲しくねえよ! お前みたいな変な奴に、受け入れて

欲しくなんかねえ!!」

弁当包みを開きかけていた森野は、その言葉に機敏に反応し、嬉しそうに頬に手を添える。

「私だけの、屈辱的な言葉。……美咲は、幸せです」

「お前は学校行く前に、病院に行っけ」

そんな面白い息子を見ながら、母は嬉しそうに微笑んでいた。

それはそれで、いいかもしれない。だけど、俺の苦勞を知って欲しいぜ……。

4、大阪弁男に注意!?

朝から疲れて、中学生のハードな生活がのりきれるだろうか。生きて、またあの家に帰れるだろうか。

「どうしたの、ダーリン？」

「……はあ」

こいつのせいで俺は疲れてるって言うのに、何でこいつは元気なんだよ。何で一緒に学校行かないといけないんだよ。普通に考えたら、何で今日に限ってこいつは俺の家に来たんだ？なんか特別な日でもないのに。

「ダーリンってば、無視しないでよ！美咲、すねちゃうよ。ブンブン」

ぶりっ子して、さとう○緒の真似してる。でも、今日はこれ以上ツッコムと、生きていけない気がするから、やめておこう。

「ねえってばあ、ねえ、ねえ。無視しないでよ、ダーリン」

「……」

「ダーリン、聞こえてる？聞こえないなら、私、ドリカムの『君にしか聞こえない』歌うよ？歌っちゃうよ？」

「勝手に歌ってるよ、つーかなんで、そんな歌知ってたんだよ」

「あ、やっとなツッコミいれてくれた！今日はもうだめかと思ったゾ」

「だあかあ、語尾にハート付けんな。しかも、何でカタカナ？ディグレの千○伯爵気取りかよ」

「マニアックなところついてくるね、慎ちゃん」

「その呼び方もやめろ」

「嫌よ、これがなきや私、死んじゃうよ!？」

「じゃ、いっその事死んでくれよ、頼むから」

「それはダメやで、瀬川」

うわっ。新キャラ登場だよ。てか、こいつ誰？何で俺の名前知っ

てんの？

「誰ですか、アンタ。私とダーリンの幸せの時間を奪わないでください」

「な……そ、そんな関係だったんかいな。……知らなかったわ」
「誤解しないで！そんな関係じゃ、一切ありませんから。ついでに、君、誰？」

「あてかいな？わての名前は坂井稔さかいのりだす。今後とも、ヨロシユウたのんまつせ」

な、何故に大阪弁！？しかも、全然なまり消す気ねえし！

「で、小堺君私たちに何の用？」

名前ちげーよ、森野。お前、ホント記憶力ねえな。

「小堺じゃなくて、坂井だす。用っちゅう用はねえんだけど、暇なんで、一緒に学校行きませんか？」

「いい訳ないでしょ！私の幸せを奪う気！？」

「じゃあ、俺と一緒にこうよ、坂井君」

「ほんまかいな！おーきに！じゃ、誰かはん、ほなさいなら」

本当に嬉しそうだな、こいつ。無邪気すぎて、怖いくらいだ。それに、なんか、あれっぽい気がする……。

いや、そんな事を思っちゃいけないぞ、慎吾。こいつは、この坂井様は、俺を森野の魔の手から救ってくれた、いわば勇者様だぞ？そんな優しい奴に向かってホ……なんて言えないだろ！そうだろ、俺！しっかりするんだ、慎吾！立て、立つんだ慎吾！

……て、アレ？なんか、いつの間にか他のものが混ざってきてるぞ。きっと、森野と朝っぱらから会ったからだろう。うん、きっとそうだ、そうに違いない。だから落ち着いていけ、自信を持って生きるんだ、慎吾！

「待って、待ってよダーリン！この私を、婚約者の私フィアンセを置いて行こうって言うの！？」

「だあれがフィアンセだよ！お前と結婚の約束をした覚えはねえよ！」

「酷い！私を裏切るのね！」

「裏切るも何もねえだろが！」

「裏切ってるじゃない！何で私の愛妻弁当を食べてくれないのよ！何で私の愛を受け取ってくれないのよ！そんなの……酷いじゃない！」

「愛妻弁当じゃねえだろ！自分で食ってたじゃねえか！愛なんて欲しくねえし、受け取る気もねえし！」

「小腹が減ってたから、……つい。テヘ」

「テヘ。……じゃねえだろ！知ってるか、テヘって真顔で言う女に、ロクなのはいいないんだぜ？」

「え！？ほんまかいな！」

「……変なところで首突っ込むのね坂井君」

照れているのかよく分からない表情で笑ったけど、やっぱりなんだかアレのにおいが強くなったただけな気がする。

「いいから行こうよ、坂井君」

強引だけど、腕を引っ張っていったら、何だかかなり重かった。

そんなに重そうな外見じゃなかったのに。……もしや！アイツか！？振り返ってみると、予想どーりに奴はいた。坂井君のもうかたっぱの腕を握ってる。てか、掴んでる。

「離さないわ。この手だけは、離さない！」

「……それって、坂井の腕だろ？好きにしろ」

そう言って、腕を離して、逃げるように走った俺を、森野の聲が追いかけてきた。

「どうして逃げるの！？マイダーリーーン！！」

「追いかけてくるな！ストーカー女！！」

とりあえず、俺はホモとストーカーから逃げたかったただけなんです。そして、これ以上そこにいたら、本当に命が尽きる気がしたんです。

ああ、神様。こんな哀れな俺を、何故助けてくれないんですか……。

5、ガラスのハートにご注意ください!?

そんなこんなで、朝はやつとの事で森野から逃げ切る事が出来ました。応援してくださいだった皆さん、本当に有難うございました!…え? 応援してない? …マジですか!?

…まあ、それはそれとして、どっか遠くに置いてやってください。…あ、そこら辺でいいですよ。…あ、いや、そっちじゃなくて、もつとこっちに。…よし、OKです!

なんか、あんまり意味ない事に行使ってますが、気にしないでください。今日は、かなり現実逃避したいだけです。なんかもう、ほつといてくれて感じなんですよ。はい。

あ、そうだ。そういえば、今朝会った坂井君。転校生だったみたいです。大阪から来たって言ってたんですけど、やっぱりって感じですよ。そして、やっぱり彼は、アレだったようです。動きがそれだったの。…いや、悪気があるわけじゃないんです。ただ、面倒な奴が増えたと思ひまして…はあ。

「瀬川くん! 森野さんが呼んでるよ!」

誰だ! 地獄の呪文を唱えるのは! その名前は言っではいけないぞ! なんか、穴的なものから、変なおっさんの人がでてくるぞ!

「瀬川君! 瀬川君ってば!」

「呼んでるぜ、瀬川」

ひれ伏してた顔を上げると、俺の親友の小橋泰助こはし たいすけが楽しそうに笑ってた。こいつは、自称Sだそうだ。

「恋人が呼んでんだぜ? 言ってやれよ。それが英国紳士ってもん
だろ?」

「恋人じゃねえし。ここ英国じゃねえし。紳士じゃねえし。関係
ねえし」

「いいじゃんか、行ってやれって」

「じゃ、俺の代わりにお前が行けよ」

「ヤダよ、あんな女。ただキモいだけだろ」

「……お前、なかなか分かってんじゃねえか」

「……そういうお前こそ」

「何々？何の話？」

「うっせえな……って何でお前は勝手に他のクラスに入ってきてんだよ！」

上履きで侵入者を撃退してみました。……どうせ、帰らないと思うけど。

「他のクラスが何よ！ただ、薄っぺらい板で区切られてるだけでしょ！」

「薄っぺらくねえよ、多分。薄かったら、もうとっくのとうに破れてるよ！」

「ごもつともで」

「あなたは黙っててよ、お父様」

「え、俺、お父様？」

名前的には、お父様でいけるな。泰助だぜ？時代劇の主人公の隣にいなうな名前じゃねえかよ。……今の発言、カットで。……マニアックな気がしたんで。どうか、忘れてください。

「お父様ったら、私たちの恋路を邪魔して、そんなに楽しいの？」

「邪魔してるつもりは……」

「存在自体が邪魔なのよ！そんなのも分からないの！」

ひっでえー！こいつ、Mのくせして、かなり毒舌だ！

あ、待て。……小橋って意外と……。

「……そうなのか、分かったよジュリエット。そんなに私が邪魔なんだね。私なんて、必要のない存在なんだね。魚によく付いてる、小骨ぐらいにいらないんだね」

小橋って、かなり傷つきやすいの、忘れてたあ！！

外見は、シャイでカッコイイ、今風な感じだけど、心はガラス玉のような奴なんだよ。触れただけで、壊れちゃいそうな奴なんだよ！

森野！察しろ。こいつは気弱なんだ。一人じゃ生きていけません的な、気弱タイプなんだよ、ホントは！気付いてやれ、森野！もし気付いてくれたら、150円アゲルから！

「そうよ、お父様なんて魚の小骨と同じよ、同類よ！邪魔よ、消えなさい！」

「……そっか、そうだよな。俺なんて生きててもしょうがねえ奴なんだよな」

待て、おい待てよ。なんか、SとMが入れ替わってね？Mって言うか、引きこもりっぽくね？

「私はロミオを愛してるのよ、お父様。私はもう、ロミオしか愛せないの！」

「……俺なんて、どうせ。どうせ——」

「こ、小橋。だ、大丈夫だよ。お前を必要としてくれる奴はいるから」

「例えば？」

「は？」

「例えば、誰？」

あ、————っ！！扱いにくい！かなり、鬱陶しいほどに扱いにくい！初めて買った電気機器並に扱いにくい！

「……恋人、とか？」

「はは、俺に恋人なんているかよ。……あ、いや、いたよ。死つて言う恋人が」

「危ない発言、やめてくんない！？こっちが焦るから、やめてくんない！？」

「はは、俺なんて。……俺なんて、死ねばいいんだ」

「そうよ、死になさい！娘のあたしとロミオの恋路を邪魔したお父様が悪いのよ！」

てか、ロミオって誰なんだ？

てか、何でロミオとジュリエットみたいになってんだ？全然話し、違うけど……。

席を立った小橋がどこへ行くかと思ったら、廊下に出ただけだったみたいだ。それなら良かった。……ふう、一安心、一安し――。

「ちょ、ちょっと小橋君!？何してるのよ!」

女子の悲鳴が聞こえる。……なんかこれ、やばくない? 方程式作れそうじゃない?

かなり傷ついた↓席を立つ↓廊下に出る↓悲鳴が聞こえる↓死のうとしてる!!……小橋!?

「小橋く!」

予想どーりに奴は窓から出ようとしてた。ちなみに、ここは四階です。おちたらヤバくね?

「早まるな! 大丈夫だ、お前なら、俺が必要としてやるから!」

「嫌々ならいいんだよ。俺なんかほつといて、森野と、あの悪女と幸せになれよ」

「ヤダよ、アイツとゴールインなんてしたくねえから!」

「……天国から、呪ってるよ」

「何気に黒い事言うな! 祈ってるじゃなくて、呪ってる!？森野はいいけど、俺は嫌だぞ」

「……後で手紙書くから。俺をここまで追い込んだのは、瀬川と森野ですって」

「そんな遺書、書かんでいいわ! てか、俺、関係なくね?」

「……そんなの関係ねえ×3。はい、オッパッピ」

「若手芸人のネタをパクって、許されると思ってるのか!？」

「……いいんじゃない? どうせ、俺死ぬし」

「暗い事言うなって。……とりあえず、教室でゆっくり話そう」

何とか事が収まって、小橋は元気になってくれたけど、森野が不機嫌だった。

「……何で、私にツツコンでくれないの?」

「朝、散々ツツコませただろ」

「……そんなんじゃ、南、足りないもの」

「何で南？○ツチか？おれは、カ○ヤか？」

「カイヤ？あの、怖い人？」

「違うわ、ボケ！てか、最後の一言余計だろ！」

「でも、そんなの関係ねえ×3。はい、オッパッピー」

「お前までパクるな！」

「何で小橋君は良くて、私はダメなの！？そんなの差別じゃない！」

「小橋にも言ったよ！パクるなって言ったよ！」

「彼の時は、もっと優しくったわ！……あ、もしかして、ダーリンは、小橋君が」

「お前はもう黙ってる！土に還されてーのか？あん？」

「還せるものなら、還してみなさいよ！」

「還してやるさ！ついでに地獄に届けてやるよ」

睨みあってたら、急に森野が嬉しそうに微笑みだした。キモい。何だよこいつ、やっぱり、キモい奴の心はわからねえや。……分かりたくねえや。

「……何だよ」

「ダ、ダーリンが私を見つめてくれてる」

お決まりにハート付きで、頬まで染めてる。もう、馬鹿というか、そんなレベルじゃない。馬鹿の上に超をつけても足りない気がする。その時、神の救いがきた。待ちに待った、休み時間の終わりを告げるチャイムだ。

それでも、森野は帰ろうとせずに、教室に居座った。

「……帰れよ」

「土に？」

「自分の教室にだよ！お前、ホントにどこまでも馬鹿だな！」

「嫌よ、ずっとこのまま、ダーリンと——」

「いいから帰れ！」

「土に？」

「……お前、本気か？」

「土になら、いつにでも還ってあげるよ」

「……やっぱお前、どこまでも馬鹿だな」

「だって、ずっとダーリンのそばに居たいもの。学校だって、辞めれるわ」

「学校は無理だから！義務教育だからね！」

「じゃあ、ダーリンが私に勉強を——」

「いい加減に、お前は帰れ！」

その後、先生が来るまでここにいた森野だけど、先生が来ると、忽然と姿を消してた。

……と思ったけど、床を這っていただけで、見えなかっただけだったんです。マジックでもなんでもない、ただの馬鹿の行動でした。馬鹿のね。

……これを読んでいる皆さん、これが最期とならない事を祈っていてください。俺、学校が終わるまでに、生きている自身がないので。

では、生きてまた会える事を、心から祈って。

これ、遺書じゃないんで。それだけは分かってください。

遺書じゃありませんから、あーあ、終わっちゃったよ、短けえなあ、とか思わないでください……。

6、女王様は勘違い！？

……皆さん、奇跡が起きました！俺、生きてます！死んでません！もう放課後で、しかも部活も終わったのに、俺、生きてます！これ、奇跡ッすよね！

ああ、やっぱり神は、俺を見捨てなかったんですね！有難う神様！有難う！！

でも、本当の試練はここから。どうやって、待ち伏せしている森野にバレずに、無事に家までたどり着けるか。そこが問題なんですよ。

「アレ？瀬川じゃん。こんなトコで何してんのよ」
「な……」

ここで一つ分かった事、一人でこそしている人には、急に声は掛けなくてください。多分、寿命が三年くらい縮みます。……ここ、テストに出ますよ。家庭科的なテストに。

「何だよ、急に声かけんじゃねえよ！」

「いいじゃない、気にしない、気にしない」

「お前はマイペースすぎんだよ！」

女子に向かってストレートを入れる俺って、……男失格？

「……ひどい！何すんのよ！」

「あゝあゝ分かったから、大きな声は出さないでくれよ」

「……ヤダって言ったら？」

「……え？」

「もーりーのーさーん！！ここに、瀬川君が——！！」
「だあ————！！」

無理矢理階段登らせて、森野の様子を見る。あいつは飢えた野獣みたいにやってきて、周りを見回してたけど、いつの間にかいなくなってた。……はあ、よかったあ。

「何すんのよ、レディに向かって！」

「……お前、森野と似たような事言うな。……なんか、ムカつく」

「……そんな事言うと、また叫ぶよ」

「それはやめろ、いいな。叫んだら、……ゆるさねえぞ」

「ふふ、いいわ」

この根性が曲がった女の名前は、齋賀良美。さいが よしみ名前に『良』が入っているのに、全然いい所なんてない、性悪女だ。根性から腐ってる、金〇先生が言っていた、腐ったみかんとは、間違いなくこいつの事だ。絶対に。

「ねえ、瀬川。一緒に帰ってあげればすむ事じゃない。何でそんなに嫌がるの？」

「……俺は、あんな馬鹿でアホで間抜けで非常識で頭がいかれて馬鹿な奴、大っ嫌いなんだよ！」

「……今、馬鹿って二回言ったわ」

そう言っただけで笑う、こいつはそういうところを指摘するのが大好きなんだ。

よく昼ドラで見るだろう？

『サチコさん。ここにまだ埃が残ってますわよ』

『す、すみません。お母様』

『まったく、ちゃんと掃除くらいしてよね。これだから最近の嫁は嫌いなものよ』

的な発言を繰り返す、姑的な奴だ。いじらしく隅々まで見回して、相手の欠点を探し、見つけた欠点で、とことん相手を貶める。

だから、相手に欠点がないときは、余計に苛々して、嫁に当たる。そんな姑魂の集大成はこいつなのだ！

「悪いかよ、それだけアイツは馬鹿だって事だよ」

「……ふふ、それなら別にいいけどお」

うわあ~~~~！！ムッカつく！森野以上にムッカつく！アイツと違っただけの感じが、かなりムッカつく！！信じられないほどムッカつく！！

「そうだ！私が囧になってあげようか？」

「囧い？」

「だって、そうしたら、瀬川は逃げられるでしょ？」

「……そう、だけどさ。お前の事だから、なんか条件付なんだろう？」

「ふふ。さすがは、この世界の女王の私が認めた男だけあるわ。分かってるじゃない」

その笑いは何だ。そして世界の女王って何だ。認めた男って何だ。分かってるって何がだ。

「今週の土曜日、デートしてくれたらいいよ」

「はあ？」

思わず大きな声がでちゃった。ヤバイ。森野に聞こえたかも。

「ダーリン！？どこなの！！ダーリーリーーン！！」

「ふふ、呼ばれてるわよ。どうするの？」

世界一のM女か、それとも、世界一の勘違い女か。どっちを選ぶ、俺。どうする、俺。どうなる、俺。成せば成るのか、俺。……でも、何を成せばいいんだ？

「何でデートなんだよ」

「ふふ、……タイプだから。かな？」

「……嬉しくないのは、どうしてだろうーな」

「ふふ……そんなに私に叫んで欲しい？」

それだけは嫌だ。でも、何でこんな腹黒女とデートなんだ。何で俺は、こういう変な奴にばっかにモテるんだ。かなり嬉しくない。喜ばしくない。

それに、この『ふふ』って笑い方、かなり気に食わない。人を見下してますって、自分から言ってるような笑い方だからな。

「ふふ、どうする？」

……そういえば、近所に住んでるパブのおばちゃんと似たような笑い方だな。……将来は、極道の妻になりそうだな、こいつ。

あ、そうだ。良く考えてみる、俺。デートは約束しても、行かなければいいんだぜ。約束だけして、後はなんか理由つけて逃げればいいんだよ。そうだよ、俺！ナイスアイディア！！

いや、待て待て。その後この顔の広い腹黒女の事だ。俺のよからぬ嘘話を作って、周りに言いまくりそうだな。そう考えると、森野より質悪いかも……。

「ふふ、どうするのよ」

「……デートは、しない。自力でどうにかするから、あっち行つてろよ」

そうだよ、俺。後で厄介事に巻き込まれるのは、ゴメンだよな、俺。自分が一番大切なんだよな、俺。……って、女子からみれば、最悪な奴って、今の俺じゃね？ カッコ悪くね？……まあ、仕方ないか……はあ。

「アンタ、後悔するよ、こんな美人フツて」

自分で自らの事を美人と言いますか、普通！？

「極道の妻になって、アンタを殺しに行くかもしれないよ」

……え？ これって、殺人予告？ しかも、極道って、俺の想像通りじゃん！ なんか、怖っ！！

「もしかしたら、崇っちゃうかも」

呪○じゃん！ テレビの中から、出てきそうだよ！！……って、それはリ○グか。

「……あ、でも、呪い殺すの方が楽しそうかも」

楽しそうってなんだよ！ 軽く危ない事言ったよ、この人！ 呪い殺す事が楽しいって、狂った人の発言だよ！？ そうだよ！？

「ふふ、後で後悔するのは瀬川、アンタだよ」

なんか怖えよ。毎晩夢に出てきそうだし。ふふって笑いが、呪いみたいに聞こえてきたよ……。

「みいつけたあ」

「ぎゃあああああああ！」

妖怪ストーカー森野だー！！！！ 悪霊退散！！ 南無阿弥陀仏！！ 極楽浄土でも、天竺でもどこにでも逝ってくれ！！ 頼むから、逝ってくれ！！

「そんなに私に会いたかったの、ダーリン」

「会いたくなかったんだよ、ボブ・サ○プ並に会いたくなかったよ」

「私って、そんな存在？南、嬉しい！」

「何でだよ！どこが、どう嬉しいんだよ！もう、タツ○ネタはやめろ！もう飽きたんだよ！」

「じゃあ、他のならいいの？」

「よくないわぁ！！」

上履きを投げつけて、とりあえず逃げてきました。正門まで。そこまでしか体力が持たなかったと言うか、防具が重過ぎるというか……。そこまでで、俺には精一杯だったんです。マジで。

「ダーーーーーーリーリーリーリーリーリーリーーん！！」

来た！馬鹿アホ間抜けM女のストーカーが！！か、隠れなくちゃ！

「あれ？いないわ。でもダーリン。私をなめちゃいけないわよ！」
なめたかねえよ！なめる気力もねえよ！！それどころか、今すぐ殴りつきたいよ！！

「美咲探知機、スイッチ音！！」

音の字ちげえよ！！入力ミスじゃなくて、マジで違うよ！！イントネーション、微妙にちげえよ！！気付けよ、馬鹿森野！！だから英語の先生にも「what？」しか言ってもらえねえんだよ！！

「あ、間違えた。ダーリン探知機、スイッチ音！！」

間違えたのそこー！！！！？普通、イントネーションだろ！？

「馬鹿な女がタイプなの？」

「うわっ！何で極道の妻がいるんだよ」

「まだ決まった訳じゃないわ。未来の話よ、未来の」

お前の場合、未来じゃ済まされない気がするんですけど……。

「で、なんでいんの？」

「ン？何となく。人の恋路を邪魔するのって、楽しいわよね？」

不敵な笑みで言う事は、それですか！？お前、ほんとに中学生！

？実は高校生以上じゃねえのか！？

「ダーリン発見!!」

「世界発見的なイントネーションで言うな!! ウゼエよ!!」

「だって、さっきのネタ、飽きたんでしょ？」

「そーゆー問題じゃねえんだよ!!」

「あ、待ってロミオ!! ジュリエッタを置いてかないで!!」

「だあれがロミオじゃボケエ!! しかも、ジュリエッタじゃなくて、ジュリエットだよ!! ばあか!!」

「ああ、懐かしい屈辱的なお言葉。森野美咲、死んでも悔いはありません」

「じゃあ、死ねええ!! 一生よみがえってくんない!!」

「嫌よ!! ダーリンのためだったら、地獄の底から這い上がってきて見せるわ!!」

「悔いあんじゃねえかよ! おもいつきし、悔いあんじゃん!!」

「そうよ、あなたを置いて、先に逝ける訳ないじゃない!! あなたもそうでしょ、ダーリン!!」

「できれば先に逝って欲しいよ。いや、先に逝け。頼むから先に逝け。150円アゲルから!」

「何で150円なの! 私はそんなに安い女じゃないわ!!」

「ジュース代だよ!! 念のために持ってんだよ!!」

「私よりジュースを取るのね! ヒドいッ! 酷すぎるわ!!」

「ふふ、そうよ瀬川。せめてジャンプ代くらいにしてあげないと」

「なんで斎賀がここにいんだよ!!」

「ン? 帰る方向が一緒だから」

鬱陶しいのが増えたよ。森野だけでも疲れるってのに……。

「そうだ、森野さん。瀬川君をかけて、勝負しない？」

何故に俺をかける!!……てか、こんな展開、前にもあった気がするんですけど!!

「いいわよ、掛かってきなさい……ええっと」

相手の名前知らんのかい!! その時点で、森野の負け決定だよ!!

「あら、私の名前、知らないの？」

ほーら指摘された！思ったとおりだ、さあ、どうする、森野。

「……あ、あなた、隣のクラスの、……アレでしょ、あの人ですよ？」

分からないからごまかそうとしてるよ！汚い！！やり方が汚い！！

「アレって、何？」

「アンタねえ、私に屈辱的な言葉を言っているのは、ダーリンだけなのよ！！アンタにそんな事言われたって、嬉しくないんだから！！」

十分嬉しそうに見えるんですけど、頬がもう真っ赤に染まってるんですけど。顔にやけてるんですけど。

「……ふふ、その割には嬉しそうじゃない？」

「……嬉しいわよ、それが何？何か問題でもありますか？」

何で逆切れ！？どこが原因！？何故にキレる必要があった！？

「……ふふ、私とやり合う資格くらいは持つてみたいね
何をやりあうの？」

「……ふふ、あなたこそ」

おーい森野。キャラかぶせんな。読者様に分かりにくいだろうが。

「ふふ、それでも私を真似しているつもり？」

「ふふ、あなたこそ、何様のつもり？」

えーと、解説しなくても分かる方は分かると思うんですけど、先に言ってるのが斎賀で、後のが森野です。分からなくなったら、馬鹿っぽい発言してる方が森野だと思ってください。

「ふふ、あなた色気に欠けるわね。そんなんじゃ、立派な男はものに出来ないわよ」

「ふふ、私にはダーリンという婚約者がいるの。だから、そんなものがないわ」

「ふふ、あなたも馬鹿ね」

「そうよ、かばよ」

「ふふ、頭のねじ、もう一本も残ってないんじゃないか？」

「ふふ、あなた、馬鹿ね。頭にネジなんて元から付いてないわよ」

「……ふふ、そこまで頭の鈍い子だとは思ってなかったわ」

「ふふ、どういたしまして」

「……ふふ、褒めてないわよ。どちらかといえば、馬鹿にしてるわ」

「かばで結構よ。私、かばは好きだから。あの首の長さなんて、素敵じゃない」

「……ふふ、それ、キリンじゃない？」

「……」

おい森野、言い返せなくなるタイミング違うぞお。てか、もつと前から気付くべき失点に、お前気付いてないだろ？ やっぱり、お前、死んでも直らないほど酷い馬鹿だろ。

まず、俺は婚約してねえし、ダーリンでもねえし。

馬鹿って言うてるのに、何故か、かばに変換されてるし。

かば好きって言うてたのに、キリンと間違えてるし。どこをどう見ても、全然違う動物なのに。

「私の勝ちね、お馬鹿さん」

「私、おかまじゃないわっ!!」

おーい!!どこをどう間違えた!!どうしてお前は聞き間違えるんだ!!?どうして変な方向に変換されんだ!!?

「……ふふ、あなたとは付き合いきれないわ。帰るわね、じゃあね」

本当に、銀座のママみたいに疲れきってる!タバコ吸いながら家に帰ってそうだよ!!そんなもって、家で、焼酎水割りで飲んでそうだよ!!いや、ブランデーを一人で飲んでるかも!!

「やった、勝ったわ、ダーリン!!」

「抱きつこうとすんな!!」

飛び掛ってきた野良猫を払って、俺はそいつをほっというて、家に帰ることにしました。

もし、道端で、半ベそかいてる怪しい奴を見かけても、声を掛け

ないでください。怪しい世界へ連れ込まれますよ。

そんな奴を見つけたら、こう言ってやってください。

「もう、帰れば？」

きっと、期待通りに返事してくれますよ。

7、オタク気取り登場!?

何でだ、どうして俺だけが、あんな目に遭わなくちゃいけないんだ。酷いよ、世の中間違ってるよ。何で俺は、あんな奴に好かれなといけないんだ、どうして俺はアイツに付きまとわれなくちゃいけないんだよ。不公平にも、程があるってもんだろ!

「そうだよ!! 世界は平等でなくっちゃ!!」

「ぐがっ!!」

ん? 今何か、ぶん殴ったような……。気のせいかな。

「な、何するんだよ、ちみ!」

ちみい!?! 何だ、その古めかしい呼び方は!!

「ちみ、人を殴つといて、謝らないのなんて、ありえないんじゃないかな? 非常識じゃないかな?」

非常識なの、アンタじゃない? 何で夏なのに、完全防寒? そんなに寒い? 病的な、何かかよ。

「聞ってるのかい、ちみ」

「あい、すいませんでしたあ」

「ちみ! そんなの謝ってるうちに入らないんだよ! もうっと、真心込めて、暖かく!」

なんか、鬱陶しいのに絡まれたな……。俺は、早く帰らなくちゃ行けねえんだよ。いつまた森野がくるか、分かったもんじゃないかな。

「すみません! うちの子が殿方様にご迷惑をお掛けしたようで!」

ん? この声は母さんじゃないぞ?

……いや、それはさすがにないだろ。どんだけ足速いんだよって話だよな。ありえない、ありえない。

「うちの新ちゃんが、本当に——」

「お前は俺の何だ——!! それに、慎の字違——う!!」

背負い投げは見事に決まった。柔道やってないのに、よく出来たな、俺。馬鹿力って奴か？

「ちみ、ちみ！！れでいには、暴力振るっちゃいけないよ！！」
なんか、レディの言い方がしゃくに障るんですけど！！ホームランなんですけど！！

「いいえ、いいんですよ、こんなの日常茶飯事ですから」

「いえ、良くないでしょう」

「いいんです。私、そういうの、大好きなんで」

出たよ、ドM発言。もう聞き飽きたって言うか、なんて言うか……。はあ。やっぱ、疲れたな、うん。

「すごい！！ちみ、すごいよ！背負い投げが出来るなんて、ひつつじょーにすごい！」

何だかよく分からないけど、感動してるみたいで。いきなり手を取って、喜び始めた。

「ちよっと、その人！私のダーリンに触れないで！」

「ダーリン？」

「その人は、私の恋人よ！」

「見ず知らずの人に、変な事を言うんじゃないか！」

起き上がりかけていた森野の頭を、思いつきはたく。見事にコンクリに激突しました。

……ちよっとやりすぎかな？さすがにコンクリは痛いよな……。

「……何故、なぜなの？痛いのに、こんなにも快感だなんて！痛いのに、気持ちいい！！」

「……お前、やっぱキモいよ」

コンクリに頭ぶつけといて、無事だったなんて、ある意味すごい。……てか、血！頭から血が流れてきてるよ！ちよっとした、ホラ！映画みたいになっちゃってるよ！！

「ああ、ダーリンを思いすぎて、頭がくらくらするわ」

「血、流れてるからね。当然だな」

「ああ、こんなにも愛しいダーリンがぶれて見えるわ」

「血、流れてるからね」

「あたしを祝福してくれるのね、ダーリン。貴方の為なら、私は地獄にだって逝きます」

「もう、片足突っ込んでるぜ」

「ああ、ダーリン。私、森野美咲は、あなたに会えて幸せでした」「遺言ですか、それは？遺言なのか？」

「……ダーリン。私がいなくなっても、幸せにね」

「お前がいなくなったら、即幸せだよ」

ぱたりと倒れて、死んだ振り。よく見たら、頭の血、ケチャップでした。今日給食に出てた、ちっこいケチャップ。アレ、とって置いたんだな……これのために。

「ちみ、どうするの？彼女、死んじゃったよ？」

……目の前に、馬鹿がいるの忘れてた。死んでないよ、この人。助けてくれるの、待ってるだけだよ。

ああ、助けなくたっていいってば。ほら、もう顔がにやけてんじゃん。ドッキリでした的なノリになりかけてんじゃん。

「残念でしたあ。これは、ドッキリだぞ、ダーリン！」

「そのカンペ、どこからだしたあ！！」

いつの間にか持ってたカンペには、『ドッキリ、大成功！！』と書かれてたけど、俺、引っ掛かってないから。引っ掛かったの、そっちの馬鹿だから。俺、無関係だから。

「ちみ！ボクを騙そうなんて、無駄な事だよ！全て知ってたもんね。気付いてたもんね」

恥ずかしいの隠し切れずに、嘘ついたー！！顔真っ赤だよ、本当に、顔から火が出そうだよ！！

「……何でアンタが騙されてんのよ、ダーリンはどうしたの？ここにいますよー。見えませんか？ケチャップで、目が見えませんか？」

「……どうしてなのかしら？目の前が真っ赤だわ」
そりゃ、ケチャップまみれですから。

ほんとに、通行人の人達ビビッてるからな、森野。いい加減に、その顔拭けよ。

通行人A「何あの人、ヤバくない？マジ、ヤバくない？」

通行人B「ありえなくない？ヤバイの前に、マジありえない」

ほーら通行人AとBが変な会話してるだろ？気づけよ、その話の先に、お前はいるんだぞ。

「何だか、熱い視線を感じるわ。モテ過ぎるのも、……罪よね」

勘違ーーーーーい！！違うよ！！違うよ森野！！それは確かに熱い視線かもしれないけど、意味が違うから！！紫外線と、赤外線並に違うから！！

……そういう俺は、紫外線と赤外線の違いがいまいち良く分かりません。なんか、すみません。ホント、すみません……。

「ちみ、それは違うよ。あの熱い視線は、このボクに向けられたものだよ」

それも違ーーーーーう！！何、この二人？勘違い、大好き！！？

「違うわ！あんたみたいなドブネズミに、熱い視線なんて、くるわけないでしょ！」

「ちみこそ、ドブネズミどころか、ハツカネズミじゃないか！」

おーい、ネズミは全て汚いやつだと思うなよ。ドブネズミは確かに汚いかもしれないけど、ハツカネズミは結構綺麗なやつだぞお。ちよつとした違いだけど、全国の頑張ってるネズミさん達に失礼だぞお。ネズミだって頑張ってるんだぞ、今年の干支なんだぞ。

「言ってくれるじゃない、馬鹿ネズミ」

お前もな。

「よくそんな事が言えるね、アホネズミ」

お前もだってば。

「女だからって、覚悟しないわよ」

……おい、森野。お前の目は、節穴か？そいつ、どっからどー見ても、男だよな？

それに、その台詞、お前のじゃねえぞ。男の台詞だぞお。根本から、間違ってるぞお。

「その台詞、そのままラケットで打ち返してやるよ」

打ち返して正解だよ。だけどさ、何でラケット？普通なら、バットとかじゃね？何で、少し影の薄い方にした！？

「だったら、キャッチしてやるわよ」

おい、これ、野球の話じゃないかい？キャッチしちゃダメだよお。それに相手はラケットで打ってるぞお。打ち返せよ、馬鹿。…て、それじゃダメか。

「だいたい、何、その格好？ここは北国じゃないのよ。ルールル言っても、狐なんて、来ないわよ」

「それぐらい知ってるよ！ちみ、それ以上ボクを馬鹿にしてごらん。痛い目に遭わせてやるからな」

「やってみなさいよ！というか、どうか、やってください！コテンパンにしてください！」

「ちみ、やっぱりここ、いかれてるね。天才的なボクには、君の頭の中が分からないよ」

「当たり前でしょ！私を分かってくれるのは、ダーリンだけだもの！」

「誰もちみのことなんて分かりたくないって思ってるよ。ほら、ボクの大切なフィギュアちゃん達もそう言ってるよ」

馬鹿な会話が…：オタクな会話に変わりそうだぞ？何だよフィギュアちゃん達って。どんだけ大切にしてんの。

「フィギュアを持ち歩いてるなんて、寂しい男ね。私が持ち歩いているのは、ダーリンへの愛！それだけよ！」

どっちもどっちだよ。どんだけマニアックなんだよ、どんだけストーカーしてんだよ。

「そんなんじゃ、ちみの愛は届かないね！」

「届くわ！ずっと前から、想ってるんですもの！」

「ちみ、オタクの風上にも置けないね」

「いいわよ、別に。オタクじゃないもの。じゃあ、あなた、好きなキャラの名前、全部言える？」

「……え？……そ、それはさ。それだよ」

「言えないのかよ！お前が一番オタクの風上にも置けない存在だよ！！」

「私は言えるわよ！ダーリンよ！」

それ、確かにキャラだね！だけど違うから！ダーリンなんてキャラじゃないよ！！俺、瀬川慎吾だから！瀬川ダーリンで、どんだけ変な名前だよ！キモいし、なんかウザいよ！

「ちみがそれなら、ボクだっていえるぞ。猪上正樹！」
いのうえ まさむね

……え？誰、それ？初めて聞くんですけど……。

あっ！！もしかして、自分の名前言っちゃった？自己紹介しちゃった？

てか、それ、オタク関係なくね？

「何！それならこれはどう！葛野木サチコ！」

「……ふふ、ちみの言おうとしている事は、全て分かっているのだよ、森野美咲」

あ、確かにキャラの名前だ！スゲェ！話の中に混ぜて言ってる！！

「卑怯よ！オタク！坂井稔！」

だからっ！オタク関係ねえっての！！

「オタクじゃない！マニアだ！小橋泰助！」

どっちもどっち！！というか、似てるから！！

「そんなの、どっちだっていいわ！斎賀良美！！」

……確かにどっちでもいいな。これに関しては、森野に賛成。

さあ、これでキャラの名前、すべてでつくしんたんじゃないか？次の分の名前出せば、何とかなるかな？

「……ちっ、仕方ない。これが最終兵器だ！下弦鴉！！」

それ、ありがたい！！！！！！！！作者の名前だよ、それ。これ書いてる人の名前だよ、それ。

それが最終兵器って……いいのかよ！！作者！！

8、割れ物注意!?

今日はやっと、休みの日だ。学校に行かなくていいし、部活もないし、何より森野に会わなくてすむってのは、最高だね。一仕事終えて、やっとタバコが吸える感じ? ……よく、分からないですね…。

「慎ちゃん!! お友達よ!」

友達? 小橋? でも、アイツ今、塾の時間だよな。
じゃあ、誰だ??

「……まさか……な」

森野だったらって思ったけど、それはないよな。だって、普通に考えれば、来ないだろ。

……でも、アイツは普通じゃないからな。異常だからな、非常識だからな。世の中の普通なんて、通用しない……よな。

「母さん!! その人、中に——」

「入れちゃったけど、何か悪い事でもあった?」

畜生、一足気付くのが遅かったか。……瀬川慎吾、一生の不覚だ……。

「ダーリン、休みが明けるの待てなくて、来ちゃったゾ」
相変わらずむかつく言い方だな。

なあにが、来ちゃったゾ、だよ。ハート付けんなって、毎回言ってる気がするぞ。毎回苛立ってる気がするぞ。

「……ついでに、ついて来てしまったんですが、いいですか?」

あれ? 森野だけじゃないの? 誰? この子、誰?

「あ、ダーリン、紹介するね。同じクラスの、たてやま かおる 舘山香ちゃんだよ」
ちゃんだよって言われても、知らねえんだけど。見た事もないんですけど。

「て、言う事で」

「何でそれだけで、一件落着うみたいな顔ができたよ!」

「え!?!どこか至らない所でも!?!」

「ありすぎて困るんですけど」

「どこか、どう、どういった感じで?」

「お前の存在全てが謎なんだよ!?!」

「え!?!?って言う事は、私の謎を解けるのはダーリンだけって事!?!?」

「何、嬉しそうな顔してんだよ!」

「だって、さっちゃんは嬉しいんだぞ」

「お前は銀○のさっちゃんか!」

「だって、同じキャラじゃない!?!」

「だからと言って、人様のキャラをパクるでない!?!」

「いいじゃない!?!楽しいじゃない!?!面白いじゃない、○魂!」

「面白いよ、確かに面白い。だけど、それとこれとじゃ、全然関係ねえんだよ!」

「あるわ!?!SMな感じが!?!」

「全然作品のコンセプト違うから!?!」

もうそれ以上何も言えないように、ぶっ飛ばしてやりました。気持ちは晴れたんですけど、せっかくの休日がこいつに潰されると思うと、かなり悔しいです。

「ぼ、暴力はいけません!?!大丈夫?森野さん」

「……香ちゃん、これは暴力じゃないのよ。ダーリンの愛のムチなの」

「愛の、ムチ?」

「そう。愛情表現が苦手なダーリンが、私に向けて送ってくれる、唯一の愛情なの」

「お前に誰が愛なんて送るか!慈悲の心だって持っていないぞ!?!蹴り飛ばしたら、本棚の角に頭ぶつけて笑ってた。不気味とか、……簡単に言う、キモいってやつですね、はい。」

「や、やめてください!暴力はやっぱり、いけません!」

「うっせえな。黙ってろよ」

「……うう」

何故に涙目え！？どこがいけなかった？どこが怖かった？何が原因だああ！？

「とりあえず、今日は帰ってくれない？疲れてるから、休むには、邪魔なんだよね」

「……うぶぶう」

何故そこで泣く！！？確かに俺、冷たい事言ったよ！？だけど、泣くほどじゃないでしょ！？？

何だよこいつ、小橋並みに繊細だな……。

「じゃ、邪魔は言いすぎだな。な、とりあえず、今日は帰ってくれないか？」

「……ううう」

泣くなってばあ！！何で泣くの！？どうして泣くの！？何がお前の心を傷つけるの！？

「……また今度、別の日に着たら、歓迎してやるから、な？今日は帰ってくれよ」

「ホント！！ダーリン！！」

「お前は二度と、俺んちの敷地内に入ってくるな！！」

「イヤよ！！そうになったら、二度と私に会えなくなるわよ！？それでもいいの！？」

「いいよ！気持ちがスッキリするよ！お前がいると、この地球がどんどん穢れていくよ！！」

「それでも構わないわ！愛しい人と、一緒にいられるなら……」

「だから、一緒にいたくねえんだよ！！俺は！！」

抱きつこうとしてきた馬鹿を流すと、あいつは見事にベットに頭をぶつけた。

気持ち悪い。気分も悪い。今日は、一年で、一番最悪な日かも。

「暴力はいけませんー！！」

「お前に暴力は振るってないだろ！てか、これは暴力じゃなくて、

れよ!!」

「それは、お母様に失礼なんじゃ……」

「お前は黙ってる!!」

あ! ヤバイ! やってしまった! 地雷を踏んだぞ! 泣くだろこれ、ヤバイよな、これ!

「……うぶうう」

やっぱり泣いたよ!! 泣いちゃったよ! だから嫌なんだよ、泣き虫は!! 嫌いなんだよ、扱いにくいから!!

「ゴ、ゴメンな。ほら、泣くなよ、な?」

「……ぬうぶぶうう」

変な泣き方だけど、やっぱり割れ物だよ、この人。割れ物注意どころじゃなくて、触るな注意だよ。

「……あれ?」

なんか、服についてない? 何これ? ……ってこれ!?

「あ!! それダメです!! お母さんが、お守りにってくれたんですう」

「……これ……を?」

「そうなんです。はがさないでください」

……割れ物注意って、ホントに貼ってあるし。しかも、それがお守り? ……お母さん、分かっているんじゃないですか、娘の事。でも、お守りって……ありますか?

「……とりあえず、帰ってくれないか?」

「はい、そうします。ホントにお疲れのようなので……」

誰のせいだと思ってるんだよ。誰のせいで、こんなに神経使ったと思ってるんだよ。

「アレ? 慎ちゃん。お友達、帰ったの?」

「……もう、疲れたよ、パ○ラッシュ」

「パト○ツシュ?」

「……何だか、すごく眠たいんだ……」

「慎ちゃん、それって寝たら、危ないんじゃない?」

母さん、皆さん、さようなら。今回は、本当にダメかもしれませ
ん。もし、また会う事があったら、二度目の奇跡だと思ってくださ
い。もしくは、天国に逝ってからの話だと思ってください。
本当に、お疲れ様でした。

9、妄想暴走中!?

……アレ？俺、生きてますね。……なんかもう、驚きを感じる気
すらないんですけど。疲れたというか、リストラ直後のサラリーマ
ンの気分って言うか……。

せっかくの休日なのに、土曜はあいつらに邪魔されて、休みって
言うより、地獄だったし。日曜は日曜で部活あったし、なんか大会
に向けて、先生燃えちゃって……。スパルタって言うか、アレは……
…なんだったんだろ。言葉に出来ないや。

で、休みが明ければ当然学校。そして、当然森野にも会わなくて
はならない。でも、今のところアイツがいそうな気配がないんで、
安心してます。

「はあ……定年退職って、こんな気分なのかな？」
なんて呟いてたら……

「うわっ!!?」

「きゃっ!! あ、あの、すみません!」

誰だろう？礼儀の正しい子だな。しかも、この作品には出てこな
かった、純粹そうな感じの子だぞ。変なところが無さそうだ。

……でもさ、世の中って、甘くないんだよね。

……今の台詞！俺のじゃないよ！俺、そんな事はよく感じるけど、
言った事はない!! ま、まさか!!

……皆様、この作品に、純情な子がでるとは思わないでください
ね。何せ、一応SMですから。

やっぱりあの人だったみたいですね……。

「……この展開は、朝、パンを走りながら走る女子高生が、偶然
男性にぶつかってしまう。そして、それが運命の出会いだった的な
展開になるのでしょうか？」

え？何、この急展開？勝手にしゃべりだしたよ。もうとまらなそ
うだよ。

「……いや、違いますね。きっと、落し物をした女子高生と、それを届けてくれた男性が偶然この町で再び会うって感じの方かもしれません。そうですね?」

「はあ……?」

「あつ、それでもいいですね。本屋で出会った二人の男女。そして、偶然手が重なる。そして、些細な会話から全てが始まるのよ。そっちじゃないですか?」

「……ここ、本屋じゃないし、俺ら、高校生じゃないですよ」

「……あ、その辺は気にしないでください。どうにでもなりますから」

「そ、そういう問題なのか?」

なんかよく分からないけど、この子も危なそうだぞ。危険なおいがしてきた。

「あれ? 私のバッグ……」

「これ?」

「あつ……」

拾ったバッグに、手が軽く触れたけど、何か問題でもあった?

「こ、この展開は、やっぱりこうなるのね。朝道を急ぐ少女と、つまらなそうに毎日を過ごす少年。運命の出会い、ふとした瞬間だった。急いでいた少女は、少年にぶつかってしまふ。そして、落としたものを拾おうとした時、偶然手が触れ合う。そして、二人の運命は、変わっていく。って、展開ですよね?」

……反論する気力が、全然出てこないのは、何故?

「きつと、これだわ! そして二人は結ばれて、幸せに暮らすのよ!」

作家志望ですか? それとも、詩でも書きますか?

「……でも、それじゃ試練が足りなさ過ぎるわ。……そうね、きつと両親がなかなか二人の交際を認めない、頑固な人なのよ。そして、二人は駆け落ちを決意するのよ。そして、新しい土地と、新しい家で、二人の愛は深まり、新しい生活が始まるの! きつとそうよ

！」

想像力は、森野にもひきを取らないな。そして、ちょっとMっ気もある。新しいヒロインとしては、いいんじゃないか？ウザくないし。

……でも、何であの瞬間だけで、これだけ盛り上がれるんだろ。かなり不思議なんですけど。

てか、この間にも一人でブツブツ言いながら空想を広げられるって、ある意味スゴくね？

「って、またやっちゃったわ！私、遅れそうだったのに！」

「……あの——」

「……その展開は、きっとこれでしょ？本当はこの二人は以前にも会った事がある。だけど、少女は不慮の事故で記憶を失っている。だけど、その少年は、ずっと少女を思い続けていた。そして、運命の再会。失った記憶の変わりに、少年は新たな決意とともに、少女と茨の道を進んでいく。……ね、これ正解でしょ？」

……俺には、正解も不正解も分からないんですけど。てか、これ聞いてすぐ答えられるの、森野くらいしかないんじゃないかね？

「……ハンカチ落と——」

「ああ、そういう事。貸したままのハンカチ、それを返そうと思っているがなかなか返せない少年。しかし、ちょっとした神のいたずらで、またあの少女と偶然出会う事となる。これでしょ？」

……ここで一つ学んだ事。

一、この人は偶然という言葉が好きな事。だって、いつも出てくるし。聞き飽きたし。

一、知らない人は、無視！だって、これ以上ここにいたら、妄想がうつりそうだったんで。

以上！！

ともかく、「知らない人には、ついて行っちゃだめよお」原理で、身の危険を感じたら、その場をごまかして逃げる事が大切って事ッスね。

「じゃ、俺も忙しいんで」

「！分かった！！これが正解でしょ！！幸せな日々を過ごしていた二人は、ある日を境に会う事が出来なくなる。愛し合う二人は、運命に翻弄され、別々の道を歩む事を決意する。本当に運命に逆らう事は出来ないのか！？誰もがそう思った時、運命の女神は、優しく恋人達に笑いかける――。これ！！これでしょ！！決まりだわ！！」

よ、よくここまで空想が、てか、妄想が広がったな……。すごいぞ、この人。やっぱ、ヒロイン交代か？ま、俺は関係ねえいからいいけど。主人公が変わっちゃったら、ちょっと寂しいじゃん。……。寂しい、ですよ？

「いいわ！いいわよ、これ！！愛し合う二人は、お姫様と、軍人。相容れる事の出来ない立場。それでも、二人の愛は冷める事を知らないの。余計に熱くなり、より固いものになっていくの。誰に反対されても、二人は愛し合い、運命に翻弄されながらも、幸せに生きていくの。うん、これなら、きつといけるわ！！」

どこに行けるんだ？天国か？それとも地獄か？

「愛し合う二人、それが、この世界で止められない熱いものなのよ！！」

……そういう台詞は、少年漫画の中で言えよ。ジャ○プ的なところとか。

「そして、この世で一番美しいのも、その愛し合う二人！！」

……少年漫画かと思ったら、急激に少女漫画？何だ？マーガ○ツトか？

「そうよ、そうに決まってるわ！！私と、瀬川君みたいに！！」
ふーん。……って、アレ？何で俺の名前知ってんの？何故に知ってんの？

「膨らんでいく愛のつぼみは、しばむ事を知らないわ！」

しばんで欲しいんですけど！心からしばんで欲しいんですけど！！

「ねええ、そうでしょ？瀬川君」

「……てか、君誰だよ。何で俺の名前、知ってんだよ」

「だって、有名じゃない！どんなボケでも、必ずつつこんでくれるって！！」

いつの間にいいー！！

誰だ！？誰がこんな変な噂を広めた！？嬉しくないぞ！！かなり不愉快だぞ！！

……てか、今まで出てきた人って、自分をボケだと思ってでてきたのか？

いやいや、待て。落ち着け、慎吾。こいつは誰だ？妄想暴走中女だぞ？危ない人の分類に入る人だぞ？ゴミか、カスカって聞かれたら、どちらかと言えば、カスだぞ？そんな奴の言葉を鵜呑みにするのか、慎吾！？

「……誰が言ってた、それ？」

「ん？私が今さっき考えついたの。素敵でしょ？」

全つつつ然、素敵じゃないんですけど！？！？どこがどう素敵！？？どういう価値観してんの、アンタは！！

「誰かに、広める気？」

「広めるわよ。たくさん広めて、世界中に知ってもらうの。そして、私と瀬川君は、ハリウッドスターになるの！！」

どうやってですかあー！！！！！！！！！！！！！！！！

それだけで、ハリウッドスターになれると思うのか、この妄想女！！そんなに甘くないんだよ、この世の中はっ！！……ってこれさつき作者が言ってた言葉じゃねえかあ！！本当だったよ、世の中、甘くない事！！

てか、それだけの事で、外国にいける事が、マジすごいぞ！！

「つかさ、君の名前は？」

「私？私は、眞蒙奏子まもう そうちよ」

「……」

な、名前の中に妄想って入ってるうー！！！！漢字も違うし、ちよっとカッコよくなってるけど、確かに妄想って入ってる！！すご

いぞー!! すごいぞ、親!! 子供が、こういう風になってしまう事を、予見したんだな!! そうだろ!?

「……あ、チャイム」

え? チャイム??

……ヤバァー!! い!! 朝練始まっちゃった!! 先生に怒られる!!

どうして、俺の一日の始まりは、こうも落ち着いて始まらないのでしょうか? 答えが分かった方、是非、是非こちらの宛先までおねがいします。

あ、お電話でもいいですよ。

言いますから、メモしてくださいね。

373-3291-0456304 です。

もう一回、言いますよ?

373-3291-0456304 《みなさん みにくい あ

ほころそうよ》ですよ。

10、最期の晩餐!?

やっと一日が終わった。俺の戦いも終わった。でも、また明日が来る……。はあ、こんなにも明日が楽しみじゃないの、久しぶりだな……。

「ただいまあ」

「オカエリナサシ」

……は？今なんて言った？

「ア、マチガエチャツタヨ。オカエリナサイ」

……こ、この見事なまでのカタコトは！？も、もしや——！！

「ミツチエルさん！？」

「ア、ソウデス！ミツチエルデス！！」

謎の外国人じゃなくて、この人は母方の叔母です！変質者じゃありませんから、ご注意ください！！

「帰ってきたの？」

「ハイ。キノウ、ナイジェリアカラ」

嬉しそうに笑ってるけど、随分と遠くまで行ってきたるよね。てか、金持ちっていいよね。外国行けて。

「……ア、ソウダ！コレ、オミアゲデス！」

差し出されたのは、呪いの仮面……じゃなくて、民族が良くつけてるような仮面。

う、嬉しくねえ……。

「あ、ありがとう」

「ソナニウレシイデスカ？ダツタラコレ、ガツコウノオトモダチニモ」

ありがた迷惑だよ、このやろー！！

てか、どんだけセンス悪いんだよ！民族の仮面なんてもらっても、嬉しくねえよ！心から！！

「マツチャンハ、キョウカエツテコナイソウダカラ、ミツチエル

トイッショニゴハンタベルデス！」

え！？マジ！？気まずいというか、嫌なんですけど。

あ、そうだ。まっちゃんっての、母さんの事なんで。

……って、今はそれどころじゃない！！だってミツチエルさんの料理は——。

「イタダキマスデス！」

恐ろしいほど下手だから！！

それ、食べられるの？ミツチエルさん！それ、炭じゃないの？ミツチエルさん！それ、食べてはいけない何かではないの！？ミツチエルさあ——ん！！

今日の献立。鮭の炭仕立て。というか、炭。イカ墨ご飯。てか、炭。黒い味噌汁。腐った何かの臭い付き。てか、廃棄物。野菜いためつけ。野菜をいじめてはいけませんよ！！真っ黒になるから！！というか、すでに灰。

……た、食べられるものが、一つもねえ——！！

「ドシタデスカ？シンゴノスキナモノ、マツチャンカラキイテツクッタデスヨ？」

いや、確かに好きだよ。和食万歳だよ。だけどさ、これ何よ？炭じゃん、廃棄物じゃん、灰じゃんかよ！！このどれを好きになれと？このどれを食えと？こんなもの食うくらいなら、テーブルひっくり返して、「こんなもの食えるか！！」って言う、かみなりおやじになったほうがマシだよ！幸せだよ！！

これが本当の最期の晩餐だよ！こんなに不味そうな料理は見たことない！！というか、食べ物に見えない食べ物、見た事ないよ！！どうしたら、あの食材たちをこんな風に穢せるの！？どうして全てが黒くなるの！？純白のご飯は！？どう炊いたら真っ黒くなるんだよ！！そこが知りたいよ！！

「……ちよっと、今日は調子悪いから、いらないや」

「ソウデスカア？じゃあ、ナニカチンシテモツテイキマスヨ」

「あ、ありがとう」

そういうのがあるんなら、作らないでチンしとけば良かったじゃん！レンジに入れて待ってれば、すぐ終わりだよ？何も焦げずに終わるはずだよ？

「う、上行ってるね、ミツチエルさん」

「アイ。アトデゴハンモツテクカラネ」

……せめて、レンジの食材が焦げませんように。神様、哀れな食材達を助けてあげてください。

「シンゴォ！モツテキタヨ！！トビラヲアケテ！！」

「はい、はあい」

扉を開けた途端、扉を閉めなくなりました。どうしようもなく、現実逃避がしたくなりました。というか、逃げさせてください！お願いします！！

「ジャ、ワタシ、シタイツテルネ。タベオワツタラ、ジブンデカタシテネ」

「……はい」

今日の献立、パート2。黒焦げから揚げ2個。ていうか、やっぱ炭。チンピラごぼう。誰もこの黒さには、勝てませんっ！だって、炭だもん。サトウの黒ご飯。というか、灰。（さっきのご飯より、3%くらい救われてる。）すみそ汁。墨にしか見えないよ！！これ！！

やんばいよ、やばいって！！こんなに食材を無駄に出来る人は、この世の中に、ミツチエルさん以外ないでしょ！！

奇跡的だね！！ここまできると、奇跡としか言いようにないよね！！

「……これ食べなきゃ、俺、死ぬのかな？」

いや、食べたら死ぬかな？きつと、死ぬだろうな。一口食べて、人生に終わりを告げるよ。

そんなのヤダー！！しかもダサいっ！！とてつもなくダサいっ！！

ああ、母さん。あなたの料理が懐かしいです。そして、早く帰ってきてください。でないと、大切な一人息子は、死に至ります。食中毒で。

ああ、母さん。カム・バァァァー………クッ!!

11、ブルーなS!?

朝飯も無残なもので、何も食べられませんでした……。朝から真っ黒いものを見ると、気分ってブルーになるんですね……。

「ダーリン!!!」

門を出ると、すぐに森野がいた。隠れてたつもりだろうけど、電柱からはみ出してたから、アレは隠れてたとはいえないな。

「酷いわ! 酷いわよ!!!」

「……何が?」

「二話も大切なヒロインを出さないで、この物語が成り立つとも思ってるの?」

「……成り立ってたんですけど、何か?」

「成り立ってないわ!!! 全然ダメ、ダメすぎて吐き気がするわ!!!」

「……勝手に言ってる」

「それに!!! ツツコミが浅い!!! もっと深く、こう、抉るように!!!」

「……いいだろ、今はそういう気分じゃないんだから」

「ダメよ!!! ダーリンがツツコまないと、つまらないわ!!! 読めるほうも飽きるわ!!!」

「……じゃあ、読者さん。今日はやる気がないので、他のものを読んで下さい」

「ダメよ!!! それじゃあ、読者さんが減っちゃうわ!」

「いいじゃんよ、もうめんどくさいって言うか、自暴自棄、みたいな?」

「ダメだつてば、ダーリン! どうしたの? そんなに私に会えない事が寂しかったの?」

「寂しかねえよ。逆にかなり嬉しかった。ホントに」

「……ダメよ、ダメよダーリン! もっと激しく!!! 人を見下して

る感じで言わなきゃ!!」

「ええ。めんどい」

「……そ、そんな事言うのはダーリンじゃないわ!!」

「別にいいじゃん。人間だもの」

「み〇をさん風に言っても、ダメなものはダメなのよ!!」

「俺的にはOK牧場」

「ガッツ〇松さんでもダメ」

「じゃあ、誰ならいい訳？」

「誰でも、ダメダメなの!!ダーリンはダーリンでいいの!!」

「……てか、ダーリンじゃねえし」

「半笑いで言ってもダメよ!!『!』付けて言わなくちゃ!!」

「ダーリンじゃねえし!!」

「台詞棒読みじゃない!!もっと感情的に、暑苦しい感じで!!」

「……もうめんどくさい、生きる事がめんどくさい」

「そんなマイナスな事言っちゃダメ!!」

「……なんかもう、きつねうどんになりたい」

「何できつねうどんなの、ダーリン!？」

「……美味しいから」

「それだけの理由でなろうとしたの!？でも、なっちゃダメよ!

食べられちゃうわよ」

「いいよ、別に。不死鳥の如く、よみがえるから」

「よみがえれないわ!」

「成せばなる、成せねばならぬ事があるって、どこかの誰かさんが言ってた」

「無理よ、それは無理!!成しちゃいけないものよ!!」

「じっちゃんの名に懸けて、もう疲れたよ」

「金〇一少年の〇件簿!？でも、じっちゃんの名に懸けて、疲れちゃダメだってば!!」

「じゃあ、秋田」

「確かに秋田よ、でも漢字が違うわ!!正しくは、飽きた。これ

が正解よ!!」

「じゃあ、そういう風に直しといて」

「ねえ、ダーリン!! 正気に戻ってよ!!」

「醤油?」

「正気よ、正気!! 醤油じゃないわ!!」

「え? 書記? めんどくさいから嫌です、先生」

「書記じゃないわ!! 正気だってば!!」

「職業? 中学生Aです」

「そんな役じゃないでしょ!! ねえ、どうしちゃったのよ、ダーリン!!」

「あ、あそこに死神が——」

「何でそんな不吉なものが見えてるの!? 危ないわ、近寄っちゃいけないわよ!!」

「あ、あっちには綺麗な花畑と大きな川が見えるよ」

「渡っちゃダメ——!! そっちにも行っちゃダメよ!!」

「あ、死んだバーちゃんが微笑みかけてくれてるよ。こっちにおいでって言うてる」

「行っちゃダメ——!! 絶対ダメ!! この話が終わっちゃうわ!!」

「手招きしてるよ、こっちは幸せだよって」

「ダメなのは、ダメなお——!!」

「……パ○ラッシュ、僕、疲れたよ。何だか、すぐ眠たいんだ……」

「著作権の侵害よっ!! ダメよ、人のものパクっちゃ!!」

「……」

「寝ちゃダメ——!! 起きて、起きなさい!!」

「……」

「起きてよ、ダーリン!! 寝ちゃダメだってば!! ねえ、ダーリン!!」

「あ!!」

「何！？急にどうしたの！？」

「今日学校じゃん！！急がなきゃ！！また部活に遅れて、コーチに怒られる！！」

肩を掴まれていた手を振り切って、走り出す背中を、森野は訳がわからなさそうに目を白黒させて見守っていた。

12、仁義なき戦い!?

「ははは〜!」

「……どした瀬川。その奇妙な笑いは何だ」

「あはは〜! それはな、やっと飯が食えるからだよ!」

「朝飯は?」

「ははは〜! 昨日の晩から、何も食ってない!」

「マジ!?」

「あはは〜! だってさ、ミッチェルさんの破壊的な料理、お前も知ってるだろ?」

「え!? もしかして……」

「そう、母さんがいないから、代わりにミッチェルさんが作っちゃったんだよ!」

「……それは、大変だったな」

「ははは〜! 哀れみに満ちた言葉を有難う、小橋」

「そうです! そうなんです!! 本日、最も楽しみにしていた時間!

! そう、給食の時間がやってきたのです!! なんて嬉しい事です! う!! なんて幸福な事です! う!!」

もう、待ってらんなくて、2時間目あたりから俺の腹は、給食を呼んでました(笑)

そしてとうとう、この時間! 人類が最も油断する時間!! 給食の時間は来たのデス!!」

……あつ、ヤベツ! ミッチェルさんのしゃべり方がうつつた!

「ところでさ、あそこにお前を待ってる奴がいるぞ」

「誰?」

「強烈毒舌馬鹿女」

「お〜。よく噛まずに言えたな」

「まあな」

「デ、誰?」

「だから、隣のクラスの」

「まさか、坂井君!？」

「……確かに隣だけど、違うから」

「じゃあ、……馬鹿？」

「そう、馬鹿」

名前を出す気にもなれないアイツは、確かに後ろの入り口にいた。いたというより、覗いてた。

すみまっせくん!! 誰か、変質者がいるって、先生に言ってくださあい!!

「どうすんだ？」

「もち、ほっとく！」

「……やっぱ」

「この至福の時、あの馬鹿女に邪魔されてたまるかっての!!」
ぐっと拳を握り締めて、宣戦布告。ていうか、戦闘体勢? はたから見れば、一人勝手に盛り上がってる、浮いてる人だな。

そういえば、気付いたら森野がいない。でも、よく見たら、前の入り口に移動しただけだった。そして狙ってる。俺が、そこに並ぶのを。

「……小橋、俺は戦ってくるぞ」

「……無事を祈ってやるよ」

「……さらば、友よ!!」

……こんな題名の曲、なかったっけ?

それはさておき、森野をどう退治するか……。

一歩一歩、確実に前へ進む。隠れているつもり森野は、思いつきり頭が出た。

そして、給食を運ぶ列へ並ぶ。そして、お盆を掴む。と、同時に――。

「あ! いっけね!! 手がすべったあ!!」

隠れていた戸から出てきた森野に、容赦ない一撃。飛んでいったお盆は、見事に森野の目に激突する。

よっしゃあー！ストライク！！思わず拳を握り締めて、新しいお盆を手にする。

次はご飯だ。どう対処しようか。……そうだっ！

「ねえ、後ろに何かいるよ？」

「え？」

見事にお碗を持ったままの腕が、森野の顔面に直撃する。さほどの衝撃はなかっただろうけど、それで十分だ。

「ゴメン。気のせいだったみたい。さあ、早くよそってよ」

「え？あ？う、うん」

よし、第二関門突破！このままいけば、無事に給食を手に入れる事が出来るぞ！頑張れ、俺！負けるな、俺！！

さあ、次はおかずだ。でも、二種類あるから、さっきのような手は使えない。違う手を考えなくちゃな。……あ、そうだ。これならいけそうぞぞ！

「ねえ、そのお皿、少し汚れてない？」

「え？そうかな？」

「そうだよ、変えて欲しいな」

「いいよ、どうせあまるし」

よし、今だ！

「傷も付いてるから、他のに入れた方がいいよ」

もとあった場所に置きそうになった皿を取り、フリスビーのように投げる。それは、森野の腹に当たり、割れた。

「ほらね、言ったとおりだ」

「……そ、そうだね」

おし！後は味噌汁だけだ！！これならいけるぞ！！絶対、いける！！

「味噌汁、少なめでお願いできない？」

「……いいけど？」

「有難う」

汁の入ったお碗を受け取り、後ろに現れた森野の顔面に向かって

押し付ける。

「ふ、油断するなよ、馬鹿が」

味噌汁の攻撃をくらい、森野はノックダウン。よっしゃ、勝利は我が手に！！

「あゝあ、また手が滑っちゃったよ。もう一杯くれるかな？」

「う、うん」

給食の激しい(?)バトルを勝ち抜き、勝利と食べ物を手に入れた俺は、腹いっぱい給食を食べたとさ。

13、復活のドS!?

「ねえ、ダーリン!」

「あん? ウゼエな。ダーリンじゃねえよ、黙ってる、ボケ」

「も、戻ってる! 性格が戻ってるわ! 美咲、嬉しい!」

「あっそ。てか、ウザいから消えろ」

「その刺激的なお言葉、美咲は何日我慢した事か」

「泣きまねすんな、キモいから」

学校からの帰り道、しつこく着いてくる森野を避けながら言った。
てか、距離が近い。

「近いんだけど」

「私とダーリンの心が?」

「それは遥か遠くに薄っすらと見える程度だろ! 違うよ、馬鹿!
!」

「ああ、もっと言って! もっと私をいじめてください!」

「……」

「黙っちゃいやあ! 美咲、生きてらんないよ」

「……その台詞、何回も聞いたと思うんだけど?」

「そんなに私の言葉を覚えてくれたの? 美咲——」

「それも聞き飽きたあ——!」

隣に迫ってくる森野に、アップパー。見事に決まったとき、かなり
嬉しかったっす。

「い、痛いわ。痛いけど嬉しい」

「ハート付けんなっ! キモいって言ったよな、俺、この前もキモ
いって言ったよな!」

「……そのお言葉が、私の生きる糧です」

「じゃあ二度と言わねえよ。金輪際、俺に近付くな」

「……ねえ、『金輪際』って、なんて読むの?」

「お前はふき出しを見て会話してたのかあ——!」

もう一度、アッパー。さっきより強めで。

「……ふふ、やっぱりダーリンは、私にツツコんでくれるのね」

「したくてしてる訳じゃねえぞ。てか、どちらかというと、かなりしたくない。平凡な生活に戻りたい」

「平凡って、この時、この瞬間の事を言うのよ、ダーリン」

「それはお前限定だろ!？」

「……意外と違ってたら？」

「ありえない」

「……案外そう思ってなかったり？」

「それもない」

「……実は、私にこ——」

「おーい、それ以上言葉を発してみろお。今すぐここで川に突き落としてやるよ」

「それは嬉しい!! けど、ちょっと汚いわね。美しい私には、似合わ——」

「何がどう似合わないんだ、あん? 小汚くてネバネバしてる感じ、お前そっくりじゃねえか。クリソツだよ、クリソツ」

「クリ……何小学校を卒業したのかな？」

「その卒じゃねえ——! 馬鹿だろお前、馬鹿だろ!!」

「そうよ、私は馬鹿よ!! 貴方のための、世界一の馬鹿!!」

「自分から世界一って言うか? やっぱお前、脳みそねえんじゃねえの?」

「そう、その代わり、ダーリンの愛が——」

「その代わり、何だって?」

森野のプクツとした頬を掴んで睨みつける。嬉しそうに頬染めてる馬鹿は、何を考えてるか、さっぱり分かりません。分かりたくもありません。

「ダーリンの愛がたくさん詰まってます」

ハートマーク付きの馬鹿発言。もう疲れたというか、飽きたといえますか。

とりあえず、すべき事は分かっています。それは、森野を川に落とす事。それが、使命です！

「ああ、待って！川にはやっぱり落とさないで！！私、泳げないの！！1メートル泳げたら奇跡なの！！」

「へえ。だから？」

「落とさないで！愛しい美咲が死んで——」

「大いに結構。それ以上に嬉しいことはないぜ？」

「あゝっ！ダメダメ！！危機的状况、大いに結構だけど、嬉しいけど」

「一思いに、死んでくれや」

「はい。……なんて嘘です！！ごめんなさい！！申しません！！」

「もうしませんの字がちっがあう！！落とすぞ、本気で落とすぞ」

「それは、本気と書いて、マジと読ませるのですか？」

「好きにしろおー！てか、正直言って、そんな事どーでもいいわ！！」

「やめてっ！ホントにゴメンなさいい。盗撮写真も渡しますからあ」

「テメエ、なんて事してたんだよ！！犯罪だぞ、犯罪者だぞ！！」

「もとから犯罪者です！！ダーリンの愛を盗みました！！」

「盗まれてねえよ！盗まれた覚えすらねえよ！！どこがどうくるったら、そんな事になるんだよ！！」

「入力ミス？」

「それは作者の原因だろ！？俺らかんけーねえし！！」

「そんなこといったら、作者が傷付くでしょ！！可哀相じゃない！！冷たい言葉は、私だけのものでいいの！！」

「ウゼエよ、もうかったるいよ、めんどくせえよ！お前の存在、そしてこの作品の存在が信じられない！！」

「何で！？」

間抜け作者と、キモ森野の声が重なる。綺麗にハモツた。でも、それさえもウゼエ。

「とりあえず、俺はお前に構ってる暇はねえんだよ!! お前はとつとと家に帰りやがれ!!」

「その前に、金輪際こんりんざいの読み方を……」

「読み仮名振っておいたから、後で見とけ、この馬鹿!!!」

「……ねえ、じゃあ。川に、落としてくれないの？」

「落として欲しいか、じゃあ遠慮なく——」

「嘘です!! これはマジと書いて本気と読むです!!」

「意味分からねえよ。これだから、馬鹿は嫌いなんだ」

「馬鹿じゃないもん。愛すべき馬鹿だもん」

「結局馬鹿なんじゃねえかぁ——!!」

最後に強烈なアップを。そして、森野は川に落ちたとき。チャ
ンチャン♪

14、S v S ○○○○!？ 前編

あの、悪魔の料理人ミッチェルさんはまた旅行に出かけたようで、帰ったらいなくなっていた。その代わり、地獄のおやつが置いてあった。

「……何、これ？」

テーブルに置かれているのは、タイヤ……じゃなくて、ドーナツらしい。だって、メモにそう書いてあったから。

「……こんなの食べたら、性格変わっちゃうよ」

さりげなく近付かないようにしながら自室へ戻る。その時、俺は出会った。あいつと。

「お、お前は——！」

さあ、クイズミリ○ネア!! 黒くて油ギツシユでキモくてカサカサ動く奴って、なあんだ？

A ゴリラ

B キモい森野

C ブタ

D リ○ツクマ

さあ、どれ!!

……これで、七千万円には戻れません。

……正解は、……CMの後で!!

になる訳もなく、正解ってねえじゃねえかよ!!と、思ったその君!! 立ちなさい!!

どこに正解がないと? よく見なさい、よく!! お前の目は節穴か、コラァ!! (激怒)

よく見るんだぞ、正解なんてないって思った人々よ!! 分かった人は、それなりに飛ばして読んでもいいんじゃない? どうでもいいところだから、ココ。

で、正解が分からなかった諸君、それでは正解を言おう!!! 正解は――。

「ゴ、ゴゴ、ゴゴゴゴゴ、ゴッキブリィー!!!」

階段でよく見かける（ウチはだけど…）ゴキちゃんです!!! ヤバいつ!!! 俺、ゴキちゃん大っ嫌いなんだよ……。

あ? 正解の理由が分からないって? よく見れば分かるよ、よく見れば。ココで教えてあげてもいいけど、そんなに教えて欲しいか? ん?

ああ、別にいい。じゃ、あとがきにでも書いときますね、分からなかった人用に（笑）

「や、ヤバツ!!! ……いや、とりあえず落ち着け、落ち着くんだ、俺」

俺の目の前でカサコソやるゴツキブリ。キモスッ!!! 森野並にキモス!!!!

「どうしよう、これじゃ上に行けねえじゃねえかよ」

新聞で思い切り叩き潰すか? いやいや、それした後が惨いんだよな。中身がブチュって……わあ、気持ち悪い……。

じゃあ、ティッシュで優しく包んで捨ててやるか? いやいや、そんな事したらとんでもない事になるな。優しく包み込んで、捨てられたとしても、フェニックスの如くよみがえる危険性があるからな。それに、包み損なったら……ああ、考えるだけで気持ち悪い……。

そうだ、ベタにスリッパで……。って、そんな事するのが一番危険だよ。中身出るし、スリッパにくっ付いてたら、まさにホラーだよ。ああ、なんか気持ち悪い……。

いつその事、上に行くのを諦めるか? いやいや、いやいや! 今日、塾あんじゃん!!! バック持っつけてねえし、宿題も提出できねえ!!! それはそれで恐ろしいぞ。

じゃあ、どうするんだ、俺。この事態をどう乗り越えるんだ、俺。どうやってゴキちゃんを成敗するんだ、俺!

母さんが帰ってくるのを待つか? それはそれで、男子として恥ず

かしいな。

近所のオバンに頼むとか？いや、それはそれで俺の評価が下がるしな。

いつその事、踏んでいくか？……きつと無理だろうけどな。てか、絶対嫌だ！！

……でも、ココにいったって何も解決しないぞ、俺。思い切って、ゴキちゃんを避けて階段を登ろうか。……それ、ナイスアイデアじゃん！！さっすが俺！！

……自画自賛って、思うなよ。そう思うと、自分でも恥ずかしいから。

「頑張るぞ、行くんだ、慎吾。お前にならきつとできる、できると信じてるぞ、慎吾！！」

俺の天敵、ゴキちゃんがいるのは、階段の三段目。そこでずっとカサカサしてる。移動する気は、さらさらないみたいだ。

……慎吾、いつきまあす！！

まず、一段目に右足を乗せる。まだゴキに動きはない。左も、右と同じように。さあ、ココからが問題だぞ、俺。二段目に行ってからすぐに三段目に登り、去って行くか、二段目まで行って、三段目を飛ばすか。それは、俺の自由だぞ、慎吾！！さあ、決意を固めるんだ！！

「よし、三段目は飛ばしていこう……」

思わず言葉になっちゃいました。そこは、笑って許してください。もしくは、このゴキブリを退治してください。マジ嫌いなんすよ、ゴキちゃま。

「そおっと、そおっとお……」

二段目までは、難なくクリア。だけど、目の前には、世界の敵ゴキちゃんか……。

勇気を振り絞れ、慎吾。俺は出来る子だよ、お前は褒めれば伸びる子なんだって、自分がよく分かってるだろう？さあ、行くんだ慎吾。ストーカー森野よりは、こんなゴキブリなんて、かなりましだ

ろ！？そうだよな！？！？

しかあし！！その時、ゴキ様に動きはあったのです！急に止まり、羽を広げる。そして、飛び立った……。

「ギイヤアアアーーーーー！！！！くうーーーーるなーーーー」

思わず駆け出し、玄関の外へ避難。モチ、裸足です。熱く焼けたタイルがアチィ！……シャレじゃないっすよ、思わず出た言葉です……。

薄く扉を開き、敵の動きを見る。どうやら敵は狭い場所に飽きたらしく、廊下をカサコソし始めた。ヤ、ヤバイ。敵に領地を奪われてしまった。畜生！何とか、俺の領地を取り戻さなければ、この格好でいるのはそれなりに恥ずかしい！！まだ制服でいる自分が、ちよっぴし恥ずかしい。

打倒、世界の敵。打倒、ゴキブリ。俺は、絶対に負けません！勝ってみせます！！いや、勝ってやろうじゃないですか！！はっはっはっはっ！！……はあ。

14、S v s ○○○○! ? 前編（後書き）

はあい、久しぶりですねえ。下弦です。

ではっ！早速正解の理由をお教えいたしましょう！

それは、AとDまでの頭文字に注目すればいいのです！もう分かりましたね。簡単に言えば、全てが正解だったとも、ハズレだったとも言えるんですねえ。卑怯とか、言っちゃいけませんよ？

では、また会う日まで！！

逃げていいですか？ゴキちゃんのいない所まで、逃げさせてもらってもいいですか？というか、逃げさせてください。

静かになった扉の向こうに潜むゴキちゃんの様子を見るために、すこしだけ、扉を開く。

「……アレ？」

いないぞ、ゴキちゃん。扉にもいないし、靴箱の上にもいないし、靴の中にもいない。花瓶の中でもないし、招き猫の上でもないし、階段でもない。本格的に、いない気がする。……この本格的の使い方、間違ってるね？

「……あ、もしかして——！」

心配は的中したようで、ゴキちゃんはリビングにいた。そしてそいつは、ミツチエルさんの手製の、地獄のドーナツを食おうとしていた。……グッバイ、ゴキちゃん。それを食べたら、きつと君はこの世を去る事になるだろう。……お疲れ様でした。

「……さよなら、ゴキちゃん」

ドーナツにかぶりついたと思われるゴキちゃんは、動きを止めた。きつと死んでしまったのだろう。ああ、哀れなり、ゴキちゃんよ。

「……え？……嘘？」

ゴキちゃんは死んでいなかった！動いたんですよっ！！かすかにっ！！ピクピクッと、動いたんですよ！！

そして、変化は起こりました。異様に輝く赤い目。大きくなる、黒いボディ。遅しくなった六本の足。……ミツチエルさん、あなたは魔物を作る腕があるようです……。

出来上がったのは、巨大なゴキちゃん。キモさも倍増、大きさも倍増、怖さも倍増！この世の終わりです！！破壊です！！

もう殺せないじゃん！あんなの潰したら、真面目にホラーになるよっ！！

「……フッフ、瀬川慎吾君、君に復讐の時が来たようだ」

しゃ、しゃべったあ——！！しかも標準語で！！しかも、なんか分かんないけど、俺を根に持つてみたいだし！

「忘れたとは言わせないぞ！作者様をボケ呼ばわりして、ただで済むと思っているのか！！」

「も、もしや、貴方は……」

「そのもしやのもしや。下弦鴉様だあ！」

「……鴉なのに、ゴキブリって。それでいいのかよ」

「ブツブツ言っでないで、そこに直りなさい！！今すぐそうしないと、近づいてやるっ！」

「えゝゝゝ！！それはないですよ！！」

「さあ、早くすわれっ！私が根性つてもんを叩き直してやるよ」

「……子供っぽい事で怒る人に？」

「はあいそこっっ！！何か言ったか？」

「いいえ、別に！」

「では、そこに座れ。私が、……何教えるんだっけ？」

「……根性じゃ、なかった？」

「敬語はどうしたこのヤロウ！！馬鹿だからってナメてると、痛い目見るぞ！！」

「……自分で馬鹿って言っちゃったよ」

「うつるさい！！お黙りなさい！！」

「ひいやああああああああ！！ちっ、近づくなあ」
のっそのっそと歩くのはゴ……じゃなくて、下弦鴉。そう思っても、見た目はゴキブリだ。気持ち悪い。大嫌い。近付くなバカヤロオ！！

「……よし、やっと座ったな。偉い偉い」

近いよ、めっさ近い。もうちょおっと離れてほしい……。

「で、ええっと。何の話をしてたんだっけ？」

「根性を叩き直すそうですよ」

「そうそう、それぞれ。最近物忘れが激しくって、親にも馬鹿にされ始めてるんだよねえ。悲しいよねえ」

「……はあ」

「別にさあ、覚えてなくてもいいじゃんか。なのにさ、うちのオ

バンときたらうるさいったらありやしない。小言をブツブツ、ブツブツ。姑かつての」

「……あのお」

「やれ勉強しろ、やれゴミを捨てろ、やれ部屋を片付けろ。もう、○校生何だから、黙ってロツテの!!」

「……ロツテ? それって、♪ロツテコアラの——」

「そのせいで、いまだに反抗期が終わらないんだよねえ。それにさあ、聞いてよ! 私の友達、産まれた頃から反抗期なんだってえ。ある意味すげくね?」

「……どーでもよくね?」

「あ、話がそれたね。何だっけ? 親の事だっけ? ホントしつこいよねえ」

「……話違うしっ!」

「そろそろ一人暮らしとかしたいじゃん? どこがいいかな? やっぱ、レオ○レス? それとも、……って、そんな事する金がねえや」

「……すみません、キャラ、変わってません?」

「やっぱ住むんなら都会だよなあ。俺が住んでる所、ド田舎なんだよ。一応言っとくけど、一番大きい店が、ア○タです。知ってる人は、知ってるよねえ」

「……」

「でもさあ、ウチから遠いんだよね。もっと近くにねえのかよっ! みたいな? 寒い時に自転車こいだと、そう思っただけ寂しくなるんだよねえ」

「……」

「アレ? また話がずれた気がするんだけど、何の話してた?」

「テメェはずっと田舎で、畑でも耕してろっ!!」

ゴキブリ、もとい、下弦を殴る。思いっきりグーパンチで。

……あ、ゴキブリ触っちゃったよ。まあいいか。後でちゃんと、手、洗えば。

「おまえさあ、人に根性叩き直してやるって言っというて、それは

ねえんじゃねえの！？お前の根性を叩きなおしてえよ！！ふざけんじゃねえぞ！！貴重な行を無駄に使いまくって、それでもお前は作者かっ！！」

「そうだよ、作者だよ。悪いかな？俺だってなあ、好きでこんな事やってんじゃねえよ！！（小説書く事は好きです）ゴキブリにだってなりたかなかったよ！！！」

「そーゆう問題じゃねえから！！」

「いいから、聞けよ！これ聞いてくれたら、絶対帰るし、ゴキブリもいなかった事にするから！！！」

「絶対だな？」

「ああ、絶対だよ」

「……よし、しゃべっていいぞ」

「最近学校にゴキちゃんが異常に現れるようになったから、『あ、これ、話のネタにしちゃえばよくね？』って思ったんだよ！！それだけだよ！！じゃあな、クソがきっ！！」

嵐のように現れた作者は、また、嵐のように去って行った。そして約束どおり、ゴキちゃんもいなくなっていた。よかったよかった。……それにしても、学校にゴキちゃんが出るって、ある意味悲劇だな。大変なんだな、作者も。

「あ、塾」

……もう、いっか。いなくて。今日は、そんな気がしました。疲れたというより、面倒臭い。そんな感じですね……。

16、一休みの為に、キャラ特集っ!?(前書き)

キャラの特徴や、その他もろもろを書いたものなので、とばしてもいいですよ。読んでみたいと思った方は、暇つぶし程度に読んでみてください!

16、一休みの為に、キャラ特集っ!?

と、言う事で、サブタイ通りにキャラ紹介です!! (イエーイ!)

とある方の評価から発覚した、キャラの姿がどんなものか書いていない事っ! もし、ずっと気付かずに書き続けていたら、誰がどんな姿か分からないまま終わるところでしたっ!!

とある方、気付かせていただき、本当に感謝します!!

で、そんな余談はいいとして、次から本題に入ります。今まででしてきたキャラ達について書くので、よかったら見てくださいっ!

んだよこんなもん。と、思う方は飛ばしてもらって結構です! 怒ったりしませんから、気にせず飛ばしちゃってください!! ……え? 何々? ゴキブリになって、でてきませんか? ……さあ、どうでしょうね (笑)

じゃ、キャラ特集(?) 楽しんでください!!

No. 1 瀬川 慎吾 (せがわ しんご)

身長 160cm 体重 50kg 血液型 O型

誕生日 5月1日 年齢 13歳

肩に届かないくらいの黒髪。だけど、ちょっと、茶髪交じり。負けん気の強そうな黒い瞳。結構色白で、たまに可愛いと言われる。

(本人曰く、ウゼエ)

性格は、基本的にドS。明るくて、結構人気者。剣道の腕はまだだけど、底力からはハンパない。M対して、(それ以外の馬鹿っぽい人達) ツッコまずにはいられない。鳥肌が立つほど、ゴキブリが大っ嫌い。そのほかの昆虫や、動物は、比較的に大丈夫。

【本人から一言】

誰か、あの馬鹿を引き取ってください。

No. 2 森野 美咲 (もりの みさき)

身長 158cm 体重 ヒ・ミ・ツ♪ 血液型 本人曰く、ネ

コ型(本当は、A型)

誕生日 4月11日 年齢 13歳

長い黒髪で、いつも後ろで一つに結っている。前髪はヘアピンで留めて、パツチリしている黒目がよく見える。

性格は、基本的にM。しゃべらなければ、美人なので結構男子に人気がある。それに、誰とでも仲良くなれるので友達も多い。ただ欠点は、しゃべると馬鹿&Mな事が、すぐにバレてしまう事。瀬川に対して、異常なまでの好意を抱く。

【本人から一言】

誰にもダーリンとの恋路を邪魔させないわっ！

No. 3 葛野木 サチコ (くずのき さちこ)

身長 162cm 体重 どーでもいいじゃん！ 血液型 B型

誕生日 6月9日 年齢 13歳

短めの黒髪で、結構ボーイッシュ。見た目は大人っぽいけど、中身は低学年並。ちょっと釣りあがった目が、小悪魔な感じを漂わせている。

性格は、人によって代わる。でも、だいたいはS。面倒臭い事、やる気が出ない事、つまらない事が嫌い。そして、二重人格のため、少々怖がられている。優しい時はいいが、怖くなると、たま

に何かを破壊し始める。そしたらもう、誰にも止められない。

【本人から一言】

別に怖くないから、仲良くしろよ、コラ。

No. 4 坂井 稔 (さかい みのる)

身長 164cm 体重 54kg 血液型 A型

誕生日 9月3日 年齢 13歳

結構長めの茶髪。人懐っこい目は、やっぱり茶色。それだけなのに、ホモの空気を身に纏っている。

性格は、少しMっぽい。見た目はかなりカッコイイ。けれど、ホモであるために、全くモテない。ていうか、モテたためしがない。カッコイイ男子を見つけると、目が輝く。根っからの関西人なのに、お好み焼きが大嫌い。その代わり、もんじゃは大好き。

【本人から一言】

全国のかっこいい男子、募集中でっせ！

No. 5 小橋 泰助 (こばし たいすけ)

身長 160cm 体重 48kg 血液型 AB型

誕生日 1月4日 年齢 13歳

ちよつとくせのある黒髪。鋭い光のある黒目は、結構綺麗。身長のわりに細いため、ヒョロッとしたイメージが強い。

性格は、自称S。見た目はカッコいいけれど、心は脆いためにちよつと扱いに困る。クールな性格を気取っているけど、結構抜けているところがある、いわゆる天然。本人は気付いていないが、本当

はM。

【本人から一言】

傷付きやすいからって、ほっとくなよ！

No. 6 斎賀 良美 (さいが よしみ)

身長 165cm 体重 レディにそんな事聞くの？ 血液型

B型

誕生日 12月16日 年齢 13歳

栗色の巻き毛は、いつでもおろしてる。(本人曰く、校則違反なんて、どうでもいいわ)色っぽい唇は、ほのかに赤い。純粹そうな黒い瞳は、狙った獲物を逃がさない。

性格は、基本的にS。見た目は女子高生並に、スタイルがいい。色気を使って、数々の男子を騙してきたという、伝説がある。本人は、只今のところ瀬川狙い。個性的な笑い方が特徴的で、その笑みにやられる、馬鹿な男子も多い。

【本人から一言】

ふふ、私に勝てる相手はいないわ。

No. 7 猪上 正樹 (いのうえ まさき)

身長 154cm 体重 68kg 血液型 B型

誕生日 3月15日

適当に切られた黒髪は、かなりまばら。前髪に隠れてしまう事が多い茶色い瞳。そのため、あまり視力がよくない。時々メガネをかけている。

性格は、SにもMにも慣れる、意外と万能な奴。何故か誰も分らないが、オタクに憧れ、オタクになろうとしている。だけれど、オタクがどういうものか良く知らないため、専門用語を言われても、ただ焦るだけ。太っているわりには、動きがすばやく、いじめられる事がない。

【本人から一言】

オタクの方、よかったら弟子にさせてくださいっ！

No. 8 館山 香 (たてやま かおる)

身長 149cm 体重 言えませんっ 血液型 A型

誕生日 2月22日 年齢 13歳

淡い茶髪は二つに結われている。綺麗なブルーの瞳で、実はハーフ。

性格は、至って普通の子。けれど、強い言葉を掛けちゃいけない。割れ物注意である。母がアメリカ人、父が日本人のハーフ。その母が心配性なため、常に割れ物注意を服のどこかに貼ってある。消して悪を許さない、ちょっとしたヒーロー的な存在である。

【本人から一言】

えっと、あの、仲良くしてくださいっ！

No. 9 眞蒙 奏子 (まもう そうこ)

身長 155cm 体重 ご妄想にお任せします 血液型 AB型

誕生日 10月30日 年齢 13歳

癖の強い、短い黒髪。黒い瞳は、とても真っすぐ。(妄想してい

る時は、結構よどんでる)

性格は、Mっ気のある、ちょっとしたS。常に誰かに会う度に妄想し、熱く語りだす。あってるあってないを答えてもらえると、さらにエスカレートし、時々ショートする。壊れてずっと笑っている事もあったと言う。見た目はいい子そうなのに、非常に残念な子だった。

【本人から一言】

みなさん、妄想する事は大切ですよ!!

No. 10 ミツチエル・グリファースン
身長 186cm 体重 75kg 血液型 O型
誕生日 9月19日 年齢 ?歳

綺麗な金髪は、ポニーテールにされている。笑うと優しい、淡い緑色の瞳をしている。頬はいつも、少し赤い。

性格は、少しお節介な人。そのわりには、人の扱いがかなり苦手。そして、料理も。本人はそれほど酷くないと思っているが、瀬川家の人々の間では、それなりに恐れられている。母国は、ドイツ。いつも放浪の旅を続けているため、どこにいるか、全く把握できない。

【本人から一言】

ミナサンモ、ワタシノリヨウリ、タベテミマスカ?

No. 11 瀬川 麻理 (せがわ まり)
身長 168cm 体重 言わなきゃダメですかね? 血液型
O型

誕生日 11月17日 年齢 ?歳

長い黒髪は、サラサラ。おっとりしている黒い目は、たまに寝ているかどうか分からなくなる。笑うと笑窪が出来て、可愛らしい。性格は、極めて大人しい人。それでいて、少々天然。人の良さそうな笑みは、誰にでも優しく降り注ぐ、日の光のよう。しっかりしている時は、しっかりしているけれど、やる気がないときは、とことんない。歳は決して言わないが、予想している見た目より、若く見られる事が多い。それが誇りだそうだ。

【本人から一言】

これからも、慎ちゃん達をよろしくお願いしますね。

No. 12 瀬川 俊喜 (せがわ としき)
身長 177cm 体重 65kg 血液型 A型
誕生日 8月20日 年齢 38歳

短く刈られた白髪交じりの黒髪。猛禽類を思わせる鋭い黒い瞳は、睨まれると怖い。

性格は、重症なほどの親馬鹿。一人息子を、こよなく愛する30代。だが、他の子供に向ける視線は厳しく、自分の子供が一番だと思っている。そのわりには、大手自動車販売者の副社長で、リーダーシップのよく取れる人物。つかみ所がないのも確かだが、妻や子供の事となると、かなり弱い。本人は気付いていないが、慎吾は父を嫌っている。

【本人から一言】

まだ出ていないからといって、影薄いとか思ったら許しませんよ。

振り返ってみると、かなりのキャラが出てきてたんですね。頑張ったな、私！よくここまでやったよ……（泣）

と、言う訳で、これでキャラの紹介は終わりますが、またそのうちキャラがたくさん出てきたら、書こうかなって思っています。その時は、またよろしくお願いします！

17、変な知人!?

ゴキブリ（作者?）とのバトルを終えて、疲れているのに即塾へ。どうせ勉強なんてしねえのに、何故に塾なんかいかねえといけねえんだよ。

「ねえるなよ、寝ちゃダメよ」

ちよつと間抜けな声のそいつは、赤星麗二。あかほし れいじ同じクラスだけど、

学校が違う。確か……どこだっけ?

「うっぜえな。だまってろい。俺は寝るためにここに来たんだ」

「ねえるんなら、家のほうがよくねか?」

「……それもそうだな」

「だからって、かえるうなよ」

「いいじゃん、かえっても。ていうか、帰らせろって話だよな」

「慎吾、お前、ここに何しにきいたの?」

「寝にきたっつってんだろが!!」

「そこっ、五月蠅いよ!!」

「すんまつせえん」

気のない返事をする、先生からチョークが放たれた。俺も麗二も上手く避ける。その代わり、後ろの連中が被害をこうむった。ドンマイ! 後ろの人々よ!!

「甘いっ!」

「なっ——!!?」

先生の言葉通り、甘くなかった。二本目のチョークは、見事に額にヒットして白い跡を残して落ちた。麗二はそれも避けたらしく、平然としていた。

「甘いな、慎吾」

「うっせえな。てか、なんでどん臭そうなお前が、そんなにかわせてんだよ」

「ん? 避けてるつもりはなあいんだけど」

そう言ってる間にも、次々と放たれるチョークをかわす。

先生もスゲェけど、麗二もスゲェ……。てか、先生、諦め悪いよ。

「なあ、お前武道でも習ってんのか？」

「空手なら、かGる程度に」

「かGるって何だよ」

「変換ミス？」

「……お前、森野の分身か？」

「森野？ 森野なんてCらんよ」

「Cらんよって何だよ」

「入力ミス？」

「……やっぱお前、森野の分身だろ？」

「知らぬが仏」

「やっぱそうなのかよっ!!」

「五月蠅いっ!!」

今度は二本目のチョークもかわせた。同じ手は喰らわないよ、先生。

「甘いっ!」

「は——!?!?」

今度は黒板消しが飛んできた。それは俺の目に刺さって、落ちていった。

「先生! 児童虐待ですよ!」

「ええ、ここはこうしてえ。こっちはこうすると、こうなるわけ
でえ——」

「無視するな——!——!——!——!」

「五月蠅いって……言ってるでしょおがあああああああああ
あ!——!」

重そうに取り出した何かを、思い切り俺に向かって投げてきた。

それは、やっぱり見事に俺に命中した。

「どう? 超特大スーパーウルトラチョークX2のお味は」

「……X2って、1もあるのかよ」

「あ、あれもそうだよな」

「……あれ？」

「釜飯も釜じゃなあきや、変わっちゃうのかな？」

「……さあ、なあ」

「釜飯なのに、炊飯器でやったら、炊飯器飯？なんか、一気に不味そうになったあね」

「……でも、お弁当とかもあんじゃん」

「それは、釜でやった後かもしれないだろう？だから、いいの」「へえ……」

あくまで和食っなのね。もういいよ、君にはツツコまない。そうしたほうがいて、俺の本能が教えてくれてるよ……。

……でも、確かに炊飯器飯って、不味そうだな。てかさ、それ普通のご飯じゃねえかああー！！真っ白い、魅惑の普通のご飯だよっ！！やべえ。真面目に考えてしまった、俺自身が恥ずかしい。

その時、救いのチャイムは鳴った。今日はこれで終わり！もうクランクアップ！！

「あ、さあいごに一つ」

「な、なんだよ」

「茶碗とおわんって、何が違うのか、いまいち分かりにくいよね」

……もう、この塾やめてもいいですか？

18、変換ミスの嵐!?

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……………」

「……（怒）」

さああああーくしゃああああー！！！！！仕事
サボるなあー！！！！！ただの「……」の会話だけで、
何が伝わるってんだよおおー！！！！！

俺が話してる相手さえ分からないじゃん！相手がどんな奴かさえ
も分からないじゃん！！俺もどこにツッコめばいいか、迷うじゃん
かよおおおおお！！！！（激怒）

「ごうおっほん！」

て、いうわけで、これ、一応『ドSな俺と、ドMなアイツ』本文
ですから。作者が遊びで作った、変なものではないですから。ただ
単に、受験という地獄から抜け出せた事に、勝手に盛り上がって
だけですから。もう気にしないでいいんで。空気みたいになってく
ださい。これから、下弦鴉は空気です！いいですね！？……（返事
待ち）

よっし！！よろしい。それでこそ、我が友だ。

あ、そうそう。ちなみに、俺と一緒に黙ってたの、どこにでもい
るストーリーカー馬鹿だから。盗撮までする、悪趣味女だから。死んで
も構わない、史上最強のどうでもいい奴だから。

「どうでもいいってのは何よ！」

「人の耳元で叫ぶな、馬鹿っ！！鼓膜が破れるだろうが！！」

「もう、ダーリンの鼓膜が破れようが、心臓が破れようが、どう

でもいいのよ!!」

「心臓が破れるのは、よくない事だぞ!!」

「どうして? どうしてなの、ダーリン。どうしてそんなに長い間、私を放っておくの? 放置プレイ?」

「はあ? んの事だよ?」

「また、トボけちゃって。ラ○ちゃんだって、起こるんだゾ」

「古い所から、ネタを持ってくるな。分かる人にしか分からないだろ」

「いいのよ、それで。この世界は、私とダーリンのものなのよ! この世界には誰一人として、踏み入れさせないわ!!」

「あっそ。ご自由に」

「そうやってまた放置プレイ!! 美咲、他の男子の子と好きになっちゃうゾ」

「どうぞどうぞ。積極的に、そうしてください」

「積極的に、断ります」

「積極的に、断るなんて事はさせねえよ」

「積極的に、私は貴方を愛し——」

「おいそれ以上言ってみろ、俺の真似してみろお。串刺しにして、油で揚げてやるからな」

「狐色になるまでお願いします」

「……お前、底なしの馬鹿だな」

「底なしの沼だな? ……ああ、私とダー——」

「おいおい、お前の脳は何なんだ? カニ味噌か? カニ味噌なのか?」

「あら、美味しそう。食べてみたいわね」

「勝手に食ってろ」

「勝手に売ってろ? カニ味噌を? それは無理よ、ダーリン」

「だあかあらあ。何でその頭は変な風に、文字変換されてくわけ? どこがどういう風にして、そうなるんだよ」

「ここがこういう風にして……ああ、絡まっちゃった」

俺の目の前には、どこからか持ち出してきたロープでぐるぐる巻きの森野。

「……もう、ほっというもいいですよネ？」

「ちょ、ちよっとダーリン！？どこ行くの？」

「ん？何かに呼ばれたような……」

「ここよ、ここ！私はここよ。愛しのエリーはここにいるわ！！」

「なあんだ。空耳か」

「チョコ○ミ？確かにやってるわよ。見た事ないけど」

「……」

「ああ、待ってよダーリン！！この私を置いていくの！？ピーターのパンでいう、ティンカーのベルみたいな存在を！？」

「ピーターのパンって何だよ！ティンカーのベルって何だよ！それ、ただのパンとベルじゃねえか！！！」

「違うわ！ピーターさんのパンと、ティンカーさんのベルよ！！」

「誰だよそいつら！！てか、軽く著作権を侵害すんな！」

「デイズニ○なんて、関係ないわよ！！」

「隠しきれてねえから！！もう、正解丸出しだから！！」

「じゃあ、○○○○でどう！！？」

「もう、答えでちまつてるんだから、手遅れだよ！！何なんだよ、お前。俺を苛立たせるために生まれてきた、今の世の中の悪の産物か！？」

「すっごーい！よく噛まずに言えましたね。えらい子には、私からのあまあいキ——」

「寄ってくるなあああ——————！！！」

蓑虫森野を我武者羅に投げる。……今思ったんですけど、我武者羅って漢字、カッコいいですよネ。夜露死苦みたいで。

「ふふ、これくらいで挫ける美咲だと思って？」

「……キモいからさあ、それ以上近付くと、マジゆるさねえよ」

「ああ、麗しきそのお言葉！そして、なんと厳しい目つき！もう私は、貴方のとりこです」

「……殺していい？」

「ダメよ！！前にも言ったでしょ！！私は、ダーリンの愛に潰されて死んだのよ！」

「……溺れてたんじゃねえのかよ」

「まあ、嬉しい！私の台詞を覚えてくれたのね、ダーリン！！」

「ツツコムために必要なだけだったんだよ、このヤロー！！！！誰が好き好んで、お前の台詞なんて覚えるか！」

「それでも構わないわ！！ダーリンが忘れても、美咲は永久に覚えていきます」

「永遠に忘れてくんない？できれば、もう俺の目の前から消えてくんない？」

「ぐるナイ？アレって、面白いよねえ」

「また変な変換してんじゃねえーーーーー！！！！」

「いいじゃない！どが悪いの！？楽しいじゃないの、面白いじゃないの、恋しちゃうじゃないの！」

「全部かんけえねえ事だろ！！てか、最後の一つにいたっては、意味わかんねえよ！！！」

「沸かん？もうちょっと待っててね。うちのお風呂って、沸くまで時間がかかるのよ」

「お前のうちの話しはどうでもいいよ！！」

「よくないわ！ダーリンにとっては、お義母様とお義父様が住んでいる所の事なんですからね！」

「何で姑口調なんだよ！無性に腹立つんですけど！！」

「もっと苛立ちなさい！はらわたを煮え繚り回しなさい！そして私をイジればいいのよ！」

「……じゃ、今日は忙しいから、お先ッス」

「ちよ、ちよ、ちよっと待ってよお。ダーーーーーーリーーーーー
ーーーーー！！！」

……皆様、くれぐれもMな奴にはお気をつけください。こいつみたいなのがいると、人生の半分が無駄になりますから。ホントです

よ！これ、忠告ですよ！！

19、朝から元気なDM!?

朝っぱらから森野に会い、ちょっと不機嫌な俺。それはいつもの事だけど、やっぱ不機嫌な俺。会うだけでさえイライラするのに、話までしたら、もう沸点に到達してしまいますよ。まったく、どうしてあいつはこりないんだか……はあ。

「見つけたわ! 愛しのダーリン!」

「げ!!! 二話連続森野かよ!!!」

「そんなに嬉しい? 私も嬉しいよ、ダーリン」

「……お前さ、学習能力ってのはない訳? ハートマーク付けんなって言うてんだろ?」

「じゃあ、ダーリンはOKなんだ」

「んなわけねえだろ!!!」

「まあ、そんなに喜ばなくてもいいじゃない」

「俺のどこが喜んでるように見えんだよ!？」

「ん? 全てが」

「んな訳あるかあああ!!!」

イライラが頂点に達した時は、投げるに限る。楽しいし、なんか、スッキリする。これって、Sだけの特権ですよねえ。

「この痛みが、私の生きる糧となるのよ」

「あっそ」

「そして、その言葉は私の力になるの」

「そうですかあ」

「……ねえ、ちゃんとツツコンでよ」

「気が向いたらねえ」

「そんなの、私の愛したダーリンじゃない!!!」

「愛された覚えねえし」

「愛してるわ! 四六時中貴方の事を見てる!!! レンズの奥から!」

「おい、チラリと爆弾発言したよなあ。何だ？ レンズの奥から
って？ 盗撮か？」

「だしたら何？ 愛する人を見張るのは、家政婦の仕事よ！！」

「家政婦かよ！！ てか、いつお前は家政婦になった！！」

「今、この瞬間に」

「……あっそうですか。これ以上俺はツッコんじやいけない気がするからさ、一人でやっとけよ？ 頼んだぜ」

「あ、いや。頼むとかそういうの、気まずいんでやめませんか？」

「……」

「あのお、聞いてただけてます？」

「……ふああ、ねみい」

「あ、確かに眠いですよね。まだ登校中ですもんね」

「……」

「あのお、ツッコんでもらえないと、私のいる意味なくなっちゃ
うんですけど」

「……」

「この話も、成立しなくなっちゃうんですけど」

「……あ、数学持ってきたっけな？」

「なかったら貸すよ？ ダーリンの為なら、なんだってするわ」

「ま、いっか。他のクラスから借りてこよ」

「だから、私の愛がこもった教科書達を、貴方に貸してあげるわ、
ダーリン」

「……ああ、ねみい」

「……また、放置プレイですか？」

「……」

「ねえ、ダーリン！ 無視しないでよ！ ダーリン、ダーリン、ダー
リンー！！」

「うっせえな、消えうせろや、この世から」

「ああ、やっとツッコんでくれた。それでこそ、私のダーリン」

「……」

勝手にウツトリしている森野の隙について、俺は駆け出す。逃げ
るなら、今がチャンスだ！

「ああ、待って！私だけの人！！！」

「だあれがお前なんか好きになるか！！！！てか、勝手な思い間違
いしてんじゃねえよ！！！」

「思い過ぎなんかじゃない！本能よ！！！」

「何のだよ！！！」

「愛の野獣の」

「お前、やっぱ死ね」

「貴方のその言葉で私は癒されるのよ！さあ、私を助けて、ダ
ーリン！！！」

「お前は傷おってねえだろ！！俺はずいぶんと前から、癒えない
心の傷が、お前に会う度に疼くんだよ！！！」

「まあ、それはきつと、恋の病だわ」

「ゼツテエにありえねえ！！いや、あつてたまるかよ！！！」

「ああ、待って！私を置いていかないで、ダーリーリーン！！！」
森野のこの元気さ、異常じゃね？

20、逃げるSと、追うM!?

「あゝあゝ、疲れたっ」

「もう？まだ昼休みだぜ？」

「もう？じゃねえよ。昼休みは、そろそろ疲れてくる生徒達のため、休憩の時間だぞ」

「でもさあ、瀬川。疲れたって、朝来た時から言ってたぜ？」

「……気のせいだと思っとけ」

「それは無理だな、きつと」

「だったら、納得できるように、努力したまえ、小橋君」

「何？急に塾長気取り？」

「いいだろお。たまには酒に溺れてみてえんだよ」

「いや、俺らまだ未成年だから。酒飲んじやいけねえ歳だから」

「細かい事は、気にするな。ハゲるぞ」

「ベタなところつくねえ、瀬川」

「お前ほどじゃねえよ」

なんて、のどかな会話。けど、この話の中じゃ、長く続く訳ねえんだよな。……そういう作者だからな。はあ……。

「ダー……………」

「……………」

「……………」

「ホッ!!」

「まだ『ダー』しか言ってねえのに、何むせてんだよ！」

「自分の限界を、試していたのよ、ダーリンの為に」

「何のために必要なんだよ」

「……うゝん。トイレ掃除とか？」

「息止めて、掃除するのかよ」

「だって、臭いじゃない」

「確かにくせえよ。だけどさ、お前の腐った心もくせえ」

「ウソ!! 美咲はいつでも清潔そのものだよ! そうでしょ、お父様」

「え? 俺、まだそんなキャラ?」

「いいから答えなさい、この能無し」

「能無しはおまえだああああ!!」

どこからか、侵入してきた森野を撃退する。また、ヤバイ方向に走り出しそうだった小橋は、何とか無事だ。ハァ、よかったあ…。

「粗茶ですが……」

「あ、有難う……って、コレ、どこから持ってきたあ!!」

お盆ごとひっくり返し、お茶は見事に森野にかかる。ざまあみろ! いい気味だぜ!!

「小橋、こいつが変な事する前に、俺は消えるから。じゃ、後は頼んでぜ」

「え? おい、ウソだろ!! こんな毒舌辛口女と二人きりにさせんなよ!! なあ、瀬川!!」

現実逃避兼逃走心兼ムカつきのため、俺はその場を離れる事になりました。

グッバイ、小橋。あの世で楽しく生きろよ。俺はまだ、死にたくねえからさ。

とはいったものの、どこにも行く当てがない。そこら辺ウロついててもいいんだけど、それだけじゃつまらない。てか、それだけじゃ、話自体盛り上がらない。まあ、もう俺的には疲れたから、終わってもいいんだけどさ。

「終わらせません、勝つまでは!!」

「だ、誰だ!？」

「うゝん、鴉ですね。はい。終わらせてもいいけど、まだネタは尽きてないんで、もう少し付き合ってもらおうで」

「何でナマリ?」

「細かい事を気にするな、主人公よ。まあ、これから頑張れよ！じゃな！！」

な、なんだったんだ？どうして急に作者登場？この学校に、何の関係もねえじゃんか。

まあ、それはいいとして。これからどうするか。まだ、休み時間終わるまで時間あるし。教室に戻ったら戻ったで、小橋から小言くらいそうだし。ああ、なんか、平和すぎてつまんねえなあ……。

「やっと見つけたわ！！愛しのダーリン！！」

「ウゲッ！！！！」

「あ、待って！何で逃げるのよ！待って、待ってよ、ダー……りー……りー……ん！！！」

「追ってくるな！ストーカー女！！」

「ストーカーじゃないわ！！ちょっと恋愛の仕方が、複雑なだけよ！！！」

「それが危険なんだよ！！！」

「危険？それは二人の恋路に必ずあるものだわ！だから、ダーリン！二人でそれを持ち切りましょう！！！」

「乗り切れるわけねえだろ！お前がいる、その時点で、船が石と化すよ！！！」

「ゴーゴン？」

「何でそんなもん知ってんだよ！」

「なんか、名前がカッコいいでしょ？もし、子供が生まれたら、この名前をつけようね、ダーリン！！！」

「そんな名前の子供、恰好のイジメの対称だよ！『お前の目を見たら、石になっちゃう』的な発言されて、可哀相な子になっちゃうよ！！！てか、お前との子供なんて、絶対に嫌だ！！！」

「何でよ！！じゃあ、○解とかは？」

「ブリー○をパクるな！！！」

「じゃあ、アイシー○ド21とか」

「お前、○ヤンプ愛読者だな」

「私、ジャ○プより、貴方の心が読みたいわ、ダーリン!!」

「俺は拒絶する!」

「ダーリンも、ブ○ーチパクってるじゃない!!」

「気にするな、そんなちっぽけな事、すぐに忘れてしまえ!!」
「ついでに、お前の事を忘れさせてくれ!!」

「ダメダメダメエエエエエエエエエエ!! そんな事、この美咲の目が白いうちには、絶対にさせないんだから!!」

「白じゃなくて、黒だよ、バアカッ!」

「白も黒も、同じだわ!!」

「全然違うよ!! 汚れが目立つのと目立たないの!!」

「そんな事、私にとってはどうでもいいわ!!」

「俺にとっては、お前の存在がどうでもいい!!」

「酷い、酷いわ!! でも、嬉しい!!」

「キモいって――」

止まって、上履きを脱ぎ、思いつき振りかぶる。

「言ってるんだろおがああー!!!!!!!!!!!!!!」

剛速球で飛んで行ったそれは、周りの野次馬達を巻き込む事無く、スッコーンと森野に命中する。あまりの見事さに、周りから拍手が。

「これ以上、俺に付きまとうなよ、雌ブタが」

そう吐き捨てて去る俺の背中を、痛いほど見つめていたのは、間違いない森野だろう。

ああ、いつか殺してやろうか。そんな事を思いつつ、俺は教室へ戻って行った。

21、親馬鹿の親馬鹿!?

森野の被害に遭う事もなく、やっと家にたどり着く事が出来ました。ちよつと嬉しいっすね。

「ただいまあ」

いつもの如く、そう言った。なのに、返ってくる言葉は――。

「慎吾お!! 会いたかったよお!!」

「ゲ! 親父!!」

そう、涙目をして飛びついてくるキモ……ウザい人こそ、俺の親父。世界一嫌いな人物。……あ、森野も嫌いだな。まあ、両方世界一嫌いな人物って事で。

「帰りが遅いから、パパ、心配しててんだぞ?」

「……いつもと変わらないんだけど」

いかつい顔してるくせに、『パパ』ってありがよ……。しかも自ら言いやがった。

「パパ、あまりにも心配すぎて、学校にTe11しようかと思っちゃったよ」

「……いちいちTe11なんて言わないで、電話って言えよ」

「それぐらい心配だったんだぞ? ああ、無事に帰ってきてくれて、パパ、本当に嬉しいぞ」

「……無事に帰ってこれない学校なんて、あるのかよ」

「ああ、慎吾。もっと顔をよく見せておくれ」

「……十分近いと思うんだけど」

もうそんなに離れていない位置に、親父の顔はある。いつもは怖い顔してるのに、こういう時は、気持ち悪い程に笑顔になる。

「……離れてくれない?」

「イヤだよ、せっかくの再会じゃないか。パパ、ずっとお前の事を考えてたんだぞ」

「……ありがたくねえよ、バカヤロオ」

「コラ、パパに向かってそういう言い方はしちゃいけないだろう？」
「……じゃさ、離れてよ。とりあえず」

近い、近い、非常に近い！！もう、目の前が親父の顔しかねえんだけど！親父以外のものが、何も見えないんですけど！！

「離れたら、消えたりしないよな？ 慎吾は、ずっと傍にいてくれるよな？」

何なんだよ、この親父。女か？メツチャダンディな顔した女なのか！？

「……キモッ」

「慎吾！」

「……んだよ」

急に声を出すな！怖いだろう？いくら親父でも、元から怖い顔してんだから、それ以上怖い顔するなよ！！寿命が縮むだろ、コンニャロッ！！

「いけません、いけませんよ！パパに向かって、暴言はいけません！ん！」

じゃあ、この距離はどうすればいいんだよ？いくらなんでも近すぎるだろ？ドアップはキツイだろう？

「分かった？」

「……」

「聞いているのか、慎吾？」

脅しですか？これは脅しなんでしょいか？

親なのに、誘拐犯に見えるんですけど。俺、誘拐されそうなんですけど、親なのに！

「わ、分かったよ、親父」

「親父じゃない！パパと呼びなさい！帰ってくる度に、いつもそう言ってるでしょうがあ！！」

それだけは出来ねえー！男としてのプライドがつ！Sとしてのプライドが、消えてなくなってしまうう！！

もし俺がこの子離れ出来ない親父の言いなりになってみる。

「ただいま、パパ」

「ああ、お帰り、慎吾」

「パパ、やっと帰ってきたんだね。ボクも嬉しいよ」

「そうかそうか。そんなにパパに会いたかったか」

「うん！ボク、パパだあいすきだもん！！」

的な、とてつもなく気持ち悪い展開になってしまふ恐れがあるぞ！鳥肌が、世界を制すぞ！嘔吐の並が、世界を破滅へと誘うぞ！！ダメだ！そんな事させる訳にはいかないぞ！そんな惨めな世界破滅、いやだああああああああ！！

「……誰がお前なんか、パパって呼ぶかよ」

よく言った！よく言い切ったよ、俺！偉いぞ、お前は偉い！よく勇気を振り絞って言ってくれた！！

「……それにさあ、俺はもう中一だぜ？パパなんて親父の事呼んだら、とんだ笑われもんだ。ハズいったら、ありやしねえよ」

「……」

……親父黙っちゃったけど、大丈夫だよな、これ。何とかなるよな、これ。願いは通じてくれるよな、これ！

「ああ、慎吾。よく分かったよ。慎吾はパパのことが嫌いなんだね？」

そんな事一言も言ってねえ！！

いや、確かに嫌いだよ？森野並に嫌いだよ？だけどさ、嫌いなんて、まだ一言も言ってねえじゃん！

思い込みすぎか？そうなんだよな、そうだと言ってくれ、親父！！「嫌いなら、はっきり言って欲しかったな、パパ」

「……え、いや、その——」

「嫌いなんだろお！？パパの事、とっても嫌いなんだろお！？」
じ、自爆だあああ！！あまりに深く考えすぎて、思考がマイナス方面へと一直線だ！！もう曲がれねえよ！もう止まれねえよ！！た

だ走る事しか出来ねえよ!!!

「あわ、慎ちゃん。お帰りなさい」

神様あ!!! ナイスタイミングで母さんを投入してくれましたねっ!!! 心から感謝申し上げます!!!

「た、ただいま、母さん」

「もうすぐご飯できるから、着替えたら降りてきてね」

「……う、うん」

ヤバいっ! 母さんが、神々しく見える! そう、まるで菩薩だ!!! 全ての事を優しく包み込む、まさに菩薩だ!!!

「ホラホラ、俊さん、慎ちゃんが困ってるわ。もう少し離れてあげないと」

「だけどさ、麻理。パパは慎吾と離れたくないんだよう」

「コオラ。甘えた事、言わないの。さあ、俊さん。私を手伝ってくれない?」

「……慎吾と話したい」

「なら、私、家出しちゃうかも」

「それはイヤだよお! 麻理、お願いだ! どこにも行かないでくれえ!!!」

「よしよし。全く、俊さんったら甘えん坊さんなんだから」

!! ば、番犬ケルベロスが、女神様に頭よしよしされて微笑んでるう!!!

何だこの光景!? 子供は見ちゃいけないんじゃないのか!? 仮面ライダーショーとかが終わったあと、すぐにキグルミ取っちゃって、それを見てた子供の夢を壊す的な!!! そんな光景じゃないですか!?

「あ、そうだ慎ちゃん。今日は塾を休んでいいからね。久しぶりに、親子揃って楽しくお食事しましょ」

「……分かった」

今、この状況が、幸せなのか不幸せなのか、分からなくなってきました……。

22、ドメスティックバイオレンス!?

「頂きます、慎吾」

「……俺を食おうとするな」

箸を持って引っ付いてくる変体親父の弁慶を、容赦なく一蹴り。

「痛いぞ、慎吾」

涙声で、親父はそう言った。ざまあみろ! この、クソ変態が!!

「美味しいなあ、慎吾」

「……そうだね」

「うまいなあ、慎吾」

「……さっき似たような事言った」

「幸せだなあ、慎吾」

「……俺的には不幸だよ」

「幸福だなあ、慎吾」

「……だから、似たような事言ってるっつの」

「このテレビ、面白いなあ、慎吾」

「……ニュースのどこが面白いんだよ」

「このテレビ、映り悪いなあ、慎吾」

「……買い換えろよ。てか、そこまで悪くねえだろ」

「慎吾」

「……んだよ」

「なあ、慎吾」

「……んだっての」

「慎吾、慎吾、慎吾お」

「あゝあゝ!! ウザい!! ドメスティックバイオレンス!!」

持っていた茶碗を、実の親（馬鹿な父親）に向かって一球投げました。もう、ストライクっすね。だって、顔面にヒットだもん。あ、それはちよつと違うか。ま、いっか。

「どうしたんだい、急に。そんなにパパの事が好きなのか」

「……誰が好きになるか、こんな親父」

「そうか、そうか。そんなに好きなんだな。なら、今晚は一緒に寝ようか」

「……やめてくんない？マジで、やめてくんない？部屋に入った直前に、参考書投げつけるよ？」

「参考書？ああ、愛のか？」

「……何なんだよ、この親父。ちよつとした森野だぞ？ていうか、森野っぽいぞ。森野ってるぞ。」

「……そんなんじゃないよ。普通の参考書だよ」

「普通の？普通って何だ？愛の参考書がブナンだろ？」

「どこが、どのへんが、どのように！何でそうなるんだよ、どうしてそっち方面へレッツ・ゴー！！何だよ！！何がどう狂ったら、そんな方向へもっていきけるんだよ！！」

「じゃあ、パパとその参考書、開こうか」

「……ゼツテエに、イヤだ！！近付くな触れるな見つめるな！！」

「何でだい、慎吾。パパはこんなにも慎吾の事を愛しているのに」

「……オーバーなんだよ、全てが。もう、手に負えねえんだよ」

「そうか、パパの愛情がまだ足りないんだね。よし、じゃあ明日は学校を休んでドライブに行こう。気分転換っていうのも、必要なんだぞ」

「……じゃさ、早く会社に帰れ。そして、俺が一人暮らしになるまで帰ってくるな」

「何！一人暮らしだと！！許さんぞ、パパはそんな事認めません！！」

「……いいよ、勝手に出て行くから」

「そんな事はさせないぞ！ハリー・○ッターみたいに、鉄格子で窓を固めて、何重も鍵をつけてやる！！」

「……いいよ、ロ○みたいな友達に助けてもらうから。その家で、仲良く生きていくから」

「駄目だよ！！パパ、絶対に許さない！！パパ、泣いちゃうよ！」

!!」

「……泣け泣け、泣けばいいさ。思う存分泣いて、ミイラと化してしまえばいい」

「そんな冷めた事を言うんじゃない!! パパ、本当に泣いちゃうん……グスッ」

体ゴツイわりに、何その泣きかたああ!! ムカつくんですけど、異常なほどにはらわたが煮えくり返るんですけど!!

「あゝあゝ!! もう!!!! ドメスティックバイオレンス!!!!」

鮭を丸まる一切れ、無理矢理そのウザい口に突っ込んでやりました。ああ、俺の好物が……。こんな事に、無駄に使うんじゃないかった……(泣)

「どうした、慎吾? 泣いているのか?」

もう、俺の心は号泣だよ! 崩壊寸前だよ!! ベ○リンの壁だよ!! ……あ、良く考えれば、もう崩壊してた、それ。

「泣くな慎吾! パパが、抱っこしてあげるから!!」

「やめろ! 寄るな!! このクソエロジジイ!!」

顔面にグーパンチ。あ、遂にやっちゃった。ノックアウトだよ、もう真っ白に燃え尽きたよ。

あ、そうそう。一つだけ言っておきます。俺は、産まれた頃から反抗期です。親父に対して。多分、これからもそうだと思うんで、その辺、覚悟お願いします。

「効いたぞ、慎吾の愛のムチ。こんなにもパパを愛してくれてたなんて、パパ、知らなかったぞ」

そりゃそーだろーな。だって、一ミクロンも親父の事愛してないからな。現在進行形で。

「……愛してねえし。……ご馳走様でした」

「もう行っちゃうのか、慎吾。まだ、パパと一緒にいたいだろ?」

「……いや、いたくねえよ。どちらかと言えば、とっとこの部屋を去りたい」

「嘘をついても駄目だぞ？」

「……嘘なんてつかねえよ。吐きたくもねえよ」

「本当はもっと一緒に居たいんだろ？」

「……だから、いたくねえっての」

「分かってる、分かってるよ、パパは。離れたくないんだよ、慎吾……！」

「それって、お前自身の事じゃねえかあ……！！！！！」

「パパをお前呼ばわりか！せめて、パピーと呼びなさい！！もしくは、パパで……！」

「イヤに決まってるんだろ！！この、クソエロ変態ホモ親父……！！」
洗剤で泡立った水をぶっ掛けて、抱き付いてきそうになったモンスターを撃退しました。てか、退治しました。

「いいか、よく聞けよ、キモ親父！俺の部屋に一步でも入ってみろ、二度と口利いてやんないからな……！」

ドタドタと親父の横を通して、リビングのドアを開ける。その時、足をつかまれた。

「放せっ、薄らハゲ親父……！」

「ハゲてない！パパ、まだ健康だよ、毛根も、体も！」

「精神的な面がハゲてんだよ……！！もう、国民的アニメのサ○エさんの○平さん並なんだよ……！」

「そんなのいやだあ……！！イヤだけど、放したくない」

「甘えた事言ってるじゃねえよ！それでも副社長かよ！大人かよ……！！」

「永遠の18歳だよお……！」

「それは妄想だろ……！！」

「行かないでくれよお……！！慎吾お……！！」

ズルズルと廊下まで引きずってきて、階段に頭をゴツゴツぶつける。でも、離れない。

畜生！このクソ親父め……！！いい加減にしねえと……！！塾の宿題がで
きねえんだよ……！！

「もう、俊さん。慎ちゃんが困ってるじゃないですか。放してあげないと、本当に口利いてくれなくなっちゃいますよ?」

「麻理く。どっちもイヤだよお」

おお、神様!! どうか、この馬鹿を説得してください!!

「なら、どっちか一つ選ばなきゃ。ね?」

ね? って、それは俺に対してなのか? そうなのか? いや、この親父だよな、うん、きっとそうだよな。

「ね? 慎ちゃん」

「え! ?」

「ウフフ。そんなに驚かないで。どっちか決めてくれたら、俊さん、許してくれるよね?」

いや、あの、許すも何も、かなり重度に許したくないんですけど。できれば、この世から消えて欲しいかも。

「じくんくごく」

「触れるな! それ以上、這い上がってくるな!!」

引っ張られて悲鳴を上げている服を救うため、汚いあの手を振り払ってやりました。

「いゝがなゝいでぐれく」

濁音多すぎ!! 逆に読みず……じゃなくて、言い辛い!!

「さあ、俊さん。放してあげたんですから、また口を利いてくれますよ」

「ぼんどうに?」

「ええ、慎ちゃんは、根は優しい子ですから」

嬉しいけど、母さん。それは間違ってるよ。自分で言うのもなんだけど……。性根、腐ってるからね、俺。もう、ボロボロだよ? 真っ黒だよ?

「じゃあな、慎吾。また、はなじてづれよ」

……まだ、泣いてる……。

「じゃあね、慎ちゃん。あ、寝る時は、歯、磨くのよ」

……それよりも前に、風呂はいるからね、母さん。そして、寝る

時に歯は磨かないよ。寝る前に、歯は磨くけど。

「慎吾！アイ・ラブ・ユーー！！」

「……死ね」

そうして、子離れできないクソツタレジジイは、母さんに連れられて大人しく部屋へ戻っていきました。一件落着う……なのかな？

23、変質者、風呂に現る!?

いつも通りに、今日はロクな日じゃなかった。てか、もう、いい日なんて一生来ないと思うんだけど。絶対に。なんか、そんな自信がある。

「さあて、風呂でも入るかな」

塾の宿題も終わったし、エロジジイの偵察もないみたいだし。一安心だな。

「……まさか、風呂に入ったりしないよな、あの変態親父」

……ヤベ。なんか、不安になってきた。

自分で言うのもなんでけどさ、ウチの風呂って狭いんだよね。コ○シキさんとか遊びにきたら、風呂は大破しちゃうからね。あ、大体のうちはそうか。

「風呂風呂〜♪」

俺、結構風呂は好きなんだよねえ。なんか、日本に生まれてきてよかったって、思えるんだよ。幸せの瞬間だよ、まさに極楽♪

「……いや、ないよな。きつとない」

まさか風呂に変質者がいるとは思わないけど、今はその危険性がある。だって、異常なまでの親馬鹿だぜ? だからって、……なあ。

「……か、確認するだけの価値って、あるのかな?」

嫌な予感があるんですけど。だってさ、誰もいないはずの風呂場から、バシャバシャ音が聞こえるんだぜ?

え? 奇怪現象? ああ、それもありえるなあ……。だったら、エク○シスト様を呼ばなくちゃ。アレ○とか、ラ○とか、○田とか……。あ、でも、神○はキレると怖いから、ア○ンか○ビがいいなあ。

……って、話それてる!! そして、それに自分でツツコンでしまった!! ヤベッ!! なんだか、恥ずかしい!! やめろ! 撮るな!! おい、写メはやめろって言ってんだろおがぁー!!

「……んな事はどうでもいいから、まず、内部の調査だな」

内部つつつても、風呂だからね。いたって普通の風呂だからね。

「……」

ドアを開けてまず目に入ってきたもの。

1、変な奴

2、馬鹿っぽい奴

3、気に食わない奴

4、大嫌いな奴

5、なぜか服着たまま風呂入ってる能無し奴

6、溺れかけてるのに、なんか嬉しそうなMな奴

以上っ！！

バンッ！！

ドア閉めたんですけど、アレは幻覚ですよ。だって、この家にいないはずの人物ですから。いや、ゴキブリじゃないですよ。下弦でもありません。あいつは、どちらかというとSです。もっと身近で、底なしの馬鹿です。

「ないない。これはああであって、こうであるから、そういう結果になって、これはない！絶対に、ない！！」

そうそう、アレは幻覚だよ、慎吾。何を想像してんだ？日頃の疲れが、今ここに？じゃあ、今日はゆっくり休むか。そうだよな、たまには体に気を使ってやらないといけないもんな、慎吾。そうだよな、慎吾。

「アレはきつと、幻覚だ。いや、きつとじゃなくて、幻覚だ」

もう一度、ドア、オープン！！

「ギャバッ！ボハッ！クハッ！お、おぼれふっ！！おぼれふう！！！！」

もう一度、ドア、クローズ！！

おい、また見えたぞ、幻覚。しつこいぞ、幻覚。え？幻覚？幻覚のくせして、生意気に話してた気がする。てか、声を発してた。

「いやいや、いやいや！！ないないなあ！！これはそうなんっ

「ブブクク！ブククツブク！」

「恋の仕方が陰湿なだけ？それがストーカーがよ、馬鹿野郎が！」

浴槽の底に頭がぶつかるまで沈めて、何度も頭を強打する。これは、虐待ではありません。教育です！！

……はい？何で『ブクブク』としか森野は言っていないのに、話ができるかって？勘です！！ていうか、なんていうか、大体予想ができるんです！！いやだけど、非常にいやだけど！！好ましくないけど！！

「プッハー！」

いくらなんでも殺すのは可哀相な気がしたんで、沈めるのをやめてみる。

「やっぱりダーリンだったのね！美咲、ずっとここで溺れて待ってたんだゾ」

「……よく死ななかったな。死ねばよかったのに」

「最後に不吉な言葉が聞えた気がするんだけど、美咲、それでも嬉しいです！」

「……何で死んでくんなかったかな？何で生きて、俺の前にいるのかな？」

「……え、あの、ダーリン。私を助けに来てくれたんじゃない」

「だあれがお前なんか助けに来るかよ！！馬鹿クソ変質者！！」

「変質者じゃないわ！！ちよつと、相手の行動が気になっただけ！！」

「それで十分だよ、十分ストーカーだよ！！」

「ストーカーじゃない！ダーリンの愛のキューピットよ！」

「キューピットだあ？どこが、どの変が！？」

「私の存在、す——」

「お前を母なる水に還してやるよ！！」

「ブククウ！！」

「フハハハハハア！！さあ苦しめ、そして喘ぐがいい！！」

「ブクウー!!!」

「ハハハ!!! 苦しめ、苦しめ!!!」

……かれこれ十分くらい沈めて。

「ブバツ!!!」

「これに懲りたら、二度と家の敷地を踏むな」

「シキチ？」

「んなのも分からないのかよ!」

「だって、あたしには、ダーリンしか見えていないもの!!!」

「じゃあ見るな、二度と見るな、俺の前に現れるな!!!」

「イヤよ!!! それじゃ、死刑みたいなものじゃない!」

「死ね死ねえ!!! お前は地獄に行つて、魔王とチークダンスでも踊つてろ!!!」

「踊るんなら、ダー……」

「はあい、何か言いましたか？」

「……言つてまふえん」

「よろしい。では、さっさとお家に帰りたまえ、子羊君」

頬をつねって伸ばした。いい気味だ、このままずっと伸ばしとい
てやろうか。

「……ひとふ、いっへもいいへふは？」

「何だ？」

「……愛してまふ」

「……」

「……（照）」

「なあに（照）だよ! 何照れてんだよ! 何頬赤く染めてんだよ!

! 死ね! お前は一度死んで、人生そのものをやり直せ!!!」

「いや!!! ダーリンと離れたくない!!!」

「積極的に離れたいんですけど! 心の底から離れたいんですけど
!」

「やあね、そんなに照れなくてもいいじゃない」

「照れねえよ! てか、お前は出てけえええ!!!」

殴ったり、蹴ったりして、とりあえず大人しくなった森野を、家の外に放り出す。

「いいか、二度とココには来るなよ！分かったな！！」

……もう、家、引越していいですか？毎晩こんなじゃ、生きていく氣力を失います。誰か、助けてください……。

24、ある意味スゴイ!?

「慎吾、気をつけてな。変質者に襲われそうになったら、すぐ、家に帰ってくるんだぞ」

「……あいあい」

「絶対、パパを呼ぶんだぞ」

「……それはイヤだ」

「絶対に、絶対に、パパって呼ぶんだぞ」

「……いつてきまあす」

「いつてらっしゃい、慎ちゃん」

ニコニコ笑いながら手を振る母さんの隣で、涙ながらに親父は俺を見送っていた。……戦争に行く前ですか、俺は。

「慎吾お！早く、帰ってきておくれよう!!」

「俊さん、そんな事言っちゃ、慎ちゃん、学校に行きにくいですよ？」

「ヒッグ、ヒッグ……だつてさあ——」

なんて会話を背に聞きながら、ホトホト飽きた。ていうか、……やっぱり飽きた。

「はあ、どうして俺って、こんなに変な連中に囲まれてんだ？」

馬鹿すぎるMとか、二重人格とか、ガラスのハートとか、ホモとか……もう、疲れたよ、パトラ○シュ。……てか、このネタも使えすぎたよ。そろそろ飽きるよ……はあ。

「す、すす、すみません！」

「はい？」

急に目の前に現れたのは、綺麗な女性。OLかな？

「こ、ここ、告白してください!!」

「はあ？」

告白してくださいって、初対面なんですけど……。

「じゃ、なくて、この道教えてください！」

どんな間違え方！？ある意味、すばらしいよ！！

「は、初めての土地で、慣れなくて、迷っちゃったんです……」

「ああ、そゆ事」

差し出されたメモ書きには、どこに行くかしか書いてなかった。

ああ、当たり前だよ、迷って。だってココ田舎だから、道が複雑なんだよね。

「くめさん 条燦株式会社は、この道じゃなくて――」

「え？この字って、クメさんって読むんですか？」

「……そうですけど？」

でも、クメさんって人、どこにもいないから。てか、そんな人いないから。

「私、これ全然読めなくて、道も尋ねられなかったんです！」

「……そう、なんですか」

「はい！足す狩りました！！」

すみまつせえん！字が違います！おっそろしく、字が違います！！

「じゃ、なくて、助かりました」

「……はあ」

この人も、危ない雰囲気をするな。早く道順教えて、追っ払おう。

「ココを真っすぐ行って、信号を右に曲がって、また真っすぐ行って、十字路を左です。そうすれば、おっきな看板が見えてくると思うんで、後はすぐたどり着けますよ」

「あ、アリが十匹です！」

た、確かにそうだけど……。そんな感謝の仕方って、ありっすか？

「じゃ、なくて、有難う！！」

そんなこんなで、彼女は去っていった。……まだまだ、なんか不安でけど……。

― 数分後 ―

「しゅ、首里城！」

首里城！？何故に首里城！？首里城に行くんだったら、沖縄へどうぞ！

てか、この人、さっきの女の人じゃん！！

「あ、また貴方ですか？よかったあ、身罷りました」

……それ、しちゃいけない？てか、身罷ってたら、貴方今、死んでますよ？

「じゃ、なくて、助かりました！！」

……なんかもう、ツツコム気力も失いそうだよ。

「あの、また道に迷っちゃったんですけど。すみません、方向音痴で」

「……いや、別に構いませんよ」

方向音痴にも、程があるよ？何で戻って来れたの、ココに。どうやって戻ってきたの、ココに。

また、同じ事を言って、とりあえずすましたけど……。

「上がり症でございます！」

……あつそ。てか、何でニュアンス、○ザエさん？

「じゃ、なくて、有難うございます！」

もう、会いたくないかも……。

— また、数分度 —

「エクス・キューズ・ミー！？」

カタコトの英語！？いや、話しかけ方はあってるよ、バッチリだ。だけどさ、ココ日本だよ？何で、わざわざ英語にした！？

「じゃ、なくて、ちょっとよろしいですか？」

「さっきも言いましたよね」

「ああ、君だったの？なんか、緑があるね！」

.....あ。

.....緑じゃない、縁だよ。

分かりにくい間違えはやめてくれない？危うく見落としそうだったじゃないか。てかさ、分かる人にしか、よく分からないから。

.....あ、よく分からない人、国語辞典で引いてごらん。ビミョーな違いが分かるから。

「また、オゴリッすね！」

「.....」

「じゃ、なくて、有難うね！」

この人の人生そのものに、疑問を抱かずにはいられないよね.....。

— さらに数分後 —

「まさにその時!!」

何が起こったああ————!!?!まさにその時、何があったんだよ!?!何が起こったんだよ!?!ていうか、引っ張り方が、ベタだよ!!

てか、またお前かよ!?

「じゃ、なくて、すみません！」

もういいよ。飽きたよ、人生に。そろそろ、13年という、短い人生の終止符を打つ時が来たんだな。

分かったよ、死ねばいいんだろ!?!もういいよ、分かったよ、作者!俺に死んで欲しいんだろ!?!いいよ、死んでやるよ!!死ねばいいんだろ、馬鹿作者!!

「あの、もう一度——」

「もう好きな道行けよ、これ以上俺の傍によるなよ、貧乏神!!」
あ、言っちゃった.....。

「貧乏神じゃない！疫病神よ！！」

何気に自分の立場理解してるーーーー！！

偉いっ！森野と比べれば、かなり偉い！！……でも、本当に、偉いのか……？

「あゝあゝ！！私のダーリンが、他の女性とデートしてる！！」

「このどこがデートに見えんだよ！朝7時半からのデートって、どんだけだよ！！てか、俺はお前のダーリンなんかじゃねえっつの！！」

「許さない、許さないわよ、サナエ！！」

「誰だよ、サナエって！！てか、勝手に新キャラ作るな！！下弦が怒るだろ！！」

（そうだ、そうだ！……と、思いつつ、その名前、使わせていただきます！）

「使うのかよ！！」

（使うさ！だって、名前とか、考えるの面倒だもん）

「それだけの理由かよ！！」

（知らぬ間に、下弦は去って行っていた）

「勝手に終わらせようとするな！ボケ作者！！」

「……ダーリン、誰とお話してるの？」

「誰って、下弦に決まってんだろ？へボ作者の」

「ああ、女神様」

「……は？」

「女神様とお話できるなんて、やっぱりダーリンはすごいね！！」

「……」

（フフ、思い知ったか、俺様の存在を！！フハハハハハ！！！！）

……ひとまず、二人目の馬鹿は置いといて、まずは、一人目の馬鹿をどうにかしなくては。

（おい！女神様を無視するな！！）

「ウツセエ!! 黙ってろ、数学2馬鹿!!」

(それを言うなあああああ!!)

「言われたくなかったらとっとと消えな、馬鹿が」

と、言う訳で、無駄な行を使ってしまったけど、本題(?)に戻ります。

「ダーリン! サナエから離れて! っていうか、サナエ。貴方が離れなさい!!」

「……はい？」

絶句する女性と、憤慨してる森野。勝手に一人で怒ってる馬鹿は、ほっとくが一番だ。

「まあ、気にしないでください。同級生の馬鹿ですから」

「はあ……」

「馬鹿じゃない! 愛の知識は、盛りだくさんよ!!」

「ほっといていいんで。そのうち、静かになるから」

「ほ、ほっけ」

……ほっけて、魚かよ。

「あ、じゃ、なくて、はい」

「カワイ子ブリッ子してないで!! ダーリンから——」

「だからですね、こっちを曲がって——」

「はい」

「ちよっと! 距離が近いわ!! 18禁よ!!」

「こっちを曲がったら——」

「はい」

「ちよっと!! 唇が!! 唇があ——!!」

「ココに来ますよね。で——」

「はい、はい」

「ねえ、聞いているの? ダーリン! 私だけの、王子様っ!!」

「マッ〇が見えてくるんですよ——」

「○ックですね——」

「お姫様は、あたしだけで十分でしょ！私がダーリンのお妃様なの……！」

「そこを抜けると十字路で——」

「へえ、そうだったんですかあ」

「その女、本当は道順とか全部知ってるのよ！ダーリンと話したいだけなの……！私から、ダーリンを取り上げた……グホッ」

耳元でワンワン喚く蚊を叩き潰して、話を続ける。

「十字路に出たら——」

「左に行けばいいんですね？」

「右よ！右に行きなさい……！そして、そこで人生に終止——」

「だまっとれ……！ストーカー馬鹿M使えない女……！」

再び蚊を叩き潰して、話し続行。

「左に、曲がればいいんですね？」

「そうです」

「まあ、親切に、お訪ねてください」

「……」

「じゃ、なくて、新設に、有難うございます」

もう、いいよ……。

そのあと、無事に目的地にたどり着けたか分からないけど（俺的に無理だと思う）、その女性は去って行った。

……結局、彼女の名前って、なんだったんだろう。

24、ある意味スゴイ！？（後書き）

ちなみに、彼女の名前は、（一応）佐々原 幸江です。

え？読めない？辞書でも引いてください。

え？めんどくさい？ささはらさちえですよ。そのまんま、字の通りに読めば、間違いねえだろ？……ちっ。

暴言、失礼しました！！（焦）

25、ポケ○ン!?

「……もう、離婚よ」

「はあ？」

学校に着いたと思った途端、これだ。もう疲れた、もう飽きた、もうやってらんねえ。

「んの事だよ？」

「……いい年して、あんな年上が好きだなんて、美咲、もう許さないんだから」

「は？」

「一目惚れなんでしょ？方向音痴に」

「ああ、あの人が」

そう、朝会った、とんでもない方向音痴。アレは、少し度が過ぎてた気がするな。

「やっぱり、そうだったのね！私という女がいながら、そうやっていつも貴方はあっちへフラフラ、こっちへフラフラ！もう、離婚です！」

「……結婚した覚えねえし。しかも、あんな方向音痴、どうだっていいし」

「そうやってまた嘘付く！美咲には、全てお見通しなんだゾ！プンプン！！」

さとう○緒風に、両手で頭を叩きながら言う馬鹿を一人置いて、教室へ去ろうとする。

「逃げてても無駄よ！いつだって、ダーリンをつけていてるんだから！！」

「ついて来てんのかよ！！それ、立派なストーリー——」

「ストーリーじゃない！！愛の戦士よ！！」

「俺はまだストーリーなんて言ってません。ストーリーキングって言おうとしたんです。よって、貴方は自らストーリーだという事

を認めました」

「違いますう。言葉の綾ですう」

「絶対に、違うと思います」

『絶対に』を強調して言う、俺。

「絶対に、綾ですう」

どこも強調しない、馬鹿。てか、何だか嬉しそう。てか、顔近づいて！

「……おい、馬鹿。顔が近えぞ」

「……」

「おい、聞いてんのか、馬鹿。馬鹿M」

「……」

「無視し続けてると、どうなるか知ってるよな、あん？」

「……く・ち・び・る」

「はあ？」

「……ち・か・い（ハートマーク）」

カッチインと、きましたね、頭に。いや、もうキレたみたいなの？

「ウツゼエよ！！」

思いつきり、馬鹿の頭をガッチインとしてやりました。……痛い

……（微泣）

「何を言い出すかと思えば、いつも馬鹿発言！もう飽きたんだよ、いい加減もつと違うキャラ演じてみるよ、もつと真面目なキャラになってみろよ！！」

「ええ。いやです、先生」

「先生じゃない！！生徒だ！！！！」

「私の？」

「意味わかんねえよ！！」

「いいのよ、それで。いつか理解できる時が来るわ」

「来ないね、永久的に。絶対来ない」

「ええ！？嘘ッ！それはないわ！！」

「大有りだよ！！ありすぎて、涙が出るよ！！」

「何？私のために泣いてくれるの？」

「ど、どうい、勘違い！？ どうい、方向転換！？」

「Uターン？」

「戻ってどーするんだー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「あ、やっぱり、右折で」

「……何故に右？」

「ダーリンの隣に――」

「来なくていいわああああああああああ！！！！」

必殺、顔面パンチ。クリティカルヒットだ！！

「……これも、愛のムチって奴なんでしょう？ 私、知ってるんだから」

「ンな訳あるかああああああ！！」

渾身のエルボー。いまいち、効果はないようだ……。

「……こんな事で、この私がめげると思ってた？」

「思っ
てねえよ？
思っ
てねえけど？
その
のど
こが
ワリ
イか
よ？」

「……私を、思っ——」

「想
つて
ねえ
よ。
想
いた
くも
ねえ
よ。
逆
に、
重
えよ」

「……？」

「ウザいって言ってんだよ、消えろ、薄らハゲ超ド級馬鹿M」

「よく噛まずに言えましたあ。では、ご褒美に私からのキ——」

「いらんわあ――――！！！！！！」

⌋ ! ! ! ! !

超必殺、回し蹴り!! 初技だけど、見事にクリティカルヒット!

！
……
快感。

「いいか？よく聞けよ？もう何度これを言ったが知らねえが、聞けよ？これ以上、俺に関わりを持つとうとするな、そして半径百メートル以内に近付くな」

「あの、半径百メートル以内って――」

「あん？俺様に口答えするきか？いい度胸じゃあねえか」

「いえ、何もございません……。積極的に、ありません」

「よし、それでよろしい。では、自分の教室に戻りなさい！」
「はい！サディスト様！！！！」
……なんかもう、ホント疲れた……。

25、ポケ○ン!? (後書き)

もう、お気づきの方は、気付いてますよね。今回は、ポ○モンをイメージして、書かせていただきました! 分かりにくいかもしれないけれど、ちよっぴりパクっております (笑)

今後も応援、よろしくお願いします! 感想など、お待ちしております! す!!

26、変な先生登場!?

漸く一日が終わり、部活の時間。剣道部と、演劇部は場所が全然違うから、あの馬鹿に襲われる……いや、出くわす心配がない。良かった、良かった。

「じゃあ、素振りから初めるよお」

「はい!」

うーん、久しぶりに清々しい返事だ。懐かしいよ、この瞬間だ。いつも怒鳴ってばっかだもんな。

「……の、前に、一つ話がある」

いつの間に!?! いつの間に来たんだよ、コーチ!! あんたは忍びか!?

「今日から、俺の一緒に剣道を教えてくれる、江堂先生だ」
えどう

「どうも、よろしく」

おう。なんかカッコいい先生が来たなあ。女なのに、コーチよりカッコエ……。

「俺より、江堂先生がカッコいいと思った奴、外周十周な」

「なっ……」

「ん? どうした、瀬川。もしや、今俺が言った事、そのまんま思ってただろ?」

「いえ! そんな事は、全くもってございません!!」

全くもってございます!! てか、バッチリ当てられて、かなり心臓に悪かったんですけど!?

「まあ、いい。じゃ、一年生に江堂先生についてもらうから、頑張れよ」

「はい!」

俺ら一年、一応返事をした。

……ああ、みんなもそうだったんだな。カッコいいって、思ってたんだな……。

「私が教える剣道は、ただの剣道じゃないわよ」

え？ただの剣道でいいんですけど……。

「江堂流、最強剣道よ！」

「おお」

いやいや、みんな！？これ、感心ちゃいけなくね？江堂流って、
本当にあるのかよって、疑った方がよくね？

「まずは、私が見本を見せるから」

いやいや、見本とか、そうゆうのいらないから。ホント、フツツ
ーの剣道でいいから。

「はいっ！」

みんなううう！『はいっ！』じゃ、ねえよ！！『え！？』だよ！！
「まずは、構える」

それ基本だよ、当たり前だよ。

……てか、先生！？なんてポーズしてるんですか！？構えるって
言ったのに、脅え越し！？

「さ、みんなも！」

「はい！」

『はい』じゃねええええ！！！！『いいえ』だ馬鹿やロオーーーーー
！！！！！

やるのかよ？マジでやるのかよ、みんな。これ、どっからどう見
てもおかしいだろ？剣道じゃねえよ！？何だよこれ、負け犬か！？

「みんな、負け犬の気持ちになって、もっと腰を低く、申し訳な
さそうに！」

「はい！！！」

だからーーーーー！！！！これ、キョヒるところー
！！！！！！！！！

「瀬川君！何やってるの！？もっと、腰を低く！誰にも手出しさ
れないように！！！」

いやいや、手出しされないよね、きつと。でもさ、何で負け犬！？

「金子君!!そこはもっと、低く!!こうよ、こう!!!」

いやいや、腰低いつて言うか、もう土下座?

「はい、先生!!」

おいっ!何故に返事!?

「いいわ、その調子よ!」

いやいや、もう見るも無残な光景だよ?何これ?番長にやられて、手も足も出ないヘボですか?

「もっと深く、頭をさげるの!!」

いやいや、さげすぎてもう地面にめり込んでるよ??額に土がついてますよ??

「そう、そう!それでいいの!!もっと激しく、もっともつとよ!」

いやいや、激しすぎて、頭痛くなってきたよね、みんな。先生、周りをよく見よう。地面に馬鹿らしく頭ぶつけてる、マヌケな連中が見えてくるから。

「もう、瀬川君!?何突っ立ってるの?あなたもやりなさい!!」

「はあ?」

あ、ヤベっ!!先生に対して、敬語使うの忘れた!!!

「Sのちょっとしたプライドなんて、捨て去りなさい!!Sを忘れて、Mとなるのです!!」

絶対、いやだあああああああああああああああああああ!!!

俺がSを捨てたら、この物語、どうなると思ってるの!?!この物語から、Sという存在が消えたら、どうなるか分かってるの!?

「さ、あなたも構えなさい」

いやいや、それ、構えるって言うけどさ、逃げるためじゃね?

「……さあ、どうしたの?Sを捨て、Mとなりなさい!」

だーーーーかーーーーーらーーーーー!!!
!! (激怒)

聞けよ先生、心の中で言うけど、聞けよ?

「え？」

「さよなら、みんな。さよなら、M馬鹿先生」

「Mじゃないわ！！ドをつけて！！」

そんな叫びを背中で聞きながら、俺はその部を去って、帰宅部となりました。

……この選択、正しかったよね？

27、ノリは軽めで!?

ま、まあ、いつも通りにいろんな事があって、よく生き抜いたと自分を褒める。そうしないと、人生という名の道を、今にも踏み外してしまう気が……はあ。

「ダーリン！会いたかったわ！！」

「会いたくなかったわっ！！」

もう、必殺技のグーパンチ。モチ、顔面狙いで。ストレートに、こう、グイッと！！

「そ、そんなへボい攻撃、全然……効いてるわよ」

「効いてるのかよ！！……ていうか、ベタなツツコミさせんじゃねえよ！！」

「いいじゃない！！ベタな事言っただから、無駄な抵抗はよし、はつきりと私を痛めつければいいのさ！！おーほっほっほ！！！！」

「ウゼエよ、意味わかんねえよ、死んで欲しいよ！」

「そうよ、もっと激しく蔑みなさい！！そして、私を強くさせるのよ！」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……私は誰？瀬川？」

「たった数行で、自分を見失うなあああ！！！！」

「え！？そう言うダーリンは、見失わなかったの？」

「……」

「見失ったの!？」

「オーバーリアクションすんじゃねえよ！！んだよ、イライラす

るんだよ!!」

「……え、いや、うん。べ、別にいいのよ、うん、そうね……うん、気にしてえ……ないから」

「気にしてんの丸分かんんだよ!!」んだよ、何なんだよ! 動転しすぎて、『い』の字が一個多いんだよ!!」

「え!?! 嘘!?! わ、私とした事が……。森野美咲、一生の不覚」

「じゃ、切腹で」

「え!?!」

「切腹一本はいりまあす!」

「そんな軽いノリでOK!?!」

「いんじゃない? そういうもんだよ、何事とも」

「……どこから出てきたの? その日本刀……」

「ん? これか? 校長室からパクツた」

「いつ!?!」

「……そういうのさあ、作者的にはめんどくさいんだよ、説明とか。俺が言わないといけないし、もうしゃべる気なんてないのに、メッサしゃべらされてんだぜ? もうめんどくさいって言うか、主役交代? みたいな?」

「え? ちょ、ちょ、ちょ待てよ!!」

「『ちょ』が多すぎだよ!! バカッ!!」

「バ、馬鹿でいいわ。でも、主役交代なんて、させないわ!!」

「いいじゃんよ、作者のノリで、その場を乗り切る。それ、小説家として、当然の事だよ? 分かってねえなあ」

「それって、……下弦だけじゃ……」

「細かい事は気にすんなって。ハゲるぞ!!」

「え!?! 本当!?! 愛しのダーリンより早くハゲるなんて、嫁としてありえ……」

「まだ嫁じゃねえ……!!」

「まだ!?! まだって言った!?! まだって言ったよね、今のシーン!?! まだって言ったよね!?! まだって……」

「しつけれよ！！無駄なところで行を使うな！！もったいないだろ！！」

「まだって……まだって……」

「んだよ、はっきり言えよ。告白できない、中学2年生か？」

「一つ年上ね」

「どうだっていいところにツッコんでくるな！！この、精神的ツルッパゲ！！」

「ハゲてない！！まだ、サボテン的なものぐらい生えてるわ！！」

「どこの砂漠の話だ、アホ！！ゴビ砂漠か？それともサハラ砂漠か？え？？」

「そんなせまっこいところじゃないわ！！その砂漠は、私の心そのものよ！！」

「あっそ、じゃ、頭、お大事に」

「怪我してない！！どこもおかしくない！！」

「おかしいだろ？頭のネジ、何本抜けてると思ってんだ？」

「またあゝ、変な事言っちゃって、ダーリン。頭にネジなんてないのよ、ダーリン」

「……喻えすらもわからねえようじゃ、お前、終わったな」

「まだ終わらない！！この作品は、私とダーリンがけっこ——」

「そっちじゃねえ————！！！！」

こういう時は、やっぱ、グーパンチ！！

「最後まで、ちゃんと言わせてくれたって、いいじゃない！！」

「どうせロクな事いわねえだろ。んな事お見通しだったの！！」

「まあ、そんなに私の事見てくれたのね」

「勝手に妄想して、そのまま死ね！！！！！！！！」

「何で妄想して死なないといけないの！！せめて、あと五年は生きさせて！！」

「短けえなあ、おい。そんな短くていいのかよ……」

「え？そう？？じゃあ、あとダーリンと——」

「不可能です！！絶対、純度1000%に無理です！！！！」

「せ、1000%って……どんだけえ」

「こんだけえ」

「ていうか、まだ何も言ってな——」

「あゝあゝ♪川の流れのよおにいい♪」

「何！？その古い誤魔化し方！？それでもダーリン！？」

「だって、ダーリンじゃねえもん。瀬川慎吾だもん」

「そんな可愛いダーリンもす・き」

「死ね」

「何その即答！！」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……で、ここしゃべるのって、俺？」

「……わ、分かんない……」

「ちっ、使えねえな」

「ダーリンのためだったら、あの行の所、なくしてあげる！！」

「おい、たまには作者の身を案じろ！！ネタがあんまり浮かばなくて、ちょっとしたうつ状態にあるんだぞ！？受験生なのに、ヤバくね？てか、こんなの書いてないで、勉強しろよ」

『いいんだよ、どうせ面接だけなんだから。それにさあ、はつき

り言って、勉強とかマジかったるくね?』

作者————!!!!!!

そ、そんな投げやりな!? いいのかい、それでいいのかよ!! お前の人生!!

『いんじゃない? 考えるのめんどくさいし、働きたくないし』

……こういうのが大人になるから、社会にニートが溢れるんだな……。

『まだ、ニートじゃない』

いずれニートになるであろう、この馬鹿を、皆様よろしくお願いします。

「そうだ、そうよ!! ダーリン!!」

「んだよ、ウザってねえな。せっかく終わらせようと思ったのに

……」

「まだって事は、私と結婚する可能性が——」

「話題が古う——————い!!」

必殺グーパンチで、今日もお別れしましょう!!

~~~~~  
バイバイ、俺の青春！！バイバイ、作者の前期試験！！アハハ  
~~~~~  
(泣笑)

28、人の話は聞きません!?

「ねえダーリン。スウィートホームは、どこに建てる?」

「建てねえよ、そんなもん。てか、お前のダーリンじゃねっつの!」

「じゃあ、私の王子様?」

「んでそうなるんだよ?」

「だって、私は、……私は、ダーリンの奴隷ですもの!!」

「あっそ。奴隷になりたかったら、世界100周してワンと吠えな」

「……え?」

「え? じゃない、ワンだ」

「……それって、無理っぽくない?」

「そうか、無理だよな、無理って言ったよな!? じゃあ、俺に付き纏うな、この雌ブタが!!」

「ああ、心地いいひ・び・き」

「ハートマーク付けんかって言ってるんだろおがぁー!」

サブバックで顔面強打!

笛とか折りたたみ傘とか入ってるから、結構痛いだろ!! ハハハッ!! ざまあねえな!!!

「……ま、前にも言ったでしょ? ダーリンの愛のムチが――」

「ダーリンって呼ぶな――!」

木刀で頭を強打!!

「いってえ!! 想像しただけで、いってえよお!!! 弁慶が泣いちやうよ……。」

「それが、私の生きる糧と……な、る」

「いや、生きる糧になってないみたいだよ? 何だかもう、ザ・リン○みたいになってるよ? 井戸から出てきてる途中だよ?」

「……ダーリン、私は、もう、だめみたい……。私の分まで、強く、強く生きて」

「ああ、いいよ。お前さえいなくなりゃあ、俺の世界はバラ色に変わるからな」

「……私がいる時は？」

「きたねえドブ色。てか、もう汚すぎて、目が汚れてきた。ちょ、おまえさあ、半径100メートル離れろよ」

「え？」

「きたねえんだよ、お前の存在そのものが……！てか、嫌いなんだよ……！大っ嫌いなんだよ……！あっちいけ、バアカ……！」

「酷い！酷いわ、ダーリン！そんなに愛していたのに、今まで黙っていたなんて……！」

「愛してねえし……！愛したくねえし……！存在して欲しくないし……！！」

「ふふ、不器用なのね、ダーリンは。ホントは私が大……」

「それ以上言ってみろよ？あん……？ガスバーナーでじっくり狐色になるまで炒めてやるよ」

「炒めないで、痛めつけてください……！」

「お前、ホントドMだな……！」

「それよ、その勢いよ……！ダーリンは、そうでなくっちゃ……！」

「ダーリンじゃねえっの……！」

「そのツツコミは、もういいわ……！さあ、次は新しく、下の名前前で呼び捨てよ……！」

「馬鹿」

「……？」

「お前の名前、馬鹿だろ？え？ひょっとして、違った……？」

「それ、素？」

「ああ、素だよ。俺はいつでもSだぜ？」

「……S……じゃ、なくて、素？」

「そうだったってんだろ……！」

「じゃあ、私の名——」

「森野馬鹿」

「森の馬鹿?？」

「ちげえよ。森野馬鹿」

「森のかば?」

「ちげえっつの! 森野馬鹿!」

「海苔の馬鹿?」

「何回言ったらわかんだよ!!! 森野馬鹿!!!!!!!!!!!!!!」

「……本気で、そう思ってるの?」

「本気と書いて、マジでしょ」

「マジで??」

「マジで」

「本気で??」

「本気で」

「うっそおん!!!!」

「何が嘘だよ!!! どころ辺が嘘なんだよ!!!」

「今まで言ってきた事全て!!!」

「んな馬鹿な話あるかよ!!!」

「馬鹿よ、そうよ、私は馬鹿!!!! でも、名前まで馬鹿じゃないわ!!!」

「馬鹿だろ!!! どっからどう見ても、存在も言葉も生きている事も馬鹿だ!!!!」

「酷いわ!!! もっと、もっとダーリンは私を愛してくれていると、思っていたのに!!!」

「勝手な妄想してんじゃねえよ!!! 誰がお前なんか愛するか!!! 地球が月になるほどありえない!!!」

「ツツコミが分かりにくいわ!!!」

「それはお前が馬鹿だからだろ!!!!」

「読者様もきっと思ってるわ!!! 普通、太陽系から外れるじゃね? 的な事考えてるわ!!!」

「違うね!! 地球が公転しなくなるってことか、スツゲエな。だよ!!」

「五月蠅い!! そこ、ちょっと黙りなさい!!」

「そっちこそウゼエんだよ!! てか、お前誰だよ!!」

「誰ってお前——!!」

「失礼よ、ダーリン!! アレは、銅像でしかないわ!!」

「銅像じゃねえよ、人間だよ!!」

「ははあ。どうりで堀が深いんだあ……」

「感心するなあ!!」

「銅像は黙ってなさい!! ここは、人が生きる所よ!! 銅像は銅像らしく、庭にでも建ってなさい!!」

「いや、だから——」

「馬鹿だろ、お前。銅像が歩ける訳ねえだろ!! 何言ってるだよ、バカッ!!」

「馬鹿でいいわ!! ダーリンのお傍に居られるなら……」

「何気にキモい事言うんじゃないよ!!」

「お前ら!! 人の話を聞きなさい!!」

「銅像風情が人様に向かって何言ってるんだよ!! 銅像は銅像らしく無表情で池の近くにでも建ってろ!!」

「だから、銅像じゃねえよ!!」

「じゃあ何? 何な訳? 二宮金治像?」

「惜しい!!……って、そう言う事じゃない!!」

「じゃあ、しょんべん小僧?」

「お前たちは、像から頭を放しなさい!! 私人間だよ!!」

「はあ!! 何言っちゃってるの!!? お前、どっからどう見ても銅像じゃん!!」

「はあ? 何を言っているの!!? あなた、どこらへんが人間のなのよ!!」

「お前たち!! 先生に向かって、その暴言!! 罰を受ける覚悟は——」

「はあ！？先生い！！」

「どっからどう見ても、あなたは銅像でしかないわ！！」

「ていうか、それ以下！！！！」

「し、失礼だぞ！！お前たちは、私を何様だと――」

「だあかあらああああ（激怒）」

「どっからどう見ても、銅像だろおがぁ――！！！！」

登校指導中の先生（家に帰ってから、気付きました）を、思いっきりグーパンチ！！

ヤバくね？これ、ヤバくね？？不良少年みたいじゃね？？成績落ちんじゃね？？

「ふんっ、人の会話にのこのこと首を突っ込んでくるのがいけねえんだよ、銅像が」

「はんっ、人の恋路にのこのこと首を突っ込んでくるのがいけないのよ、銅像が」

「どのへんが恋路だコラー――！！！！」

最後に森野にも一発きつめにグーパンチを入れておきました。まあ、効き目はないに等しいんだけどね……。

29、壊れたSの独り言!?

そろそろ、『平凡』という名の日が欲しくなっている、瀬川です……。

だってさ、あらずじにはさ、『平凡な』とかは言ってるくせにさ、全然平凡じゃなくね？ていうか、平凡って何？平凡って何なんですか？私は誰ですか！？

……ちよつと壊れ気味だけど、ホント、平凡が欲しいです。平凡募集中です。カモン・平凡。レッツ・平凡！

「みたいなの？　もう、ホントに平凡に飢えてます。ああ、愛しの平凡。ああ、平凡。懐かしいよ、君が。帰って来ておくれ、へいぼおー」

……また少し壊れたけど、ホント、誰でもいいから平凡をください。世界の中心で、平凡と叫んじやいますよ？それでもいいのか、コノヤロー！！早く平凡よこせつつつてんだろおがぁーーーーー
！！ホントに、いや、ホント、え？いや、本当にさあ、マジで、あの……平凡をくれえーーーーーー！

また壊れちゃったけど、ていうか、もう完全にショートしちゃってるけど、俺の気持ちは本物です。嘘も偽りもない、まっさらな心です。多少の汚れは気にしないでください。気になったら、綺麗なタオルとかで拭いてもらえると、結構嬉しかったりして。

今、平凡を欲します。

ああ、ホントに平凡ほおしい！！もう、マジで欲しい！マジで欲しい！！マジのマジのマゾで欲しい！！……あれ？一つおかしなのが混ざったような……。ま、いっか。

あゝあゝ。誰か平凡くれないかなあ。ていうか、主役変わっ

……って、思ったけど、もう、作者、死んでるようなもんだからなあ。なんか、面白くないところでいきなり笑い出したり、急に『ピーナッツって、結構美味しいよね』的な発言多くなったし、『アレ？ 今日って、水曜じゃなかったっけ？ ヤベッ！ 火曜なのに、水曜日課持ってたよ』的なマジボケしたし、『一ヶ月にさあ、32日ある日ってあるよね』って変な事言って、まわりをドン引きさせたし……はつきり言って、もう終わってるよね？

……はい？ 何ですか？ 全部本当ですか？ 本当ですよ、もちろん。だって、作者は馬鹿ですから。

え、いや、ホントマジですって。マジで、というか、本気で一ヶ月は32日あるって思ってたんですよ。最高でも31日なのに、『一月って、32日まであったよね！？』って、友達に言ってたんですよ！？ マジで引かれて、一人ポツツーンッてしてましたもん！……あ、俺はその衝撃の瞬間を見れなかったんですよ。マジ残念……。

あ、なんか、雑談で終わっちゃいそうなんですけど。

というか、俺は何を今まで話してましたか？

というか、何の話をしようとしてたんですか？

というか、『ていうか』って使いすぎじゃないですか？

というか、俺は誰ですか？ ここはどこですか？ 今何時ですか？ お腹空きました……。

また壊れかけちゃいましたけど、これ、作者のせいなんです。なんか文句があったら、思いっきり作者にぶつけてください。デリケートな性格してますけど、そういうのには、打たれ弱いんで……って、それじゃダメじゃん！！

でも、気にせず当たっても、皆さんには何も来ないんで、大丈夫だと思いますよ。多分。

文句とか言っても、自殺とかしようとしなから大丈夫ですよ。

多分。

とりあえず、ネタが切れてきたんで、わき道それてるんですよ。

確実に！！

って、またわき道それてるし。話がもう尽きてきたころでしょ？
だからもう、作者も自暴自棄（？）みたいな……？

ま、まあとりあえず、そういうのはほつといて……。本題に入りましょう。

……本題って、何でしたっけ？

ああ、平凡が欲しいって言う奴ですね。確かに欲しいつすよ、平凡。もう、喉から足が出るくらいに。……え？違う？どこが？？

とりあえず、一つ言える事。それはですねえ……

ギブ・ミー・平凡！！！！！！！！

以上です！！

もう、物語なんて関係ねえ！！

規則が何だ！法律が何だ！政府が何だあああああ！！！！！！
俺あやってやるぜ、ああ、やってやろおじゃねえか！！

平凡王に、俺はなる！！！！

この手で、平凡というレジャーをハントしてやる！！

ハハハ！！見てろよ、世の中の下僕どもが！！！ハハハハハハハ

ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
!
!
!
!

最後に（これ、本当に最後）一言……

平凡を、俺にくっさあ――――

いっ！！

29、壊れたSの独り言!? (後書き)

……最終的に、主人公を壊してしまいましたが、これからもなにとぞ、なにとぞ、『ドSな俺と、ドMなアイツ』をお願いします。ホントに、お願いします！

お願いですから、見捨てないでください！！ホントに、その手を離さないで！！

30、面倒な双子!?

まずはじめに。

この前の話、すみませんでした!! いや、壊れてたって言うか、酔っていったって言うか……。おやつに食べたチョコレートが悪かったようで、……。その、なんていうか……。とりあえず、すみません!!

もう、チョコレートは食べません! 和菓子一筋に生きていきます!! 洋菓子反対!! 和菓子万歳!!

お酒なんて……。お酒なんて……。クソくらえ—————
—————!!

……。アレ? チョコレート、あんま、関係なくね??

……。と、うつぶんを晴らしてスッキリしたところで、本題に入ります。

今日は久々の休日に感じる、休日です。こういう時は、ゆっくりするのが基本ですよ。ベットの横になって、ジャ○プとか読んだりして……。ねえ。

なのに、来ちゃったんですよ。やつは。

……。って言っても、森野じゃないっすよ。森野の次の次の次くらいに嫌いな奴らです。ていうか、嫌いですが、大っ嫌いですが、存在破棄です!!

「信吾にいちちゃん、遊ぼうよお」

「シドニーちゃん、遊んでよお」

かたつぽ、惜しい! 字が違う! よく分かりにくいけど!!

もうかたつぽに至っては、全然ちゃうから!! 誰だよ、シドニーって! 俺は都市か!!? シドニーオリンピックク再びか!!?!!?

「夏藍^{からん}ちゃん、私が先よ」

「夏鈴^{かりん}ちゃん、私が先よ」

読者のにはどっちがどっちか、わからねえよ。

「ねえ、慎吾にい。あそぼお」

「ねえ、ねえ、あそぼお」

「……しつこいっ!!」というか、揺さぶるな!! 字が揺れて漫画が読めねえだろうが!!」

つて言えたらいいけど、相手は幼稚園生……つ、強く言えねえ。

「ねえ、慎吾にい。あそぼったら、あそぼっ!!」

「ねえ、慎吾にい。おままごとお」

「それ、私とやるのよ、夏鈴ちゃん」

「私もやるの、夏藍ちゃん」

だから! どっちかわからねっての!!

……って、俺が紹介すればいいじゃん!! 何で今更!! というか、何でこの俺が!!

「あそぼお」

「アシモオ」

……やっぱりかたっぽ、どこかずれてるし!!

「あそぼったら、あそぼ!!」

「アシモったら、アシカ!!」

またずれた!!

非常にめんどくさいし、やる気がないんですが、一応紹介します。
いとこの涼村^{すずむら} 夏鈴（ミスらない方）と、夏藍（よくミスる方）です。
ちなみに、一卵性双生児です。

「夏藍? お前が、夏藍だよな?」

一応確認。指差すのは、よくミスするほう。

「そうだよ、しんどい」

……それって、自分が? それとも、名前をミスった??

「夏藍、さっきから『遊ぼう』を、アシモとかアシカとか言うてるぞ」

「え?」

「ねえ、夏藍ちゃん。私の言ってた通りでしょ?」

偉そうにしてるのが……えっと、夏鈴か。

「りいやいかああ」

あ、左が夏藍だ。てことは、右が夏鈴か。

「……」

「遊ぶのは、私だよ、夏藍ちゃん」

「違うよ、あちきだよ、夏鈴ちゅん」

「私なお！」

「明日だってばあ！」

「私ったら、私なの！！」

「アサリったら、シジミなの！！」

「……口喧嘩はやめなさいってば」

優しく言ってみるけど……

「私が先！！」

「私が紗紀！！」

紗紀って誰！？

というか、聞いてねえし！人の話！！

「人の話を聞かない子とは、遊ばないよ！！」

なあんて嘘だよ！！人の話し聞いても聞かなくても、遊びたかないよ！！てか、絶対に遊びたくない！！でも、静めるにはこれしかない！！これ、長年（？）の知恵！！

「夏鈴も、夏藍も、人の話を聞かないなら、兄ちゃんは遊ばない！！」

ウツワ、ハズかしい！！自分を自分で『兄ちゃん』って、……ハズかしーーーー！！穴があったら、入らせてください！！お願いします！！！！

「……じゃあ、仲良くする」

「……中野区住む」

中野区住む！？何でそんな単語が、間違いだからって出てくるの！？

「……じゃあ、仕方ない。約束だから、遊んであげるよ」

「ヤッター！！」

「ハッカー!!」

ハッカー!?

ちょ、ちょ、ちょっとそれは流石にヤバくない!!?

だ、誰かぁ!! この子危険です!! 爆発物処理班的な人達、呼んでくださぁい!!

って事で、結局遊ぶ事になりました。

これだから、年下は嫌いです。疲れました、もうおやすみ。
そして、逝ってきます……。

30、面倒な双子！？（後書き）

気付けば、もう30話目……。そろそろ終わりにしてもいいんじゃないかなあって、最近思い出した今日この頃。

流石にもう、飽きたんじゃないですか？流石にもう、『なっげえんだよ、終われよ』とか言いたくなるんじゃないですか？

ちがかったら、ちよっぴり嬉しいですよ。いや、心から嬉しいですよ。マジで！

公立の受験発表が近い為に、ちよっとネガティブ入ってます……。そして、そのせいでネタも練れません……。受験のせいじゃない可能性もあるんですけどね。あ、恋病とかは絶対ないんで、そこら辺は心配いりません（笑）

なんか中途半端だけど、30話目って事で、あとがきを長々しく書かせてもらいました。ホント、愛読者の方、ここまで読んでくださった方、有難うございます（ぐすっ）

どうにか受験という壁を乗り越えて、これからも頑張っていこうと思うので、嫌いにならないでください。そして、応援よろしくお願いします m（＿）m

31、学んだS!?

疲れた疲れた疲れた疲れた疲れた疲れたつかれあ、って、舌噛んだ。

……どうも、疲労困憊のそれでも中学一年、瀬川です。

あゝ、もう。どうしようもないほどに疲れました。ていうか、疲れさせられました。やれままごただ、やれ電車ごっこだ、やれ絵本読んでだ……これだから、チビどもは嫌いなんだよ。あゝあ、この世からウザいチビさんを消してくれないかなあ。

「ダーリーリ、リーリーリーーン」

前言撤回、この世から、ウザい人物全てを消してください、神様！！

「んだよ、へばりつくな、カスが！」

「ガスでも数でもスカでもいいから、このままでいさせてえ」

「嫌です、離れなさい。ていうか、触れるな」

「やだあああ。ダーリンに触れてないと、私、生きていけません」
「！」

「家に帰ったあとは、どうすんだよ、ボケ」

「……そ、それは……あ、あのですねえ、……と、とうさ……」

「とうさ……まさか！お前、また俺を盗撮したのか！？」

「はい、ムービーで！」

ニッコリ笑顔で、嬉しそうによくもまあ、そんな事がいえるな。

「てか、なんでムービー？どのタイミングで撮った??」

「……昨日、可愛いところさんと遊んでいるところを、ちゃっかり」

「消せえええい！！いますぐ、それを消せえええい！！」

「嫌よ！これが私の生きる糧なんだから！！」

自慢気に取り出したテープを、モチ、叩き割る。

「ああ！なんて事するの！？私の宝を！！」

「誰の許可得てこんなの撮ってんだ？コラ。今度こういう事をやってみろ、地獄に送ってやるよ」

「今すぐやるんで、お願いします！」

「俺をなめてんのかああああ！！」

しつこいハエを、叩き潰す。って言っても、頬をつねるだけ。

……アレ？叩き潰してなくね？？

「いふぁいてふ！いたいふえふう！！」

「この口でそんな事を言うか！その口、二度と利けないようにしてやる！！」

「なんふえ！？」

「ストーカーに、神の鉄槌を！！」

「やふえふえええー！！」

と、言いつつ、嬉しそうなのがウザい。まじめにウザい、心からウザい、心から消えて欲しい。てか、消えろ。

「いふぁひ！いふぁひてふ！！岐阜です！！」

「岐阜！？」

「あ、まひはへた。ギブでふ！！」

どこでどう間違った！？何故にギブが岐阜になる！？お前の脳を解剖しないと、解けない謎が多すぎるよ！！

「いったあい。これが、ダーリンの愛のムチなのね♪」

「もっぺんやられたいか？？」

「はい！！」

「……こいつに常識でモノを言うんじゃなかった」

「そうよ、私に常識なんてないの！！私の常識は、ダーリンが――」

「それ以上！言ったら何が起きるか分かるかなあ、森野君」

「……はい、先生。もう（多分）言いません」

「ちっさい声で多分って言ってるの、聞えてるからああ！！」

「すみません！すみません！！もう、一回だけ言って終わりにします！！」

「いっぺん死んで見るか？もしかしたら、俺が振り向くような女になれるかもよ？」

「ホント！？……って、いや、嘘です！！死にたくありません！私は死にません！！」

道路に突き出そうとする俺に対して、へばりついてくる馬鹿。…ちっ、しくじったか。

「……ねえ、今、心の中でしくじったって」

「……」

「しくじったって、言ったよね？今、言ったよね？？」

「……」

「無視しないでよ、愛しのダーリン」

「……」

「もう、分かってるんだぞ。三回『……』が続いたら、話してくれるって」

「……」

「……あの、記録の更新とか、そういうのしなくていいのよ？ダーリン」

「……」

「愛してるわ、ダーリン。だから、あの、ちょっとでいいんです、はい。言葉を発してくれませんか？」

「あ」

「……へ？」

「……」

「た、確かに『あ』も言葉だけど、あの、私一人でしゃべってる可悲しいんですけど。ものすっごく、恥ずかしい気がしてきたんですけど」

「……」

「そろそろお、お話再開しましょっか、ね？？」

「……」

「再開しましょッカー……なんちゃって」

「……」

「あ、あはは！お、面白いなあ！私って、本当に天才かも！！アインシュタインの孫かも！！」

「……」

「嘘です！ごめんなさい！！くだらない、親父的な発言しちゃって、なんか、あの、なんていうか、えっと、その……すみませんでしたあ！！」

道路に土下座する馬鹿。それを左へ受け流すうゝ俺。

「あの、ムディーさんやらなくていいんで、私と話してくれませんか？」

「……」

「ねえ、ダリーンのツツコミがないと、この話は成立しないのよ！」

「……」

「ねえねえ、ダーリン」

「……はあ……」

「はあ、……のあと！そのあとが欲しいの！！ねえ、言葉を、我に言葉をお与えください！！」

「……」

「あの、雲とか見なくていいんで。今日、快晴なんで、雲ないし」

「……」

「いや、雨も降らないって、ダーリン。そんな仕草しても、降らないものは降らないのよ、ダーリン」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……あゝもう無理！もう、この放置プレイにはたえられませんか！！」

「……」

「お願いです、瀬川様！いや、瀬川帝王様！！その清々しいお声を、どうかお聞かせください！！」

「……」

「瀬川様あ！！もう、盗撮も何もいたしません！引っ付いたりするもの、我慢します！！ですから、どうか、どうかこの森野めを許してくださいまし！！！！」

ヒステリックな森野を一人捨て置き、俺はスタスタとその場を去った。

こうして俺は学んだ。馬鹿は放っておけば、自滅すると。

……今度から、あんまりしゃべらないようにしいよおっと！ハハハ！！（黒笑）

32、お弁当は大切に!?

「ダーリン!一緒に弁当、食べましょう!!」

「ウツサイ、近付くな。お前はそこら辺の女子と食ってろ」

「嫌よ、ダーリンと食べなきゃ、お弁当を食べた気になれないわ」
「じゃあ、食うな、永遠に」

「永遠に愛を誓う?……もう、こんな所で、照れるじゃない」

「何勘違いしてんだよ!!気持ち悪いんだよ、クソ馬鹿!!」

……どうも、休む暇を与えてもらえない瀬川です。何故、今の状態になったのか、ちよつくら説明します。

今日は、学年の親睦を深めるために、遠足(?)的な事にする事になって、弁当を持参しました。以上!!分かりにくいかもしれないけど、説明的な事は嫌いなので、何とか理解してください。

え?無理??何とかかりますよ、多分。……絶対に無理??仕方ないなあ、説明しますよ、分かりましたよ、説明すればいいんですよ?説明すれば!!

今日は、近くの公園……といっても、ただの公園じゃなくて、自然公園って所に来てます。そこで遊んだり弁当を食べたりする事で、学年内の親睦を深め、絆を強くするためにこの計画を立てました!って、実行委員長が言っていました。確か、……こんなんだった気がする。

「ねえ、ダーリン!一緒に食べよ!」

そのため、クラス関係なく弁当を食う事が許可されてる。その為に、この馬鹿はしつこいんだ。

「やだっつってんだろ?俺は、小橋達と食うの」

「じゃあ、混ぜて」

「ヤダ、ほな、サイナラ」

「ちょ、即決!」

「そうですけど、何か問題でもおありで?」

「おおありだわ！せつかく愛妻弁当持ってきたのに……」

「ンなもん、持ってくんなぁー！ー！ー！」

「きゃぁ！何するのダーリン！？ドメスティックバイオレンス、再び！？」

「ウザい、黙れカスが」

「カスじゃない！まだ、食べかすじゃない！！」

「その事言ってんじゃねえよ！！」

「じゃあ何！？私が作ったお弁当、食べてくれないって言うの！？」

「当たり前だろ！？誰がお前なんか作ったもんを食うか！！俺には、母さんが作ってくれた、弁当があるんだよ！！」

「マザコンマザコンマザコン！！」

「デ○ノートよ！今こそ降ってくる時がきたぞ！！さあ、来い！来るんだ、○ユーク！！」

「ごめんなさいごめんなさい！もうしませんから、死神は呼ばないで！！」

「リアリ？？」

「リアリ」

「なら、この場から去り、絶対に近付くな」

「それは無理であります、軍曹！！」

「だあれが軍曹じゃ！！」

「す、すみません！！でも、こんな事しちゃいけません、軍曹。みんな噂してるんですよ？私達、できてるんじゃないかって」

「お前が勝手に近付いてくるからだろおがぁー！ー！！ていうか、コレのどこが仲良くしているように見える！？そう思った奴らの目は節穴か！？」

「いえ！！巢穴でございます！！」

「なんのだよ！！」

「……ツバメ……的なの？」

「テキトーに答えてんじゃねえよ！！ていうか、考えるなら、言

わんでいい!!」

「はい、瀬川一等兵!!」

「おい! この短期間で何があった!? 一気に位が下落したぞ!」

「気ニシナーイ」

「勝手にパクるな!! せめて、許可を得なさい! 許可を!! ていうか、お前が言うとか、かなりムカつくんだけど!!」

「もっとムカつきなさい! そして、私をいじめてください」

「小橋い、飯食ったら、何する??」

「え? ……アスレチックで遊ぶとか?」

「いいなそれ」

「じゃ、早く食っちゃおうぜ」

「いきなり放置プレイ!? しかも、二人で!」

「なあ、アスレチックって何だ?」

「アスレチックは……アスなレチックだ」

「そうか、分かった。流石小橋。物知りだなあ……」

「ねえ、ダーリン!? 今ので何が分かったの!? ハッキリ言って、何も分かってないじゃないの!!」

「……小バエがウゼエな。ちよつと退治してくらあ」

「お、おう……」

シートを敷いたりするのは小橋に任せて、馬鹿クソ森野と向き合う。……キモい。

「やっとダーリンは私を見てくれるのね!! これからも、末永くお願いします!!」

「勝手に話を進めるな」

「……今日のダーリンは冷静なのね」

「腹減ってるからな」

「なら……」

「なら?」

「抱きつきのチャンス!!」

抱きつこうとしてきたハエを、

「甘い!!」

と、一喝。そのまま、突っ込んできた勢いを使って、腹にストリートをかます。どうだ!参ったか!!

「……な、内臓的なものが出てきそう……」

「どんだけえ!？」

「そ、そんなダーリンも、だいす、きよ。……私がいなくなっても……」

「シート敷けたぞ、瀬川。早く弁当食って、遊びに行こうぜ」

「おうよ!!」

「……あれ？」

森野完全無視で、自分のシートに座り、弁当の包みを開く。

おお♪流石母さん♪俺の好きなもんばっかじゃねえか♪

「あのお、ダーリン、無視ってやつですか?これは」

「お、お前の美味そうだな」

「やらねえぞ」

「……ケチ」

「ケチで結構、大いに結構」

なんて話しながら笑って、森野再び虫。……じゃなかった、無視。

「私の愛妻——」

「おお!うっめえ!!さっすが母さん。料理の腕は、ミツチエル

さんを超えるよ」

「誰でも超えられるよ、あの人料理なら……」

「あ、確かに」

「お前、あの人料理を甘く見ちゃあ、いけねえぜ」

「お、お前の弁当も美味そうだな、狩^{かりん}憐」

「一口、やろうか？」

「一口と言わずに、もつとくれよ♪」

「ダメだ。それ以上食う気なら、もうやらん」

「ゴメン、誤るから、大地の恵みを恵んでおくれ♪」

「ホラ、玉子焼きやるよ」

「あざあつす！」

「……」

弁当持って、孤立中の森野。やっぱり馬鹿は、無視に限る。
ていうか、弁当ウマウマ♪♪

「美味しいねえ、お弁当♪」

「って、何故にお前が混じってんだよ!!」

水筒パーンチ!!アソパソマソ風。

……たまに、こういう風に『ン』が、『ソ』みたいになってる人、
いるよね。その一人、俺だから。

「酷いわ、ダーリン!! さっきの一撃のせいで、弁当がグチャグ
チャだわ!!」

「自業自得だろ」

「……もういい! ダーリンのお弁当もらうから!!」

「誰がやるかよ!!」

「ええ!?! くないの!?!?」

「ったりめえだろ!?! くれると思ってたのか、この小バエが!!」

「だって、だって! 私は貴方の――」

「俺はおめえの、何?？」

あんまり怒気を効かせて言ってる訳じゃねえけど、みんなが一歩
引く。

一人だけの例外、それは小橋だった。当たり前だとも言いたげに、
黙々と弁当を食ってる。……いいなあ、幸せそうで。そういうの見
てると、崩したくなるんだよな。うん。

「あ!!」

「いっただきい♪」

隙を突いて、から揚げゲッツ!! (笑)

「何が (笑) だ!! ふざけんなよ、コラ!!」

「俺に逆らう気? お前、いつからそんな力得たの??」

「すみませんでしたあ!!」

再び周囲が一步引く。……あ、シートからはみ出してるぞ。

（この食い物の怨み、いつか晴らしてくれようぞ）

「お前、どこの戦国大名？ 信長か？ 信長なのか？？」

「豊臣です」

「ああ、惜しい」

……何だ、この会話。歴史の勉強？？

って、自分で自分にツツコンでしまった！！ 瀬川慎吾、一生の不覚……！！

「ていうか、人の心読むなよ」

「ていうか、遅くね」

「まあ、気にするな。ていうか、さりげなくから揚げ盗ろうとするな」

「いいじゃんか！ 一個や二個！！」

「もうお前は一個食べただろ！？」

「足りませえん！！」

「だったら、自分の食え、自分の！！」

「嫌であります！！ 織臣 おとみのふひでやす 信秀康様！！」

「誰だそれ！！ 何人混ぜた！！」

「3人であります！！」

「混ぜたの分かってんなら、混ぜんじゃねえ！！」

「気のせいであります！！」

「気のせいじゃねえだろ！？ ていうか、自分でさっき言ってたろ！！」

「ウゼエな、気のせいだったってんだろ？ 黙ってろ、サルが」

「……す、すみませんでしたあ！！」

「くるしゅうない、さあ、わびとしてから揚げでももらおうかのう」

「ははあ！！」

三度、一步引くみんな。もう、シートに乗ってません。というか、半泣きです。……何故に？？

「あゝん♪」

「って、お前はまだここにいたのかよ!!」

「放置されてて寂しかったゾ」

「……さあ、みんな怖がらなくていいから、一緒に食おうぜ」

「お、おう」

「ダメ!!ダーリンは私だけのダーリンよ!!近寄らない——グバァッ!!」

「気にしない気にしない。さあ、食おうって」

満面の笑みで飯を食う俺と、強烈なジャブをくらって、ダウンしてる森野。再び引きかけたみんなが、ゴクンとつばを飲み込んで自分のシートへと帰ってくる。何で、つばを飲むんだ？

みんなが、遠慮気味に、おかずを譲ってくれるのは、何故かな？まあ、美味いからいいけど。

そのあと、みんなが帰るまで、森野は目覚めなかったとき。めでだし、めでたし♪

33、主役変更!?

どうしてこの俺が主役になってしまったのか、事実を知らない小橋です。ていうか、何があったんだ? 急に世界から『瀬川』という人間が消えて、記憶も消えかけてます。どうしてだろう。

あ、よく分からない方は、感想のところ見れば分かりますよ♪
って、何故に作者の声が俺にも聞こえるんだ!? 主役の特権って奴か!?

「……んだ、てめえかよ」

「そ、その声は……」

出たよ、毒舌非情小娘。いや、やっぱり訂正。毒舌非情非常識小娘。……なんか、中国語みたい。

「で、ダーリンどこにやった、コラ?」

「俺に聞くなよ。俺、こうなった理由、一切知らねんだから」

「だったら、お前も感想読め。そしたら分かる」

「……そういう面倒臭そうな事は嫌です」

「読めつつってんだろ?」

「嫌だ」

気を強く持て、俺! 成せば成るって、確か瀬川が言ってた! 確か!!

「……」

「……やっぱ、物足りないわ」

「はい?」

「やっぱ、ダーリンじゃないと、何ていうの? 迫力?? そういうのが足りないのよねえ」

「迫力……? 破壊力じゃなく??」

「一理あるわね」

「……ていうか、じゃ、俺出てこなくても良かったんじゃない?」

「それがダメなのよ。主役がいないと、コレ成り立たないから」

「主役っていうか、ツツコミ役？」

「一理あるわ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「………（焦）」

「そこちがあー………うっ

「……」

「何がちつがあー………うっ

「……」

「（焦）じゃなくて、（怒）よ」

「先生！質問いいですか！？」

「はい、何ですか、小橋君^{こはし}！！」

「『』忘れないでください！なんか、ダサいから！！」

「じゃあ、ごぼじぐん？？」

「君にまで『』付けなくても………てか、付けすぎ！！」

「……ハア、やっぱり足りない」

「何が??」

「愛が」

「ありえねえー」

「棒読み禁止！！」

「嫌であります」

「ダメであります」

「許してでございます」

「サザ○でございますっ！！」

「何かちがくね!？」

「……やっぱり、足りない」

「だから何が??」

「詰め寄る感じ」

「すみませえん！瀬川はいつも詰め寄ってません！どちらかというも」

「それ以上言ったら、殺すよ？」

「瀬川だ！！」

「えっ！？どこ、どこ！？！？」

「いや、言う事が」

「何よ、期待させないで」

「いや、勝手に間違えたのあんたでしょ」

「貴方にハニーなんて言って欲しくないわ！」

「言ってねえし！！」

「……ああ、ちよっとかすった」

「何に？」

「ダーリンの口調に」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ああ、そういう事」

「今の今まで、全然わからなかったの！？」

「YES！！」

「無駄に発音いいわね……」

「ソウデエスカ！？」

「ミツチエルさん！？」

「いや、俺だけど」

「んだよ、やっぱり小橋」

「俺じゃいけない理由があるのかよ！？」

「ハンサムじゃない可愛くない面白くない影薄い使えないパクリ死んで欲しいとか死ね」

「何それ！！俺に対する不満ですか！！？」

「いえ!!作者に対する不満です!!」

「いや、さっきのは明らかに俺に向けられてた!!」

「……モテるのも、辛いものね」

「好きじゃねえし。ていうか、そこまでモテてねえし」

「え!?!」

「だって、コレ事実」

「……ファイナルアンサー!?!」

「ファイナルアンサー。……って、クイズミリ○ネア!?!」

「おお、いい感じ」

「だから、何に對して?」

「……さっき、分かったんじゃない?」

「三歩歩いたら忘れます」

「いつの間に三歩歩いたの!?!」

「ついさっき、立ってたら足が痛くなっちゃって。ていうか、ここどこ?」

「学校の廊下」

「ふゝん。どうでもいいや」

「聞いたのは貴方でしょう!?!」

「そうでショー!!なんつって」

「……」

……寒いね、今の一言。

「作者様ぁー!?!?!」

「下弦だぁ♪」

チャオ、お久さ、森野。元気してる?

「まあ、ダーリンがいないからちよっとブルーだけど、元気!?!」

「どこら辺がブルーだった!?!」

お、ツツコミ上手くなってきたね。まだまだ、瀬川の足元にも及ばないけど。

「てか、俺の役割何?一時的な出演のはずじゃ……」
だって、お気になんだもん♪

「はあ？」

この辺なキャラ達の中で、一番君が好き！！ガラスハート！！

「変なあだ名、付けないでくれません！？ていうか、付けるなよ！！」

おお。いい調子いい調子♪

「どこがどうしてどのようにして！？」

「ここがこういう風な感じで！！」

「どんな感じだよ！？読者の方々、全然分からないから」

「ほっとけよ、そんなもん」

「ひっど！？かなりひどっ！！」

「だって、私とダーリンの恋路には関係ないわ」

「……いや、関係あるんじゃないじゃなくて……」

「何よ、ハッキリ言いなさい！！読者様！！邪魔——」

それ以上言ってみろ！！お前をこの世界から追放してやる！！

「どうせなら追放してください！！そしたらダーリンに会えるわ！！」

「それ目的で今の言っただろ！！失礼だぞ、読者様をダシに使うとは！！」

「気にしないもん！どうでもいいもん！！……グス」

「泣くほど嫌なんじゃねえか！！嫌われるの！！」

「だって寂しいじゃない！悲しいじゃない！！孤独じゃないー！！！！」

「ハイハイ、ソウデスネ」

「何故カタコト！？」

まあ、エエじゃないか。……ズズッ

「茶啜ってないで、ダーリンを帰せ、このエセ作者！！」
「言っただな！！」

「言っただわよ！！何か問題でも！？」

ないけどムカつく！！なんか、腹立つ！！

「おゝほっほっほっほゝゝゝ！！苛立ちなさい、ムカつきなさい

!!」

消しゴムでお前が出てきてる場面、全て消去してやる!!

「ちっさ!! やり方がちっさ!! 小学生低学年並にちっさ!!」
それでもいい、強くなれ。

「何カッコつけてんの!? ていうか、今しゃべってるのどっち!」
「?」

ええ。教えなあい!!

「ウザい!! お前の存在を消去させてください!!」
嫌です♪

「何故に楽しそうなんだよ!!」

楽しいから愉快だからお前らが哀れで涙が出てくるほどウケるか
ら♪

「お前が誰よりもSな気がするよ……」

そうでなきゃ、コレは成立してないぜ!! 俺がこんなだからこそ、コレは成り立っているのである!! ↑チビま○こちゃんのナレーター風

あ、ちなみに『ちっさ!! やり方が……以下略』めんどくさい。

説明が。

「言いかけたのを、途中でやめるな!!」
しゃあないなあ。

で、そこから話してるのは、小橋です。……アレ、小橋だっけ?
森野だっけ?? まあ、どっちでもいいか。

「よくねえわ!!」

「よくないわ!!」

あ、さっきまで俺と話してたの、小橋だわ。思い出した。

「どんだけあなたの記憶力はないの!?!」
こんだけえ♪

「だから、楽しそうにすんなっつうの!!」
いいじゃんか♪

「楽しそうね、下弦♪真似していい?」

いいよ♪

「ヤッター♪有難う♪」

「一応言っとくけど、許可得る前から真似してるから!!」

ツセエな、黙ってる。ガラスのハートして、目立とうとすんじゃねえよ。

「そうよそうよ!ダーリンの代わりに貴方が消えなさい!!」

「それだけのご勘弁を!!……って、俺、何も悪い事してねえんだけど!」

「存在自体が悪」

……かもしれない。

「作者……!!? お気にじゃなかったの!?!」

……何かもう、どうでもいいや。今回はコレで終わりって事で、じゃ。

「じゃ♪」

「それで終わり!?! ホントに終わり!?!」

そう、終わり。

では皆さん、また会える日を、楽しみにしています♪

「最後くらい、『♪』はずせよ」

五月蠅いねえ。追放されたい??

「住みませんでした、神様!!!!」

分かればよろしい。では、本当にさようなら♪

33、主役変更!?(後書き)

次回からは、ちゃんとやりますので、どうかご安心ください！
ちなみに、適当な終わらせ方をしまして、誠にすみませんで
したっ!! 本当に、次回からちゃんとやりますから、どうか、どう
かよろしく願います。

あ、最後に。次からちゃんと主人公、瀬川に帰るので、本当に主
役が変わってしまったのか心配になった方、ご安心ください(笑)

34、無事帰還！？

……ただいまぁー……

のっけから叫んですみません。でも、……ただいまー……
……真っ暗闇のどこから分らない世界から、無
事生還してきましたよぉー……！

もう、寂しかったでしょう！？物足りなかったでしょう！？？
やっぱ、寂しかったでしょう！？！？俺も、（寂しくなかった
けど）帰ってこれで、嬉しいでっす！！

「ダー……り……ん……！」

「甘い！！」

登場しよっぱなから、背負い投げ。一本！！みたいな？？

「ざびじがったぁ……。ものっぞい、ザビエルだったぁ」

「ザビエルってキリスト教かよ！？」

「ざびじぐっで、ざびじぐっで、食べ物もロクに喉とうったぁ」

「意味わからねえし！というか、フツツーに飯食えてんじゃねえ
かよ！！」

「だって、……だって、お腹が減ったんだもん♪」

「一度死ね。そして、帰ってくるな」

「ええ！？それって、一度じゃ……！！」

「問答無用！！」

てな訳で、巴投げ。これまた一本！！みたいな？？

「やっぱり、ダーリンでなくっちゃ♪」

「血い、出てますけど？」

「これくらい、ダーリンのためなら、どうって事ないわ！！」

「……ちっ、もうちょっと強めにやっとかんだったな……」

「あの……今不吉なこ」

「そういえば！！俺がいない間、誰が主役やってたんだよ！？」

「ライオンハート少年」

「そうか、小橋か……って、ライオンハートじゃねえから!! S
○APじゃないから!!」

「やった♪初のノリツッコミ♪」

「何か言ったか、メスブタ」

「いえ! 何も言っていないでござえますだ!! 飼育員様!!」

「そろそろミンチにして、ハンバーグでも作ろうかな」

「す、すみませんでしたああ!! 言いました! 確かに私は何か言
いました!!」

「何だった? ハッキリ言わなかったら、Fall to hell
l.」

あ、『Fall to hell』は、和訳すると、地獄に墮ち
ろデス♪

「I love you」

「照れながら、簡単に嘘ついてんじゃねえええええ!!」

「みぎやああああ♪」

「どこが嬉しいんだよ!!? キモいんだよ!! 黙ってろ!!」

「嫌です♪」

「殺していいDEATHか♪」

ちなみに、『DEATH』は、死って意味デス♪

「ごめんなさあああい!!」

「逃げるな、クソボケコルアアアア!!」

「ははっ♪捕まえてごらんなさい!!」

光の速さで追いついて、跳び蹴り! (背中に思いっきり♪憎しみを
込めて♪)

「獲物捕獲、これより削除作業を始めます」

「いっやあああああ♪」

「あくまで楽しそうだな!? ていうか、やっぱりキモい!!」

「やっぱりって事は、今まではカワイー——」

「それ以上言ったら、首を斬りを落とすぞ」

「またまたあ、嘘なんてついちゃ……ゴ、ゴメンなさいっ!!」
森野が泣きながら誤ってきた理由は、ご想像にお任せします♪

「で、何だったんだ？」

「……は、初のノリツツコミで、う、有頂天になってたんです」
「そうかあ……。じゃ、地獄に逝こっか」

「逝きませええええん!! っていうか、積極的に逝きたくないで
あります!」

「積極的に、黙ってあの世へ逝ってくれえええええ!!」

「へ、ヘルミス! ヘル・ミス・ビー……!!」

「ヘルプ・ミーだろ!? 勝手に新しい単語を作るな!!」

「タンゴ??」

「踊りじゃねえよ!! 単語だよ、タンゴ!!」

「……(照)」

「何照れてんじゃ、わりやああああああ!!!!」

顔面グーパンチ!! ストレートで!!

「だって、ダーリンがタンゴって……あゝ!! ごめんなさい!!」

「それで、何が嬉しいの??」

「ゴメンなさなさいごめんなさいゴメン臭い!!」

「俺が臭いつてかああああ!!」

「間違えました!! すみません!!!! ですから、首だけは絞めな

いでえ!!」

「死ねえ!! はっはっはっはっは……!!」

「笑みがくろおい!!」

「死ね! 死んでしまえ!! この世の中のもの全て(作者も含め)、

死んでしまええい!!」

(天罰♪)

「グハッ!!」

「だ、誰!? 狂ったダーリンに、髪 of 鉄槌を下したのは!？」

(おーい、髪 of 字違うぞ)。正しくは、紙だ)

「そ、それも違うだろ……神だろ?」

(ごめいとおー)

「すごいわダーリン!!」

「……嬉しくねえし。ていうか、また出てきてんじゃねえよ、馬鹿さ」

(鉄槌♪)

「グバッ!」

「ダ、ダーリン!」

(皆様、心配しないでね♪鉄鎚で頭殴ってるだけだから♪)

「鉄槌で殴る馬鹿が、どこにいるかああああああ!!」

(ん?ここ)

「俺を殺す気か!」

(YES!)

「そうなのかよ!!じゃあ、執筆やめろ!!」

「それはいけないわ!!だって、私とダーリンがまだ結び——」

「お前は黙ってろ!!」

ストレートにグーパンチ!!ニ連打!!

「静かになったから、執筆やめろ」

(ワタシ、ニホンゴ、ワカラナイカモシレナクナイカモシレナク

ナイ)

「結局どっちなんだよ!」

(うーん……どっちでもいいんじゃない??)

「日本語バリバリ話してんじゃんか!!」

(ナニカイイマシタ?ミスター)

「……異様なほどにムカつくんだが、気のせいかな?」

(気のせいじゃないと思うよ?)

「じゃ、一発殴らせろ」

(嫌であります♪)

「……(怒」

(鉄槌♪)

「ウグッ!!」

と、言う訳で、主人公達が戦闘不能になったので、これにて終わりです♪でも、最終話って事じゃないので、また会いましょう♪♪
下弦より♪

34、無事帰還！？（後書き）

これからは、真面目に（？）やっていますので、もう主役交代とか、気にしないで大丈夫ですよ。（多分）もう、変えたりしません！
て、言う事で、これからよろしくお願いします！！

35、ちょっとやり過ぎな正当防衛!?

せっかくの三連休の二日間は、まともに休めず、……アレ?いつからか知らない?えっと、主役が無理矢理変られそうになった頃からです。

で、今日に至る。

「うーん……平和って、素晴らしい」

てな感じで、誰もいない部屋でポツンと寝てます。やっぱり五月蠅いのが居ないといいねえ。双子ちゃん達は、母さんと一緒に出かけてるみたいだし。森野が来ないように、厳重に鍵しめたし。あとは、……何かあった気がするけど。まあ、いっか。

「さあて、久しぶりに昼寝でも——」

「添い寝してあげるよ」

「!?!どこから入ってきた、変態親父!!」

いつの間にか現れた、家の馬鹿。いい加減、会社に戻れよ……。

「ホラ、一人じゃ寒いだろ?だから、パパと一緒に寝てあげるよ」

「いいよ!近付くな!」

枕を投げ飛ばし、顔面命中。お見事、俺。

「いいじゃないかあ、パパだってえ、寂しいんだよう」

「お前はハムスターかよ!」

「お前……?お前だと!?!」

ゲッ!怖いわ!!その厳つい顔で怒るなよ!!マジメに怖いから!!

「いつも言っているだろう!?お前じゃない、パ——」

「ZZZ……」

「あれ?慎吾??」

「ZZZ……」

「おーい、慎吾。ツツコミ役が、寝ていいのか??」

「……むにゃむにゃ……」

「……か、カワイイな……」

「……ZZZ」

「今のうちなら、近付いても怒られないよな」

「……しゃんなろーい」

「……どんな寝言だ？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「添い寝チャアンス！」

「……」

「いただきまっす！」

「……………、あまいわ！！」

！！
飛び込んできた馬鹿鳥を、必殺グーパンチ！！モチ、顔面狙いで

「甘いな、狸寝入りだとは気付かないとは……チョコより甘い」

ちよっと痛い手で、こっそりガッツポーズ。

よっしゃ、親父に一泡吹かせてやったぜ！

「てな訳で、もうくんなよ、馬鹿親父！！」

「親父じゃない！！パーーーー」

「どうでもええわああーーーーー！！」

部屋の外へ投げ飛ばし、掃除終了。ドアを閉めれば、もっと清潔。

「あ、開けてくれよ、慎吾！パパは、パパは慎吾と寝たいだけなんだ！！」

「それがいやだって言ってんだろ！？」

「いやよいやよも——」

「好きのうちな訳あるかあああああああ——！」

ドアを開けて、一蹴りしてから、再び閉める！この間、5秒くらい？？

「パパに暴力ふるって、お前はそれでいいのか！？」

「暴力じゃねえよ！正当防衛だ——！」

「そうか——！」

「納得すんのかよ——！」

「隙アリ——！」

ゲッ！！ドアを開けて蹴る前に、抱きついてきやがった！！

「もう、……もう、お前を離したりなんかしない」

「……そういう臭い台詞は、母さん言えよ」

「もう、お前を悲しませたりなんかしない、約束だ」

「スルーかよ——！てか、台詞臭いつて——！」

「口臭い！？それは本当か——？」

「口じゃねえよ、台詞だよ——！口も臭いけど——！」

「あ、そういうば、朝歯磨きしてなかったな」

「じゃ、磨けよ——！てか、加齢臭がクセエから、離れろよ」

「……か、加齢臭だと！？ピッチピチの——！」

「三十代後半なんだから、諦めろ——！」

くっついてくる馬鹿変態親父に、至近距離から手加減なしでグーパンチ——！ちよつと中指を出して、挟る感じで——！

まあ、そしたら見事にぶっ飛んでくれまして、ありがたいつすね。

「殴ったな、二度も殴った——！」

「お前はアフロか——！」

「……アフロ？？」

あ、ヤベッ——！ミスった——！！

「○ムロか——！」

「そうそう、それが正解だよ」

「ツツコミに正解もハズレもあるかあああああああああ

ああ!!」

渾身の回し蹴り!!

「愛してる、一緒に寝よう。シンゴーーーーー!!」

「ブレ〇ブ・ス〇ーリー!? てか、あの感動の部分を侮辱すんなあ!!」

今度は飛び蹴り!!

見事に階段まで吹っ飛んだクソ馬鹿死ねアホ変態親父は、見事に階段を転がっていったとき。

……てか、度が過ぎてね?

………今頃遅いか(照

ねえと、うじ虫は離れねえ。

「キャッ！ごめんなさい！！」

あれ？誰かにぶつかってみたいだな？？だれだ？？

「……過ちて改むるにはばかりることなかれ」

「?？」

な、何て言った？

ていうか、纏ってるオーラ黒！！限りなく黒！！ていうか、暗い

！！

「……あ、あの、どちらサマー??」

夏!?

「……慌てる乞食は貰いが少ない」

「??」

やっぱり、何て言ってるのか、サッパリ分からんぞ!?

「あの、せめて名前、教えてくれない？」

じゃないと、何か、気まずいから!! ていうか、空気が重過ぎて、

耐えられなくなるから!!

「……芙茶^{ふいぢ}麟……畔^{くろえ}枝」

……何か、名前からして暗っ!! てか、存在そのものが暗っ!!

「わつ、森野美咲! ヨロシクね」

わついつてなんだよ!! 何語だよ、どこのなまりだよ!!

「……空き樽は音が高い」

「?？」

……何か、馬鹿にされたような気がするの、何故かな?? 畔枝

が、ほくそえんでるからか??

「なんだかよく分からないけど、こっちは私の愛しいダーリンよ

!!」

「誰がダーリンだよ!!」

「慎吾」

「下呼びすんなー！！！！！！！！」

「じゃあ、ダーリン♪」

「そっちもすんな！」

「もう、注文が多いなあ」

「お前が馬鹿だから、俺がいちいちツッコまねえといけねえんだろうが！！」

「……悪事千里を走る」

……何か、聞き覚えがあるよーな、ないよーな……。

と、とりあえず、いい事を言われていない気がする。これ、直感！

「……ねえ、せっかくだし、一緒に学校行かない？」

おお！珍しく、森野から人を誘ってる！！

「一人よりさ、みんなで学校行った方が、絶対に楽しいから！」

「……じゃあ、俺はお先に」

「ダメよ！ダーリンは私の一何だから！！」

「どういう意味だよ！」

「ダーリンがいないと、私は死にます」

「じゃ」

「ま、待ってよう！！先に行かないで、お願いだから！！」

「お願いだから、その汚ねえ手を離せ！！」

「いや！寂しくて、美咲は」

「死になさい」

「ひどおーい！！」

「いつもの事だろ！？」

「そう、いつでも私はダーリンの傍にいるわ♪」

「本当に居るから、邪魔くせえんだよな」

「……普通、恐いとか、そういうもんじゃ……」

「恐くねえもん。どちらかと言えば、キモウザい」

「そんなあ……ガックシ」

「効果音を自分で言うな！！」

バシッ！！と、森野の頭を叩き、逃げる。

「ああ、まってよ、ダーリン！！」

「ダーリンじゃねえって、何百回言わせんだよ！！」

「死ぬまで♪」

「お前が??じゃあ、今ここで殺してやろうか??あん??」

「……頭の上の蠅を追え」

「……はへ?」

「??」

変な音は森野で、言葉になってないのは俺。

……何か、本当に馬鹿にされてる……??でも、何故に??

「……さっきから君が言ってるのって、ことわざ?」

……頷かれた。

……普通にしやべればよくね??

「ささっ!学校に、れつつらごー」

「……思いつきり日本語の発音なんだけど!」

「めいあいすぴーくいんぐりっしゅ!!」

「……一度死んで、最初の授業からやり直せ」

「死ぬ必要ないんじゃないの!愛しのハニーが死んでもいいの!

!」

「どこら辺がどうハニー!?てか、お前を愛しいと感じた事は、

一度もない!!」

「私は今でも貴方を愛してます」

「……さ、行こうか、……ええっと」

「……芙茶麒」

「芙茶麒さん?」

ちよっと笑った気がするの、気のせい??

「ちよっとちよっと、ちよおっとお!!」

せっかく歩き始めたのに、とめるなよ、馬鹿。

あ、今までの会話中、ずっと俺らとまってたんで、そこんところ、よろしゅうに。

「んだよ、最強の馬鹿」

「最愛の馬鹿の間違いじゃないの!」

「ありえねえ」

て、そのまま繰り返し言ってくれてるし!! 何か、思った以上に優しい子かも……。

「それ、どういう意味!？」

って、やっぱり分かってなかったんかい!!

「……醜い女は美しい女に比べて愛情や嫉妬心が強い」

は、初めて普通の言葉(?)を聞いた気がする……。

「醜いって、私の事!? そんで自分が美しいて!? ふざけないで

!! 私のほうが、美人だわ!!」

……はつきり言って、どうでもいいぞ、そんな事。

「もう一度同じ事言ってご覧なさい! 私が天罰を下してあげるわ!!」

いや、天罰受けるべきなのって、お前じゃね?? ていうか、お前だよ、きつと。いや、絶対に!!

「……頭隠して尻隠さず」

「頭も隠してなければ、お尻も隠してないわ!!」

いや、そういう意味じゃねえし。てか、それぐらい分かつとけよ。

馬鹿森野。

「……糞あつものに懲りて膾なますを吹く」

「熱いものに懲りても、なまずなんて、意味分らないわ!!」

いや、お前のほうが意味わかんねえよ。

「……油に水」

「油に水!? それでなにをしようっての!!」

いや、何もしねえから。てか、ことわざだって事に気付け、馬鹿。

「言いたい事は明日言え!」

お!? はつきりものを言うようになった!! でも、ことわざなのはかわらねえ!!

「今日言わないと、もう会えないかもしれないでしょ!？」

いや、確かにそうだけどさ。もっとゆっくり考えて言えって言われてんだよ、お前。つまり、『馬鹿な発言ばっかしてんじゃねえコノヤロー』的な発言されてんだぞ??

「ぐずぐずしてないで、さっさとかかってきなさい!! ミンチにして、コロツケにしてあげる!!」

いや、コロツケあんま肉つかワねえから。どうせだったら、肉団子とか、ハンバーグとかにしろよ……。

「言うは易し行うは難し」

「何言ってんだか、サッパリ分からない! 日本語を話さない! すぴーくいんぐりっしゅ!!」

英語にすんなら、ちゃんとした発音で言ええー……!!

「命長ければ恥多し」

……あの、まだ13年しか俺ら生きてないんですけど。もう恥じさらしてるって事ツスカ!?

「冗談じゃないわ! 私、永遠にダーリンと生きるの! 生き延びるの!!」

どう意味を取り違った、森野!?

「……はあ、後は野となれ山となれ」

あ! それなら俺も分かる!!

「森野にはなれるけど、森山にはなれないわ!!」

いや、そういう意味じゃねえし。てか、どうやってそうなった!?

「……馬鹿」

「なあに、ダーリン! 貴方の事なら何でも聞くわ!!」

「じゃ、死ね。今すぐ、5秒以内に」

「え? ……ええ! ?」

「5」

「え! ? カウント! ?」

「4」

「待って待って! いくらなんでも——」

「3」

「死ねません!! ねえ、聞いてよ、ダーリン!!」

「2」

「ちょ、ちょっと!! ストップだって!!」

「1」

「死ねないよお……」

「0」

「……」

「何で死んでねえの？ふざけんなよ、クソアマ」

「……案ずるより生むが易し」

「安産！？産みやすい！？」

……ホント、死んでくんねえかな。

「さ、あの馬鹿はほつといてもゴキブリ並みに生命力強いから、先行こう」

「だからあ！！手え、繋いじゃダメ！！」

「……悪女の深情け」

「また言ったあ！！」

……こんなに馬鹿な人が近くにいて、ある意味奇跡じゃね？

36、くらあい彼女!?(後書き)

はい!!いきなりですが、話に出てきたことわざの意味を紹介します!

慌てる乞食は貰いが少ない……あわてることは失敗のもとである。

空き樽は音が高い……よくしゃべる人には考えの浅い人が多いたとえ

悪事千里を走る……悪いうわさはたちまちの間に遠くまで知れ渡るということ。

頭の上の蠅を追え……とかく人の世話をやきたいものだが、それよりもまず自分のことをしっかり始末せよということ。

頭隠して尻隠さず……悪事や欠点を、自分では完全に隠したつもりでいても、その一部分が現れているのを知らないでいること。

羹に懲りて膾を吹く……一度失敗したのに懲りて、用心しすぎるたとえ。

油に水……たがいにしつくりしないこと。

言いたい事は明日言え……言いたい事があってもちよつと待って、ゆつくり考えてから言いなさいということ。

言うは易し行うは難し……口で言うだけならだれにでもできるが、それを実行するのは難しい。

命長ければ恥多し……あまり長生きをすると、恥をさらすことも多くなる。

後は野となれ山となれ……目の前のことさえ片づけば、後はどうなってもかまわない。

案ずるより生むが易し……あれこれ悩んで心配したことも、やってみたら案外と簡単にできる。

な、長かった……（疲

37、Sのフチ切れにご注意ください!?(前書き)

ちょっと短いですが、気にしないでください……。。

37、Sのプチ切れにご注意ください!?

朝からメッサ暗い人に会って、こっちまでブルーな瀬川です。

……どうしてあそこまで暗くなれるのか、……ちよつと不思議だ。

「ねえ、未来の婿」

……。変な声は無視だ。きっと、これは幻聴だ。

「ふふ、無視をしても無駄よ。私達は、以心伝心だからね」

してねえし。したかねえし。

「ツツコミがさえないわね。どれ、私が景気付けのキー——」

「一回死んで、帰ってこれる??それ、最近疑問に思ってる事なんだけど、お前で実験していい??」

「そう!それでこそ、私が選んだ男!!」

すみまつせえん!誰かこの子、異世界に連れてってくださいあい!!

「ねえ、無視??私はお前の嫁よ??」

「実験……」

「しないでよ!?!本気でしないで!?!……えっと、あの、マジすみませんでした!?!」

あ、そういえば、こいつが誰か言ってなかった気がする。

じゃ、紹介しよう。こいつは、自分が女王だと思い込んでる、馬鹿だ。

「フフ……。何でもかんでも馬鹿って言うのは、よくないんじゃない!?!」

「だって、馬鹿なもんは馬鹿だろう?」

「いや、私は違——!」

「そこ!!五月蠅いよ!!授業受ける気あるの!?!」

「すみまつせえん。この馬鹿が俺にちよつかい出してきたんです」
う

「何ですって?本当なの、斎賀^{さいが}さん?」

あゝ。言えば、そんな名前だったな。名前は……。確か……。良夫

???

「違います、先生！将来の事について、熱く語っていたんです！」

「そう、それならいいわ」

いいのかよ！！

「言えば、お前の名前って、何？良夫？？」

「良夫！？愛する妻を、良夫！？」

「愛してねえし、妻でもねえし。で、お前の名前、良雄」

「『お』の字が変わっただけで、後は変わらないじゃない！」

「だって、覚えてねえもん。忘れたもん、そんなん」

「世界の女王を！？」

「ありえねえ。世界に女王なんて、いねえよ」

「いいの！私を愛してくれる、彼がいるから」

「そりゃよかったな」

「彼って、素敵なのよ。色白で、ヒョロヒョロで、可愛くて、カッコよくて。背は私より低いけど、そこがまたツボなのよねえ」

……どこことなく、俺に似てね？？

「で、ちなみに、イニシャルはS，S。もう、そのとーりに、Sな人なの」

……何か、限りなく、俺に近くなってね？？

「世界の女王が愛した、男。その名も、瀬川——」

「それ以上言ったら、実験に使うぜ？」

「ごめんなさい。私とした事が。貴方の気持ちも知らないで……」

「すみません。キモいんですけど」

「いいの！貴方はいつまでもSでいいの！！」

「いや、マジに実験するぜ？？」

「私が世界一の女王なら、貴方は世界一の王様！！」

「おい！メルヘンの世界から帰って来おい！！」

「さあ、いきましよう！城の者が私達の帰りを待ってるわ！！」

「……（怒）」

静かあに、ブチギレた俺がした事は、ご想像にお任せします♪
ちよつとしたヒントを言つとくと、隣の机を投げ飛ばし、そこに座つた斎賀ごと、窓から落したりしてないんで、ご安心を♪
そのあと、止めを刺すために、家庭科室から包丁を持ってきたりしてないんで、そのほうも心配いりません♪

じゃ、今日は、ここまでなんで、サイナラさ♪

38、Sは子供に弱い!?

前編

五月蠅い奴が減った事で、今日は何とか無事に家にたどり着けそうな気がする。作者が馬鹿な事をしない限り……。

いつものように門を出て、いつものように角を曲がりに曲がって、公園で遊んでる子供がなんだかうらやましくなって、もう少しで家に到着。

おお! ? 珍しくほのぼのした雰囲気のまま、終われるのか! ?

「……つと?」

背中に違和感を感じる。背中に痛いほど視線を感じる。背中に何かがくっついていっているような気がする……。

「……グスン」

な、泣いてる! ? 何が泣いてる! ?

もし、くっついてるのが森野だとしたら、これだけじゃ済まされないから、論外。小橋とかその他もろもろのガラスハートでもない気がするから、論外。

……じゃ、誰? ?

「……ウウ、グスン」

信じてねえけど、幽霊とか、そのあたりの人? ? ……うゝん、ありえなくもない気がする。

と、とりあえず、振り返れば、……分かるよな?

ゆうっくり振り返って、それを見た。

うん、実に予想外です。

「……うう、グスン。うう……」

だって、こんなにちっこい子供だと思ってなかったもんな。推定、あの双子達と同一年。

「……」

「うう……」

「……」

「……グスッ」

「……」

「……ズッズッズッズッ」

鼻、啜りすぎじゃね？

てか、この子どこの子！？……早口言葉みてえだ。

「……」

「……グスン」

「……」

は、話しかけにくうい！！何で泣いてんだよ！？何で俺にしがみついてんだよ！？何で俺の制服放してくれねえんだよ！？

「な、なあ、お前、どうしたんだ？」

お、お願いだ！！答えてくれよ！？嘘でもいいからさ、とりあえず答えろよ！？じゃないと気まずすぎて、俺の心臓は止まります！！

「……あのね、ボクね、おかあさんとね、はぐれちゃったの」

「そう……なんだ」

ベタだ！ベタだけど、ほっておけないよ！！

「じゃあ、迷子？」

「ううん。まいごじゃないよ。ボク、瀬野沙琉せのさるは覇はっていうの」

「サルハ……君？」

こつくりと頷く。

うん、自己紹介有難う。でも、迷子だよ、この子。迷子じゃないって言ったけど、迷子だよ、ね？

「ボクね、おかあさんと一緒にね、おかいものにいったの」

「そうなんだ」

おーい。俺、一応知らない人だよ、ね？見知らぬどこかの人だよ、ね？通行人Aだよ、ね？

「でもね、とちゅうでね、はぐれちゃったの」

「どうして？」

「お手手つないでたんだけど、はなしちゃったの。だからね、はぐれちゃったの」

どんだけの人込みを越えてきたの？てか、こんなデパートも商店街も遠いここに、よくたどり着けたな、少年。……じゃなくて、沙琉覇。

「お母さんの名前、なんていうの？」

俺のお節介！子供相手に弱すぎだ！！強くなれ、俺！！

「はるの瀬野春乃」

春乃？春乃？？……うーん……どこかで聞いた事があったような、なかったような。

「おかあさんの事、知ってるの、にいちゃん」

知っているようで、知らないかもお。てか、にいちゃんって呼ぶな。

「どうしたの？にいちゃん？？」

ああ、もう！その純粹すぎる瞳で、この穢れた俺を見るな！！

……うう。ったく、もう！！仕方ねえな！！

「じゃあ、にいちゃんが探してあげるからさ、どこのお店行ってたか、教えてくれる？」

「うん！えっとねえ、確かあっちだよお！！」

引っ張るな、沙琉覇。というか、何気に手をつなぐな。

「こっち、こっちだよお」

純粹な目で見えるなって言ってるだろおがああああ！！

＊

てな訳で、今は商店街にいます。しかも、制服で。しかも、子供を連れて……。

「確かねえ、このお店だよ、にいちゃん」

「……あ、この店、俺もよく来るな」

「にいちゃんも、おかあさん？」

「いや、頼まれるんだ、いろいろとな」

「そーなの？」

「そーなの」

あゝあ、甘いなあ、俺。甘すぎるなあ、俺。あまりに甘すぎてるけそうだよ、俺。

「で、お母さんて、どんな人？」

「優しくて、いつもニコニコ笑ってる人！」

そう、そりゃよかったな。

……って、ちがああああうっ！！

「そ、そうなんだ」

「うん！いつもね、とおっても、優しいんだよ！！」

そりゃいい事だ。でもさ、俺が聞いてんの、そこじゃねえんだわ。

「あの、……見た目は？」

「みため？」

「そう、見た目」

「みためって、なあに？」

「見た目って言うのは、……」

「なあに？」

あ、改めて聞かれると、どう答えていいか、迷うんですけど！？

「見た目ってのは、外見？」

「がいけんって、なあに？」

「……俺見て、どう思う？」

「優しいけど、弱そうな中学生！！」

……半分当たりにしてやるからさあ、弱そうとか言うなや。結構傷つく……。

「そういう事を言うんだよ」

「外見？それとも、みため？？」

「りょーほー」

「わかった！！」

はい、素敵な笑顔を有難う、少年。

「で、お母さんは、どんな見た目？」

「背が高くてえ、細くてえ、ながぁい髪してるぅ!!」

「髪は、結わいてる？」

「湯、沸いてる？」

「いや、髪は、こう、束ねてる??」

うう……人前で前髪を上げるのは恥ずかしいぞ。

何故に実際にやってやってんだよ、俺！何とか説明すればよかったものを……!!

「うん！でも、にいちゃんみたいにはしてなかったよ」

そりゃそうだな。こんな髪型してるの、ヤワ○ちゃんくらいだ。

ちよっと古いけど……。

「うしろでそうやってね、高くしてるの！」

ポニーテールか。言えば、よく夏鈴にやってた気がするな。

「じゃ、探してみっか？」

「うん！」

いいよなあ。ちっこい子供は純粹でえ。

てな感じで、探してますが、全くいる気配ナッシング。ていうか、ポニーテールすらない。

……てか、この店、今の時間帯にこれだけで、よく営業してられんな。もう、何十分もいるのに、5人くらいとしかすれ違ってねえぞ？

「おかあさあん！どこお……」

ああ、もう。またぐずり始めた。これだから嫌いだ、子供なんて。あ、そういえば、ひらめいた。

「もしかしたら、家の道にいるかもな」

「どうして？」

「お前が、家に帰ってるかもしれないだろ？」

「でも、ボク、ここにいるよ？」

「お母さんはな、まず、家の帰途を辿るんだ。子供が一番通るか

らな」

「なんで？」

「お前だって、最初は思ってたんじゃねえのか？家に帰ろうってで、あの道に迷ってたんじゃねえのか？」

「うん。でもね、道が分からなくなっちゃったの。そこでね、に
いちゃんを見つけたんだよ」

見つけてくれなくていいよ。

「じゃあ、もっかい、あそこに戻るか」

「ここからなら、お家の帰る道、分かるかも！」

「じゃあ、歩いてみな」

手を放そうとしたけど……。

「にいちゃんが隣にいないと、ヤダ」

……森野並にわがままだな、この野郎。

で、仕方なく、手を繋いで帰る事になりました。

って、これまだ続くの！？……ええっ！？マジで！！？？

39、Sは子供に弱い!?

後編

「……」

「確か、こっちに曲がるの」

「あい」

「……」

「次は、こっちだったかな？」

「あい」

「……」

「ここは、真っすぐだよ」

「あいあい」

「……」

「……分らなくなっちゃったよお」

これで何度目の泣き顔でしょう。もう目は真っ赤。俺は、もう疲労で一杯。

せ、背中がいてえ……。

「じゃ、じゃさ、とりあえずあそこの公園でやすもつか」

「……うん」

ああ、頼むから、そんな顔はしないでくれよ!! こっちまで泣きなくなるわい!! 泣かねえけど!!

「……うう、おかああさあん」

「泣くなよ、な? お前、男の子だろ?」

「だって、だってえ……」

「ほら、泣くなつて。泣いてたら、お母さんが来てくれないぞ?」

「……なんでえ?」

「……ウチの母さんが言ってたから」

……つ、つい言ってしまった! なんとという不覚!!

「にちゃんのおかあさんが?」

「……そう。泣くような弱い子は、私は面倒見ないって。強くあ

りなさいって。人を護れるような子になりなさいってさ」

「なんで、強くなくちゃいけないの？」

「人は、人と支えあって生きてる。でも、支えてもらってばっかじゃいけないんだ。だから、人を支えられるような強さを持つてなくちゃいけない。人を支えて、人に支えてもらえるような、そんな強さを持たないといけないんだ」

「おかあさんが、そういつてたの？」

「そ。だから、俺は泣かなかったぞ、迷子になっても。……って言うっても、見つけてもらった時に、泣き止んだだけなんだけどな」

「それじゃあ、にいちゃんは、もう強いの？」

「さあ、どうだろな。自分の強さなんて、わかんねえからな」

「ふーん」

……って、子供相手に何言っただ、俺！！何故に昔の思い出を語ってる！！？

こんなストーリーじゃねえだろ！？これ！！そうだろ！！

「じゃ、ボク、もう泣かない！」

「……へ？」

「そしたら、にいちゃんみたいになれるかな！？」

いや、俺みたいになるんじゃないやねえ。なっちゃんいけねえよ、俺は穢れ放題だからな。

……自分でそう言っというて、なんかむなしくなってきた……。

「ねえ、なれるかな！？」

……ああ、もう。うつとうしいなあ。

「なれるよ、きっと」

あゝ、言っちゃった。

「ヤッターー！！！」

そこ、喜んじゃいけねえから。逆に悲しめ、この俺みたいになっってしまう事を。

「ヤッター！じゃあ、ボクがにいちゃんみたいになれたら、絶対にいちゃんを支えてあげるね！！！」

「……ああ」

「えへへ」

……えへへってなんだよ、えへへって。
ま、いっか。

「さ、もう十分休んだし、お母さん探しに行くか！」

「うん!!」

たまにはいいよな、こんな日があってもさ。……たまには。

「たしかねえ、この公園出たらあ」

そっち行くと、家のある方なんだけど？

「こっちいってえ」

なあんだ、ちげえのか。

「あ、ちがうな。だって、こんなおうち、立ってなかった」

「じゃあ、元の道に戻ろう」

「たぶん、こっち!!」

だから、そっちは、俺ん家があるって。

「……あ、あれ!!あれ!!あれ!!」

同じ事を三度も言うな、少年よ。一度言えば分かるさ!多分!!
で、その細くてちっさい指が指す方に、電灯に照らされた女の人
が見えました。

ありよ?? 見覚えあんな……。

細くて背が高く、ちよつと儂い印象を与えるその人。髪形はモチ、
ポニーテール。

その髪が、大きく揺れた。

あ!ああ!! AA!!!

思い出したかも!!

「おかーーーーーさーーーーーん」

走っていく沙琉覇。振り返る母親。あ、やっぱし。

「沙琉覇!!」

お隣さんじゃん。よく郵便、『瀬川』と『瀬野』、間違えられる

から、いつの間にか親しくなってた、お隣さんだ!!

「わああああん!! 会いたかったよお」

「よかったあ。無事だったのね、沙琉覇」

あ、俺、邪魔?? じゃ、そういう事で、さようなら――。

「アレ? 慎吾君??」

ば、バレた!?? てか、見つかった!?!?

「お隣の息子さんの……やっぱり、慎吾君だ」

「ど、ども」

「シンゴクン?」

「そう、知らなかったの? 沙琉覇」

「うん」

「そうよね、滅多に会わないものね」

ソウデスねえ、って事で……さよな――。

「もしかして、慎吾君がうちの子を連れてきてくれたんですか?」
「?」

「連れてきたって言うか、なんていうか……」

「そうだよ! このにいちやん、とおっても優しいんだよ!!」

沙琉覇!! 俺はこういう場面が苦手なんだ!! だから早々に立ち去りたかったのに、何て事を言う!!

「そうだったんですか。有難うございます」

深々と頭を下げる沙琉覇ママ事、春乃さん。

あゝ、照れるから、そういうのはやめて!!

「あ、あの、えっと、ですね。こっちも迷ってた訳だし、思い出せなかった訳ですし……」

「でも、沙琉覇を連れてきてくださった事は、真実でしょ?」

「ま、まあ、……はい」

「やっぱり、お礼は言わせて頂かないと」

「いや! ホント、そういうの結構ですから!!」

「ホラ、沙琉覇も。有難うって、慎吾お兄ちゃんに」

「有難う、慎吾おにいちやん!!」

「お、おう」

「じゃ、またね!!」

「……おう」

そんな感じで、長い一日は終わりました。長いって言うか、めんどくさい一日は、やっと終わってくれました。

……なんか、いいお話で終わってね? てか、こんな感じで終わるの初めてじゃね? ?

てかもう、S M 関係なくね? ? お笑いどころが、なさ過ぎじゃね? ?

39、Sは子供に弱い!?

後編(後書き)

あゝあゝ！どうしよう！！全然笑えない！！ていうか、慎吾が良い子キャラになっちゃった！！↑そこ！？
どうしようどうしようどうしよう――

慎吾「ども、みなさん。いつも有難うございます、読んでもらってで、作者の馬鹿がネガティブ入ったんで、代わりに言いたい事を言わせていただきます。

作者曰く、この俺は良い子キャラにしくなかつたようで、書き終わって読み返した時、絶望の淵に立たされたとか、三途の川を見たとか……。

あ、これ、森野が俺に惚れた理由を書こうとしてこうなっちゃったらしいです。ま、どうでもいいけど」

どうしようどうしよう……。

あ、そうだ。首を吊ってみればいいんだ……。

慎吾「やめろ！それだけはやめろ！！

さ、作者が危ない淵に立ったので、今日はこれで。じゃ！」

ちなみに、次回はキャラ特集です……。ガクッ

慎吾「何気に次回予告した！？てか、意識を取り戻せ、作者！！作者――！！」

40、一休みのための、キャラ特集!？ Part 2 (前書き)

ただ単に、キャラをまとめただけです！興味がない方、次へどおぞ
お。

40、一休みのための、キャラ特集！？ Part 2

ちよつと中途半端ですが、ここで、……

第二回！！一休みするためのキャラ特集！？

いええい！！

何？何勝手に盛り上がってるの？？それはね、キャラとか、話の内容とか考えないですむからだよ♪めんどくさい事って、嫌いなんだけど、こういうのは好き♪

てな訳で、ここまで出てきたキャラ、（紹介してない奴ら）と紹介しようと思います！！

でえ！前回呼んだ人はわかんと思っていますが、とてつもなくつまらない事ばっか言ってます！なんで、飛ばしてもらっても構いません♪なんなら、飛ばしちゃってください！！思いっきり！！

ではでは！！ここから紹介をはじめたいと思いますあす！！ヨロシク！！

No. 13 赤星 麗二（あかほしれいじ）
身長 166cm 体重 58kg 血液型 O型
誕生日 2月29日 年齢 13歳（？）

かなり癖の強い、短めの黒髪。のんびりとした顔つきで、いつもメガネがずれ落ちてる。それでも、見た目がカッコいいために、結構モテる。

性格は、どちらにも属さない。いわゆる、不思議な奴。ていうか、不思議。摩訶不思議。しゃべり方に特徴があり、彼の学校ではそれなりに流行っている。（……らしい）馬鹿に見られる事が多いが、実はかなりの天才君。もう、早稲田大学レベルとか……そういう噂

が流れてる。それに、家が武道かなので、それなりに、いや、かなり強い。でもあまり、本人に自覚なし。

【本人から一言】

……橋と箸って、いいにくいよね。

No. 14 佐々原 幸江 (ささはら さちえ)

身長 179 cm 体重 測ってません! 血液型 A型

誕生日 7月7日 年齢 20歳

長い髪は、綺麗にカールしている。いわゆる、お姉様系? スタイルもよく、綺麗な人。一言で簡単に言う、綺麗な人。

結構Mっ気のある、イケイケの二十歳。でも、かなりの鈍感で、告白されてもスルーもしくは、聞いていない、天然。でも、やるべきはちゃんとやる、ちょっと頼りがいのある人。かなりの方向音痴で、迷った記録はなんと24時間。飯も食わずに歩き続けたという、微妙な伝説を持つ。

【本人から一言】

あの、道に迷った時は、お願いしハブ!!

No. 15 江堂 波菜 (えどう はな)

身長 158 cm 体重 40 kg 血液型 AB型

誕生日 4月24日 年齢 24歳

短く切られた髪はまばらで、全くもってまとまりがない。厳しい光を宿す目は、ちょっと狐目。小柄だけど、意外と力持ち。

剣道家に育ち、すすすす育った、礼儀正しいM。たまに、Sを目

の前にすると壊れる、ちよつと厄介な一面を持つ。何もせず、静かに立っていれば、かなりカッコいい人。でも、ひとたびしゃべりだせば、もう止める事で精一杯。顔なんて、どうでもよくなる。そのため、彼氏なんて知らずに生き続けている。

【本人から一言】

この世にSがいる限り、私達Mは消え去らない！！

No. 16 銅像……じゃなくて、道蓋 箕実 (どうがいみさね)

身長 188cm 体重 78kg 血液型 B型

誕生日 1月28日 年齢 38歳

短く刈り込んである頭をし、筋肉隆々。まさに、マッチョ。いい感じに焼かれた肌は、何故か傷だらけ。

馬鹿にされる事が大嫌いな、一応S。ことごとく瀬川達に無視されたため、ちよつと意気消沈気味。ていうか、ブルー(28話目参)。いつもはバリバリ元気だが、口喧嘩で負けたり、無視され続けると、かなり少年の心に帰りやすくなる。純粹なハートの持ち主だが、生徒達からすれば、ただの熱すぎの先生。やっぱ、自覚なし。

【本人から一言】

今度はきちんと出て見せる！！

No. 17 涼村 夏鈴 (すずむらかりん)

身長 ちよつど瀬川の腰辺り 体重 りんご5個分 (なんちゃって) 血液型 A型

誕生日 12月21日 年齢 年齢って、何???

毛先が肩に届くくらいの髪に、いつも花柄のついたピン止めをしている。左に付けている事が多いが、たまに間違える。見た目は可愛いが、中は結構、黒かったりする。

いいほうの血をよく引いたようで、頭がいい。しっかりとしているし、意外と面倒見がいい。と、言っても、近所だけだが。わがままな所は夏藍と一緒に、言った通りにどうしてもならないと、泣き出すしまつ。慎吾がお気に入り。他のいとこ達には、目もくれない。ちなみに、夏鈴が姉。

【本人から一言】

本人って、なあに??

No. 18 涼村 夏藍 (すずむら からん)

身長 夏鈴と同じく 体重 夏鈴と同じく 血液型 夏鈴と同じく
誕生日 夏鈴と同じく 年齢 夏鈴と同じく

毛先が肩に届くくらいの髪に、いつも花柄のヘアピンをしている。右側につけているが、たまに悪戯で左に付ける。見た目はやっぱり夏鈴と同じ。もちろん、中身も。

いいほうの血を引きつつ、どこからか変な血を持ってきたらしい。その為に、よく言葉を間違える。それもそれで可愛いと思えるのだが、ちよつと度が過ぎる。ボーっとしている事が多いが、かなりのわがまま。それは夏鈴を超える。他のいとこにもちよつと興味があるが、一番はやっぱり慎吾。

【本人から一言】

本人って、本の人??

No. 19 狩燐 聡佑 (かりん そうすけ)
身長 162cm 体重 50kg 血液型 AB型
誕生日 5月14日 年齢 13歳

綺麗なこげ茶色の髪は、いつもちよつとボサボサ。チョコレートのような瞳は、狐目のため、あまり目立たない。健康的な肌の色をしている。

Sになりきれていない、S。本人は全く自覚がないが、かなり目つきは悪い。目が悪いのにメガネもコンタクトも付けず、自由気ままにしている。たまに自己中になるが、根はかなり優しい奴。友達が多い、意外な人気者。

【本人から一言】

まだ全然出てないけど、ヨロシク。

No. 20 芙茶麒 畔枝 (ふさぎ くろえ)
身長 144cm 体重 触らぬ神に祟りなし 血液型 O型
誕生日 11月4日 年齢 13歳

背中にかかる髪は、いつも二つに分けて結われており、前髪はいつも顔を覆っているため、どんな表情をし、何を考えているのか分からない。偶然見た目撃者の情報によると、目は綺麗な黒曜石色で、意外とパツチリしているとの事。かなり色白。

どこにも属さず、ただ彷徨う、風のような少女。かなり物知りで(国語は特に)、頭がいい。学年トップはいつも彼女と言う噂もある。暗い性格だが、恩を仇で返すような子ではない。暗いのは、家庭の事情だとか。

【本人から一言】

……去る者は負わず。

No. 21 瀬野 沙琉覇 (せの さるは)

身長 慎吾のひざより、少し高い 体重 覚えてない 血液型
A型

誕生日 3月31日 年齢 4歳

クリックリの黒い目に、クルンクルンの黒髪。他の子よりもちよ
っとヒョロリとしている。

お母さん大好きっ子。まだまだ遊び盛り、甘え盛り、食べ盛り。
よく眠りよく遊ぶ、かなり元気な男の子。転んでも泣かないくせに、
母がいなくなってしまうと、すぐにその瞳は潤む。寝相が酷く、結
構やんちゃ。いや、かなりやんちゃ。

【本人から一言】

いっしょにあそぼ!!

No. 22 瀬野 春乃 (せの はるの)

身長 172cm 体重 極秘 血液型 A型

誕生日 10月9日 年齢 これまた極秘

黒目が大きめで、ちょっと少女っぽい。ウェーブのかかった黒髪
は、いつでもどこでもポニーテール。

おっとりしているけど、天然という訳ではなく、ただののんびり
や。けれど、掃除の事になると、かなりはきはきし始めるほどの、
綺麗好き。一日3回以上は掃除しないとイライラするらしい。あま
り物事をはっきり言わないが、親しい人の前ではかなりおしゃべり。

【本人から一言】

えっと、あの、……よろしく願いします。

さあ！！さあ、さあ！！どうだったでしょうか！？楽しんでいた
だけたでしょうか！！

え？楽しくなかった？？あつたりまえじゃないですかぁ♪だって、
キャラの紹介だけですから♪アハ☆

微妙にしか出てこなかった奴らも、そのうちちゃんと出してやろ
うと思っています。もちろん、中心となるあの2人はちゃんと出
ますよ♪

てな訳で、今回はこれで終わりますが、『ここ超意味不う』と
か、『なにこれえ、マジ分かりにくいんだけどお』的な発言があ
りましたら、どしどし八つ当たりしてください！！

え？誰に八つ当たり？？

ふふ……決まってるじゃないですか♪あの、S君ですよ！S君♪♪

では、またいつかお会いしましょう！！これからも、『ドSな俺
と、ドMなアイツ』を、よろしく願いします！！

40、一休みのための、キャラ特集!？ Part 2 (後書き)

突然ですが!!

ここまで来て、もう一度出て欲しいキャラとか、そういうの希望ありますか？

もし、あったら、どんどん言ってくださいね。必ず、どっかで出しますから。

では、さようならい。

41、激しい扱いの差!?

「ダーリン♪」

「うっせえ」

「ダーリン♪ダーリン♪」

「だまれや」

「ダーリン♪ダーリン♪ダーリン♪」

「しつこい」

「ダーリー——」

「ウツセエって、言っただろおが——!!」

ども、朝っぱらから女子に暴力を振るう瀬川です。ていうか、言わなくても分かるよな、こんなもん。

はつきり言わせてもらいます!これは、作者が無駄な行を使い、話の内容を適当にごまかすために言ってる事であり、俺は一切関係ありません!!

(余計な事言うなよ、ハゲ)

「ハゲてねええええええええええ!!」

「!?!ど、どうしたの、ダーリン!私を愛しすぎて、壊れてしまったの!?!」

「そんなの、ありえねえだろ」

「冷たいわねえ、でも、そういうダーリンが——」

「だ・ま・れ♪」

「すみません!すみません!!すみません!!!何度も謝りますから、どうか、どこから出てきたか分からないナイフをおしまってください!!」

(そうして、瀬川は犯罪者として捕まったのでした♪チャンチャン♪)

「勝手に終わらせんじゃねえ!!てか、まだ殺してねえ!!」

「殺す気だったの!?!」

そしたら見事に森野にタライが落ちました。

……何か、俺と比較にならないほど、扱いがくね??

「酷いわ、ダーリン！私を騙したのね!!」

「信じるほうがわりいんだよ、能無し」

「能無しじゃない!!カ○ナシよ!!」

「ジブ○パクるなあ!!」

「じゃあ、何ナシ??」

「だから、能無しつつってんだろ、能無し」

「洋ナシ??」

「……」

「ああ!!待って、待ってよう、ダーリン!!ダーリンったらあ
!!」

「ダーリンじゃねえって何回言ったらわかるんだよ!!」

「貴方が私を愛するまで」

「……」

「あ、ああ、待って!間違えました!!後一回で覚えます!!」

「もう一回言わせんかい!!」

「だってえ、ダーリンの声が聞きたいんだもん♪」

「一度死ね、てか、死ね。そして帰ってくるな」

「イヤ♪」

「じゃ、俺がもう元に戻れないほどにボコボコにしてやるよ」

「……積極的に、お願いします」

俺は背を向けて去って行った。

「ちょ、ちょっと!変なナレーション流さないで!!」

返事がない。ただの歩く屍のようだ。

「え!?普通、屍のようじゃ……」

「ウッセエな、黙ってられねえのかよ、カスが」

「ヤッタ♪返事してくれた♪♪」

「……」

「……あの」

「……」

「私のダ」

顔面に回し蹴り。そして、腹部に思い切りパンチ。崩れかけたところを、地面に叩きつける。もちろん、足で。

「やっと死んだか、森野」

「……」

「返事がない。ただの屍のようだ」
て、事で♪これにて終了♪♪

（勝手に終わらせんな、天誅♪）

「甘い!!」

降ってきた包丁を避けて、……って、包丁!? 人殺す気かよ!!
（ダイジョブだよ、たいていの主人公はそう簡単に死なないから♪）

イヤ、そういう問題じゃなくね? てか、そう簡単にとって事は、殺そうと思ってたって事だろ!!

（……チツ、バレたか）

舌打ちすんな!! バレたってなんだ!!

（めんどくさいから、もっかい天誅）

「だから、甘いつての!!」

（あ、さけられた。……つまんないから、やあめた）

「隙あり!!」

ってな感じで、包丁を下弦に投げ返し、当たった事は言わない事にしておこう。

瀬川が去って、2時間後、やっと森野は意識を取り戻したそう。

「あれ？ダーリン？？ダーリン！？！？どこ！！どこよ！！ダー

「リリンン!!!」

42、自覚してないS!?

「よ、瀬川」

「よう、……えっと、誰だっけ？」

「普通友達の名前を忘れますか？」

「忘れる。だって、キャラが多すぎんだもん」

「いや、それでも覚えとけよ、てか努力しろ」

「イヤでございます！船長！！」

「いや、船長じゃねえし。一般市民だし」

「ツツコミが冷たいぜ、狩燐^{かりん}」

「そうか？……って、名前覚えてんじやんか！！」

「さくらあふぶうきのおくさらいいのそらへえ♪」

「変な歌うたってごまかすなよ！！」

「変な歌じゃない！24時間テレビの時に、必ず流れる曲だ！！」

「俺に24時間走れってか！？」

「YES！！」

「もういいです。帰ります」

「そうよそうよ！！帰りなさい！！」

「はあい、いつの間にわいて来たんだ？この蛆虫は？？」

「お前、誰？？」

「もう忘れたのかよ！？お前の記憶力もねえじゃねえかよ！？」

「瀬川美咲！ダーリンの妻よ！！」

「なるほろ」

「なるほろじゃねえよ！！」

「お前のダーリンにいつなった！！てか、勝手に苗字を変更するんじゃねえよ！！」

「いいじゃない！！ゴロ的にはピツタシよ！！」

「そーゆー問題じゃねえよっ！！」

「こーゆーかによ！！」

「……」

「……もしかして、噛んだ??」

言うな、狩燐よ。こういう時は、黙ってスルーしてやれ。

「かんでにゃい、かんでない、かんでにゃい!!」

おい!! 3分の2かんでるぞお。

「かんでるかんでるかんでる!!」

何故にお前は得意げなんだよ、狩燐!

「気のせいよ! っていうか、ふうふうの憩いの時間を邪魔しないで
!!」

「またかんだ!」

「かんでない!! ぜったいひ、噛んでない!!」

お前はどれだけ噛めば気がすむんだ?

「アハハ! バッカじゃねえの!!」

「バックじゃない!! 馬鹿よ!!」

馬鹿を認めたー!!?!?!?

「それ、同じ意味だし」

きつい一言、有難うございます。俺がツッコむ必要がなくて、安心しました。

「違うわ! 貴方の一言に愛はないけど、ダーリンの一言には、愛があるのよ!!」

「そうだったのかあ」

「愛なんて込めてねえよ!! てか、納得するな!!」

「納得はしてない、肯定したんだ」

「それほとんど同じ意味っ!!」

「気にするな、Don't worry!!」

「カッコよく言っても無駄だぞ!!」

「そうイライラするな、ハゲるぞ?」

「ハゲねえよ!! てか、ハゲさせたくねえなら、ツッコませるな
!!」

「すみませえん!」

「なんだ、馬鹿森野」

「また馬鹿って言った!!」

「またじゃありません。今回が初めてです」

「そんなの関係ねえです」

「アリアの大有りです」

「どうでもいいです」

「よくないです」

「よくなくないです」

「結果的によくなってるぞ?」

さりげないツツコミを有難う、狩燐。

「てか、もう何がなんだか分からないんですけどお。どうしたらいいんですか、ダーリン」

「ダーリンじゃねえし!!」

「細かい事は気にするな。あだ名だと思えばいいんだよ、あだ名と

――

「思えるかああああああああ!!」

「だから、ハゲ――」

「それ以上言ったら、命の保障はねえぞ?」

「脅すんなら、その人じゃなくて、私を脅して!!」

「脅しじゃねえよ!!脅迫だよ!!」

「それ、同じ意味じゃね?」

「冷静に痛いところにツツコムな!!」

「H A H A H A」

「……一回だけ殴らせろ。大丈夫、痛くしねえから」

「殴るなら、私――グボォッ!!」

五月蠅い虫けらは、テキトーに殴っというて、黙らせる。

「な、一回だけだから。痛くねえから」

「さっきの、ものっそい痛そうだったんだけど?」

「アレの100分の1の力にするから」

「10,000,000分の一で、手を打とう」

……おい作者よ。漢数字にしたほうがよかったんじゃないか??
(だな。まあ、気にせず会話に戻りたまえ)
じゃ、遠慮なく……。

「それじゃほとんどぶつかった衝撃ねえじゃん!!」

「それでいいじゃん! いたくねえんだからさ!!」

「いたくするなら、わた——グファッ!」

やっぱり五月蠅い虫には、鉄拳を下しとく。

「ぼーりよくはあーんたあい!!」

「うっせえ!! 変に間延びさせんな!!」

「Don't worry」

「だから!! 変なところで英語を使うな!!」

「変じゃない! 使うべきところでちゃんと使ったぞ!!」

「そーゆー問題じゃねえよ!!」

「そーゆー問題だね!!」

「私にも、屈辱的なお言葉を!!」

「お前は黙ってろ!!」

と、俺。ちなみに一発グーパンチ!!

「てか、お前は誰だ!!」

と、狩隣。ちなみに一発回し蹴り。

「……お前も、結構Sだったんだな」

「S? 知らんなそんなん」

「……お前は純粹でいいな」

「……? あ! もしかして、イニシャルの事か? 確かに俺はSだぜ。
そうすけ何せ聡佑だからな」

「そーゆー意味じゃねえし」

「じゃあ、どーゆー意味だ?」

「私のような人を愛してしまう、罪な意味よ」

「お前は一度地獄に逝って来い。帰ってこれたら、褒めてやろう」

「褒めるだけじゃなくて、愛してください!!」

「いやです。俺の視界から、1秒以内に消えろ」

「1秒!? それって――」

「はーい! タイム・オーバー!!」

とりあえず、視界から消しとばしました♪

「お前ってさあ、結構容赦ねえよな」

「森野限定だよ」

「いや。全体的に、容赦ねえよ」

「いや、容赦あるよ。だって、結構手抜きだもん」

「……そうサラッと言えるお前がすごい」

「お褒めの言葉として受け取っとくよ、コンチクショー」

「H A H A H A」

「だからさあ、せめて、その笑い方はやめろ」

「やだっつつたら?」

「半殺し?」

「よくそーゆー黒い発言、ニコニコ顔で言えるな」

「Sだからな。一応はSだから」

「……ま、いいや」

「よくないわ!! いつもこんな扱いって、ヒド――グバフォアッ!!」

俺の跳び蹴りプラス、何故か参戦した狩燐の踵落としも加わり、虫けらを地面にめり込ませる事に成功しました。

「さ、帰るか」

「そうだな、帰ろう」

そうして、SとSと自覚していないSは去っていききましたとき。
めでたし(?) めでたし(?)

43、いい加減に、覚えよう!?(前書き)

えっと、キャラ特集のときのあとがきに、また出て欲しいキャラを募集したところ、大変嬉しすぎる事に、返事がきました!!

では、二度目の登場となる彼女の活躍(?)をお楽しみください!
!

43、いい加減に、覚えよう!?

ふああゝゝあ。ん? あ、おはほうこふあいまふ。瀬川しんこ……
：慎吾です。朝早いのが苦手な俺に、朝の挨拶なんてさせないで欲しいなあ、なんて思いました……ふああ。

「慎ちゃん? 早くしないと、遅れるわよお?」

「ふあいふあい、いつてきまあす」

なあんか、和やかに始まったのって、一話以来?

あれ? 一話って、和やかに始まったっけ? ……うゝん、思い出せない。

「睡魔扇風機!!」

はい、確かに睡魔には襲われてまう……じゃなくて、襲われてますけど、扇風機関係ないんですけど。

「ああ、またやつちゃった。……すいません! この道教えて管サイ」

管サイ!? 新種のサイかよ!

……って、このミスリ方、覚えがあるような……。

「あのお、きいてまふ?」

「聞いてマップ」

「よかったあ。無視されてたかと思いましたあ」

……あ、やっぱり、いつぞやの迷子のおねえさん。

「で、道って、どこへ行く道ですか?」

「手印語句です」

「……すみません、読めないんですけど」

「読めない?」

「あ、すみません、何でもありません。で、どこへ行くんですか?」

「……読めません」

「さっきの、手印語句?」

「いえ、それじゃなくて、これです」

差し出されたのは、小さなメモ。……すみません、字が下手過ぎて読めないんですけど。

「……なんて書いてあるんですか?」

「えっと、真木部不動産です」

「……読めてるんじゃないですか」

「あら、本当。テヘ、お姉さんたら、ダメねえ」

自らダメだと言いますか、フツー!?

あ、やっと思ひが覚醒してきたあ。

「で、どういったらいいのかな?」

「ここを戻って、左に曲がって、その後ずっと真っすぐ行って突き当たりをまた左で着きます。珍しい色の看板だから、分かりやすいと思いますよ」

「オリゴ糖!……じゃ、なくて、有難う」

そうして去っていった背中に、嫌な予感がしたのって、俺だけ??

） 数分後 （

「すまいへふ!?!」

何語!?!今発した言葉は、何語!?!

あ、ども、やっと思ひがハッキリして、しっかり前が見えるようになりました。

さっきまで前見えてなかったのって思った人!?!……そのとおりです!?!大丈夫、そう思った人がいても、大なべでグツグツ煮ようなんて思ってますから♪……多分↑ごく小さめの声で

「じゃなくて、すみません!……って、さっきの子?」

「さっき?会いましたか?」

「会いましたとおもいます」

だから何語！？それ、何語！？

「とりあえず、道聞きたいんだけど」

で、見れば、なんだか見覚えのある、クソきたねえ文字。いや、文字じゃねえな、これ。甲骨文字的なものが書かれたメモ。

「……読める訳ねえ」

「そうおもひっ!!」

思いつきり噛んだ!! 勢いよく噛んだよ、この人!!

「……そう、思いますよねえ（泣）」

……あ、やっぱり痛かったんだ。目が涙目。てか、もう号泣寸前の卒業生並み!?

「上司が、これ書いたんです（泣）」

ここでも、泣くんじゃあ……。

「それよりも道」

「ああ、そですね。で、どういったらいでしょう？」

「ここをやっぱり戻って、右行って左行って右と見せかけて左です」

「そうですか！大変よく分かりました!! では、また!!」

また来る気なんですか!?!?

） 数時間後 （

「ズボラヘッド!!」

……。それに、どうツツコめと？殴りますよ、年上でも。容赦なく、グーで殴りますよ。

「じゃあなくて! ずびらべっば!!」

それもちつがああああああああああああう!!

「すみません! 間違いました! すみません!!」

最後のすみませんは誤ったの!?! それとも、道を聞くための一言

！？どっちですか！？

「あのお、さっきまあいまし——」

「はいあいしました。道はあっちです！！ていうか、もう、これ受け取ってください！！」

「……あの、ラブレターとか、そういうの……重いつて言うか……その」

「違うわ！！貴方の脳みそはどうなってるんだ！？これのどこがラブレター！？こんな地図記号だらけのラブレターもらったって嬉かないだろ！！」

「あれ？ほんとですね。あ、ありがとうございます！？」

「……この人に、普通って言葉、当てはまらないな。」

「では、これ、ありがたくつかわせたいただきまくべすべりだっき！！！」

最後のほう、なんていったか、全然わからないんだけど！？てか、あれはなんですか！？言葉ですか！？暗号じゃなくて、言葉なんですか！？

（ さらに数時間後 ）

「あいれんせてるすぽ！！」

もう、『すみません』って原型がどこにもねえ！！！！

「じゃ、ないや。これは私の必殺技だわ」

どんな必殺技！？物忘れか？物忘れのための必殺技か！？

「あの、メモ、失くしちゃったんで、もう一枚、いただけませんか？」

「……」

「ダメ、ですかね？」

いや、ダメじゃねえよ？いや、ダメか、あんたの脳みそが。もう、

腐ってカビ生えて大変な事になってるもんな。うん、ダメだね、脳が。記憶力が。

「はい、今度はなくすなよ」

「マイケルジャンクソレ!!」

……誰?

ゝ まさか……ねえ ゝ

もう学校に到着しました。安心してください。学校なんだから、どう迷ったって、これな――。

「サライ歌います!!」

勝手に歌ってろ!!そして、24時間迷い続け、歌い続けろ!!もう俺は疲れました!!

「じゃあ、なくて、すみません。最後に一つ、うかかいたいんです」

……うかかってなに?おかかの進化形??

「……じゃなくて、伺いたいことがあります」

「何?」

つめてえとか思わないでください。これ、当然の報いです。

「この、真木部不動産って、どう読むんですか?」

「……それぐらい、読めるだろ?」

「……しんきば?」

「いや、それじゃ場所変わっちゃうし」

「しんもくべ?」

「なんか、惜しいような、惜しくないような。……てか、もつとポピュラーに」

「……うゝん、まきぶ?」

「おいしい!かすった!!」

「かすったんですか！？大丈夫ですか！？」

「……いや、そっちのかするじゃないです。大丈夫ですよ、怪我とかないです」

「よかったあ。で、何て読むんでしたっけ？」

「まきべです、まきべ！覚えといてくださいね」

「灰！ありが吸う引きです！！」

「……もう、ツッコまなくても、いいですか？」

「では、私はこれで……」

「あ、最後に一言わせてください」

「難ですか？」

「……ホント、どうなってんだ、この人の脳みそ。」

「もう、社会人をやめなさい。それが、貴方にとっての救いとなります」

「はへ？」

そういうしかねえですね、そういうしか……（疲

43、いい加減に、覚えよう!?(後書き)

余談ですが気がつけば、もう、感想が30件以上もきているではありませんか!そして、PVも、一万を突破!!こんなに嬉しい事が、他にあるのでしょうか!?

本当に、有難うございます、こんな乱文を読んでもらって(泣

一応、これからもつか出でて欲しいキャラ、略してリバキャラ募集してますんで、これからも、ホント、これからも、しつこいようですが、これからもよろしくお願いします!

あ、略して何故リバキャラになるの?とか、疑問に思わないでください。答えられませんから……。

→適当につけただけとは言えないだけ。

44、仲良くしよう!?(前書き)

ども、気がつけば、というか、よく見てみたら、アクセス数が、約4万です!!

こ、こんなに大勢の人に読んでもらっていたなんて、正直驚き……。

で、今回ですが、また嬉しい事に、リバキヤラ(まだ言うか)の希望が!! 本当に嬉しいです!

ではでは、本編の方、お楽しみください♪

44、仲良くしよう!?

「シドニーお変えリィ!!」

「慎吾にい、お帰り!!」

「……あれ? まだいたの??」

「いちゃいけないの?」

ダブルで言うなや、ダブルで。

もう、しよっぱなからミスってるし、かたっぽ。もう、紹介しなくても、分かるよね? 例の、双子ちゃんです。

「お帰り、慎吾にいちゃん!!」

三つ子!?

……んな訳ねえよな。えっと、このちっこいのは、隣の沙琉覇……だったよな?

「あっそぼ♪」

これ、多分夏鈴。

「あっども♪」

夏藍だ。……てかおまえ、どっかの平社員かよ。

「あっそぼう♪」

お前にいたっては、何故にいる!?

「お前はかえれえ!!!」

蹴り飛ばし、家から追放したのは、森野馬鹿です。気にしないでやってください。

「ねえ、あそぼうよ、慎吾にいちゃん」

「……荷物、置いてきてからな」

「じゃあ、私がバッグもってってあげるう」

「有難う、夏鈴」

「テヘヘ」

……ちっこいの『テヘヘ』は、許せるな。

「じゃあ、私がにいちゃん連れてってあげる」

「どこに？」

「逝こう!!」

あの、上指差しながら逝こうって、……ちょ、かなり不吉なんですけど。

「……行こうか、夏藍」

「ボクもいくう」

「あいあい」

……沙琉覇。お前がいる理由も分からんぞ。

「慎吾にい、バッグおもおい!!」

「あゝあゝ!! だからって引きずるな!」

「……ごめんなさい」

「……」

そこで涙目をつかうなああああああああああ!!

まるで俺が悪者じゃねえかつ!! ていうか、悪者だよつ!!

「自分で持っていくから、ここまでご苦労さん」

「遺体が持っていく」

遺体は動かないよ!? ていうか、遺体なんだから、言葉すら発せられないから!!

「遺体じゃないでしょ、あたしでしょ」

「痛いって言ってないもの」

いや、それもそれで違うから。

「沙琉覇、お前はリビングでちょっと待ってな」

「ボクだけのけもの?」

どこでそういう言葉を知る!? 昼ドラか!? 昼ドラから学ぶのか!?

「……あとで、ちゃんと遊んでやつから」

「うん!」

うむ、元気でよろしい。花丸あげちゃう。

「私が持っていくのお」

「いたしかたない」

どこのお国の言葉でござるか!?

「わたしいがあ」

「私画家あ」

違うだろ!?! 立派な幼稚園児だろ!?!

「わたしい」

「○ザン」

随分とマニアック!!

「わたしだってばあ」

「綿菓子たべたいい」

願望!?!

「その手を放してよお、夏藍」

「そっち倉庫」

「私がやっぱり運ぶのお」

「私が県知事い」

「私があ」

「わしがあ」

「放してえ」

「話し手え」

「夏藍ちゃん、私がおねえさんなんだよ」

「関係あるもん」

「だったら、放して!」

「宵だあ」

「私もいやだあ」

……よく、話が繋がるよね。俺だったら、もう何回もツツコんでるよ。

って、そんなのどかな事言ってる暇がない! バッグが、バッグが悲鳴を上げている!!

「放しなさい! 夏藍ちゃん!」

「花散らしなさい! 夏鈴ちゃん!」

「ちよっと、待って! 自分で持ってくから、沙琉覇と一緒にリビ

ングで待ってて、な？」

「やあ」

「矢あ」

……夏藍のも、一応否定だよな？

「大人しく待ってないと、俺は沙琉覇とだけしか遊ばない」

ど、どうだ！？これで、バッグを解放するのか！？

「わかったあ」

「和勝ったあ」

……何に？

という、かなり災難な事によって、子供3人に囲まれて動けなくてちよつと苦しい瀬川です。動けなければ何もできないし、遊ばれ放題、さりたい放題ですよ、もう。

「キャハハッ」

「ギャバツ」

チョコの事かよ、ストレス社会で働くためのチョコの事かよ。

「おもしろおい、慎吾にいちゃん」

俺はいたって面白くない。逆に、疲れました。てか、疲れたよ、コンチクシヨウ。

「ねえ、ままごとしよう」

「言い値え」

だから、お前はどこからそういう言葉を持ってくる！？

「ボクもやる」

じゃあ、俺は帰る。

どこに帰るかって？もちろん、人の居ない自分の部屋へ。

「じゃあ、慎吾にいが、パパでえ、私がママあ」

「ダメエツ！私がマーマレード」

ジャムかよ！！

「違うう、夏藍ちゃんは、子供お」

「威嚇う、夏鈴ちゃんは、衣お」

威嚇！？誰に対して！？てか、お前は犬かよ！！

「ボクは？」

「こども」

うん、あっさり即答。しかも、二人揃って。

ああ、なんだか沙琉覇が不憫……。

「私がママア」

「銀座のママア」

「私よお」

「赤潮お」

「私だったらあ」

「明日になったらあ」

「ママは私！」

「ママは仕事！」

「夏藍ちゃんは、子供でいいの！」

「夏鈴ちゃんこそ、ここぞでいいの！」

「わたしい！！」

「たかしい！」

だれ！？

あ、すんません。どうしてもツッコみたくて。あの、……ホント
すんません！

「わあたあしい」

「だあがあしい」

「わたしっ！」

「わらし！」

「私だって、言ってるのにい」

「綿菓子だって、言ったのにい」

「ママはあ、私よお」

「ママはあ、死んだよお」

死んだの！？死んじゃったの！？

てか、まだ生きてるでしょ、夏藍！！キッチンで母さんと一緒に

料理作ってるから!!

ああ、またツッコんでしまった……無念。

「ママは私!」

「ママはしたない!」

「私がママなの!!」

「ワシがジイなの!!」

「私だって!!!!」

「ガラスだって!!!!」

「私!絶対私!!!!」

「悪さ!絶対悪さ!!!!」

「わあたあし……!!!!」

「かあかあし……!!!!」

「夏藍ちゃんの、バカ……!!!!」

「夏鈴ちゃんの、カバ……!!!!」

「……喧嘩は、よそうね」

ちよっと、真面目に止めないといけない気がするんだけど……。

「夏藍ちゃんなんて、大っ嫌い!」

「夏鈴ちゃんなんて、ス○フキン!」

「あっちいけえ!!」

「マッチうれえ!!」

「言ったなあ!!」

「一束あ!!!!」

もう、ポカスカポカスカ、やってるんですけど、止めた方が、いいのかな? てか、俺のまん前でやられると、俺にも被害が及ぶんだけど。

てか、いつの間にか平和な顔で沙琉覇は寝てるし! うらやましいなあ、俺も寝てえよ。

「あっちいけ、あっちいけえ!!!!」

「○△□×、○△□×!!!!」

何言ってるか、わかんねえ……。あ、てか止めるんだったよな、

俺。

「やめ、やめろって、2人とも!」

「慎吾にいは、黙っててえ」

「四国にいは、挟まっててえ」

どこに!?!? てか、人の名前くらい、ちゃんと言おうよ!!

「やめないと、遊ばない!」

もう、使えないかなあ、これ。前に一回使ったし。

「いいもん。沙琉覇君に遊んでもらうもん」

「いいとも。タ○サンに遊んでもらうもん」

やっぱり、そっちのいいともだったんだ。てか、夏藍。タ○さんは、遊んでくれないよ、忙しいから。

……って、こんな事じゃなくて!!

「じゃあ、ご飯抜き! 夏鈴と夏藍のは、俺が食う!」

どうだ! まいったか!! いまは腹が減ってるから、多分2人分くらいまでは食える! ……はず。

「……じゃあ、喧嘩しない」

「……ジャー、県下しない」

夏藍、意味分からんから。

「じゃあ、飯を食うぞ。もうできたみたいだ」

「うん!」

大変よろしい返事で。

……あれ? そういえば、いつの間にか沙琉覇がいない?

「慎ちゃん、早く食べましょう」

「隣の子は?」

「帰ったわよ。あの子、礼儀正しい子よねえ」

……小橋並に、影薄いかも、沙琉覇。

「慎吾にいの隣は私い!」

「埼玉県の隣は私い!」

……もう一波乱、ありそうな予感……はあ。

44、仲良くしよう!?(後書き)

もちろん、まだまだ、リバキヤラは募集します!何度でもいいので、
ぜひ一度、お声掛けくださいまし!

では、また次回会いまほ〜♪

45、M×Mは、ヤバイ！？（前書き）

まず始めに、更新が遅くなってしまつてすみません。

言い訳がましいんですが、使っているPCが一時的な反抗期になつたため、更新が遅れてしまいました。

楽しみにしていた方々に、本当に申し訳ないです……（謝

これからは、もっとPCをいたわりつつ頑張ろうと思うので、よろしくお願いします。

45、M×Mは、ヤバイ!?

「では、めんどくさかった、帰りの会的なものを終わりにするぞ
お」

……先生、貴方はどんだけやる気がなかったんですか。普通、生徒の目の前で、めんどくさかったと言いますか？

何だよ、帰りの会的なものって。いいじゃん、ただの帰りの会で、てか、なんで帰りの会なの？もっとカッコよく言えなかったのか、先生。&作者よ。

「あ、そだあ。えっと、誰だっけ？名前忘れた。その席のお前」
え？俺？？それとも俺付近の人？？

「お前だお前、俺並にやる気のなさそうな顔してる、お前だ」
って、それは俺の事ですか！？やっぱり俺の事ですか！？

てか一つ言わせろ、先生。お前よりは、俺のほうがやる気に満ちた顔をしてるよ！！

「あの、なんつったかな。新しく剣道の顧問に来たM先生が、お前呼んでたぞ」

いや、M先生じゃねえでしょ？確か、……だれだっけ？

「ともかく、放課後その先生のトコに行くよおに！じゃ、終わり。みんな、さっさと帰って、俺の仕事減らせよお」

結局そこですか！？てか、あんたはどんだけ楽したいの！！

と、言う訳で。てか、最近、『と、言う訳で』って、物語が始まるようになった気がするんだが、気のせい？いや、気のせいじゃねえよな？？

なあんてことは、どうでもよくて。本題は、いま目の前にいる変人。じゃなくて、先生。

「て、事で、退部は認めません！」

すみません！退部届け出してねえし（出し忘れただけで）、退部

させない理由も聞いてねえんだけど!!

「だから、ホラ、竹刀握って! 素振りするよ!!」

てか、勝手に話を進めるな!! 人の話を聞きたまえ!

って、俺しゃべってねえ! まだ、一言もしゃべってねえじゃん!!

「そうよ、ダーリン! 強くなって、か弱い姫をも待って!!」

どこら辺が弱い!? てか、お前はどこから湧いて出てきた、蛆虫の森野!!

「そうよ、Sたる者Mをいじめるための力をつけなくてはいけないわ!」

いや、そんな力いらねえし。てか、先生!? 何故に森野の話にのってるの!?

「ダーリンは私のためにSになるなら、私はダーリンのために、もつとMになります!!」

「そう、そのいきよ! 森野さん!! それでこそ、Mの女王に相應しい!!」

「ダーリンがSになるだけ、私はMになっていく……ああ、何て素晴らしいの!」

「華麗なるツツコミを入れるSと、華麗なるボケを入れるM……憧れるわあ」

「そして最後には、なんだかんだでゴールイン! 愛のスーパーシヨットを決めて見せるわ!!」

「監督も、きつと応援してくれるわ!! きつと素晴らしい新婚生活が、貴方達を待ってる!!」

「アハハハハー! ☆」

「アツハハハハー! ☆」

「すみません、殴ってもいいですか?」

あ、俺、やつとしゃべった! てか、やつと口を挟む機会ができた!! いままでツツコむにツツコめなくて、息苦しかったぞ……。

「どうぞ、ご自由にお殴りください!!」

「どうぞ、ご自由にお取りください! ニュアンスで言うなあー

「てことで、退部はなしって事で♪」

「だから、私をもっといたぶっていいのよ、ダーリン♪」

……好きでツッコミ入ってる訳じゃねえし、好きでいたぶってるつもりもねえし。

「さあ、これからもっとMになりましたよね、森野さん！」

「そうですね、先生！これから先、もっと素敵なS様が私達を待っているかもしれないわ！」

「もしかしたら、やっぱりそのままゴールイン！？」

「そして、華麗なるSM生活の始まり！？」

「羨ましいわぁ」

「微笑ましいわぁ」

どのへんが羨ましい！？どのへんが微笑ましい！？ただ鬱陶しい嫁の完成じゃねえかよ！！

「さあ、未来のSMバージンロードを歩くわよ、森野さん！！」

「ハイ、先生！いや、師匠！！」

「キャハッ♪」

「ヒヤハハッ♪」

おい！？森野！！頭の馬鹿さが悪化してる証拠に、笑い方が変になってるぞ！？

「さあ、行こう！Mのワンダーランドへ！！」

「はい！！」

……このまま死んでくれたりすると、嬉しいんですけどね。

肩を組んで去っていく馬鹿の背中を見ながら、俺はそう思いました。……って、作文！？

45、M×Mは、ヤバイ！？（後書き）

前書きに言えなかったので、今言います。今回もリバキャラです！彼女の登場を再び……と、思っていた私的には嬉しい投稿でした♪投稿してくれた方、本当に有難うございます！そして、どうだったでしょう？彼女の活躍は。

ではでは、これからもリバキャラ、ドSMな奴らを、よろしく願います！！

46、笑いすぎにも程がある!?(前書き)

今日は、リバキヤラ一休みです!

46、笑いすぎにも程がある!?

……何故、俺みたいなのに馬鹿は集まるんだ? てか、なんでこの作品には馬鹿ばっかなんだ? どうにかならないのか、この環境……。ああ、○ーミンに出てくる、ス○フキンになりたい。あいつみたいに、自由と孤独、音楽を愛して生きて行きたい。

……あ、でも、音楽はあんま好きじゃねえな。自分で言うのもなんだけど、音痴だし。リズム取ったりするの嫌いだし。……ああもう! ただ単に、自由になればそれでいいや!!

「キャハ☆ ねえ君、一年生だよな? 帰宅部??」

「そうなりたい予定です」

「キャハハ☆ ねえ君、マジウケるんですけど!!」

どのへんが! ? どのあたりがマジウケるんですか! ?

ていうか、あなたは誰! ? どこからやってきた! ? 信号赤だし、一本道だし。どこから湧いてきた? ……マンホール? んな訳ねえよな。うん、そうであって欲しいな。

「キャハッ☆ あ、言えば、私の名前、教えてなかったね」

「あ、そうですねえ」

どーでもいい。どーでもいいから帰らして。

「キャハハ☆ 私、笑^{わらい} 咲^{えみ}乃! アハハ☆」

どのへんがどう面白くて笑ってるんだ、この人……。

「キャハハッ☆ 苗字はそのまま笑うって書くのよ。面白くない? マジウケる!!」

キャッハハハハハハハハハハハハッ!! ↑咲乃の笑い声

「キャハッ☆ ゴメン、面白すぎ!」

いや、だからどのへんでウケてるのか、サッパリ分からんですよ……。

「キャハハ☆ 君の名前は、何君? あ、違うか、何ちゃん??」
「君ですよ、君!! どちらどうみても、男子の制服着てるでし

よう!!」

「キャッハハッ☆ あら、ホント! ヤバい、マジウケる。君、チヨーサイコー!!」

チヨー最悪う。なんですけど!?

「キャハ☆ で、君の名前は?」

「……瀬川慎吾です」

「キャハハッ☆ ○MAPの香○みたいみたいな名前ね! アッハハッ!! マジウケる!!」

「……(怒)」

すみまつせえん。一度だけ殴る事をお許しください! (怒)

「イニシャルはあ……、S・S……で、ドSじゃん!!」

「はあ?」

「キャハハ☆ S・Sで、Sの二乗! もう、マジドS!!」

ギャハハハハハハハハハハハハハハハハ!! ↑咲乃の笑い声
パート2

てか、どのへんがドSなの!? どうやってドSに結びつけたの!?
てか、Sの二乗関係なくね!?

「キャッハハッ☆ もう、マジ君サイコー。欲しいくらい」

「いえ、そういうもんじゃねえんですけど。俺、人なんで、ものじゃねえんですけど」

「キャハハッ☆ 冷静なツツコミイ。ギャハッ☆ 星三つあげる
っ」

……こんなにも嬉しくないの、久しぶりなんですけど。てか、フツツと怒りが込み上げてくるんですけど。

「キャハ☆ ていうか、一家に一人必要ね!」

「いらねえでしょ」

「キャハッ☆ つれないねえ、でも、面白いし、可愛いから許す」

「面白いはいとして、可愛いからは余計です」

「キャッハハ☆ 冷たい冷たい、氷の心だあ」

「冷たいですか、フツ―ですよ」

「キャハハ☆ いいわあ。やっぱり君が欲しい!!」

いや、笑いながら言われても、困るって言うか、……キモい。

「キャハッ☆ 困った顔も、可愛いぞ♪」

ホントすみませえん! 一度だけ、一度だけでかまわねえから、こいつを殴らせてください!! 渾身の力を込めて!!

「キャハハ☆ ホラ、信号変わったみたいだよ」

「……れ? ホントだ」

よかったあ。神様有難う。小さなお心遣いが、とても嬉しいです。

「……で、なんで笑さんはまだいるの?」

「キャッハハ☆ 帰る方向、同じみたいだねえ」

「……そうですか」

非常に嬉しくねえよ。てか、嬉しくない。非常によろしくない、嬉しくない。あゝあゝ! なんか、この人がいるというだけでムシヤクシヤするっ!!

「キャハ☆ 私の名前、呼び捨てでいいよお」

「そですか」

「キャハハ☆ ねえ、呼んでよ」

「なんで?」

「キャハッ☆ 何となく、呼んで欲しいから」

「断る。無駄な力を使いたくないんで」

「キャッハハ☆ ウケるう」

だからどのへんが!? どうやってたら、あんたみたいに笑い続けられるの!? てか、どんだけ笑うの!? 会ってからずっと笑ってるよね、この人!!

「キャッハ☆ ねえ、一回でいいからさあ、呼んで呼んで♪」

「他の人に呼んでもらえばいいでしょ」

「キャッハハ☆ 君さあ、先輩がお願いしてるんだからさあ、聞いてよお」

「関係ない」

「キャハハ☆ つつめたあい！」

嬉しそうなのは何故ですかあ！？てか、笑い過ぎだって！！

「……何故にそこまで笑えるの？」

ハッ！思わず口に出してしまった！！

「キャハハ☆ なんか、面白いから♪」

いや、何も面白くないんですけど。ていうか、勝手に笑ってるだけですよ？

「キャハ☆ さあ、慎吾。君をていくあうとする事にするよ」

「……………はあ？」

「キャハハッ☆ 反応おっそおい！！」

てか、いきなり呼び捨て？いまさっき会った後輩なのに？てか、ぎこちなさ過ぎる英語は何！？

「キャハ☆ ウチはこっちだよお」

「え！？ いや、そっちはウチじゃねえんだけど」

「キャハハッ☆ 敬語じゃない方がかわゆすう」

「……（怒）」

「キャハッ☆ 目に見える怒りが怖あいッ」

全っ然怖そうじゃねえんだけど、この人。逆にむしろ楽しんでるよね、この人。

ていうか、みなさんもいい加減この人にイライラしてきたでしょ？なんか、訳の分からない怒りに襲われていたでしょ？

「あの、……自分の家に帰るんで、その手を放してくれませんか？」

あ、そいえば、いまの俺は腕を捕まれています。ものっそい力で。

……ててっ！

「キャハハ☆ もう君は、私のもの」

……森野のいところ？もしくは親戚？……って、一緒か。

「キャハハッ☆ もう、この手は放さないゾ」

あ。やっぱ森野だ。人の怒らせ方（俺限定）、口調が同じだ。腹立たしいほどに。

「キャッハハ☆ 君を抱きしめた帰りたいよ、慎吾♪」

て、事で。

「……ざけんじゃねえよ!!」

先輩関係なく、殴り飛ばしてみましたあ♪結構楽しいかも……♪

「だあれがお前みたいな変人と帰るか! てか、人の許可もなく呼び捨てにすんなよな! しかも下呼びで!!」

「キャハッ……☆ 結構力、強いよね」

「女子っぽい顔してるからって、なめてると痛い目見るぞ、このやろう! 俺はなあ、それでも男だ、コンチキショウ!!」

「キャハ☆ 君に惚れそうだよ、慎吾♪」

「楽しいに人が注意した事を、軽々しく口にすんなああああああああ!!」

その日は、アッパーを食らわせて、気を失わせてから帰宅しました。じゃねえと、ストーカーが増えそうだったんで。てか、増える気がする……。やだなあ……。

そしてその日から、ホントにストーカーは増えました。何故分かったかって? 森野と一緒に家の門にいるのが見えたからに決まってるんだろ。そのあとの二人の状況は、聞かないでやってくれ。

46、笑いすぎにも程がある！？（後書き）

投稿してくれた方には申し訳ないのですが、リバキャラ一時休憩です。明日は多分、またリバキャラをやります。

久しぶりの新キャラ、……ちよつと変すぎたかな？

47、実は……!?!? (前書き)

ども、下弦です。

もう、あと数話で50話突破……!まさか、ここまで続くとは、正直予想外ですっ!!

まあ、そんな余談はいいとして、リバキヤラ第……(あれ?第何段だ?)だ、第……第○□△×↑ごまかしたを、お送りいたします
!!!(焦)
た、楽しんでくださいね!!

47、実は……!?

あゝ。今日もロクな日にならない気がする。てか、ロクな日にならないな、絶対。

ん？何故断言ッ！？つか。それはな、朝からくらあい性格の人に会い、てか、待ち伏せされてたからに決まってるだろうがあああああああ！！

(逆ギレ？)

ツッコむな作者よ、そっとしておいてくれ。

(あいよ)

「……愛多ければ憎しみ至る」

って、朝から不吉な事を言われたため、護衛(?)的な感じで芙茶麒さんがついて来た。というか、何気なく隣に来て、一緒に学校行ってるだけ。まあ、森野とか、斎賀みたいに五月蠅くないから、良しとしておこう。

「……青菜に塩」

あ、その意味知ってる。てか、そんなに俺ってしょんぼりしてるように見えるか？

「俺って、元気ない？」

メッサ頷かれた俺って……。

「痘痕あばたもえくぼ」

「え？」

照れたようにうつむいて、首を振ったけど、それって励ましてくれたって事か？たいてい女子って、そういうような事言う時、照れるイメージがある。これって、俺だけの偏見？

「……まあ、いっかあ」

あゝ、のどか、のどか。いつもこんなんだったら、幸せなのになあ。ていうか、メツチャ幸せ♪

「ダー………リ………」

出た！悪の塊！！

「来るなっ！」

回し蹴りで、ゴミを撃沈。コンクリの壁に激突して、永眠……しなそうだな。

「もう♪朝から愛のムチなんて、嬉しいゾ♪」

「ダーリンって言うな以上さよなら」

「あの、早口すぎて、なんて言ったか、全然分からないんですけど……」

「シネシネシネシネシネ死ねっ」

「内容変わってない！？でも、ダーリンの言葉なら、何でも嬉しいゾ♪」

「行こう、芙茶麒さん。こんな馬鹿、どうでもいいからさ」

「勝てば官軍、負ければ賊軍」

……軽く、馬鹿にした？森野の事、馬鹿にした？？

「あらいたの、芙茶麒さん。あんまりにも影が薄かったものだから、気付かなかったわ」

うっわぁ、嫌味な奴う。絶対人から好かれないタイプだな。

「かには甲羅こうらに似せて穴を掘る」

……意味分かんないけど、多分、森野に言い返したんだよね？

「何よ！私はかにじゃない！いたとしても、沢がにくらいよ！！」

森の話ですか！？森野の話じゃなくて、森の話ですか！！

川向かわむかいの火事

「何それ！私の家の向かいに、川なんてないわ！残念でしたね！！」

「木に竹をつぐ」

「意味分かんない！だから嫌いよ、芙茶麒さんなんて！！」

「……」

おい！黙っちゃったじゃねえか！かわいいそうだろ、芙茶麒さんが

!!

「朽木は柱にならぬ！」
くちぎ

あ、怒った！静かで、大人しいはずの芙茶麒さんが怒った！！

「朽木は柱にならぬ朽木は柱にならぬ朽木は柱にならぬ！！」

しかも繰り返して言うし！よっぽど頭に來たんだな……。

「私は元々木なんかじゃありません。だから、関係ありません」
「」

「君子は豹変す」
ひょうへん

「……たまにはさあ、普通にしゃべったらどうなの！？」

あ、意味分らないから、普通にさせようとしてる。ズリイ奴。

「ごまめの齒軋り」
はぎし

……今、『ハンッ』って、笑ったよ！？芙茶麒さんが、思いつき
り人を馬鹿にした瞬間、見ちゃったよ！？てか、そんなキャラだったの、芙茶麒さん！

「私は寝ても、齒軋りなんてしないもん！！」

「……」

クスクス笑ってるう！？芙茶麒さん、笑ってるう！？！？

「何よ何よ！いい子ぶりっ子、上等よ！！」

いや、意味わかんねえから。ちゃんとした日本語を使え、馬鹿森野。

「転がる石に苔は生えず」
こけ

か、完璧に馬鹿にしてる！？森野を馬鹿にしてる！？こ、この子、意外と腹黒いかも……。

「だから！私にも分かるような言葉を使ってしゃべりなさい！
じゃないと、ダーリンの隣に居ちゃダメ！！」

「だからと言って、お前が来るなっ！！」

軽く、グーパンチしてきました。もち、顔面狙いで。

「これだから、ダーリンは大好き」

「一度黄泉の国まで逝って来い。そして、永久に帰ってくるな」

「いやあ。ダーリンと一緒にだったら喜んで♪」

「やっぱりお前は死ぬべき人間だ。お前がいるから地球温暖化とかなってるんだよ」

「それは、ダーリンへの愛が熱すぎるからよ、きっと。……って、行かないでよ、ダーリン！」

ちっ。無視して進もうと思ったのに、見つかったか。

「さあ、芙茶麒さん。私のダーリンから離れてちょうだい！」

「さきからす鷺を鳥」

（え？私？？）

違うと思うぜ、作者よ。だから一度消えなさい。てか、消えろ。

（ひどいなあ。まあいいや、消えてやるよ）

「何！？この作品の作者の事を言ってるの！？言っとくけどあの人は、鴉だから。鷺じゃなくて、鴉だから！！」

こっちでも言ってる！？てか、『カラス』の字違うの気付いてない系！？

作者のカラスは『鴉』だけど、芙茶麒さんの言ってたカラスは、

『鳥』だから！結構違うぞ！！

「しかお鹿を逐う者は山を見ず」

うあ、すごい飽きれよう。もう、飽きれてモノも言えないって、顔が語ってるよ。

「あゝもう！仕方ないわね！！いいわ、一日だけ、私のダーリンとつるむ事を許してあげるわ」

「お前のダーリンじゃねえっての」

「いい事！私のダーリンに手を出したら、絶対、ぜえったいに許さないんだから！！」

「だから、お前のじゃねえって言ってるんだろうがあああああああああー！！」

軽くじゃなく、思いつきグーパンチかましてやりました。いやあ、怨み辛みを晴らすのって、こんなに楽しかったんですね♪♪

「……舌^{した}を巻^まく」

え？なんで？？

まあ、いっかあ。五月蠅いのは、今日は付きまとしてこない見たいだしい。めでたしめでたしって、事で♪

いやあ、ほんとに意味分かんないことわざだらけだったけど、何とか生き残れた俺に乾杯！

47、実は……！？（後書き）

えっと、前みたいにな、ことわざの意味を紹介しまあすつ。

愛多ければ憎しみ至る……人から愛されかわいがられることが多ければ、必ず人から憎まれるようになる。

青菜に塩……急に元気をなくして、しょんぼりするようす。

痘痕もえくぼ……自分が愛している者については、みにくいあばたもかわいいえくぼに見えるように、欠点でも美点に見えるものだ。

勝てば官軍、負ければ賊軍……勝ったほうが正しいとされ、負けたほうが悪いとされるのが世のならわしである。

かには甲羅に似せて穴を掘る……人は自分の身分や力量に応じた言動をするものだ。

川向の火事……自分には直接何の関わりもないことのたとえ。

木に竹をつぐ……つりあいがとれないたとえ。ふさわしくないこと。

朽木は柱にならぬ……根性の腐った人間は使い物にならない。

君子は豹変す……行いの立派な人は、悪い点や誤っているところに気がついたらずぐに改めるものだ。

ごまめの歯軋り……力のおよばない者が、やたらにいらだたしげに憤慨する意。

転がる石に苔は生えず……急流の石は流されて転がるので、水ゴケが生えない。一つの所にとどまりっぱなしで努力しないと、何も身につかないということ。

鷺を鳥……明らかに違っていることを主張してやまない。

鹿を逐う者は山を見ず……一つのことに夢中になっている者は、ほかのことを顧みない。^{かえり}目先の利益を得ることに夢中になっている者はまわりの事情に気づかない。

舌を巻く……とても感心したり驚いて口がきけない様子。

うう、また多かった。調べんの、疲れたあ……。

48、静かにSへの目覚め!?(前書き)

ちよおっと短いです。でも、気にせず、どーぞー♪

48、静かにSへの目覚め!?

「久しぶりに、登場!!」

いきなりなんだ、この影薄が。

「そこ! 影が薄いと思うなよ!」

登場早々に、読心術!?

「ダーリン♪おっはよ♪」

「ダーリンじゃねえつつってんだろ!!」

「ダーリンじゃなかったら、何?」

「何って、普通に名前だろ? 普通に考えて名前だろ?」

「森野慎吾?」

「だから! 勝手に名前作ってんじゃねえよ!!」

「あの〜」

「あら、勝手じゃないわ!! 婚約者なんだから、それくらい、当然でしょ!?!」

「すんませえん」

「婚約なんかしてねえし! 当然じゃねえし!! 俺の前から消えうせろや」

「……あ——」

「いや! あなたの前に私がないと、きっとあなたは自分を失ってしまうわ!!」

「見失わねえよ! 逆に大喜びだよ! 小躍りしちまうよ!!」

「……す——」

「私がいるという嬉しさに!?!」

「んな訳あるかあああああああああああああああああ!」

「なんで!?!」

「何でもだよ!?!」

「何故に!?!」

「同じような意味の言葉を使うな!!」

「どうして!!」

「だあかあらあ——!!」

「お前らは、人の話すら聞けねえのかよ!!」

「おお!!? 小橋が怒った?」

「大体なあ、嫌いだったからお前は口を利くんじゃねえよ、全く。だからお前はねちねちとストーリーカーされんだよ。嫌いだったら嫌いってはっきり言え、そして縁を切れ。何だよはたから見れば楽しそうに話しやがって。人の話も聞けなくせに、人生語んじゃねえよ!! いいか、瀬川。嫌だったらはっきり言えよ、ちんたらちんたらやってっと、またストーリーカー増えんぞ。森野しかり、笑しかりだ。分かったな!!」

「は、はい!」

「き、氣迫負けしました……」

「それと、お前もお前だ。好きなら好きとちゃっちゃんと告れ。そして話を終わらせてやれ、作者だって大変なんだぞ、受験が終わったからって、平和な日常を過ごせる訳じゃねえんだ。球技大会があったり、文集作ったり、卒業式の練習したり、結構大変なんだぞ!! それをお前らのせいで、余計に大変にしてくだぞ? 平和にいられねえんだ。『ああ、次のネタどうしよう』とか、『ああ、あそこの文、変だったかな?』とか、中学生らしからぬ事を考えてるんだ! それを配慮してこそ、真のヒロインと言えるんじゃないか!? それなのに、お前は『ダーリン、ダーリン』言って、引っ付くだけで、話を伸ばす。だからお前は馬鹿なんだ!! 分かったか、森野!!」

「は、はひ!!」

「も、森野も氣迫負けしてる! てか、驚きすぎて、軽く嘔んでる!!」

「俺だってさあ、こんな親父クセエ事言いたかねえんだよ? 名前は確かに親父っぽいけど、中身までは親父じゃねえんだ。ともかく!! 今はお前ら告白しろ!! そして最終話へとつないでいけ!!」

「は、はひ!!」

また氣迫負けしてる……。てか、いい加減噛むな。

「そこ！心の中でツッコんでる暇があったら、告られる覚悟くらいしとけ、分かったな！！」

「……え？」

「『え？』じゃない！『はい』だ！！OK？」

「オ、OK……」

「よろしい。では、森野君。思う存分告白したまえ」

「……」

「返事はどうした！？」

「……はい」

「聞えんぞ！もう一回！！」

「はい！！」

「よしっ！！いけ！！」

「イエッサー！！」

……小橋のキャラ、変わってね？こんな奴だったっけ？？小橋って……。

「人は変わるものだよ」

……言ってる事、ジジクセエ。

「……あ、あの。ダージリン？」

「ダージリンじゃねえ、瀬川だ」

「え？ダージリンって言った？」

「言ったよ、馬鹿」

「馬鹿じゃない！恋の虜よ！！！！」

「あっそ」

「……いつになく、冷たいのね、ダーリン」

「いつもと変わらん。変わってるのは、小橋だ」

「……確かに」

「そこ！！話をずらさない！！」

いや、話ずらしてんの、お前じゃね？

「ダ、ダーリン……んくん、慎吾……君」

「下呼びかよ」

「……じゃ、瀬川君。わ、私、……せ、瀬川君のことが……」

……お決まりのタメですねえ。

さあ、茶でも啜って、一息つきますか。ふう。茶って、美味し♪

「瀬川君の事が、……す——」

キーンコーンカーンコーンコーンコーンコーンッ！！

……チャイム、無意味に長くね？

？チャイム？チャイムって、あのチャイム？？あのチャイム！？

「ヤツベエエエエ！！初遅刻！！」

「え、あの、すみまへん。……ダーリン！？」

てな訳で、『お、マジ！？マジ告る系！？』って思った方、残念

でしたあ。まだまだ告りません。てか、告らないから、安心してく

ださい。ちなみに、最終話へも行きませんから、ご安心を♪

では！マジに遅刻するんで、サヨナラ！！

48、静かにSへの目覚め!?(後書き)

ホント、いろいろ大変で……。ああ、早く卒業したいような、したくないような……。

ここまで読んでくださり、どうもです!!

49、楽しい体育の時間!?

「ええ。これからの体育は跳び箱！文句がある奴は出て行け！そして二度と体育の授業に現れるな！！」

先生、俺らがそんな事したら、ここに誰もなくなっちゃいますよ。誰一人として確実に残りませんから。

「せんせえ」

「なんだ！」

「ハチマキ忘れましたあ」

「何だと！？それは俺の授業を受けるつもりがないと言いたいのか！？」

俺は受けたくねえよ、こんな熱血馬鹿の授業。

「はい」

はつきり言った！？

「じゃあ、帰れ！やる気のない奴なんて、俺の授業にいる資格はない！！」

いや、俺達にはあるからね、教育を受ける権利が。

「やったあ、じゃねえ」

うわあ。嬉しそうに去ってったよ、あの子。スゲエ神経の持ち主。

「そこ！お前もハチマキしてねえな！それは俺に対しての——ああ！！」

何？何？俺？？俺ですか？？

「お前は人の話を聞かない第一号！！」

何だよその長ったらしい名前。俺はもっとコンパクトに瀬川慎吾だ。たった四文字だぞ、漢字にしたら。

「……長年の怨み、晴らさせてくれるわ！！」

長年って、今年会ったばかりですよ？

「せんせえ」

「なんだ!!」

「授業早く始めてくださあい」

「……分かってる!では、ランニング5周!!」

結構ウチの体育館広いからなあ。5周なんて、メンドクセエ。ちなみに、どうでもいい事だけど、体育は1組と合同だ。あ、俺は2組ね。で、森野は1組。ホント、どうでもいいけど。

「なあ、瀬川。変なのがお前の前にいるぞ?」

「何だ、小橋か。変なのって……確かに変だな」

変〓森野だと思わないように。今日の変な奴は、……先生だ。

「何してるつもりだ?」

「邪魔……じゃねえの?」

「誰の?」

「さあな。でも、軽く蹴る程度に退治しとくか」

「おい、一応先生だぞ?変だけど」

「変だからこそ、適当に始末しとくんだよ」

「……お前って、ホント腹黒……」

「さあ、来るぞ!」

「……何故に楽しそう?」

さり気なく、足を出している先生のその足に、勢いをつけて、普通に蹴った。ダイジョブ、手加減したからさ。

「ぐはああああああああ」

「……瀬川、先生、変な叫び声を」

「気にするな。気にしたら、お前も殺^やる」

「す、すみませんでした!」

「分かればよろしいのだよ、分かれば」

てことで、1周目クリア。

「……また変なことしてる」

「てか、あの先公の名前は何だ?」

「え？お前、もう忘れたの？」

「そういうお前は？」

「……誰だか思い出せねえけど？」

「だろ？」

で、今度は、バナナを食ってる。しかも急いで。多分、俺の前に捨てるつもりだろうな。てか、俺に何の恨みがあんの？てか、どこからバナナ持ってきたんだ！？

「そろそろだぜ、瀬川。今度はどんな黒い事すんだ？」

「黒くない、ダークブルーだ」

「いや、ダークって言ってる時点で」

「それ以上言ったら」

「すみません！！社長！！」

「それでいいのだよ、平社員A」

急いだ結果、食べ終わったように、俺が来るタイミングを見計らっているようだ。ああ、哀れな馬鹿に、神の救いを。

投げられたバナナは、見事に俺の前に落ちた。けれど、俺だったそこまで甘い奴じゃあない。拾い上げて、先公の行く先に投げる。

これでよし♪

「ダハッ！？」

「せんせえ、だっさあい」

「H A H A H A」

「……黒い」

てな感じで、2周目もクリア。

「またなんかしようとしてるぞ？」

「馬鹿の考える事なんて、お見通しだっつの」

「いつも馬鹿が近くにいろもんねえ」

「私を呼ぶ声が！！」

「なんで、お前が2組に混じってんだよ！てか、しかもここは男

子だぞ!!せめて女子んどこに混ざれや!!」

「いいじゃない♪体育の時間が、楽しくなるなら」

「出てけ。さもねえと、あの先公と同じ目にあるぜ?」

「どんな目?」

「ククク……」

「見てりゃ分かるよ、毒舌馬鹿M女」

先公がやろうとしているのは、タライ（もう、お笑いの王道を行うものだね。アレは）を、俺の頭上に落とそうとたくらんでいるようだった。

「さあ、パーチーの始まりだぜ♪」

「なんだよ、パーチーって」

「いいじゃない、面白そうなんだから」

「……いいのかな?」

で、タライは落ちてきました。俺の頭上に。それを俺は、回し蹴りで弾き返して、天井にいた先公にクリティカルヒット!!見事に落下を開始しました♪

「……こんな感じに殺される」

「……今日、私はダーリンに近付かないようにするわ」

「……それが賢明な判断だよ」

落ちてきた先公の跡は、綺麗に床に残ってました♪♪
ヤッベ。なんだか楽しくなってきた♪♪

という訳で、3周目も普通にクリア。

先公の回復までに、4周目もクリア。

「なんか、すごいもん持ち出してきたぞ、瀬川」

「アレのどこがすごい?」

「いや、普通にすごいから」

その小橋がビビッているものは、弓矢。もちろん、ちゃんと構えますよ、俺を的としてみたいだけど。

「どうすんだよ？アレじゃ太刀打ち」

「ククク……」

「く、黒い……え、笑みが黒すぎて、どす黒い……」

「あんなもので、この俺が倒せるのでも？甘く見られたもんだな」

「どこのラスボスの言葉だよ」

「だが！あんなもの、この俺様には通用しない！たとえこの地球が滅びようとも、俺様は消えないのだ！！H A H A H A！！」

「だからどこの隠しラスボス！？」

先公が、弓を構え、射ようとしている。でも、そんなのどうでもいい。てか、俺に関係ないし。てか、なんで俺が狙われてんのか、マジにわからねえんですけど。

「さあ、かかって来い！！」

「……俺らに被害が出ないようにお願いします」

「H A H A H A」

「瀬川、狩燐とキャラが被ってるぞ」

「ハハハ」

「あ、プライドが被るという事を許さなかったんだ……」

で、先公は矢を放った。モチ、俺狙いだけど、俺が当たったら、この話が終わっちゃうだろう？かっこ悪い感じで。

てことで、これからはグロいので、効果音だけで伝えたいと思います
まあす♪

バキッ！ドガッ！ズド！！メキ……メキメキメキ……バキッ！

はあい、終了。あー、久しぶりに汗流してスッキリ♪これでしばらくストレスは溜まらんな。うーん、気持ちいい♪

「あれ？先生は??」

一部始終を見ていなかった生徒の何気ない一言で、周りが脅えていたのはまあ、気にしなくてもいいかな？

「あれ？どうしたの、みんな??」

しよ^う♪

「え？
道蓋どうがい

49、楽しい体育の時間!?(後書き)

皆さんは覚えてましたか?この先生……。一回チラッと出てきた人です。分かる人には分かるだろうし、分からない人は……。そのままでもいいかもしれません。

50、心配性は、限りなく!?(前書き)

更新遅れてしまつてすみません。スランプつてのもあつたんですが、学校のほうも忙しくて、……ホントすみません。言い訳がましくて、すみません……。

では、気を取り直して、50話、楽しんでください!

50、心配性は、限りなく!?

今日のくだらない日課も、強制的に連れて行かれた部活も終えて、やっと一段落付いた感じ。ていうか、俺に安息の日はないと分かっているけど、やっぱりこういう一人の時間って、いいわ。俺、ひとり嫌いじゃねえし。あ、でも、劇○ひとりあんますきじゃねえな。つまらねえ。

「危ない!!」

「What!？」

……なんで、英語で言っちゃったのかな?最後の授業が英語だったから?そんなベタなあ。

そんなこんなで、誰かに突き飛ばされて、電柱に激突寸前。ギリで止まって、正面衝突は避けました。てか、避けられてよかった。

「ふう、危なかったです。もう少して、猫に引つかかれるところでした」

「猫?」

「はい、ホラ」

暗がりで見えにくいけど、その指がさす方には、子猫……。これに引つかかれそうになる俺って……。

「あ、ありがとう」

「いえ!危ないときは、危ないですから!」

いや、聞かないでよ。というか、危ない時危ないって、当然じゃね?

「橋!橋は、叩いてから渡らないと、危ないです!!」

「は?」

「いつも車とか自転車とか歩行者とか、その他もろもろが行き来しているんですから、脆くなってもおかしくないでしょ!?!だから、試してから渡るんです!!」

「ただけ心配性!?!そんな叩いただけで壊れるようなもの作って

たら、違反でブタ箱に入れられちゃうよ!!

てか、お前誰!?

「ホラ、ちゃんと叩いて」

「……馬鹿か、お前は」

「馬鹿とは失礼です! 私はまだ馬鹿じゃありません! だって、一応テストの順位は10から20の間ですから!!」

いや、そういう事じゃねえんだけど。てか、お前は誰だ。

「うん、この橋は大丈夫なようです。さあ、崩れたりしないうちにさっさと渡ってしましましょう」

「……フツ―に渡れ、近くにいる俺が恥ずかしい」

「なんです?」

いや、渡るのはいいよ、大いに結構。でもさ、そんなに警戒心たつぷりに一歩一歩歩まなくてもよくないっすか? てか、お前は誰だ?

「じゃあ、いつもどーりに渡りますね」

「フツ―にな、フツ―に」

「はい!」

うん、元気な返事……だあ!?

「はあやくう。橋、崩れるかもしれませんよお」

「……だから、耐震強度違反になるって、それだけで崩れたら……」

「はあやあくう! はあやあくう!!」

「わあったよ!!」

……普通って言ったのに、全力疾走で橋を渡る馬鹿がどこにいますか? あの変人以外で! てか、お前は誰!?

「は、早くしないと、崩れますってばあ!」

「ダイジョブつつってんだろ!? 少しは『安心』というものを知りなさい!!」

「わ、分かりましたからあ! 早く早くう!!」

お前は海岸沿いによくいるカップルの片割れか? てかさ、いい加減お前は誰?

「……で、お前は何故こっち来る？」

「心配なんで」

「何が？」

「あなたが」

「どのへんが？」

「前方不注意な感じの所と、まったりのんびりした雰囲気」

「どうして？」

「帰り道が同じなようなので、遠くならない程度まで見守ろうかと」

「だから？」

「ついて来てるんです」

「どうして？」

「帰りみ……だからですね！さっき言ったでしょう！！」

ちなみに、この会話、三回目。なんか、こいつ、意外といじりがあるかも……。

「何ニヤニヤしてるんですか？不気味ですよ？変態ですか？？」

「ンな訳あるか！変態はあいつだ！！！！」

「……かふうっ！！」

「……キャハッ☆　！！」

適当に持った石を、電柱の後ろからはみ出してる馬鹿に投げる。

見事、2人とも撃沈。馬鹿1、森野。2、笑。……なんで、笑もいんだ？？

「……ストーカー……始めて見ました」

「あんな風にならないよう、日々精進したまえ」

「はい、心に留めておきます」

……お？この作品にしては始めてのマシなキャラ？……じゃないな、だって重度の心配性だもん。……はあ。てかさ、誰なんだ！？

「あ、危ない！！」

「どのへんが！？」

特に危ない事もなかったのに、ななしのゴンベさん（だって、名前教えてもらってねえもん。だから、ななしのゴンベさん）が、抱きついて（？）きた。

「キャハ★ NO！！」

「離れなさい！！」

二人の馬鹿、いつ復活を遂げた。

てか、笑！？星が黒い！笑みが黒い！！もしかして、怒ってる！？何故に！？

「っと思ったら、何もなかったように見えますが、実はあったりします」

……すみません、じらさなくていいからさ、先話を進めよう。何故か森野と笑の目線が冷たいから。ついでに離れて名を名乗りなさい！！

「ホラここ、ひびが入ってる。このまま割れて、足が挟まったりなんかしちゃったら、一大事です」

「そりやそうよ！私の大切なダーリンが怪我したら、私はこの足を譲るわ！！」

「ダーリンじゃねえっての！てか、お前の足なんかほしくねえよ。どんだけ大怪我させてんだよ、俺に」

「キャツハハ☆ だったら、私の慎吾の見舞いに行く！！」

「だから、どんだけ大きな事故に仕立て上げてんだよ、お前らは」

「いいえ！大げさなんかじゃないですよ！ホントに、ホントに大変なんですよ！！」

「……分かった分かった。だから、耳元で叫ぶな、鼓膜がつぶれる」

「キャハ☆ そんな事になったら、私の声が慎吾まで届かないじゃなあいい！？」

「それはそれで嬉しいです」

「私の声がないと、ダーリンは生きていけないのよ！！」

「そこ！勝手な妄想はよしなさい。そして、地獄に堕ちて、血の

池の観察日記でも書いて帰って来なさい」

「私は帰ってきていいのね!!」

「前言撤回、二度と帰ってくるな。血の池が枯れるまで帰ってくるな」

「キャッハ☆ じゃあ、私がずっと慎吾の隣にいられるのね」

「はあい、そこも勝手な妄想はよしなさい。お前は針の山でも登ってかすり傷一つ作らず帰って来なさい」

「キャハ☆ じゃあ帰ってきてOKなんだ?」

「いや、かすり傷がちょっとでもあったらだめだから。俺、結構厳しく見るよ?」

「お願いします!!」

「意味無くハモらせんな!!」

馬鹿2匹を（もう、人間扱いしません）を、地面にめり込むまで深く殴りつけて置きました。

ふう、これでしばらくは静かになるっと。

「……このひびが原因で、この住宅地全域が崩れてしまったら、どうしよう!?!」

「いや、流石にそれは……」

「ないとは言いません!だって、些細な地震とか、トラックの揺れとか、結構怖いですよ!?!」

「はあ」

「だから、ひびの一つもなめちゃいけません!気にしていなくて、ああ、心配心配……」

いや、あんたは異常だよ。心配すぎ。

「もしかして、これが原因で、関東大震災とか、起こったりしませんよね!?!」

「ただでかい心配の仕方!?!」

「そしてら、これが拠点として、日本経済が破綻しちゃいます!?!」
まあ、それはありえるかもね?

「そしたら、日本はもうどうする事もできなくなっちゃいます!」

！」

いや、外国に助けを求めよう。求めてみようよ。

「このままじゃ……このままじゃ、日本はおしまいです!!」

もっとポジティブな事言えないの、この子!?!さっきから聞いてれば、ネガティブな事しか言っていないじゃねえかよ!!

「ああ、……ゴメンなさい、全国の日本国民さん。私達の不注意で、こんな事になってしまった」

謝罪会見開くつもり!?!そんな事しても、意味ないよ!?!だって、起こらないもん、そんな地震!!

「ああ、神よ。哀れな人間に、神の救いを……」

不吉だよ、言ってる事が全体的に不吉だよ。

「……あ、私、家こっちなんで、さようなら」

「はい、さよなら」

……って、ええ!?!え、……ええ!?!こ、こんな終わりでもいいの!?!こんなアバウトな感じの終わりでもいいの!?!え!?!え、ええ!?!え、っと、え?マジで!?!ええっ!?!

てか、最終的に、あの子の名前はなんだったんだあああああああ
あ!?!

51、計画はお早めに!?(前書き)

春休みシーズンなのに、ここはまだ夏休みシーズン……。ていうか、50話もいってるのに、まだ夏休みじゃなかった事に、私が一番驚いております。

では、夏休みの計画編、どうぞお。

51、計画はお早めに!?

「おはよう、ダーリン♪今日もいい——」

「日になったら奇跡だよなあ」

「マイナス思考ね、ダーリン。でも、そんなダーリンでも大好き
♪」

「俺はお前なんか大嫌いだ。てか、ダーリンじゃねえっての」

「え!？」

「そう古めかしい驚き方されても、ツツコム気力がわかねえんだ
けど」

「じゃあ、……W a h t!？」

「つづりちげーよ!！」

「やった♪ツツコんでくれた♪」

「おは、瀬川」

「よう、狩燐」

「つなげると、おはようになるわね」

「どーでもいいからそーゆーの」

「相変わらず厳しいお言葉。美咲、嬉しいです」

「でさでさあ」

馬鹿は無視して先に進む。じゃねえとこっちの身がもたねえつ
の。

「そろそろ夏休みじゃんか。お前、どーする?」

「どーするも何も、」

「私とデー」

「うっせな。お前は引っ込んでろ、隣のクラスの誰かさん」

……相変わらず毒舌なようで……。

「で、何すんの?」

「特に……する事はねえな」

「部活とか、でねえの?」

「出たくねえよ！あんな部活！！」

「なして？楽しそうなのに」

「見た目はな。でも、先公があんな馬鹿Mだと、ツッコまずには
いられない俺の体質として、厳しい……」

「ふーん」

うつわあ、あからさまにどうでも良さそうな返事だあ。

「私はダーリンと」

「だからさあ、最近出番が少ないからってでしゃばってんじゃね
えよ、馬鹿M」

「確かに出番が減って悲しいわ！でも、あなたみたいな人に侮辱
されたって……嬉しかったりしてるから！！」

しとるんかよ！結局はしとるんかよ！！てか、気にしてたのね、
出番……。

「もし暇だったらさあ、俺んちの別荘に泊まりに来ねえ？いつも
は俺だけで行ってんだけど、せっかくだし、一緒に行こうぜ」

「でも、金ねえよ、俺」

……いいよな、ボンボンのお坊ちゃまは。

あ、言い忘れてたかも知れねえけど、狩燐家は、大富豪です。国
の政治動かせちゃいます。ていうか、世界も動かせちゃうかも……
！？

「いいよ、俺んちが出すから。で、行くのか行かねえのか？」

「……じゃ、お言葉に甘えて」

「よし！決定な。ああ、お前のほかに、葛野木とか、斎賀とか、
ええっと、誰か忘れた影薄さんも誘ってあっから」

「小橋だ！小橋！！」

「あ、いたのか小橋」

「……俺の存在理由って……何？」

「今ならその気持ち、私も分かるわ……」

「おお、心の友よ！」

馬鹿談義してる、馬鹿&影薄はいいとして。

「影薄じゃない！小橋だ！！」

ちゃっかりツツコミありがとさん。どーでもいいけど。最近、作者も狩燐がお気に入りみたいだし。

「何！？」

だからさあ、いちいち反応示すなよ。話が進まねえ。

「いや！ちよ、待てよ！！」

勝手に人の心を詠む奴には、適当に鉄拳を下しとく。モチ、気絶する程度に。

「あ、そだ。せっかくだし、お前も行くか、馬鹿」

「あの、私、馬鹿じゃないんで末k度？」

おい！森野！！最後の方の言葉が意味なく分からなくなってるぞ！？どうした！？

「んだよ、ハッキリしねえと、瀬川は俺のものになるぞ？」

「それはダメ！ダーリンは私だけのものよ！！」

「お前のものは、俺のもの。みんなのものも、俺のもの」

「何よ！何よ！！私だけのダーリンに手を出したら、許さないんだから！！」

すみません。キモい会話はよろしうや。てか、狩燐！お前、どこのガキ大将だよ！？規模はちつけえけど、口先だけデカイガキ大将に、お前はいつなった！？

「えっと、何話してたんだっけ？」

忘れたのかよ……。

「ダーリンは誰のものかよ」

いや、ちげえから。俺は俺だから。てか、ダーリンって呼ぶな。

「ああ、そうだったな」

「だから、ちげえっつの！夏休み、お前の家がどうたらこうたらだっただろ！？」

「ああ、そうだったっけか？」

「そうだったかしら。でも、ダーリンのお言葉だったら、何でも受け止めるわ♪」

「馬鹿アホキモい死ね地獄に堕ちろM」

「ああ、久しぶりの屈辱なお言葉……これで、ご飯なしで、あと30年は生きられるわ」

「よし、今日からそれ実行な」

「え?……え!?!?……ええ!?!」

「何か文句でも?」

「いや、あの、さっきの事は、なんていうか、その」

「そういうや狩燐。俺、今日理科忘れちまったみたいだからさ、貸してくんね?」

「いいぜ。何時間目だ?」

「2時間目」

「じゃあ、1時間目が終わったら届けに行く」

「あんがと、感謝するぜ」

「その代わり、なんかおごれよ。アイスバー的な」

「一本だけな」

「よし」

「……すみません。フツーに学園モノ的な会話してないで、私の話を――」

「聞く訳ねえじゃん」

「てか、お前誰?」

あ、そういうや、こいつ、森野の名前知らなかったんだっけ?でも、最終的に知ったんじゃ……。あれ?なんか、記憶が飛んでんな。

「森野美咲!将来のダーリンのハニーです♪」

「間違った自己紹介してんじゃねえよ!!」

「で、何気に仲の良いお二人さんの知らない方。来るか、来ないか?」

話、覚えてんじゃねえかよ。てか、こいつ、人の名前を覚える気はゼロか!

「ダーリンが行くなら、もちろん私も行くわ!!」

「じゃあ、決まり。……ああ、夏休みが楽しみになってきたぜ」

「そうですわね♪」

森野もくんなら、恐ろしい夏休みになりそうだぜ……。はあ……。

51、計画はお早めに!?(後書き)

てことで、次回から、長期の夏休み編になります。一々何編とかやるのめんどくさいんで、そのままのサブタイでやらせてもらいます。

次回は、……まだ考え中です……。
お楽しみにい。

52、家って言うか……何これ!?(前書き)

という訳で、夏休み編デェス♪
ではでは、夏休み編、第一弾、どうぞ!!

52、家って言うか……何これ!?

「えー、夏休みだからといって、ダラダラした生活を送り、いー、生活のリズムを崩さないようにしましょう。うー、きちんとした生活を送り、家族の迷惑にならないようにし、いー、中学生らしい、生活を送ってください。クーラーや扇風機の前につつとしないで、えー、外で元気に遊んだり、しっかり部活に出しましょう。うー、以上です」

校長よ、あんた、話が長いよ。みんなもうグータラだよ。爆眠だよ。

「これで、修行式を、終わりにします!」

と、言う訳で、あつという間に夏休みです。今まで夏休みじゃなかったんです。夏休みみたいで、全然違ってた。ちよつとした驚き?

*

そんな夏休みの、ある日。あの約束の日は本当にやってきました。え? 覚えてない? じゃあ、前回を見直してください! 説明するの、めんどくさいんで!! 夜露死苦!!

「慎ちゃん。お友達が来たわよお」

「あーい」

「ダーリン!」

「なんでお前が来てんだよ!!」

持っていく荷物を詰めたカバンで、とりあえず撃退!

「だってえ、ダーリンを待ちきれなかったんだゾ」

「どんだけえ」

「あれ? 『ダーリンじゃねえつつってんだろー』がああああああ!

！』って、ツツコんでくれないの？」

「エネルギーの浪費を防いでるんだよ」

「でもでも、ダーリンがツツコんでくれなかったら、この話、だ
だ崩れだよ？」

「ダイジョブだよ、狩燐がいる」

「いや、そーゆー問題じゃ——」

「じゃ、行ってきます」

「迷惑かけちゃ、ダメよお」

「はいはい」

「じゃね、おばさん」

「慎ちゃんをよろしくね、狩燐君」

「任せてください」

そうして、俺らは狩燐邸に向けて——

「ちよおツと待って！私、忘れてない！？ていうか、忘れられて
ない！？」

「てめ！人がせっかくしめ様としているところを、邪魔すんじゃ
ねえよ！！」

「だって、まだ私——」

出発したのであった。

「強制終了なの！？ねえ、ダー——リ——リ——リ——リ——
——ン！！」

馬鹿の遠吠えは、儚く星になって消えたという……。

「おし、到着♪」

「ほえ——」

「ひえ——」

「はれえ——」

「ふおえ——」

「ふあ——」↑欠伸

あ、最後の欠伸、俺ね。もう長い事車に揺られてたから、ぐっす

りよ。あゝ、肩こったあ。

あ、最初に言ったのは狩燐で、次が、斎賀、葛野木、小橋、馬鹿です。

「なんで私だけ馬鹿って紹介なの!？」

「勝手に人の心覗いてんじゃねえよ、変態!!」

「変態でいい。ダーリンのお傍にいられるなら♪」

「死ね」

「まあ、到着早々喧嘩すんなよ。仲良く行こうよ、な?」

「は? 黙ってるよ、ジジイ」

「は? 何言ってるのよ、影薄」

「……」

毒舌だとか思うなよ! これは、友情のムチだ!!

「さっさと行くぞお、ついて来ないと、置いてくぞお。迷子になっても探さねえぞお」

いや、そこは探してあげようぜ、狩燐……。

そつれにしても、デケエ家だなあ。城か? 城なのか?? もしくは、宮殿?? って、ほぼ同じか。

「いつもここに一人できてたのかよ」

「いや、幽霊と一緒に」

不吉な事、サラッと言ったああああああああああああああああああああああああああ!!

なあ、何でそういう事をサラッと言えるのかな、この人!?? どうしてそういう事をなんでもない感じにサラッと言えるんだよ、この人!??

「なあんて、どっちだと思う?」

「聞くのかよ!!」

「ナイスツツコミ。流石だな」

「褒められても嬉しくねえよ、この野郎」

「ダーリン、ダーリン!」

「ダーリンじゃねえ、瀬川だ馬鹿!!」

「ほらほら、金のしゃちほこが!!」

「何故に!？」

確かにありました、金のしゃちほこ。しかも、地上に。いや、その地上じゃなくなつて。あの、屋根の上じゃなくて、普通に庭に飾つてありました。

「あれ? あんなトコにあったかな？」

「ねえ狩燐、アレは？」

あ、久しぶりにしゃべったのは、葛野木。覚えてますか? こいつ。いっちゃんはじめに森野に絡んできた子ですよ。なんでも、葛野木は狩燐の幼馴染のようで。だから誘われたらしい。あ、斎賀は葛野木のお供に。つまり、おまけ。

「ん? 食い倒れ人形??」

なんでそんなもんまでこの家にあんだよ!? 大阪持つてけ、大阪に!!

「あれ全部、親父の趣味だから、気にせんで」

いや、ヒツジョーに気になるよ。存在かなりすぎて、ある意味怖い……。

狩燐邸には他にも、おっきいカニとか、マライオンとか、ツタンカーメンの仮面とか（レプリカだつてさ）、エッフェル塔もどきとか、ピラミッドもどきとか、ピサの斜塔もどきとか、その他もろもろ自由に庭に配置(?) されてました。てか、庭に飾るべきものじゃないものまで飾つてあったのに、一番の驚きを感じてます……。

「えっと、部屋はいろいろあるからさ、好きなところ使つて」

「はあい」

「夕食はシェフ呼んでくれるって、親父が言つてた」

「はあい♪」

「あとはあ、……得にないから、荷物置き終わったら遊ぼうぜ!」

「イエッサー!!」

て、事で、皆それぞれに歩き出して、というか、狩燐は平然と立ち去つて、ほつて置かれた俺らでした……。

「でさ、なんでお前らはついてきてんだよ」

「いや、一人じゃな怖いじゃない？ なんか」

と、葛野木。

「私は、未来の夫の傍にしようと思って」

「隣に同じく」

と、馬鹿×2 齋賀と森野。

「俺は——」

「聞いてない」

「聞けよ！」

「気にするな、友よ」

「いや、本当に友達だと思ってんなら、話聞こうぜ？」

「じゃあ、今から縁切るから、話聞かねえ」

「ええっ！？ それってある意味酷くない！？」

「フフ、ある意味じゃなくて、普通に酷いと思うわよ」

「おお、齋賀は俺のみ——」

「フフ、味方だったら、奇跡よね」

「……みんな、最近俺に冷たくない？」

「全然！」

（小橋以外で）みんなで合唱♪

「にしても、どこの部屋でも使っていいつつわれても、迷いそう

だもんなあ」

「目印……ないのかしら」

お、珍しくまともなこと言ったな、森野。

「フフ、みんな同じにしか見えないわ」

「まったく、狩燐のやろう、ちったあえて行動しろよな」

……裏の葛野木が出てきてる……。

「目印がないなら、作ればいいじゃん」

「フフ、影が薄いわりにはいい事を考え付くわね」

「……」

さあて、これからどうなるか、ちよつと楽しみになつてきたぜ♪

52、家って言うか……何これ！？（後書き）

狩燐邸を詳しく説明しますと、東京ドーム1千個分くらいの土地に、ドデカい城が、土地の真ん中辺りに立ってます。あとは全部庭。だけど、いろんなものを飾り（？）過ぎて、庭が庭じゃなくなってます。

ちなみに、瀬川達の部屋は、お城の二階です。狩燐の部屋も二階ですよ♪自分専用ルームって奴ですよ♪

次回はみんなで屋敷を探検の予定デス♪お楽しみに！！

53、少年探検団！？（前書き）

あゝ、なんだか書いてて意味分からなくなっちゃいましたが、どうにか読み解いてください！！

では、探検開始です！！

53、少年探検団!?

「部屋、決まった?」

今の俺らは、大広間に集まってる。ていうか、無理矢理集められた。てか、狩燐に連行された。まだ荷物、整理してたのに……。

「一応な。てか、部屋に来たんだから、分かってんだろ」

「フフ、女の子の部屋にノックもしないで入ってくるなんて、ぶしつけよ」

「俺は——」

「気にするなよ、まあ、とりあえず夕飯まで時間あつから、家の中探検しようぜ」

「お前、探検する必要なくね?」

「いいじゃん、楽しけりゃ」

「……」

自由人なんだな、狩燐って。ていうか、何故にこんなに楽しそう?

「さあ、いざ鎌倉!」

いや、鎌倉に行っちゃあ、あかんだろ! 家の中探検するんじゃないのかよ!

「早く行こうぜ、瀬川」

「フフ、遅いわよ」

「ダーリン! 早くう!!」

「ったく、かったるいわねえ」

「せ——」

「分かったよ!」

「すみません! 新種のイジメかよ、これ!!」

小橋の叫びはほつといて、俺らは、家を探検する事に決まったよ。うだ。あゝ、ねみい。

＊

「探検つつてもさ、どするんだ？」

「どするって、そりゃあ、探検するんだよ」

「フフ、意味分らないわ」

「それでいいんじゃないの？」

「能天気ね、変わらずに」

「お褒めの言葉として受け取っとくぜ」

「ダーリンダーリン♪どこ行く??」

「なんでお前はノリノリなんだよ!!」

「海苔は大切だぞ、瀬川」

「いや、その海苔じゃねえし」

「じゃ、糊のりか？」

「なんでそういう変な風に思考が働くんだよ！」

「じゃあ、祝詞？」

「もう原型がなくなってるんだろ！てか、祝詞とかマジ関係ねえし

!!」

……ここで、精神的にめいる前に家に帰れるか不安になってきた。

「ともかくさあ、適当に家の中、巡ってみようぜ？」

「お、影薄のくせにいい事ぬかすじゃねえか。……ペッ！」

家の中でつばを吐くのはやめような、狩燐。

「フフ、たまには役に立つのね、たまには！」

たまにはって強調しすぎだから、斎賀。

「誰もが考え付くような事言っ、一人前になったと思うなよ、薄らってるくせに」

薄らってるってなんだよ、葛野木。

「ダーリンとの恋路を邪魔しないでよ、愚民が！」

……もうツツコまない、もういいよ、この馬鹿が。

「……なんで最近冷たいんだよ、みんな」

「それはな、お前が原因だ、小橋」

「何がいけねえの？」

「影が薄いわりにコメントとか出てくるしこの作品に出てくる回数も多いいい子ぶりっ子してるから」

「……つまり、死ねって言いたいのか？」

「YES!」

（小橋以外で）大合唱♪

小橋にくらあいオーラが漂ってるけど、気にしなくてもいいよな、影薄いし。

「じゃあ、お前がリーダーでいいな、瀬川」

「は？何が？」

「フフ、さあ、リーダー。私達を導いて」

「は？」

「ダーリンがリーダーなら、私は副リーダーね！」

「黙ってる、薄らボケ」

「早くしてくれない？私、こういう微妙な感じ、嫌いな？」

「じゃあお前がやれ」

「めんどくさいから却下」

「即答かよ」

「さあ、早く行こうぜ、瀬川リーダー」

「勝手にリーダーにするな」

「フフ、いいじゃない、リーダー」

「だから、リーダーじゃねえっつの」

「じゃあ、ダーリン！」

「お前は黙ってるつつただろ」

「ホラ、無駄な行使ってないで、先に進める進める！」

……でことで、無理矢理リーダーに仕立て上げられ、家の中を彷徨……探検する事になったとき。

「少年探検団、ここに結成!!」

なんだそりゃ!?!?てか、ギリギリなパクリはやめようぜ!!

「ここは……?」

「フフ、リビングって言うか……」

「大広間って言うか……」

「庭?」

「んなわけあるか!」

馬鹿にツツコミを入れといて、黙らせる。じゃねえと五月蠅くって仕方ねえ。

今俺らがいるのは、とてつもなくひろおおい、部屋。マジに広い部屋に、ながあい机が一つ。それにあわせたメッサ高そうなイスが何脚も……。そして、真正面に、誰かの肖像画。

「あ、あれ親父の趣味だから、気にせんで」

いや、趣味つってもさ、あの絵、明らかにさ……まあ、いいか。触れない方がいい気がする。俺の本能がそう告げている。

「ささ、次の部屋いこーぜ」

「てか、この部屋何?」

「食事するトコ」

ひ、広すぎて落ち着いて飯も食えねえよ!

「今度は……?」

「キッチンじゃない?」

「お台所?」

「お台場?」

「お前だけはすれだよ、森野。ここがお台場だったら、ちよつと狭いかな」

「それもそーね」

ちよつと狭いどころか、狭すぎるよ! ていうか、悪乗りしてんじやねえよ、狩燐!

「……フフ、ここも随分と広いのね」

「早く出よう、ここに入ってるのシェフにバレたらこええから」

「何故に？」

「包丁振りかざして襲ってくる」

「さあ、即こんな恐ろしい部屋は後にしよう!!」

「次は……？」

「フフ、ダンスホールかしら？」

「ダンボール？」

お前は黙っておこうぜ、森野。ややこしくなるから。

「大広間でしょ？」

「いや、玄関だよ」

あ、久しぶりに影薄がしゃ——。

「影薄いって言うなあああああ!!」

言ってねえ。正しく言えば、心の中で言ったんだ。てか、読心術すんな、アホ。

「小橋の言うとおり、ここは玄関。忘れたのか？」

いや、広すぎて覚えるも何も……。

「じゃ、次行ってみよお♪」

なんだか楽しそうな小橋に苛立ちを覚えたのって、俺だけか？

「フフ、黙れ、影薄」

「黙れ、役不足」

「黙れ、未熟者」

「す、すみませんでしたああああ!!」

……それぞれに不満があったらしい……。女って、未恐ろしや……。

「なんだ……？」

「フフ、豪華ね……」

「ダーリンと私の愛の結晶？」

「黙ってろ、馬鹿!!」

我慢の限界。思いつきり頭はたいて、失神する程度に殴りつける。

「で、ここは何だ、狩燐」

「ここは、客間。ここで尋ねてきた客人達を待たせるんだっけか？」

「いや、俺に聞くなよ」

「じゃあ、他の誰に聞けば？」

「自分の心に聞きやがれ！！」

「おお、何気にカッコいい事言いますな、旦那」

……こいつ、俺を腹立たせるつもりか……。

それにしても、ここが一番ゴージャスな気がすんな。ソファアとか置物とか、ハンパなく高そうだし。

「さあて、次次い♪」

一人で盛り上がってるな、狩燐……。

「これは……？」

「あら、からっぽ」

「フフ、綺麗な舞台」

「ともかくデケエ」

なんだか腹立つけど、小橋の言う通り、ともかくデケエ。

「腹立つって何だ、腹立つって！！」

「言ってねえよ、俺。何も言ってねえよ」

「言っただろ！？」

「勘違いしてんじゃねえよ、影薄」

「……Sめ」

小橋の囁き〓無視OK。

「狩燐、ここは？」

「ダンスホール。まあ、誰も躍ったりしないで、飯食うだけだけどな」

「へえ」

デケエ家って、やっぱスゲエな。

「お次は……?」

「ここは間違えなく大広間ね」

「てことは、一周したって事?」

「フフ、一階だけね」

「まだ二階と三階、それに屋根裏部屋もあるぜ?」

「お前の家って……」

「何だよ、小橋」

「いや、なんでもねえ」

言いたい事は、分かるぞ小橋。この家、家っていうか、もう城の域にあるよな。

「さあて、そろそろ飯ができる時間だ」

「フフ、もうそんな時間なのね」

「結構楽しかったかも」

「リーダーにされなけりゃ、もっとエンジョイしてたな」

「あれ? 一人足りなくね?」

足りない? 誰が??

「あ、言えば森野は?」

「ああ、あいつね。あいつなら、ほっといても大丈夫だよ」

「なんでそう言えんだ、瀬川」

「飯の時間になりゃあ分かる」

「?」

「それより、飯は和食だろーな?」

「あ、ああ。そう頼んどいた」

「よっしゃ!! 和っ食♪和っ食♪」

意気揚々と歩く俺の背中に、『?』な視線が突き刺さってた気がするけど、何故だろな?

53、少年探検団！？（後書き）

次回どうしよう……。夕飯を書くか、夜の話を書くか……。うーん、迷います。

どっちを書いたらいいと思いますか？よかったら、選んでください！！

うーん、うーん、……。どうしようかなあ……。

54、彼に触るべからず!? (前書き)

夕食にするか、夜にするか悩んだ結果、両方合わせて一つにまとめて見ましたあ。

ちよつと長くなってますけど、気にしないでくださあい。

54、彼に触るべからず!?

やはり、庶民と大富豪とでは差があるようで、料理の量が、マジハンパない。どれくらいハンパないかというと、真面目にハンパない。

そこ、説明になってないとかツッコまないよーに！俺は食べるので忙しいんだ、この野郎。

「お醤油とってえ」

「どうぞ、お嬢様」

いつの間にか来てたメイドさん。確か、村勢^{むらせ}さんって言ったかな？狩燐が紹介してくれた。てか、メイドさん、この人しかないのって、……何でだろ？今頃になって不思議に思ったよ。

「ダーリン、頬にご飯粒ついてるよ♪」

「む？」

ちょ、近い近い近い近い！てか、正面に座ってたはずのお前が、いつの間に隣にいの！？

「フフ、夫の不始末を償うのは妻の仕事。勝手に手を出さないでくださる？森野さん」

お前もいつ俺の真隣に来たんだよ、斎賀！

あ、今の状況説明すると、探検で行ったあのひろおい部屋で食事。一番奥の席に狩燐が座ってて、左に小橋と俺。右に斎賀と森野。メッサ距離置いて座ってるから、なんか落ち着けないけど、食べます♪何せ、美味いからな、この和食♪

で、その空いてる席を使って、森野と斎賀に囲まれてる。てか、包囲された。でも、無視して食べてます。ご飯粒はどうした？とっくのとうに取ったよ。俺だって、そこまで幼稚じゃねえさ。

「……そいえば、葛野木いなくね？」

「とっくのとうに食べ終わって、自分の部屋に帰ったぞ？あいつ、少食みたいだからな。お前みたいにガツガツ食わねえんだよ」

「ガツガツじゃない。がつついてんだよ」

「いや、それって似た意味じゃ……」

「気にするなよ、影薄ラー」

「なんだよ、その不名誉なあだ名は……」

「気にしすぎるとハゲるぞ、影薄ラー」

「だったらその呼び方やめろよ！」

「いいじゃん、影薄ラー。なんか面白い」

「狩燐もこいつに便乗するな！瀬川を調子に乗せると、いつも口な事がない！」

「ロクな事がなくって悪かったな、この野郎」

「グハッ……」

魚の骨を丸ごと投げてみました。見事命中、気分爽快。

「瀬川様、ゴミは私が処理しますので、ゴミ箱に投げなくても結構ですよ」

「俺、ゴミ箱じゃないんですけど……」

「アッハハ……村勢、チョーナイス……」

腹抱えて爆笑してるよ、狩燐。よほどツボッたんだろうなあ。まあ、どうでもいいけど。

「ダーリンは私のものよ！」

「フフ、その独占欲が男を困らせるのよ」

「いいもん！ダーリンは、私だけのダーリンだもん……」

「フフ、聞き分けのない子ね。だから幼稚な餓鬼は嫌いよ」

「何ですって！気取りブリッ子……」

「フフ、あなたに言われたくないわ、能無し」

「あ……もう我慢の限界！表に出なさい！決着、付けようじゃないの……」

「フフ、望むところよ」

……どうして女ってこう、馬鹿なんだろ。

さあて、飯食い終わったし、狩燐の爆笑は止まないようだし、小

橋は小橋で気配がねえし、女共の汚い言い争いも聞き飽きたし、俺も葛野木に倣って、部屋に帰るとするかなあつと。

＊

「……やっぱ、豪邸ってスゲー」

何故、俺が感動しているのかというと、部屋に風呂があった事。しかも、露天風呂で。あ、もちろん、フツの風呂もあるぞ。てか、フツの風呂って何だ？

「露天風呂もいいけど、やっぱフツの風呂がいいよなあ。……問答無用!!」

いやあな気配を感じたんで、飾ってあった皿を投げちゃいました。……弁償しろって言われたら、どうしよう……。てか、虫の死体はどこだ？

「ふ、ふんでまふう」

うーん、気のせいだったみたいだなあ。

「あふお、ひたひた……」

森野の馬鹿と泊まりに来てるからって、神経を尖らせ過ぎてたんだなあ、きつと。

「きふいてまふふおね？」

よし、今日は疲れてるみたいだから、シャワー浴びてすぐ寝るとしよう！

「きいてまふ!？」

「……………ちっ、ウザッてえ」

「ふみまへん!かくふいんふあんでふほへ!？」

じゅうたんの上で、方向てえんかあーん♪

「くふあほ!？」

さあ、シャワーを浴びに、レッツラゴー!!

その後、シャワーから上がって気付いたんだけど、じゅうたんだ
と思ってたアレは、森野だったようですよ？マジ、どーでもいいけ
ど。

え？確信犯だったでしょ？んなアホな事、俺がすると思いますか
あ？（黒笑）

「……ゴミの始末してから寝るか」
不始末だと、寝れない気がする。てか、絶対寝れない。寝る時間
を与えられない。

と、言う事で、あの馬鹿は適当薄暗い廊下に捨てて置きましたあ
♪なんか、足のない使用人を見た気がするけど、きっと何かの特訓
中だったんだろうね。足が見えなくなるほど早く、細かく飛ぶとか
？そんな感じの事お♪

「さて、これで安心して寝れるよ」
おやすみなさい、みなさん。ご期待どーりにいなくて、残念で
したね。フフフ、この俺、瀬川慎吾をあまくみちやあ、いけません
ぜ。て事で、ZZZ……。

（この私、下弦も甘く見ちゃあいけませんよ、読者様♪）

＊

夜は胡蝶が飛び交うにはいい時間。なぜなら黒い空が、自らの羽
を隠してくれるから。え？私は誰かって？聞く前に名のるのが当然
の事でしょ？……さあ、名のりなさい、そして私に服従しなさい。
フフフ……。

えー!? もう私の正体バレバレ!? うっそ! 予想外!! 想定外!! 繁華街! ……あまりに驚きすぎて、少し狂ったけど、気にしないでね。フフ、私の魅力に酔いなさい。

「……ここね……」

監視カメラ（作者曰く、隠しカメラ）の映像によると、夫は既に就寝中のはず。そこをコッソリ……ウフフ♪

この計画は、某小説の某さんの協力によって成り立っているの。だから、失敗は許されない……。フフ、この緊張感、嫌いじゃないわ♪

豪華な飾り付けをされた扉を開く。……私の夫は扉に何も目印を付けなかったのね。おかげで間違えて、小橋なんかの部屋に入っちゃったじゃない、もう!

グズズ……ズズ……グズズ……

規則正しい、愛しい人の寝息が聞える♪ ああ、これだけで私、シ・ア・ワ・セ♪

そ、それにしても、鼻でも詰まってるのかしら? ズズツて、明らかに鼻を吸った気がするんだけど……。まあ、いいわね♪ 気にせず寝室へ、レッツ・ゴー!!

あ、私が今までいた場所、寝室の目の前、ていうか、中だから、レッツゴーも何もないんだけどね♪

あとはあ……あの細い胸元に飛び込むのみ!! イケイケ、良美♪
ゴーゴー、良美♪

「フフ……いっただきます!」 ↑メツサ小声

「うーん……むにゃむにゃ」

寝返りをうったああ!? 予想外だったから、思い切り鼻をベッドに打ちつけたじゃないの、もう!

でも、これで同じベッドの上……後は作者の気分ね……。

（え? そこでなんで私が出されるの?）

ねえ作者様、いえ、下弦様？

（なあに？）

私と瀬川をゴールインさせてください！

（無理！）

即答！？な、なんで！？

（だってえ、Mじゃないじゃん、お前）

そういう問題なの？

（そーなんじゃん？でも、人の色恋沙汰とか、自分の色恋沙汰とか、マジにどーでもいいからさあ、好きにして♪じゃ、さよならあ）
……な、何て非常識な作者……。そして、何て自由人な作者……。ま、まあ、好きにしていって言われたんだから、好きにしちゃいましょうか！

ではでは、再び――

「フフ……いただきま――ブフツ！？」

わ、私に、この私に奇声を上げさせるなんて、何事！？ていうか、私は何をされたの！？全然見れなかったわ！

でも、諦めずに――

「フフ……今度こ――ソブファ！？」

ええ、エルボーは酷くない！？女の子に、世界の女王にエルボーは酷くない！？

「……ガフツ！？」

プロレス技！？や、やっぱり何されたのか、分からないわ……。

「……バファ！？」

背中を蹴り飛ばされて、洋ダンスに熱烈キス……。うう、ニスの味がするう……。

ZZZZZZ……ふふ、もう食べられないよう。

ね、寝言？それとも……私がいると分かってて、演技してる？？

グズズ……グズツ……グズズ……

や、やっぱり寝てるみたいね。……それにしてもあの的確な攻撃……一体何なの？

何はともあれ、チャンスはチャンス！活かさなければいけない、女のロマン道！！ちよつと、そのあなた！なんだよそれって、ツッコまないでくださる！？

「フフ、では、いただき——ベラフ！？」

抱きつこうとした瞬間、顔面に強烈な一撃！（寝たまま）

「バラフ！？」

そして！続けて、腹に回し蹴り！（寝たまま）

「クハッ！？」

オマケといわんばかりに、右頬にグーパンチ！！（寝たママ）

って、（ ）の中が変わってる！！そんな観察、どうでもいいわよ！！

うう、……体どころか、心までボロボロになりそう。こんな天使のような寝顔してるのに、近付けばコテンパン……。触れるのでさえ、ままならないわ……。

言うなれば、眠る悪魔ね。可愛い寝顔で獲物をおびき寄せといって、思う存分痛めつける。うん、このあだ名、ピッタリだわ。

グズズ……むにゃむにゃ……グズツ……グズズ……

幸せそうに眠って、人の苦勞も知らないで！！こうなったら、最後の手段！！

タッタラタッタッタ♪ ロォ〜プウ♪

かの有名な某アニメをパクって見ました。○次元ポケットから何か取り出す的な感じ？？

ようし！このロープで縛り付けちゃえば、こっちのもんよ！！さあ、大人しくお縄につくのね、瀬川慎吾！！

で、格闘する事約2時間半。やっと縛り付ける事に成功しました！これで身動き取れまい……フッフッフ……。

でも、その対価に、心も体も、もうボロボロ。ボロ雑巾より、もうボロボロ。寝てるのに暴言吐くわ、何かしら投げてくるわ、殴る蹴るは当然みたいだし、もう、大変！でも、これで、その苦労にも報われる♪なぜなら、これで、一緒に夜を共にする事ができるんですか……

「ら！？」

く、苦勞してきつく縛ったロープがもうほどけてる！？？ていうか、頑丈なホープが引き裂かれてる！？？ええ！？？ウソお！！

グズズ………眠りを妨げる悪い子はあ、この夢喰い慎吾様がしばき殺したるでえ……グズズ………

寢言でもものすごく不吉な事言ってる！しかも、眠りを妨げる悪い子って、もしかして……私！？

不不不……さあ、地獄に行く時間だよ……。腑腑腑………

『フ』の字が恐ろしい漢字になってる！不吉の不に、五臓六腑の腑！？キャァ、末恐ろしやあ。

「ゲフツ」

く、首が、し、し、し、絞まって、絞まっているう。ぐ、ぐるじい………。

真っ赤な血で染まあった♪女の子はあ……地獄に行きましょうとお……殺してみましたあ……

赤い鼻のトナカイさん風に、恐ろしい歌詞で歌ってるう!?

暗い夜道はあゝテカテカのうゝ♪お前の血つがあゝ♪やっくにな
つつのさあゝ♪

血がなんの役に立つの!?!呪いの儀式でも開くの!?

ちゃんと用意しておいたあゝ♪さゝいゝだゝんゝにいゝ♪その女
のっ子っおおゝ♪さっさげまっしったあゝ♪

やっぱり儀式い!?!しかも、女の子、捧げられちゃった!?!呪い
の儀式の貢物みつぎものにされちゃった!?!

私の第六感が訴えているわ!この場を離れなさいと、逃げなさい
と!!!

ふふうゝ……獲物が逃げちゃうよう……悪魔、困っちゃあう……

寢言ですよね、これ!お願い神様仏様!これは寢言だと言ってく
ださい!!!

(うん、寢言だよ)

下弦!?!あなたいたんなら助けてよ!

(……)

無視なの!?!それは、無視なの!?!?!

ガシッ!!

「What!?!」

あ、足を気持ち良さそうに眠っている悪魔に捕まれたあああああ
ああああ!!!

……キヤアアアアアアアアア……。

グズズ………愚図っ………グズズ………♪

54、彼に触るべからず!?(後書き)

さあ、斎賀はどうなってしまったんでしょうね?それは、たぶん次回で分かりますよ、多分♪

そんな事より、ビッグニュース!なんと、ありがたき事に、アクセス5万件を突破しました!!そして、感想・評価も50件を突破!!こんなに嬉しいと、今日という日を記念日にしたくなりますね♪

ではでは、長くなりましたが、これから末永く『DSな俺と、DMなアイツ』を、よろしくお願いします!!

55、さあ、みんなで探しましょう!?(前書き)

うーん、ちょっと長くなっちゃったかもしれません。
夏休みお泊まり編、二日目デェス♪
では、はりきってどーぞう♪

55、さあ、みんなで探しましょう!?

んああ……う……よく寝たあ……。あゝ、ええと、どうも、おはようございませ。今日も良く晴れた晴天で？あゝ、ダメ。眠い。眠い。眠い……。

「……いまいち目が覚めん……。顔洗ってこよ」

あゝ、まだ眠い。てか、水冷てえ。気持ちいいけど、ちめてえ。

「おはようございます、瀬川様？」

え？何々？何で疑問詞？俺何かした？てか、今俺がいるトコどこ？何で『様』呼び？

「おっはー、瀬川」

「おは、狩燐」

「眠そうな面しやがって、ちゃんと寝たのかよ」

「寝た」

「何時間」

「ん……わかんねえほど寝た。てか、枕気持ちよすぎだ、コラ」

「そりゃよかった。でも、八つ当たりはないだろ」

「気にするな、お坊ちゃま」

「うっせ、薄らハゲ」

「ハゲてねえよ」

「……なんか、ツツコミ適当じゃね？」

「気のせいじゃね？」

で、なんだかんで食事中。モチ、和食♪うゝん、ウマウマ♪

「あれ？斎賀と毒舌馬鹿いじめっ子女は？」

誰だよ、毒舌馬鹿いじめっ子女って。

「斎賀と森野？しらねえな、そういや」

「そういえば、私も見ていません」

「葛野木はあ？」

「私？私も見てない。……あ、でも。夜中徘徊してた良美は見たよ」

「瀬川あ、お前は？」

「知るか、んな事。どーでもいいよ、どーでも。それより俺は食事が大切なんだ。和食が命なんだ。」

「聞いているか？」

「聞いているかも」

「聞いてんじゃん」

「聞いてないかもつつたろ？」

「聞いているじゃん、だから」

「聞いている何も、聞えてくるさ」

「聞いてんならちゃんと聞いているって言えよ」

「聞いてない、聞えてきたんだ」

「聞いているも聞えてきたも、似たようなもんだろ？」

「聞いていると聞えてきたは、きっと違う」

「聞いているも聞えてきたも同じだ！」

「聞いている聞いてないの問題じゃなくなってね？」

「聞いてなかったお前が悪い」

「てか、お前らのやってる事、不毛の争いだから。てか、聞いている聞いてない五月蠅いから」

「あり？いたつけ小橋？てか、呼ばれてたんだっけ？」

「五月蠅いな、影薄」

「酷いぞ、狩燐！俺だって……俺だって、頑張ってるんだ！！」

「影薄いのはそこら辺でくたばってればいいんだよ。所詮準レギュラーなんだから。」

「瀬川！お前、俺の存在忘れてただろ！！」

「残念でしたあ。それは一個前に思ってたことだよ、バアカ。」

「てか、むさ苦しいよ、男ばっかで。ついでに言おうと、かなりウザい」

あ、裏の葛野木が姿を現したぞ。ま、どーでもいいけど。

「つーか、斎賀と森野の心配はしなくていいのか？」

あ、忘れてた。ナイス狩燐。お前が言わなかったら、多分一生忘れてた。あ、でも、その方がいいか。

「探してやるか？」

「私は別にいいわよ？」

「俺はどっちでもいい」

「私も混ざっていいでしょうか？」

「いいんじゃないの？」

「……やった♪」

小声で喜んじゃって。いい年した大人のくせに、妙に子供っぽいなあ。

「瀬川は？」

「……モクモク」

「食べてないで聞けよ」

ヤダよ、小橋の話なんて、誰が聞くか。影薄がうつちまう。

「お前今、影薄がうつるって思っただろ！！」

ごめーとー。どうでもいいから、飯食わせろ飯。てか、

「おかわり」

「はいはい」

ナイス反応、村勢さん。おし、これでたらふく飯が食えるぞう。

「てか、飯食ってないで、話を聞こうぜ？」

だから、影薄の話なんて、聞くに値しねえっての。時間の無駄。一生のロスタイム。経費削減。行節約。これ、一番大事。まあ、ウチの作者はできてねえけど。

（何か言ったあ？）

言っていない事にしておこう。

（言っただんじゃねえかよ）

「あ、いいところに来たわね、下弦。男ばっかで暑苦しいからさ、森野達が見つかるまで、しばらくいてよ」

（ええ。他の小説のネタも考えないといけないのに）

「どうせ、こっちより人気ないでしょ？ いいじゃない、別に」

（おいおい、冷たいねえ君）

「そういうキャラ設定されたからね」

（じゃあ、見つかるまでは、いてあげましょう）

「やった♪」

……村勢さんと、同じ喜び方じゃん。

＊

（てことで、緊急『ドSM』キャラ会議い。第一回、ヒロイン的存在とオマケはどこに行ったあを、開きたいと思いまあす！）

お前が仕切るのかよ、作者。

（だって、お前が断るんだもん）

めんどくさい事は任せる。

（薄情者。親不孝者。ハゲ）

最後の一言はなんじゃああああああああああああああああ

ああああああ！！

「で、どうやって探すんですか、議長」

（……）

「議長、聞いてます？」

「ギチョー、森野達の行方、どう探すう？」

（うーん、適当に屋敷内を探してみようかなって思います）

「俺は無視するのに、葛野木には反応するのかよ！！」

「じゃあ、そうしますか」

「だったら、私が案内役を勤めさせていただきます」

「お、村勢なら心強い。瀬川もいいな？」

「おう」

(じゃ、しゅっぱあつ♪)

「……俺は、……俺は……?」

?? 誰かの呟きが聞こえた気が……。気のせいかな?

変なノリで、探した結果。

「いないねえ」

と、葛野木。何か疲れてんな。

「いなかったな」

と、狩燐。何でこいつ、楽しそうなんだ? てか、いつも楽しそうだな。

「いませんでしたねえ」

と、村勢さん。あー、一番残念そうにしてんな。

「いいじゃん、いなくても」

これ、モチ俺。だって、あんなの存在しなくても、何とかなるだろう?

「……俺って、……俺って……」

と、影薄……じゃなくて、小橋。いまだに悩んでるし。てか、オラが真っ黒。

(んー、じゃ、外に行ってみよ?)

と、作者。一番呑気そうだな、おい。狩燐といい勝負だ。

「おー」

雄たけびが頼りねえよ。頼りなさ過ぎて、切ねえよ。

で、外も探した結果。

「おかしわねえ。どこにもいないわ」

と、葛野木。

え? そのまえに状況の説明しろ? てか、探してるときの状況を教えろだ? んなの、俺の気分はどうにでもなるんじゃない。仕方ねえな、外で探してる時の状況だけ、ちょっと教えてやるよ。

＊ 回想（？） ＊

「もうりのおおお！」

「どこにいますかぁ！？いたら、お返事をお！！」

「良美い、美咲い！！どこお！！」

「……めんど」

「……俺の存在の意味って、なんだっけ？……ハハ、もう生きる希望を見失いそうだよ」

（作者の特権、使った方がいいですかぁ！？）

＊ 回想（？） 終了 ＊

は？よく分かんなかった？何とか理解してくれ。頼む、作者も悩んでんだ。情景書くの、苦手みてえだからさ。

「……てか、バ下弦バ鴉！！」

（バ下弦じゃない！バ鴉じゃない！！）

「いいだろ、気にするな」

（気にするうゝ）

「じゃあ、一生気にし続ける。そして、とっとと作者の特権使って、斎賀達探せや」

（冷たいなあ）

「だから女にモテないのよ、瀬川」

「ウッセエ、黙れ。準レギュラーより下の身分のくせに」

「何よ！小橋よりはちよっと上だわ！！」

「ああ、小橋と比べりゃ、誰だって上の位置に立てるさ」

「俺の身分って、どんだけ低いの！？」

（んゝ、一回しか登場してないキャラ達より下？）

「……俺、生きる理由、ねえじゃん……」

「それよりも、作者の特権とやらで探せんなら、探してやろうぜ」
「？」

優しいなあ、狩燐。俺にそんなあったけえ心はねえよ。凍てついてるよ、北極並みに。寒々しいよ、グリーンランド並みに。

「そうですね。お願いしますわ、下弦様」

ああ、村勢さんも、優しいなあ。いいなあ、俺の心と比較にならないほど、のっほおんてしてるう。

(……下弦様だ何て、……て、照れるなあ)

「照れてる暇あったら、探せよ、バ下弦」

(ツンデレのツン!?)

あ、狩燐の本性が見え隠れしてるよ。あゝ、それより先に立ち入っちゃあいけません。処分されますよ? 狩燐家に……。

「いいから、探してよ、バ鴉」

(お前まで!?)

設定上、二面性があるからな、葛野木は。

(……こんなキャラ、作らなきゃよかった)

今頃後悔してもおせえよ。もうこっちは50話突破しちゃってんだから。てか、後悔するぐらいなら、最初からこんなもん書くな、バ下弦バ鴉。

「じゃ、サクッと作者の特権使え」

(……私って……何?……)

「この、物語の(一応)作者」

(今、ちっさい声で、一応って言わなかった!?)

え? 言ったかなあ? 言ってないよねえ、読者様?

(言いましたよね!?! 読者様!?!)

答えはWEBで!!

「変なやり取りはいいから、早く特権を……」

変とは失礼な。変なのは作者だけで十分だったの。

(わっかりましたよ。探せばいいんでしょう? てか、連れ戻せばいいんでしょう?)

連れ戻せばって、どこにやったんだよ。地獄か? 天国か? このヤロー。

(あゝ、しばらく待ってね♪)

*

「フフ、ただいま、地上！ただいま、大気！！」

「ただいま、地球！！ただいま、ダーリン♪」

あゝ、帰って来ちまったよ、ダブル馬鹿。てか、どこからの生還？

(地獄からあゝどこかの誰かさんの杜撰な行為&寝相の悪さのせいで、地獄へ一泊旅行に逝ってましたあゝ)

そんな楽しそうに言う事かね、それ。てか、どこかの誰かさんって、誰だよ。

(言っている？)

じゃ、言うな。あばよ、バ下弦バ鴉。

(それ、酷くない！？)

「ねえ、お帰りって言ってくれないのお？ダァーリィーッン」

「うっせえな。地獄に送りたいのか、この野郎」

「ゴメンなさい地獄だけは針の山ヘスカイダイビング(パラシュートなし)だけはお許しをお」

……何か、腰低くなってる？てか、腰低いよね？？てか、低いよ、これ！！

「フフ、……もう、地獄になんて、逝きたくないわ」

ずっといればよかったのに……。そしたら俺に安息の時間が訪れたのに……。

(まあ、私のおかげでみんな帰ってきたんで、今回はこれでおしまいつて事♪)

あ、今回これだけなの。へえ、楽でよかった……って、ホントにこれだけで終了！？これ、手拔——。

(創造者の怒り♪)

ギャっ……。

(一時的に主人公死にしましたが、気にしないでくださいね♪次回にはぴんぴんしてるんで♪

では、Let's meet some day again♪)

55、さあ、みんなで探しましょう!?(後書き)

主人公と同じく、手抜きって思った人。大正解。ご褒美に、……特に何もありません。すみません。手に持った刃物類、しまってくださいませんか？

あ、あと、葛野木に馬鹿にされた新連載小説『アルカンシエル』も、良かったら読んでみてくださいさあい。

56、探検団の悲劇!?(前書き)

終わりにしようかなあと思いつつ、まだ続いている夏休み編デス♪
まだ飽きずに呼んでくださっている方々、本当に有難うございます!

ではでは、おまちかね(?)の本編どーぞお♪

56、探検団の悲劇!?

とりあえず馬鹿共が見つかったので、今は屋敷に帰ってきてます。
今いる所は、……密林?

「あ」

立ち止まってほうける狩燐。てか、急に止まるな。ぶつかりそうになったじゃねえかよ。

「んなだよ」

「冒険しね?」

「何で急にそうなんだよ!」

「気分で」

「随分と優柔不断な気分で」

「それこそが俺だからな」

「……褒めてねえぞ?」

「重々承知の上さ」

「ていうか、冒険の話はどこへ飛んだのよ」

あ、ナイスツツコミ、葛野木。でも、冒険する気なんて、全くな
さそうな面してんぞ。まあ、俺もそうだけど。

「フフ、でも、冒険って言っても、どこを冒険するの?」

「そーよ! 私はダーリンとの愛を育みたいのに!!」

「どーでもいいよ、んなこと。てか、お前と俺の間じゃ、愛なん
て生まれねえよ」

「じゃあ、恋?」

「一度ならず二回以上死んでからここに帰って来い」

「私はダーリンの愛がある限り、何度でもよみがえられるわ!!」

「俺はお前を愛してないんで、一回死んだらそれで終わりだ。な
ら、試してみるか?」

「愛の試練?」

「んな訳あるかあああああああああ!!」

「あのお、仲の良いお2人さん？」

「どこをどーみて仲が良いと思ったんだよ、ゴラ」

「私の憩いの時間を邪魔しないでよ、影薄」

「ていうか、話の内容が変わりそうだから人の話を聞け、毒舌と馬鹿」

「毒舌とは何だ、毒舌とは!!」

「馬鹿とは何よ、私はダーリンのために想って――」

「いいからお前は黙っとけええええええ!!」

懇親のグーパンチをお見舞いして、黙らせる。ダイジョーブ、原形はとどめてるさ。ん？何の事？鼻の事さ（黒笑）

「てことで、探検しよう」

「どーゆー事で探検するのよ」

ごもつともなツツコミで、葛野木。

「確か、ウチの敷地内に、洞窟があったんだよねえ。どっかに」

「どっかについて、場所わかんねえのかよ」

「分からないと言われれば、分からないんじゃない？」

「何故に俺に聞き返す!？」

「だって、リーダーじゃん」

「またかよ!」

「決め直すのめんどいし、何か向いてそうだし」

「嬉しくねえぞ」

「喜ばせようと思って言った事じゃねえからな」

「てか、ここお前んちだろ？」

「正しく言えば、おじの家だ」

「どーでもいい」

「どーでもよくない」

「どーでもいいじゃんか」

「どーでもよくないな」

「どーでもいいつつてんだから、どーでもいいって言えよ」

「どーでもよくないから、どーでもよくないって言ってるんだ」

「どーでもいいって言ってんだろ？往生際おうじょうぎわの悪い奴は嫌われるぞ」
「どーでもよくないから、はっきりどーでもよくないって言ってんだよ。しつこいとモテねえぞ」

「どーでもいいって言えよ、ホントはどーでもいいんだろ、坊ちやま」

「どーでもよくないって、さっきから言ってんじゃねえか、愚民」

「どーでもいい事をどーでもいいって言っちゃあいけねえのかよ、毒舌」

「どーでもよくない事だから、どーでもよくないつつてんだよ、お前こそ毒舌」

「どーでもいいって言って、楽になっちまえよ、お前の方が毒舌」
「どーでもよくないって、さっきから何回言ってっと思っただよ、お前が最強毒舌王」

「どーでもいいだろ、絶対に、お前こそ最悪毒舌王」

「どーでもよくねえって言ってんだろ、いい加減自分の非を認めろ、最強毒舌S王」

「どーでもいいって――」

「お前らはいいい加減にしろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

「！」

こ、小橋が……あの、か、影の薄い小橋が……今だけものっそい存在感がある！！

「お前らさあ、いい加減にしろよな。仲がいいのか悪いのか、ハッキリしろってんだ。でも、俺が言いたいのはそのこじゃねえ。『どーでもいい』『どーでもよくない』うるせえんだよ。前も、『聞いた』『聞いてない』で苦情がきてんだからさあ、今回も来るだろう？確実に。誰かしら突っ込むんだよ、ウザいって」

「だけどさ」

「黙れ、貴族！」

「……す、すみません」

「これだから嫌なんだよ、俺だって怒りたくて怒ってる訳じゃねえんだよ？俺は通常どーりに生活してれば、影の薄い普通の少年だ。それは認める。だが！」

びっくりして、怒こられてない奴らまで飛び上がってる……。恐るべき、キレた小橋……。

「お前らは何だ？影が濃いのを利用して、行を無駄遣いする、外道だ。ハッキリ言って、どっちでもいいだろ、んな事？と思う、議長？」

(……)

「議長！いるのは分かってんだぞ、速やかに答えねえと、恥ずかし映像をば——」

(ハッキリ言って、どちらでもイイであります!!！)

「よろしい、では帰りましたまえ」

(ははあ……)

ど、どこの戦国大名と子分？

「作者もどっちでもいいって言ってんだろ？分かっただろ、お前らのやってる事の無意味さ、不毛の争いさ、影薄の苦しみ!!！」

……さ、最後のはよくわからねえよ……。てか、関係なくね？

「ともかく！これ以上大切な時間を浪費するのはゴメンだ。今後また同じような事があったら、影薄同盟責任者としての罰を与える、いいな!!！」

な、なんだよ、影薄同盟って……。てか、責任者だったんだ、小橋……。てか、会長は誰？

「では、本題に戻る。てか、さっさと洞窟とやらを探して、話の内容を元どーりに戻すぞ。出ないと、もう今回はだだ崩れだ。てか、とっくのとうにだだ崩れだ」

最後にペツと唾吐いて、小橋の怒りは収まった……。のかな？

「どこにもねえじゃんよお」

嘆く小橋。

「フフ、穴一つ見当たらないわ」

飽きれる斎賀。

「あゝ、見つからない！」

吠える葛野木。

「ホントにあんのかよ」

「ダーリン♪一緒に――」

くつついてくる馬鹿を引き剥がして、殴る蹴る暴力を振るう俺。

「つかしいなあ。ここら辺だと思ったんだけど……」

悩む狩燐。

あゝ、説明しなくても分かると思うけど、洞窟探してます。ずっと探してます。めっさ探してます。ものっそい探してます……。でもお、……。みつかりまっせえん……。

「マジであるのかよ、洞窟なんて」

「前、地図で見た時はあったんだけどなあ……。埋められたかなあ」

「埋められた!？」

「だって、あそこで俺が遊んでて、怪我したから、洞窟のせいにされて……。うゝん」

……。お前の両親ならやりそうだな。なにせ、息子LOVEだから……。

「ああ、そういえば怪我したとか何とかで、学校休んでたわね」
さすが幼馴染、葛野木。……。でも、怪我で学校休むって……。

「そんなに大怪我したのか？」

「お、心配してくれんのか？」

「心配じゃない、気になるだけだ」

「心配なんじゃん」

「心……ともかく、どうだったんだよ」

危なくまた小橋に怒られる所だった。あいつの視線が今痛かった……。

「んー、全治5ヶ月ってトコ？」

思った以上に大怪我してるよこの子おおおおおおおおおおお
おおおおお！！

「いやさあ、思った以上にそこが深くって、頭から落ちたからさあ、思った以上に休暇？」

いやいやいやいやいや、そんな事サラッと笑顔で言うような事じゃねえだろ？

「おかげでポロオンと記憶の一部が飛んじまったよ。アツハハ」
何で爆笑？てか、ポロオンって、そんな気安く言っているものなのか、それ……。

「いろいろと大変だったけど、後遺症は残らなかった訳だし、記憶も戻った事だし、傷跡は残ったままだし、一件落着う♪」

ちよ、ちよいちよいちよい待ち！！二つ目まではOKだよ、一件落着う♪でいいよ。でもさあ、最後のは一件落着う♪じゃねえだろ、明らかに！！

「あ」

なんだよ森野。久しぶりに俺以外の事でしゃべるのか？

「会ったよ、動物」

動物じゃなくて、洞窟だ。ていうか、何の動物に会うんだよ、こんな所で……熊とか？

「ああ、そういや、ここヒグマ出るから気を付けろう」

そーゆー事はもっと早く言わないか、フツー！？

「じゃあ、これがそう？」

「ん？あ、そうそう。それだよ」

ふーん、こいつがヒグマかあ……って、おい！！

「あ、本物じゃん」

狩燐、お前の常識力は、その時に失われたまま、元に戻ってねえ

んじゃねえのか!?

「みんなあ」

「何?」

「フフ、何かしら?」

「んだよ」

「につげろう♪」

軽いよおおおおおおおおおおお! !
! 言葉が風のように軽ううううううううううううううううううう
い! !

「やっばい、やっばい♪」

楽しそうに逃げる狩燐。お前はこんな危機的状況においても楽し
そうだな♪

「何でこうなるのよおおおおお!!」

必死で逃げる、フツ―の人、葛野木。そうなった理由は、お前の
幼馴染の狩燐のせいだよ♪

「食われるのだけは嫌だああああああ」

必死で逃げる、影薄こと、小橋。アツハハハ、確かに食われたく
ねえなあ♪

「フフ、世界の女王は、いつ何時でも狙われているのね」

必死で逃げる、勘違い様、斎賀。よくこの状況でそういう発想が
できたよねえ♪

「ダーリンとの逃避行の予行よ、これは! これを耐え抜いてこそ、
真の妻になれる!」

吞気にスキップで逃げる、馬鹿M、森野。お前の吞気さが、今は
うらやましいよ♪

「アツハハハハハ! 食いたいなら食ってみろ、この馬鹿熊あああ
あああ♪」

もう、何がなんだか分からなくて、ていうか、もう、精神的苦痛
でおかしくなったみたいですう、俺♪

「あ、あそこかも、例の洞窟」

「じゃ、じゃあ、あそこに逃げ込みましょう、ついでだから!」

「ついでじゃなくて、積極的にそうしようぜ!」

「フフ、お決まりの展開ね」

「ダーリンと私の愛の巣は目の前に♪」

「お前はあそこに入る前に、囹にされたいか、このやろう」

なあんで、会話はどうでもいい!!! 今は、あの洞窟にまっしぐらです!!!

うおおおおおおお!!! 燃えろ、俺の中の何かあああああああ
あ!!!

56、探検団の悲劇!?(後書き)

微妙な終わり方ですみません。変な終わり方ですみません。まだ続
いちゃってすみません……。

まあ、今回も(?) 悲劇に襲われた瀬川達ですが、また次回も悲劇
になるのやら、ならないのやら……。

ま、それはお楽しみってことで! アディオス!!

57、彼のテンションは、下がりませんか!? (前書き)

まだまだ終わらない、夏休み編……。いつまで続くのか!? それは、作者の気分次第です♪

ではではあ、洞窟探検編、スタートです!!

57、彼のテンションは、下がりません!?

「……こ、ここまで来れば、……もう、大丈夫……だよな？」

はぁ、疲れました。もう、今回これで終わりでよくね？マジ疲れた、へこたれた飽きた。立ち直り不可能なんで、ホント、今日はこれで勘弁して。

「それにしても、暗くて何も見えないんだけど」

あ、確かに。何で今まで気付かなかったんだろ。何で葛野木が気付くまで気付かなかったんだろ。

カチ

お、明るくなった。てか、マブツ!!

「えっと、これが瀬川でえ、」

なあって呑気な狩燐の声がして、光が移動する。

「森野でえ、葛野木でえ、斎賀。うん、全員居るな」

うん、いるいる。みんな揃ってる、よかったよかった。……よかった？

「小橋は!？」

うーん、見事にみんなでハモリ。って、それどころじゃなくなっけ!?

「小橋は!?! いつ見失ったの!?!」

「フフ、今頃食べられてたりしないかしら」

「あゝあ、生きてるかなあ、アイツ」

「影薄君、影薄いからきつと大丈夫だよ」

「そうだね」

「フフ、その通りね」

「あ、それありえる」

「でしょでしょ!!」

……そろいも揃って、何か酷くね？

「みんなあ、酷いよう。呪うよ？死んでたら、ホント呪うよ？？」
って、言いそうだなあ……。あれ？

「あ、いたのか、小橋」

「いたよさっきから。瀬川が眩しがってる頃から、ずっとここにいたよ」

「え！？」

異口同音。俺以外みんなで。とことん影薄いな、こいつ。ちょっと哀れになってきたかも。

「じゃ、気を取り直してもっかい確認」
だから人にライト向けんなってのに。

「瀬川でえ、小橋でえ、森野でえ、葛野木でえ、斎賀でえ、熊」

……え？なんつった？

「あ」

「逃げろおおおおおおおおおおおおお！……！」
何で今日はこんなについてないのっ！？

） 逃げる事数時間 ）

「はあはあ……もう、体力の限界よ」

「フ、……フフ、世界の女王を走らせるなんて、……ある意味すごいわ」

「あゝゝゝ、水！水をくれ！！」

「ダーリンとの逃避行だと思えば……はあはあ、……こ、こんな
の、へっちゃらよ……」

「あゝ、久しぶりに全力疾走。結構楽しいかも♪」

「……お前は危機感、そして疲れというものを知れ」

「なんで？楽しいじゃんか♪」

「……もういい、しゃべるな」

ああ、こいつの馬鹿元氣、少しだけ譲って欲しいよ。ホントに、少しだけ……。

「んー、こんなに奥深くに入ってくると、危ないかも」

ホント、いつまでも元氣だな、こいつは。みんな荒い息してんの、もう回復かよ。

「なんで、……あぶねえの？」

「ん？タランチュラが出るから」

「はあ!？」

狩燐以外みんなでハモリング♪

「そんなの聞いた事ない!」

「俺達を殺す気かよ、狩燐!」

「フフ、おいたが過ぎると、いけないわよ?」

「何でよりにもよってタランチュラ!？」

「タランチュラって、なんですか!？」

……一人だけ馬鹿が混じってるよ。決定的な馬鹿が混じってる。

「タランチュラは、ジツちゃんが買ったペットなのだあ」

棒読み!？」

「へえ」

感心してるし!!

「で、猛毒がある事に気付かなくって、噛まれてあっけなく死んだよ? 確か」

うろ覚え!？」

「危ないんだあ」

また感心してるし!!

「で、この洞窟に放して、つか、追放して、まだ飼ってる」
追放してねえじゃん!

「なるへそお」

またまた感心!？」

「カサカサ聞えたら注意しろ。某^{なにがし}って人のたくらみで、量が増えるから」

……ああ、アイツか。分からない方は、感想のところを覗いて見てください。きっと分かります、犯人が。

「じゃあ、早くここから出た方がいいんじゃない？」

あ、まともな事言ってる、森野のくせに。

「でも、出口が分からん」

「へえ、大変だあ」

うん、大変だよ、とっても大変だ。出口が分からないって事は、一生出れない可能性があるからね。

「ふざけんなああああああああああああああああ！！！」

!!!

「ちよつと狩燐! ? それ、本気で言ってるなら、私、マジギレするぞ! !」

「フフ、一回痛い目に遭って見た方がいいよね」

「俺らどーなるの!？」

「生ダリーと一緒に……」

「なあに頬を赤く染めとんじやボケエエエエエエエエエ
エエ！！」

「だって、ダーリンと永遠に一緒だよ……」

「状況を考えてから発言しろ！」

「考えたわ！その結果がこれ！！」

「お前はあの世で一生暮らせ。そのほうが幸せだ」

「え？ダーリンがいてくれるなら、私はいつだって幸せだよ」

「お前が
いる限り、俺は一生不幸だよ」

「そんな事ないよお♪」

「黙ってろ、余計に腹立つから」

「怒ったダーリンも好きだゾ♪」

「黙れって……言ってるんだろ おおがおがああああ
ああああ！」

久しぶりに、顔面に必殺グーパンチ！！気分爽快、幸せ一杯。

「そんな事より、どーすんだよ」

「どーするって？なにを？」

お前に場を把握するということではできないのかよ、狩燐……。

「あ、出口の事か？」

普通に気付けよ、そこは。

「んー、探検するつもりで来た訳だし、このまま探検気分に進もうぜ？」

お前のポジティブさ、ちょっと恵んでくれ、ここにいる全員に。
てことで、狩燐だけはドラ○エ的なテンションで、くらあい道を
ライトで照らしながら歩いていくのであったあ。

……あー、マジ今回疲れたわ。俺、体力勝負、次回からなしでお願いします……。

57、彼のテンションは、下がりませんか!? (後書き)

クラスに必ず一人いる、ハイテンション野郎、それがここで言う狩
燐の事です。

あゝ、私もちょっと欲しいなあ、彼の異常なまでのポジティブさ…
…。

ではでは、次回、熊とタランチュラに大騒ぎ!! さあどうなる、少
年探検団!!

……的な感じになる予定です。予定なんです。あくまで、予定です。

58、タランチュラ&熊 VS 少年探検団!?(前書き)

感想に書かれて知ったこと。

タランチュラって、あんまり危なくない。

人生に役立つ(?) 豆知識、皆さんにも教えようかと思って言ってみました。

では、なんだかちよっぴり波乱の予感がする、洞窟迷子編、どーぞう♪

58、タランチュラ&熊 vs 少年探検団!?

何がどうなったら、熊とタランチュラに追われるという、非常事態になるんだろう……。てか、なんで追いかけてくんだよ。疲れたから。

「……逸れちゃったみたいだね、ダーリン」

「……そうみたいだな。てか、俺はダーリンじゃねえっての」

「いいじゃない、夫婦の憩いの時間、大切にしましょ♪」

「どこら辺が憩い!? 全然休まらないから、この状況!!!」

「でも、2人つきり……」

「キモいんだよ、この野郎!!」

てか、暗くてハッキリ見えねえよ。こいつ、マジで森野だよな?

「ねえねえ、ダーリン」

「ダーリンじゃない」

「なんか、カサカサ言ってるじゃない?」

「肌が?」

「私はまだまだピチピチよ!! じゃなくて、何かホラ、狩燐が言ってるじゃない」

「カサカサ聞えたら気をつける的な?」

「そうそう、それぞれ」

「で、なんだよ」

「そのカサカサが、聞えたの」

「空耳だと思え」

「え!? そんな簡単に流しちゃっていいの!?!」

「だって、森野に言われると、いまいち信憑性がない」

「差別!?!」

「うっさい、偏見だ」

「どちらにしても、よくない感じね」

「そだよ。お前に好印象なんて、持つわけねえもん」

カサカサ傘……

おい、へボ作者。最後の変換、まちがってんぞ。

（へボ言うな、傷つくから）

じゃ、気を取り直して……。

（私は無視なのか！！）

カサカサカサカサ……

「何か、聞えんな」

「すぐ近くでね」

「あ、そだ。携帯のランプで……」

つけてびっくり、蜘蛛の量う！！

「ふざけてるうううううううううううう！！」

「何で、こんなに一杯いるのよおおおおおおお！！」
「！！」

はーい、瀬川達が追いかけてるその頃お。あ、瀬川達意外は、私（作者）視点から行くので、よろしくお願いしまあす♪

「……何でよりもよってあんたなの？」

「俺じゃ不満か」

「不満って言うか、……不安」

「何故？」

「……日頃のあんたの行いを振り返ってご覧なさい」

「ええつとお……」

「ホントにさかのぼらんでいいわ！」

ナイスツッコミ葛野木さん！

「それよりさあ」

「何よ」

「なあんか、カサカサ言ってね？」

「……あんたもそう思う、狩燐？」

「随分前から」

「気付いてたんなら、逃げようとか思いなさいよ!!」

「いや、相手が驚く顔を見てみたかった」

「……もういい」

「何が？逃げるの諦める？」

「んなわけないでしょ！」

「なら、逃げる？」

「あつたり前!!ほら、いくわよ!!」

「あゝい」

……呑気な狩燐と、ちゃんと状況を把握している葛野木達でした
あ。

「……フフ、あなたと一緒になんて、頼りなさげすぎ……」

「悪かったな」

「フフ、かなり悪いわ」

「どれだけ俺の事を嫌うんだよ！」

「フフ、世界中の誰よりも嫌ってあげるわ」

「……」

落ち込む影薄君は、手厳しい女王様と一緒にのようですね……。あ
あ、哀れなり、影薄。

「フフ、それよりも、早くみんなと合流したいわね」

「そうですね」

「フフ、じゃあまず、出口でも探しましょうか」

「そうですね」

「フフ、……何か、後ろに威圧感を感じるんだけど……気のせい
よね？」

「……そうだったらいいですね」

「フフ、あなた、振り向いてご覧なさいよ」

「え！？ヤダよ！！」

「フフ、影が薄いくせに、口だけは達者なのね」

「分かったよ、見りゃあいいんだろ、見りゃ！！」

「フフ、それでいいのよ」

……完全に口車に乗せられてた気が……。

で、小橋が振り返ってみれば、そこには。

グルルウ~~~~

お腹をすかせた森の熊さんが待ってましたあ。

「……フフ、ありえないわ」

「でも、幻術とか、そーゆーのじゃなさそうだぜ？」

「フフ、……逃げるわよ！！」

「言われなくてももう逃げてるよ！！」

こっちもこっちで、逃避行が始まったようですね。あゝ、これでみんな何かから逃げてる訳だ。

さあて、この後どうしてあげようか……ふふふ……。

） 数分後 （

「どうやら、……まいたみてえだな」

「私は巻けなっただけどね」

「漢字が違うぞ、馬鹿」

「……ああ、やっぱりダーリンと一緒によかった」

「よくねえよ。てか、早く外に出ねえと」

あゝ、携帯の電池が切れるうゝ。明かりが点なくなっちまうう。

「他の奴ら、無事かな？てか、喧嘩とか、してねえよな？」

「ん、してないといいね」

「だな」

……。

沈黙って、ちょっと耐えられねえな。つまんねえ。

傘篋さ

おい、馬鹿作者。また変なミスしてんぞ。

（わざとだもん）

あっそ。

カササ……カサカサカサ

またタラチュウラか？

カサカサ……カサカサ

……にしては、数が多い気がする。

ガサガサ

あれ？カサカサのはずが、ガサガサに聞える……。

「ねえ、ダーリン。ここって、洞窟よね」

「そうだけど？」

「洞窟って言えば、何？」

「洞窟って言えば、……鍾乳洞とか？」

「イメージで考えないで」

「じゃあ、……コウモリ？」

「え？私!？」

「ちげえよ、馬鹿」

何でコウモリが森野になるんだろな？全然違うのに……。

「じゃ、……なんだよ？」

「黒くてテカテカしてて、前、作者が化けた奴」

「それはないだろ」

「え、でも……」

ガサガサガサガサ！

「……何か、近付いてきてない？」

「……気のせいだ。……と、思え」

「え！？」

「気のせいだと思うんだ、とりあえず」

「え！？……ええ！？」

……あゝ、明らかに……こっち来てる気がする。音的に。

「逃げる？」

「逃げるか？」

げっ、ハモった。てか、さりげなく頬染めてるし！

「お前、早くしねえと置いてくぞ」

「ま、待ってよう」

ガサガサ……ガサササ！！

追いかけてきてない？追いかけてきてないか、これ！？追いかけてられてるよね、これ！！

うゝ、森野が変な事言うから、振り返るに振り返られねえじゃねえかよ。俺の嫌いな昆虫NO.1だったら、どうしてくれんだよ。

「ねえ、ダーリン」

「んだよ。無駄口叩いてる暇あったら、早く逃げるぞ」

「……また反応してくれた」

「何が」

「ダーリンで、返事してくれた♪」

「それだけかよ」

「え？」

「それだけで、お前は喜べんだな」

「だって、……だって、ねえ？」

「聞かれてもわかんねえよ、バアカ」

些細なことで、良く喜べるもんだ。俺はただ、反抗するのに無駄な体力を使わないようにしただけなのにさ。

カササ……

「全力で逃げるぞ、いいな!？」

「イエッサー♪」

……何故に楽しそうなんだ？

その頃狩燐達は、もめてます。

「この道、さっきも通ったって言ってるでしょ!？」

「何でそう確信できんだよ!」

「だって目印つけてたもん!!」

あ、目印って言うのは、影に付けた傷の事です。それが、今狩燐達がいる所にあるんですよねえ。

「熊が爪といたかもしれないねえだろ!？」

まあ、確かに、ベタな三本線は入ってるけど……熊とは限らないよねえ。

「でも、この道は絶対通ったのよ」

「ホントにか？」

「ホントよ!嘘ついて何の得になるって言うのよ!」

「知るか、そんなもん」

「だから、こっちの道行きましようって！」

「だったら、こっちの道でもいいじゃんか」

「だから、そっちは通ったって言ってるじゃない!!」

………終わりにないね、この喧嘩………。

で、そんな頃、こいつらは。

「フフ、しつこいわ」

「何でずっと追いかけてくるんだああああああ!!」

よだれダラダラ垂らしてる、森の熊さんに追いかけてます!

必死ですよ、必死!!

「フフ、私がそんなに好きなのかしら」

「そんな事考える余裕ねえだろ!？」

「フフ、五月蠅いわよ、凡人」

「ぼ、凡人とは失礼な!!」

「フフ、私に勝てると思って？」

「俺だって、男だぞ！」

「フフ、男が女に暴力を振るっていいの？」

「瀬川はどうなるんだよ!？」

「フフ、私の夫は例外」

あ、瀬川が夫って言うのは、決定事項なんだ……。

「そんなの卑怯だぞ！」

「フフ、じゃあ、私を口説き落として見なさい」

一つ注意。瀬川は口説き落としてません。口説こうともしてませ

ん。ていうか、そういう恋愛系に全く興味なしです。

「そーゆーの、嫌いだ」

「フフ、じゃあ一生あなたは凡人ね」

「せめていい事する度に、一階級くらい上げてくれよ！」

「ふふ、気分次第ね。……それにしても」

「しつこいんだよ、この……ボケ熊があああああ!!」

振り返りざまに、横顔に強烈なキック！&ストレート！！&ただ殴る蹴る投げるはたく！！絶対的暴力！！

これは痛い、クリティカルヒットだ！！

「フフ、人間を甘く見ない事ね」

「人間様をなめんなよ、ペッ」

……性格が変わったけど、一応斎賀と小橋でしたあ……。

彼らが去った後、熊の死骸は瀬川達によって発見されました……。

58、タランチュラ&熊　V S　少年探検団!?(後書き)

中途半端な終わり方ですみません。許してください。勘弁してください。嫌わないでください。

次回はやつと外に出れる……かもしれません♪
ではあ、また次回お会いしまほう☆

59、脱出成功!?(前書き)

ノリで書いていたら長くなっちゃいました。そして、誤字脱字がハ
ンパない量になりました。なので、もし誤字脱字を見つけたら、報
告お願いします。

直して読み返してみたんですけど、まだ不安なんで、よろしくお願
いします……。

では、洞窟迷子編、スタートデェス!

59、脱出成功!?

あゝゝゝ!どうなってんだよ、これ!!何で俺らはまだゴキ……じゃなくて、得体の知れない奴と、タランチュラに追いかけられなきゃあかんだ!てか、今追いかけてくるタランチュラ、爆発してるぞ!?何でだよ、何で生態系が変わってんだよ!普通のタランチュラだったら、爆発とかしねえだろ!!

「ねえ、ダーリン……」

「んだよ」

「疲れた」

「俺だってそうだよ!!」

何だよこいつ!こんな大変な状況においても、俺にツツコませようと言うのか!!

「ねえ、ダーリン?」

「さっきみたいにくだらねえ事言ったら、その首切り落としてやる」

「……」

凶星かよおおおおお!!

ていうか、出口はどこだああああああああああああああああああああああああ!!

ええ、その頃喧嘩していた狩猟達は、やっぱりもめています。

「こっちだね!」

「こっちよ!!」

不毛の争い……いい加減、飽きないのかな?

「こっちだよ。だって、風が来るもん」

「いいえ、こっちよ。こっちから風は来てる!」

「こっちだ!」

「こっちよ！」

風が吹く方向で、もめてるみたいですわね。でも、何故に？

「そっちのは、風が壁に当たってきた奴だろ？こっちのが本物の風だね」

「いいえ、こっちの風が出口から吹く風よ！」

ああ、出口から吹く風を頼りに外に出ようって考えたのか……。

なかなか、頭の回転がいい人達は違うなあ。瀬川達なんて、ただ逃げてただけなのに。あ、影薄君達もか。

「こっちだ！」

「こっちよ！」

「絶対にこっちだ！」

「狩燐の絶対より、私の絶対の方が説得力があるわ！」

まあ、確かにね。

「葛野木の確信より、自分の家の事なんだから俺のほうが確信は強い！」

それも、ありかな。

「当てにならないわ！」

「お前こそ！」

……てか、幼馴染なのに、何故にこんなにまで仲が悪いの？

「たまには人の意見を尊重しろよ、毒舌女」

「たまには人の話を聞きなさいよ、とうへんぼく」

「人の話をきかねえのはそっちだろ、小悪魔」

「狩燐よりはちゃんと聞いているわよ、天然S」

「何言ってるんだよ、前、ノート見せてやったのどこの誰だと思っ

てんだ、薄情者」

あ、そういえば同じクラスだったね、狩燐と葛野木って。

「書き終わる前に消されちゃたんだから、仕方ないでしょ、お坊ちゃん」

「ノロマ」

「変態」

「二重人格」

「天然」

「脇役」

「脇役」

「お前こそ真の脇役だ」

「狩燐のほうがもっと脇役」

「お前の方がもっともっと——」

「狩燐のほうが絶対に——」

……単なる言い争いはほっといて、次行きましょか、次……。

「……フフ、随分遠くまで入ってきちゃったんじゃない？」

「無我夢中だったんだ、仕方ねえだろ」

「フフ、無我夢中とか言ったらカッコがつくと思わないでよ」

「思ってたええよ！どんな勘違いされてんだよ！」

「フフ、……それにしても、どうしましょ？」

「どうしましょったって、な？」

「フフ、聞き返してどうするのよ」

「だってさ、……わわ、来るなよ！」

えっと、斎賀と影薄君は、黒き暴君Gに襲われかけてます。てか、
囲まれています。え？黒き暴君Gって何？それは、神出鬼没で世界一
生命力が強そうな昆虫だよ♪あと、私が化けた事があつりまあす♪
もうこれ、答えだよねえ。

「フフ、……どうしたらいいと思う？」

「それが分からないから困ってんだろ？」

「フフ、使えない男」

「悪かったな、使えなくて。どうせ俺は使えない男さ。影だって
薄いし、ロクな扱いされないし、みんなのいじられ役だし、出番だ
って少ないし……はあ」

あゝ、ネガティブ入っちゃってるねえ、完璧に。暗い暗いよ、オ

ーラが黒すぎて、斎賀まで黒く見えるよ。てか、全てが真っ黒。あ、携帯の明かりまで明るさを失っていくう。つーか、こいつらも使ってたんだ、携帯のランプ……。

「フフ、ネガティブシンキングしてる場合じゃなさそうよ？」

「俺にできる事なんて、死ぬ事以外にできないんだろ？なあ」

「フフ、死ぬ前にゴキブリを倒してくれるとかなりありがたいわ」

「どうせ……どうせ……？なんじゃこりゃ」

あれ？もう復活？？てか、復活早くね！？

「……フフ、神様に好かれてるみたいね、私達」

え？あんまり好きじゃないよ、君達の事。だって、みんな、作者に対して冷たいんだもの……。 (泣)

ていうか、私って、神様って呼ばれて反応していい人なのかな？
まあ、そんな事はどうでもよくないけど、どうでもよくって、彼が見つけたのは、

「殺虫剤？」

「フフ、しかも大量に。これならいくらでもゴキブリに会っても大丈夫そうね」

大量につつか、数本じゃね？たった二本の事を大量って……。
てか、なんで真新しい殺虫剤がこんな所にあんの？……って、自分でツッコんじゃいけない所をツッコんだ気がする……。

「まあ、ともかく、反撃開始じゃボケエエエエエエエエエエエエエエエエエー！」

……こんな子だったつけ、小橋って……。

「……」

「……」

「……」

「……。何か言ってよ、ダーリン」

「何だよ」

「静かだと、何か怖いじゃない」

「だからって引っ付くな」

「だって暗いし」

「電池がヤバいんだ。少しくらい我慢しろ」

「でも、暗いしタランチュラいるしゴキ」

「それから先を言うな」

「なんで？」

「まだ認めてねえから、奴の存在を……」

誰か知らんが、熊を倒してくれたおかげで、俺らの敵は減ったけど、減ってなかったのが事実。でも、黒てかりするあのボディに、キモい触角に、カサカサいう効果音がいつもついてくるあいつだとは、俺はまだ認めねえぞ。増えたのは認めるけど、それが黒き暴れん坊將軍Gだとは思わない！！断じて思っとなるものか！！思惑どうりにはさせんぞ、コラ！！

ガサガサ

「ねえ、またガサガサって」

「気配を消せ。そして無になれ」

「無理かも」

「自分を宇宙の一部だと思うんだ。自分は空気だ、空気なんだ」

「それって、すごい事だよね！」

「大きな声出すな、アホ！！」

勘で思いつき頭をたたいてみました。ゴンッ、て鈍い音したから、壁に頭ぶつけたかもな。

「ダーリン」

「んだよ、変な事言ったら、容赦しねえぞ」

「……さっき、何か潰した」

「何を何で」

「手で何かを……」

「その何かは何だったの」

「……潰れるもの」

「草とか？」

「潰したら、気持ち悪い汁が出るもの」

「……」

「……何で黙るの、ダーリン」

「……携帯のライト、点けて真実を見る覚悟はあるか？」

「え？」

「質問に答えろ」

「……ありません」

「ねえのかよ！！」

「だって、だって、ガサガサいった奴だったら、タランチュラ
だったどうすればいいの！？」

「ご愁傷様」

「酷いわダーリン！婚約者を見捨てるのね！！」

「誰が俺の婚約者だよ、馬鹿！！」

控えめにグーパンチ！強くやると、危ない予感がする……。

「ともかく、ライト、点けるからな」

「待つてダーリン、私まだ覚悟が……いやああああ！！」

想像してみてください、自分の手に、掌にあやつが着いている事
を。恐怖だよね、悪夢だよね、気絶ものだよね。

想像しにくい人は、自分の嫌いな昆虫とかそこら辺の何かが手に
ついてる事を考えてみちゃってください。もう、世界の破滅だよ、
破滅。

ガサガサ……ガササササササ！！

ヤバッ！ライト点けたから集団で集まってくる！！ヤバいぞ、ヤ
バいぞ！！

「逃げるぞ、森野！」

「え、あ、うん!!」

一応手をつないでその場を離脱!! ゴキは嫌だあああああああ
あああああ!!!

「ホラ、私の言ったとおり、こっちが正解じゃない」

「俺の言ってた事も合ってただろ、威張るな」

狩燐達の口喧嘩は終わらないようだけど……特にハプニングもなく、こいつらはさっさと外に出れたみたいですね。

で、今もめている事のお題は、出口の事。いやあ、出口は一個だけじゃなかったみたいで、無数に穴が開いてみたいでねえ。だから、2人が中でもめてた時言ってた事は、両方正解だった訳ですね、はい。それで何故もめるか? そんな事、私に聞かないでくださいよ、分からないんだから……。

「でも、こっちは違うって言ってたじゃない!」

「お前だって言ってたじゃねえかよ」

「あんたの方が強く言ってた!」

あ、裏葛野木出現!!

「お前だって偉そうに言ってた」

「何よ、自分が正論だって威張ってたのは、そっちでしょ!？」

「お前だって、こっちで間違いないって言って、威張ってたじゃねえか!」

「あんたの方が偉そうだった」

「お前の方が威張ってた」

「もう、何でこんなやつと一緒にいなきゃいけないの!？」

「俺だってお前なんかと一緒にいたかねえよ!!」

「どっかに消えて」

「お前が失せろ」

「女の子に向かっていう言葉!？」

「お前を女子だと思った事は一度もねえ」

「なんだと!？」

「何だコラ!！」

……喧嘩するほど仲がいいって事で……ね。

「H A H A H A、人間様の技術力をなめるなよ!」

「フフ、道をあけなさい」

こちらは、殺虫剤 v s ゴキブリの大群! もちろん、殺虫剤が優勢です。いくら大群でも、殺虫剤はキツイよね……。

「これなら早く外に出れそうだ」

「フフ、出口は分からないけどね」

……分からないのに進んでるんだ……。

「なるようになるって、いつも瀬川が言ってた気がする」

「フフ、いつもじゃないわ、たまによ」

「修正こまけえな」

「フフ、細かくなくちゃ、姑さんに怒られちゃうでしょ?」

「誰の」

「もちろん、夫のに決まってるでしょ?」

「じゃあ、苗字変わっちゃうぞ?」

「瀬川良美か、斎賀慎吾……うーん、どっちもいいひ・び・き」

もう、メロメロですね。てか、瀬川の話してる場合じゃねえだろ、あんたら。

「……フフ、あれって、光よね?」

「そーみてえだな」

お、もしや出口発見!?

「でも、動いてねえか、あれ」

「フフ、私も今そう言おうと思ってたところよ」

「……」

「……」

「火の玉?」

「フフ、だったら嫌ね。殺虫剤も効かないわ」

「お札とか、数珠とか、陰陽道とか!？」

「……フフ、その中の一つも私達にはないわ」

てか、まだ居たんだ、ゴキの大群……。てか、タランチュラ混ざってねか、これ!？あの、爆発タランチュラだったらどうすんの!？危ないよ、危ない!

「まぶっ!」

小橋達の目には、ちょっと眩しかったかな。

で、あっという間に光は消え去って

ガサササササ……ガサササササ

って、キモい奴らの効果音だけが不気味に響き渡っていたそうなの。

「あれってもしかして、」

「フフ、狩燐か、サチコ、森野か、夫って考えられるわね」

夫じゃないよ、彼は瀬川だよ。

「まだあいつらも中にいるって事か？」

「フフ、でも、何人かは外に出てるかもしれないわよ」

「だったら、助けを呼んでくれるとありがたいな」

「フフ、そうね。さ、殺虫剤が切れる前に、外を目指しましょう」

「おうよ!」

……喧嘩する人達もいれば、何か仲良くなっちゃってる人もいるね。最初はあるのに嫌ってた(?)のに……。

今誰かいたような……気のせいかな。もしや、まさかの幽霊出現!

?マジでか、そんなところだったのか、ここ!？

「あ、そうだ、ダーリン」

「何だよ、無駄口だったら、叩きのめすぞ」

「それも嬉しいけど、これこれ」

手に持つてるものを揺らす。むむ！これは、……これは！

「全国に名の知れた有名なあの殺虫剤か！？」

「そう、かの有名な殺虫剤よ」

「何でそれをお前は持つてる。てか、何故に新品！？」

「え、作者から渡されたの。ダーリンも渡されてたんじゃないの？」

聞いてねえぞ作者。……いや、もしやあの事か……。テメエ、マジで俺以外のやつらに殺虫剤渡したのかよ！！

……………無視か、コラ！！

「これがあれば、撃退できるでしょ？」

「よし、やれ森野！」

「ダーリンのためなら、たとえタランチュラの中ゴキブリの中！どこへだって行ってやる！！」

逃げてたじゃねえかよ、ゴキブリから。ついでに言えば、タランチュラからも。もう既に矛盾してるよ。てか、普通に火の中水の中でいいだろ。何故に長くした？

「くらえ、愛の殺虫剤攻撃！！」

愛は余計だ、愛は。

「私に立ち向かうなんて、半年早いのよ！！」

短いな！半年って短いな、おい！てか、普通に百年でいいだろ。百年で。

「アハハ！誰にもダーリンとの恋路を邪魔させないわ！！」

「余計な事言ってるで、さっさと道造れ！！」

スパンと軽く、頭をはたいとききました。

「分かりました、ご主人様♪」

そういうのは、アキバで言え、アキバで。

でも、この調子で行けば、外に出れそうじゃねえの？やった、ゴキ&タランチュラ地獄から抜け出せるぞ！

「あれ、狩燐達じゃね？」

「フフ、そうみたいね。……喧嘩してる？」

なんだかんだで、一番ドタバタしていた気がする小橋君達も、無事脱出できたようです。残すは、瀬川達のみ！

「昔っからあんたのそういうところ、全く変わってない！」

「お前のそういうところだって、全然変わってねえじゃんよ」
どういふところの口論してんだよ、こいつらは。

「……喧嘩中のところ失礼ですが、よろしいですか？」

「五月蠅いわね、影薄！影薄は影薄らしく、薄らってなさい！」

「黙れ、影薄。影薄は影薄らしく、地味に生きてろ」

「薄らうってなんだ！地味に生きろとはなんだ！」

「口を挟まないでよ、影薄！影薄だから影薄くしてその辺彷徨って幽霊伝説の一つや二つ作ってなさい」

「しつこいんだよ、影薄！影が薄いんだから、目立とうとしても無駄なんだよ、影薄は一生影薄のままなんだよ！！」

「なんだと！？もっぺんに見ろ、コラ！！」

「何度でも言ってあげるわよ、影薄影薄影薄！！」

「いいとも、もっかい言ってやるさ、地味地味地味！！」

「一回つつただろ！？そんな何回も言ったら、俺のガラスのハートが傷つくじゃねえか」

「影薄影薄影薄影薄影薄」

「地味地味地味地味地味」

完璧に……八つ当たりだよ、これ……。

「言うな、もう言うな！口を挟んだ俺が悪かった、ゴメン、いえ、ゴメンなさい！！すみませんでしたあ！！」

謝っちゃってるし。

「フフ、仲の悪い2人さん。何でそんなに喧嘩をしているのかしら？」

「あれ？何の事で喧嘩してたんだっけ？」

「ん、忘れた」

「フフ、そ。それならいいわ」

……簡単に忘れられるのね、都合の悪い事は……。

「そんな事より、瀬川達は？」

影薄の復活。

「まだなんじゃねえの？」

「私は何も見えてないけど」

「……フフ、じゃあ、まだ2人は中って事ね」

「探しに行くか？」

「そうする？一応心配だし」

「いや、無闇に動かないほうがいいと思うぜ。瀬川達とすれ違いになったら、あいつらがまた俺らを探して中に入るかもしれないだろ？そしたら、俺達出てきて、……無限に続くぜ？」

「フフ、じゃあ、どうするの？」

「待つ」

「ええ、退屈じゃない」

「じゃあ、小橋の腰にロープをつけて、探しに行かせるか？」

「何で俺!？」

「フフ、いいじゃない、それ」

「私もさんせー」

「じゃ、逝け、小橋」

「……え、マジで言ってるの？てか、いつの間に!？」

きれいにながあいロープの先が、小橋の腰に巻かれてきつく結ばれておりまゐす。

「そうだ、勇者コバッシーよ、迷い姫と先にダンジョンへ入った勇者セガワーズを探しに逝くのじゃ」

「いや、逝くの字違うし。難しい方じゃなくて、簡単な方の行くが普通だろ、この場合」

「待ってるわ、勇者コバッシー。無事に帰ってくる事を、祈っていてあげる」

「いや、勇者じゃねえよ、俺。てか、勇者コバッシーって、どん

だけ適当に付けたんだよ」

「フフ、私の夫……夫の勇者セガワースの事、頼みましたわ」

「いや、セガワーズって瀬川の事だろ？ いつお前の夫になったんだ？」

「さあ、早くダンジョンに入るのだ、勇者コバツシー」

「お、押すなよ、馬鹿！」

「ちゃんと待ってるから、ロープはなして遊んだりしないから」

「その一言聞いて、ますます行く気がなくなっただけど！」

「フフ、早く……逝きなさい！」

「ちよ、ちよっと、……待てえ！」

三人対一人じゃ、もちろん一人が負けるよね。てことで、みんなに背中を本当に押されて、小橋は洞窟の中に突き落とされ……ゴッホン。洞窟の中に入っていくのであったあ。

さあて、瀬川達は、無事勇者コバツシーに見つけてもらえるのでしょうか？ てか、勇者コバツシーは無事、地面に立っているのでしょうか？

59、脱出成功!?(後書き)

次回で洞窟編は終わり……の予定です。ていうか、終わらせないと、夏休み編が長くなって、秋に入れない……。

60、これって、無事生還と言えるんでしょうか!?(前書き)

今回も、少し長くなってしまいました、すみません。そして、これで洞窟編は終わりです。

ではあ、最後の洞窟編、いってみよお♪

60、これって、無事生還と言えるんでしょうか!?

森野が暗い暗い、怖い怖いと五月蠅いなか、とりあえず歩みを止めずに先に先に進み続けているけれど、一向に外に出れる気がしない。つないだ森野の手の震えも、尋常じゃない。そんなに暗いのが嫌いだったつけ、こいつ……。

「わぁーん、パパア、ママア」

「どこの幼稚園児の泣きまでだ」

「近所の子」

「あっそ」

「わぁーん、ダーリンも冷たいよう」

「俺はいつもだ」

「いつもはもうちょつとホットなツツコミしてくれるもん」

「ホットなツツコミってどんなだよ」

「……わかんない」

「わからねえのかよ!」

「だって、ダーリンの言葉には、いつも愛が込められてたから」

「愛なんて込めねえよ、憎しみなら込めるけど」

「憎しみを乗り越えて、愛に変わっていくんだよ」

「乗り越えられねえよ、てか、乗り越えたくもねえよ」

「え!?! 私のために乗り越えようとしてくれてたんじゃないの!」
「?」

「何を乗り越えればいいんだよ? お前の死体か?」

「それはあまりにも悲しすぎるから、却下」

「誰が悲しい」

「ダーリンが」

「喜ばしいんだけど」

「マジですか!?!」

「マジですとも」

「……」

「……」

ネガティブな事を考えないように無理に会話してみたけれど……
続かねえ。続かねえよ。

大体、何でこんなやつとこんなに長い時間いなきゃならねえんだ。
これ夏休み編の何話目だと思ってんだ。もう、九話目だよ、九話目
！そろそろ帰りの支度してくる頃だろ、フツー。もしくは肝試し中？

「あゝ、太陽が恋しい」

「私は、ダーリンがいれば……あの、その……ね？」

「ね？ってなんだよ、ね？って」

「……察して」

「何をどう察しろってんだよ！」

「私の気持ちを素直に感じて」

「そうすると、お前は俺の気持ちをしっかり感じて欲しくなるん
だけど？」

「好きって事ならとくに分かってるゾ♪」

「いや、ゴキブリ並みにお前は嫌いだから、ヨロシク」

「マジですか？」

「マシですとも」

「……」

「……」

こんな会話、数行前にもしてなかったっけ？てか、同じ事を言っ
てた気がするんだけど。

どんっ

うゝん、ベタに何かとぶつかったんだけど……何だ？

「おい、急に止まるなよ森野」

「え？止まってないよ、私はダーリンとのバージンロードを歩み
続けてるよ？」

「妄想世界の中じゃなくて、現実世界の話だよ」

スパコンっと、頭をはたく。手加減しないといけねえのって、なんか嫌だな。

「今、止まったトコ」

「前にいる？後ろにいる？」

「ずっとダーリンの隣に居る」

「じゃあ、お前も何かにぶつかったか？」

「うん、毛むくじやらの何かに」

「北京原人かな？」

「違うよ、アウストラロピテクスだよ」

「よく噛まずに言えたな」

「早口言葉は得意だと思うから」

「得意な訳じゃねえのね」

「予想だね」

シャー

猫？蛇？森野？？

「ねえ、ダーリン。何か言った？」

「言ってねえ。お前は？」

「言っていないよ」

「……」

「……」

携帯、のランプスイッチON！！

シャー！！！！

「いっやあああああああああああああああー！！」
目の前の怪物を見て、逃走スイッチ即ON！！

いっやああああああああああああああああああ！！

ん？何か叫び声が聞えたような……空耳かな？あ、どうもみなさん、こんにちは。薄情者達によって突き落とされ、かすり傷と痣だらけの勇者コバツシーこと、小橋です。

（そんなんでもいいから、先進めろや）

作者！？お前、居たんなら、お前が話し進めろよ！！

（え？いやだ。だって、飽きた）

飽きるなよ！！てか、飽きるの早っ！！

（そーゆー性格だから）

万年自由人め。

（てか、早く話進めろっての）

はいはい。おおせのままに。

「……あ、狩燐から懷中電灯貸してもらえばよかった」

今頃後悔してもなあ。戻ったら戻ったで、……何か怖いな。仕方ない、携帯のランプで我慢するか。

で、点けた瞬間。

カサッ！！……カササ！！

「マジですかあああああああああああああ！」

ベタだけど、ホント、ベタだけど、ゴキ十タランチュラの大群と鉢合わせ♪

俺って、……もしかして、ついてない？

「はああ……」

「も、もうだめ……」

諦めムード満開の、つかれきった中学生です。あゝ、もう、マジホントダメだわ。疲れた、精神的にも肉体的にも。マジ限界点突破。おめでたくないけど、おめでとう。

「ちよっと、一休みい」

「さんせえい」

よっこらせっと……。

……ジジ臭いとか言うなよ、疲れてる時は、自然にこういう言葉が出てくるんだよ。分かったか！

「ねえ、ダーリン。ここから一生出れなかったら、結婚してくれる?」

「……話の意図が、全くつかめねえんだけど」

「出れなかったら一生2人つきりでしょ? なら、……いつその事……ね?」

「だから、その『ね?』は、なんなんだよ」

「察してくれると嬉しいね? のね?」

「死ねのねじゃねえのか?」

「違うよ、幸せになろうね、のねだよ」

「違うな、早く帰りたいね、のねだな」

「ええ、どちらかと言えば帰りたくないね、のねでしょ?」

「……なんか、早口言葉見たくなってきてね?」

「そうみたいね」

……。

ち、沈黙って、こんなに重かったつけ? こんなに重力感じたつけ? え、こんな寂しい感じになるつけ??

「ねえ、ダーリン」

「なんだよ。またくだらない事言うんなら、その口、本物の糸で塞ぐぞ」

「運命の赤い糸で、どうぞ塞いでくださいまし」

「キモい事言うな、馬鹿」

バシッと、ちよっとだけ本気を出して頭をはたく。見事に床にダ

イビング。あれ？ちよつと強すぎたかな？ま、いつか。森野だし。

「てか、話を逸らさないで、普通に話せや」

「だって、ダーリンのサディスト性がまだちゃんと残ってるか確かめたかったんだもの」

「簡単に消えたら、この話し続かねえよ」

「あ、確かに」

「つーか、話を逸らすなって言ったのに、逸らしてんじゃねえかよー！！」

本気でグーパンチ！！もち、顔面ね。やっぱ本気で殴った方が、楽しいわ♪

「で、話はなんだ」

「……」

「聞いてんのか、ボケナス」

「……」

「おい、馬鹿森野」

「……」

「……まさか、話の内容を、忘れたとか？」

「……テヘ☆」

「テヘ☆……じゃねえよ！！なんだよ、人がせつかく大人しく聴いてやろうと思ってたのに！！」

「え！？そうだったの！？じゃあ、今から必死に思い出しまっすっ！！」

「もう、何を話しても俺はスルーするからな」

「ええー、聞いてくださいよう」

「ヤダね」

「聞いてよ、ダーリン」

「ダーリンじゃねえし」

「じゃあ、旦那様？」

「だから、そういうコメントはアキバのメイド喫茶で言ってる」
「ダーリンのためにしか、こういう事は言わないもん」

「迷惑な話だな、この野郎」

「それって嬉しいって事？」

「迷惑だっつってんだろうが！」

「What a！」

「なんて言っただか、俺にも読者にもわからねえよ！！てか、つづり違うって、前もツツコんだだろうが！！いい加減覚えろ、ヘボ！！」

「……やっぱり、ダーリンのお言葉は格別ね♪」

「もう一発だけ殴らせろ。そうすれば、お前を冥土に送れる気がする」

「メイド？」

「よくある間違いしてんじゃねえよ！！」

渾身の一撃！必殺グーパンチ！！そして、死ね！！このクソ森野が！！

カサ

？この嫌な音は……もしや。

カササ

……敵は、一匹か？ゴキか？タランチュラか？もしかして、ラスボス（あ、あの巨大タランチュラの事ね）か！？……いや、こいつあ……。

「逃げるぞ、森野！！」

「え！？何々！？」

「いいから！こいつは、爆発するやつだ！」

何で分かったかって？そりゃあ、背中に★があったからだよ。これがあるやつは、爆発するんだ。

「何ですとっ！？」

ツツコムより先に、まずは――。

ドオオオオオン！！

むむ？何か、爆発音がしたような……てか、地響きがすごいな……。そろそろここ、崩れちまうんじゃないかねえのか？

……。それって、セガワーズ達、ヤバくない！？

(何気にノリノリじゃん)

コメディーだからな。コメディーだから、ノッてやってるんだぞ、感謝しろよ、作者。

(……帰って犬の散歩でもしよつと)

どこにでもあるような逃げ方すんじゃないよ！

「つてえ〜！」

急に爆発すんな、アホ！主人公様を殺す気か！この物語からツツコミが消えたら大変な事になる事くらい、分かってんだろ、この野郎！！だ〜、いってえ！！

「大丈夫、ダーリン？」

「これのどくら辺が大丈夫！？」

片足、瓦礫の下敷きだから！！あゝゝゝゝ、いつでえゝゝゝ！！

「えっと、あの、その、……どうしようっ」

「とりあえず、助けてくれ」

「でも、でもさあ、うう、私庇ったよね？ダーリン、私庇って、うう……」

「泣く前に助けてけろお……」

「ダーリンが、庇って、私助かって、ダーリンが怪我して、私、無事で、うう……」

「だあかあら！泣く前に、助けろつつってんだろが！！いてえんだよ、片足だけ！！」

「うう、ごめんなさい。ごめんなさい、ダーリン……」

「だー、もう！……助けてくれれば許すから、助けなさい！！」

「ホント？」

「ホントだから、マジ、助けろ、コラ」

「あい……」

で、早速瓦礫を退かし始めたんですけど……。女子って、こんなに力ないんだって、今になって漸く実感しました。

「うう、重……い」

「いだだだだ！！てめっ、わざとじゃねえだろうな！！」

「そんな！私、ダーリンのために！」

「いだいがら！ちよ、ちよ、お前、何してんの！？」

「え？邪魔なものを退かそうと」

「もっと丁寧によれ！そして、良く考えて動かせ！！」

俺の足がある場所に重心がかかるような動かし方するなよ！余計に痛いだろうが！！

「……あ、そういえば、引っ張ったりしたら、」

「出ねえから、助け求めてんだろ」

「あ、そっか」

今頃理解なさったのですかあああああ！？引っ張って出るくらいなら、もうとつくに助かってんだよ！お前なんか助けてえんだよ！！

「うんしょ、どっこいしょ」

「だだ！おまえ、ホント、わざとじゃねえのか！？」

いないなあ、セガワーズと迷い姫。なあんか、目印的なもの残しといってくれりゃあいいのになあ。

（ぼやいてないで、さっさと見つけてやれ）

てか、まだいたの!?

(いや、暇だからさ。暇つぶしに)

てかさ、お前いるんだったら、セガワーズ達見つけんの簡単だろ!
!手伝えよ!!

(ヤダ)

何故に断る!そして、何故に即答!?

(ん? なんとなく、かな?)

薄情者、自由人、馬鹿、自己中。

(H A H A H A。なんとも呼ぶがいい)

……悪魔。

(H A H A H A)

「これ、動かしたら出れそう?」

「なんとか……なりそうだな」

少し脚を動かせるようになったのはいいけど、痛い。マジで、痛い。ハンパなく、痛い。てか、単刀直入に、かなり痛い。

「これを、こうして……どっこいしょっと。うう、重。でも、ダーリンが待ってる……。よし! 動かせたよ! で、出れそう?」

「……」

ちよいまちねえ。……。いてて。何か、足に引っ掛かった。でも、いけそうだ。……で! いっでえ、いってえけど、……。

「おし、出れた」

「ヤッター!」

ハンパない喜びだな、おい。それにしても……

「いってえな。見てるだけでも」

埋まってなかった方の足は、かすり傷程度で済んでるけど、もうかたっぽは……、言うのはやめておこうかな。ちよっと、想像するだけでも、痛みが増す気がするし。

「血……出過ぎると、ヤバいかな?」

元々貧血持ちだから……。数少ない、ヘモグロビン達がいなくなっちゃう。止血しとかねえとな。

「……これでよしっと」

「……ね、ダーリン」

「んだよ。ここは危険なんだから、さっさと外目指すぞ」

「……そう、だよ。外、出ないと、危ないよね」

「つってえ……」

「手、貸そうか？」

「いや、大丈夫だ。壁伝いに行きやあ、何とかなりそうだ」
痛いけどな。

「……そう」

「セガワーズウ。迷い姫え。どっこだああ!？」

（そんな呼び方で返事すると思うのか、ヘタレ）

「ヘタレじゃねえよ! どのへんがどうヘタレじゃ!」

（ま、どうでもいいんだけどね、小橋なんか）

「冷たくね? 最近、冷たくね?」

（気のせいだと思いなさい。それが君の為だ。じゃ、そろそろ帰るわ。犬の散歩犬の散歩♪）

……まだ行ってなかったんだ、犬の散歩……。って、こんな事どうでもいいから!! 俺は、セガワーズ達を探さなくては!!

「セガ……瀬川あ! 森野お! どこだよ! いたら返事、もしくはツツコミよろしくお願いしまあす!!」

あゝ、だめかも。頭がぼうつとしてきて、ふらっふらするう。たとえるなら……酔っ払い?

「大丈夫、ダーリン?」

「……ダイジョブ」

「そう……」

なんか、アレから森野も暗いしい。どうしたんだろな、らしくない。

瀬川 あ！かむ・ひあー！

……なんだ？あの変てこな呼び声は？まさか、もうお迎えが！？

「呼ばれてない？」

「呼ばれてる……みたいだな」

瀬川！俺はここにいる！！ここにいるぞう！！

俺って誰だよ。

洞窟の中心で、愛を叫ぶぞー！！

ネタ古いし。てか、勝手に愛でも何でも叫んでろよ。てか、誰の為に会い叫ぶんだよ。

助けてください！俺の愛しい瀬川を――

「助けてください！」

「キモいんだよ、馬鹿」

とりあえず、頭をはたいとく。

「いたっ……って、あんまり痛くないかも」

「そりゃ、力入んねえもん」

「どした？怪我してんじゃないか！？大丈夫か、貧血」

「こういう時だけ、優位に立ったような顔するな。てか、その謎のロープはなんだ」

「これ？これは、狩罾が発案したもんだ」

……て、ことは、外に続いてるって事か？これを引けば、もしくはたどれば外に出れるのか。

「どうした毒舌辛口天然系M娘？」

よくそういう長ったらしい渾名が浮かぶな。

「……」

「聞いてんの？」

「……」

「おい、俺の事は無視ですかあ？」

「……」

「森野？」

「……え？あ、な、何、ダーリン」

「小橋が呼んでも全く反応しねえから、俺が呼んでみた」

「そ、そうだったの」

「さ、この影薄使って、外に出るぞ」

「……うん」

……やっぱ、なんかくれえな。てか、関係ない小橋まで暗くなってる！？

「俺なんて、俺なんて……ははは」

あまりにネガティブな笑い方だな……。周りが負のオーラで包まれてるぞ。

「ともかく、外に行くぞ、外に！」

「……お、おう！」

無理にテンションを上げた森野と、

「はは……この世界に、俺の居場所なんてないんだ……」

全然テンションの変わらない、影薄だった。

＊

「遅いぞ、勇者コバツシ」

「あ、セガワーズと迷い姫、ちゃんと連れてきてんじゃん」

「フフ、セガワーズは無事ではないみたいね？」

……何、この変なあだ名達。いつの間に付けられた？てか、適當すぎて、笑えねえ。

「そうしたの、美咲。暗い顔して」

「え？フツーだよ。テヘヘ」

「フフ、触ってほしくないものがあるって事ね」

「そ、そんなの、何もないよお」

「ホントに？でも、やっぱり暗いよ。何かあった？」

「ホント、ホントに、なんでもない……から」

「……フフ、私、おながが空いたわ。早く戻って、夕食を頂きたいわ」

「さ、賛成！」

「んー、納得行かないけど、私も賛成！」

女子三人、月の光に照らされながら歩き去るけど、森野だけ、やっぱりいつもと違ってた。

「さ、俺らも行こうぜ？足は、医者呼ぶからさ、診てもらおう」

「おう、ヨロシク」

「……俺って、あんまり心配されてない？」

小橋の眩きは、夏の冷たい夜風に吹かれて消えた。

60、これって、無事生還と言えるんでしょうか!?(後書き)

不穏な空気が流れておりますが、これは『ドSな俺と、ドMなアイツ』に間違いありませんからね。他の、シリアス系の物語じゃないですから!馬鹿で、無駄にハイテンションな物語ですから!(焦

次回、ちょっと心配な感じです……。

番外編 作者 vs 暇人!?(前書き)

実に微妙なところですが、番外編です。

本当は、60話目にしようと思っていたんですけど、逆になってしまいました。私のミスで……。なんか、すみません。

で、では、とりあえず、夏休み番外編どうぞお……。……。

番外編 作者 vs 暇人!?

「暇だああ……」

「暇だねえ……」

「フフ、そうね……」

暇をもてあましている、いじめっ子……じゃなくて、狩憐達は、木に寄り掛かって欠伸してたり、地面に落書きしてたり、ロープで遊んでたり、まあ、いろいろと暇つぶししてます。

「なんか楽しい事ねえ？」

「ロープ放すとか」

「フフ、そしたらセガワーズ達が可哀相だわ」

「そうね。セガワーズ達には罪はないもんね。あゝあ、小橋だけだったら、とつくにロープなんてほっとしてるのになあ」

「だな」

あんたら酷くないですか!?! どんだけ腹黒いの!?!

「……暇」

「……暇」

「フフ、二人揃って、どうしたの？」

「暇なもんは、暇なんだ」

「暇すぎて暇死にしそう」

「確かに」

暇死になって、何!?!? てか、暇すぎて死ぬってどんだけだよ!?!

「暇暇暇暇暇あ」

「フフ、駄々っ子みたいよ、狩憐」

「暇暇暇暇暇暇麻痺麻痺麻痺い」

「フフ、途中で逆になってるわよ、サチコ」

「あれ? そうだった？」

「フフ、暇が麻痺になってたわ」

「気付かなかったあ」

「フフ、初歩的なミスみたいなものよ。ね、作者」

（そーだね。……って、みつかった!?!）

「フフ、世界の女王をなめちゃいけないわよ」

（いや、なめるなって言われても……）

「あ、下弦だあ。チヨリッス」

（チヨリッス）↑この言葉、知ってる人は、知ってるよ♪

「ねえ、下弦。暇なんだけど」

「俺も暇だ」

「フフ、私もよ」

（いや、私に暇って言われても、どうしようもないっていうか、
なんというか）

「いいから、なんか四〇元ポ〇ツト的な何か出せや」

（私はド〇えもんですか!?!）

「じゃあせめて、A〇UMA倒して来いよ、イ〇センス使って」

（ジ〇ンプのある特定の漫画読んでる人にしか分からないからや
めて!?!）

「フフ、レ〜レ〜のレ〜とか言いながら、掃除してきなさい」

（それ知っている人少ないと思うから!?! ネタが古いから!?!）

「暇だあ」

三人で合唱。てか、私に言われても、どうにもできないってのに。
こういう時は、とりあえず……。

「あ、作者が逃げた!?!」

「待ってよ、私達このまま放っておく気!?!」

「フフ、薄情者ね」

（なんとも呼べばいいさ!?!さらば!?!）

「どうしよ、マジで暇だ」

「あゝ、早く帰ってこないかな」

「フフ、ちゃんと探してるのかしら、影薄君は」

「探してんじゃねえの? 一応勇者だし」

「探してなかったらただのヘタレよ？ 一応勇者だけど」

「フフ、ここにあの影薄君がいたら、ネガティブになってそうね」
分かってんなら、言わないであげようよ。

「だゝ、暇すぎて暇だあ」

意味わかんねえよ。何？ 暇すぎて暇って。要するに、ただの暇人
って事だろ？

「あゝ、暇すぎてマジ死にそう」

暇すぎて死んだら、かなりカッコ悪いぞ……。

「フフ、なんか面白い事考えられない？ 作者」

（じゃあ、ここはベタに……って、また気付かれた!?!）

「フフ、だからなめるなって言ったじゃない」

「オッス下弦。暇だ」

「あゝ、チョリッス」

（……チョリッス）

こいつら、……あいつらの心配、ほとんどしてなくねえか？

「ね、暇なんだけど、どうすりゃいい？」

（だから、私に聞くなって）

「でもさ、何か言いかけてたじゃん」

（……そうだったけ？）

「フフ、とぼけるんじゃないわよ、作者」

（……）

こいつらあ……作者を作者として扱う気ゼロじゃねえかあ……。

「ね、何言いかけたの？」

「ベタでも聞いてやうぞ、暇だから」

「フフ、さあ、言いなさい、作者」

……しかも、そろいも揃ってSだ……。

（言わないよ、だって、ベタ過ぎるもん）

「いいから言えって言ってんだろ!?!」

裏葛野木!?!

「俺がお前の話し真面目に聞くの、これが最後かもしれねえんだ

ぞ!？」

いつもは真面目に聞いてなかったの!？」

「フフ、白状しなさい、薄情者」

駄洒落なんですか!？てか、薄情者はあんたらでしょ!？」

……こ、こういう時はあ、とりあえ――

「逃がさないよ」(黒笑)

キヤアアアアアアア!！怖い!怖いよ、あんたら!！

「さあ、言いなさい、バ下弦」

「言わねえとどうなるか……分かってるよな、バ鴉」

「フフ、……さあ、言うのよ、馬鹿作者」

……もう、私の心、ズタボロにされたんですけど……。

「言いなさい!」

「言え!」

「フフ、答えなさい!」

キヤアアアアア!！みんな揃って、笑みと腹が真っ黒だよおおお!!

(こ、ここ、答えます!答えますよ!どんなにベタでも、どんなにマイナーでも、ちゃんと答えますから!！だからお願い!！その握った拳と構えた足を、どうかお納めになってくださいまし!！)

「それでいいの」

「最初からそうしてればよかったんだよ」

「フフ、それでいいのよ、作者」

……こいつらだけで、悪の組織的なものが出来上がっちゃう気がする……。

(で、散々脅されたけど、答えはマジでベタだよ?それでもいいのね?)

「ああ、いいさ」

「さ、早く言ってよ」

「フフ、ごまかしたら……ね★」

……こあいよう……。

(……ベタに、……しりとりでもやろっか♪)

「……」

「……」

「……」

(……)

「……」

「……」

「……」

(……れ？何で黙るの？)

「ベタだな」

「ベタね」

「フフ、ベタにも程があるわ」

言えって言ったの、この人達だよね！？何この罪悪感！何この負けた感じ！！

(だから、ベタって最初にあんだけ言っておいたじゃん！)

「ここまでベタとは思ってなった」

「右に同じく」

「フフ、左に同じく」

(……いいさいいさ、そうやって作者いじめて、楽しんでればいいさ！もういいいよ！いいもん！私なんか……うわああああん！！)

私、悲劇の逃走……。

……うう、狩燐達が、こんなに悪い子達だとは思ってなかったよ。

(泣

「あ、待って！」

「おゝい、待てやあい！」

「フフ、止まりなさい、作者」

お前らなんて……お前らなんて……

(大っ嫌いだあああああああ！！)

「あゝあ、暇つぶしがなくなっちゃったよ」

「結構楽しかったのになあ、いじるの」

「フフ、意外と繊細なのよ、きっと」

「それにしても……また暇になっちゃったな」

「待ってれば、そのうちまた下弦来るかな？」

「フフ、多分来ないわね」

「何で？」

「フフ、ちょっといじめすぎちゃったから」

「それだけの理由でもうこねえのか？」

「フフ、作者も一応はSの心を持ってたからね。散々言われ放題で、自分のプライドが挫けちゃったのよ」

「脆いなあ」

「弱いねえ」

「フフ、作者だから」

……私、どんな言われよう？あ。今度は気付かれないように、そつと現れてるんで、私がいること、告げ口しないでくださいね！

「でも、結構アイツのおかげで時間潰せたんじゃないかね？」

「ま、そうかもね。もう日も暮れたし」

「フフ、役に立ったじゃない、作者にしては」

『作者にしては』は余計じゃ、『作者にしては』は！

「それにしても、……遅いな」

「どうしたのかな？」

「フフ、中で何かあったのかしら？」

「ロープ、引っ張ってみるか？」

「そうする？」

「フフ、これで切れてたりしたら、後で怒こられそうね、あの人に……」

あの人って、小橋の事かな？

「アイツ、マジギレするとかええからなあ」

「切れてない事を祈るしかなさそうね」

「……フフ、怒こられるのは嫌ね」

……やっぱ、小橋の事っぽいですね。てか、やった心配し始めたよ、彼らの事。

「アイツは、怒ったら怒ったで厄介だもんな、和食食わせてやらないと、収まらんかも」

……わ、和食？

「私はツツコまれないように、ボケ減らさなきゃ。ツツコミすぎて、疲れてそうだから」

……ツツコミ？

「フフ、それじゃあ、夫のご両親に合わせる顔がないわ」

……夫？

……和食が好きで、ツツコミ担当で、斎賀に夫だと勘違いされてる人……って、

「瀬川、怒らなきゃいいな」

「そうね。どうにかして、瀬川の機嫌を良くしなくちゃ」

「フフ、妻として頑張らなくちゃ」

やっぱ、瀬川の事だったのか！

てか、小橋は？小橋はいいの？君ら、彼の事突き落としたよね？怪我してないかな的な、そんな心配してあげないの！？彼が哀れだとは君らは全く思わないの！？

「あ。誰か出てくる」

「ホントだ」

「フフ、これで帰れそうね」

……改めて思う事でもないけど、思った事、この作品に、まともなやつって一人もいない。

番外編 作者 vs 暇人!?(後書き)

次回は本編に戻ります。

61、なんか、シリアス!? (前書き)

うわあああん、こういう空気、大っ嫌いだよお。

61、なんか、シリアス!?

なんだかんだでいろいろあったけど、俺以外、みんな無事に生還した。

で、問題はここから……。

「坊ちやまあああああ!!」

なあんて号泣しながら狩燐に群がる親父共を見てしろよ。食欲一気に失せるから。

「た、ただいま」

あの狩燐もこんな感じにたじたじだぜ? 恐ろしき、号泣おじさん軍団……。ちなみに、全部召使いさん。

そして、一人例外で怖い人がいて、……誰だか予想、つきますか?

「どこに行ってたんです、みなさん! 心配してたんですよ!」

「す、すみません……」

「怪我してなかったからいいものの……って、怪我してるじゃないですか!!」

ヤベッ! 見つかった!!

「あの、これは、その、あのですね」

「問答無用です。また何かやらかしたんでしょう? ねえ、聡佑様?」

こ、これは怖い! おっそろしく怖い! ニコニコしてるのに、全然笑ってないよ、この人!!

「事情、話してくださいますよね?」

「えっと、その前に……」

「話してくださいますよね?」

「瀬川の怪我を……」

「話してくださいますよね?」

「診て……」

「話してくださいますよね?」

「……はい」

か、狩燐が！あ、ああの、あの狩燐が、言い返せずに、あっさり負けてる！てか、氣迫負けしてる！！恐ろしき、村勢 涼子^{りょうこ}……。

「大丈夫ですか、瀬川様。すみません、ウチの主人様が情けない人で」

「え？ いや、そんな事……」

「これ以上放っておくと、足を切断しなくてはならないかもしれません」

「へ？」

「とりあえず、お医者様を呼ぶので、……ついてきてください」

……恐ろしい事軽く言われたけど……冗談ですよ？

「……」

森野の落ち込んだ暗い表情が、少しだけ目に映って消えた。……

その時、泣いていた風に見えたのは、何故だろう。

＊

「……たいくつだあ」

ただっぴろい部屋で、一人ぼやく。足の治療はすんで、今は自分の部屋に戻ってきているトコ。何事もなかったら、みんなで飯を食っている頃だ。

あ、そうそう。足の事なんだけど、流石に切断されるって村勢さんに言われた時はびっくりしたけれど、何針か縫うだけですんで、よかったと思ってます。

もし足がかたっぱない状態で家に戻っていたら、母さんは失神するだろうし、親父に至っては『自分の足を』とか言い出しそうで、心配だったんだ。その可能性はなくなっただんで、安心安心♪

その代わり、包帯グルグル巻きだけど……。

「ちゃっす、どうだ、足？」

「お、狩燐」

お盆を片手に、バランスを崩しかけながら入ってきた狩燐は、少しだけ気まずそうな顔をしてた。

「……なんていうか、」

「めっしい♪」

しかもおふくろの味のおかゆではないかぁ♪

「人の話を聞く意思はありますか？」

「ありませんね、しんみりして食う飯より、賑やかに食う飯のほうが好きだ♪」

「素直だな」

「それこそが俺だからな」

「我が道を行くねえ」

「H A H A H A」

「いっとくけど、」

「褒めてねえってか？」

狩燐はニヤツと笑って、

「分かってんじゃねえか」
そう言った。

「ごちそうさまぁ。うーん、美味かった♪」

「そりゃよかった」

「やっぱ最高だ、ここの料理」

「お前んちのおばさんの料理も美味いだろ？」

「母さんは料理が好きだからな」

「そか。……」

……あゝあ、鳥の声が聞こえてくるくらい静かだあ。

「……寝てなくて、大丈夫か？」

「ん？」

「熱が出るかもしれないって、医者が言ってた」

「んゝ、」

額に手を当ててみるけど、そんなに熱くない。けど、さっきより熱いかも。

「まだ大丈夫だな」

「無理すんなよ、心配してんだから」

「らしくねえ」

「悪かったな」

「H A H A H A」

また重い沈黙。最近多くねか？沈黙。しかも、ベリー重い。

「みんなさあ、お前が心配みたいであんま食わねえんよ」

「お前は平気で食ってそうだけどな」

「そこまで薄情者じゃねえよ！」

「ハハ、ゴメ。冗談だから、ジョーダン」

「マイケル？」

「違うから」

なんか、ちょっと笑えてきて、狩燐と目配せして、大笑いした。

で、狩燐はウチの両親に謝罪の電話するとか何とか言って、部屋を出て行った。そんなのしなくていいって言ったけど、俺のせいだからって言って、聞かねえし。

だから、また静かな時間が退屈になった。

「……お邪魔します」

「そういう挨拶するくらいなら、ノックとかしようぜ？」

「あ」

「やり直そうとしなくていいから！」

ここまで来て引き返そうとするのって、律儀って言うか、なんと言うか……。やっぱ、律儀？

「……あ、心配だから覗きに来たとかじゃないから！もう、ご飯食べ終わって、その、……一人で部屋にいるのも退屈だし、瀬川も

一人で退屈してんじゃないかって、遊びに来ただけだから！」

「あいあい」

「何よ、その信じてない眼差しは！」

「信じてるよ？ビリーブ」

「……もういいよ！心配して損しちゃった！！」

「……」

「あ」

気付くの遅いよ。

「いや、心配とか、そういうんじゃないかって、そのね！あの、あんたが怪我してから、あゝ、美咲！元気ないみたいだから、そ、そうよ！美咲を心配してたの！！」

明らかに、今この場で作ったね。

「はいはい、そうですかあ」

「だから、信じなさいって！」

「信じてるつつつたろ？ビリーブだよ、ビリーブ」

「だから、その言い方が癪に障るのよ！」

「じゃあ、どんだけ信じてるかを、『ビリーブ』歌って表してやろうか？」

「もういい！元気みたいだから、安心した！！それじゃね！！」

……素直じゃないねえ、最近の子は。

「あゝ、また暇になっちゃまったじゃん」

熱っぽいし、寝ようかな？

「おゝい、瀬川。ダイジョブか？」

なんだKY。俺は今、熱っぽいから寝るんだ、邪魔するな、ボケ。

「あれ？寝てんの？」

……影う……小橋か。軽く……驚かしてやろうか。ニヤリ。

「おゝい——」

「うぐっ」

「瀬川！？」

「う……うう」

「ど、どうしたんだよ!?!」

「く、苦しい」

「大丈夫か?」

「ああ! 足が、足があ」

「え!?!」

足を抱えるようにして、もだえ苦しむ俺。

「ど、ど、どうしたんだよ?」

「ああああああ!?!」

「せ、瀬川! 瀬川!?!」

「痛い痛い痛いっ」

「あ、足、直してもらったんじゃ——」

「あゝあゝああ!?!」

「し、しっかりしろよ!」

「……う、うう。こ、小橋……か?」

「無理してしゃべるな」

「ハハ……俺、あんな傷ぐらいで」

「しゃべるなって」

「うぐうっ!?!」

「瀬川!?!」

「俺……死ぬのかな?」

「だ、大丈夫に決まってんだろ?」

「そう、……うう……だと、いい……な」

消えてしまいそうなまでに、小さくなる俺の声。

「無理するなって、俺、医者を——!?!」

出て行こうとした小橋の服の裾を必死に掴み、引き止める。

「それを待っていられる、じ、しんが、ねえよ」

「弱気な事言うなよ! それでもお前は、瀬川か!?!」

「……ハ、ハハハ。こん、……んくうっ……かいは、おれも、…

…だめみたいだ……」

「諦めんなよ!」

荒くなる呼吸。どんどん苦しみをあらわにする俺の表情を見て、小橋は悲しそうな顔をする。それは、悔しそうでもあった。

「諦めんな、それでもお前は俺の友達か？俺の知ってるお前は、こんなに弱気じゃない！いつもいつも俺をおちよくって、それで、いつも笑顔で笑ってるんだ。自分がどんな状況にあっても、おまえはずっと笑ってるんだ。そんなやつが、こんな所でくだばるかよ！」

「こ……ば、し？」

「俺がもっと早く助けに行っていたら、俺がもっと、お前の役に立ってれば、お前は傷つかなかったかもしれない。俺が、俺が……！」

「いい、んだよ、小橋……。俺も、お前みたいな友達、がいて、本当に良かった。……ホントに——」

「……瀬川？瀬川！！目え覚ませよ！瀬川ああああ！！」

閉じた瞼の上に、熱い何かを感じる。頬にも、鼻の上にも、何か熱いものが降って来る。

「俺は……お前に何の恩も返してねえよ。返してねえのに、何で、……何で、目え開けてくれねえんだよ」

……そろそろ、頃合かな？

「俺は、」

「なあんちゃって、あんな怪我ごときで、この俺様が死ぬか、ボケ」

ベッドの横にしがみつくようにして座って、涙を流し続ける小橋に渾身の一撃、頭突きをしてやった。

「ごふっ!？」

赤い顔はそのままに、かなり驚いているようだ。うん、大成功♪

「……れ？俺、夢見てんのか？」

「だから、俺を勝手に殺すなっの」

「死んだんじゃ……？」

「あの傷で死んでんなら、ここまで来るまでに俺は息絶えてる」

「じゃあ、……さっきのは？」

「どつきり」

どうだった、俺の迫真の演技は？と、続けようとしたんだけど、

「馬鹿瀬川！心配させんなよ！！マジ泣きしちまったじゃねえかよ！！」

「ぐ、ぐるじい……」

きつく抱きしめられちまいやした。……ぐ、ぐるじ、苦しいぞ、死ぬ、今度は、マジで死ぬ……。

「わああああん！！生きててよかったあ、マジでえ」

なあんて大泣きするもんだから、それ以上何も言えないままに、ただあやしてやりましたよ、同年代の男を。なっさけない事に、な。

コンコン

固いドアを叩く音がして、

「フフ、入っていいかしら？」

何て、誰だか分かりやすい声が聞こえてきた。

「いいぜ」

……と言ってから後悔した。狩憐が来てからここまでの間に、かなり熱が上がってきたようで、意識が朦朧とし始めてきた。まあ、招き入れという、追い返すのも、野暮だ。斎賀が最後なら……何とかもつだろう。

「フフ、ご機嫌いかが？」

「……まあまあかな」

強がってみたけど、こいつにはお見通しかな？

「フフ、それならいいわ。安心した」

ニツコリと穏やかに微笑んだ時、こいつはこういう風にも笑えるんだと思った。いつも作ったような笑だから、この微笑みたいな自然な笑みが、なんだか落ち着く。

「フフ、顔が真っ赤よ？水とか、いる？」

「お願いしようかな」

「フフ、未来の旦那様のためなら、お安いごようよ」

……笑みは変わっても、中身は全然変わらないようです。

「サンキュー」

「フフ、どういたしまして」

冷たい水が、渴いた喉に心地よくて、体に水がしみこんでいくのを感じた。

「……ぷはあ、水うめえ」

「フフ、地下水らしいわよ？」

「へえ、物知りい」

「フフ、物知りって言うか、教えてもらったただけなのよ」

「何故に？」

「フフ、なんとなくよ」

「へえ」

あ、うまかった。天然水万歳、地下水万歳、地球の大自然万歳。
……。

で、またこれですか。おもったい沈黙。怪我人の俺にまでこんな重荷を背負わせるとは、何事だ！

てか、ここに来た奴、何でこんなにも落ち込んでるんだ？揃いも揃って、気分はブルーじゃねえかよ。ここにいる奴らがブルーだと、変すぎて気持ち悪い。似合わない、しょうに合わない、ありえない。

「フフ、美咲が元気ないの、知ってる？」

いきなり何を聞く！って、言い返そうとおもったんだけど、ちょっとダウン……。

「大丈夫？」

あ、口癖がない。やっぱ、あの『フフ』がないと、変な感じだな。

「ダイジョブ、ちよっとくらっとしただけだから」

「フフ、私の魅力に？」

「違います」

「フフ、即答だなんて、傷付くじゃない」

「何故に？」

「フフ、私も、それなりにフェロモンを漂わせてるつもりなんだけど、貴方には効かないみたいね」

「何が？」

「フフ、分からないままの方が、面白くない？」

そう言っ、とても中学生には見えない笑みを浮かべた。

「……それよりさ、やっぱ、森野元氣ねえのか？」

「フフ、そう聞くて事は、氣にかけてたのね？」

「氣にかけてたって言うか、いつもと雰囲気がいぶ違ったからな、アイツ」

「……フフ、やきもち、焼いていい？」

もちを焼くのですか？ここで。それはちょっとこまりやんす。

「餅焼くんなら、外か台所でお願いします」

「フフ、食べる餅じゃないわよ。貴方らしくないわ、そんな事言うなんて」

「そうなのか？」

「フフ、そうよ。いつもだったら、……そうね、『何故にやきもち！？』……見たいな感じかな？」

言い方は俺に似せようとしたらしいけど、妙に声が高くって、可笑しかった。

「フフ、笑うなんて、酷いんじゃないか？」

「アハハ……ご、ごめん。マジウケしたわ」

「フフ、そんなに面白かった？」

「……うん……」

必死に笑いを堪えて答える。あゝ、ダメ。おもしろい。

「そんな事より、真面目に聞いて」

「……はい？」

また、『フフ』が消えた。アレがないと、妙に子供っぽくなるか

も、斎賀。

「洞窟の中で何があったのか、私達は知らない。外にいたからね。でも、中にいた瀬川と美咲は知ってるはずよ。中で何があったのか、どうして貴方が怪我をしなくちゃならなかったのか」

「小橋は？」

「例外よ。だって、小橋が貴方達に会った時、既に貴方は怪我してたんでしょ？」

「まあ、そうだけど……」

「美咲にも同じ事聞いてみたのよ、何があったのって」

「そしたら、普段のアイツだったら、楽しそうに話しただろうに。でも、今のアイツは、何かが違う。」

「そしたら？」

「私のせいで、私のせいで。それしか言わないの。困ったものよね、泣きながら言うんだから、私がいじめてるみたいじゃない」

……やっぱり、あの時見た森野は、泣いてたのか。

「……思い出したくないならいいけど、何があったの？」

「……お前らも見たんじゃねえの？爆発する奴」

「変なタランチュラ？」

「そ、それ。それが近くにいて、爆発しただけ。それだけだよ」

「本当にそれだけだったら、私のせいでなんて、美咲は言わないわ」

「……で、その爆発から、森野護った」

「庇ったって事？」

「ちよっとバランス崩したから、逃げ切れなかったただけなんだけ

ど」

「……それが原因で、落ち込んでるのね、美咲は」

「何で？」

「……つくづく鈍感な男ね、貴方は」

「そう言って、デコピンされた。」

「森野はね、自分が居たせいで、貴方に怪我をさせてしまったっ

て思ってるのよ」

「居てもいなくても、かわらねえんじゃ」

「ホントに？」

「え？」

「じゃあ、森野がいなかったとして、あのタランチュラの爆発にあつたら、貴方はどうしてた？」

「もち、逃げてる」

「でしょ？ ホラ、原因完成」

「??」

いまいちよくわからねえけど、ともかく、俺の怪我は自分のせいだって、森野は思ってたんだな。

「庇ってもらった自分は平気なのに、庇ってくれた人は怪我をしてしまった。それなのにその人は平気だと笑って、痛みをごまかしてしまう。しかも、足を切らなくちゃいけないかもしれないなかった。……これを聞いたら、誰だって自分のせいだって思わない？」

「思わない」

見事に斎賀がずっこける。

「こういう時は、嘘でも思うって、言って」

「じゃ、思う」

「それでよし。……大丈夫？ 横になって聞いてくれててもいいのよ？」

「……」

「……聞してる？」

「あ、な、何？」

「やっぱり、ちょっと横になってなさい。独り言言ってると思って、聞けるところまで聞いて。気持ち悪くなったり、眠くなったりしたら寝ていいから」

「……わりいな」

正直、もうそろそろ限界なんだよね。頭くらくらするし、視界かすむし、気持ち悪いし。

「美咲は、誰よりも貴方の事を想ってる。心配して、食事も喉を通ってない。私がここに来る前にちよっと見た美咲は、……泣いた」

……。

「廊下でね、すれ違ったのよ？ 貴方の部屋のドア、少しだけ開けて、中を覗いてたの。その時は、たぶんサチコが居たわね。だから、入るには入れなかったのかも」

……。

「何してるのって、私が聞いたら、逃げられちゃった。その後に小橋が来てたでしょ？ その時も居ただけど、貴方、何かした？ 廊下で泣いてたわ」

……演技、だったのに……。

「また声を掛けようとしたんだけど、それよりも早く自室に戻っちゃって。何も聞けずじまいよ」

……アイツだから、少しやだけど、謝ってやらねえと……。

「……強がってはいるけど、ホントはあのコ、とっても脆いの。波に攫われていく、砂のお城みたいに。ちよっとした事で、すぐになくなってしまふの」

そんな事、ずっと前から知ってらあ。だからこそ、

「だからこそ、誰よりも弱い」

……同感。

「だから、体調が良くなってからでいいから、あのコに話しかけてあげて」

……森野……。

「ゴメンね、独り言長くなって。このまま寝るよね？ というか、もう寝てる？」

「……」

あゝ、声出ねえ。

「……おやすみなさい」

閉じていた重い瞼を動かして、無理矢理広げた世界に、斎賀に肩

を抱かれて出て行く森野が見えた。

止めなくちゃ。

……でも、声出ねえんだっけ。情けねえなあ、俺。

俺って奴は馬鹿だな、……とんだ馬鹿者だ。俺は―――。

61、なんか、シリアス!? (後書き)

どうしようどうしようどうしよう! なんか、コメディーっぽくない
! 小橋に悪戯した部分は除いて……。
あゝゝゝ、どうしよう!!

62、緊急キャラ会議！？（前書き）

和やかに進みたい……。コメディーに帰りたい……。
これ、作者の願いです……。

62、緊急キャラ会議！？

（緊急『ドSM』キャラ会議い。第二回、ヒロインキャラを元気にしようを、開きたいと思いまあす！司会は、主人公不在のため、私が勤めさせていただきます）

いきなりなんだ！？って思うでしょうが、これも本編の一部ですよ？作者の悪戯でも、手抜きでもありません。あ、ドッキリでもないですよ？

（ではでは、論議を始めたいと思います。何か意見のある人、挙手よろしく！）

……シン……。

だ、誰も手を挙げてくれない。てか、暗いよ。

「ギチョー」

（はい。なんですか、葛野木さん）

「そんなハイテンションでやられても、私達、テンション上げるの無理です」

「フフ、右に同じく」

（なあに！？）

「だから、テンション下げて」

「そうだ、バ鴉。空気読め」

……みんな暗いし、私に冷たい……うう。でも、挫けないぞ！

（ともかく、この作品の存在意義である、ハイテンションさが今は欠けております。てか、シリアスな感じになってる？）

「そーですね」

「フフ、だから何？」

（ここだけでも盛り上げようと思ったんだけど、ダメですか？）
「だめだね」

「ダメだな」

（全否定ですか！？それは！！）

「YES」

みんなで合唱。……即答って、こんなに辛いものだったっけ？

（と、とにかく！森野を元氣付けるために、何かいい方法ないの？）

「……ない、かな」

「フフ、分からないわね」

「議長、浮かばねえよ」

「あゝ、めんど」

（狩燐！もっと積極的に考えなさい！）

「もういいじゃん、あのままシリアスな感じで最終回——」

（それはダメ！なんか、嫌！！）

「じゃ、……何する？」

（それを聞いてるんだけど……）

「あ、そか」

「てかさ、毒舌だけど今は元氣ない人、どこ？」

「美咲？　そういえば……」

「フフ、自室にこもりつきり。連れ出そうとしたんだけど、ドア開けてくれなかったの」

「じゃあさ、元氣付けるの、無理じゃね？」

「何故に？」

「部屋から出なかったら、俺達何の使用もねえじゃん」

「あ」

（そこを何とかするのが、作者の仕事ってもんよ！）

「出来なさそー」

「フフ、頼りないわね」

「ま、せいぜい頑張れ」

「無理だろ」

……酷いよ、この人達……作者イジメだよ……うう。

「泣かないでよ、下弦」

「フフ、応援してあげるから」

「俺、ついて行ってやろうか？」

「お前が行くと、余計失敗する気がする」

「何ですと!？」

「あゝ、確かに。成功率が限りなくゼロに近くなるわね」

「フフ、無力な影薄君に出来る事なんて、何もないわよ」

「酷くね? みんな、酷くね!？」

……お、調子出てきたんじゃないね?

（だからさ、森野を元気にするために、協力してよ、ね?）

「だから、何するんだよ」

「そうよそうよ!」

「……俺なんて……ハハハ……」

「フフ、落ち込んでる暇ないわよ、小橋」

（じゃ、突然ですが、クエスチョン! 今の季節はなんですか、葛

野木さん!）

「え? 私!?! ……えっと、夏」

「正解。それじゃ、夏といえば何? 小橋!」

「呼び捨てかよ!」

（いいから答えて）

「夏といえば……」

（はいタイムアップ。同じ質問を……斎賀さん!）

「早くねか!？」

（黙ってろ、で、斎賀さん?）

「フフ、海、かしら」

（あ、それもあるね、でも、不正解。じゃ、もっかいチャンス、

小橋、答えやがれ）

「命令になってんじゃない!」

（いいから答えろよ、かったりいなあ）

「……夏といえば、」

（狩燐君は？）

「言おうとしたのに！」

（遅いんだよ、影薄。で、狩燐君）

「肝試し、とか？」

（ビンゴゴー！！）

「ビンゴだったの！？」

影薄と同じツツコミをしたくなった方、ビンゴじゃありません。
ノリです、ノリ。

「でも、瀬川は怪我してんのよ？」

「そうだ、どうすんだよ」

「フフ、まさか、直してくれるのかしら？」

「だったら、アイツの腐った脳もどうにかしてくれ」

（まさか。流石に直せないよ。てか、出来たらもうとっくにや
てる、てか、やらされてる……）

「それもそうね」

「だな」

「フフ、つまらないの」

「使えない作者だな」

（そこ！瀬川と同じ事言わない！！）

「あ、ゴメン」

で、どうでもいい小橋が謝ったところで、ここからが本題。え？
今までののは本題じゃなかったのって？……うーん、飾りみたいな感
じかな、あれ。

「で、どうすりゃいいの？」

（だから、肝試しやって）

「フフ、どこで？」

（この屋敷内で）

「それは分かってるわよ」

（そうですか）

「するとして、それをどうやって知らせるんだ？」

（夕食が終わってから、私から言いましょう！）

「森野は来るけど、瀬川はこねえぞ」

（あ）

「忘れてたの！？」

（テヘヘ☆）

「フフ、やっぱり頼りないわ」

（な、何とかするよ！）

「でも、」

（黙れ影薄、でしやばるなボケ）

「俺に対して、なんか恨みでもあんの！？」

「ともかく、決戦は夜って事だな？」

（その通り）

「で、肝試しやって、元気出させるの？」

（出させるんじゃないくて、元気にさせるの）

「フフ、そのためには、瀬川も必要なのね」

（そゆ事）

「なんでさ？」

（影薄にはわからねえさ、影薄には）

「二回も言うなよ！」

ではでは、夜の決戦に控えるために、休めますかな。

「俺、肝試しできるように場所とって来るよ。お化けは、村瀬達にやらせるから」

「じゃ、私は部屋でのんびりしてようっと」

「フフ、私は美咲の所へ行ってみる事にするわ」

完璧に影薄を無視してそれぞれ去って行きました。

「……俺、瀬川の所行って、励ましてもらおうかな？」

哀れなり、影薄よ。

62、緊急キャラ会議！？（後書き）

次回、無理矢理ながら、瀬川を肝試しに連れてきます。何が何でもやらせます。

そして、コメディーに帰りたい……。。

63、肝試しスタート!?(前書き)

スタートと言っても、あんまり始まってなかったりして……。

63、肝試しスタート!?

作者に呼ばれて食堂に来たものの、とうの作者はいなかった。で、小橋からの情報によると、今夜、何故か今夜、怪我している俺も含めて肝試しをするらしい。

「で、何で肝試しなんだよ」

「ノリらしい」

「ノリらしいよ」

「フフ、ノリらしいわね」

「ノリって作者が言ってたからな」

……あのボケ作者、何考えてやがるんだよ。てか、なんで松葉杖つきながらも肝試しに参加せにゃなんののだ。

「……」

相変わらず森野は暗いし。てか、あの馬鹿作者はどこ行った。

（おまたせえ☆ 待ったあ?）

「何時間待たせりゃ気がすむんだ、馬鹿」

「かなり待ったぞ、アホ」

「退屈で立ったまま寝そうだったじゃない、マヌケ」

「フフ、主催者が遅刻なんて考えられないわ、ドジ」

「俺を影薄影薄けなすから、天罰が下ったんだ、天然」

「……」

（揃いも揃って酷いな! それなりに準備、大変だったんだぞ!）

「てか、なんで怪我人まで連れて来る必要があんだよ」

（ご愛嬌で）

「許さんぞ」

（まあ、そう怒らんで）

「そうだぞ瀬川。じゃないとまた外野から『ハゲる』とか言われるぞ?」

「俺はハゲてねえよ! てか、ハゲねえっての!」

「ともかく、肝試しにルールとかあるの？」

（2人一組になって、屋敷内を回ってもらいます）

「フフ、その時に何かしたりしなくていいのね？」

（これから説明する場所に言った時に、そこにあるカードに書かれた事をやってもらいます）

「カード？」

（うーん、例えば……おい、影薄。ちょっと来い）

「何で命令形！？」

（いいから、来いっつってんだろ）

……何か、小橋に対して性格ちがくね？

「なんだよ」

（例えば、こうして私とこいつがペアになったとして、カードを引いたとする）

馬鹿作者が、どこからかカードを持ってきて、それをみんなに見せる。真っ黒のカードには、下弦の月の模様がある。作者曰く、お手製だそうだ。

で、それを裏返すと、何か書かれていた。

『ペアの片方が、相手を平手打ちする♪』

……最後の『♪』はなんだ！？楽しんでする事じゃねえだろ、平手打ち！

（こう書かれたとしたら、……せいや！）

「なっ！！」

問答無用で、下弦にはたかれる小橋……ドンマイ。

「何すんだよ！いてえだろ！？」

（すると、カードはこうやって消える）

作者の言うとおり、そこにはカードはなかった。

（で、カードが消えると、次への道は開かれるからね。やらないと、永遠にその部屋から出られない）

「何！？」

（何か問題でもありますかな？）

「例えどんなに嫌な事でも、やらないと出れないって事？」
(もち)

「じゃさ、やらないで朝まで待ってても出れないのか？」

(出れないよ。やり遂げるまで)

「フフ、もし永遠にやりたくない事だったら？」

(永遠にそのまま、白骨化していただくまでです)

「残虐だ！」

(ルールはルール。護るためにあるのです)

正論だけど、お前が言うとなんかムカつく。

(じゃ、早速……)

で、作者が取り出したのは、六本の割り箸。

(この割り箸の先に、3色の色が塗ってある。それと同じ色の人と、ペアになってもらうからな)

「嫌でも？」

(嫌でも)

「嫌いでもか？」

(嫌いでも)

「フフ、気に食わなくても？」

(気に食わなくても)

「隣に立ちたくなくてもか？」

(もちろん、隣に立ってもらいます)

「で、何故にみんなして俺を見る！」

視線の先には、臆病者の小橋君。こいつ、お化け屋敷を見るだけで泣くからな……。肝試しなんてやったら、どうなるか……。

(ともかく、引いて引いて♪)

「はいはいと……」

「どれでもいいのよね？」

「フフ、小橋以外なら、誰でもいいわね」

「……」

「あゝ、めんどいぞお」

「……俺って、嫌われてるのかな？
で、引いた結果。」

赤が、葛野木と斎賀。

「よかったあ、良美となら心強いよ」

「フフ、小橋とじゃなくて、よかったわね」

緑が、狩燐と影……小橋。

「置いて行かないでくれよ？」

「……貧乏くじ引いたな」

で、最後。青が、俺と森野。

「ま、よろしくな」

「……」

……何も言ってくれねえと、寂しいな。ま、頷いたから、いつか。

（じゃ、私は最後の部屋で待ってるんで）

「ちよっと待ってよ、下弦」

（何？）

「フフ、回る道を教えてもらってないわ」

（あ）

「忘れてたのかよ」

（テヘヘ☆）

「『テヘヘ☆』で誤魔化そうとすんなよ」

（はいはい、ごめんあそばせ）

一組ずつ渡された紙に、この家の見取り図が書かれていた。そこに、いくつかの赤い丸印がついている。

（別の組が別の組と会わないように、みんな道は違うから。そこらへん、ヨロシク）

どこらへんだ、コラ。

「何で会っちゃいけないの？」

（んゝ、何となく）

「そんな気分でやっていいのか!？」

（いいんじゃないね？）

「フフ、この丸印が書いてある場所を巡ればいいの?」

(そう)

「よし! 頑張っちゃおっかな!」

(じゃ、順番は適当でいいから。心の準備が出来たらスタートね。
じゃ、肝試し、楽しんでねえ)

「順番は、じゃんけんでいいか?」

「フフ、いいわよ」

「いいぜ」

「じゃ、勝った順で、一番二番な」

で、代表的な人、俺と狩燐と斎賀がじゃんけんした結果。

「一番だ」

「マジですか!?!」

という事で、狩燐達が一番。

「フフ、二番よ」

「なんか、微妙ね」

てことで、斎賀達が二番。

「最後だけど、ま、いいよな」

「……」

結果的に、俺らが最後。ちなみに、最初のじゃんけんで、俺は惨敗しました。運ねえなあ。

「ともかく、行ってきやあす」

「お化け様方、出ませんよーに!」

「フフ、私達はあっちからだから、一緒に出てもいいわね」

「楽しもうね!」

「俺らも道ちげえから、行くぞ?」

「……」

「何とか言えよ」

「……うん」

てことで、森野は暗いままだけど、肝試しは始まった。

63、肝試しスタート!? (後書き)

次回は、リーダー的な人の視点から書いていきます!
ていうか、なんか引っぱ張ってしまっすみません……。

64、仕組まれたカード!? (前書き)

細切れで読みにくかったらゴメンなさい……。誤字脱字が多くて読みにくかったら、ゴメンなさい……。

そして、遂に……。

64、仕組まれたカード!?

「……」

「……」

こんなに怖くない肝試し、初めてつくくらいに怖くない。でも、あの臆病者は怯えてそうだな。

俺達、青色のルートは、資料室から始まる。行った事ねえけど、紙（地図?）に書いてある。で、そのあとは、ダンスホール、厨房、客間、大広間になってる。最後が大広間ってことは、そこで下弦は待ってるってことだろう。

「それにしても……」

怖いというか、逆に微笑ましいんだけど。狩燐坊ちゃまとその仲間達のために、健気に働いている使用人達が、微笑ましすぎるんだけど。今日の前にいるのって、なまはげだし。

「邪魔、どいてくんね?」

「あ、すみません。どうぞお通りくださいませ」

てな感じにすんなり通してくれるし、ペコペコ頭下げられるし。肝試しなのに、全然試されてねえよ。平和すぎて欠伸が出るよ。ふあああ……。

「……そっちじゃないよ」

「ん?」

「こっち……」

今思った。このお化けたちより（今日の前にいるのは、吸血鬼もどき。全然怖くない、てか、可愛い）、暗い森野の方が怖い。だって、大人しすぎるだろ、これ。

「……開けるぞ」

「……」

「返事してけろ」

「……うん」

よし。で、俺らは初めて資料室に足を踏み入れた。

「この手を放さないでよ、この手を放さないでよ！」

「五月蠅いなあ、黙れ」

「嫌だ！話してないと、なんか呪われそうじゃん！」

「なんでだ」

「なんとなくて」

「……」

「黙らないでええええええ！！」

……ホント貧乏くじ引いた。全然怖くねえのにしがみついてくるし、叫び声あげるし、独り言がやけにでかいし。あゝ、俺の鼓膜が悲鳴を上げているうゝ。

あ、俺ら赤のルートは、展示室から始まる。展示室って何ってか？それはアレだ、……あとがきへ続く！

で、あとは、親父の部屋、空き部屋、屋根裏部屋、大広間。最後が大広間って、ベタだな。

「先行くなよう、おいてくなよう」

「五月蠅い、さっさと歩け。じゃねえとおいてくぞ」

「すみません！」

……なんか、もう疲れてきた。

「……思ったより、怖くないね」

「フフ、そうね」

最初は結構怯えてたサチコだけど、今はちよつと意気揚々と歩いている。私よりも歩調が軽いわ。

「ね、最初の部屋ってどこ？」

「……フフ、当てるご覧なさい」

「わかんないわよ！」

「フフ、前向いて歩かないと」

「はいは——ひゃ!!」

後ろ向きで歩いていたサチコが前に向き直ると、目の前には包帯グルグル巻きの人。フフ、使用人さんも大変ね。

「……どこか、怪我でも？」

「あ、いえ、大丈夫です、はい」

なんか、しどろもどろね。まあ、いいけどね。

「フフ、先進むわよ」

「はあい」

私達緑のルートが行くのは、展望室、狩燐のお母様の部屋、待合室、食料庫、大広間。だから最初の展望室に行くために、階段を登っているところ。

その後3人くらい、重軽傷者の人に会ったけど、サチコがちよつとびっくりしただけで、無事に済んだ。あとは、部屋へ行けばいいだけ。

『星空に向かって、魂の叫びを!! ジャンルは問わないよ。あ、2人ともやってね♪』

魂の叫びって、どこのバンドの抱負だよ。てか、星空付ければカッコよくなったかと思うなよ、あのヘボ作者め。

「叫ぶんだと」

「……」

「返事」

「……分かった」

「おし、叫ぶぞ」

……大きく深呼吸、ピッチャー第一球投げました!!……じゃなくて、叫びます!!

「ハゲてねええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

「ごめんなさいいいいいいいいい……ハアハア」
息切らしてる！？てか、久しぶりにちゃんとした森野の声聞いた
気がする。

「なんか、スッキリしたな」

「うん」

お、森野もなんか明るくなったし、カード消えて、次の部屋へ行
けるみたいだし、よしとするか！

「ぎゃあああああ！」

「何叫んでんだ」

「だって、だってさ、なんか、叫び声が……」

「お前が自分で叫んだ奴じゃねえの？」

「あ、そか」

……こいつのせいで、全然先に進めねえよ。どうにかしてくれよ、
神様。

「……長かったね、階段」

「フフ、いい運動になったわ」

「で、カードってこれだよね」

「フフ、そうみたいね。なんて書かれてる？」

「『1分間息止めてみよお♪』だって」

「フフ、楽勝ね」

「え！？すごい！！？普通だったら、苦しいでしょ！？」

「フフ、世界の女王様の實力、なめないで」

「ははあ……」

これならすぐに、先に進めそうだわ。

「やっと、やっとついた……」

「なんだよもう！散々脅かしやがって！！」

お前が勝手に怯えてただけだろ。あゝ、どうせなら、葛野木か斎賀がよかったあ。ホントは瀬川とがやりやすいけど、森野を何とかするためだ、仕方ねえか。

「てか、趣味悪っ！！」

「俺に向けて言ってるんなら、お前はここにおいて行く」

「それだけはやめて！」

「で、カードはと……あつたあつた。なにになに？『渾身の一撃を、相手にかませ♪』」

「なっ！？」

「じゃ、大人しくな」

「チョ、チョ、待て……まってえ！！」

時既に遅し。俺の渾身の一撃、蹴りは見事に影薄の腹に命中しました。

カード消えたし、影薄背負って先進むかな。

「キレイだねえ」

「フフ、ちゃんと手入れしてある証拠ね」

展望室から狩燐のお母様の部屋は近く、すぐに着くことが出来た……けど。

「広いねえ」

「フフ、カードを探さなきゃね」

「……明かり、点けちゃダメ？」

「フフ、つけたら下弦の痛いお仕置きが待ってるんでしょ？」

「蠟燭で我慢しろって、これだけじゃん、ムードがあるの」

蠟燭は、みんなと別れてから、直接下弦に渡されたもの。みんなも持っているのかしらね。

「フフ、ないわね」

「……暗い」

「フフ、我慢なさい」

「はあい……あ」

「フフ、何？」

「あった！」

「フフ、早いわね。なんて書いてあるの？」

「『千の○になってを熱唱しよう♪』……だって」

「フフ、ちょっと恥ずかしいわね」

「演歌なら私の18番よ！任しといてよ、良美！」

「フフ、じゃあ任せるわ」

……ついでに、○の風になっては演歌じゃないわよ、サチコ。

廊下でお化けもどき達にすれ違って気づいた事、人じゃないもの混ざってね？変な杖持ったオバハンに襲われかけたし、頭から角生やした巨人に出くわしたし、顔面が親父の犬とかいたし、ホントに足ない人とすれ違って黄泉の国への道を問われたし……。ちよつと本格的になってきたかな？

でも、俺はそんなの問題にしてねえ。問題は今、目の前にある。前にもこんな事を言った気がするけど、今回も目の前に問題はある。

「……」

何このゴスロリな感じの車椅子。闇に紛れて気づかなかったから、思い切り蹴っちまったじゃねえかよ、森野が。

黒いフォームは車椅子の原形をとどめているが、ほかは例外。背もたれの部分に小悪魔的な羽はえてるし、足掛けるところは悪魔が支えるようになってるし、肘掛はドクロが彫られてるし、人が持つところはイガイガしてるし、タイヤは白黒。これ回ってたら、目え回すじゃねえかよ。

しかもよりにもよって、『Dear ハゲりん』ってあて先付きだし……。

「ハゲりんって……」

「知るか、そんなもん」

「でもさ、これ……」

「いいから先行くぞ。俺は松葉杖これさえあれば、大丈夫だ」

「……」

「ホントに大丈夫だからさ、心配ねえよ。ホラ、行くぞ？」

「……うん」

で、たどり着いたよ、ダンスホール！

「オープン・ザ・ドア」

そこ！『棒読みじゃん』とか言わない！！

「さ、カード探すぞ」

「うん」

「次はあ、……クソ親父の部屋か」

五月蠅いカスが黙ると、結構静かなんだな。襲い掛かってきた無礼者どもは、片足で撃退したし、間違えて血まみれの誰かさんを蹴っちまったけど、ダイジョブだよな？クール宅急便でどっかに送っとけば大丈夫だよな？

「……入りたくねえな」

なぜなら、親父は俺が大好きみたいだから、盗撮写真が多い。手っ取り早く、この場は去りたい。

で、カードに書かれていた事。

『早口言葉の東京特許許可局を、10回言おう♪』

よりにもよって、早口言葉かよ……。

「東京特許許可局東京特許許可局東京特許きよきや……」
舌噛んだあ……。さ、みなさんも、チャレンジ。

「やってきました、待合室♪」

「フフ、楽しそうね」

「そう？」

この子、サチコは、まだ千の○になってを演歌だと信じています。
だから、こうして元気なのよ。

「あったよ、カード！」

「フフ、『相手の髪の毛を一本抜きなさい♪』だって」

「……」

「……」

女にとって、髪は命のようなもの。この勝負、絶対に負けられないわ。

「ゴメンね良美、私、負けられないの」

「フフ、あら、奇遇ね。私もよ」

そして、私達の髪をめぐるバトルは始まったの。

「……あったよ」

「なんて書いてある？」

「『ブレイクダンス、やってみよお♪』だって」

「不可能だから」

「でも」

「お前、できるか？」

「……出来ない」

「だよな。俺も出来ねえ。どうすっかなあ……」

あゝ、何でブレイクダンスなんだ？何で肝試しなのにブレイクダンス？しかも怪我してるのにブレイクダンスって、……ありかよ！！

「あ、私やるよ」

「出来んのか？」

「……分からないけど、やってみる」

……で、すごかったよ、こいつ。ダンスのプロ！？見たいな感じで。

「おま、……どこで習った!？」

「え? いや、ただ、見よう見まねで……」

そういうので出来るもんじゃねえよ? できちゃったお前、何? 何なの!？」

「と、ともかく、最後の部屋、行こうぜ」

「うん!」

いい汗かいて、森野もノツてきたみたいだ。いつもの感じ、あのウザい感じに戻ってきてる。

「……はっ」

「今頃お目覚めかい？」

「ここは？」

「屋根裏部屋」

「途中の二個は？」

「俺だけでクリアした」

「で、お題は？」

「ここのか？」

「もち」

「『下弦の本名の名前の由来はなんでしょう♪』だ」

「本名すら知らないのに、由来当てんの!？」

「そうだ。もうかなりの時間を費やして考えてみたけど、全部不正解」

「不正解だとうなるんだ？」

「こうなる。由来は、テキスト」

（ハズレダヨ♪ハズレダヨ♪ハズレダヨ♪）

……何度このいらつく声を聞いたことか。

「……無謀じゃね？」

「もうそんな事、分かってら」

「そうですか」

最後の部屋だったのに……。

「さむ!？」

食料庫って、閉じ込められたら最期じゃない……。うう、寒いわ……。

「か、かか、かかか」

「かか？」

「かか、かーかか、かかつかかかか」

さ、寒くて、同じ言葉を繰り返しにしか言えないわ……。うう、寒い……。

「かつかかか!!」(さ、寒いよ!!)

「かーかか、かーかかかか!!」(カード、カードよ!!)

「かかかかかか!？」(なんて書いてあるの!?)

しゃべるのは難しかったので、見せたわ。

『パン壁を20回噛まずにゴー♪』

「かかかか!？」(殺す気!?)

「かかかかか」(そのようね)

「最後、客間」

ここは飾りが多いけど、普通だからいい。てか、この家の普通は異常だけど、たくさんある部屋の中で、ここはなんか落ち着く。

「カードは、これか」

目立つねえ、机の上に置いてあると。

うーん、なにになに……。

『仲直り、して欲しいな♪』

願いじゃん。てか、これ、俺らに仕掛けただろ。てか、喧嘩した覚えはねえぞ。

「なんて、書いてあるの？」

「仲直りしろだよ」

「……」

そこで何故に黙る!?

「……ゴメンなさい」

「あ?」

「怪我させて、ゴメンなさい」

あゝ、やりにくいけど……。

「……自分のせいだと思うなら、一生そのままでもいい。だけれど、そんなお前は俺は嫌いだ。近くに、隣にいて欲しくねえよ」

「……ゴメン……なさい」

「それがらしくねえんだよ。お前に笑ってもらえるように努力した奴の気持ちを、ちゃんと受け止めたか? お前は、そんな奴らの顔さえ見ない。今のお前も、俺の顔をみようとしなない」

頬を両手で掴んで、無理矢理顔を合わせる。涙で滲みかけた目が、戸惑いに揺れた。

松葉杖の支えを失って、右足だけで、何とか力強く立つ。ここで倒れたら、もう前の森野には、戻れない。

「俺は元気だ、お前の傍にいて、お前の話を聞く。変な事を言えば、笑い飛ばしてやろう。変な行動をすれば、すかさず止めてやろう。氣にくわねえんなら、面と向かって言え。俺の顔見て、思い切り大嫌いだと言ってみろ、近寄るなどと言ってみろ。そしたら俺は、お前の場所を、他の奴のために使うから。でも、でも今はさ、お前のためにあるんだよ、俺の傍は^{となり}」

「……私に、……そこにいる資格が……ない、よ」

「資格? なんだそりゃ。そんなの関係ねえだろ? 俺はどんな奴が傍にいても、そいつのありのままを受け止める。狩隣だって小橋だって、斎賀だって葛野木だって、誰でも受け止める。何度だって、受け止めるさ。俺の隣にいるべき人は、俺が決める」

「……怪我をさせたのに?」

「怪我なんて、時が経てば気付かねえうちに治ってるもんさ。そ

れに、人が傷つくのは当たり前なんだ。怪我するのだってそうさ。一々こんな事気にしてたら、自分の身がもたねえ。だからさ、人は忘れる事ができる。その時どんなに気にしてても、忘れる事でまた前を向ける。お前がこの事を忘れるべき時は、今だ。すぐにとはいかねえけど、忘れて人のためになる事だってあるんだよ」

恥ずかしい気持ちをぐっと堪えて、俺は、森野に居場所をやろう。「お前はここに、俺はここにいます。それだけの事さ。怪我なんて関係ねえよ。俺の傍にいいのは、お前だよ、森野」

崩れてしまわぬように。壊れてしまわぬように。消えてしまわぬように。そっとそっと、抱き寄せた。

「うう……」

耳元で、涙を堪える声がする。

「泣けばいいさ、ご自由に。俺は、お前を怒る気はねえよ。だから、な？もうお前は、何も心配しなくていい」

「じゃあ、……また、ダーリンって呼んでもいいの？」

「氣にくわねえけど、呼びたきゃ呼べ！」

「じゃあ、……私、ダーリンの傍にいいの？」

「お前が嫌じゃなけりゃな」

「……じゃあ、じゃあ——」

そっと撫でた頭に、やっと森野らしさを感じられた。

その頃他の組は、もう大広間で、森野達の帰りを待っていた。

64、仕組まれたカード!? (後書き)

本編で紹介してなかった部屋の紹介い。

資料室……狩燐家代々の歴史がつまっております。本棚と資料の量がハンパない。

展示室……狩燐父の趣味の、数々のレプリカがおいてある。

親父の部屋……別の部屋と同じく、広い、でかい。違うところは、狩燐に関する写真が無駄に多い事。

空き部屋……予想外に使われなかった部屋。友達や客が来たら、使ってもらおう。

屋根裏部屋……掃除はあまりされないので、埃っぽい。それ以外はどこの家とも変わらない、普通の屋根裏部屋。

展望室……狩燐父が、星を見るのが好きな狩燐母のために作った部屋。プラネタリウムにもなる。

お母様の部屋……綺麗で清楚な部屋。星の図鑑や、たくさんの方華鏡がある。

食料庫……その名のとおり、食料を保存する所。普段勝手に入ると、シェフが牙をむく。

65、幸せな時間を返して!?(前書き)

はい、これで豪邸編は終わりです。

なので、またはちゃらけた(?) 日常に帰ってしまいます。ご了承くださいませ。

そして、感想が、80件を超えました! 大変嬉しく、作者の緩々な涙腺が、悲鳴を上げています!

今まで応援してくださった方、大変有難うございます! そして、これからもよろしく願います。

65、幸せな時間を返して!?

目を覚まして隣を見れば、愛しい人の寝顔が見える。幸せそうな顔は、まるで天使。私の前に降り立った、幸福。

その横顔に軽くキスして、大きな音を立てないように着替える。そして、階段を下り、玄関のドアを開ければ、暖かな朝日と、爽やかな風が私の頬を撫でて過ぎ去る。大きく猫のように伸びをして、ポストの中を調べる。今日は新聞だけ。ほかに手紙はなかった。

テレビの電源をつけて、今日の天気調べる。今日は、晴れ。絶好のお洗濯日和。休日だし、散歩をするのもいいだろう。お弁当を持って、ピクニックもいい。

そんな事よりも、料理を作らなくては。あの人の好きな和食を作って、喜ばせてあげよう。

可愛らしい花柄のエプロンをつけて、袖捲くりをして、一息つく。そして、冷蔵庫の中身をチェック。中身は綺麗に整頓され、どこに何があるか分かりやすい。それは、食材が少ないとも取れるけれど、綺麗なのに変わりない。

「……残り物で何か作るしかないかな？」

とは言え、残っているといても、昨日の肉じゃがくらい。とりあえず、温め直して、おかずに加えよう。そういえば、昨日買った鮭があるはず。それで焼き鮭でも作ろうかしら。そしたら後は、味噌汁ね。長ネギに大根の、質素な味噌汁。お手軽だし、何よりあの人の笑顔が見れる。そうだ、どこかに金平ゴボウの残りがあったはず。それも出してあげよう。今日の献立は、これで決まりね。

肉じゃがを温め直しているうちに、焼き鮭を作ろう。

鮭の切り身の真ん中に包丁を入れて間に薄切りにしたレモンを挟む。酒をふりかけ、しばらくおいた後、水気をふく。それをグリルで焼く。長芋を下ろして、大根おろしと塩を混ぜたものとあわせる。そして、鮭が焼けたら、お皿に盛り付け、とろろをおしゃれにかけ

る。そして、小口切りにした青ネギを散らせば、焼き鮭のとろろあんかけのできあがり。今日はちよつと頑張ってみました。

その間に肉じゃがも温まったみたい。後は、味噌汁ね。金平ゴボウは……冷たくても大丈夫。あの人なら、何でも食べてくれるから。野菜室から、長ネギと大根を取り出す。それを切る前に、適量の水を入れたなべを火にかけておく。そして、軽く洗った長ネギを細く斜め切りに、大根はいちょう切りにする。沸騰してきたところに、大根を入れる。そして、それが柔らかくなってきたら、長ネギを入れ、味噌を溶かしていれば、もう味噌汁の完成だ。

テーブルの上に、今日の朝ごはんを並べ終えれば、後は愛しいあの人起きてくるのを待つだけ。でも、せっかくの温かい料理が冷めるのももったいないから、いつも起こしに行ってしまう。これは普通だけど、あの人の寝相の悪さは人一倍だから、起こすのに一苦労。だから、自分から起きてもらった方が、私にはとてもありがたい。

エプロンを脱いで、いつものようにハンガーにかける。そして、階段を登り、寝室へ向かう。あの人を起こすのは怖いけど、仕方ない。これも妻としての仕事だから。

ぐっすり眠っている愛しい人。その頬を、軽く叩いて逃げる。おかしな光景だけど、逃げなくちゃ殺されるから。大体私がいた場所に、右ストレートが飛んでくる。布団にめり込んだ拳から、力の加減がされていない事が、ひしひしと伝わってくる。……ああ、また繕わないと。

もう一度、さっきよりも強めに頬を叩く。そして、逃げる。今度は、回し蹴り。本人はそうは思っていないなくても、見ている方からは、そうとしか取れない。……また繕う場所が増えたわ。

もう一度、さっきよりも強く頬を叩き、逃げる。何もしなかったので、もう一度叩いてすぐ逃げた。すると、「ふぬなぬあ……」って、不思議な呪文のような声がその唇から漏れた。起きたのかと思ったけれど、寢言だったようで、まだ幸せそうな顔で寝ている。

「……ダーリン。ご飯だよ？」

遠目から、声を掛けてみた。寝言が聞えた時、大体呼べば、愛しい人は起きてくれる。

「ダーリン。ご飯、出来たよ」

「……」

少しだけ近付いて、さらに呼びかける。

「せっかく作ったのに、冷めちゃうわ。起きて、ダーリン」

「……」

「ねえ、起きて」

「……」

攻撃が届かない程度まで近寄って、少し声を張り上げる。

「ご飯だよ、ダーリン。和食だよ！」

「……わほふ？」

返答あり。

「和食。そう、和食だよ」

「……わほふう」

寝言だけど、幸せそうなため息が漏れる。「ふふふ」と、不気

味に笑っていたのは、内緒ね。

「……おはほう」

で、やっと愛しい人は目を覚ました。

「もう、やっと起きた」

「……飯」

「それより前に言う事は？」

「もう言った」

「おはようじゃないよ？」

「……愛してる」

「私もよ、ダーリン♪」

これが私の日課。大好きな時。この人のこの一言だけあれば、私は無人島で暮らせる自信がある。

「……ふああああ……ねみい」

とろおんとした黒目が、ふらつく。また眠ってしまいそうだ。

「ダーリン。寝ちゃったら、私だけで食べちゃうからね」

「さ、顔でも洗ってこようかな」

和食にだけは弱い、私の大切な人。それがまた、可愛い♪

あ、そういえば、私もまだ顔を洗ってないし、髪をとかしていいない。たまにはダーリンの隣で、顔を洗おうかな。

「美味しい？」

「……」

「ね、美味しい？」

「……」

「今度から、和食作るのがめようかな」

「……もうもふふ」

「……なんて言ってるか、分からないよ、ダーリン」

「美味しいよ」

「そう、よかった」

目の前でこうして手作りの物を食べてくれるこの人がいて、本当によかった。一人じゃ寂しすぎて、死んでしまっているかもしれない。でも、私の目の前には、美味しそうに食べてくれる人がいる。それだけで、十分だ。

「今日、どこか出かけようか」

「めんどい」

「じゃあ、洗濯物、手伝ってくれる？」

「めんどい」

「和食、作らないよ？」

「それはダメ」

「じゃあ」

「却下」

「まだ何も言っていないわ、ダーリン」

「ご馳走様」

「ちよっと、妻を無視するの？」

「ん？なんか言ったか？」

「聞いてたくせに」

「バレたか」

悪戯っぽく笑った彼の顔は、昔と変わらない。

「当たり前よ。何年一緒に暮らしてると思うの？」

「忘れたよ、そんなん」

「酷いわ！」

「……あ」

「どうしたの？」

「……」

「何？どうしたって言うの？」

「……思い出したのに、また忘れた」

「もう、ダメだなあ、ダーリンはあ」

「五月蠅い」

「ふふふ」

こんな和やかな日が、私の特別な日になる。楽しくって、ほのぼのしてて、ただ単に幸せ。それほど幸福な事はない。

「ね、また言ってるよ」

「何をだよ」

「あの言葉」

「一日一回。それ以上は言わねえよ」

「いいじゃない、言ってるよ」

「……俺は、お前を——」

*

「――地獄に送ってやろうか！」

「え！？何でそうなるの！？」

「ホラ、起きた」

「すごいな瀬川。お前の言ったとおりだ」

「俺の勘をなめるな」

「え？……え？」

目の前にいるのは……ダーリンと、狩燐。

「お前の家に、着いたんだけど」

「え？」

「『え？』じゃねえよ。帰りたくないってか？家出しますってか？」

「え、……え！？」

「だから、『え！？』じゃねえだろ。お前、この森野家の人じゃねえのかよ」

森野家の人だけど……森野家の人だけど……。

「あれ？」

「まだ夢の中か、馬鹿。つねってやろうか」

黒い笑みを浮かべるのはダーリンで、……あれ？

「大人じゃない」

「大人じゃないさ。俺は大人じゃねえよ？子供だよ。まだ義務教育中の、中学一年生だ」

「……あれ？」

「え？違うっけ？おい、作者。俺は何歳だ！」

「作者じゃなくてさ、もっと身近な人呼ばない？」

「あれ、小橋？」

「なんだよ、『あれ、君居たんだ』的発言は！」

「じゃ、俺達何歳だ」

「13です」

「だよな」

「ともかく、瀬川達も届けねえといけねえからさ、降りてくんね

？」

「え、あ、え、あう、はい」

ぼうっとした頭の中で、咄嗟に思った事が、そのまま口に出た。
何で、私に車に乗ってたんだ？

「じゃあなあ」

「じゃな」

「じゃ」

それぞれ男子軍は手を振って、とは言っても、ダーリンは振ってくれなかった。けど、いかにも高級車は、私の目の前から消えた。

……。高級車？あ、私、お泊りに誘われたんだよね。うん。そうだったよね。うん。……。うん。

うゝ、車の中で何をやってたのか思い出せないよお。もしかして、ずっと寝てたのかな！？え！？じゃあ、あれって、全部夢！？

「そんなあ」

私の幸せの日々い。返してよお……。。

65、幸せな時間を返して!?(後書き)

それは夢か、未来の事かは誰にも分かりません。
今回は、森野目線で書いてみました。

豪邸編は終わってしまいましたが、これからも『ドSな俺と、ドMなアイツ』をよろしくお願いします。

66、心配性の変態親父!?(前書き)

久しぶりに、あの変態さん登場です。

66、心配性の変態親父!?

「ただい——」

「慎吾おおおおおおお!!」

飛び掛ってくる変態をしゃがんでかわす。

「おわっ」

狩燐も同じようにかわす。あ、狩燐はバック持ってきてくれてます。

その結果、あのアホストーカーは、ドアにダイレクトアタック。

ああ、ドアが可哀相……。

「お帰り、慎ちゃん」

「ただいま、母さん」

あの馬鹿クソ変態親父のせいで、途中までしか言えなかった台詞を言う。

「えっと、……あの」

らしくねえなあ。狩燐が戸惑ってみろ、なんか恐ろしい。

「こんばんは、狩燐君。あ、ちよっと待っててね」

「……」

「どした?」

「なんか、謝る隙を与えてくれねえなあと思って」

「電話で謝ったんなら、それだけでいいんじゃないやねえの?」

「慎吾っ、慎吾! お前の美脚がああ……」

「うるせえな、変態。しばらく黙ってろ」

いい大人が号泣して……しかも、美脚ってなんだ。

「……容赦ねえな」

「お前もだろ」

「俺は手加減してるぞ?」

「あそ」

「おまたせえ。はい、これ」

狩燐に何か渡す母さん……。そ、それは!!

「……何これ」

思うよな、そう思うよな! なんとってそれは、ミツチャルさんのお土産だもの!

「母さん、何渡してんだよ」

「お菓子がなかったから、これでいいかなあって」

そんな適当な理由で、悪魔を呼び出す儀式に使うような仮面を渡しますか!? あ、この怪しい仮面の正体を忘れた方は、10話目を読んでみてくださあい。

ていうか、その仮面とってあったんだ……。

「……一応、もらっておきます」

「あ、バック重かったでしょ? 有難うね、狩燐君」

「いえ。じゃあ、車待たせてるんで……!!」

「帰らせん……帰らせんぞ! 今夜はみっち——がはあっ!」

飛び蹴り。実の親に、本気で飛び蹴り。松葉杖を軸にして、怪我してない方の足でやれば、簡単簡単♪

「じゃあな、狩燐」

「おう、またな」

で、狩燐は帰って……。

「!」

「帰らせん……私の大切な、大切なBABYを傷付けた貴様を、帰らせるかあ……」

その前に、狩燐の足からその汚ねえ手を放してやれ。そして、BABYと呼ぶな。

「……すみませんでした」

謝らなくてもいいのに、狩燐。

「土下座しろ!」

お前がな!! てか、

「いい加減に……しろやあああ!!」

「い、っだあ!」

「慎吾! どうしたんだ!!」

「……お前なんて、死んじまえ!!」

顔面にグーパンチ!! 容赦なしに。親父が吹っ飛んでくれたおかげで、潰されてた足が救われた。……あゝ、痛かった……。

「パパになんて事するんだ、慎吾!」

「お前こそ息子に向かって何すんだよ!」

「感動の再会を、心から喜んだだけさ!」

「怪我した足を悪化させるような事しやがって、許さねえぞ!」

「何!? あの子か、あの子がいけないんだな!」

「狩燐は関係ねえから!」

「今からパパ、ちよつと行ってくる!」

「地獄に逝け、地獄に!」

「パパはなあ、パパはなあ、……グスン」

だから、その厳つい顔で、その泣き方はやめろって言ったじゃねえかよ! 気持ち悪いんだよ! 気分が悪くなるんだよ!!

「ほらほら、慎ちゃんも俊さんも、そんな所で話してないで、こっちにいらっしゃいな」

「麻理い」

「……」

あの番犬ケロベロスめ。一体幾つになったら、子離れしてくれるんだ。

「慎吾」

「……なんだよ」

「慎吾お」

「……なんだって」

「慎吾」

「……るせえなあ」

「慎吾」

「……」

「慎吾 おおおお!!」

「近寄るな、変態親父!!」

松葉杖で、変態の顔を強打。これやるの、何回目やら……はあ。

「ほら、俊さん。慎ちゃんが嫌がってるでしょ?」

「嫌がってないよ、麻理」

……かなり嫌いなんだけど。嫌がってるどころじゃないんだけど。

「でも、慎ちゃん疲れてるんだから」

「そうなのか!? そうなのか、慎吾!」

「まあ、疲れてるっちゃあ、疲れてるんじゃないね」

「ならパパが——」

「今日はもう寝るわ。おやすみ、母さん」

「おやすみい」

「パパには言ってくれないのか!?」

「……何を」

「パパには、パパには『おやすみ』を言ってくれないのかい!」

「永遠におやすみ」

「それはずっと一緒にいてくれるって事か!? 一人暮らしとか、

そういう悲しい事はしないでいてくれるって事か!?!」

一人暮らしが悲しいって……。それ、お前の事だろ、変態。

「死んでくれて事かな、じゃ」

「そんな悲しい事言わないで、もうちょっとパパと一緒にいてくれえ!!」

「ヤダね。俺は寝るんだ」

「添い寝してあげるから!」

「もっとヤダ」

「子守唄歌うよ!」

「お前のは子守唄っていうか、地獄の賛美歌じゃねえか」

子供に聞かせちゃいけない歌声だぞ。危ない電波飛ばしてるぞ。

それを聞いて俺は育っちゃったから、こんな人間になっちゃったん

だよ、クソジジイ。

「慎吾が歌ってくれるなら、天国の賛美歌だ！」

「歌わせるつもりだったのかよ」

「お前が居ないと寂しいんだよ、悲しいんだよ」

「キモい」

「慎吾！」

「！！」

だから、その厳つい顔で、急に叫ぶな！心臓に悪い！てか、急に真面目な顔になるな！！

「実の親に向かって、キモいとはなんだ！パパかダディーと呼びなさいと、会う度に言っているだろう！」

パパかパピーの間違いだぞ。ま、どっちにしろ呼ぶ気はねえけど。

「返事は！」

「ヤダ」

「せめてさ、パパと、パパと呼んでくれ！」

「バーカパパ」

「それは、バー〇パパの間違いじゃないか！？」

「気にするな、ハゲるぞ。もう30後半なんだから」

「まだきてない！まだきてないから大丈夫なんだよ！」

「そう油断していると、いつからか始まっているぞ？ハゲは気付かぬうちに始まるもんだ。……ホラ、もうすぐそこに……」

「させるかああああああああああああ！！」

いもしない敵と戦うために、席を立ったのはいいけど、勢いあまってすっこけるのはやめてくれ。情けなくなるから、惨めになるから。

「……」

これ、チャンスじゃね？逃げるチャンスじゃね？

「どさくさに紛れて、どこへ行くんだ、M y B a b y ! !」

「ベビーじゃねえよ。……てか、ホントに寝させてくれよ」

もう、ホントに頭くらくらするんだよ。一人でさえウザい変態親

父が3人くらい見えるんだよ。

「じゃあ、パパも……」

「来るな」

「なんで!？」

「来るな」

「いいじゃないか!」

「来るな」

「歯を磨くだけかもしれないぞ!？」

「来るな」

「じゃあ、せめて、部屋の前まで」

「来るな」

「階段のあたりまで」

「来る——」

「慎吾おおおおおおおおおおお!!」

叫ぶな、五月蠅い。

「大丈夫か!？大丈夫なのか!？」

えっと、状況を説明すると、めまいがして倒れそうになったただけなのに、抱き上げられてしまった、瀬川慎吾13歳です。てか、軽々と持ち上げられると、ちょっと悲しいぞ……。

「ダイジョブだからさ、降ろしてくれない？」

「いや、ダメだ!立っちゃダメだ!」

「何故に」

「これ以上お前の美脚が、お前の美肌が傷つくのを見とくない!」だから美脚ってなんだよ。てか、美肌って増えるし。そこまで綺麗じゃねえだろ、俺の肌。てか、どうでもいい!

「降ろせ」

「このままベッドまで運ぶから、安心しなさい」

……親父だと、安心できねえんだけど。

「あらら、どうしたの？」

「私の大切な慎吾が、倒れ掛かったのだよ、麻理!」

「あら、じゃ早く寝かせてあげないと」

「じゃあ、慎吾を部屋まで運んでくるよ」

「落としたりしないようにしてあげてくださいね。あと、慎ちゃん、ちゃんと寝させてあげてくださいね」

……一人で歩けるのに。てか、この人が俺の部屋まで来るの、すっごい嫌なんだけど。

で、無駄に抵抗してみたものの、無駄な抵抗だったので、そのまま部屋まで運ばれてしましまして、地獄の賛美歌を何十年ぶりに聞かされました……。

66、心配性の変態親父!?(後書き)

67、瀬川家の一日!?(前書き)

なんか、ものすつごく適当な話なんです、良かったら読んでください……。

67、瀬川家の一日!?

……暑い。ものすごく、かなり、ともかく暑い。……あゝ、暑い。

ミン、ミンミンミィ〜〜ン……

セミはウザいし。

慎吾おおおおお！このドアを開けてくれええええええええええ！！

変態はしつこいし。何よりかったるい。こんな日は、のんびり過
ごすのに限る。てか、怪我がまだ治ってねえから、のんびり過ごす
しかねえけど。

あゝゝゝ、あぢい……。

ミン、ミンミンミィ〜〜ン……

……。

ミン、ミン〜〜〜〜ミィ〜〜ン……

……。

ミィ〜〜ン、ミンミンミンミンミンミィ〜〜ン……

……。

慎吾おおおおおおおおおおおおおおおおお！！

……疲れないのかね、あの30代後半の変態は。

「……氷はあったけど、削る奴どこだ、削る奴……」

これは……あれだ、レモン絞る奴だし。

あ、これは……、何これ？ はじめて見たぞ、こんなん。どうやって使うんだ？

お、これか……。って、またレモン絞る奴!? 何で2個も持ってるんだよ! 一つでいいだろ、一つで!

これはあ……ジューサーじゃん。用ないよ、こんなん。

あゝ、暑いし、ないし。なんか、嫌になってきたあ。

しゅんごうおぉおぉおぉおぉ！！

……飽きずにあの状態はまだ吠えてるし。母さんがいない間に、アイツといると、俺の安全が保障できねえんだよな。ああ、自分の部屋に鍵が欲しいよ……。

「つかしいなあ、あつたはずなんだけどなあ、氷削る奴」

てか、かき氷の氷削る奴に、名前あんのかな？

かき氷製造機？……なんかベタだな。

氷削り器?……言いくくね?

氷削る君?……メーカーによるな。

…一番初めのが、一番しっくりくるな。

てことで、俺の探し物の名前は、かき氷製造機って事で。まあ、どうでもいいんだけど、ほかに考える事もなかったし、暇だったから。

「……ねえなあ……」

どこにしまったんだ？ 去年はあったのに……。あれ？ 一昨年だったけ？ その前だったっけ？ ……まいっか、そんな事。関係ねえな、きつと。

） 数時間後 （

「……ない」

かき氷は諦めるか。なんか、秋田市。じゃない、飽きたし。

！！
慎吾 おおお！開けてくれよおおおおおおおおお

変態も飽きずに頑張って吠えてるし。そろそろ入れてやってもいいかな？でもなあ……。

「あら、どうしたの、俊さん」

「麻理いいい」

あ、母さん帰ってきたみたいだ。

……荒らしたの、片付けてねえ。ヤバイ、母さんの雷が落ちる……。

「どうしたの？そんなに泣かないでくださいな」

「だってなあ、だってなあ。酷いんだぞ、慎吾の奴」

「どうしたんです？」

「『散歩に行こう』って言われたから、嬉しくって外に出たら、すぐに鍵閉めたんだあ」

「まあ、だまされてしまったのね」

「パパは嬉しかったんだよ、心からあ」

「はいはい。でも、慎ちゃんは怪我してるんだから、散歩は無理だと思わなかったの？」

「パパに抱っこされて行くのかと……」

「誰が頼むか」

馬鹿が母さんに移らないうちに、止めに入ってみました。あゝ、玄関って涼しいんですねえ。

「慎吾 おおおおおおおお！！」

馬鹿な話を聞いている間に、一応片付け終わってよかった。てか、親父が馬鹿でよかった。

「近寄るな、汚らしい」

「パパは綺麗だよ？身も心も、まっさらさ！」

「……どこが……」

「仲がいいのねえ、慎ちゃんと俊さんは」

「どこが！？」

「ホントかい！！」

「喜ぶな、変態ジジイ！」

「変態じゃない！過保護なだけなんだ！」

「分かってんなら、直せ」

「お前は俺の子だああああ！！」

「急に意味わかんねえ事言うな！」

渾身の一撃をかまして（顔面に♪）、とりあえず自分の部屋に逃げました。

あゝゝゝ、あつちい……。

67、瀬川家の一日!?(後書き)

さあ、どうする私。そろそろネタ切れじゃない?てか、今回適當すぎじゃない、下弦?どうするの、下弦!どうなっちゃうの、私!!

68、ほのぼのなのか!?(前書き)

うーん、ほのぼのした感じのものを書こうとしたら、結果、こういう風になってしまいました。
ほのぼの、してないなあ……。

68、ほのぼのなのか!?

暇だ。今こそ、暇だ。真実の暇だ。意味分かんないけど、暇だ。ともかく、暇だ。

「……暇だぁ……」

夏休みの宿題は終わったし、部屋の掃除は（自分で言うのもなんだけど）完璧だし、家でやる事はすべて終わらせたし。あゝ、暇っ！

クソジジイは仕事にやっと戻ったし、母さんはまた『セール』という言葉に負けてどこか言ったし、弟とか妹とか、兄とか姉とか、そういうのいないから、暇だ。ああ、一人っ子だという事を、今だけ呪うよ。だぁゝ、暇っ！

「どっか遊びに行こうかなぁ……」

でもなぁ、こんな暑い日に出かけたくないし、面倒臭いし、怪我治ったけど歩くと痛いしなぁ。……おい、そこ。弱虫とか言うなよ。真面目に痛いんだからな。はぁゝ、暇っ！

ピーーーーーッポン！

……何か、変なチャイムの音が聞こえたような……。

ピーーーーンポーンッ！

……普通のチャイムっぽいけど、なんか長くね？

ピンポーン！

……普通すぎてつまらんな。誰だ。

「森野ですけどお」

……無視決定だな。

「夏鈴だよ。夏藍もいるよ」

……無視すると泣きそうだな。

「小橋だぜえ」

無視だな。

「開けてよお、いるのは分かってるんだぞお、ダーリン」

誰が開けるか。居留守してやる、居留守。

「お邪魔しますよ」

いや、鍵かけてあるから、入れねえよ。……って、夏藍が言ったのか？なら、何かと間違えたはずだ。

「親友の俺だけでも入れてくれよお」

誰がお前の親友だ。お前はまだ、友達のレベルだぞ。てか、一人だけ抜け駆けしようってのか。

よし、小橋以外、入れてやるか。あ、でも、森野は入れたくねえなあ。

「……」

「ダーリン——だっ！」

ドアの間近に立ってたようで、見事に激突。打ち所が悪かったようで、倒れたけど、森野なら大丈夫だよな、うんうん。……俺のせいじゃねえぞ？アイツがいけないんだ、アイツが。

「慎吾にいだあ」

「シンドリーだあ」

シンドリーって誰だよ。てか、いい加減、俺の名前を覚えようぜ。

「遊びに来たの」

「足見に来たの」

……どっちが真実？

「あゝ……、お母さんは？」

「せーるって言うところに行ったあ」

「ばーげんって言うところに行ったあ」

……どっちが事実！？

「違うよ、夏藍ちゃん。せーるだよ」

「そうだったけ？せーらーだったけ？」

違うから、セールだよ、セール。

「よう、瀬川。足の具合は——」

「あゝ、ともかく、上がれ」

「お邪魔しまあす！」

「おしゃれしまあす！」

おしゃれはしなくていいぞ、夏藍。

「おい」

さて、麦茶でも出してやるか。

「おい、無視か？」

……せんべいあったかな？

「聞えてますか？」

……あ、饅頭があったか。

「無視なんですか！？」

そうだ、アイスの方が喜びそうだな。

「スルーしてるよね！？」

よし、そうしよう。

「その扉を閉めないでえ！！」

「……あれ？小橋。お前もいたのか」

「気づいてただろ」

「何に？」

「俺の存在——閉めるなって！」

「……ちっ」

「おい！今舌打ちしたべ！」

どこの方言だよ。

「……ぺっ」

「つばを吐くな！——閉めるなっての！」

「うるせえな。お前は呼んでねえんだよ」

「あの子達と、この伸びてる人だって、呼ばれてねえだろ！？」

「お前は呼ばないと来ちゃいけねえんだよ」

「なんだよそれ!」

「世界の法則」

「そんな法則、俺が打ち碎いて——閉めるなあ!!」

ちっ、また失敗か。

「なんだそのあからさまに悔しそうな顔は!俺を家に入れたくないってか!」

「そうだよ」

「即答かよ!迷う事無く答えるな、おい!——って、閉めるな!!」

「んだよ、お前に用ねえんだ。帰れ」

「いや、俺はお前のみ——閉めるなってば!」

「んだよ、しつこいぞ、ストーカー」

「俺はストーカーじゃないから!ストーカーこっちだから!」

「お前も十分ストーカーだ。すみませええん!!変な人が襲ってきます!!」

「ちょ、お前——!」

「でも、足怪我してるから逃げられないよおお!!誰かあ、たすけ——」

「変な事叫ぶな!!ご近所さんに、迷惑だ!!」

「ふごふふふ」

口を塞ぐな。息が出来ない。

「てか、そんな見事な棒読みで、助けに来る人なんか——!!」

「どうした!??」

……いましたねえ。あ、この人お隣さんです。名も無き、お隣さんです。

「どうしたんだい?何があったんだい!??」

「いえ、あゝ、劇の練習なんですう。気にしないでください」

「そうか。じゃあな」

「……」

「……来たじゃん」

「お前が誤解を招くような事をするからだろ!!」

「慎吾にい、のどかわいたあ」

「はいはい」

「わっちもお」

「……はいはい」

「俺もお」

「さあ、こんな変態さん見てないで、中に入ろうか」

「変態さんとは何だ!」

「うるせえな。黙れ、影薄」

「影薄言うな!そこらへんの奴よりは、多く出番があるぞ!!」

「……」

「無言で閉めるな!せめて何か言え!!」

「消えろ。じゃ」

「消えろって何だよ!じゃって何だよ!

「そのままそのとおりだ」

「意味わからねえから!ともかく——閉めるなあああ!!」

「五月蠅い!ご近所に迷惑だろうがっ!!」

とりあえず、鼻狙いでグーパンチ。一回、人の鼻へし折ってみた

かったんだあ♪H A H A H A。

「鼻が……鼻がああああ」

「……じゃ」

小橋はほつといても、生き残るよな。地獄からも帰ってきそうだもん。

＊

「おいしっ」

「おいかわあ」

おいかわって魚だよ？それを分かって言ってるのか、夏藍よ。

とりあえず、リビングで遊んでた双子ちゃんに、アイスをあげた。チョコとストロベリーの。えっと、確か、チョコ持ってるのが夏鈴で、ストロベリー持ってるのが夏藍。

「おいしねえ、夏藍ちゃん」

「おかしいねえ、夏鈴ちゃん」

何がおかしいの？何が面白いの！？

「慎吾には、たべないのお？」

「のお？」

「俺はいい」

もう食べたし。一日にそんな何個もアイスはいらん。和食だったら、いつでもどうぞ。

「これ食べ終わったら、あそぼ」

「明日」

……今日遊ぶんじゃないなくて、明日遊ぶのか？ただ単に、夏藍の間違いなのか？

「今日遊ぶんだよ」

「キヨタ遊ぶんだよ」

キヨタって何？植物？人？地球外生物？てか、『今日』がどうなったら、キヨタになるの！？

「……」

それにしても、幸せそうに食べるなあ。

「……ねえ、誰かお庭にいるよ？」

「……兵隊さん？」

庭に兵隊って、何の特訓中！？てか、瀬川家に兵隊来たら、一大事だから！！

……ん？ちょっと待てよ。兵隊さんと間違いそうなのって……あいつか？

「……やっぱりか」

庭にいたのは予想通り、まあオマケ付だけど、影薄がいた。しかも、森野と変な事やってる。

「何やってるのかな？」

「何死体のかな？」

おい、不吉な事言うな、夏藍。まだ死んでねえから、生きてるから、あの馬鹿達。

えっと、状況を説明すると、じゃんけんしてるのはいいんだけど、かなり白熱してる。あいこが何回も続いているようで、目が血走ってるし。てか、拳に力を入れすぎだ。

「危ない人？」

「ハブない人？」

ハブない人って何？『ハブ持ってない人』の略？ハブない人って、てか、普通にハブは持ってないから。持たないから。

「ねえ、危ない人？」

「ねえ、胡坐かき？」

胡坐かき？胡坐かきたいのか？ならご自由にどうぞ。

「危ない人達だから、無視してな」

「でも、気になるよ」

「でも、木になるよ」

何が！？あいつらが木になるの！？

「……じゃあ、和室に行こう。あそこは庭が見えないからさ」

「うん！」

「うぬ！」

だから、うぬはないだろ？どこの偉そうな大名？

で、双子達を和室に非難させてから、庭に近い、一番大きなガラス窓を開ける。

「あいこでしょ！」

「あいこでしょ！！」

……どんだけやってたんだろ。庭の草がしおれてる……。

「おい、その馬鹿共。人様の庭で、何やってんだよ」

「ダーリン！」

「瀬川！」

「……」

決着、ついたな。

「あっ！買った！買ったわ！！」

何を！？何を買ったんだよ！勝ったの間違いだろ！！

「何！？この俺がまただと！？」

お前も発音違うから。またじゃなくて、負けただろ？分かりにくい間違いすんな。

「ところでダーリン」

「ダーリンじゃない」

「いいじゃない、恋人同士なんだから」

「小橋、こいつどこかで頭売ったか？」

「売ってないわ！せめて、撃ったと間違えて！」

「両方違うだろ、バカップル」

「お前に馬鹿と呼ばれたくない。しかも、俺はこいつの彼氏じゃないぞ、影薄」

「貴方に言われても、嬉しくないのよ、影薄ラー君？」

「俺はそんな不名誉な――」

「さあ、ダーリン。誓いのキスを」

「うるせえな、てか、なんだよ誓いのキスって」

「じゃあ、普通のキスでいいわ」

「お前にする事は、何もねえ」

「え！？」

「何故にそうあからさまに驚く」

「てか、人の話を聞けよ、お前ら！！」

「黙れ、影薄。お前と話するような事はないんだよ！」

「五月蠅いわ、薄ラー。貴方とは話してないの！」

「揃いも揃って毒舌か、コラ!!」

「悪いか、こら」

「悪かったわね、こら」

「てか、話の内容、何？」

「……」

「……」

「何故に黙る!？」

「……いや、そのお……」

「なんていうか、……な？」

「俺に聞くな」

「……」

「……」

「用がないなら、さっさと帰れ。そして、二度と俺の前に姿を表すな!」

「それは嫌!」

「俺もヤダ!」

「消えろ」

「嫌よ」

「失せろ」

「俺だけ違う!？」

「ともかく、消えねえと」

「何？」

「何してくれるの？」

「ミンチにして、人間ハンバーグ作ってみる？」

「……帰ろっか、影薄君」

「……影薄君じゃないけど、帰るか毒舌女」

「待てよ」

「ごまんなさい!」

「ごめんください!」

2人とも言葉が違う! ごめんなさいだろ、ごめんなさい! 夏藍に

影響されたか!?

ともかく、邪魔な二人は追い払えたんだ、よしとするかな。

＊

「……ありやあゝ」

これまた幸せそうに寝てるなあ。微笑ましいよ、この平和さが。

「ぬふふゝゝゝ」

「くふふゝゝゝ」

……何か怪しい言葉を発しているような気がするけど、起こすのは可哀相だよな。そだ、風ひくといけねえから、タオルケットでも掛けてやらねえと。

「ふああゝゝ」

俺も、寝ようかな? ああゝ、ねみい……。

「ただいまあ、慎ちゃん」

あら? 返事がないわね? どうしたのかしら?

あら、読者の皆さん、こんにちは。あの、慎ちゃん、どこに行ったか知りません? ……和室、ですか。涼村さんの所の夏鈴ちゃんと夏藍ちゃんと一緒なんですか?

「……まあ」

幸せそうに寝てるわねえ。母さんも混ざりたいわあ。タオルケットに包まった双子ちゃんと、寄り添うように寝てる慎ちゃん。微笑ましいわねえ。慎ちゃんは一人っ子だから、妹達が出来たみたいねえ、うふふ。

「そつとしておいてあげましょうか」

慎ちゃんにもタオルケットを掛けて、私は夕飯の献立をたてる事

にしますわ。

68、ほのぼのなのか!?(後書き)

暑い日に暇だと、なんかうつになりそうになりませんか?
まあ、どうでもいいんですけど……。

69、夏だ！海だ！温泉だ！？

前編（前書き）

夏といえば、海。海といえば、夏。

と、言う事で、適当なノリで書いてちゃってます、すみません……。

69、夏だ！海だ！温泉だ！？

前編

「海だあ！」

「浜辺だあ！」

「太陽だあ！」

太陽は元からあるぞ。

こんちわっす。毎度おなじみ、瀬川です。てか、主人公なんだから、おなじみで当然？

え？その前に今のこの状況を説明しろ？しかたないなあ、説明してやるよ！

） 数時間前 （

「ねえ、慎ちゃん」

「何」

「当たったの」

「何が？」

「旅行券」

「そう。……えっ！？」

「商店街の、ほら、ガラガラやるの、あるじゃない？アレで、一
等が当たったの」

ガラガラやる奴はないでしょ、母さん……。

「で？」

「豪華ホテル、2泊3日旅行券、当たったの」

「豪華ホテル？」

「ほら、狩燐君の会社が新しく建てた、ほら、何て言ったかな？」

「それはいいから、何名様ご招待？」

「5名様。でも、俊さんはお仕事で無理でしょ？だから、お友達、
誘わない？」

「3人も？」

「お食事も、宿泊料も無料なの。それに、旅行費も無料よ」

「……しゃあない、適当に誘っておくよ」

「有難う、慎ちゃん！」

そーゆー事で、今の状況に至る訳ですよ。場所は、南の島。そうやって、旅行券に書いてあったんだから、仕方ない。だから、南の島をご想像してくれ。で、メンツは、俺と母さん、あの双子ちゃん、小橋。あの双子ちゃんを誘った理由は、また遊びに来てたから。小橋は……なんとなく？

「あんまり奥まで行っちゃダメよお」

「はあい！」

「はあい！」

「OKです！」

……幼稚園生に、溶け込んでるよ、小橋……。

「慎ちゃんは、海に入らないの？」

「怪我にしまいたら、嫌じゃん」

「大丈夫よ、きつと」

「……そういう母さんは、入らねえの？」

「もう年だから、あんまりはしゃぐと次の日の体力がなくなっちゃうの。だから、みんなのはしゃぐ姿を見てるだけで十分よ」

「……あれ、はしゃいでるのか？」

幼稚園生にいじめられてる、哀れな中学生にしか見えないんだけど……。

「慎吾にいいも、一緒に行こう！」

どこに？

「あっちにね、どーくつがいのの！」
いるじゃなくて、あるだから。

「面白そうだぜ！行こうよ、瀬川！」

すみません、お前に呼ばれると、ロクな事にならない気がするからいやなんだけど。

「行こうよ!」

「以降よ!」

「行こうぜ!」

おゝい、約一名、間違ってんぞお。

「母さんは、ここでパラソル立てとくから、行ってきなさい」

「……じゃあ、行ってくる」

「怪我に気をつけてねえ!」

……十分気をつけるよ。これ以上怪我すると、あのクソ変態エロ親父が五月蠅いからな……。

「あっちだよ、あっちい」

「ほらほら、流行りい」

「楽しいなあ、瀬川!」

……だからさ、約一名、間違えてるってば。

＊

「涼しいねえ」

「ずうずうしいねえ」

「マイナスイオンを感じるなあ」

……もういい。もうツツコまない。もう、知らん……。

「何とか言えよお、瀬川あ」

「気持ちいいな」

「だよなあゝ。あゝ、和むうゝ」

確かに涼しい。洞窟の中は静かで、波の音しか聞こえない。それに、何故か小さな滝がある。それのおかげで涼しいのかもしれないけど、明らかに人工的……。

「もつと深いのかと思ったけど」

「あんまりふかきよんじゃなかったねえ」

……ふかきよんって、芸能人のあだ名だね？

「でも、気持ちいいから問題ないなあ」

「だねえ」

「種え」

……種はないだろ、種は。

「……冒険できなかったから」

「……そろそろどもる？」

順番が違うよお、どもるじゃ他の言葉になっちゃうぞお。

「そうだな、戻るか。腹も減ったし」

「もどろー！」

「しどろもどろー！」

……もう、いいよ。

＊

「あら、早かったのね」

「あんまりねえ」

「面白くなかったんだよお」

「そうなの？」

「でもねえ」

「ずうずうしいの！」

「そうだったの。よかったわねえ、涼めて」

「うん！」

「うん！」

あゝ、和やかに一家団欒？でも、その前に、よく夏藍の言葉が通じるなあ、母さん。

「なあ、瀬川」

「何だ、いじめられっこ」

「不名誉な呼び方すんなよ」

「いいだろ、人の好きにやらせろ」

「お前の好きにさせると、一部の人が滅ぶ」

「気のせいだ」

「だといいな……って、俺が言いたいのはそういうんじゃない」

「何だ」

「腹減った」

「そういえば、そんな事言ってたな」

「だからさ」

「戻るか、ホテルに」

「おう！」

嬉しそうに笑うねえ。どんだけ空腹？そこまで俺は、腹減ってねえけど、もう一時だし、飯にはちょうどいいんじゃない？

「ねえ、おばさん」

「なあに、夏鈴ちゃん」

「おなか空いたの」

「私も」

「じゃあ、お昼食べに、もどろっか」

「うん！」

「ぬう！」

……なんか、ちがくね？

「お兄さん方もいいかな？」

「いいともお！」

……ハイテンションだなあ、小橋……。いつもこのテンションでいたら、きつといじられる事はないだろうに……。哀れなり、影薄。

「早く行くわよ、慎ちゃん！」

「早くう」

「はばたくう」

「先行っちゃまうぞお！」

「え、あ、ちょっと待てよ!!」

いつの間に、パラソル片付け終わってるんですか!?! いつの間に、そんなに離れた所にいるんですか!?!

「すっごおい！」

「ストライク！」

「スッゲー！」

「……あんまりさわいじゃダメよ? 他の人に迷惑だからね」

「はあい」

「はあい」

「はい！」

……。素直な奴らはいいとして、ストライクはないでしょ? どの草野球チーム所属ですか?

「……好きな所に座っていいのかしらね?」

「かしらね?」

「頭ね?」

……ずれてるって。

「どうなのかしらね」

小橋!?! おま、お前はそういうキャラだったのか!?!

「ちよ、瀬川。何で俺を避けるんだよ」

「いや、お前がまさか、おねえ系だと思ってなかったからさ……」

「今のはノリだよ、ノリ! だから、そんなに避けなくても」

半径1メートル以内に近付きたくねえな。

「こういう場所、初めてだから、困っちゃったわね」

「たわね」

「束ね」

……違うってば。

「どうでしょうか?」

いい加減、キモいぞ小橋。……あ、元からか。

「……あれ？瀬川達じゃん」

「あら」

「あら？」

「粗？」

……かすってるけど、違うよ。

「あれ、狩燐じゃん」

「よ」

「『よ』じゃなくて、何でお前がここに？」

「親父に攫われたから」

「攫われたって……」

「聡佑ええええええ！」

「うげっ。ちょ、背中借りるぞ、小橋」

「え？な、なに？」

「あれ、狩燐は？」

「小橋の後ろにいるが？」

「あ、いたいた。親父さんが叫んでるけど、いいのか？」

「こっち来たら、適当に追いついてくれ」

「分かった」

で、疾走している狩燐の親父さんは、猛烈なスピードで、こちらに突っ込んできた。

「母さん、あの人に関ければ、何か分かるよ」

「そうなの？じゃあ、聞いてみるわね」

怯えてる双子ちゃんを従えて、目の前に来た狩燐の親父さんと向き合う。

「あの、こういう場所は初めてなので、よく分からない事だらけなんです」

「え？あ、じゃあ、あそこの業務員に聞いてください。私は愛しの一人息子を探しているの」

「愛しのだってよ」

「お前も言われてるだろが」

「ちよつと、いいかい？」

「な、なにか？」

目の前にはかなり怖い顔をしたおっさん。この人が、狩燐の親父さんです。

「君の後ろあたりから、聡佑の声が聞こえた気がするんだが？」

「ソウスケ？誰ですか、それ？」

「とぼけても無駄だよ、瀬川君。君の事はリサーチ済みさ」

リサーチって、何してんだよ……。

「私は、あの子の周りの者には、常に目を光らせているからね。はっはっはっ」

いや、豪快に笑われても困るって言うか、ほら、双子ちゃん、泣きそうだし……。

「で、ちよつといいかな？」

「なんです？」

「聡佑をどこへやった!？」

「何で俺ええええ!？」

無関係な顔をして、あらぬ方向を向いていた小橋が奇声をあげた。つまり、逃げようとしてた。

「……」

「……な、なんですか？」

「君が、小橋君かい？情報通りに影が薄い」

「失礼な!」

「そっちこそ失礼な!」

「どこらへんが失礼な!」

「聡佑を誘拐しようなど、百億万光年も早いのだ!」

「どんだけ!？てか、誘拐なんて、とんでもない!——うえい!？」

胸倉をつかまれて、遥か高くへ……。

「おい、お前たち、こいつを連れて行け」

「はっ！」

で、黒い人達が小橋連れて、どこかへ行きました……。ご愁傷様、小橋……。あの世で会おうな……。

「瀬川、どうなってんの？」

テーブルの下に隠れてる狩燐に聞かれた。

「小橋が誘拐された」

「殺されないように、説得しとくよ」

「で、瀬川君」

「はい！？ な、なんでしよう？」

「聡佑は、どこへ行った？」

「か、狩燐は、あっちの方へ、行ったかなあ……。？」

「そんなあいまいな答えは聞いていないのだよ」

脅し！？ これは、脅しですか！？ ナイフがちらついているんですけど！？

「あのお」

母さん！ この人に近付いちゃダメ！ 危ないよ、かなり危ないよ！！

「まだ何か？」

「慎ちゃんは嘘をつきません」

「は？」

「なので、返していただきます」

強引に腕を引っ張られて、拷問から解放された。……。あゝ、怖かったあ。

「おたくのお子さん、貴方の事が嫌いなんじゃなくって？」

「なっ……。！」

「子供に逃げられる親なんて、親じゃありません！ 教育方針を変えたらどうです！？」

……。そ、そんな挑発的な言葉……。後が怖いよ。

「……」

「行きますよ、夏鈴ちゃん夏藍ちゃん、それに、慎ちゃんも！」

「は、はい！」

い、今だけ、母さんの方が、怖いです……。

69、夏だ！海だ！温泉だ！？

前編（後書き）

えっと、明日、入学式で、今度から更新が遅れると思いますが、どうかご了承ください。

家から高校まで、結構遠くて、書くのも遅いので、謝っておきます。
すみません……。

ですが、これからもよろしくお願いいたします。

70、夏だ！海だ！温泉だ！？

後編（前書き）

よっし！ギリギリセーフっ！入学式の前に、投稿完了！

よく頑張った、私。頑張りすぎて、ミスが見つけられなかつたよ、私
……。

あ、誤字脱字あったら、報告お願いします……。m（　　）m

70、夏だ！海だ！温泉だ！？

後編

……一夜明けて、やっと小橋は帰ってきたけれど、かなり憔悴してる……。一体何をされたのか想像つかねえけど、ロクな事なかったと思う。

で、今、食事をするために、レストランに来てる。そして、昨日と変わらずに、母さんは言った。

「さあ、今日もはりきって食べましょー」

「べましょー」

「しおこしょー」

まだ違うし……。

無事に食事も終わって、特にする事もなしに部屋へ帰ってきたのは俺と小橋だけ。他は再び海へと意気揚々旅立って行った。

「……」

「……」

存在感ない小橋だけど、しゃべらないと、不気味だな……。

「なあ」

「なんだ？」

こ、声が暗い！こ、声からして暗い！！

「なんだよ」

「いや、その……大丈夫だったか？」

「何が？」

「あゝ、黒ずくめの人に攫われた後？」

「……聞きたいか？」

「……まあ、あれだ」

「……聞きたいのか？」

「……ちょっとだけ……かじる程度に……お願いしまさあ……」

「かじる程度で、本当にいいのか!？」

つ、詰め寄ってくるな!こ、怖いんだよ、今の小橋の顔!!!必死すぎて、ヤバい事になってるんだよ!!!

「……じゃあ、くわえる程度?」

「……同じじゃね?」

「……まあ、よくね?」

「……よくなくね?」

「……別によくね?」

「……ともかくよくなくね?」

「……とりあえず話してくんね?」

「あ、忘れてた」

忘れてたんかい!あの短い間で!?!君の記憶力は鶏並!?!あ、でも三歩歩いてない……。って、今そんなの関係ねえし!!!

「心して聞けよ」

「おうよ!」

.....。

何故に沈黙!?!何この沈黙!?!てか、どんだけためるの!?!

「言うぞ」

って、まだ言わんのかい!

「……いつでも来い!」

.....。

さつきよりも長くね沈黙!!!てかまだ沈黙!?!もういいよ!言いたくねえんだろ!!!なら、もう聞かねえよ!!!

「変な暗い部屋に入れられて神経をズタボロにするような悪質非道な言葉を吐かれ続け仕舞いにはみんなで影薄って大合唱された」

って、思ったら、急にスパツと言いやがった!!

「……」

「……俺の昔まで暴きやがってさ。お前の知らないような恥ずかしい事まで言われたんだぞ!でも、イスに座ったまま縛られてたから、逃げられねえし、耳も塞げねえんだよ!?!それだな――」

「もういい小橋。辛かったんだな……」

だって、もう目が泣いてるよ?号泣だよ?

「うう……」

「泣け泣け、小橋」

「ぜが……」

ギリギリの台詞だなあ、おい。てか、『わ』を忘れてるぞ、『わ』を!

ていうか、汚っ!おま、鼻水だらだらやんか!てか、人の服でそれを拭くな!きた、ちよ、きたねえよ!!突き放すぞ、このヤロー――!!

「痛かったよお、心の傷、メツチャ痛かったあ」

「……」

「傷を抉られてな、叩き付けられてな、掘られてな、新しい傷を作られたんだよお」

つまり、弱みを握られた?

「俺は、……俺は、もう生きていけない」

ちよ、待て!その台詞お前が吐くと本物になりそうだからやめろ!てか、積極的にやめろ!!

「……短い間だったけど、楽しかったぜ、瀬川」

え?何々?遺言ですか、それは。

おい、ちよとお、どこ行くの?ちよ、お前、どこ行くの!?そっちはベランダだよ?テラスだよ!?ちよ、……待てよ!!

「待てえええいっ!!」

まさにその時、柵を乗り越えようとしていた小橋を捕まえる!ちよ、待てっばあ!

「殺せ殺せ！この世界は俺が嫌いなんだろ！そうなんだろ！分かってんだよ、このヤロー！殺したいんならさっさと殺せえい！！」
自爆行為iiiiiiiiiii？まだ、大丈夫だよ、平気だから！な
んとかなるって！！

「お、お前なら、やり直しが聞くよ！だ、だからさ、死ぬのには
まだ早いって！」

「瀬川、お前って奴は優しいんだな……。でもな、俺は死なねえ
といけねえんだよ？そうなんだろう、神様よう！！」

ダ、ダメだああ！完全に、もう、完っ全にネガティブ入ってる……。

「はははあゝ、殺せ殺せ！さっさとサクッと殺せえい！！」

「おち、落ち着け小橋！お前にまだ見ぬ世界が待ってるよ！お前
を温かく見守ってくれる世界が待ってるよ！」

「それ、あの世だろ？」

くっらああああああああああい！！ちよ、どうした
んだよ！？暗すぎにも程があるだろ！？

「あの世だったらさあ、楽しく人生enjoyできる気がするん
だあ」

人生enjoyする前に、人生終わってるから！！もうピリオド
打たれてるから！！てか、なんであえて英語！？

「さあ、逝こうか……」

『いく』の字違うよ！簡単の方の『行く』にしよう！？そして部
屋に行こう！！

「と、ともかく、そこまで落ち込むなって。大丈夫だよ、人生ど
うでもなる！」

「ならねえよ。だって、影薄いから」

み、自ら言ったあああああ！？ちよ、あんなに嫌ってたのに、

『影薄』という言葉を、あんなに嫌ってたのに、どうしたんだよ！！

「どうせ誰にも気付いてもらえりゃしないさ。俺一人いなくなっ
たって、この世界は変わらない。だって、俺、ただの脇役だから」

そ、そんな寂しい事言うキャラだった！？てか、ただだけこの世界を批判するの！？てか、自分を批判！？

「さあ、今がチャンスだぞ、死神ども！ 殺したきや殺せ！ HAH

か、完璧なまでに壊れてる……。てか、イカれてる？

「よお、小橋に瀬川。そんな所からひもなしバンジーやると死ぬぞ?」

だ、誰だ！？

「……何？俺、なんかタイミング悪かった？」

……すごく悪いよ、狩燐坊ちやま……。○

「……あり、あれだ。風呂誘いに来ただけだからさ。あの、あれだ、うん。何も見なかった事にするよ」

いや、見た事にして！お前の記憶にこいつを残してあげて……！！

「狩憐か、じゃあな。俺、お前の事、忘れねえよ？」

「いや、忘れてくれ。うん」

空気読め ええええええつ!! 空気を読んでくれ ええええええええええええつ!!

「そっか」

何その寂しげな笑み! ? ちよ、死ぬなよ! 死のうとするなよ!!

「そだ、瀬川。温泉行こうぜ。貸切にしてあるから」

「何!？」

温泉だど!?!この上なく和の空氣が漂っているではないか!!!

「よし、行こう！」

「……切り替え早くね？ さ、小橋も行くぞ？」

「え？」

「えじゃねえよ。とつと行くぞ、影薄」

「……え？」

「温泉温泉」
♪

……あれ？ なにか忘れてるような……ま、いいか！ 忘れるような事だし、どうでもいい事だったんだろう！

＊

「てか、なんで貸切？」

「ん？息子の特権？」

「いや、俺に聞くな」

「お前なら答えられるぞ、影薄」

「そうだ、頑張れ」

「いや、無理でしょ!？」

「てことで、もう夕方です。え？何時間入ってんだよ？まだ30分だ、このヤロー。」

「それにしても、温泉いいわあ」

「どこのオバハン？」

「オバンじゃない」

「H A H A H A」

「……」

度々ムカつくなあ、狩燐め……。

「てかき、何で貸切？」

「それもう、俺が聞いたよ」

「忘れるなよ、影薄」

「薄くねえ！地味なだけだ!!」

……自分で地味って言っちゃう小橋ってどうよ？……どうでもいい。それが正解。

「はあ、和って最っ高」

「お前、典型的な純日本人だよなあ」

「何でそこまで和食好きなん？」

「ん？美味いから」

「……純粹だあ」

「遅いっ!」

「かわされた!?!」

「敵は一人ではない事を忘れたのか、勇者コバッシー!」

「……なつかしい……」

「何!?!」

狩燐がどこからか新しい桶を持ってきて、こぼ……勇者コバッシーに投げつける。

「卑怯だぞ、魔王カーリン!」

ダ、ダサイ! メッサダサイ!! カーリンって、コバッシー並に適當だな……。

「H A H A H A。こっちには、勇者セガワーズもいるのだ。お前に勝ち目などないわ!」

「寝返ったか、セガワーズ!!」

「俺!?!」

俺もその幼稚な遊びの中に加わってたか!? まあ、始めたのは俺だよ? 俺だけどさ!!

「H A H A H A! お前みたいな影薄とは、誰が仲間になるか!」

「よくも言ったな、セガワーズ!」

「勇者コバッシー。所詮、お前はその程度なのだよ」

「……ヤベ、結構楽しいかも。」

「H A H A H A」

か……魔王カーリンと俺がハモる。

「打倒魔王! 打倒セガワーズ!」

「主役に勝てると思うなよ、影薄が!」

「作者の気分に流されるがいい、脇役が!」

「俺は、……負けない!!」

……これだけでも、なんか一作できそうじゃね?

「いざ、」

「尋常に、」

「勝負!!」

一人一個、桶を持っている。誰が最初に動くかで、この勝負は、決まる。てか、なんでこんな事で戦ってんだろ？ま、いっか。楽しけりゃ♪

「……」

「……」

「……」

この状況からして、一人の小橋のほうが不利だ。だからといって、魔王カーリンと一斉攻撃しても、避けられてしまえば終わりだ。桶全てをあいつに独占されてしまう危険がある。ここは、小橋が動くのを待っていたほうがいいのか？

「……」

「……」

魔王カーリンと、目配せする。

『お前が投げるか？』

『命中させる自信はある。だが、もし避けられたら、ここで終わるんだ』

『いや、誰かが犠牲になれば、その隙にコバツシーを殺れる』

『じゃあ、頼んだぜ、セガワーズ』

『おう、魔王カーリン』

……てか、何で狩燐は魔王なんだ？って、今更か。ははは……。

「勇者コバツシー、覚悟！」

か……魔王カーリンが、小橋に向かって、桶を剛速球で投げる。

「ふふ、遅いのだよ。俺が影薄だと知っての攻撃か？」

「何い!？」

ふ、風呂にこぼ……コバツシーがない!？

「影薄影薄と好きだけ言いおって!俺の逆鱗に触れた事、後悔させてやる!!」

てか、お前はどこ!？どこから話してるの!？

「とうっ!」

仮面○イダー的に、近くに飾りとしてあった大きな岩の上から、

コバツシーは飛び降りた。で、こけた。うん、見事にこけた。

「だっ!？」

「……」

「……」

「いっだああああ!!」

あゝ、頭打ってたもんね。そりゃ痛いねえ……って、そんなんじゃないくて!!

「お前、せっかく俺らを倒すチャンスだったのに、なんて事してんの!？」

「てか、ここ浴場なんだから、あんな高い所からジャンプすれば、すべってこけるっに決まってるだろ!？」

ごもつともだな。

……てか、受験生これ読んでたら、どうすんだよ。不吉な言葉が、もう既に二つも出てるぞ。

「だってさ、カッコよく決めようかと……」

「それがいけねえんだよ!」

「普通にやれ、普通に!」

「普通にやったって、俺はどうせ影薄じゃないか!」

「あの上にいても、十分影薄だったぞ!」

「どこにいても何をしてても影薄なんだから、普通にしろよな!」

「……」

「……」

「……」

うゝん、急に黙る小橋って、ヤバい匂いプンプンするよな?

「……じゃねえ」

「な、何か？」

「……逃げるか、瀬川」

「……もう、遅いぜ」

「!?!」

こ、小橋の目に、炎が燈ってる!?

「そこになおれ! 貴様らの腐った根性、この俺、勇者コバツシー様が叩きなおしてくれるわ!」

「ヤバイ……」

「逃げるぞ、瀬川!!」

「待て!……逃がすかあああああああああ!」

そして、その日は仁義なきおいかけっこをして終わった。うん、全然休めなかったけど、何か?

71、一休みしすぎの、キャラ特集!？ P r a t 3 (前書き)

散々間をあけといて、キャラ特集ですみません……。

71、一休みしすぎの、キャラ特集！？ P r a t 3

さあ、そろそろ飽きてきた頃ですよね？え？とつくのとうに飽きてる？……なんだか、悲しいですね。

って、そんな事はどうでもいいんですよ、どうしても。キャラあんまり出てないですけど、キャラ特集です！え？そんなのキャラ特集じゃない？じゃあ、キャラ特集だと思って読んでください！きつとキャラ特集になります！！え？意味分かんない？それもそうですね。なはは。

そんな事より！更新更新っと！ともかく、数少ないキャラ紹介するので、よろしくお願いしまあす！

No. 23 笑 咲乃 （わらい えみの）

身長 167cm 体重 キャハ☆ 秘密♪ 血液型 B型

誕生日 6月14日 年齢 15歳

セミロングの黒髪に、黒目。きつめな目じりを気にしてか、常に笑みを絶やさない。

基本、ずっと笑ってる。SでもなければMでもない。だからといって、天然でもなければ、真面目ちゃんでもない。まあ、しいて言うなら、遊び人（？）。ともかく、どこでもいつでも関係なしに、笑い続ける。面接だろうが、試験だろうが、全く関係ない。ちよつと五月蠅いけれど、いざとなれば、頼りになる。……かもしれない。

【本人から一言】

キャハ☆ これからもよろしゅーに！

No. 24 心配性の人 じゃなくて、三賀沢 早菜香 (みかざわ さなか)

身長 145cm 体重 プライバシーの侵害です！ 血液型 A型

誕生日 4月11日 年齢 13歳

ショートヘアーで、ちょっと茶髪。染めたように見られがちだが、本当に地毛。くるくる癖のあるその髪に、本人はかなり苦労している。まん丸な目は、ダークブラウン。

SなのかMなのか、判断する前になくなってしまったため、判断不可能。ともかく心配性で、一度最悪な状況を想像すると、しばし怯えて、その場を動かない。どんな接着剤よりも強く、その場にへばりつく。心配性なのは親譲りで、両親ともに病的なほど心配性。親馬鹿じゃなく、正真正銘、心配している。

【本人から一言】

携帯とかやりながら歩いちゃダメですよ！

No. 25 村勢 涼子 (むらせ りょうこ)

身長 173cm 体重 企業秘密♪ 血液型 O型

誕生日 3月17日 年齢 国家機密♪ (!?)

長い髪を、お団子にしている。綺麗な黒髪が自慢で、パツチリした目も特徴的。色白で、かなりの美人さん。

狩燐と同じく、自覚していないS。さりげなく毒のある言葉はどこで拾ってきたのか、たまに国家を揺るがすような秘密も持っている。それは、両親が裏家業の人だからとか、何とか……。狩燐を、赤ん坊の頃からよく面倒を見ているため、狩燐家には相当お世話に

なっているよう。いい縁談の話もきているのに、結婚などしない理由は、誰にも分からない。

【本人から一言】

坊ちゃんの事、あ、ついでに瀬川様達の事も、よろしく願います。

No. 26 狩燐 喜一郎 (かりん きいちろう)
身長 190cm 体重 70kg 血液型 B型
誕生日 5月21日 年齢 45歳

綺麗な角刈りに、厳しい目つきをしている。いわゆる、ダンディなおっさ……親父さん。ていうか、ちよい悪親父。

底なしのS。いや、究極のSとも言おうか。主人公よりも強く、狩燐よりも弱い……。何故だかはお察しのとおり、息子LOVEだから。妻よりもこよなく息子を愛する、40代。だが、自称『永遠の二十歳』。この国で、いや(多分)、世界で、一番の権力者。裏世界にも名をはせているので、誰も逆らえない。逆らったものに待つのは……。

【本人から一言】

聡佑に触れるな!!

てことで、今回はこれだけでえす。少ねえ。少ねえよ、おい。どうした、私。どうなったんだ、私!

「てかさ、ひとついいか？」

何だ、お前の出番は今日はないはずだぞ、主人公。

「別にいいじゃん。どうせ、今回は短いんだし」

……それを言ってくれるな。

「ま、気にするな。で、俺が聞きたいのは、何で作者の紹介はねえの？」

なんで？

「だってさ、たまにだけどお前、出てくんじゃん、本編。それなのに、お前だけ正体不明の地球外生物的な感じだぞ？」

地球外生物って……つまり、エイリアン？

「だな」

だから、私の紹介もしろと？

「一応」

めんどくさくね？

「たまにはちゃんとやろうぜ」

たまにじゃない！いつも頑張ってるよ、私！

「あっそ。それよりさ、どうすんの？」

じゃあ、サクッと。

「サクッと？」

サクッと、紹介しますかな。

No. 0 下弦 鴉 (かげん からす)

身長 言いたくない 体重 言いたくない ツス 血液型 A型

誕生日 ○月□×日 年齢 15歳

「A!？」

そこ！何故に驚く!？

「てか、これだけ？」

だって、サクッとだからね、サクッと。

「ホントにサクッとだけだな……」

気にしない、気にしない♪

「つーか、○月□×日ってなんだよ」
企業秘密的な？

「聞くな」

気にするな、また外野から『ぺげ』とか『へげ』とか『ハゲ川』とか『ハゲ』とか言われるぞ？

「しばきたおす！」

その前にやられちまえ！！

「お前はどっちの味方なんだよ!？」
正義の。

「……」

何故に黙るの？

「気にするな、うん……」

……なんか、気になるなあ……。ま、いいや♪

ともかくこれで、キャラ特集は終わりです。少ないけれど、終わりです。でも、またそのうちやると思いますよ？覚えていれば（笑）ではでは、また出会う日までえ〜。

「その前に、一つ聞いていいか？」

んだよ。終わらせようとしたのに……。

「お前、人様の前に出るとき、どんな姿？」
鴉。

「名前のおり、そのままだな……」

H A H H A .

では、今度こそ、さようならあ！！

「さいなら〜」

71、一休みしすぎの、キャラ特集!? **P r a t 3 (後書き)**

あ、そうそう。私もすっかり忘れていたのですが、もしまだリバキ
ヤラの希望がありましたら、よろしくお願いします。メッセージか
らでもいいので、ヨロシクです。

72、燃える先生!?(前書き)

意外と高校とは忙しいもので、PCを開く暇がありませんでした。
まあ、眠かっただけです、すみません。
サボり症ですみません……。

72、燃える先生!?

………あ。………どうも、こんちわ。もうそろそろ帰りたい瀬川です。あん?どこにいるって?学校だよ、もちろん。夏休みなんてとくに終わって、もう始業式だってとうの昔さ。で、今は、

『文化祭の後に待つのは、汗と涙の結晶の体育大会だ!』

なあんて、らくが……殴り書きを先生がしてる。先生って誰?担任だよ。あたり前じゃん。え?名前?多野先生^{たの}。全くやる気のない奴だけど、今は燃えに燃え盛ってます。

「文化祭など、前菜に過ぎない。メインディッシュは体育大会なのだ!」

「……はあ」

「そこ!ため息つくな!!」

「……あい」

「返事は『はい』だ!」

「はいはい」

「一回でよろしい!!」

「……はあ」

「だから、ため息つくなああああ!!」

……じゃあ、そんなにイキイキした目をするな、似合わないから。もつとさ、やる気のない感じにして。

「ともかく、文化祭の準備なんて、とっとと終わらせて、いち早く体育大会の練習をするぞ!」

……まだ、科目も決まってないのに?文化祭の担当すら決まってるのに?

「では後は、学級委員。頼んだわ」

……何か、一気にやる気なくしてるし。どんだけ文化祭が嫌いな?文化祭に何か嫌な思い出でもあるのかよ、先生……。

「えっと、じゃあ、まず、その」

おゝい、学級委員どうした？何でそんなに困ってんの？何でそんなに焦ってんの？あの馬鹿な先生の痛い視線なんて無視しろお。

「……ぱ、パネル絵係と、学級旗係、それと、学級の出し物係を決めましょう」

「あゝい」

やる気ねえなあみんな……。ま、俺もその一人だけと……。

「じゃ、まず――」

「私と瀬川君は、出し物がいいです」

おゝい、誰だ、勝手な事抜かしとんのは。

「じゃ、俺も」

お、名も無き影薄。最近で番多くてよかったな。

「じゃあ、斎賀さんと瀬川君と、あと……なんだっけ？」

学級委員！？ちょ、クラスの人の名前覚えてねえの！？小声で『なんだけ』って言うてるの、聞えてるからね！！

「おはし……だっけ？」

「違うよ、まばしだよ」

「なんかちげくね？」

「じゃあ、おおはし？」

「なんかちげくね？」

「じゃ、何？」

「……」

「……」

おゝい、両方とも忘れたの？男女ともに忘れたの？可哀相だよ？いくらなんでも。影薄くっても、最近のはりきって頑張ってるんだから、少しは報われないと、哀れだ……。

「小橋だよ、小橋！」

「あ、そうだ！」

「そうそう、小橋だよな、うんうん」

……ドンマイ、影薄ラー。

「薄ラーじゃない。小橋だ」

「読心術すんな、影薄」

「言葉に出てたよ」

「あれ？そうだったか？」

「影薄ラーと、はつきり言ってた」

「そりゃドンマイ」

「てか、なんで出し物にされたか、お前は疑問に思わねえの？」

「あ」

気付いてたけれど、時既に遅し。学級出し物の字に、大きく丸が
されてる。

「……遅かったか」

「何たくらんでるんだろうな、斎賀」

「知らん」

「瀬川を入れたってことは……」

「何だ、その笑いは」

「え？笑ってねえけど？」

「歌舞伎役者みたいな名前しやがって、生意気な事言ってるじゃ
ねえよ」

「それとこれとは関係ねえだろ！？」

「……」

「無視するなああああああああ！！」

「小橋五月蠅い！静かにしてろ！！」

先生に怒られてやんの。ざまあねえな。

……てか、小橋の名前、覚えてますか？下の名前。……コバッシ
ーじゃないですかね。小橋コバッシーで、明らかに変でしょ？ち
なみに作者は思い出すのに、半日を要しました。（事実）

で、決まった結果。

つーか、その前に、パネル絵と学級旗について、軽く説明してや
ろう。感謝しな。

まず、パネル絵から。

パネル絵とは、ベニヤ板二枚を重ねて、大きな画用紙に絵を描いたもの。渋谷にある、壁の絵とか、そんな感じのを想像してくれ。ん？無理だど？頑張れ、もう少しできつと答えは導き出せる！

で、その年その年に決まったテーマがあって、それに沿ったパネル絵を作る。今年は、『絆』。それに沿っていれば、どんな絵でもいい。材料は何でも使っていいから、安く綺麗に出来れば出来るほどいい。見た目と工夫が、審査される。

で、学級旗。

字の如く、学級の旗。どんなものでも構わない。キャラクターをパクろうが、何をしようが、問題ない。学級旗も審査されるので、適当に作ってはいけない。ちなみにこれは、体育大会でも使う。

……らしい。あの先生は、適当な事しか言わんので、これぐらいしか分からん。文句がある方、ぜひ作者に訴えてくれたまえ。H A H A H A。

んで、余談だけど、それらで優秀賞を取ると、賞状とカップがもらえる。そして、『文化祭』『体育大会』『合唱コンクール』でそれら全ての頂点に立つ事を、『三冠王』と言う。その『三冠王』の座を手に入れると、そのクラスには焼肉食べ放題権が授与される。だから、クラスの団結力と、絆が深まれば深まるほどに、『三冠王』への道は開けるのだ。

軽く説明も終わったところで、今度こそ、出し物メンバー紹介。

俺、斎賀、小橋、神郷、学級委員（女）、その他大勢。ま、主要の奴らだけ紹介しとけばいいよな。ん？名前の表記が一人おかしい？あれえ、ホントだあ。えっと、学級委員は、阪下。て、事で、ヨロシク。

「じゃあ、これで、終わりです」

「ご苦勞ご苦勞！では、今日は解散！明日には完成できるよう、

努力したまえ!!」

いや、それは無理だからね。どう考えても、無理だからね、今だけ熱血先生。

72、燃える先生！？（後書き）

文化祭編になりそうですが、まだありません。
ん？なぜかって？

ネタが出来てないからあ（泣笑）

73、Sの逆鱗に触れる事無かれ!?(前書き)

新キャラ登場ですが、名前が出ないんで、ここです。

土田 真弦 (つちだ まつる)。よろしくです。

73、Sの逆鱗に触れる事無かれ!?

「ダーーーーーー」

「うるせい!!」

帰り道、馬鹿に襲われました。ん?馬鹿って誰かって?もちろん、あの馬鹿です。え?分かんない?理解しろ、このヤロー。

「なんで!なんでよ!!」

「何がだよ」

「何でこんなにも長い間、ヒロインである私が本編に出ないのよ!!」

「そんなの知らねえよ」

「なんで!」

「知らねえって」

「どうしてなののおおお!!」
道路に歩き、嘆きに嘆く。うん、五月蠅い。近所に迷惑だね、うん。

「みっさーーーーーきっ!!」

「がはっ!!」

と、飛び蹴り!?!初登場にして、飛び蹴りですか!?!ちよ、森野かなり飛んでったぞ……。

「もう、美咲はおっちよちよいなんだからあ」

何、その自分は悪くないですよ的な笑みは!?!

「今日是一緒に帰ろうって言ったじゃない」

「……それは昨日よ」

「あれ?そうだった?」

「今日は、ダーリンと帰るの」

「ダージン?」

「『ジ』が余計よ、『ジ』が」

「ダーリンって……うそ!?!許婚的な人いた的な!?!」

……すみません、意味分らないんですけど。てか、
「俺はダーリンじゃねえよ!!」

「ダーリンよ! 私の愛すべき、ダージリンよ!!」

「お前も一文字多いから!」

「愛が多すぎるの! 仕方ないでしょ!!」

「キモいんだよ! 死ね! マジで死ね!!」

「嫌よ!」

何故にハモリ!? ハモる必要がどこにあった!? てか、君は誰ですか!?

「ダーリンがいる限り、死ぬのはいや!!」

「みさつきーが生きてる限り、死ぬなんて嫌よ!!」

誰? みさつきー誰? てか、ホントに君誰?

「……あ、間違いだったみたいです、じゃ」

ともかく、関係ない顔して帰ろうか――

「なっ!?!」

何!?! 不覚にも声に出してしまったぞ! チクショウ、弁当の日に、弁当を持ってくるの忘れた時並に悔しい……。ああ、隣で美味そうに弁当を食っていた、小橋の憎たらしい顔がよみがえる……。

で、そんな事より今の状況。女の子に、てか、本当に女の子なのかな?

「てめえ、私のみさつきーに何した?」

……胸倉つかまれて、宙ぶらりんです……。く、苦しい……。く、空気を、俺に空気を……。

「やめてよ、やめて! 私のために、争わないで!!」

お前のためじゃねえよ! 何勘違いしてんの!? てか、これのどこら辺が争い!? 一方的な、暴力じゃん! 非暴力・不服従だぞ、このやろう!!……って、非暴力じゃねえな……。

助けてください! 助けもとめんの嫌だけど、今だけ助けてくれ、ラーメン魔。鎌持ってる危険な人でも、疫病神憑いてる人でもいいから助けて!! く、空気が、俺の、俺の大切な空気があああああ

ああああ……。

「ちょ、ホントにやめないと、ダージリンが死んじゃう!」

一文字イイイイイイイイイイ!! 多いよ、多いってば!

! あゝ、ツッコませてくれ! この馬鹿に、一度でいいから、ツッコませてくれ! お願い、150円あげるから!!

「みさつきーが言うなら……」

てか、あだ名適當すぎねか? 勇者コバツシー並に適當じゃね? てか、イントネーション一緒じゃね!?

「……はあ……」

空気を有難う。神様仏様、ラーメン魔様死神様疫病神様(?) ……

てか、女子に見えないこの女子はなんですか? 森野の護衛ですか? SPですか? なんなんですか、あの馬鹿力! てか、俺って……。

「大丈夫?」

どのへんが大丈夫そう? どこをどう見たら大丈夫に見える? 教えてくれ、森野。

「……誰だ、アレは」

「アレって?」

「あの人だよ、馬鹿力」

「ああ、友達」

うん、それは分かってるよ。うん。てかさ、誰って聞かれてんだよ? 普通友達かどうかなんて聞きますか? てか、名前聞いているのに決まってるじゃないかああああああ!!

「名前だよ、名前!」

「ああ、名前ね、名前」

今更理解ですか!? 遅くないっすか!? 遅くないっすか!?!?

「ええとねえ……まーちゃん」

そっか、まーちゃんね、まーちゃん……って、

「あだ名じゃねえよ! 名前って言ってんだろぅが!」

「ああ、久しぶりな罵声……ふふふ」

「殺していいですか？」

「無駄よ、私は既に死んでいるの」

「愛に溺れてとか言うなよ」

「……」

「そう言おうとしたんかい!!」

「ちよっと! みさっきーの頭は単純なの! そんなにシンバルみたいにバンバン叩いてたら、大切な何かを失っちゃうでしょ!!」

大丈夫! もう常識というものが抜けてるから!! とっくのとうに失ってるから、これ以上失うものではありません!!

「てか、名前を教えろよ!」

「あんたみたいなチビに、なのる名前なんて何もないわ!!」

……ちび?

「ちよ、まーちゃん……」

「何よ! こんなチビに、何が出来るの!? チビなのよ、チビ!!」

……チビ?

「そ、それ以上言っちゃ——」

「チビなものはチビよ! チビにチビって何が悪いの!?」

……。

「に、逃げるよ、まーちゃん……」

「なんでよ!」

「いいから、は、早く逃げるよ!!」

「何こんなチビに怯えてるの?」

「!! そ、それ以上チビって言ったらダメなのっ」

「?? 何か、おかしいわよ、みさっきー」

「と、ともかく、もう言っちゃだめ!!」

「気にしないわ。私、正直に言わないと気がすまないの」

「だ、だけどね、この人には……」

「だから、チビなんだから仕方ないでしょ?」

「!!」

……ふふふ、ははは!!

……え、えっと、その、こ、こんにちは、下弦でございます、読者様。あ、危ない状況、ていうか、瀬川の禁句ゾーンに思いつきり土足で踏み込んだんで、理性とか、常識など、全てなくなっています。え？誰がって？そりゃあもちろん、瀬川ですとも。危ないですけど、ちよっと、状況を説明しましょう。

マジギレした瀬川は、黒いオーラを身にまとい、不敵な笑みを浮かべてます。そして、悪魔のような笑い声になってます。いつもは『H A H A H A』じゃないですか？今は

「ふはははははははははは！死ね死ねえ！！」

……てな感じになってます。いわゆる、暴走中ですね。はい？何で、暴走したのかって？アレで理解できませんでしたか？彼のプライドが、あの禁句を許せなかったのです。そして、とうとうマジギレしたのです。はい。

「キャアアアアアアアアアア！！」

「や、やめ——！！！」

で、容赦ないですね。うん、追いかけてっこしてるんですよ、今。捕まったら最後、【ピー】……あれ？言葉に出てないな。では、もう一度、【ピー】……。なんか、雑音がかぶりますね。ともかく【ピー】で【ドカーン！】で【ドゴォン！！】になるんです。……一言に言う、虐殺ですね。え？本当に殺すのかって？もちろん——。

「いやああああああああああああ！！！！」

……。何も言っていないのに、逆に止めてたのに、哀れなり、森野……。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいもう許してください
みませんでしたごめんなさい!!」

「……去ねや」

……きよ、今日は、これくらいにしときましょうね?そ、そうで
すよね、読者様。え?続けちゃおう!?ちょ、ダメですって!!そ
こより先に、入っちゃいけません!!ちょ、……お止まりくださあ
あああああああいい!!

73、Sの逆鱗に触れる事無かれ!?(後書き)

……デッド・オア・アライブ。
まさに、生死の狭間にいます。あの2人は……。

74、セールスマン!? (前書き)

あゝ、久しぶりに書いたから、へんすぎるう。そして、何よりキモい……。

文変だし、まとまりないし、Sっ気がなくなってるし、眠いし、……って、最後のは今の気持ちだ。

ま、気にせず、本編読んでくださあい。

ふぁぁぁ……ZZZ…… (眠

74、セールスマン!?

珍しく、本当に平和な休日。そんなある日に、俺の休息の時間は壊されました。

ピンポン!!

……。今日も、母さんは『全品半額』という言葉に負け、スーパーに行ってる。そして親父は、ちゃんと仕事に行ってる。てか、行っ
てなかったらヤバくね?

ピンッポン!!

……。うるさい。今日は平和な一日で終わるんだ、今日こそは平和な一日で終わらせんだ。そう思ってんだから、邪魔するな、チャイム!

エクス・カリズミー!?

何か違いますよ!?! てか、ここ日本ですからね! 日本なのに、何故にわざわざ英語にするの!?! てか、カリズミーって何!?!

エクス・小泉!?!?

小泉!?! 今、はっきり言わなかった!?! てか、言ったよね! はつきり『小泉』って言ったよね!?! ウチ、瀬川なんですけど!?! てか、エクスの意味がねえ!?!

ピッツツンッポーーン!!

何故にちよつとりズミカル!? てか、どうやってチャイム押したらそうなるの!?

すみませえん。笑うセールスマンなんですけど、開けてくださあい。

……変人だな、間違いなく。とりあえず、軽く無視しておこう。

出ないと、爆破しますよお!!

爆破!? この住宅街で爆発!? ちょ、それはヤバくないですか!? てか、なんでセールスマンが爆弾持ってるの!? 何でそんなに危ないもの持ってるの!?

宣伝しちやいますよお。

それが商品かい!!

ファイブ、シックス、セブン――

増えてるよ! 減るべきなのに、増えてるよ!!

はち、きゅう、じゅう――

英語だったのが日本語に帰ってきた!? てか、増えてるってば!!

スリー、に、ワン――

間違ってるよ! 何か違うよ! てか、何故に日本とアメリカをあわ

せちゃってんの!?

……ゼロって、英語でなんていうんですか!?

「聞くなよ! てか、知らないんなら、日本語でいいじゃんか!」

「おお、ずばりその通りですね」

「素晴らしく、その通りだね」

……あ、窓開けちゃった……。

「いらっしやったんなら、早くドアをオープニングしちやてくだ
さい」

意味分からんし。

「小泉さん、いい商品が入ったんですよ」

小泉じゃねえし。

で、今に至ります。え? 何がなんだかサッパリ? そりゃそうだろう、
今から本題だからな、H A H A ……はあ。

「ところでマイコォー! ?」

「なんだい、キャサリン! ?」

「今日は何を売りこんじゃうのかな、H a h a ?」

「おお、いきなりそうでるか! ? こりゃ一本取られたよ、H a
h a !」

「そんなことより、それは何? マイコォー! ?」

「おお、これの事かい! ?」

「そう! そのすっぱらしく——」

……何で、アメリカの通販みたいに話してんだろね、この人達。
てか、マイコォーって……。

「さあ、これを見てごらん!」

「ウツワゝオ! ! きったない窓ガラスだ! !」

どこから盗って来た! ? おまえら、ここに来たときそんなん持っ

てなかっただろ!? てか、何故に窓ガラス!?

「そう、そして、この魔法の液体を、これにかければ――」

「キャー!! すっごい!! あの高い汚れが見る見る落ちてる! すごいわ、マイコォー!!」

「H a h a ?」

「H a h a ! !」

……無性に殴りたいのは何故だ?

「そして、ほおら! ごらん!!」

「うっそお! あのきつたないよこれはどこ、マイコォー! ?」

「この魔法の液体にかければ、あんな汚れは、い・ち・こ・ろ・さ♪」

「ウツワアオ!! すっごい、すごいわ、マイコォー!!」

「そうかい、キャサリン、H a h a ! ?」

「H a h a ! !」

……すみません、殴る許可をください。

「H a h a、どうだい、今ならこの魔法の液体と、魔法の雑巾を付けて、ニキュッパだよ?」

「わぁお! 安すぎないの、マイコォー! ?」

「H a h a、わが社の経済力、なめないで欲しいね」

「オー、そうりーそーり」

……なんか、ちがくねか? てか、あんたら、何しに来たの? てか、窓ガラスどこやったの! ?

「どうですか! ?」

……。

「今のは、いい出来だったよね、キャサリン?」

「ええ、もちろんよ、マイコォー」

「そうだよ。でも、この少年にはお気に召さなかったようだよ、キャサリン」

「H a h a ? そんな事心配ないわ! 私はとってもよかったと思ってる」

「んああ、なら、安心だよ、キャサリン」

「H a h a、当然じゃない？」

「H a h a、こりゃまた一本取られたよ」
すみません、本当に殴り殺す許可を！

「夫、時間だ！」

字が違うぞ、コラ。

「間、変大！」

お前も違うし。てか、大変を裏返すな。

「じゃあ、少年Dよ、またな！H a h a！？」

「また会いましょう、少年D！H a h a！？」

……AとBとCはどこいった？てか、何故に少年D？つか、また来る気なんですか？

「G o o d－b y e！！」

見事にハモってるけどさ、荷物忘れてるよ？え、どこ行くんですか？ちょ、帰るんですよね？何で商品置いてくの？わざとですか？てか、無料配布なのに、ニキュッパって嘘ですか？てか、これ、ただの水じゃないですか！？てか、水だぞ、これ！！どこにでもある天然水だよ、これ！！

74、セールスマン!? (後書き)

ありがたいことに、アクセス数が7万を突破いたしました！
愛読者となってくださっている方、いつも楽しんで読んでいる方、
笑ってくれている方、本当に有難うございます。
心より、感謝申し上げます。

75、人生を賭けたじゃんけん!? (前書き)

明日学校かあ……。

遠いんだよねえ……はあ。

75、人生を賭けたじゃんけん!?

あゝ帰りてえ……、メツチャクチャ帰りてえ……。

「今日早くを決めたいんだけど——」

「……zzz」

「ちょ、ちょっと、瀬川君?聞ってるの?」

「聞ってる聞ってる」

「ものすごく棒読みだけど」

「聞ってる聞ってる」

「ホントに聞ってる?」

「聞ってる聞ってる」

「……とりあえず、——」

「……zzz」

「寝ないでよ!」

「寝てねえよ」

「ともかく、話を進めよう」

だよなあ、神郷。え?誰かって?同級生。

「で、今回やる事に決まった劇は『ロミオとジュリエット』に決まった訳ですが」

「フフ、私、小橋はお父様役が向いていると思うわ」

「俺もお」

「じゃ、決まりで」

「よかったな、小橋」

「え?ちょ、そんな簡単に決められたら、俺の出番が——」

「フフ、主人公とヒロインを決めなくちゃ」

「私、ヒロインとか苦手だから、パスします……」

「僕もあんま目立ちたくないな」

「フフ、じゃあ——」

「無視ですか!?俺の言葉は無視ですか!?」

「五月蠅いよ、小橋君」

「フフ、だまらっしゃい」

「いいじゃないか、決まった事だし」

「影薄」

「さりげなく何を言うか瀬川 ああああああああ！！」

「で、どうしようか」

「フフ、瀬川君は、ジュリエットでしょ」

「ああ、それいいね！」

「面白いかもしれないな」

「つまり、女装？」

「はあ！？！？！？」

何ですと！？何ですと！？！？何ですとおおおおおお
お！？！？！？！？

「じゃけっ——」

「ていするなああああ！！」

「フフ、なんで？」

「なんでもクソもありますか！？」

「フフ、いいじゃない。作者も笑ってることだし」

窓の外で笑っていたバ鴉に、黒板消しを投げて木から落としてや
った。はん、ざまあみろ。

「何で嫌なの？」

「面白くなりそうなのにさ」

「何でって普通に考えられないのですか！？ジュリエット女なん
だから、斎賀か阪下がやればいいだろ！？」

「フフ、それじゃつまらないじゃない」

「目立ちたくないって、言ったじゃないですか！」

「だからって、何で俺！？何故に俺！？」

「女装が似合いそうだから」

はあい、みんな綺麗にハモったねえ。ご褒美に、お菓子上げちゃ
う。って、

「そんな適当な理由で決めちゃっていいんですか、先生!!」

「え？ は？ え？ 晴れ？ え？ あ？ え？」

「言葉になってないよ、先生」

ナイスツツコミ、神郷。

「……ごっほん。いいんじゃないね？」

せんせええええええええええいつ!! 何考えてるの!? 何考
えちゃってるの!? てか、その場のノリで、答えるなああああ
ああ!!!

「じゃあ、きま」

「りじゃない！断じて認めん！」

「なんで？」

「俺が認めてねえのに、何故に決定される！？ 本人の意見を尊重しようとか思わないのか！？」

「そうだそうだ！」

「フフ、あんたは黙ってなさい」

「俺だって好きで、お父様なんてやるか！」

「フフ、黙らないとまた毒舌家様方をお呼びするわよ？」

「すみません！それだけはお許しを！！」

$$\vdots$$
$$\vdots$$

悪女だ。こんな身近に、悪女がいた。つて、それは元からか。つて、話がずれてる！

「ともかく、俺は女役なんて、嫌だからな」

「ええ、やってよ、瀬川君」

「ヤダね」

「やってみればいいじゃんか」

「ヤダっ
てば」

「じゃあ、ロミオでもやる？」

「まだそっちの方がましだ」

「つまないなあ……」

……何なんだよこの2人。どんだけ俺に女役やらせたいんだよ。てか、

「神郷でもいい」

「よくない！」

「瀬川君じゃないと、意味ないの！」

……強く反発しすぎじゃね？

「瀬川君がやってこそ、ジュリエットになるの！」

「お前がやらないと、世界は終わるんだ！」

なんかスケールが大きくなってるんですけど！？

「ともかく、」

「頑張ってくれよ！」

いや、頑張られて言われて、そうそう女装できる訳がないでしょね？？

「フフ、じゃあ、私とじゃんけんして、勝ったら他の役にしてあげるわ」

「マジですか！？」

「フフ、それでいい？」

「さんせーう」

一言多いよ、学級委員。

「OK ぼくじょー」

お前も多いから、神郷。

「……どうせ俺なんて……」

飛び降りようとするな！小橋！！

で、小橋を助けてから、とりあえず、じゃんけん。頑張れ、俺。まけるな、俺。負ければ一生の屈辱だぞ、俺！

俺の右手に、全てを賭ける！！

「フフ、準備はいい？」

「いつでも来い！」

負けねえ。俺は、負けられねえんだ！！

（お前なんて、負けちまえ！！）
また黒板消しを投げて、馬鹿を消したところで、真剣勝負の時間だ。

「じゃーん」

「けーん」

「ポイ！」

斎賀　グー。

俺　グー。

「ちっ、あいこか」

黒くない！？神郷、黒くない！？

「おいしい！」

お前もかよ、学級委員！

「……もう、どっちでもいいじゃん」

お前は違う意味で黒いぞ！大丈夫、正気を保て！頑張れ、小橋！！

「あーい」

「こーで」

「ショ！」

斎賀　グー。

俺　グー。

「また！？」

ハモった！？てか、どんだけ悔しがってんの、お前ら！！

「……もう、終止符打とうかな？」

お前は生きろ！頑張れって、応援してくれる人がいるだろう！？

「あーい」

「こーで」

「シヨ!!」

斎賀 チヨキ。

俺 パー。

「な、何!？」

「フフ、世界の女王に勝てると思って？」

まだそう思ってたの!？」

「やった! 瀬川が負けた!」

「これで女装が見れるわ!」

「そこ! 嬉しそうにするな!!」

てか、なんで教室中がほんわかムードになってんの!？てか、みんな作業しながら微笑んでるのは何故!？

「ああ、ゴメンな」

「ごめんなさいね」

「謝るんだったら、笑顔を隠してから言いなさい」

「笑ってなんかいいえよ」

「喜んでなんかないわよ」

……幸せそうな笑みがこぼれ落ちてるから。隠しきれてないから。

「……そうだ、地獄に逝こう」

ちよ、何!？『そうだ、京都へ行こう』的な感じで、おっそろしい事を言ってるの!？

「す、ストップ! ストップだ、小橋!!」

「止めてくれるな。俺の居場所、ここじゃない。あっちなんだ」

「不吉な事言うな! 大丈夫、お前の居場所はちゃんとあるだろ!」

「？」

「どうせ『影薄同盟』とかいうんだろ? もういいよ、疲れたんだよ」

「どうでもいいってのか!？あの人達は、どうでもいいってのか!？」

「だって、あの人達はガラスのハートじゃないだろ!？チタン並

に丈夫なハートしてるだろ！？でも、俺はダメなんだよ！ガラスなんだよ！傷ついたら、お終いなんだよ！！」

「何とかなるって！」

「もういいよ、砕け散ったから」

「不吉だって！大丈夫だって！！な！？」

「地獄に逝かせろいやああああああああ！！」

「落ち着けえええええええええい！！」

て、ティーチャー！？

ちよ、先生！？何、生徒に飛び蹴りかましてるんですか！？

「ふう、これで、大丈夫っと」

そして、何故に縛ってんの！？何でイスに縛り付けてるの！？

「これで、話が進むだろ？」

「有難うございます、先生」

「助かったよ、センセ」

「フフ、ありがとう」

「……」

悪魔だ。この数学教師、悪魔だ！人の皮を被った、死神だ！！

「じゃ、そういう事だから」

「はへ？」

「フフ、衣装、はりきって作るわね」

「応援してるぞ、瀬川」

「はいいい！！？」

そして、流れ上、てか、じゃんけんに負けたため、女装させられる羽目になった。

「……親父、来ないようにしないと」

まず、それを心配する俺って……何？

75、人生を賭けたじゃんけん!? (後書き)

私の望みであつた、主人公の女装化!

いつかやらせてやろうとたくらんでいた結果、ついに、ついに! この時がきました!!

くしゃみを4回連続ですと言う、快拳を成し遂げた今、何故かテンションアップ中です!

これからも地道に頑張っちゃいます!

ですが、更新の遅れは、ご勘弁ください……。

76、Sのとある帰り道!?(前書き)

あゝゝゝ、筋肉痛があああ、微妙に痛むよほっほゝゝい。↑精神崩壊中

76、Sのとある帰り道!?

「……はあぁ……」

なあ、俺の右手よ、何故負けたんだよ。負けてしまったんだよ、右手。何でああいうときだけ綺麗に負けんだよ、このバカやろう。

「ダーリ——」

「うっさい黙れ、カスが」

「カスじゃないわ! ゴミよ!!」

「結果カスじゃん」

「……冷たいのね」

「いつもだろ」

「フフ、そうかしら?」

「……」

元凶のくせして、何故にのうのうと一緒にいんだよ、この小娘。しかも、何故に携帯持ってたの? 学校あったよね、今日、学校あったよね?

「フフ、……ゴスロリかぁ……それもいいわね」

「誰とメール?」

「フフ、知りたい?」

「聞いておきたい!」

「フフ、死神様」

「……アイツか」

「え? 誰??」

「分かんのか、ボケなすび」

「なすびじゃない! 私、そんなに縁起がいいものじゃない!」

「フフ、馬鹿にされてるのよ」

「え!?! そうだったの!?!」

……いいなあ、能天気な奴は。何の悩みもなく生きられて、うらやましいよ。

「フフ、なんで悩んでるか、教えてあげようか？」

「うん！」

「フフ、それはね——」

「うぎゃあああああああああ！！」

「ちょ、どうしたの、ダーリン！？」

「フフ、珍しいわね、瀬川が奇声を上げるなんて」

「そうそう。と、いいですか、ダーリンの麗しき声のせいで、声が聞こえなかったわ」

「フフ、じゃあ——」

「言わんでいい！！言わんでいい！！」

「えゝ。どうしてえ？」

「いいだろ！俺の勝手だ！！」

「フフ、そのうち分かるって事よ」

……この女あま。いつか、いつかこの恨み、晴らしてくれようぞ……！！！！

「二人だけの秘密って事！？嫌よ！そんなの嫌！！仲間はずれなんて、悲しい！！」

「うるせえ、黙れ。そして、死ね」

「生きるわ！ダーリンが私を認めるまで、生き抜いてやる！！」

「じゃ、認めるから死ね」

「酷いわ！でも、何故だか心躍るの！！何故！？」

「知るか」

「それでいい。それでいいから、さあ、私の元へ……」

「行くか！！」

久しぶりに、顔面にストレートかましてみました。まあ、見事に吹っ飛んで、

「あいだっ！」

後ろを歩いていた、小橋に命中。うん、ドンマイだね。てか、神郷楽しそうに笑ってるし！助けてあげようとか思わないのかな、この人！

「うわ、馬鹿みてえ」

……意外と、腹黒いんだね、君は……。

「せゝがゝわゝゝゝ!!」

おお、俺が犯人だって、分かるんだな。

「なんだよ、お箸」

「お箸じゃねえ!小判だ!!」

「お前も違うぞ」

「気のせいだ!!」

「じゃ、さっきの台詞、もう一回リピーツ」

『お箸じゃねえ!こば——』

「ごめんなさああああああああい!!」

うん、土下座は素晴らしくいいよ。偉いぞ、小橋。よく日本の作法を覚えているではなにか。よかか、よかかあ。

「てか、剣道部サボっていいのかよ」

「お前こそ吹奏楽部サボっていいのかよ」

「サボりじゃない、行く必要性が見えないんだ」

「どんだけだよ」

「こんだけけど?」

「……もう、いいや」

「てか、お前はどうかんだよ」

「何が」

「剣道部の事だよ。なんか、新しい顧問来たみたいだったけど?」

「なぬ!?!」

「ちよ、近いんだけど……」

「ダーリンに近付く、不届きものはどこのドイツ!?!」

「ヨーロッパのドイツ」

「違うわ!……えっと、どこだっけ」

「ドイツは一つしかんえよ!てか、古いからな、それ!古いネタ

だからな!!」

「埃が被ってなけりや」

「百人乗っても、ダイジョーブ」

……なんか、話がかみ合っていないよ、この人達……。

「違う! 『百人乗っても』は余計だ!」

「嫌よ! そうしないと、私の数少ない台詞がもっと減っちゃうじゃない!」

「気にするな! お前は一応、ヒロインなんだろう!? ヒロイン!」

「ちよっと! 一応って何よ!」

「だってそうじゃねえか!」

「何よ!」

「なんだよ!!」

「むきーーーー!!」

「むきーーーー!!」

……こんな馬鹿達は、ほっとくか。うん、それが一番だよな、そうだよな、読者様?

「で、その人むっちゃ強いらしくて、……なんだったかな?……

雨庭流?」

うん、おいしいね。てか、おいしいのかよくわからんけど、おいしいね。

正解は……。

(後半へえ続く)

作者! ? これ、後半なんて、ねえだろ! ?

(は! そうだった!! あ、ああ、痕が気へ続く!!)

……慌てすぎて、字、違うし……。

えっと、多分、あとがきへ続くって言いたかったんだと思うぜ。
え? 何で分かるかって? 長年の勘さ。まだ、13年しか生きてねえけど……。

「ともかく、めっさ強いみたいだから、今度行ってみたらどうだ?」

「二度と行くか、あんなところ」

「何だよ」

「俺をミンチにしようなんざ、百億万光年早いんじゃ!!」
「!?」

「悔しかったらここまで来いや!! 雨——」

（ストロープッ!!）

「うがっ」

「おい作者。普通、人の頭を蹴るか？」

（いいじゃん、お前の髪を気にして、隣の奴にしてやったんだから）

「気にせんでいい!」

（じゃ、今度から、ハサミ持ってくるわ）

「持ってくんな! てか、何のようだ」

（友達は気にしないの?）

「そのうち目覚めるだろ」

（Sに?）

「それは狩燐だ」

（ああ、そっか）

「てか、話の内容ずれてね？」

（そーかもね。たはは）

「たはは……じゃねええええええええ!!」

（うぎゃばっ!!）

もう、作者だろうが、他作品のキャラだろうが、容赦しねえ! 俺の安息の時間を邪魔する奴は、月に代わってお置きしてくれるわ!!
な——っはっはっはっはっはあ——!!

（ちよ、鳥はなあ、翼が大切なんだぞ! それをいとも簡単に折ろうとするな!!）

「じゃあお前は、いとも簡単に他作品をパクるな」

（すみませんでしたなんなりといってくださいまし）

「だからさ、何しに来たんだよ」

（えっと、名前が出るのを避けようと……）

「何で」

（匿名希望？）

「聞くな」

（じゃ）

「って、勝手に帰るな！！」

「つってて……。なんなんだよ、さっきの鴉」

「バ鴉だ」

「は？」

「気にすんな。気にしたら負けだと思え」

「……あ、はい……」

「お前なんか、消えちまえ！」

「影薄こそ、消えなさい！！」

……てか、まだ喧嘩してんだ、あの2人……。

つか、何であの二人はあんなに仲悪いの？

（それは、永遠の謎である）

作者！？最後のって、作者だよね！？そうだよな、作者！！

76、Sのとある帰り道!?(後書き)

『オレと死神?!』 作者・飛焰様

ちよつとだけ、拝借しました。すみません……。。

77、俺は人形じゃない！？（前書き）

あの、長らく更新しなくてすみません。

すっかり、『更新』という言葉忘れておりました。
気付いたのがたった、数分前。ホントにすみません。

ではでは、大変長らくお待たせしました、主人公、女装させられる
の巻です。

どうぞ！

77、俺は人形じゃない!?

「これよくない!？」

「ちよつといまいちかも」

「あ、これ似合う!!」

「可愛いかもお」

「キヤー!これもよくない!？」

「いい、いい!!」

「じゃ、これとか!？」

「あゝ、それもいい!!」

「フフ、やっぱりこれでしょ？」

「それはヤバイよ!ヤバいつて!!!!」

……なんなんだ。なんなんだよ、これは。

「フフ、いいわね」

「じゃあ、これはこうしてえ」

「じゃ、これはこうね」

「かゝわゝいゝいゝ」

……。

「こっちも、こっちもやってみよ!」

「いいね!」

「フフ、面白いわ」

……約一名、遊んでね?

「じゃさ、これはこうだね」

「そしたら、こっちはこうだ」

「フフ、そして、こうね」

「萌えええええええ」

……、つかさ

「人で遊んでんじゃねえ!!」

周りに群がってた女子（何故か男子混ざってたけど）を全員叩き

のめす。

「フフ、痛いじゃないの」

「痛いじゃないのじゃねえよ、俺だっていたいわ」

「フフ、ある意味ね」

「つか、人で遊ぶな、コラ」

「フフ、遊んでないわ。もてあそんでたの」

「結局遊んでんじゃねえか！」

「フフ、そうとも言いわね」

「……あっさり認めんのかよ」

「フフ、確信犯ですから」

「やっぱりか……」

「フフ、何か言った？お姫様？」

「その呼び方、やめてくれませんか？積極的に、やめてくれませんか？」

「フフ、いいじゃない」

「よくねえよ」

「まあまあ、喧嘩はそれぐらいにして」

「もっと早く止めよう、阪下」

「え、でも……」

「フフ、気にしないで。お姫様は、ちょっと気難しいの」

「そっか」

「ぶっ殺すぞ、テメェら」

「殺す！？」

「お前はどこから湧いて出てきた変態野郎！！」

いつの間にかいて、この空気に溶け込んでいた、馬鹿を一匹叩き潰す。そして、元あった場所（教室）へ送った。

もちろん、制服でだ。体操服は寒い。まだ風が冷たい、少しだけ。間違えても、ドレスとかメイド服とかで出歩いているとか思うなよ！！！
てか、今何故俺がこんな事になっているかの経緯、分かっているか？
うん？分からない？どうにかして納得してくれや。なぬ？無理？

そういう事は、やってみてから言いなさい!! 分かったか!!

「ねえ、瀬川君! これ着てよ、これ!!」

「は？」

「『は?』じゃないでしょ!? 約束、護りなさい!」

「お前に命令される筋合いねえよ!」?

「フフ、私なら、あるんじゃない？」

……俺の右手の馬鹿野郎。何故負けたんだ。何故、何故――。

「そんなに右手を攻めてやるな。哀れだぞ」

「俺が？」

「いんや、右手が」

「薄情者」

「間違える事もあるさ、人間だもの」

「○つを？」

「いや、神郷だけど？」

「……はあ」

「何でため息？」

「フフ、早く着替えなさい、瀬川」

「……いつかこの手でアイツを殺す……」

「ダーリン? 何か言った？」

「お前じゃねえって、言ってるじゃねえか!! てか、どこから出てくるんだっつもの!!」

ほんとに、これだけは謎です。

で。

「キャーーーーー!!」

うーん、黄色い声がウザい。てか、この世を去りたい……。

「フフ、なかなかね」

今させられてるカッコは、学校の制服。どこの? 作者の学校の制服。え? 分からない? そりゃあそうだろうな。ちなみに、中学時代のもんです。

紺のセーラー服に、袖口と襟に白いライン2本とその間に緑のラインがある。ネクタイもあるが、パチッと止められる、便利な奴だ。これにも、同じような模様がある。スカートは長めにしてあるけれど、足がスースーして気持ち悪い……。

「じゃ、次逝ってみよう!!」

あの、漢字違うからな、学級委員……。

「ガンバ、ハゲ!!」

どこの誰じゃああああ!! 今、ハゲって言った奴、もしくはそう思ってる奴、表でろい!! 腐った根性、叩きなおしてくれるわ!! だで。

「萌えるうううう」

うん、普通にウザいね。ああ、みんな死ねばいいのに……ね。

「フフ、こっちのがいいわね」

今度はブレザー。てか、姫役なのに制服ってどうよ。

黒に近い藍色の上着に、ワイシャツ。グレーのスカートは、今度はさっきよりも短く、ひざ辺り。あゝゝゝ! スースーしまくる!!

「じゃあ、今度はこれ、逝ってみよう!!」

だから、違うつつのに……。

「チビのくせに」

殺す! 誰だろうと、なんだろうと、ネットを飛び越えたとしても、殺す!!

で。

「ぐはっつつつ!!」

吐血!? ナゼ吐血!? ちょ、だれか、救急車あああああああ!!

「フフ、……認めたくないけど、私より可愛いわね」

どれだけ自分好き? てか、可愛いって言うな!! 耳障りだ!! 急に姫様らしくなって、ロングドレス。淡い水色で、ヒラヒラが

いっぱいいついてる。作者が嫌うタイプの服だ。まあ、どうでもいい事だけど。それに、なぜか、ティアラ付。サファイアのような石が真ん中にあるだけの素朴なものだけど、高そうだ。装飾も細かいし。

「これは保留ですね」

「じゃあ、次だな」

お、まともになった。

「……チビハゲ」

なまはげって言いたかったんだよな？それを囁んだんだよな？そうだよな！？そうだと言え！！この野郎！！

で。

「あがつつつつつつつ！！」

再び吐血！？ちょ、うちのクラスの女子ほとんどがヤバイです！

ちょ、救急車まだ！？

「フフ、これもいいわね」

今度はさっきと違って、赤いドレス。左胸んところに赤い薔薇のコサージュが大きく咲いてるだけ。あとは、腰のあたりが引き締まってるくらいで、ほかに飾りも何もない。

「ああ、ギザカワユス」

しょ○たん？

「あ、俺、タイプかも」

……お前、誰？知らない人教室にいるんですけど……。

「次次い♪」

何でお前は楽しんでんだ、神郷。

で。

「ぐあああああああ！！」

ちょ！今度は鼻血！？しかも、男子も！？ちょ、どうしたんだよ、うちのクラス！どうなってんだよ、このクラス！！

「フフ、いいわ、いいわよ」

これもドレスで、色はほのかな黄色。腰のところに大きなリボン。そして、胸のところにも、ちょっと控えめなリボン。その真ん中に、赤いルビーがはまってる。ふわっとしたイメージが強くて、走りやすい感じ。まあ、走っちゃあ、あかんのだろうけど。

で。

「結婚してください!!」

「は!？」

はっ!思わず言葉に出てしまった!いや、予想外だったんです、まさか、男子(女子も数人)からそんな事言われるとは……。

「フフ、お嫁に欲しいわね」

嫁じゃねえ、婿だ、俺は。

「ダメよ!ダーリンは私の王女様なんだから!!」

「ちげえよ!!」

湧いて出てきた馬鹿森野を、軽く捻り潰してから、教室の外へ放り出す。まったく、どんだけ神出鬼没なんだ、アイツは……。

今回は、ウエディングドレス。どこから持ってきたんだろな、こんなの。まあ、前のもだけど……。ちゃんとヴェールも被らされている。そして、ブーケも持たされてる。かざりつけのない、どこにでもあるウエディングドレスだ。ただ、肩が出るし、胸元も開いてるんで、寒い。軽く、寒い。

「結婚してくれ!シンリー姫!」

「ぶっ殺されたいのか、コバツシー」

シンリーって何だ、シンリーって。

「貴方様なら、喜んで!!」

「ここから飛び降りてなるべく苦しんで死ね」

「……毒舌は、ご健在なんですね」

「そりゃそうだが」

ブーケで人を殴ったのって、俺が始めてかな?

「さあ、次に行きましょう、シンリー姫」

お前も呼ぶな、神郷。

で。

「うはつつつつつつっ!!」

ちよ、魂抜けてる! 抜けてるよ!! だ、誰か、元に戻して!! ちよ、死んじゃうって! 死ぬって、マジでほんまに!!

「フフ、計算通りね」

計算されてたの!? 計算されてたんですか、これ!?

申し分ないほどに、完璧なメイド服。どこからどう見ても、メイド服。そして、今までの中で、最も足がスースーして、露出が多い服だ。

あゝゝゝ、ダメだ! 気持ち悪い!! 帰りたい!!

フリフリの付いたカチューシャ。フリフリの付いた腰のエプロン。可愛い! (女子談) ピンクの服は、とてつもなく恥ずかしい。てか、短い! スカートの短い! 代わりに靴下が長くて助かる。えっと、オタクさんに聞くと分かるけど、絶対領域がどうたら? まあ、よくわかんねえけど、萌えるらしい。

「ねえ、これ言って!」

「んだよ」

「これこれ!」

「……」

読んだ瞬間、凍りつきました。そして、俺は去りました――。

(と、いく訳なからう?)

だよな、このクソヘタレ作者が。

(ヘタレてない。ヘコたれてるんだ)

同じじゃね?

(そして、誰もいなくなった)

おいしいおいしい!! それじゃダメだから! いなくなったら、ダメだから!!

「ねえ、一回でいいからさ、ね?」

「ヤダ」

「即却下!？」

「そりゃね」

「フフ、言いなさい、シンリィヌ」

「なんか変わってね!? 進化してね!？」

「ヤダね」

「フフ、言ったら？」

「ヤだっつの」

「フフ、写真、ばら撒かれない？」

「ぬに!？」

はっ! 噛んでしまった!! (ツツコミ役として) 一生の不覚……!!

「いつの間にそんなもん!!」

「アイツか!? アイツの——」

(キャハハ☆)

お前かああああああ! ヘボヘタレ馬鹿アホドジマヌケ能無し作者ああああああ!!

「……どうする？」

笑みが黒いよ、学級委員。

「言うのか？」

何故嬉しそうなんだよ、神郷。

「言ってくれよ、マイ・スウィートハニー」

お前は死ね、影薄。

「フフ、写真と一言、どっちを選ぶ？」

後々厄介なんだよなあ、一言言うの。でも、もしあの写真を親父が見つけたら……。

『こ、ここ、こここここれは!?!!』

とかいって、大変な事になるのは、目に見えてんな……。

それに、

『レア写真だわ！写真集に加えないと！！』

とか言う馬鹿もいそうだし、腹黒い奴らに見つかったら、……死ぬしかねえな。

（主人公死んだら、困るよ！！）

お前がなれ、作者。

（ええっ！？）

じゃ、後は頼んだぞ。

（ちよ、ダメだよ！いいじゃん！一時だけ、一時だけ、プライドという名のトレジャーを手放せばいいんだ！！）

……それは無理だ。

「フフ、そろそろ、まくわよ？」

（お願い！もう無茶振りしないから！もう二度と、こんな事にはしないから、言って！！）

一回でいいんだな？これで終わりなんだな？

（男と男の約束だ！）

お前は女だろ。

（と、とと、ともかく！約束は約束だもん！破ったら、針百本飲むよ！！）

減ってんぞ。

「フフ、どうするの？」

（一生のお願いだよ！な、言ってくれよ、瀬川君！いや、瀬川伯爵様！！）

……だな？

（??）

……一回で、いいんだな？

（うん、うん！）

「おうし、俺の決死の覚悟で、一回だけ、一回だけ言ってやろう」

「やった！」

「おし！」

「フフ、そうこなくっちゃね」

「ではでは、どうぞ一言、よろしくお願いいたしまさあ」

敬語なんか、なんなんか、分からなくなってるぞ、影薄小橋。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……お、おかえりなさいませ、ご主人様」

「付き合ってくださいああああああああああい！！！」

「死ねおんどりやあああああああああ！！！」

そして、影薄の一生は終わった……。

「勝手に殺すなああああ！！！」

ちっ、まだ生きてたか……。

で、最後。

「……」

無言の死を遂げた！？ちょ、みんな息してる！？してないよね！

？それは流石にヤバイよね！？よみがえれ、クラスメイト達！！

「フフ、いいわ、とってもいい」

どこが？どのへんが？どのように？どうして？

最後の最後に、ゴスロリ。赤い生地、黒いフリル（フリフリの事を斎賀に聞いてみた）がいたるところに織り込まれている。ポケットの周りだ、つなぎ目だ、袖口だ。ともかく、いろんなところがフリフリだ。腕のところはフッサフサで、ラッパのように広がっている。もちろん、フリル付き。スカートは短すぎ。それにももちろん、フリルは付いてる。白いオーバーニーソックス（斎賀が言ってた）は、上のところに黒いリボンが通されて、リボン結びされてる。

そして、頭には巨大な黒いリボン。これにも少しだけ、フリルが付いてる。

「フフ、完璧に、女の子ね」

「嬉しくねえし」

「フフ、妹にしたい」

「同年だからな」

「フフ、欲しいわね」

「帰りたいね」

「フフ、これにしようかしら、衣装」

「ヤダ」

「フフ、決定ね。みんな即死した事だし」

「決定した理由はそれ!？」

「フフ、本番が楽しみだわ♪」

ああ、本番なんて、来ないで欲しいよ……。

次の日、貧血でほとんどの生徒が動けなく、欠席したのは、また別の話。

77、俺は人形じゃない！？（後書き）

多分、これからも不定期な更新になります。

更新する事を忘れたり、更新を言う言葉を忘れたり、ネタが切れたり、更新をど忘れしたり……。

まあ、いろいろな理由で出来ない事がありますが、こんな頼りない私の元、読んでくださるのなら、光栄です。

78、精神的に疲れた日!?(前書き)

最近の関東は、微妙に蒸し暑い……。
→どうでもいい……。

78、精神的に疲れた日!?

「はあああああ……」

ダメだ、なんかもう、精神的に疲れた。てか、精神的に傷付いた……。

「ダーリンダーリン」

……。

「ねえ、ダーリン」

……。

「瀬川慎吾くん？」

……。

「瀬——」

「うっせえな、まとわりついてくんな、変態!！」

「うっ……」

はっ! な、何! ?

「ごめん、……うう……なざい……」

な、なな、ななな! !

「こらダーリン! 女の子泣かせちゃ、ダメでしょう! 私だけ泣かせてくれれば、それでいいんだから! !」

「うっせえ、引っ込んでろ変態ストーカー」

「変態じゃない! ちよっと、考え方が常識人と違うだけよ!」

「それを馬鹿という」

「馬鹿じゃないわ! 愛の事なら」

「で、何でいんの？」

「え？」

「聞いてないの! ? 無視なの! ?」

「変える方向、逆だろお前」

「えっと、今日は、叔母の家に……泊まるんです」

何でもう泣きそう? 何で泣きそう? なぜ泣きそう?

「ともかく、」

「ダメですうううううう!!」

「だっ!!」

チヨ、チョップだど!? しかもかなり痛かったぞ! 誰だ! この野郎! 表でろい!! って、ここが表だし!!

(バーカバーカ!!)

死ねっ!!

「死ねとか、殺すとか、死ねとか死ねとか!! 言っちゃいけませんええええん!!」

しえん!? てか、どんだけ『死ね』を否定するんですか!? 3回も言ってるし!!

「お前は、友達の暖かさを分かってないぞ!」

で、帰ってきたの、小橋君。

「そう、ボクは小橋だ」

……キャラがくね?

「とも、ともかく! ら、乱暴なことは、言っちゃ%&#\$%>＊

@!?!」

言葉になってない! 最後の方、言葉になってない!!

何語!? 英語!? ドイツ語!? エイリアン語!?

「そうだ! この子の言うとおりだぞ、せがは!!」

『は』の字違うから! 『わ』だから、『わ』!! 確かに『は』でも、わというよ? でもさ、名前的に、『は』はないべ!!

てか、通じたの!? すごっ!!

「アブラカタブラ・ヘレピランプレスト!!」

アブラカタブラ?! 何の呪文!? 呪いの呪文!? 悪魔召喚の呪文!?!

「そうだそうだ!!」

だから、何でお前は通じるんだよ、小橋!!

「そうよ、ダーリン!」

オメエも!?

「イェ／＼」父レよ、ーっ乙もレ、レナナよレ、事ナよh乙」すよ!!!」

解読不可じゃね!? 何ていつてつか聞いているから分かるけど、読める人、分かる人にしか分からなくね?

(まあ、ギャル語ですからね)

作者!?

「イジメ反対!」

お前が言うと、なぜか説得力があるよ、小橋。

「私はいじめてOKぼくじょー!!!」

死ね。

てかさ、日本語を話そう。誰にでも分かる、日本語を話そう。ここは日本だよ? 日本なんだよ? OK?

「あ、あの、わたし、私、こっちなんで、あの、その、あれ、それ、どれ?」

聞くなよ。

「バイバイ♪」

「また明日な」

「……はい!!!」

何で通じた!? なんて言ったのか、あの接続語の中で分かったのか!?

「……はああああああああああ」

ああ、今日は、精神的に疲れる日だった……。

「ため息なんかついちゃダメよ、ダーリン。幸せが逃げちゃうわ」……。

「どうした、瀬川。疲れたのか?」

……誰のせいだと思ってんだ、このお気楽共が。

78、精神的に疲れた日!? (後書き)

さあ、次回あたりから、文化祭編にしようかな？

79、Sの小さな隠し事!?(前書き)

今日は母の日。

皆さんは、何かしましたか？

え？私？私は――。

慎吾「あとがきへ続く」

え!?! ちよ、ええ!?! 何でお前がここに!?!

慎吾「じゃ、はりきって、本編行ってみよお」

ちよ、それ! 私のせりふう!!

79、Sの小さな隠し事!?

「ただい」

「お帰り慎吾!」

うげっ! な、何で、クソ親父が家に!?

「うげとは何か!? そんなにダディーが好きなのか?!」

「嫌いさ、大嫌い。てか、人の心詠むんじゃねえよ!!」

低姿勢から、アップパーーーー!! まあ、元々俺のほうが背、低いけど……。

(チビめ)

うるせえぞ、作者。

「なあなあ、いつ文化祭だ?」

「いつかだ」

「いつ?」

「いつかだ」

「行ってもいいか?」

「くんな、仕事行け」

「で、文化祭はいつだ?」

「いつかだ」

「ねえ、慎ちゃん。いつなの?」

「知らねえよ」

ニコニコ顔のキモいおっさんと、微笑みが怖い母さんに挟まれながら、食事中。

「教えないと、今度から和食作らないわよ?」

うう、それはいたい!! 俺の疲れとささくれを癒してくれる和食がねえと、次の日の体力が……。

「教えてくれないと、パパ、泣いちゃうよ」
勝手に泣いてろ。

「ねえ、何でそんなに嫌がるの？」

「そうだぞ、慎吾。こんなにパピーはお前の事を溺愛しているのに」

自分の呼び方、一つに決めろ、クソ親父。

「嫌だから」

「なんで？」

「どうして？」

「なんでも、どうしても」

「じゃあ、適当に毎日学校に言っちゃうわよ？」

それ、学校に迷惑だから！

「じゃあ、毎日怖いおじさん連れて行くぞ？」

それ、もっと迷惑だから！俺も迷惑だから！！

「文化祭関係の手紙、あるんでしょう？」

「そうなんだろう、慎吾」

「ねえって。まだ貰ってない」

ホントは今日貰ったけど、見つからずに奴は処分するんだ。

「バッグの中、調べちゃうわよ？」

「お前の部屋に、入るぞ慎吾」

「やめろ、変態親父」

「何でパパだけ！？？」

「嫌いだから」

「何でそんなに嫌うんだ慎吾！どうして！どうして！！」

「唾飛ばすな！きたねえんだよ、キモいんだよ、ウザいんだよ！」

「！」

「パパエクス配合で、美容にいいぞ？」

「きたねえって！そのせいで読者様方が減ったらどうするんだ！」

「成るように成る！！……かもな」

「かもな！？？」

「ともかく、分かったら教えてね、慎ちゃん」

「あ、ああ」

「よろしく」

……楽しそうな母さんが怖いよ。

「ダディーも絶対行くからな！何が何でも、重要な会議があっても行くからな！！」

行け！仕事行け！！重要な会議に出ないと、信用がなくなるから！家計が火の車に成るから！！

「さて、こいつをどうしてやろうか」

にらめっこ中の、プリント。こいつこそ、最悪の魔の手紙、『文化祭予定日のお知らせ』だ。

ご丁寧な字で、『新緑が』とか書きやがって。日時まできちんと書きやがって。クソッ、ふざけるな！

（まあ、それが普通なんだけどね）

んだよ作者。勝手に出てくんない。

（いいだろ？俺の勝手さ）

てか、お前一応女だろ？俺とか言うなよ。

（気にすんな。この作品の中ではカラスだから）

いや、それとこれとは別だろ。

（てか、話逸らすな）

お前が逸らしたんだろ！？

（なんだと！？おまえだろ！！クソハゲ小僧が！！）
んだと！？チビのくせに！！

（お前よりはチビじゃない！）

チビだろ！！

（いいんだ！そのうち伸びるから！！）

伸びねえよ！お前は一生【ピーー】cmのままだ！

（実際の身長言うなやああああああああ！！）

【ピーー】って音が、かぶってただろうがああああああああ！！！！

「どうした、愛しの慎吾！？」

「勝手に入ってくなあああああ!!」

プリントが見つかるだろうがああああああ!!

渾身のグーパンチ! たまには、平手打ちでもしてみようかな……。

「で、こいつはどうするか」

変態ストーカー交じりのウザい自称父親を追いついてから、また悩む。

(自称って……)

気にすんな。

灰にするか? でも、どのタイミングで燃やす? 専業主婦の母さんは、ゴミ捨てと買い物以外、外に出ねえぞ。

シュレッダーで裂くか? でも、それだと見つかったときの言い訳がしづらい。

川に流す? ダメだ! そんな環境に悪い事、俺にはできない!!

「うゝむ、どうするか……」

(いいじゃん、見せれば)

って、また作者! いい加減、お前の仕事しろ!!

(ダイジョブだよ。チャーハンは得意料理だから)

チャーハンが得意料理って……。

(悪いですか? 悪いですか!?)

拗ねんなよ、いっちょまえに。

(いいさいいさ。どうせクッキーとマフィンとブラウニーとチャーハンとラーメンと味噌汁しか作れないから!)

……。

行かせぎしたのか??

(テヘ♪バレちゃった?)

バレちゃったじゃねえよ! 執筆ぐらい、ちゃんとしろや!!

(いいじゃないか! これでも頑張ってるんだ! 部活も頑張ってるんだ!!)

授業も頑張れよ!!

（大丈夫！まだついていけてるから！）

……って、また話しずれたし！！

（そんな怒んなよ！）

はっ！

（な、なんだよ）

「クフフ……その手があったか……クハハハハ！！」

（ちょ、ちょっと！笑い方怖いよ！？不吉な感じ、丸分かりだよ！？）

作者！いや、バ下弦バ鴉！

（そう呼ぶんなら、あえて言い直して欲しくなかった……。）
ともかく、聞け。

（人に頼み語とするときは、）

聞け。

（敬語で）

聞け。

（話さないといけないって）

聞けよ、馬鹿。

（親に）

作者の通っている高校の名前は――。

（はい！なんでしょうか、ご主人様！いや、帝王様！！）

いや、言い直されても困るし。

（で、何？何が言いたい訳？）

いきなりタメ！？

（いいから、何の用？とっとと用件言ってくんね？風呂洗わねえ
といけねえんだよ）

それなら、洗ってから執筆しろよ！

（いいんだよ、どうせシャワーだけで終わらせる奴がいるんだから）

拗ねんなっつもの。

（拗ねてない。いじけてるんだ）

……。

(で、用件は?)

……これ、処分してくれ。

(手紙? なになに。『文化祭予定日のお知らせ』……親に見せた?)

見せねえよ。見せたくねえよ。

(これを処分すれば、言わない?)

何を?

(高校名)

おう。

(じゃあ、処分してあげよう)

助かるよ、馬鹿な作者のわりに。

(酷くね!?)

気にすんな。

(……9月10日、8時からかあ……)

来る気か!?

(いや、……ね?)

いや、ねっていわれても……。ま、まさか!?

(いやいや、君が思っているような事じゃないと思うよ?)

聞くなよ。てか、俺が思ってる事、絶対当たる気がするんだけど?

(気のせいだ)

「慎ちやあん! お風呂、沸いたわよお!」

「はあい!」

(ぷくく……『はあい!』だってさ)

殺すぞ。

(やれるもんなら、やってみな!)

やってやろうじゃ……って、逃げるなああああああ!!

その後。

「慎吾……!」

「断る!!」

「まだ何も言って」

「断る!!」

「ないじゃない」

「断る!!」

「か!」

「死ね!!」

部屋の前にいた変態を蹴飛ばし、追い払ってから、ゆるりと風呂に浸かって、作者の思惑がうまくいかない事を願う俺でした……。

79、Sの小さな隠し事!?(後書き)

で、母の日にしたことは、猫の置物をプレゼントして、チャーハン作りました。

え?それだけ?もちろん、それ以外何もせずに、ぐーたらぐーたら過ごしました。

ええ、もちろん、事実ですとも。

ちょ、冷えた目で見ないでください。私のおこずかいと、料理の腕では、そこまでしか出来なかったんです……。

80、影薄の宿命!?(前書き)

はつきり言っているのですか？

今回は、少し遊びすぎました。なので、先に言っておきます。
大変申し訳ございませんでした!! m () m

80、影薄の宿命!?

「おはよう、姫様」

「死ね、影薄」

「酷くね!？」

「死ね」

「ちょ、それしか言わない気か!？」

「頼むからさあ、死んでくんね？」

「いやだ!」

「じゃあ、あの世に旅行して来いよ」

「それってつまり、」

「死ね」

「結局それかああああ!」

ん? 何馬鹿な会話してるってか? すまん、これが日常だ。……
認めたくないが、日常なんだ、仕方ないだろ!

「おはす」

「よう、狩燐」

「おはよう」

「よ、神郷」

「なんで!?! 何でちゃんと挨拶すんの!?! 俺は!?! 俺には!?!」

「うるせえぞ、勇者コバツシ。少し黙ってろ」

「コバツシ?」

ああ、そういや、神郷は知らないんだよな。

「あだ名だ」

「そゆ事」

「不名誉だあああ!!!」

「黙れ」

俺と狩燐の声がかぶって、小橋が車の前に出ようとしたのは、また別の話(?)。

「で、どうよ？」

「何が？」

「文化祭の用意？」

「聞くなよ」

「まあ、ともかく、そんな感じのもの。うまくすすんでっか？」

「それは――」

「うまく行き過ぎて、もう泣きそうだよ。な、瀬川」

「……」

「そかそか、良かったなあ」

すみません、何でこんなに神郷って楽しそうなの？てか、軽く納得しちゃう狩燐って、何？

（いんげん？）

惜しいぞ作者。『I』の前に、『N』が足りなかった。

「お前はどんなんよ、狩燐」

ブルーな気分をいつの間にか抜け出してしまっている、小橋が聞く。

「抜け出さない方が良かったって言いたいのか！？」

「心を読むな、変態」

「影薄」

「薄ラー1号」

「神郷まで！？」

「かっかっかあゝ」

……こんなキャラだったっけ、神郷って……。

「で、どうなわけ？」

「どうって、どうよ」

「どうってさ、つまり、そのな、進み具合的な何か？」

「進み具合的な何かってなんなのさ」

「パネル絵の進み具合とか、学級旗の進み具合とか、クラスの出し物とか？」

「俺持ってねえや。神郷は？」

「持ってるぜ。放課後持ってくよ」

「ありがと、神郷。助かる」

「無視ですか！？無視なのですか！？！？」

「またもや、車の前に出ようとした小橋を蹴飛ばして防いだのはまた別の話（？）。」

「ダーリン！ダーリン！」

「うっせえよ、猿」

「猿は猿でも、愛を知ってる——」

「そいえばさ」

「何？」

「結局何すんの？お前のクラスって」

「俺らのクラス？ごく〇ん」

「そーですか」

「お前らは？」

「……」

「ロミオとジュリエッツだぜ！」

「そうなん！？」

「ジュリエッツ誰！？ジュリエットだろ、ジュリエット！！」

「そうかもな」

「かもじゃねえから、確実にそうだから！」

「ねえ、私は無視！？」

「俺にいたっては、存在自体無視！？」

「るせえな。この小説はなあ、いっぺんにしゃべると誰が誰だか分かんなくなんだよ。だから、3人以上はしゃべるな」

「ヒロインなのに！？」

「一応、友人って設定なのに！？」

「お前はヒロインらしくねえし。友人って設定なら、狩燐も神郷も一緒だ」

「愛すべきみんなのアイドルをけなしたわね！でもいいわ！ダーリンだから、私は受け止める！」

「それ言ったら、俺の存在の意味がなくなるだろ!!」

「ともかく黙れ、殺されてえのか？」

「はい！」

「いいえ！」

「よし、車の前へ出ろ」

「了解しました！」

「え!?!ちよ、ま……なんでええええええ!?!」

馬鹿が、影薄ラー1号を引きずっていったのは、気にしなくていい話。

80、影薄の宿命!?(後書き)

と、いうことで。↑どういう事?

次回から、(一応)文化祭編になります。

まあ、予定なんで、裏切る可能性が……。↑え!?

81、燃えすぎ注意!?(前書き)

テスト期間中なのに、テスト勉強する気ゼロってのは、ヤバいんじゃないか？

まあ、そんな事は捨てて、本編をどうぞ!!

81、燃えすぎ注意!?

で、なんなんだ、これは。どうなったらこうなるんだよ、これは。ていうか、この教室に何があった!?

「あ、瀬川」

「チースッ」

「フフ、目が点になってるわよ? どうしたの?」

こっちが聞きたいんですけど!?

えーっと、あー、今の俺のクラスは、爆心地状態です。なんていうか……その、散らかってる?

「どうしたらこんなに汚くなるんだよ」

「作ってたから」

「当たり前すぎるし、つまんねえし、薄いし」

「何が!?! 何が薄いんだよ!?!」

「もち、影が」

「酷くねえか!?!」

「気にするな、影薄小太郎之介よ」

「無駄に長くて嫌なあだ名つけんなよ!」

「フフ、五月蠅いわよ、お父様」

冷たい目の自称女王。

「少し静かにしてよ、お父様」

鬱陶しそうな目をした学級委員。

「そうだぞ、おじい様」

いやにニタニタしてる神郷。

「俺はお父様役だ! おじい様役なんかじゃねえよ!?!」

「黙れ、薄影」

「どここの忍!?!」

ナイスツッコミだけどさ、みんなの目が、目線が痛いほど冷たいのに、何で気付かないかな?

え？今の時間何？急にそこ聞く？フツー。てか、今更聞く事じゃないですよ、読者様。

「てか、作れ」

「命令っすか!？」

「いいから黙って作れ」

命令系だし、言葉が痛い！棘がありすぎて、やわな小橋の心に深く突き刺さってるよ!？もう抜けないよ!？

でもな、でも、俺はまだ、神郷がそんなに冷たい奴だなんて信じてないからな！戻ってくりゃれ！元の優しい(?) 神郷に戻ってくりゃれえ!!

「フフ、だから使えないのよ」

お前は相変わらずに冷たい……。氷の女王だよ……。心が。

「みんな頑張ってるんだよ!？もっと本気で出来ないの!？」

いや、小橋も小橋なりに頑張ってるんだよ?というか、精一杯に、一生懸命頑張ってるから、そんな冷たくあたるなよ!

「……そか、そっか……。みんな俺の事嫌いなんだな……」

ほら！ネガティブモード入っちゃった!!

「嫌いじゃねえよ!」

お！いい事言うな、神郷。それでこそ――

「好きでもねえけど」

結局、それ!？結果的に、そっちにいつちやいますか!

「フフ、使えない男なんて、二酸化炭素以下よ」

例え分かりにく!!なんだよ『二酸化炭素以下』って!環境に悪いつてか!？小橋は、その存在自体、環境に影響を及ぼすってか!？

「違うよ!そんなに小橋君いじめちゃ、可哀相だよ!」

まあ、お前も軽くいじめてたけどな。でも、これで天使が、舞い降りて――

「ちよっとジミーで、ちよっと心が穢れてるだけで、ちよっとウザくて調子に乗りやすいだけで、他の部分は普通の子なんだよ!！」
……来なかった……。

フォローになつてないよね、これは。逆に小橋の心、ずたずたに引き裂いたよね、これ。

「みんなの気持ち、よく分かったよ。……じゃあ、そろそろ逝くわ」

うおおおおおおおおい！！逝くって……ちよ、待てえええい！！

「いま、……まで、ほんとに、……あゝがどう」

ちよ、泣いてるよ！？号泣だよ！？ちよ、みんな！ホラ、小橋が泣いてるよ！？

「ボンド取ってえ」

「あいよ」

「ちよ、そこ縫う所と違うじゃん！」

「ウゲッ！……マジだ……」

「うわゝ、またやり直しだな」

「だゝれかく。のり取ってえ、もしくはボンドオ」

む、無視！？集団無視！？いくらなんでも、小橋が哀れ……。

「って、小橋！？」

「なんだよ、人気者。この俺、陰気者に何用だ、こら」
こ、壊れてる……。

「な、何用って、何しようとしてんだよ！」

「何って……紐なしバンジージャンピング？」

「聞くなよ……。てかそれって、ただの飛び降り自殺じゃんか！」
「！」

「そうとも言う」

「やめろよ！！」

「じゃあ、パラシュートなしスカイダイビングするわ、屋上から」
「それも単に飛び降り自殺だから！降りる所が高くなったただけだから！！」

「そうとも言う」

「お前は、馬鹿か!？」

「じゃ——」

「と、ともかく!ともかく、落ち着け。な?」

「落ち着いてるよ、もう冷たく凍りつくほどにな」

「ただですか!？」

「よし、じゃあ、まず、こっちに——」

「森野美咲、ピッチピチの13歳!今から、ダーリンの胸に飛び込みます!!」

「お前はどこから出てきたあああああ!!」

飛んできたハエを、平手ビンタで撃退。ちっ、汚ねえな。まったく……。

「ああ、素晴らしいき愛のビンタ……。おかげでちよっと、骨がズレたみたいです……」

うん、軽くヤバイな。まあ、でも、森野だし、いっか♪

「瀬川。俺、そろそろ逝かなきゃ。黒い服纏ったおっさんが待ってるからさ」

「待て待て待て!行くな、ついて行くな!そのおっちゃん危ないから!!」

「大丈夫」

「何を根拠に言ってるんだよ!」

「何って……囁き?」

「耳を傾けるな!無視しろ、無視!!」

「で、私に他のお仕置きを……」

「小橋の代わりに、逝け」

「はい!……って、ええっ!？」

「はあい、Let's go♪」

「素晴らしい発音だわ!さすがはダーリン!!それで、I l o v e M i s a k iと言っ」

「たら、死ぬか?」

「愛に溺れて」

「じゃ、普通に……死ねやあああああああああああ
!」

本気で窓から突き落とそうとしました。うん、真面目に本気で。
え？犯罪？はん！そんなのかんけえねえよ!! H A H A H A!!

「……逝かないと……」

「お前はここに居ろ！大丈夫だ、俺がお前の存在を認めてやろう
!」

「マジでか!？」

うおう!?! 急に元氣復活!?! てか、どれだけ存在認めて欲しかったんだ!?

「本気と書いてマジか!?! 本当と書いてマジか!?!」

「りよ、両方で……」

「有難う! My best friend!!」

はぁい、キモいから抱きつこうとすんなぁ。本気で^{マジ}キモいからなぁ。

「さあ、みんな! 最優秀賞という名のトレジャーを掴むために、
はりきってパネル絵と学級旗を作ろうではないか!!」

……。

また集団無視!?! てか、どんだけ性格変わってんだよ、小橋!!

ま、まあともかく、順調に準備は進んでる……。てかさ、劇の練習はしなくていいのかね、俺ら……。

81、燃えすぎ注意!?(後書き)

ちなみに、パネル絵などを作る時間は、学活と放課後だけです。で、今は、もう放課後。

82、大丈夫なのか！？（前書き）

明日でテストも終わり……。

その代わり、部活が始まる……。

ああ、俺の安らぎの時間、さらば……。

82、大丈夫なのか!?

「フフ、今日という今日は、練習するわよ」

「イエッサー!」

「フフ、諦めるという事は、己の心の弱さに負けるということ、いいわね」

「イエッサー!」

「フフ、……じゃあ、気合入れていくわよ!」

「イエッサー!!」

……馬鹿か、こいつら。

「フフ、ノリが悪いわよ、姫」

「姫じゃねえよ」

「気にすんなよ、お前は姫だ」

「ちげえから」

「大丈夫、可愛いよ」

「嬉しくねえし」

「なんなら俺が」

「で、何で急に劇の練習?」

「俺はシカト!?!? てか、なんでかぶせんの!?!」

「フフ、気分よ」

「気分でいいのかよ」

「いいんじゃないのか?」

「いいと思うよ、私は」

「ねえ、ちょっと、聞いてる!?!」

「フフ、まあいいじゃない。もう明日なのよ、本番」

「へえ明日かあ……。って、マジですか!?!」

「ちよ、それって……」

「まあ、大丈夫だろ」

「いやいやいやいや! ダメだから! 大丈夫じゃないから! だってさ、

まだロミオ決まってねえじゃん！てか、なんでまだ決まってないの！？

「大丈夫だよ、自分を信じて！」

いや、信じたくないよ、今の現実。否定したい、全力で。

「あの、聞いてますか？」

聞いてねえよ。お前なんかお呼びじゃねえよ。

「なあ、なんでそんなに目が冷たいのかな？何で俺に対してみんな冷たいのかな？」

「フフ、邪魔だから」

そのとおり。

「まあ……いなくても変わりはいっぱいいるしさ」

ごもつともで。

「……薄いし」

だね。

「薄いつて、影が！？影がですか！？俺最近、ヒロインより頑張ってるじゃん！」

「ヒロイン馬鹿にすると、痛い目見るわよキーンツク！！」

ネーミングセンス無っ！てか、ダサっ！！

「呼ばれて桃の木天狗の木！！」

……なんか、ちがくね？

「ダーリンに貶される事、6年間！愛を感じて今日も森野美咲は生きて」

「死んどけ、とりあえず」

「嫌よ！影薄に侮辱されるなんて、嬉しくても喜べないわ！素直にー！！」

ああ、嬉しいんだ……。

「……他のクラスが何故ここに？」

お、確かにそうだよな、神郷。

「まあ、森野さんだし……」

『当たり前だよねえ』ってか？俺の居る所にこいつは居るってか

？マジウザいんですけど。

「さあ、今日という今日は、許さないわ！影薄小五郎！」

「主人公の友達なめんな！毒舌M小娘！」

……ところで、何でこの2人って、こんなに仲悪いの？

「いざ尋常に」

「勝負だ！！」

……勝手に殴りあい始めたし。

「フフ、頑張れ、美咲」

「負けんなあ、隣のクラスの少女お」

「が、頑張れ！」

……観客できちゃってるし、応援してるし。

てかさ、劇の練習はどうなったの？やめたの？本番明日なのに？
こんなに悠長に過ごしていいの？

（ま、気楽でいいんじゃない？）

あ、作者だ。てかお前、まだテスト期間中じゃ……。

（どうせ国語だけだ）

だから。

（まあ、一応国語は得意だスイ、他のもそれなりに頑張ったスイ、
まあ、何とかなるかなって）

勉強は？

（してないよ、当たり前じゃん！）

即答ですか……。てか、当たり前なのは、勉強してる人だから。

（いいんだよ、勉強はかじる程度で）

……だからお前は馬鹿なのか。

（馬鹿じゃない！やれば出来る（はずの）子なんだ！）

おい、ちっさく言った『はずの』もはっきり聞こえてんぞお。

（……サラバだ！！）

逃げたし……。

「私は負けない……。私には、護りたいものがあるの！」

「俺は負けられないんだ！意地とプライドと俺の存在が懸かって

るんだ!!」

……なんか、ややこしくなってきた。てか、観客増える！
？なんで！？

「愛は必ず勝つ！」

「影薄の底力は必ず勝つ！」

たいていの奴は負けてるからなあ……。

「ヒロインなめんな！」

「影薄なめんな！」

どっちもどっちだよ、もう。てか、どーでもいい。

「……帰るかな」

まあ、そんなこんなで体育館を去ったのはいいけど、ホントに明日が本番なのに、一回も練習していない、俺らの劇は無事成功するのであろうか……。

てか、この話、どうでもよくねか？

（全くもって、そのとおりっ!!）

……作者よ、製造者のお前がそんな事言ったら、この小説は終わりだ……。

82、大丈夫なのか!?(後書き)

まあ、そんなこんなで、とうとう文化祭に無理矢理こじつけました。
て、ことで、次回からは、文化祭編です!

え? 今までののはそうじゃなかったのかって?
……うゝん、……微妙ですね……はい。

83、文化祭前から賑わってます!?(前書き)

更新が大変遅れてすみませんでした!

言い訳がましいですが、部活だのテストだの体育祭だの、結構ハードなスケジュールだったんです。

……本当に、すみませんでした。m (_ _) m
今度からは、更新も頑張ります!

83、文化祭前から賑わってます!?

ルンタツタ〜、ルンタツタ〜、ルンルンタ〜♪

?? おお! こんにちはあ、読者様! 森野美咲、ダーリンに恋した純情系乙女です! え? そんな事はどうでもいい? 酷くないですか! ? っていうか、酷いですよ! まあ、嬉……。

ごっほん! そんな事よりも! まず、こんなに私がテンション高い理由、分かります! ? ……はい、そうですね、プロテインですね。って、違う! プロテインなわけないでしょう! ? なんて、純情系乙女がプロテイン! ? どうしてプロテイン! ?

「うげ、ノリモだ」

タモリみたいなノリね……。でもこの愛しい声は!!

「ダーリー……」

「死ね」

ぐはっ! きよ、今日はい、一段と、パンチ力が強いわ……。うう、愛のビンタは、痛いわ……。

「おはよ、せが——うわ! 毒舌娘!!」

ちっ、邪魔者が……。

「なによ、さりげない影薄」

「さりげないってなんだよ! 何がさりげないんだよ!!」
ペッ!!

「ちよ、汚っ! 唾人に向けて吐くなよ!!」

「消えなさいよ、影薄。私とダーリンの憩いの時間を邪魔しないで」

「憩いじゃねえよ、不快だよ」

「私は、ダーリンが隣にいただけで幸せよ」

「俺は、お前が隣にいただけで不幸だよ」

「でも、隣にいていいのは、私って言うてくれたじゃない!」
「言ってねえし」

即答ですか！？え！？言いましたよね、この人！あの、ちょっとブルーだった時に、言ってましたよね！？え？あれって、……幻聴？

「あゝ、朝から森野に会うなんて」

え？なにに？ひょっとして、最高な日？幸せな日？天使が舞い降りた日？

「最悪最低不幸悪魔が降臨した日だ……」

「よく噛まずに言えたな」

「お前に褒められても嬉しくねえよ、影薄ラー1号。てか、いつからいた？」

「不名誉なあだ名で呼んどいて、いつからいたとは何だ！」

「気付いねえんだよ、隣にいても」

「私は気付いてくれるけどね♪」

「お前からは、変なオーラが出てるから分かるんだよ」

「変なオーラ？それって、幸せの赤い糸で結ばれてるって事！？」

「小橋とか？」

「ええ！？」

「マジで！？」

嫌よ！こんな影薄い人！好かれないし、好きになりたくもない！！こんな影薄と付き合うくらいなら、死にます！！

「おい！こんな毒舌変態ストーカー悪女娘と結ばれてたら、かなりショックなんだけど」

「私だって！！」

「ご結婚、おめでとうございます」

「話が早っ！！」

「影薄に同じく！！」

「名前で呼べない？せめてさ」

「あら、影薄に名前なんてあったかしら？」

影薄ラー1号？それとも、勇者コバツシー？

いづっー！！

「いっだあああああああああ！！」

なにになに？ なになになに！？ なになになになに！？！？ 私の身に、何が起ったの！？

「アッハハハハハハハ！は、腹が、腹が、クフフフフ……！！！」

「ちょ、何でそんなに笑ってるのよ、ダーリン！」

「クハハハ……グフツ、フフフフ」

「ちょ、ちょっと！笑い方、怖くなってるわよ！？」

「ゴメ、マジウケる……アハハハハハハ」

な？何？何が起ったの！？ホントに、今の一瞬で、何が！？

「まさか、気付いてないの！？」

なによ、なんなのよ、影薄のくせに！半笑いって何！？笑うなら思いつきり、ダーリンみたいに笑ってよ！その方が、なんかいいから！！

「アンタさ、電柱に思いっきりぶつかっただんよ？んで、一回転して、そのまま進んで、急にピタッと止まったんだよ」

「あの一瞬で！？」

「ああ、そう。あの一瞬でな……くふ、ふふふ……」

笑うなら笑って！ホント、なんかどんどん恥ずかしくなってきた！え？日頃の行いは恥ずかしくないのか？何か恥ずかしいことしてる？私。

ていうか！読者様も鼻で笑わないでくれませんか！？軽く傷付くんですけど！でもまあ、いいですよ、きも……ごうっほん！！

「アッハハハハ！もう、マジ最高！お前さ、いつもこうならいいのにな」

「え？」

「ふふふふふ、……マジ最高だよ、森野」

ダーリンが、笑ってくれてる。私見て、とっても楽しそうに。額、痛いけど、なんか、どうでもいいかな。うん。

……？

『いつもこうならいい』

と、いうことは、いつもこんな風なら、付き合ってもいいってことですか！？え？マジですか！？ちよお、ちよっと！！嬉しすぎて、涙が出そうなんですけど！ちよ、誰かハンカチ！ハンカチをお貸しください！！

ずるっ！どてどん！！

「ギャハハハハハッハハハッハハハッハハ」
めっさ笑われてる！？ていうか、今度は何が！？

はっ！！

「何故にこんな所にバナナの皮が!？」

「くふはは……腹ヤベエ、マジヤベエ、いてえよ、よじれてるよ、ふふふ……」

腹を抱えて、半分泣きながら、楽しそうに笑ってる。いつも怒った顔ばかり見てたから、ちよっと、ドキツとする。

……可愛いです、ダーリン。ああ、口に出して言ったら、殺されそうね。

「おい！ちよ、重い！重い！重いの！！聞えてます！？」

クソ、ダーリンの素晴らしき笑顔に見とれてたのに、どこのどいつじゃ、邪魔するものは。

「下！下！！よく見て！！」

下だと？……あ。

「薄影！！どうしてこんな所に！？」

「薄影じゃないし！ていうか、どけよ！！重い！死ぬ！圧迫死する！！」

「いいじゃない、それで」

「主人公の親友をこんな無様に殺しますか!？」

(ええ、殺します)

「作者あああ!？ちよ、いいのか!？それでいいのか?!」

(ダイジョブだよ)

「何がどう！？ どう何が！？」

「五月蠅いわね、静かにしなさい!!」

「いだ!だだ!ちよ、動くなよ!踏みにじるな!こ、馬鹿!」

「あんたなんかそんな事言われたって、嬉しくないのよ! ちよつとは嬉しいけどね!」

「嬉しいんじゃん！結果、嬉しいんじゃねえか！！」

「ははははははは。マジダメ、もうダメ、限界だよ、オモロすぎ」隣でゲラゲラ笑ってるダーリン。ああ、何て素敵な横顔♪

え？今の状況は？私は、影薄の上に乘つてるだけよ、正座して。うん、まぐれで座っちゃったみたいでさ。押し倒したって言うより、前にいたから、道ずれにしちゃったみたいよ、影薄君。まあ、ドンマイなんじゃないですか？

キーンコーンカーーーンコーーー

チャイムの音が聞えるわ。
……。

――年生は、体育館へ、移動してください

何て放送も聞えるし……。

え？ マジですか、これは。本当に、これでいいんですかね、これ
って。

(うん、文化祭、遅刻だね☆)

そうみたいね、
下弦☆

「……つてええええええええええ！？！？」

ま、そこから全力疾走で。うん、言葉の如く、全力疾走。信号？
そんなの無視するためにあるのよ、護ってどうするの、護って！
……ごめんなさい！護る暇がなかっただけなんです！だって、止
まったりしたら、全力疾走のダーリンに（まだ笑ってたわ）、追い
つけなかったんだもの！許して、法律！許して、警察の方！！

83、文化祭前から賑わってます!?(後書き)

さあ、楽しい文化祭の幕開けです!!

84、出番は意外とすぐ傍に!?(前書き)

今回は、少し短いです。

その代わり、次回は多分長くなります……。

84、出番は意外とすぐ傍に!?

「さあ、楽しい文化祭の始まりだぜえい!!」

その生徒会長の叫びとともに、歓声上がる。1年は戸惑いつつ、2、3年生はノリノリで、こぼれる笑顔が眩しい。

その中に、入ってきた俺達、何てKYなんだ……。まあ、気付かれなかったから、よしとしておこう。

「さあ、席にっこうか……」

「結婚式の？」

「殺すぞ」

「喜んで」

「死ね、マジで」

「キャハ♪」

……とりあえず、殴つといた。

「てか、俺らの席どこ？」

「知るか、んなの」

「ええ!？」

「だって、初めてだし」

「そうそう」

「え、まあ、そうだけどさ……。そうすんの？」

「空いてる席に、適当に座ってごまかす!」

なんかもう、吹奏楽部のオープニングセレモニー始まりかけてるし。

「じゃあ、私はダーリンの隣で」

「お前は校長の隣でも座ってろ」

「嫌よ! あんなエロオヤジ!!」

……。

まあ、森野の言う通りなんだけどさ。可哀相じゃん、本人聞いたら、泣いちゃうよ? あの人、心はか弱いからさ。バーコードもバー

コードなりに、頑張ってるんだぜ。薄くなってきた髪を気にしつつ、『これ、ヤバいかなあ』なんて呟きながら、日々生きてきてんだぜ。「てかさ、同じクラスの奴見つければよくね？」

「あ」

「……ああ」

確かになあ。でもさ、こう暗いと、見つけにくくねか？

「フフ、何やってんのよ、ジュリエット」

「ジュリエットじゃねえ！」

「あ」

「良美!!」

あ、見つけちゃった。しかもあっさり。楽勝に。

「フフ、さあ、もう準備しないと、間に合わないわよ？」

「何に？」

「フフ、アンタもよ、パシリ」

「パシリじゃねえよ！小橋だよ！」

「フフ、ウザいわね」

……？準備？衣装着るだけなら、準備とか、なくね？

「フフ、さあこっちへ、お姫様」

「姫じゃねえよ」

「姫は私よ！ダーリンの姫は私よ!!!!」

「とりあえずさあ、お前はさあ、死んどけよお」

「嫌よ！まだダーリンとラブラブしてないもん！一つのジュースを二本のストローで飲んでないもん！」

……ベタだな。

「遊園地に行く事も、公園を散歩も、デートも、まだまだしてない事がいっぱいあるわ!!！だから死んだら、悔いが残りまくって、怨霊になっちゃう!!！」

「……」

「フフ、怨霊じゃないんじゃない？」

「しいていうなら、ただの幽霊だよな」

「五月蠅いわよ、影薄!」

「何で俺だけ!?! 斎賀はいいのかよ!?!」

「フフ、アンタみたいな下品な人に、呼び捨てされたくないわよ」
「どこら辺が下品!?!」

「存在全てが」

「……哀れなり、影薄ラー1号」

さりげ、女子の言葉って、グサツと心に突き刺さりますよね。まさに直球ストライク!! バッター空振り三振の悲劇の様にさ。

「フフ、ともかく行くわよ」

「どこにだよ」

腕をつかまれつつ、聞いてみた。

森野は、いつの間にか消えてた。てか、友達見つけたみたいだから、そっちに行ったみたいだぜ。小橋は……どこだ?

「フフ、……それは、ヒ・ミ・ツ♪」

……これほど人を殴りたいと思ったのは、森野以外で、久しぶりな気がした。

「つか、俺らの出番いつ? てか、席どこ? つーか、この曲何?」

「質問多いな……」

「だって、センセの話し、聞けなかったんだぜ?」

「フフ、遅刻するのが悪い。まあ、気付いてなかったみたいだけど」

「何故に!?!」

「フフ、文化祭、大嫌いだからね、あの人」

………何か、嫌な思い出でもあるのかな?

「フフ、それよりも、このオープニング終わったら、次出番だからね」

「1組の後ってことか?」

「フフ、そうよ」

「斎賀あ、しつもおん」

「フフ、何?」

「結局、ロミオ誰？」

あ。

「フフ、この私をなめないで」

いや、なめるなって言われてもさ、困るよな。

「じゃあ、決まってんの？」

「フフ、もちろんよ」

「誰だよ」

「フフ、知りたいなら、私とデート2回ね」

「それはダメ！ダーリンと初デートを飾るのは、私なんだから！
！」

「お前はいつもどこから湧いて出てくるんだ蛆虫iiiiiiii
iiiiiiii！」

演奏なんて関係なしに叫んで、一蹴り。ん？先輩方の目が冷たい
気がするぞ？まあ、気にしない方がいいかな。

「フフ、仲いいわね、相変わらず」

「嬉しくねえよ、悲しいよ」

「フフフ」

……。なんか、イラッとする……。てか、イラッとした……。

「で、誰なんだよ、ロミオ」

「フフ、ロミオはロミオよ」

「確かにな」

「いやいやいや！その、なんていうか……ロミオ役誰！？」

「フフ、アンタよ、小橋」

「だってよ、こば……ええ！？」

マジッすか？え？これ、マジで！？ええ！？マジですか！？！？

「フフ、お父様役、やっぱりいないから」

「いないって酷いぜ！！」

「確かに、いないな」

「俺に賛同するんじゃねえの！？」

「誰がお前なんかの味方するか」

「フフ、哀れね負け犬」

「負け犬じゃない！まだ負け犬じゃない！！」

「じゃあさ、他の奴らは何すんの？俺と小橋だけなんか？」

「フフ、何が？」

「だから、出演者のな」

「フフ、そうよ。だって、表に立って、お遊戯とか、私みたいに
気高い女王が出来ると思ってる？」

「……」

君はまだ、そう思っていたんだね、斎賀……。

「フフ、だから、アシスタントとして、ロミオを応援するわ」

「何故に俺だけ！？」

「何故に俺は蚊帳の外！？」

「フフ、それは、本番になってからの、お・た・の・し・み♪」

今日の斎賀は、いつも以上に怪しく笑った。

そして、1組のアゲパンマン（ただ、上げパンしてる奴らが、ど
んちゃん騒いだけ）は終わりを告げ、遂に、遂にきてしまったよ、
俺の出番……。

「ちよ、俺忘れんなよ！俺も出るからな！俺、一応目立つ役で出
るからな！！」

五月蠅いロミオ小橋、少し黙れ。しめるにしまられないだろ。

「てか、心の声を読むな」

「まあ、それが影薄の能力だからな」

「なんて下品な能力だ」

下品を強調して言って、ガラスのハートを打ち砕いた。

そして、今度こそ、マジで俺らの出番はきてしまったのだ。

84、出番は意外とすぐ傍に！？（後書き）

次回！遂に、遂に全校生徒の前に（保護者も含め）、女装した瀬川の姿が現れる！！

……かもしれません……。 （焦

85、遂に來た來た登場の時!?(前書き)

長い間、更新できなくて、すみませんでした。
風も引かず、熱も出さず、怪我もせず、いたって健康体だったのに、
更新が出来なくて、本当にすみませんでした。

85、遂に來た來た登場の時!?

「さ、張り切っていきましょう!」

「囃むなよ、台詞」

「何故俺だけに向けて言う!」

「フフ、ダメな感じがだだ漏れだからよ」

「どんな感じ!?! だだ漏れって何!?! どこから漏れてんの!?!」

「頭じゃない?」

「頭だな」

「フフ、存在からして」

「……」

まあ、軽く小橋いじりをして、ていうか、何でこんな余裕があるのかな、俺らって。全然練習してねえし、台詞といっても、台本なくしたし。え? 事実ですけど何か?

「ともかく、いつもどおりに行けば大丈夫だよ!」

いつもって、やってなかったじゃんかよ、練習。

「まあ、それなりに、それなりに、うん」

何が言いたいんだ? ミスるなよってか? 遠まわしにミスるなよってか?

「フフ、目指せ全員吐血!」

お前はいつでもどこでも腹黒ですか? てか、何故吐血!?

「落ち着いて——」

「そだ、メイクするからこっち来て、瀬川君」

「はあ!?! 聞いてねえぞ!?!」

「まあ、細かい事は気にするな」

「細かいか? 細かいのか!?!」

「フフ、めいっばい可愛くなってよ!」

「何でお前は楽しそうなんだよ」

「フフ、楽しそうじゃないわよ? 楽しいのよ?」

「……悪女」

「フフフ」

「俺のコメントは無視ですか!？」

「五月蠅いよ、小橋君」

「邪魔くさいよ、小橋」

「フフ、迷惑よ、エセクールボーイ」

「とりあえずさ、黙っておけば？」

「んだよ!なんだよ!!俺は要らないってか!?不必要だってか!?粗大ゴミだってか!？」

「ちょ、五月蠅いんだけど」

先生の目が冷たい。てか、明らかに怒ってる。

「あ、はい。すみません……」

腰低いな、小橋よ。

「もう、怒られちゃったじゃない、小橋君のせいで」

「なんか一気にテンション下がったじゃないか、小橋のせいで」

「フフ、楽しかったテンションが台無しよ、古臭い名前の持ち主のせいで」

「まあ、軽くウザいんだよな」

「てかさ、粗大ゴミって言うか、可燃ごみ？」

「違うよ、生ゴミだよ」

「フフ、違うわよ。こんなのが燃える訳ないでしょ?不燃ごみよ」

「いっその事、リサイクルするか？」

「ああ、それいいな」

「私も賛成!」

「フフフ」

「俺ゴミ以下!?!?てか、ゴミと同じレベルですか!?!?ちょ、それって酷くないっすか!?!？」

「五月蠅い!」

「すみません!!!」

先生の怒りが、小橋のみを狙って突き刺さる。まあ、頑張れよ、

ガラスのハート。

「……親友なのに、このぞんざいな扱いってどうよ……」

まあ、主人公の友達だけじゃ、足りないものが多すぎると思うことだよ、小橋。

「では次ィ！1年2組による、『ロミオとジュリエット（長いんで、略してロミジュリでいいっすか？あ？いい？じゃあ、ロミジュリで）改』でえす！！」

おーい、途中変なの混ざってたよな？てか、絶対混ざってた。つか、余計に長くなってるっしょ。つか、ロミオとジュリエットぐらい、略さなくてもよくね？

まあ、とりあえず、そんなこんなで俺らの出番になったのだ。

＊

「レディース&ジェントルメン！！新感覚（？）っぽい、ロミジュリの始まりだぜこの野郎！」

そんなはじめ方もありなのか！？

てか、なんか人格変わってないか！？変わってるよな、てか、お前ホントに神郷ですか！？

「えと、あの、えと……」

アンタは動揺しすぎだよ、阪下。

「フフ、正直言って、ほんととはよく分かんないのよね、ロミオとジュリエットの内容。まあ、どうでもいいから、適当に話しくつくて」

「て、適当にって、そんなに国語能力ないし……」

「ごまかせ、適当に」

「だから、適当に出来ないんですってば」

「フフ、どうにかしてよ、適当に」

「あの、適当は無理です」

「じゃあ、適当に他の作者様からのネタパクって作っとけ」

「それはいけないことじゃ……。ていうか、適当無理だって!」

「フフ、できるわよ、適当なんだもの」

「いや、適当って難しいです」

「そう難しく考えると、適当じゃなくなるんだ。心の向くまま風の向くまま、気ままにやれ」

「余計にわかんないんですけど……」

「フフ、ともかく、適当に」

「そう、適当に」

え? 今打ち合わせ? 今更打ち合わせ? てか、全部聞えてるよ! ? 丸々聞えちゃってるよ! ?

「……ま、貧しいロミオは、み、道端に倒れました」

いきなり! ? ロミオまだここにいるよ! ? 俺の隣でめっちゃくちゃ焦ってるよ! ?

「じゃあ、突拍子過ぎるだろ! ?」

「え! ?」

「フフ、いきなり話が飛ばないようにして」

だから打ち合わせ聞えてるって! マイク使わない時はOFFにしとけ、コラ! !

てか、ロミオって貧しいの! ? 貧しいって設定でいくの! ?

「ろ、ロミオは言います」

……。

「……」

……。

「言うの待ってちゃダメだ!」

「フフ、まだロミオ、登場すらしてないのよ?」

「あ! ! !」

今更! ?

「ろ、ロミネンスは、山に芝刈り機買いに行きました!」

ロミネンス誰！？何故に山に芝刈り機買いに行くんだよ！！山に売ってるもんじゃねえだろ、芝刈り機！

「ロミネンスじゃないよ、ロミオだよ」

「フフ、山に芝刈り機は流石に……」

ナイス！だけど、マジ恥ずかしいからOFFにして！グダグダ感丸出しだから、マイクOFFにして！！

「ともかく、『むかしむかし』的な言葉でつなげ」

「フフ、そうよ。昔話は、たいていそう始まるんだから、『むかしむかし』的な言葉でごまかせるわ」

「ただだけ適当！？」

「むかしむかし……竹取の翁おきなという物ありけり」

それ違う！違うよ、阪下！それ、もうロミオとジュリエットじゃないから！竹取物語だから！！

「あ！間違えた！す、すみません！」

今更謝るんですか！？今のタイミングで謝るんですか！？今まで散々無駄な事言ってきたのに、今更！？

アッハハハハハ

なんか、会場にさりげなくウケてるし！！何で！？何でだ！？どこが面白いんだよ！！

「むかしむかし、ロミオという、貧しいものがおりませんでした……え？」

「話し終わるぞ、それだと」

「フフ、始まってもないのにね」

「あ！素で間違えた！！」

今までの素じゃなかったのか！？わざとだったのか！？

謝れ！ここまで一生懸命に読んでくださった皆様と、会場にいる人全員に謝れ！！

「ゴッホン……。むかしむかし、ロミオというものがおりました」

「……これって、俺舞台に出るべきか？」

「……一応、言っとけ」

「……この空気の中？」

「……健闘を祈る」

「………まだ死にたくねえな」

死ぬと決まった訳じゃない。頑張れ、小橋。負けるな、小橋。冷たい視線&冷ややかな態度&人前に建つという重圧感にたえろ、小橋。

「彼は、町の城に住む、ジュリエット……なんだっけ？」

「ジュリエットだよ、ジュリエット」

順調に行きそうだったのに、いきなりつまずいちゃいますか！

「町の城に住む、ジュリエットに恋心を寄せて……いや、馳せて？　なんか違うな……。思いを寄せていました？」

聞くなよ。ていうか、いくらアドリブだからって、無駄な事を言い過ぎるな。

「ああ、ジュリエット。愛しのジュリエット」

頑張って小橋が芝居をする。

……芝居というか、ロボットダンス？　うん、きっとその方が近いな。

「けれども、彼はとても貧しい。だから、城に足を踏み入れる事さえ出来ませぬ。姫の顔を見ることが出来るのは、祭りのときと、特別な日だけでござんした」

何だ、何弁だ。ていうか、何故にちよつと古臭い言い方を！？

「思いが届かないと分かっているけど、ロミオはジュリエットを愛し続けました」

ジュリエット違うから。ジュリエットだから。

「暑い日も寒い日も、雨の日も風の日も、季節が巡りめぐっても、彼女の事だけを愛し続けました」

お、ちよつとまともになってきたんじゃね？

「逢えないとは分かっています。けれど、もう一度、貴女に逢い

あなた

たい……」

いくらなんでも、カッチンコッチン過ぎねえか、小橋よ。

「そんなある日、彼に幸運はもたらされました。なんと、城でダンスパーティーがあるそうなのです」

なんか、違う話になりかけている気が……。

「それは、町の者と親睦を深めるためのパーティーです。もちろん、貧しいロミオにも、そのパーティーに行くことは許されています。けれど、着て行くものがありません」

……ますます違うものに近付いてね？

「そこで、魔女があらわ……って、シ〇デレラになっちゃった！
！」

……自分で言っちゃうのね、そこは。まあ、気付いただけ、よしとしておこう。

「……うーん、と、とりあえず、今来ている、その服のままでパーティーに行く事を、ロミオは決めました」

お、進んだ進んだ。

「例え汚い服でも」

「そして、その日はやってきました」

おーい、かぶっちゃったよ？台詞かぶらせちゃったよ？いいのか？このまま続けちゃうのか？もう、グダグダだから、どうでもいいのか？

「愛しきジュリエット！待っていてくれ！今、逢いに行きます！
！」

はい、普通に感動さくをパクるな。お前もだぞ、作者。パクって、その場をごまかすな。

（はあい）

って、いたのか！？

（まあ、ヒマだし）

ヒマなのか！？

（いんや、ヒマじゃないよ）

どっちなんだよ……。

（まあ、細かい事は気にするな）

細かいか？これ……。

（多分……）

まあ、作者とのくだらない会話の間に、いつの間にか、ジュリエット、登場の時が来ていた。

ああ、マジ最悪……。

85、遂に來た來た登場の時!?(後書き)

ふう、やっと話が進みます。
まあ、地道になんですけど……。
(焦

86、適当は重要!?(前書き)

長らく更新を止めてしまって、すみませんでした。この小説が進むのを楽しみに待っていてくださった方、待っていてくださった方、大変申し訳ございません。

作者は何も言えませんが、これからこんなに長く休まないよう、気をつけてまいります。

86、適当は重要!?

あゝ、次なんて言おう？何て言えばいい？誰か助けてくださいなあ……。

って、今回は私視点なんですか？えっと、ども、阪下です。今、次のナレーションを考えております。

ロミオとジュリエットを会わせるとして、どうやって会わせようかな。劇的な感じで？って、これ劇じゃん。まあ、とりあえず、適当に適当に……。

「き、煌びやかなダンスホールに不釣り合いなロミオは、一人部屋の墨にいました」

「フフ、その発音じゃ、『隅』じゃなくて、『墨』よ」

んはっ！またミスった!!

「炭に居ました!!」

「……それも違うよ」

んなっ!! 再びミスった!!

「隅に行きました!」

よし、OK!

で、小橋君がさらに影薄くなって……なんか違う？まあ、いっか♪

「そこへ、彼女はやってきたのです」

後は任せたわ! 瀬川君! & 小橋君!!

キャアアーーーーー!!!

んゝ、なんかのコンサート中みたいな素晴らしい反応。まあ、可愛いからね、瀬川君。今だけだけどさ。あゝあ、どうせなら、瀬川君に生まれてきたかった……。あんなに可愛いんなら、瀬川君になりたい……はあ。

(……彼の苦勞を知らない人の発言だよ)

あれ？なんか聞えたような……。

（ハゲと言われ、チビと言われ、カスと言われ、雑魚と言わ――

――

「誰がそこまで貶されてるかあああああ！！」

（げほっ！）

わお！上履きが飛んできた！！しかもなんかに当たった！あそこ
からよくここに当てられたね、瀬川君！ていうか、聞えてるの！？

（しゅ、しゅじんこーをなめちゃいけないよ）

なんか、……死んだ？

「フフ、ご愁傷様」

「作者のくせに、哀れな奴」

え！？作者様！？あの、私には見えないんですけど……。
って、それどころじゃなくない！？話し進めないと！！

「あゝ、なんつーか」

瀬川君！今一応女の子なんだから、言葉遣いに気をつけて！

「ヒマか？」

なんかバツサリジュリエット！

「ヒマですとも」

普段の会話！？

「じゃさ、えっと、……なんだっけ？」

聞かないでよ、ジュリエット！そしてこっちを見ても困るよ、ジ
ユリエット！！

「ダンスでも踊る？」

「音楽もないのに？」

「いや、流れるよ、きっと」

「きつとだろ、ゼツテエに流れねえよ」

「仲間を信じてあげようぜ！？」

「やだ」

バツサリ酷いし、やっぱ日常会話になってる！！

ちよ、これ、一応劇だから！ハチャメチャな感じの劇だから！読

「今の埼玉!？」

「そうかもね」

「かもね!？」

「じゃあ、そういう事にしとけ、もうめんどいから」

「そんな理由でいいのか!？」

「いいんだよ。この世は適当でできているんだ」

「どんな学論!？」

「んゝ、ま、適当に」

「……もういい」

……ツツコミ、お疲れ様でした、小橋君……。

(て、ことで次回に続けちゃう?)

え? 私に聞くんですか?

(ダメかい?)

いや、だって作者は貴方じゃ……。

(そこを気にせずいきましよう)

……じゃあ、続けましよう。

(じゃ、大阪城へゴー)

＊

やって来た来た大阪城(某小説の某様から頂いたレプリカです)。
やって来たと言っても、いつの間にかあったんですね、グラウン
ドに、大阪城が。朝はなかったのに……。

「ということで、」

どういうことで!?!? これ、絶対生徒さんも保護者様も思ってる事
だよ!?!?

「第一回大阪城(実物大レプリカ)で迷路大会い」

イエエイ!!

なんか異常に盛り上がってる!

「それではあ、ルールを説明したしません」

え!?!しないの!?!ルール重要なのに!?!

「そういう説明系は嫌いなので、作者にバトンプス」

何故作者さん!?!

(何故に私!?!)

「ん?どんな小説でも、説明するのは作者と決まっている」

(でもさ、主人公だって)

「決まった事だ」

(いや、でもさ、)

「決まったんだよ」

(あのね)

「説明ぐらいしろ、ヘボ作者」

(ヘボじゃない!)

「じゃ、よろしく」

……哀れだね、作者さん……。

(どっほん、ルールは難しい)

難しいの!?!

(と思うかもしれないけど簡単)

……。

(ちょ、冷たい目で私を見ないで!?!)

……自業自得ですよ。

(ルールは、この大阪城に仕掛けられたトラップを潜り抜け、一番最初にジュリエットに出会えたら勝ちです。OK?)

OK!!

なんか、ノリいいですね。

（そして、その名誉をたたえて、一日主人公（女装のまま）貸し出します）

「何言ってんだよ!!」

イエエイ!

「そこ! 喜ぶなああああ!!」

あ、誰かに当たった、上履きが……。ていうか、瀬川君の命中率高っ!

（じゃ、主人公よ、最上階で待っててくれ）

「ヒマそうだな」

（大丈夫、暇つぶしは満載だよ!）

親指を立てて、グッ、ってする作者さんに、

「ならないぜ」

瀬川君も同じようにして去っていききました……。

（あ、誰でも参加していいから。適当に頑張ってくださいあい）

うおおおおおおお! 萌えてきたぜ!!

……いや、萌えるの字が違うと思います……。

「フフ、なんか、面白い事になっちゃったわね」

「意図的にな」

「どうするんだよ」

「フフ、それは作者任せよ」

「だな」

「……限りなく心配だ」

「フフ、どうにかなるわ、適当なもの」

「ある意味、名言だな」

「はあ」

ため息をついて、幸せが逃げていく小橋君でありました。

86、**適当は重要!?** (後書き)

週に一回更新を目標に頑張ります。

87、いざ大阪城！？（前書き）

これ、ギリギリ週一回更新成功ですよね！？
ギリギリセーフ、スライディング的な感じで！！

87、いざ大阪城!?

いきなりですが、一つ言わせてください。もうこれ、ロミオもジュリエットも関係なくなってますよね!? ただのどんちゃん騒ぎになってますよね!?

「……はあ」

「ため息ついてると、幸せ逃げるぞ、勇者ロミオよ」

「んだよ、魔王め」

「魔王じゃない、ただの狩燐だ」

「あそ」

あ、今気付いた。今回は俺視点なんだ。やった! 影薄の汚名返上チャンス!!

「あ、赤星だ」

「狩燐、おひさあだね」

なに!? 俺の知らない人物が今ここに!! しかも何このなまり、何なのこのなまり!

「お前もやんの?」

「歌聴くより、ナゾとかそーゆーのがすうきだからね」

「ああ、分かる」

「歌?」

「歌じゃなあいよ、赤星。よろしく」

「え、ああ、よろしく」

……何気にフレンドリー。いい人っぽくてよかった。うん。

「てか、お前知らねえの?」

「何をだよ」

「歌って踊ろうとしてる怪しい三人組」

「歌って踊ろうとしてる……」

歌って踊れる三人組じゃないのか……。

「なあんか、突然出てきて、歌うたってよ」

「そうそう。なんか見たことある気がすんだけど、思い出せねえんだよな」

「しばらく暇になるお客サマーのために、歌うらCD」

……。

「お前も混じってくれば？ 変な冷たい目でみんな見てくれるぞ」

「イヤだから！」

「よおろこぶとCたら、瀬川のストーリーカーくらいだあね」

「だあな」

うつった！？

「ちみ達も参加かい？」

ちみ！？ 君じゃないの！？ ちみなの！？

「えっと、どちらさん？」

「猪上正樹様だ」

「じゃあ、マサで」

「いきなりあだな呼びかい、ちみ！！」

「そうだよ、チビ」

「チビじゃない！」

「元氣なこった」

まったくだな。てか、汗かきすぎだろ。何百メートル全力疾走したんだよこいつ。

「森野美咲、久々にダーリンのために登場！！」

確かに久々だ。ヒロインのはずなのに出演が少ないヒロインだから、久々だ。ていうか、女子の参加も可なのか！？

（まあ、何でもあるだからね）

いやいや、何でもありすぎだから！ もうちょっと苦労というものを知らない！！

（部活で十分苦労してんだよ、ヘボヘタレ影薄ラー1号）

何て長いあだ名つくんだコラ！！

「ダーリンは誰にも渡さない！」

「どーでもいいけど、暇つぶうしになれば、それでいいんだな」

「ま、適当に真剣に行こうかな。作者の事だから、警戒しねえと」
「……ダイエツト」

一人目当てが違います！というか、みんな目当てが違います！！
(まあとりあえず、そろそろ始めよっか)

「イエッサー！！」

みんなで合唱。でも、一人だけ発音がちがった気がする……。
まあ、いいか。

そして、作者(鴉)が説明を始めた。

んじゃ、これからテキストにルール説明するからよく聞きなさい。

「はあい」

入り口は、人数分用意され、別々のルートとなっているために、
他のプレイヤーと会う事はないでしょう。

「作者！、質問」

なに、狩燐。

「何故にプレイヤーなんですかあ？」

ん？ゲームっぽくしたかったから。

「了解です」

「納得していいのか！？」

五月蠅いよ、お箸。黙ってなさい。

「お箸じゃないです！こ——」

けれど、一階登るごとに、必ず誰かとぶつかるようになっていま
す。何もないと、つまらないですからね。見ている方も。

「無視！？」

2人一組に戦うようになっており、よりいい武器と、そんなによ
くない武器が置いてありますからね。それに注意してください。一
階には武器と防具のセット、二階には作者の特権により使える魔法、
三階には最上階へと続く階段の鍵があります。だから、より早く仕
掛けられたトラップを解き、上へ上がり、いい物を取れるようにし

てください。

はい、ここまでで分からない事は？

「はあい、質問」

なに、赤星。

「トラップはルートによって数がちがったりするんかね？」

おお、いいところに目をつけたね。

ズバリ、言おう。ルート選びが一番大切。一番難解なルート、次に難解なルート、少し近道できるルート、一気に戦う部屋まで行けちゃうルートがあるから、よく考えて選ぼう！

「じゃあ、もし負けた相手がいいルートだったあら、そっちに行ってもいいのお？」

もちろん！でも、一階入ったら扉は閉まるから、後悔しないようにね♪

「レジャー」

「ラジャーじゃね？」

そこ、五月蠅い。

「何で俺限定に——」

あ、そうそう。途中で抜けたり、ギブアップはなしだから。やめるなら今のうちね。入ってから後悔して戻ったら、私からの鉄槌が下ります♪

「具体的に言うത്？」

「なあ、また無視!？」

「ううさいいよ」

「そうだよちみ。ルールは静かに聞きたまえ」

「集団でイジメか！」

うっさい!!

ドゴオオオオオン!!!!

……けほっこほっ……。

こ、こんな感じで、神の鉄槌かみなりが落ちるからね……げほっごほっ。

「お、OK……」

んじゃ、砂埃と黒焦げの影薄を無視してスタートオ！

87、いざ大阪城!?(後書き)

戦いの火蓋はきって落とされた。

……すみません。カッコよかったんで、一回言ってみたかったんです……。

88、作者の意図など気にしない!?(前書き)

前回の更新から間が開きすぎてしまい、すみません m
深くお詫び申し上げるとともに、土下座いたしますっ
〔
m

88、作者の意図など気にしない!?

ルート選びは重要だと言ったのに、奴らは適当に散っていった……。作者の言葉は信じる気がないんだよね、きつと……。

まあ、そんな事はさておき、慎吾のいる部屋で奴らを観察しますかなあ……。

「んー、マジか……」

入り口入った途端、断崖絶壁の前にいる狩燐。はてしなく上まで見上げちゃってます。

「登るしかねえなら、仕方ねえなあ……」

おお、君はそれを登ってくれますかあ。作者の作戦としては、嬉しい事山のごと……。

「せいやつ!!」

ええええええええええ!!

ちよ、なんか、え、ちよ、これ、ええ!?

「ふう、これで登れるな……」

いや、それ、登るといふか……。まあ、確かに登るけどさあ……。どうやってその断崖絶壁破壊したのさつ!! 作者的には、もっと苦しんでくれると思ったのに!!

「洞窟で拾った爆弾^{ゴキブリ}、とつといてよかったな」

んなもんとっておくなよ! っていうか、拾わないでしょ、普通なら見た目ゴキブリですよ、ゴキブリ!

「こんな楽でいいのかよ、作者はやっぱダメだなあ」

聞いてないと思って、何をぬかすかつ! 確かにダメだと思うよ! だけど、はっきり言わないで! 傷付くから!!

「まだ何個あるし、これなら楽そうだよ」

……。

こ、この子の観察はやめておこう……。

「くれえよう、こええよう……」

どこから聞えるんだ、この声は！つかどこにいるんだ！

「最悪だあ、暗いの嫌いなのによう。助けてえ、作者あ」

……んだ、影薄か、こいつはスルーでいいや。

そして、暗いせいもあるだろうが、お前が全く見えんぞ。そして
そっちは、

「いだ!？」

行き止まりだ♪

暗闇迷宮は小橋かげうすが入ったか……。んー、観察したいきがしてきた

が、暗さと影の薄さで位置がいまいち分からんぞ……。少しだけ、
明るくしてやるかな……。

「……」

……。

「……」

………何かしゃべれやこのクソデブが……。

「仕掛けというものは、スイッチを踏み、大玉が転がってきたり、
矢が飛んでくるものだとかボクは予想していたが、これはなんなんだ」
謎という名の仕掛けです。文句があるのか、この野郎。

「だいたい、最近更新サボっていたくせに、なんなんだこのだら
けた文章」

……。

「ボクはもっとう、ドキドキわくわく汗が吹き出るようなもの

を予想していたのに」

ドキドキわくわく汗が吹き——って！

お前のダイエットのための企画じゃねえよ！これ！一応文化祭の出し物だぞ！てかなんだよ、ドキドキわくわく汗が吹き出るようなって！！

「ボクは自分の意思でやるのが嫌いなんだよ。全く、これだから最近の若者ぐはぁ！？」

一匹のブタ、駆除終了。こいつに、ロミジュリに出る資格はない！！

って、これロミオとジュリエットって舞台だったんだっけ……。

「ずわいがに！」

食べてみたいね！でも君さ、言ってる事とすべき事が違いますよ！？

「ほたて！めばちマグロ！サーモン！いくら！うに！タラ！鯖の押し寿司！」

だからさ、違うってば！！

「これでもまだ違うって言うの！？」

渋いトコついたけどさ、やってる事違うんだから、違うに決まっているでしょうが！

なぜそこにある寿司を食べないのだ！あったら食べたい気持ちが生まれ、自分の心の中で葛藤し、このチャンスは逃すまいと、思わず手が伸びるでしょう！

そういうものでもないけどさ！！

「秋刀魚！甘エビ！赤貝！ほたて！」

ほたて二回目！

「大トロ！中トロ！トロサーモン！ネギトロ！」

いい加減気付いて欲しい……

「あわび！焼きナス！納豆巻き！かんぴょう巻き！」

今お前の目の前にある、立て看板に……。

「カツ○寿司！！」

それお寿司屋さんの名前だから！

「さあ、だれかツツコミなさい！」

なんだと！？

「それが私の生きる糧エネルギーとなる！！」

お前は1人でもボケるのか！そしてひたすらにツツコミ待ちですか！！慎吾がいたら、ぶん殴られてるぞ！！

「いいわあ……感じる、感じるわよ！」

何をだ！！

「みんなのツツコミが、私には伝わってくる……！」

どういう妙技！？てか、そんなもんいつの間に身に付けたんだよ！

「森野美咲こと瀬川美咲」

いや、本名を偽らないでくれよ……。

「全身全霊を賭けて、このおいしそうなお寿司を全て平らげさせていただきます！！」

全身全霊かけてなくてもよくない？ていうかさ、最初からそうして！！

88、作者の意図など気にしない！？（後書き）

久しぶりの更新で、内容が変ですよね……。
ふう、頑張らねば……。

89、暇人達と、ヘタレと馬鹿!? (前書き)

気が付けば、アクセス数10万突破!

長い間更新できなくて、楽しみに待っていた方には申し訳ありませんが、嬉しい限りです!

これからも、ちまちまと頑張らせていただきます。

89、暇人達と、ヘタレと馬鹿!?

「暗いよう……これ、暗すぎだろう……」

そう呟きながら、影薄よ、何時間そこに居座るつもりだ! 早く動き出さない! てか、仕掛けどうにかすれば、ここ明るくなるんだからね!

「かげえん! 俺、俺、……無理だろう」

おま、それでも男ですか! ? ていうか、どんだけ情けない声あげてんのさ!

「もう、1人じゃ怖くて進めねえよう……ぐす」

泣くなよあほんだら! ちよつと哀れになるじゃないか!

「明かりをお、日の光りをお……」

だから、仕掛けをときなさい、仕掛けを。

こいつはこれ以上見てられんな。次行こ……。

「ごちそうさまでした! 有難うございました!」

はい、お粗末さまでしたあ。……って、食べ終わるの早くね! ? 10人前の寿司をたった数分で食べきるとはっ! お前、どんな胃袋してるんだ! ?

「次もまた、よろしく♪」

楽しんでるし……。

あ、森野よ、そっちは——

「ぐはっ! ?」

行き止まりだよ……。

「いい度胸ね、私と殺りあおうって言うの!」

いや、それただの壁だから。何の仕掛けもない、ただの壁ですから。

「これが作者の言ってた仕掛けね。でも、手ぬるいわ！」

いや、だからね、それはただの壁ですから。

「さあ、かかってきなさい！ どんどん痛めつけちゃいなさい！」

こんなところでもM心は忘れないのね！？ ていうか、反対側に道あるからね！ ここはただただ食べて進めばいいルートだからね！ 仕掛けなんてございませんよ！

「どうしたの？ あなたはSじゃないとでも！？」

Sじゃないですね、壁ですね。

「あなたはSだろうが、Mだろうが関係ないの！ 私に快楽を！ 生きる糧を！！」

まだ言うか！ それは壁！ 森野はただのM！ それでいいだろうが！
！壁に生きる糧を求めるな！！

「さあ、おいでなさい！ とうか、痛めつけてくださいお願いしますから！」

なぜ土下座！？ 土下座する理由がどこに？

「そして一つ言わせてください！ ちょっと調子に乗って食べ過ぎました！！ 気持ち悪いです！！」

ヒロイン！ 食べ過ぎて気持ち悪って、ありなのか！？ それでもお前はヒロインなのか！？ てか、それでいいのかヒロインよ！

「うっぷ……は、はきそう……」

場所変えましょう、場所。

「……」

……。

「……はあ、ねみい」

……狩燐よ、あの一番最悪のルートを選んでおいて、戦闘ルームに一番乗りですか……。

「ヒマだあ」

そりゃそうだろうがよ。なにせゴキ……爆弾使うなんて卑怯な手を使ったんだからな。

「戦うんなら、赤星がいいなあ……」

あ、彼の観察、忘れてたわ……。

「ねみい、ねみいよ。そして平和だあ」

それは多分、お前だけだよ。暗闇で泣いてる友達でも助けに行ってくれ……。

「……」

……………。

「……ふう、誰もいないいいじゃなあイカ」

同じ始まり方で悪いですが、赤星も戦闘ルーム待ちっておい……。装備もしっかりしやがって……。

「しかし、あんな簡単でEとは、作者さん、どうしたんだろお」

いや、簡単じゃないはずだから。てか、簡単じゃなかったからね、君のルートも……。

「麻痺だあな」

いや、麻痺じゃなくて、ヒマでしようが……。

「しかあし、たたかうんなあら、狩燐とがいいなあ」

狩燐もそんな事言ってたな。

「他の奴じゃあ、なんかあなあ」

暗闇でなくヘタレ影薄と壁に生きる糧を求める馬鹿Mの事ですかな。あ、あとクサレ豚やろうもいたのか。まあ、豚の丸焼きにしてやったが……。

「とりあAず、寝てようかんかな……」

寝てようかん……ってなんだよ。

しかし、他の奴らは遅くなりそうだし、戦わせちゃおうか……。

（おーい、その暇人A！）

「Aじゃない、赤星だ」

（さいですか）

「でえ、なあんだ？」

（その他もろもろは、ちんたら泣いたりMったりしてるから、暇人Bと戦わせてやる）

「Mったりってえ？」

（マゾってるってこと。以上）

「さいですかあ」

（で、暇人Bと対戦になるけど、装備はそのままでもいいよ）

「わかあったあよ」

（んじゃ、移動するぜおっ！）

「寝るかなあ。暇すぎて寝そうだぜ……」

（はあい、暇人Bよ、こんにちは）

「暇人Bじゃないよ、Aだ」

（え、あ、はい、すみませんね……って、普通なら狩燐だっとうところだよね！？）

「まあ、それはあれだ、気にしない事だな」

（……いいのか……）

「Eんじゃないの？」

「お、よう、暇人B」

「Bじゃない、元Aだよ」

「そうなんか」

「そうなんだあよ」

（で、暇人達よ、他の奴らは時間かかりそうだから、特別にお前らで戦っていいからね）

「了解ー」

「わかったあよ」

（ルートは、赤星か狩燐のか、選べるから戦い終わったら名前呼んでねえ）

「ほいほい」

「レジャー」

……つつこんではいけない、つつこんではいけない。ツツコみた
いけどね！

（では、健闘を祈るよ、二人とも）

89、暇人達と、ヘタレと馬鹿!?(後書き)

次回は、赤星と狩燐のバトルにするか、アホ達の観察にしようか…。
…。
んー、悩みます…。

90、邪魔者排除!?(前書き)

あけましておめでとうございます!

これからも、じみっちに頑張っていきますので、応援よろしく願
いいたします。

そして、今年もよろしく願います!

90、邪魔者排除!?

戦場といえ、張り詰めた緊張感と言うものが滲み出ているはずのもの出ると、私、下弦鴉は思うのですが、何だコイツらは……。

「まさか、本当に戦えるなんて思ってたぜ」

あははーと笑う狩燐に、

「俺モーだよ」

なんていう赤星。

あの、確かにこれはコメディーまっしぐら目指した作品だけどさ、たまにはピンと張り詰めた緊張感あってもいいじゃないさ。それがこのバトルのはず、はずなんですよ、読者の皆様!!

なにこのほんわか日常会話ムード!これ、同窓会とかそういうんじゃないよ!?!ばしばし戦う、戦闘ムードになるべきのトコだからね!なのに、なぜほんわかしてるの!?!笑いあっちゃってるの!?!

「あ、そうだ赤星」

「なあんだ?」

「これ、夏休みのお土産」

「おぉー、ありがあと」

って、何渡してるんですか狩燐君!?!ちょ、それ、さっき使ってた爆発Gじゃない!?!そして、何の抵抗もなく受け取る赤星も何!?!Gは怖くないってか?Gは敵じゃないってか!?!

「それ、扱い気をつけろよ」

「なんDだ?」

「貸してみ」

ん?何をする気だ???

「これは、こうやって」

え、なに腕ぐるぐる回してるの?え、ええ???

「いってこーい!」

え?え!?!ええええっ!?!

なんですとおおおおおおおおおお！！！

ドゴーーーーーン！！

「つて、作者いじ……爆発させるもんだ」

「なるほどお」

「むやみやたらに投げるなよ。意外と危ないからさ」

「りょーかいだよ」

「まあ、こいつうぜーって思ったやつに投げるのが一番たの……
とりあえず、投げてるだけでいいぜ」

「なかなかおもCろいもの、ありがと」

「うまく使えよ」

……く、くそう……ふ、ふか、不覚だった……。

てかおい！狩燐のやつめ、なぜ私に投げた！なぜ私の存在がバレた！お前らに見つからないように、透明化したのに！！

そして、作者いじめに使うっていう言おうとしただろ！んで、

私がウザくて、ストレス解消に使いやがったな！なにが一番楽しい
じゃ！不愉快じゃボケイ！！

「じゃあ、俺もたあめCに」

ぬ？

「いいか、掛け声が大切だぞ」

「おう」

「精一杯叫んで、邪魔者を排除だぞ」

「妖怪」

妖怪！？了解の「り」を忘れたのか！？

「んじゃ、思い切っていけよ」

「まあかせとK」

ん？デジャブな光景……。腕ぐるぐる回すのが赤星になった……
てことはあ。

まじか！？え、まさかね！？な、ないよね、二度目はないよね！

きつとないよ、ないよね! ? そうですね、読者様! !

「いっしょにー！ー！」

ちよ、え、ちよつとま、ちよ、まじかああああああああああ！！！！

ドゴー！！！！

「うん、ナイスヒット」

「クリティカルヒットだったあな」

「さて、邪魔者は排除したし」

「はじめよおか」

なZ……なぜわ、私の位置がわかったんだ……バタリ（死

90、邪魔者排除!?(後書き)

狩燐「作者負傷により、次回からは個々それぞれの視点からになりますー」

91、腹が減っては戦はできぬ!?(前書き)

地道に地道に書いていたら、ものすごく長くなってしまったので、前後編にしようかと思いましたが、自分なりに纏め上げた結果、こんなになってしまいました。最後まで読んでいただけるとありがたいです……。

91、腹が減っては戦はできぬ!?

空を切る鋭い刃。鎌鼬のように次々と繰り出されるそれを、なんでもないかのように避ける赤星は、やはり只者ではないように、止まる事を知らない刃を操る狩燐もまた只者ではない訳だ。

ん？作者視点ばくはないかって？作者じゃない、俺様だこのやろう。久しぶりに出番が来たと思ったら、ナレーションとかふざけてるよな。うんうん。

つーわけだから、主人公である俺、瀬川慎吾が最上階のモニターより、赤星と狩燐の戦いを伝えてやるよ、感謝しやがれ。

ん？なんかキレてないかって？気のせいだ、多分。俺は出番が全然なかったから拗ねてたり、女装し始めてから感じる視線が鬱陶しかったり、作者の更新速度が遅すぎる事に怒りを感じてなど断じてない。否、感じるはずがないんだよなあ。

まあ、そんな事はトイレットペーパーに丸めて流して。

短剣の扱いに慣れてる狩燐の攻撃から、赤星がなぜかすり傷一つつけずにいられるのか。んで、短剣の扱いになんで狩燐が慣れてるか、めんどくささ100%で教えてやるよ。

まず赤星。

のおんびりのおくんびりしゃべる事、つかみ所がないのがやつの特徴であるが、それは全くの演技って言うかなんと言うか。まあ、とりあえず、演技で。

奴は先祖代々護衛役、いわゆる、まあ、うん、あれだな、うん。

水戸黄門で言う介さん角さんみたいな仕事を生業としていたわけだ。何流っていうんだったかな……。剛柳赤星流？べつりゅうあかほしりゅう鋼の様に固く、柳のようにしなやかに。それがモットーだったはずだ。そのの、次期後継者だから、奴は狩燐の短剣も見切れるって訳だ。

で、狩燐はってーと。

一言で言う殺し屋。暗殺者の末裔だな。親父さんもその道をちよつとはかじってる。まあ、狩燐ほどじゃねえけどな。

狩燐は、じっちゃんから人を一撃で殺す方法、闇に紛れる方法、暗闇の中で生きる術の全てを学んだ、これまた次期後継者だな。赤星の奴よりも、ずっと古くからある家系だから、殺しに関しちゃう奴はプロだね。狩燐の殺り方は独自のものだから、なんとか流だのいう宗派は全くない。それに関しての情報も、その家の中でしか広まらない。まあ、広まってもおかしくはねえけど、広まる前に消えるだけだね。

で、奴らの説明はもうめんどくさいから終わりな。分からなかったら文句を作者に言うように頼む。なぜかって？そりゃあ、面倒臭いからだ。

赤星は光、狩燐は闇。簡単に言えば、こんなもんさ。光と闇の衝突な訳で、奴らは望まなくてもいつかは戦う宿命だ。ああ、なんと数奇な人生か。

なんて言ってみたり。

俺も詳しくは知ってるわけじゃねえし、触れてもいない。つか、触れようとすると目が怖いね。特に狩燐。それでも仲良くしていられんのは俺の心の広さだな。

おい、心広くねえだろってツツコンだだろ！どこかだ！ヘタレ作者よりMよりその他諸々よりは広いだろうが！

まあ、余談はここまでにして、長かったと思うなツツコムな愚痴るな。じっくり奴らを観察しようじゃねえか。

＊

見てる方からすれば、優位に立っているのは明らかに狩燐だ。そりゃそうだ。狩燐は剣術。赤星は体術。やたらに手を出せば、赤星はあの刃の餌食になるしかない。だから、狩燐の隙ができるまでは、あの鎌鼬をかわし続けることしかできねえ。

「そういえば、一つ聞き忘れてた」

「なあんだよ」

「……友達だからって、手を抜きすぎじゃねえよ」

「……」

冷たい、血の通わない狩燐の言葉。痛いねえ。直には聞きたくないわ。

「お前の流派と俺の家系じゃ、相容れることなんてできねえんだ。それを分かっているはずなのに、お前らは……」

いつもより余計に狩燐の目が細く鋭く見える。

「何で今更になって、手を組もうなんて言い出した？」

「なっ!？」

焦る赤星に、一瞬だけ隙が生まれる。もちろん、それを狩燐が見逃す訳もなく、無感情な刃が赤星に襲い掛かる。

「……俺らは光と闇だ。分かち合える事なんて何もねえんだ」

「なあんで、その事を狩燐がCってるんだ？」

「次期後継者だから。それだけだ」

あの一瞬の隙で、狩燐は赤星の急所を狙って短剣を振ったが、赤星は頬にかすり傷を一つつけただけでいる。ただし、バランスを崩して尻餅をついてしまったようだ。見下す狩燐の目が冷たいのなんのって。

ていうか作者よ、血が出てるぞ! 大丈夫なのかこれ!? もし、もしもだぞ、万が一に狩燐が赤星をこ、殺そうとしたらどうするんだ!

(大丈夫、血が流れてるように見えてるだけで、本人は痛いという感覚だけが伝わるようになってるからねえ)

そうか、ならいいや……。ってバ鴉!?

(バ鴉はないんじゃない!? ちゃんと考えてやってるんだよ、こ

れでも！)

バ鴉も考えるって事ができたのか……。

(考えますとも！)

まあ、怪我してはいないってことだな？

(うん。相手から見て痛々しい格好になったとしても、現実全
くの無傷。ただ精神的にダメージうけるだけ)

……精神的ダメージの方が痛くね？

(この二人と、影薄とMなら平気でしょ)

ああ、そうか。この二人は大丈夫か。影薄は影薄なりに影薄つて
るし、Mはその存在自体が精神的ダメージの塊だからな。うん、心
配点ゼロ。

つい前話で負傷したんじゃないのかよ、ちっ。

(痛かったよ、ものすごく。負傷したけど頑張ってるのよ、鳥な
りに。ていうかなぜ舌打ちした！？)

気のせいだ。

(いや、気のせいじゃないだろ！？)

木の精だ。

(……ごめん、まだ平気じゃないみたいだから、この後任せたよ
……)

おう、あの世でも地獄でも逝って来い。

(薄情者めがっ)

二度と現れるなヘタレ作者め。

「お前らが護った命だけ、消えた命があるのに」

「……だろうなあ」

「なのになんで今更手の組もうなんだ？」

狩燐は短剣をきつく握る。怒り、憎しみ、憎悪。こんな怖い目を
した狩燐を見るのは初めてだ。

「……俺は何も聞いてないよ」

「……そんはずねえ」

少し間を空けて、狩燐は大きく深呼吸をする。

「前、俺の家にお前の師匠が来た」

「……」

その言葉に赤星は眉を少しだけひそめて、すぐにまた無表情に戻る。

「『争いは争いを生むだけだ。もう、いがみ合うのはやめよう。後継者とももう話し合った』と、こっそり聞いた」

「それえで？」

「それをお前は知らないはずがないだろう？　なんで知らないなんて言っただ」

狩燐が赤星の首筋に切先を向ける。少しだけ食い込んだそれに、血が伝う。

「……知らないから、知らないってEったんだ」

「ウソを言うな。……師匠に何か言われたのか？」

「……」

「そうなのか？」

「……言うなって言われてたのに。仕方ないか」

「……？」

む、ん？　赤星が標準語でしゃべってる？　え、あの変なしゃべり方じゃなくてか！？

っと、俺は騒ぐところじゃねえよな。うん、ダメだ、つつこみ魂に火をつけるな。水かとけ水。

「はつきり言うとな、僕らの流派は潰れかけてる。否、消えかけてるとでも言おうか。狩燐の家は代々息子が継いでるからいいものの、こっちはどこの馬の骨とも知らない奴に継いでもらわないといけないときがある。そのせいで、純粋な鋼柳赤星流が薄れ始めた」

「それと組む事は関係ない」

「そっちになくても、こっちにはある」

「目的はなんだんだよ」

「……」

「……黙るなよ」

さらに狩燐が短剣を突きつける。ほぼ赤星は寝転がった状態だ。そして、赤星のしゃべり方に違和感を感じるのは、絶対俺だけじゃない事を信じてる。

「護りと攻めが手を組めば、より発展に繋がる」

「……つまり、俺らを利用して、自分達を護ろうってか」

「そう言われちゃうと、そうとしか言えないね」

たははと苦笑いする赤星に、狩燐は不満で顔を歪ませる。

「そのただけに、あの師匠が来るとは思えない」

「あはは。狩燐は勘が良すぎて困るよ」

「……」

「あれは偵察もかねての訪問だよ」

「やっぱりか……」

「消えそうな僕たちを抱え込んでも大丈夫なところかどうか。今の当主の実力はどうか。……次期後継者の育成状況も覗きたかったけど、会わせてもらえなかったらしい」

「家の門に、お前の師匠が見えた時点で、部屋を出るなと閉じ込められた」

「あれ？コッソリ聞いてたんじゃないの？」

「逃げ出すのも戻るのも、暗殺者の末裔としては簡単なことだ」
狩燐は暗殺者と言って、ちよっとだけ悲しそうな顔をした気がする。

「まあ、これくらいしか話すことはない」

「……」

「またいずれ……。そうだねえ、僕らが当主になった時にでも、また話し合いがあるかもおね」

徐々に元のしゃべり方に戻るにつれて、赤星の声はフェイドアウトしていった。

「……俺は、俺らは、お前らと組む気なんてない。今はそう言うっておこう。親父と俺の答えは同じだ」

「いつか考えが変わる日を待つかあ」

「そんな日なんて、来る訳——」

ぐううううううううう。

え。

「え？」

モニター越しに、赤星と俺の声が重なる。うん、驚くよね、当たり前に。

「……腹減った……」

「ええ……」

緊張の糸が途切れたかのように、狩燐は短剣を手放して床にひれ伏す。

「昼飯が、昼飯が俺を呼んでる」

「……確かぁに、はらへったぁな」

「腹が減って力が出ない。よって、戦いは引き分けでよろしく、

バ下弦鴉」

「……どういけん」

（バ下弦鴉じゃない！一言余計なんだよ、お前たちは！）

「なぁんだ、生きてたのか。ちっ」

「よくぶGでいられたぁね。ちっ」

（なぜ舌打ち！？出てきて欲しくないなら呼ぶな！ていうか、なぜ舌打ちされなきゃいけないのさ！）

「ん？なんかお前見てるとイライラするから」

「んゝ。なんとおなあく、狩燐を真似ただKだから」

（そんな理由アリ！？）

「アリだな」

「アリだぁね」

（いいよいいよ。どうせ私はバカなんだへタレなんだ腐ってるんだバカなんだ）

「ああ、作者。もといバ鴉、負の感情に塗れる前にここから出せ

ヘタレ」

（ヘタ……！？）

「飢え死にだけは、したあくないねえ。だから頼むよ、腐った鴉」

（腐った……！？）

「いいから早く出せ」

「そして飯よろしく」

（うん、自分の人生こんなもんだって分かった。受け止めたけど、前言撤回。もうしらない。出たかったら勝手にして、出口は……）

鴉が、いや腐ったバ下弦アホ鴉が羽を抜いて、狩燐に渡す。

「いらねえよ、汚い」

（それ使えば外にいけるの！いらなくてももらいなさい！というか、汚いとは何だ！）

「んじゃ、出るか赤星」

「だあな」

「文化祭といえば、あれだ。焼きそばだ」

「そうかあな？」

「とりあえず、腹減ったから」

「いつでも話ができるうしね」

「よし、腹を満たしに行こう！」

「おぉー」

（ちよ、無視した！？もしかして、私無視された！？）

俺に問うな、バ鴉よ。んでもって、俺も腹減ったんだが。

（その辺の草でも食べてりゃいいさ）

草も何も生えてねえから！

（んじゃあれだ、ダンボールとか新聞紙食べて見なさい。おいしいらしいから）

ホームレスなんたらじゃねえし！

（じゃああれだよ、冷蔵庫に麦茶と爽健美茶とウーロン茶と十六茶とおーいお茶とごえもん入ってるから、それ飲んで空腹を凌ぎな

92、影の薄い彼に光を！？（前書き）

ついに、アクセス数が15万を突破しました！

今まで応援してくれた方、最近読み始めた方も、これからもよろしくお願いいたします！

下弦鴉はこれからも、地道に頑張らせていただきます！

92、影の薄い彼に光を!?

うう……ひつく……ううう……ズズズ

……。聞き覚えのあるというか、聞き飽きた啜り泣きがずっと前から続いている。どうも、やすがくれ鴉です。ん？なぜやさぐれてるかって？そりゃあ、前回は読んでくれれば分かります。多分。

ううう……うああ……ひつく……

暗闇迷宮にいる、影薄君。じゃないや、こ……。あー、こ……。なんだっけ？あれ？名前が出てこない……。いや、影薄君で。

「母さん、父さん。僕はもうダメなようです」

何がダメなんだ。影か、影の濃さか。

「僕は生きていきません。暗闇が嫌なんです。独りが寂しいんです。夜とか一人で歩けないんです」

どうでもいいな。ていうか、一人称変わってね？

「どうか、どうか、もう一度だけ会えとしたり……」
会えとしたり？

「女装した優しい瀬川に会わせて下さい」

うん、無理だね。優しい慎吾なんてこの世にいないからね。

「できれば、両親にも会いたいけど、やっぱり女装したあいつでお願いします」

お前はホ○か！○モなのか！！

「欲を言えば、永遠に女装させてください。そして優しい心を奴に……」

お前も優しくないと思ってたのか！？ていうか、永遠なる女装を望むのか！

「あ、それよりもここから出せや作者馬鹿野郎」

（んだとゴルフ!!）

「はっ！作者の声！出せ！ここから！もしくは光を我に!!」

（お前みたいなヘタレに輝く太陽が哀れだ）

「太陽じゃなくてもいい！ヘタレは嫌だけど！」

（大丈夫、お前はもう立派な影薄ヘタレ民だから）

「嫌だ！影薄くてヘタレとか嫌だ!!」

（もう手遅れだな、うん）

「そんな事言うなよ！やれば出来る子だよ！小橋泰助は!!」

（それだ！それだよ!!）

「なんだ、なんだよ!!」

（影薄ラー1号機の名前）

「影薄ラー1号機ってなんだ！」

（あースツキリした）

「え、ちょ、なに？本気で俺の名前忘れてたの？」

（おう!）

「いや、そんなにこやかに言う事じゃなくね？」

（そうかな？まあ、どうでもいいんだ、そういう事は）

「どうでもよくないだろ！重要だよ！かなり重要!!」

（ちっ……うぜー）

「おま、今う——」

（とりあえずさあ、早く出口見つけてパーツとお前の出番終わらせろや）

「話し逸らすな！そして出番を減らそうとするな!!」

さてさて、こいつが早く、誰よりも早く消えるために手伝うとするかな。

「おーい、無視か？無視なのか!？」

でも目が慣れないとほんと何にも見えないなあここ。

「あの、作者？」

自分でここは作ったし、だいたいの道は覚えてると思うんだけど。
「あー、下弦作者様？」

今の位置は……だいたい入り口の近くか。全然進んでないし……。ていうか、あの影薄ラーは同じ場所ぐるぐる回ってただけだし。使えない奴だ。

「作者ー？ 下弦鴉作者様！？」

だいたい、これS Mラブコメのつもりなんだから、早くヒロインだしてやらねえといけないのに、このヘタレのせいで……。まったくこれだから影薄はいつまでも影薄なんだ。

「あの……」

とりあえず、無視でいこう、無視で。その方が私も影薄の……なんつつたつけ？ お箸？ も楽だ。うん。

（よし、これから私はお前という存在をこの世から消す事にするよ）

「そっか。っておい！！」

（じゃ、さよなら）

「待て待て待て待て待て待て待て待て！！」

（んだよ、黙れ消しゴム）

「消しゴム！？ 何で消しゴム！？」

（間違えた、消しカス）

「消しカス！？ 結果ひどいから！」

（うん、そうだね、ひどいね、じゃ）

「だから人の話を聞こう！ そして無視は結構前からしてるからな！」

（だって話しかけてこなかったじゃんよ）

「呼んでたから！ 精一杯！！」

（なんだって！！）

「漸く気付いたか、己の——」

（影の薄さが声にも伝染したのか……）

「なにそれ！？ どんな感染！？ ていうか、影薄くないから！ 頑張ってるから！ 小橋は！！」

（そうそうそれそれ！！）

「だからなんだよ！」

（影薄インジャー・レッドの名前）

「影薄インジャー・レッドなんかじゃねえし！ていうか影薄インジャーってなんだ！？」

（影の薄さで悪の組織から世界救う的な？）

「影薄いわりに立派な事するのな！」

（ブルーとイエローは募集中。その他いろんな色も募集だからP Cの前の君！どうだい？いっしょに影薄インジャーの一員となって世界を救わないか！？）

「俺だけなのか！まだ一人しかいなかったのか！！ていうか、なぜ俺がリーダー的なレッドなんだ！」

（なんとなくだぜ☆）

「爽やかに言うな！うざいから！！」

（んだと！？お前の方がウザいから！！存在そのものが！！）

「お前よりましだね！」

（……ふーん、そんな事いっていいんだあ……）

「な、なんだよ」

（べつつにい。私、ここに特別な用があっているわけじゃないし。折角持ってきた懐中電灯だっていらないもんねえ）

「な、なに！？」

（あーああ、出番ももう少し増やそうかと思ったけど、森野と慎吾だけに頑張ってもらおうかなあ）

「ちょ、それは——」

（用もないし、渡すものもないから、私は森野の様子でも見に行
くよ）

「ま、まあ、待つんだ作者」

（何？私がウザいんじゃないかなかったのかなあ？）

「嫌味なやつめ……」

（じゃ、そゆ事で）

「待て待て待て待て待て待て待て！」

（何？ヒロインでも主人公でもないヘタレ影薄インジャー・レッ
ドになんて用はないんだけど？）

「なんか増えたし！余計な一言増えたし！！」

(じゃ、そーゆーわけで)

「待て待て！ Wait！ Wait！！」

（英語が少しでもできるからって、地味に使われるとウザいんだけど使えないへタレ影薄インジャー・レッド？）

「また一言増えてない！？ていうか、ちよつと遊んでない！？」

(じゃ、またな)

「待て待て待て待て待て！……！　まてええええええええええ
えええいっ！」

（うるっさいな、耳元で叫ぶなよ、使えない鼻水タレのヘタレ影薄インジャー・レッド）

「楽しんでるだろ！ やっぱりお前、楽しんでるだろう！！」

（ああ、楽しんでいともさ!! 悪いか!?!）

「悪いから！何で何もしてない俺がお前のストレス発散に使われないといけないんだ！！」

（ストレス発散じゃない！ただいじる相手が欲しかったんだ！！）

「結果同じ事じゃね!？」

（それは、あれだ。気にしない方針で）

「てかいじるなら森野にしろよな！」

（あれはダメだ）

「なんで？」

(疲れるから)

⋮

（なぜ黙る）

「いや、何となく分かる気がしたから……な、うん」

（じゃ、そういう事で、バイビ）

「待て待て待て待て待て待てお手!!」

ん？何か一つ混じったような……。

(……わざとか?)

「え、いや、それは、な? ほら、うん」

(……わざとだな?)

「いや、えっと、なんていうか」

(……わざとなんだろう?)

「あれはな、ほら、えっと、あれだよ、うん」

(……)

「……」

(……わざとだろ?)

「ごめんなさい」

よし、やることは決まった。

(えいえ……ゴッフォン!! しばらくの別れの時が来たようだ)

「待て待て待て! 今永遠って言おうとしなかったか!? 永遠って

!!」

(気のせいだ)

「いや、気のせいじゃないだろ!？」

(気のせいだよ)

「はつきりえいえ……って言ってたじゃんかよ!」

(気のせいだって)

「リピートしてやろうか!？」

(……さて、置いていく物は何もなさそうだ)

「ずるい! 卑怯だ!!」

(人の弱みを握ってなんぼの世界なんじゃい!! へこたれてる暇があつたらとつとと光目指して進むがええじゃろが!!)

「どこのなまり!? ていうか、どこかの誰かさんが言いそうな台詞だし!!」

(きつと気のせいだ。じゃ、頑張れよ、使えないヘタレ鼻水タレの影薄インジャー・レッド馬鹿)

「また一言増やしたな! ていうか待て! 待ってくれ!! 懐中電灯だけでも! それだけでも残していつてくれ!!」

（面倒臭い時もある。人間だもの）

「なぜみつ〇!？」

（じゃあな―）

「待ってくれ! 本当に最後の願いだから!!」

（んだよ! 汚らしい手で私の美しい漆黒の翼に触れるでない!
!）

「あ、ごめん……。って汚らしいとは何だ!」

（汚いもんは汚いんだよ! その影の薄さが哀れになる目で手を見
てから言いやがれ!）

「どんな目だ!」

（お前の目だよ!）

「いいさいいさ! どっか行け! 行っちゃえ!!」

（言われなくなっただって行くよ、使えない鼻水タレのヘタレ阿呆影薄
インジャー・レッド馬鹿!!）

「また一言増やしやがって!! ていうか、懐中電灯だけは置いて
けコラ!!」

（アー、キコエナイ。ナーニモ―）

「ちょ、コラ!! 待て、逃げるなああああああああああああ
ああああああああ!!」

悲痛な使えない鼻水タレのヘタレ阿呆能無し影薄インジャー・レ
ッド馬鹿の声は、暗闇に響き渡るのじやった。

「また一言増やしやがったなああああああああああああ
あ!...!」

え、ウソ!? 聞えてた!?

92、影の薄い彼に光を!?(後書き)

なんだか月2, 3回更新するかしないかのペースですみません……。

93、M＋妄想はやりすぎた!？(前書き)

すみません、ただいま故障中です。

はい、壊れてます。

え？なにがって？

それはきつとあの子です。

93、M＋妄想はやりすぎた!？

「はんぺん!」

と、言えばおでんだね。

「つみれ!」

と、言ってもおでんだね。

「大根!」

だしが染みてるのは、たまらなくおいしいね。

「しらたき!」

あのツルツルツとした感じがいい……かも。

「まだ違うって言うの!？」

根本的に、全てが違うからね。ていうか、前と同じことを繰り返すな!

「婚約!」

それ違うから!

「間違えちゃった☆テヘヘ」

……殴りたいという気持ちにかられたのは、私だけじゃないはずだ!絶対!!!

「こんにゃく!」

ていうかね、うん。確かに食材名は違ったけどね――

「餅巾着!」

そうやってさ、

「ちくわ!!」

おでんの具をさ、

「昆布巻き!」

叫ぶものでもないから!!

「ああ、私を侮辱する、心地よい声が聞こえる……」
聞えてた!?

「でも、ダーリンのじゃないからダメね」

……誰に侮辱されようとも喜ぶとしか思えないんだけど……。

「って、まだ違うって言うの！？何をしたいの！？私に、この私に何をしたいのよ！！」

お前にしたい事なんてこれっぽっちもないから！何をしたいの？
こつちが聞きたいわ！！

「聞えるわ！感じるわ！！オラアワクワクしてきたぞ！！」

なぜここでド○ゴンボール！？

「いいわぁ、いいわよぉ……」

なにがだっ！

「みんなの冷たい言葉が私に力^{パワー}をくれる！」

どんな体質してんだお前は！！

「これでダーリンがいなくても、あと30秒は生きていける！！」
みんなから力もらったわりに短くね！？

「ああ、まだ感じる……。これは、作者の声ね……」

なぜ分かった！？ある意味すごい！！

「とりあえず……いただきまーす♪」

（もっと早くから食べんかい阿呆！！）

「はっ！ば……下弦じゃない。どうしたの？」

（どうしたのじゃねえよ！っていうか、馬鹿って言おうとしたな今
！）

「気のせいよ」

（……デジャブなループになりそうだから、無視してやろう……）

「なんで！私の出番を、話せる時を減らさないで！！」

（大丈夫、今のところ、一応ヒロインだから）

「今のところ！？一応！？」

（ていうかさ、同じ事を繰り返さないでくれない？飽きるからイ
ライラするから面倒臭いから）

「……私のツッコミはスルーなのね」

（聞かなくてもいいと心の底から信じてるから）

「……悲しいけど、ものすごく嬉しいのはなぜなのでしょう……」

（知るかボケ）

「ああ、ダーリンの代わりに下弦でもいいわね……」

（もうツツコミません。ていうか、早く食えっの）

「食べていいの？」

（お前さ、あの看板無視しないでくれない？お願いだからさ……）
鍋が三つ並んだ机の向こう側。そこに無視されて哀れな看板があります。

「お願いなんて言わないで！お願いしたいのは私だから！」

（うん、ウザいね。黙って食べてね。はい、あーん）

「黙って食べるなんて無——あつつつつ！！」

（てめ！汚いな！）

折角の熱々おでんこんにゃく君が可哀相じゃないか！

「なんてベタなマネを！」

（楽しけりゃいいんだよ、多分）

「こんな事は、あのこ……あれ？こ……」

（こ？）

「影の薄い名前すら浮かばない彼にやらせなさい！」

（お前も名前忘れてたんかい！流石にちょっと可哀相だぞ！）

「大丈夫よ。だって影が薄ければ薄いほど、無駄に心ハートが強いだから」

（なんかその言い方イライラするんだけど……。はい、もう一口あーん）

「私にあーんしていいのは本当はダーリンだ——あ、つつつつっ！！」

（ちよ、お前！汚いって言ってんだろうが！！）

「だって……でも、快感」

キモいし、熱々おでんちくわさんが哀れだろうが！

「ああ、あーんしてくれるのがダーリンだったら、どんなに幸せな事か……」

（なら妄想でもしながら食え。ほらあーん）

＼森野の妄想開始＼

「ったく、これくらい自分で食べよな」

ふてくされた顔して、ダーリンが愚痴を言う。

「いいじゃないの」

「……黙れやカスが」

「ああ、神々しいお言葉」

「どこがだ！」

「ダーリンの言葉なら全てが神の言葉よ」

「いいから、口開けろ」

「はい」

「……ホラ、あゝん」

「あゝゝゝん♪」

「……どうだ？」

「あつ、あゝっ！でも、おいしいよ、ダーリン♪」

「そっか。よかった」

なんて言って飛び切りの笑顔のダーリンが目の前に。

＼森野の妄想終了＼

「キャハーーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー☆」

（うおう！？急に叫ぶな馬鹿！心臓に悪いだろうが！！）

「だってもう、だってあ、もう、アハ☆」

（……キモいな……。まあいい。妄想効果はてきめんだな）

「ん？」

（一回の妄想中に鍋一杯分を全て食べるとは思わなかったさ……）

「ダーリンは無敵なのよ！」

（いや、慎吾よりお前の方が意味無敵……）

「ささ、次行こう♪」

（妄想したいだけじゃ……？）

「木の精よ♪」

……流せ、流すんだ私！ツッコもうなどと思っではいけない、ツッコんだら死ぬと思え私！！

（次の一口いくぞ、あーん）

～森野の妄想再び～

「ほら、お前の為に作ったおでんだ」

「まあ、ダーリンが私の為に！？」

「ひ、ヒマだったんだよ」

照れくさそうに顔を背ける愛しのダーリン。

「さ、冷める前に早く食ってれよ」

「うん！」

「あーん、してやろうか？」

「いいの！？」

「もちろんだ」

爽やかスマイルダーリン様様♪

隣に座って、肩を抱かれて、引き寄せられて、

「あーん」

甘いダーリンの一言と共に

「あ~~~~ん♪♪」

熱さなんて、ダーリンが隣で、しかも抱いてくれているだけで忘れてしまうわ！！

「うまい、か？」

「もちろんよ♪」

「……よかった」

照れたダーリンもカワイイのなんのって！できる事ならあなたを
食べ――

～作者により森野の妄想強制終了～

「キャッハハハ――――――――――
――――――☆」

（お前なんて危ない台詞を吐きかけてんだよ！てかキモいからそれやめて！！）

「もうだめ！幸せ！幸せすぎる！！」

（暴走するな！あれは妄想だ！妄想であって現実で起こりうる事ではないんだ！！）

「それでもいい、幸せなら♪キャハハ☆」

……ダメだ、完璧にショートしてる……。

くそう、早く進めたいからって妄想なんてさせるんじゃない！

「ねえ、もうないの？」

（ん？まだ鍋一杯分残って――）

「ないわ。食べたから」

（そうか。じゃあ残ってない……なあにいいいい！？）

あ、あの、あの熱々おでん様方を妄想中に全て食べきっただとお
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおおう！？

「ねえ、もうないの??」

（えと、あと上に行けばデザートが……）

「ダーリンが!？」

（どんな間違え!？わざとだよな！わざとと言わねえと妄想一切

許さない！)

「すみませんわざとです出来心からでした」
素晴らしい棒読みいただきましたー。

「とりあえず、ご馳走様でした♪」

……恐ろしきヒロイン森野美咲……。

「次はどんな事してもらおうかなあ♪キスとか抱きしめてもらうのは当たり前よねえ♪」

……ホント恐ろしい森野美咲であった……。

小橋が風邪と勘違いしているくしゃみに、今までに感じた事のない強烈な寒気にみまわれた瀬川の事はきつと、きつとそれはまた別の話。

であると思いたい……。

93、M＋妄想はやりすぎた!？（後書き）

私も壊れているのでしょうか、それとも森野が壊れているのでしょうか……。

もう、……分かりませんははははー。

94、ちょっと哀れ!?(前書き)

久しぶりに外の人達出てきます。
ええ、ホント久しぶりに……。

94、ちょっと哀れ!?

んー、やっぱり文化祭が終わったら、打ち上げとかするのかなあ。ていうか、みんなしたいって言うかな。場所決めたりするのってやっぱり学級委員である私?でも、こういうのって行動力ある人が進んでやるものだよなあ。学級委員とか関係なしに。うん、きっとそうだよ、そうだよなあ、読者様。

「て!?!」

「ぬ?どうした、阪下」

「え、ううん。別になんでもないよほほー」

「……なぜ壊れかけてる?」

神郷君がなんか呟いた気がするけど、まあ気にしちゃいけない。気にしない。

にしても、今回の視点、私だったのね……。中で騒いでる人達だけの視点だと思ってたから油断したわ……。

そういえば、丸焦げになった猪上君が担架によって運ばれてきたし、気が付けば狩燐君と赤星君も外に出てきてたみたいだけど、中はどんな風になってたんだろう……。そしてなんで狩燐君と赤星君は焼きそばを食べてるの?お昼の時間はまだだよ?時間守ってよ、私が怒られるじゃん!

「なあ、阪下」

「なに?」

「あの巨大モニターに小橋映らないのって何でだろうな」

「……そういえば、一回も映ってないわね」

あまりの影の薄さに、映像化すらされないとか?

あ、流石にちょっと可哀相かな。でも、あの人なら耐えられそう。ちなみに巨大モニターは猪上君達が出てくるまでは、4つに区切られてた。それぞれを見れる様になってるみたいだけど、小橋君は全く映らない。面白いほど映らない。というか、映されてない?

そんなこんなで、大画面を独占してるのは美咲ちゃん。カメラに撮られているのに気付いてないんだろうけど、ものすごく食べてるのは分かった。ひたすらに食べてた。そして、1人で芝居してた。お客さん引きつった笑顔で笑ってた。

「そうだ、阪下」

「ん？」

「腹減った」

「じゃあ、狩燐君たちみたいに焼きそば買って……ってまだお昼じゃないんだって！」

「僕の腹時計は12時をさしている」

「いや、個人的なことを言われても……」

「みんなも待ち望んでるかもよ？」

「まあ、11時は過ぎてるからね」

「にしても、僕らだけでこんなに時間割いちゃっていいんかね？」

「大丈夫だよ、他の出し物短いみたいだし、放棄する所もあるみたいだし」

「……放棄するくらいならやらなきゃいいのに……」

「……だねえ」

そういえば、私もお腹すいてきちゃった。瀬川君もお腹すいてるのかな？

「瀬川君にもお昼届けた方がいいかな？」

「お昼の前に終わらせろ」

「だね……って何で命令形!？」

「気のせいだよ」

「……ならいいわ」

気のせいじゃないと思うけど……。

「フフ、差し入れなら大丈夫よ」

「そう、なら安心ね。……って!さ、斎賀さんどこから!？」

「フフ、さあどこからでしょう」

さっきまで、このステージにいるのは私と神郷君だけだったのに

……。

「それより、差し入れ大丈夫って？」

「フフ、ある子に頼んでおいたから」

「ある子？」

「フフ、いづれ分かるわよ」

ニッコリと微笑んで、優雅に焼きそばをすす……ええ!!

「なんで焼きそば!？」

「フフ、祭りといえばチョコバナナと焼きそばでしょう？」

「祭りじゃないよ!文化祭!!」

「フフ、文化『祭』じゃない。ほら、祭りって入ってる」

「そういう意味じゃ!」

「なかなかおいしいな、焼きそば」

「フフ、でしょう？」

「僕的には祭りといえバたこ焼きだけど、焼きそばもいいね」

「フフ、たこ焼きもいいわね。そういえば、屋台が出てたわ。後で買いに行く？」

「おう、行」

「かないでください!お昼の時間守って!お願いだから!!」

私だってお腹すいた!ご飯食べたい!だけど学級委員という役目がそれを邪魔するの!

「フフ、ケチねえ」

「ケチケチー」

ふてくされた表情の斎賀さんと、頬を膨らました神郷君。

……か、かわいい——!!

い、今のなし!なしなし!なかった事に!いや、その、好きとかじゃなくてですね、それはねあれです、本能です!

って、結果よくない気がするよおおおおおおおおおおおおおおおお!!

「フフ、どうしたのかしら？」

「急に頭抱えてうなだれる人は始めて見た」

恥ずかしいよう。照れくさいよう。

「フフ、私もよ」

「そうだ、ある子って誰？」

ああ、それ私も気になる。でも、ああ恥ずかしい……。

「フフ、貴方も聞いてたの？立ち聞きなんて、家政婦にやらせないさい」

「聞きたくなくても隣にいりゃあ聞えるさ。んでもってなぜ家政婦？」

あれじゃない？前テレビで見た気がする……。家政○は見た！？
ってやつ？

あ、伏字意味ないや……。あはは☆

「フフ、立ち聞きといえば家政婦、届けるといえばあの子よ」

「届けるといえば……？」

だめだあ、私もうダメだあ。いろんな意味でダメだあ。

「フフ、それより、いつまでうなだれてるの、学級委員さん？」

「はふへ？」

「フフ、美咲が姫様の部屋の前まで来ちゃったみたいよ？」

「なんですって!？」

「フフ、おでん食べた後なのに、5分もかからずウエディングケーキ1人で食べきったわ」

「なんでウエディングケーキ!?普通に1ホール分のケーキ何個とかでいいんじゃない……」

「ありきたりすぎてつまらないんだコノヤロー」

何て美しい棒読み!?

「ってさっき手紙が来た」

「いつの間に!？」

「だから、さっき」

だ、誰からそんな手紙が……。まあ、いいかな……。気にしたらこの世界の事全てを気にしなければいけないわ……。

「フフ、なんだか分からないけど、小橋もいるみたいね」

「なんだって!!」

神郷君、驚きすぎだよ……。

「フフ、目がはれぼったいのはなぜかしら？」

「充血もしてるし。まあ、奴なら心配無用だな」

「フフ、そうね」

……世の中でこういう人達の事を薄情者と呼ぶのでしょうか？

「というか、バトルとかするはずじゃねえのか？」

「フフ、そうね。姫の部屋につけるのは1人だったはず」

「……美咲ちゃんと小橋君。2人いるね」

「なんでだ？」

「フフ、きっと作者の陰謀ね」

（いえ、違います）

「違うってさ、斎賀さ……ん!？」

（何さ、そのあからさまな驚きは）

「どな、ドナタサノバビッチ？」

「何語？」

「フフ、下弦も来てたのね」

（あっち観察してたけど飽きた。以上!）

「下弦？」

「作者がこんなところ来ていいのか？」

（まあ、なんとかなってるし。いいんだよ）

「そっか」

ええええええええええええええええええ!!

そんなにあっさり納得しちゃいますか!？納得しちゃっていいんですか!?!？作者ってことは、ある意味神様じゃないですか!

（ある意味じゃない、神様さ!威厳全くないけどね!!）

心読まれた!？というか、威厳ないって自分で言っただけ悲しくないの!？

「フフ、陰謀じゃないとしたら、なんで2人が部屋の前に？」
普通に会話できる斎賀さん惚れる!

（あー、ただ単に手違いが……たははー）

「フフ、流石は作者。馬鹿ね」

（褒めてるの？ 貶してるの？）

「フフ、貶してるに決まってるわ」

（……ひどい子だ……）

「フフフ」

「てか、あの子って結局誰なんだよ」

（あの子？）

「フフ、届ける子よ。届けられる子と言ってもいいかしら」

（あの子に何届けさせたの？ つか良く引き受けてくれたな）

「フフ、正義感が強い子だからね」

（……だな）

「全っ然分からないわ……」

「なんとなく、分かった気がする……」

「ええ!？」

「まあ、なんとなくだけど、きっとあの子だな」

「え、誰？ 誰なのよ!？」

私だけですか! 分かってないの!!

あ、でも、読者様も分からないですよ？ 分かってもココは慈悲の心で分からないといってください!! じゃないと寂しいです!!

（第1話〜第10話の間に出てくるあの子だよ）

「結構範囲広いですね……」

「フフ、大切なお守りはいつでも貼り付けてあるわよ」

「お守りなのに貼り付ける!？」

「んでもって、暴力暴言、その他諸々悪っぽいことをすると正義の心が目覚め、泣き出す」

「正義の心目覚めてるのに!？」

（だね）

「フフ、そうね」

「やっぱあの子か」

[illegible]

!!!!!!

「フフ、私も行けばよかったかしら」

「せいぜい楽しんで来いよ、
バ下弦バ鴉せんせ」

(そう呼ぶのやめてくれない？ 悲しくなるからさ)

「それはあれだ、
氣にしたら負けだ」

(……そっか……)

作者に暴言言える君は何！？

「ふあ、ファイです」

（言われなくても頑張るよ）

あれ？なぜだろう……。八つ当たりされた気分……。

って、これで今回終わり？ 終わりですか！？

ええー！もうちよつと私しゃべらせてもらつてもよかつたん【

作者により強制終了】

95、退屈なSと遊びましょ!?(前書き)

少しだけ、小説の手直しをしました。

もし、まだ誤字脱字などがありましたら、連絡頂けるとありがたいです。

95、退屈なSと遊びましょ!?

「で、なんでいるんだ?」

「それ、こっちの台詞なんだけど?」

「ん? 主人公の親友である俺がいるのは当然だろ。そして一応ロミオ役だ」

「そんなの関係ないわ。でも、一つ聞いていい?」

「何だよ」

「何でそんなにいつも以上に汚い顔してるの?」

「それにはいろいろと深い事情があつてだな……。っていつも以上って何だ! いつも汚いつてか! 汚いつて言いたいのか!」

「ダーリンに比べれば貴方なんて汚すぎるわ! 目が充血してるし、鼻水垂れてるし、影薄いし!」

「影薄いは関係ないだろ!」

「大有りだわ!」

「んだと!?!」

「何よ!」

なーんて言い争いが扉の外で繰り広げられる事、数分間。実はアイツら仲がいいんじゃないかと思つてきた瀬川です。はい、お久しぶりですね。やっと出れましたよ、きちんとした形で。

(早く部屋に入ってくればいいのにねー)

そしてお前は死ねばいいのになあ、下弦!

(あだだだだ! 何をする!)

どーしたもこーしたもねえよ! 何で2人も来てんだ? 何で戦つて来なかったんだ!

(それはあれだよ、前回読んで勉強してきて♪)

殺されてえのか?

(手違いなんだって! 間違ひなんだって! 狩憐達いじくつてたら、2人のルートつなげ忘れただけなんだって!!)

結局お前が悪いんじゃないかあああああああああああああ
ああ！！

(べぶはあああああああ！！)

渾身の一撃、エルボー。あの世で精々ともに生きろや。

ドゴォー！

な！？

「ダ」

「――げっほごっほ！ 埃が、埃がはっ」

何やってんだ馬鹿一号。

「せが……じゃないや、ジュリエーごふおっげほっ」

お前も一緒に何やってんだ馬鹿二号。

てか、扉壊して入ってくる必要あったのか？ 鍵も何もなかっただろう？ 重くもなかっただろう？ 壊す必要どこにあった？

「ちよつと薄影！ 貴方は下がってなさい！」

「んだよ毒舌！お前こそ下がってやがれ！！」

「なんですって!?! ヒロインより目立てるわけないでしょう!」

「少なくともお前よりは活躍してるね! いろいろと!」

風呂で滑って転んだくせに、何を言うか。

「ダーリンの女装は譲らないわ！ダーリンは私だけのもの！！」

いや、お前のものじゃねえし。てか、いい加減ダーリンって呼ぶな！

「俺だつて譲らねえ！ ホモと言われようがなんと言われようがな」

いや、やめておこうよ。ホモで影薄いかメツチャ最低最悪だぞ！

「影の薄い親友なんて認めない！」

「ストーカーがヒロインだ何て認めねえ！」

うん、どっちも認めたくない。

「勝負よ!」

「勝負だ!」

で、勝手におっぱじめるし。あー、もう。また俺ヒマじゃん。てか、女装やめていい?

(ダメでござんす)

お前は森野並に神出鬼没だな……。

(褒めてる? 貶してる?)

微妙に褒めてる。

(ありがとう! それでこそ主人公だ!)

「ていうか、お前らは何やっとなんじやい!」

「いた☆」

「いだ!」

「そこ! はたかれて喜ぶな!」

握りしめていた上履きを馬鹿一号、もとい森野に投げて撃墜。

「久しぶりのSに、つつい。テへへ☆」

「はい、キモいからやめような」

「俺まではたく必要あったか!」

「ついでだ」

「酷いじゃないか!」

「大丈夫だよ。影が薄ければ薄いほど、体は丈夫なはずだから」

「はずって!」

「私にも屈辱的な言葉を!」

「黙ってやがれ蛆虫いいいいいいいい!」

いつの間に俺の隣に来てんだよ!

「それでこそ、私のダーリン♪」

「紐なしバンジージャンプ、殺^やる?」

「あの、いろいろ違いすぎると思うわ」

「はい、レッツ・チャレンジ。逝ってこーい」

首根っこ持って、窓際へ。

「ま、待って! 嬉しい気はするんだけどね、なんだかね、本当に

命の危険を感じるんだ!」

「大丈夫、何とかなるよ」

ニコッと笑う。

「か、可愛い」

「よーし、」

おーぷん・ざ・ういんどー!

……そこ、棒読みって言うな!!

「逝ってらっさい♪」

「え? 本気? え、ええ、ちょ、ま——」

きいやああああああああああああああああああ……

「む、惨い……」

「ん? お前もやりたいって?」

「いいえ! 積極的に遠慮します!」

「そうかそうか、そんなにやりたかったのか」

「え? 何でそういう流れ? え? ちょ、これマジで? ええ! ?」

「だって、何話分俺はヒマだったと思っている! 暇つぶしにする

事一切なかったんだぞ! 飯すら抜きだったんだぞ! !」

「もしかして、それって……」

ニツコリ笑ってえ、

「もち、八つ当たり♪」

言い放ちましたあ♪

「やっぱりかああああああい!! !」

いやさあ、ホントに暇だったのよ。暇で暇で、暇だったのよ、マジでさ。

「は、放せ! やめろ! どこに連れて行くんだよ!」

「どこってあったり前じゃん」

「待て待て待て待て待て!! 親友を殺す気か! ?」

「死なねえよ、多分」

「これを渡して欲しいと……」

「……弁当？」

なんて可愛らしい包みで……。

「お腹をすかせているだろうからって斎賀さんに頼まれたんです」
あー、半分嫌がらせが混ざってるなあ……。半分じゃないな、全体的にだな。うんうん。

「つか、いい加減叩くのやめろアホ」

「怖かったんだぞ！本気で死ぬかと思ったんだぞ！」

「あー、うるさいうるさい！耳元で叫ぶな！！」

「け、喧嘩は良くないです！」

できれば君は黙っていて欲しいよ。てか、しゃべりださないでください！

「と、ともかく、私は役目を果たしたので帰ります！」

「はいはい、さよーなら」

そそくさと、小橋達が壊した扉まで小走りに去っていった。

「ふう、あの子の扱いにはまだ慣れてねえんだよな」

「てか、知り合いだったの？」

「私が紹介した、とっても可愛い、まあ私よりは可愛くないけど友達よ」

「そう言われればそうだったよう……な！？」

「毒舌！？」

「私の名前くらい呼びなさい！私はヒロイン！貴方は脇役！」

「ちっ……死んでなかったか」

「ええ！？」

「瀬川、その前に何でもうここにいるのかツッコもうな」

「いいよどうでも」

「愛しのハニーが帰ってきて嬉しくないの！？」

「うん、嬉しくない」

「本当に殺す気だったの！？」

「殺しても死ななそうだしな」

「あ、あのう……」

「酷いわ！それでも私、私は――」

「あの一！話があるって！この子——がはっ」

話の途中で入ってきた小橋を、森野が蹴る。

「いい所で邪魔をお……いだっ」

なんとなく、森野の頭をグーで殴る俺。

「うるさい、少し黙つとけ馬鹿。で、何？」

いつの間にか小橋の後ろ、その更に後ろにいる舘山に話しかける。

「道、分からなくなっちゃいました♪」

「あら、大変ね」

「戻れないな、下に」

「てかさ、落ち着いてる場合じゃなくね？」

⋮
○

「泣いていいですかあー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「ウソだっと言って欲しいようなあー」

「……！」

「ごめ、ごめ、ごめんなしやああああああああああい!!」

あー、何て素晴らしいアホ達の集いなんだ……。

96、困った彼らに希望なし!?

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ひたすら半泣きで謝り続ける舘山と、

「どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう!……どうしよう」

途中でひらめいたはずなのに、また悩む影……小橋。

「瀬川もなんか考えろよ」

「来た道戻ればいいんじゃないって何回言わせた?」

「私を愛しているって何回言ってくれますか?」

「お前は話に変な方向に向かうから少し黙ってる!」
隣に座っている森野改め、馬鹿の頭をはたく。

とりあえず、今の状況を整理してみると、こうなる。

1、斎賀に言われたとおり、作者の作った秘密の抜け穴でやってきた舘山。だけど、その道がどこにあるのかをすっかり忘れてしまった。

2、小橋も森野も試練を済ませ道を進んでいったら、いつの間にかココにたどり着いていたらしい。道は戻るようになってはいないけれど、出口にたどり着ける保証はない。

以上!!

「俺ら一生このままかな……」

「本当に!?!」

「何でお前は嬉しそうなんだ!!」

「い、いじめはダメですう!!」

くそう、面倒臭いのが二匹……。

「とりあえずさあ、あれ呼ぶべ」

「なぜになまる必要が？」

「うるせえな、黙ってろ影薄」

「影薄じゃない！まだ認めない！」

「あれってなあに？」

「アレはあれだ」

「説明になっていないと思うんですけど……」

「それは心で感じないからだ」

「心で感じればいいのね、ダーリンのあ——いだっ——！」

「だから、お前はしゃべるな！話が進まねえから」

「心で感じれるものといえば、お前の悪意くらいだけど……」

「悪かったな」

「心で感じれるものは……怖いです」

うん、きつとだれだってそうだろうね。

「そ」

「香ちゃんに冷たくしないで！冷たくするなら私だけ——あだ
っ！」

「黙ってろつつたろが——！」

「暴力はんた——い」

「そ、そうですよ！」

小橋の棒読みを鵜呑みにしないで、純情ちゃん。

「とりあえず、あれを呼ぶべし」

「だからさ、あれって何？」

「影薄には一生分からないだろうな」

「何その差別！」

「作者——！いるんだろ——！出てこ——い——！」

「思いつきりあれの正体言ってるし……」

「紐なしバンジー……」

「ごめんなさいごめんなさい二度と口出したしません」

「うむ、それでよし」

「まるで魔王だわ……」

小さな呟きも、こんだけ静かだとうるさいくらい聞えるからね。
泣かれると面倒だから口に出しては言えないけどな！

「作者ー！へボで馬鹿でマヌケな作者ー！！」

「返事ないわねえ」

「……サボってんのかな？」

「作者さんの悪口言っちゃダメですよ！」

「これぐらい言わねえと、奴は出てこねえからな」

「私は喜んで反応するのに……」

確かめに、お前は出てくるだろうな……。

「……まあ、確かに」

おお、影薄もそう思ったか。

「作者さん可哀相……」

アイツに哀れみなどいらないぞ。

「作者ー！数学が【ピー】だったさく……あれ？」

（言うなやあああああああああああああああー！！）

「よし、やっと来たな」

「おおー！流石はダーリン！！」

「数学が【ピー】ってマジか……」

「……作者さん……」

（なにさ！なんなのさ、揃いも揃ってその冷たいまなざしは！！）

「別に」

「な、なんでもないよ」

「気にするなや」

「お気の毒に……」

（帰るけど？帰っちゃうけどそれでもいいの！？）

「帰る前に、狩燐とかに渡してたアレよこせ」

（それが人に物を頼む態度！？）

「お前は人じゃねえからな」

「鴉ね」

「まあ、……確かに」

「で、でも中身は人です……」

（そうだよ！見た目鳥でも中身人間だよ！）

「俺はお前を人だと認めたくない！」

（ええ！？）

「ああ、私にもそのお言葉をお！」

「話それるから黙れって何度言わせんだアホ！！」

「アホじゃないわ！ちよっと複雑な心を持った女の子よ！」

「だから黙っとけや！てか複雑な心ってなんだ！」

「ダーリンとどうやって駆け落ちしようかとか、ダーリンとどうやってデートしようとか、ダーリンとどうやって幸せな家庭を作っていいこうとか……」

「変な事考えてんじゃねえよ！そしてダーリンって呼ぶのやめろ！！」

「あ、あのう……」

「嫌よ！これが私の生きる糧なのに！」

「他にもいろいろと生きる糧があっただろうが！」

「お2人さあん……」

「でも、ダーリンと一緒にの時間が一番幸せよ！」

「お前といるとストレスが溜まっていくのが分かるんだよ！」

「話がどんどんとお……」

「大丈夫！ダーリンの髪は私が守る！」

「はあ！？守られたくねえし！てか守られなくても平気だから！」

「それについているんですが……」

「心配しないで、マイダーリン！ずっと、ずっと傍に居るから！」

「傍にいて欲しくねえよ！鬱陶しいよ！」

「すみませえん……」

「それでもいい！いずれ私の大切さが分かるから！」

「分かりたくもねえし、分かる訳がねえよ！」

「いい加減に……しろやああああああああああああああああああああああああ！！」

「ひいっ」

ブチ切れ小橋に、大泣き寸前の館山。

「人に話をそらすなって言うておうて、おのれで話そらしてどないすんや瀬川！」

「あ、ゴメン……」

「ワレもや、森野！時に静かにしていなけりやならへん時があるんやで！たまには大人しくしてらんなあのか！？」

「ご、ごめんね……」

そして、ツツコませてくれ。なぜ大阪弁なんだ！？

「ねんし、ほな大人しくしとるねんうに！一言でえもしやべったら紐なしバンジージャンプもっかいやからな！」

……やけに小橋と大阪弁が合っている気がするの、何故でしようか……。

（2人が静かになったところで、あえて言おう！もうあの力はな
いと！）

「はあ！？」

館山以外はみんな揃って叫んだ。

（いやあ、アレもアレで、結構魔力的なもの使うわけですよ。で、
疲れたわけですよ。そして、そう言う訳だからおやすみ）

「お、おやすみ」

「おやすみなさい……」

「……永眠させてやろうかあああああ！」

「ま、待て瀬川！餅つけ！」

「餅なんてついてられっか！」

「さっきのはミスだ！餅……じゃなくて落ち着け！！」

お前もなあ小橋！つか、いつの間にかブチ切れモード終わってんの！

（脱出は好きにー。この部屋のどっかに抜け道あるはずだよ、
確かね）

「どこら辺か覚えてないの？」

（眠くて眠くて、考えてると寝ちゃいそうだからね）

「目印とかはねえのか？」

（あー、なんかあったようなあ……）

「思い出せ作者。ダメでもアホでも思い出すことくらい出来る」

（ボロクソ言うね、相手がどんな状態でも……）

「め、メモとか、そういうのはないんですか？」

（あー！メモ！メモか！……はい、これ。じゃ、あとは頑張っ
ね）

そう言い残して、作者は消えて、代わりにヒラリヒラリと紙が赤
い絨毯の上に落ちる。

「これがメモか……っておい……」

「どうしたの、ダーリン？」

「何々？俺にも見せてくれよー」

「わ、私も見たいですう」

つーわけで、ベットに腰掛けてた3人が集結し、俺が拾った紙を
覗いて一言。

「これは……」

「どっからどうみても……」

「ナゾかけですかねえ……」

「だよなあ……」

そう、あの馬鹿が残したのは、抜け道を示すナゾ（っぽい）もの
だったのだ！

ちなみに、それにはこう書かれていた。

目印は花に従い、野原の向こう。

一番星が唄う夜空の向こう。

風がいなく廃墟の向こう。

太陽と月が出会い、離れた愛しき者の声に従って集えば光の下に
よみがえる。

「あれ？ダーリン」

「んだよ。てかダーリンと呼ぶな」

「不毛な争いが始まる前に言っておこう。いい加減にしとけよ」

「言われなくても分かっているわ。ちよっと惜しいけど……」

「で、なんだよ」

「裏に、まだ続いてるみたいよ？」

「何？」

「……『ダイナマイトが仕掛けられてるみたいだから、気をつけ

てねえん♪』」

館山が見事な棒読みで読み上げる。

「これは笑うべき？」

「これは作者を殺すべきか？」

「これは泣くべきか？」

「これは、どうすべきでしょうか？」

とりあえず、言える事はココにいる3人にも分かったようで。

「ありえなああああああああああああああああああああああ

ああああい！！」

見事な絶叫が大阪城を駆け巡ったという……。

96、困った彼らに希望なし!? (後書き)

はい、まさかのダイナマイトオ!
彼らは爆発するものに好まれるようで……。

97、Sの怒りはどこへいく!?(前書き)

今回はちょっと短めです。

97、Sの怒りはどいへいく!?

「あの馬鹿作者め、今度会ったらあの羽全部むしりにとってやる……」

「まあまあ、お姫様。そうお怒りにならずに……」

「怒ってねえよ、イライラしてるだけだ。てか姫様って呼ぶな」

「それって同じ意味だと思うけど、そのイライラを私にぶつけてくれると嬉しいなあ……」

「気のせいだ。てか、引っ付いてくんな」

「それよりも、この暗号みたいなもの解かなくていいんですか？」

「解かなきゃならねえんだけどさ、このイライラと馬鹿をどうにかしてくれねえか？」

右に馬鹿、左に影薄。共に近い。近い、近すぎるんだよ！

「えっと、森野さん達。瀬川君が迷惑そうだから……ね？」

「大丈夫だよ、うん」

「そうよ、うん」

「何がどう大丈夫なんだよ。てかいい加減に離れろや」

「今この瞬間にこうしてないと、二度とこういうチャンスがないと思うんだよな」

「こういう危機的状況の時にこそ、ラブラブしなくっちゃ♪」

「……無視するんだ、俺。大丈夫だ、やれば出来る、出来るさきっと！」

てな訳で、馬鹿共は放置決定。気にしてたら話が一向に進まんし。

「んで、なんだっけ？」

「何ってなんでしようか……」

「あのー、あれだ。暗号みたいなものなんて書いてあったんだっけ」
「ちなみにあのメモは、今館山が保管中。俺が持っていると八つ当たりしたくなるし、小橋が持っていると影薄い存在じゃなくなってしまうし、森野が持つといろいろと面倒だからだ。」

「最初は『目印は花に従い、野原の向こう』です」
「目印は花って訳か？」

「そうかも、しれません……」

うーんと唸るのは俺と舘山だけ。馬鹿と影薄は、

「ちよつと影薄、私のダーリンから離れなさいよ」

「はあ？お前のじゃねえだろ」

「あんたのものでもないわ！」

「俺は瀬川は親友という名誉ある資格がある！」

「私だって傍にいていい資格があるもん！」

「お前は狩燐にでも引ッ付いてろよ。アイツもSだし！」

「可愛げがないからダメなの！」

なんて馬鹿な会話をしている訳で、……うん。

……まあ、はつきり言えばウザいですね。

「あとう、瀬川さん」

まさかのさん呼び！？

「さんじゃなくて、君か呼び捨てが嬉しいがなんだ？」

「えと、あの、うう……」

泣かないでくれー！！今ここでこのタイミングで泣かないで！てか、どこに泣きたくなる要素があった！？

「瀬川、お前……」

「な、なんだよ……」

「香ちゃんがタイプだったの！酷いわ、私を差し置いて！」

「はあ！？」

「酷い！酷いわ！酷すぎる！！私という恋人がいながら——あだっ」

「……うるせえ」

とりあえず、鉄拳下して黙らせとく。

「瀬川に逆らうべからずか……」

「なんか、言ったか？」

「いえ！何も申してごさいません、女王陛下！！」

「ならいい。……だがしかし、俺は女王陛下じゃねえからな」

「あの、せ、瀬川君？」

俺のスカートの裾をちよつと握って、鎗山はある場所を指差す。

「んだよ」

「目印の花って、アレ？」

その指の先には、壁。花なんてない。野原すらない。ただの壁である。

「アレが何だ？」

「あの、壁紙花の模様だから、そのね……」

「つまり、目印はアレかもしれないと？」

こくこくと頷く。

左右の馬鹿を引きずるように、俺らはその壁の前に立つ。それは淡いピンクの地に、綺麗な花が描かれたものだった。

……今更ながら気付いたけど、この壁以外はみんなただの白い壁紙だった。

「気付かなかった俺はなんなんだ……」

小橋が面白そうに指で壁の花をなぞる。

「これ、道標みたいに花が繋がってるな」

「先端はあ……ここかな？」

いつの間にか俺から離れた馬鹿二匹が、壁に描かれた花を追い、立ち止まる。

「ねね、香ちゃん。『目印は花に従い』の続きってなんだっけ？」

なぜかはしゃぐ森野に、鎗山が答える。

「『野原の向こう』です」

「『野原の向こう』ってことは………といやあつ……」

「ええ!？」

俺と鎗山の声が重なる。

いや、誰だっけいきなり壁に殴り入れる人見たら驚くだろうさ。

「おおー! 珍しく毒舌女が役に立った!」

「私はやれば出来る子なのよ!どこかの影薄と違ってね!」

「んだと!?!」

「誰もアンタの事だなんて言っていないわ!」

「不毛な争いはやめような。てか、なんでお前らはそんなに仲が悪いんだよ」

「瀬川君瀬川君!見てみて!」

なあ舘山よ、いい加減スカート握るのやめてくれない?そして引っ張るのやめてくれない?

んで、無邪気な舘山が指差す先には、

「……スイッチ?」

がありましたとき。それも夜空の中に。

「綺麗ねえ……」

絵で書かれたにしては綺麗過ぎる夜空に浮かぶのは、小さな黄色いスイッチ。押すなど言われても押したくなるような、ああ、押してしまいたい……。

てか、押していいですよね?……はい、そうですよね、押すべきですよね。

「よおし、ポチッといこー」

ゴゴゴゴゴ………

何かが動く音がして、

「原爆?」

「なんでだ!」

森野の馬鹿な発言に軽くつつこんで、ふと思った。

この仕掛け、作者が作ったんだよね……。だったら、ものすごく嫌な予感がす——

ガパッ!

「る!？」

突然、足元に大穴が開きましたとさ♪

「マジかよおおおおおおおおおおおおおおお！」

「キイヤツホー——————イ！」

「ひいやあああああああああああああああああああ！」

[illegible]

楽しんでゐる森野の神経が疑わしい！ んでもって小橋よ、女みた
いな悲鳴あげんな！

てか、どんだけ落ちていくんだよおおおおおおおおお
 おおお……！

98、終わり方は劇的に!?(前書き)

サブタイ通りに、劇的に終わりますっ!

多分……。

98、終わり方は劇的に!?

「つてえ……」

くそう、どんだけ落とされたんだよ……。てか、よく無事だったな俺。

「重い重い!」

ん?どっかから声が……。

「苦しいですう……」

どこだ?

「ああ、踏み潰されるなんて……美咲は嬉しい」

キモいな……。

「瀬川! いい加減にどけ!」

どけてっておい、俺は床に……

「おお、床じゃなかったか」

「今気付いたのか!」

えっと、下から小橋、森野、舘山、俺で積み重なってる。うーん、

漫画の1シーンのようだ。

「どいてくれない? 動いてくれない!? 俺、圧迫死する!」

「私も苦しいですう」

「私はこのままでも……うふふ♪」

「約一名はこのまま死んで欲しいからどかない」

「待て待て! お前、親友を見殺しにするつもりか!」

「そんな薄情なあ」

「それでもいい、今は幸せ♪」

「つーわけだから、ドンマイ」

「いやいやいやいや! ドンマイじゃねえよ!」

「ひどいですう」

「そういう人だから、ダーリンは♪」

「誰がダーリンだボケ」

「いだった！動くな馬鹿野郎！」

「誰が馬鹿だってこの野郎。さっきと言ってる事が矛盾してっぞ」

「罪もない人にこんな事して許されると思ってるんですかぁ」

「すまん、そーゆー性格なんだ俺は」

「ダーリンの下敷き……うふ、うふふふ♪」

「お前はその変態症状どうにかならんのか？」

＊

「本気であのまま殺されるかと思った……」

「同じく……」

「ああ楽しかった」

小橋がごちゃごちゃいつまでもうるさかったから解放した結果がこれ。

「とりあえず、これからどうすりゃいい訳？」

「あれは？あの、えっと、なんだっけ？」

「メモならここに」

随分クシャクシャに……。

「二行目までは終わったから、次は『風がいなく廃墟の向こうか……』」

「ねえダーリン」

「んだよ、森野。んでもって俺はダーリンじゃねえぞ」

「ダーリンはダーリンよ。廃墟って、ここの事かな？」

「そうかもな」

「かもなってお前、これどっからどう見ても廃墟だろ」

「そうかもな」

「お前、面倒くさがってないか？」

「面倒臭いからな」

「……だろうと思った」

「……なんだか、バイオ○ザードみたいなトコですね」

おい、正義感たっぷり純情小娘がなぜバイ○ハザードなんて知ってんだよ！

……まあ、おふざけはここまでにして。確かにここは廃墟のようだ。崩れた家やらなんやらがごっそりある。てか、大阪城にあっていいものなのか！？

「『風がいなく』……どういう意味でしょうか」

「風なら、吹いてねえな」

「まあ、適当に歩くべ」

「じゃ、私がダーリンの隣歩くー」

「お前は近寄るな、イライラする」

「大丈夫、それはきつと愛情に変わるから」

「んな訳あるか！」

で、歩く事10分くらい。あー、もうちょっと少ないかな？5分くらい？あー、少なすぎる気がする……。いいや、だいたいそれくらい歩いたら、ピューピュー風の鳴る音が聞こえてきたわけで、

「どこじゃおりゃー……！」

「出口出口と……」

「さあ、私達のために探さない！」

「お前も手伝うんだよアホ！！」

「あいだっ」

偉そうに腕くんで立ってる馬鹿に、近くにあった石を投げた。見事に額にヒット。さすがは俺。

「見つけたどおおおおおおおおおおおおおお」

「うるさい」

「え、いやだってさ。嬉しかったら、ホラ、叫びたくなるじゃん

「？」

「知るか」

「それにしても……」

「穴ちっさい！」

まあ、確かに小さい。悲しいほど小さい。

「ここでアレの続きじゃん？」

「えっと『太陽と月が出会い、離れた愛しき者の声に従いて集えば光の下によりみができる』ですか？」

「そそ」

「太陽と月ねえ……」

「どこかにあるのでしょうか……」

「ん、あるよ」

「ほう、あるのか」

「よかったな」

「ホントです……って」

「それを早く言え馬鹿！」

「瀬川に同じく！」

「せ、瀬川君に同じく！馬鹿はなしで！」

で、軽く森野をいたぶって（喜んでたけど……）、奴が見つけたものをみる。それは、壁に埋め込まれたパズルのようだった。ピースは月と太陽、女の子と男の子。

「『太陽と月が出会い』だから……」

小橋がピースをいじる。こういうのは得意だからなあ……。

で、しばらくして。

「できたっ」

「お疲れ様です」

「まあ、影薄にしては良くやったな」

「影が薄くても出来ることあるのね」

「お前らは素直に人を褒める事できないのか！」

「できないな、うん」

「けなされることの何が悪いの？」

「……もういい、お前らに反論した俺が悪かった」

「分かればよろしい」

小橋がいじったピースは、太陽と月が並び、女の子と男の子が向き合う形になっているだけ。

「これでいいのか？」

「太陽と月が会いだから、同じところに登らせて、離れたかどうかは知らんけど、愛し合うものって言ったらこれしかないだろう」

「私とダーリンも愛し合って——だはっ」

「黙ってろ」

「……極悪非道です」

なんとでも言うがいいさ。

「で、光の下にだから……明かり持っていない？」

「ねえな」

「愛という名の光なら」

「ないですね」

一つ馬鹿な発言混ざったような……。

「んー、じゃあ出れねえかもな」

「どうにかしろ」

「いや、無理だからね」

「何とかできませんか？」

「いや、だから無理って言ったでしょう」

「愛という名のひか——あうっ」

「黙ってようなあ」

「どうしたものか……」

「アレは使えませんかね」

「アレってなんだよ」

「あそこにあるやつです」

指差す方向にあるのは白い箱。怪しい匂いがプンプンする……。

「フフ、お疲れ様。そういえば、そんな汚い格好してどうしたの？」

「この馬鹿に聞いてくれ」

「あー楽しかった♪」

「アイツは将来爆発マニアになると見た」

「……酷い目にあったです」

日も暮れた頃、文化祭も無事に終わって、いや、無事じゃないな。

「フフ、それにしても、あの爆発でよく無事だったわね」

「それはアレだ、日頃の行いがいいからだ」

「いや、良くないだろ」

「いや、気のせいだ」

「いや、全然良くないからな」

「……るせえな、影薄のくせに」

「影薄のくせになって何だ！」

「そのまま読んで字の如くだ」

「薄情者！最後のは俺のおかげだという事を忘れんな！」

「すまんがもう忘れたよ」

「薄情者――――！！」

「さて、後始末しねえとな……」

「フフ、そうね」

その後、倒壊した大阪城を学校全体で処理したのは、言うまでもなく。

98、終わり方は劇的に!?(後書き)

次回で文化祭編終了です。

あー、長かった……。

99、はちやめちゃんな打ち上げ!?

「(下から数えて) 一番にかんぱーい!」

「かんぱーい!!」

ほぼ全員が大合唱。

「(下から数えて) 一番最高!」

「イエー!」

またまた大合唱。

「(下から数えて) 一番になれた事を光栄に思う!」

「イエー!」

……以下同文ってことで。

つーかさ、小さな声で言ってるつもり『下から数えて』はつきり聞えちゃってるから。堂々と公表しちゃってるから。小さな声で言う事は小さく言いましようねえ。

という事で、俺らのクラスはめでたく最下位であつたらしい。先生が「らしい」つーから、らしいんだ。

まあ、そんな事はどうでもよくて。

喜んじゃいけねえよな、普通。最下位なのはしゃいじゃいけねえよな、普通。打ち上げとかもう論外だよな、普通。

「フフ、暗い顔でどうしたの? 美咲がいないと寂しい?」

「んな訳あるか」

「瀬川、大丈夫だ」

「何がだ影薄小太郎之介」

「無駄に長いあだ名付けるな!」

「で、何が大丈夫なんだ。んでもって引っ付くな、酔っ払いかこの野郎」

「ん? とっても可愛かったから、心配する事はねえと——づだっ」

「黙れ、そしてこのまま死ぬがいい」

「酷くね!？」

「ちよ、ヒロインがそんな事しちゃいけないよ!」

「誰がヒロインだよ阪下!」

「まあまあ、楽しもうや、姫君」

「誰が姫君だ神郷。そして何故お前も引っ付いてくるんだコラ」

「フフ、モテモテ?」

「嬉しくねえぞ」

左右男って、花がねえだろうが。

「大丈夫よダーリン! ハニーがちゃんと守ってあげ——あべし
っ」

「何でオメエがいるんだよ!」

「だって、だってえ」

「すみませーん、不審者が」

「ただ不審者じゃないわ! 鯉の不審者よ!」

字がちげえよ。

「ちよ、放しなさいよ! 私、アナタみたいな可愛くない人に興味
ないんだから!」

ニヨニヨしながら言うことじゃない。店員さん引いてるだろうが。
「まあ、折角の打ち上げだしさ、楽しまないと損だと思わないか
?」

「……まあ、そうかもな」

「そうだよ! ヒロイ……今回活躍してくれた瀬川君がいなくっちゃ!
」

ヒロインって言いかけなければ最高だったぞ。

「フフ、楽しましよう。はい、ジンジャーエール」

「……お前が持つとビールにしか見えない俺はなんなんだ?」

「フフ、何かいった? もしかして、私に酔った?」

「んな訳あるか!」

「フフ、ジョーダンよ」

……なんかムカつく。

「なあ、偽ヒロインー」

「誰が偽ヒロインだ影薄小太郎之介」

「よく嘸まないで言えるよな、それ……」

「俺様に不可能は多分ない」

「自信ないのかねえのか分からねえし」

「すみませーん、また不審者」

「ごめんなさいもう二度とこのようなご無礼は致しません」

「うむ、それでよろしいのだ」

「……悪代官だな」

「……悪魔っぽい」

「……フフ、黒いわねえ」

なんとでも好きなように呼べばいいさこの野郎。

「ねえねえ、瀬川君」

「んだよ」

「写メ撮らせてー」

「しゃめ？なんだそれ。サメとシャケの融合体か？」

「フフ、まさかの発言ね」

なぜだ、何故みんな驚いているんだ。そして読者の皆様よ、何故引いているんだ！

「瀬川、写メって言うのはな……」

と、小橋から長い説明。実は長くなかったりするけど、それは気にしてはいけない。

「ふーん」

「なんだ、そのあからさまにどうでも良さそうな返事は」

「どうでもいい気がするからな」

「お前にかかれば、なんでもどうでもいい事に早代わりだな」

「そうかもなー」

「またそうどうでも良さそうに……」

「まあ、どうでもいいからな」

「……無限ループが始まりそうだ」

「それもそれでいいんじゃないの？」

「で、撮らせてもらってもいい？」

まだいたのか、名もなき女子生徒A子さんよ。

「いざ別れに。減るもんじゃあるまいし」

「ありがとう！」

そこまであからさまに喜ばれるとは思わなかったぞ。

「じゃ、わた」

「帰れ変質者」

「なんで！何故私はダメなの！」

「普通の人は植木鉢から出てきたりはしねえだろ。てか、少しは周りの目を気にしろってんだ」

ここに来てる人、みんなどん引きじゃねえかよ。あ、ちなみにここはファミレスでございますな。

「嫌よ！ダーリンと夢のツーショットのチャンスじゃない！」

「知る kann 事。すみませーん、また変質者がー」

「やめて！放しなさい！私とダーリンの恋路を邪魔するなんて、最低よ！」

うん、ニヤニヤして言う事じゃねえよな。んでもって、俺はダーリンじゃねえっての。

んで、なぜか始まった撮影会。シャッターが眩しいのなんのって……。

「させるかあああああああああああああああああああああ！
で、乗り込んできた不審者2。」

「私の、俺の1人息子の魂を、そんな小さな画面に納められてたまるかあああああああ！」

何の話だ。

「あの子はなあ、本当は持病があつてだなあ、写真を撮られると魂が磨り減っていくんだよう」

どんな持病だ。

「だから、だから……」

おーい、嘘泣きするなあ。

「俺の携帯とカメラ以外で、写真を撮っちゃあいけねえんだよう
！！」

……変態親父め、何を言い出すかと思ったら……。

「ごめん、ちょっと……」

「瀬川、ほどほどにな」

大丈夫だ小橋。お前が思ってるほどの事はしねえから。

「さてと、そろそろデザートの間かな」

「フフ、そうね」

「まあ、そうだな」

「わーい♪」

嬉しそうだなあ、阪下。だがしかし、周りのみんなを見てあげましょう。お腹一杯、たすけてちよーだい！って感じじゃん。

「でもゼリーかプリンしかないねえ」

「フフ、少ないわね」

「二種類だけって、ファミレスのくせに……」

「パフェぐらいあった方がいいのに」

そこ、わざと大きな声で、しかも店員さんが通った時を見計らって言うんじゃない。

「瀬川はどうする？」

「フフ、あんみつとかくずきりとか、そーゆー類もないわよ」

「和食万歳のお前には過酷かもな」

「ファミレスの分際で、ふざけてますよね！」

ふざけてる？ 言いすぎだよ、阪下。

「ああ、ふざけてる！こんな店、ファミレスの名をかたる資格はない！」

ああ、事実が、本音が漏れてしまう……。

「いや、あんみつとかないくらいで……」

「神郷！それでもお前は日本男児か！！」

「え、あ、なんかごめん……」

「フフ、まあまあ、落ち着きなさい。たかがデザートじゃない」

「たかがデザート！それでデザートであるぞ！食後の小さな楽しみが、二種類であっていいはずがない！！」

「フフ、まあ、そうかもしれないけど……」

「和食も少なかったし、怒る気持ちは分かるけど」

「とりあえずお前は黙れ」

「何故俺には冷たいんだ！？」

「もういい！このお店選んだのが間違いだった！ちょっと有名だからって奮発するんじゃないかった！」

「そうだな、阪下！さあ、もう今日は解散だ！こんな店、二度と来るか！！」

散々大声で騒ぐなどといった本人が、勇者阪下と去っていく背中を見て、ふと思いついた事が一つ。

「……そういや、瀬川って昔から甘いものが好きだったな……」

「フフ、だからこんなに怒っているのね」

「されどあんみつ、されどくずきりって訳だね」

「今度から、コイツがイライラし始めたら、甘いもので釣るのもアリかもしれない」

「フフ、そうかもね」

「そうだねえ」

まあ、この店がそれ以来打ち上げなどを禁止したのは、また別の

話。
かもしれない……。。

99、はちゃめちゃん打ち上げ！？（後書き）

と、言う訳で、文化祭編最終話！

なんだか、とっても長かったですが、楽しんでいただけたのでしょうか……？ 私はそれが心配で心配で仕方ありません。

そして、ちよっとこのお話の最終話っぽい感じはなんでしょうか？ あ、終わりませんので、ご心配なく。もうちよっとは続きます、ハイ。

まあ、一区切りついたということで、一言。

ここまで読んでくださった方、有難うございます。

私、下弦 鴉は読者の皆様に笑って笑って、また笑っていただけるように、頑張っています！

これからも、ご愛読していただける事を願うばかりでございます。

あはは……長くなってしまいましたね。

ではまた、次話お会い致しましょう！

これからも、『DSな俺と、DMなアイツ』をよろしく願います！

100、記念すべき100話目にする事は!?

イエーイ! ついにやってきましたね、このときが! まさかこのときが来るなんて、全く思っていなかったですよ!

慎吾「るせーな、ボケ作者。……って、なんで感想欄みたいな書き方なんだよ」

それはねえ、今回が特別だからでアールグレイ!

慎吾「意味分からん事言っただけで、さっさと説明してさっさと失せろ」

……君、作者に対して酷くない?

慎吾「気のせいだ」

まあ、気にしないで置きましょう。

とまあ、前書きみたいな、前書きじゃないものはここまでにして。本題に入りましょう!

今回、この『DSな俺と、DMなアイツ』がなんと! なな、なんと! なー! あうだっ!

慎吾「うるせえし、無駄になげえんだよ馬鹿」

酷いなあ……。まあ、いいや。

気を取り直してもう一度! なんと、記念すべき100話目を迎える事になりました! !

慎吾「だからなんだ」

お前さあ、その反応はないでしょうが。だって、だって100話目！100話目なんですよ！100話も続いちゃったんですよ！

慎吾「じゃ、終わらせりゃあ良かったじゃん」

……。

慎吾「つーわけだから、今回を以ってこの話は終了。めでたく100話も続いちゃったし、いいんじゃないかねえの？」

お前、それでも主人公か？

慎吾「そうだな」

森野「終わらせはしないわ！まだラブラブになっていないのに、終わらせなんて！！」

慎吾「どこからわいた！この蛆虫！！」

森野「ああ、素晴らしき罵倒を有難う、ダーリン。でもね、今回を最終回になんてさせやしないんだから！」

まあ、作者もそのつもりですからね！

慎吾「ちっ」

舌打ちすんな！

慎吾「で、今回はこれだけか？くだらねえな」

森野「確かに、いつもよりへぼいわね」

……そんなボロクソ言わないで……。

小橋「そうだぞ！この馬鹿げた作者だって、それなりに頑張ってるんだ！」

おい、分かったような口きいといて、馬鹿げたとは何だ！それなりにとはなんだ！

慎吾「まあ、馬鹿は馬鹿だからな」

森野「悪口言わないで！傷付いていいのは私だけ！」

小橋「俺はまだ、まだやれる！戦えるんだよ！！」

……何が言いたんだよこいつらは……。

斎賀「フフ、何か面白そうな事やってるじゃない」

葛野木「混ぜなさいよ」

……予想以上にキャラ出てきてるし……。

狩燐「ん？俺も混ぜていいのか？」

んー、できれば葛野木達と一緒に静かにしていて欲しい。

慎吾「この小説に静かにする事ができるのは……」

森野「多分いないわねえ」

小橋「俺もでき」

斎賀「フフ、舘山さんなら可能じゃない？」

葛野木「あと、芙茶麒さんは楽勝ね」

狩燐「小橋も楽勝なんじゃね？」

小橋「人の台詞に被せておいて、何を言うか！」

狩燐「被せてねえし」

小橋他全員「うんうん」

小橋「……集団いじめだ」

まあ、そんな事より、私の話を聞きたまえ！

慎吾「聞きたかねえな」

森野「ダーリンの事についてだったら何なりと」

小橋「そんな事で片付けるなよ！」

斎賀「フフ、影薄のくせに、うるさいわね」

葛野木「だから、作者にも嫌われたのよ」

狩燐「まあ、ほどほどにな。一応小橋はガラスハートだから」

……いい？話していい？

全員「どーぞ」

ふう、やっとしゃべれる！というわけで！
この、記念すべき100話目にする事は！！

キャラクターの人気投票でえす！！

慎吾「来ないな」

え！？

森野「投票もらう前に、執筆頑張っただけだな」

あ、はい。頑張らせていただきます。

小橋「俺に票を！ 清き一票を！」

いや、選挙じゃないんだから……。

斎賀「フフ、無謀ね」

葛野木「うんうん」

そんなマイナス思考に行かないでさあ。

狩燐「ま、いいんじゃないの？」

て、ことで、実施させていただきます！

全員「どういうことでだ!!」

1人、2票まで。同じキャラに費やすのもよし、哀れみで入れるのもよし、なんでもよし！

慎吾「結局それか！」

メッセージからも、感想欄からも募集させていただきます。懐かしきあのキャラに、定番のあのキャラに、応援したいあのキャラに、ぜひ投票をお願いします！

慎吾「まあ、やるのは許してやるとして、」

森野「もしもの事があったら、」

小橋「投票数0とか、」

斎賀「フフ、苦情が来ちゃったりとか、」

葛野木「投票があまりにも少ない惨めな結果だったとか、」

狩燐「そーゆーときは、どうすんだ？」

……えっと、その、ですね……。

慎吾「なんだよ」

怒らない？

森野「言う事によるね」

怒鳴らない？

小橋「多分な」

呆れない？

斎賀「事によるわね」

殴らない？

葛野木「時と場合によって」

見捨てない？

狩燐「よっぽどの事じゃなければな」

よし、じゃあ言っちゃいます！

この話丸ごと、なかった事にしちゃいます！！

慎吾「よし、歯を食いしばれえ」

え！？

森野「大丈夫、屈辱はいつの日か快感に変わってる」

ええ！？

小橋「怒ってない、怒ってないぞー」

えええ！？

斎賀「フフ、地獄に逝かないようにね」

ええええ！？

葛野木「命は（多分）大丈夫よ」

えええええ！？

狩燐「よし、心の準備はいいか？」

えええええええ！？

えっと、その、……ご、ゴメンなさー
ーーーーーい！！

慎吾「あ、コラ！逃げんじゃねえ！！」

森野「ありがたい苦痛を受けなさい！」

小橋「待てコラアアアアアアア！」

斎賀「フフ、こうなると思っていたわ」

葛野木「だねえ」

狩燐「まあ、こういう作者と、こういう俺らだからな」

で、でも、でも、待ってますからね！心から、皆さんの投票を待
ってますからね！！

あ、締め切りは今月いっぱい、31日までですから！ホント、お
願いします！！

100、記念すべき100話目にする事は!?(後書き)

前回区切りがいいといったけど、実はあんまり区切りが良くなかったようですね、はい。

そんなことより、できたら投票お願いします。

待っておりますので、ずっとずっと、涙を堪えて……。

101、第一話改訂!?(前書き)

先に謝っておきます。正体不明先生、申し訳ない!!

そして、読者の皆様にも、更新が途絶えてしまつて大変申し訳ございませんでした。

これからは本当に地道な更新になっていくとは思いますが、これからもよろしく願ひします!

101、第一話改訂!?

晴れ渡る空。どんなに手を伸ばしても、届きそうで届かない、高い雲。

ああ、なんて素晴らしい日なの。この世界が、私の幸せを祝福してくれているみたいだわ。

「じゃ、今日はここまでにしようか。明日はステージで練習ね」

「はい」

と、言う訳で、私がしょしょく……じゃなくて、所属している部活、演劇部の練習は終わった。

「じゃ、お先でーす!」

「着替えるの早っ」

体操着から制服に着替えるまで、約20秒。早くないわよ、遅いくらいよ。

え? 十分早い? 気のせいだと思うわ。でも、もっと言葉攻めにしてもらいたい……。それが私の生きる糧となるから!

まあ、そんなこんなで。私は森野美咲、ダーリンをこよなく愛する中学一年生。青春真っ只中。え? もうそんな事知ってる? あら、そうだったの。ごめんなさい。そして、もっと強く言って欲しいです!

さてさて、愛しのダーリンもそろそろ部活が終わるはずね。

え? ダーリンって誰ですって!? ダーリンを知らないですって!

! 信じられないわ!!!!

キュートでラブラーでイケメンで抱きしめたくなるダーリンを知らないですって!!

許さない、許さないわよミチコ! 私のダーリンを『知らない』の一言で済ませるなんて、絶対に許さ——

「お疲れ様でしたあ」

ああ、かったるような響き。そして呆れたような響きを持ったこ

の美声は……。間違いない。ダーリンだわ!!

「しい〜ん〜ごお〜!」

渡り廊下を全力で走り抜ければ、愛しのダーリンが目の前に! そして抱きしめる!

「会いたかったわ、ずっとずっと!」

「ああ、俺もだよ。美咲」

でへへええええ。もう、そんな事言われたら、照れちゃうじゃないの!

「さあ、一緒に帰ろうか、マイスイートハニー」

「あい、もちろんですわ」

もう、ダメ……。ダーリンの笑顔ダメ。可愛すぎる、カッコよすぎる。

え? 展開がおかしいですって? 気のせいでしょう。ええ、気のせいです。

……あ、もしかして嫉妬? 醜いことです!

そして、ラブラブな帰り道。

「今日もお前と一緒にいられることが幸せだよ」

「私もよ♪」

「神様がくれた出会いに感謝だな」

「そうね、ダーリン」

「ああ、ハニー」

エヘヘー♪もう、ダーリンの笑顔だけで私はドロドロに溶けます。溶けてしまいますよ。

ああ、この時の流れが止まってしまえばいいのに。そうすればずっとずっと、いつまでもダーリンと一緒にいれるのに……。

「……さて、悲しいが別れの時がきたようだ」

「そんな事……言わないで」

と、言っても別れ道なだけですよ。ダメですか？え？アウト。ごめんなさい、ラブラブだからそんな事分らないわ。

「愛しの美咲。また明日、な」

ダーリンが優しく頬をなでてくれる。その手を取って、ダーリンを真っすぐに見つめる。

「私はずっと、ダーリンの心の中にいるわ」

「美咲……」

切なそうな笑顔。いやん、トキメいちゃう。

「まだ、別れたくない」

「ええ、私もよ」

「……美咲」

「……慎吾」

2人の距離が、縮まって、縮まって。唇が――

「えええ！？ちよ、え！？待て待て待て待て待て待て！！」

誰！？このラブラブでイケイケな雰囲気をぶち壊すのは……って！

「だ、ダーリン！？」

「ダーリンじゃねえよ、瀬川慎吾だ！」

「え、じゃ、……え？」

「そいつはなんだ！というか、何で俺だ！？俺がなんだ、なんだ俺が！」

「ダーリン落ち着いて。慌てすぎて何か変よ？」

「大丈夫だ、いたって落ち着いてる」

「落ち着いてなかったって事は、私を想って」

「んな訳あるか！てか、テメエは誰だ！」

「ちっ……」

舌打ち！？

「仕方ねえ、緑。帰りのヘリコプター頼む」

え、なにになに？どこから出したの、その無線機。というか、あれ？ダーリンじゃ……ない？

「だ、じゃ、べぼ？」

「何語だ」

2人のダーリンにつっこまれた……。し、幸せだわ！

「えっとお、ダーリンがダーリンでダーリンがダーリンじゃない？」

「意味わからねえし」

「全くだな」

ああ、なんなのこの快感！ダーリンが2人いるだけなのに、それだけなのに胸が熱く、煮えたぎるように！

「……って、お前、まさか！」

「あー、多分、その『まさか』合ってるぞ」

「おーい、作者出て来い。前書きで謝ってても何が何でも出て来い。出てこなかったらまた羽むしりとするぞこの野郎」

（やめてくれない！？そのおどし、やめてくれない！？）

「さて、バ鴉。説明しろ」

（えっと、説明しろといわれてもですね。私が止める前にやってきてしまったわけですからね。そのですね……）

「おい、見上げにこれをやる」

（ええ！？これって、ちょ、私は一応鴉でもさくsy）

「おう、サンキュー」

「その代わり、二度とくるな。そして俺で遊ぶな」

「大丈夫だ、次くるときは他の奴で」

「来るな！！」

ええっと……、全然話の流れが分からない……。なんでダーリンが2人なのかも、作者さんが誘拐まがいな事されているのかも。

「……様、……えに、した！！」

ちょ、何この突風！というか、ヘリコプターでかくないっ！？

「おー、お疲れ緑。じゃ、またな」

「またはない。というか、来るなっつただろうが」

「おいおい、年上には敬語を使えって習わなかったか？」

「忘れたな」

「はは、お前らしい。さて、なかなか楽しかったぞ。末永く、お幸せにな」

「なんでそうなる!? なんでそうなった!?」

「じゃーなー」

ダーリン(?)が、ヘリコプターから下げられた縄梯子につかまって、飛んでいく。飛んでいく!?

「悪役みたいなさり方だな」

「やった、ダーリンと同じ事考えてた♪」

「んだよ、キモいな。ひつつくな、この、離れやがれ!!」

どこかの誰かさん、全く分からない人だったけど、つかの間の幸せを有難う。

「というか、なぜ俺じゃないって気付かなかったんだよ」

「え、だって私の思い描いたとおりのダーリンだったの」

「お前の世界の俺と現実世界の俺を一緒にするんじゃないよ!」

「ああ、久しぶりの厳しいお言葉、美咲は嬉しいよ♪」

「キモいつつてんだろうが! 引っ付くなこのやろう!!」

「でも、ホントにそっくりだったわ、あの人」

「そっくりじゃねえよ」

「背も高くて、カッコいいし……あ」

気づいた時には既に時遅し。

「お前もあれだ、冥土さん、いる?」

バキボキと指を鳴らすダーリンの目は……悪魔でした。

「えっと、ダーリンの愛のムチは大変喜ばしいんだけど、今日は、そのね……さようならっ」

「待て!! お前を一度、地獄に送ってやらなきゃ気がすまねええええ!!」

「いやああああああ!!」

追いかけてっこが始まったのは、言うまでもなく。

「んでもって嬉しそうな顔してんじゃねえ!!」
先に言われちゃったけど、追いかけて嬉しいうも言うまでも
ないわ♪

101、第一話改訂!?(後書き)

さて、再び……正体不明先生様! 鳥本君使っちゃってごめんなさい! 本当に、ごめんなさい! 生贄に私が連れて行かれましたが、慎吾を召還するので許してください……。

そして、話は変わって。

締め切りをすぎたキャラ人気投票なのですが……。予想通りに票が少ない……。だ、だから締切日を伸ばすんじゃないんですからね! ただ、ちよつと希望を持ちたいだけなんですからね!

という訳で、締め切りを8月の終わりまでに延ばします……。なのでどうか哀れみの一票を!

……そして、駄文の長文、失礼致しました。

これからも『DSな俺と、DMなアイツ』をよろしくお願いします。

m () m

102、暑い日には人と会う!?

……くそう、なんでこんなじめじめ蒸し暑い時に買い物なんてしなきゃならねえんだよ。俺はクーラーの効いた、明らかにエコじゃない部屋でのんびり本でも読みながら過ごしたかったのに。なんでこういう日に限って母さんはいつも……。

ん?なんだ?話がつかめない?じゃああれだ、うん、あれいっておこう。

＊

それは、昼食前の穏やかな時間を過ごしていた時の事。

「慎ちゃん?」

「……何?」

キッチンからニコニコしながら母さんが、手を拭きながらやってくる。そして、俺が座って麦茶を啜っている目の前の席についた。まだニコニコしていることからして、いい事はなさそうだな。

「あのね、」

「あー、ごめん。小橋と遊ぶ約束してるから」

「あら、小橋君は今日、叔母さんの家なんじゃない?」

「ああ、そうだったね」

「でね、慎ちゃん。今日ね」

「ごめん、今日なんか熱っぽいから」

「あら、大丈夫?……って、熱があるのにアイスなんて食べちゃダメよ」

「ああ、ごめんね。そういう事だから」

「ダメよ、母さんには嘘はお見通しなんだから!」

……ちっ。逃げ切れなかったか。

「で、何？」

「えっとね……なんだったかしら」

なんて言って、困った顔をする。やめて、ちょっとベタな行為やめて。続きが、内容が気になっちゃうじゃねえかよ。

「そうそう。今日母さん、同窓会に行ってくるから」

「……それで？」

聞かなくても、何となく分かってしまう微妙な辛さ。

「夕飯は自分で買ってくれると嬉しいの。あとね、えっとね……」
そう言って、可愛い花柄のエプロンのポケットをあさり始め、何かを見つけたのか手を止めた。

「これもついでに買ってきってくれると嬉しいんだ」

よし、正解だぞ、俺。……嬉しくないけど。

「……分かったよ」

「わーい、有難う慎ちゃん！さすがだわ♪」

そんなに喜ぶとは思わなかったよ。そんなに若い子みたいに喜ぶとも思わなかった。

「じゃ、これその分のお金と夕食代。頼んだわよ」

＊

と、言う訳だ。ああ、やっぱり便利だわ、回想ってやつ。口でしゃべらなくてもいいってのは最高だ。

つー訳だから、はじめ蒸し暑い中買い物に出た俺な訳で、できれば今すぐにでも家にかいりたい。でも、きちんと商店街に来ている俺がいるんだよな。

「……さて、何買うんだっけな」

メモは……っと。

あれ、……。お、あつたあつた。えーっと、豆腐（絹ごし）1丁。長ネギ1本に、玉ねぎ5個入り。牛乳2本にコーヒーの粉1袋。紙のゴミ袋……。ねえ。

「……少なくとも、徒歩で持ち帰りたくなかったな」

自転車に乗って来るべきだったな。近いからって徒歩で来るなよ、俺の馬鹿野郎！

「あれ、瀬川君？」

「あ？」

つと、無意識に怒りが言葉に……。

「何で怒ってるのか知らないけど、こんにちは」

「……こんにちは」

えっと、私服だから自信はないが、学級委員長か？

「こんなに暑いのに、おつかい？偉いところもあるんだね」

「失礼だな。俺だってこれぐらいやるよ」

「え、ああ……ごめん」

しゅんとして、小さくなった阪下は焦って視線を泳がしめる。

「で、阪下は？」

「え？」

「え？じゃねえよ。お前も買い物か？」

「あ、うん。お母さん達は今日帰って来られないみたいだから」

そいえば、コイツの両親は医者だったっけかな……。忙しくて家に帰れないことも多いんだろう。

「大変なんだな」

「え？そうでもないよ。1人でいると、料理とかできるようになるし」

「へえ、意外だな」

「い、意外だなんて……」

「ま、お互い様って事で」

「……そうだね」

なんでがっかりしてんの？まあ、どうでもいい。とりあえず、早

く店の中に入りたい。

「じゃな」

「え、あ、ば、バイバイ！」

あー暑い暑い。

で、紙のゴミ袋はどこだ。後は全部見つけたのに……。

「……お、瀬川だ」

「ん？おお、神郷か」

なんだ、今日は学級委員長デーか。

「瀬川……」

俺の持っているかごの中を覗いて、神郷は呟いた。

「なんだよ」

「牛乳飲んでも、背は伸びな」

「身長のためじゃねえから！頼まれたただだから！」

「あ、そうなのか。こりゃ失敬」

「……まったくだ」

そこまで気にしてねえから。背が低くて何が悪い。背が低いからって高い奴を羨ましいとか思ってたねえからな。そこらへん、勘違いしないでくれたまえ。

「神郷は何しに？」

「ん、妹の付き添い」

「で、その妹は？」

「ん、見失った」

「……」

「黙らないでくれると嬉しいな」

いや、俺の周りにホントにまともな奴っていないなあとしみじみ思わせてくれよ。

「お、いた！じゃあな、瀬川。また明日なあ」

なんて言いながら、手を振って去っていく。

「お、おう。また明日な」

……今度は見失わないようにしてやれよ。いい例が家の近くにいるからさ。

「ありがとうございますましたあ」

妙に間延びした声に見送られて、地獄に戻る。暑い。暑すぎるぞ、夏。どうにかならんのか、夏！

「キャハ☆ 慎吾ぽんだあ」

ぽん！？ぽんって何よ！？

「キャハ☆ お久しぶりい、覚えてるう？」

「……笑先輩ですよ」

「キャハハ☆ 覚えててくれたんだあ、嬉しい！」

そんな特徴的な笑いするのは1人しかいませんから。はい。

「じゃ、俺はこれで……」

「キャッハ☆ ここはフツ―なにに來てるんですか的なこと聞こうよ！」

いや、聞き飽きた。2人同じ事聞いたから、もういいでしょう。ねえ、読者様？

「じゃ、何しにきたんですか」

「キャハ☆ 聞くきないねえ」

「まあ、そうですね」

暑いから早く帰りたいんだ、分かってくれ。そして、鬱陶しいのも嫌いなんだ、分かってくれ。

「キャハ☆ 犬のエサ買いに來ただけどね、お財布忘れちゃったから戻るところなんだ！」

先輩、威張るところじゃないと思う。そんな自慢げに言っちゃいけないことだよ、それ。

「キャッハハ☆ 慎吾ぽんに会えたからいいんだけどね！じゃあ、またねえ！」

なんて走り去って言った……。あの人の元気、どこから来るんだろう。そして、なんで『ぽん』なんだろう……。

あぢい……。で、でも、家はもうすぐだ……。が、頑張れ俺……。

「あつれ、瀬川だ」

「……んだ影薄。最後の最後に出てくんじゃねえ。消えとけ、というか消えろ」

「え、それ友達に言う言葉!？」

「……そうか、じゃあな」

「え、ちょっと待て! え、ホントに去っていくの? え、俺、本当にこれだけ!? ちょっと、ちょっとおとおおおとおおおお!!」
うるさい影薄。その辺でのたれ死んどけ。

よっしゃあ! 家にとうちゃ……。む、殺気!!

「慎吾おとおおおとおお!!」

ひらりとよけて、焼けたアスファルトにキスをする馬鹿事、森野を見下す。

「おい、何で人^{ひと}家^{うち}にいんだよ。というか、何で待ち伏せしてるだ」

「……愛しすぎて」

意味分からん。そういう時は、スルーしておく。

「とりあえず、さりげなく邪魔なんだが」

「邪魔なんかしてないよ。ただ、もう少し話して痛い!!」

「あー聞こえない聞こえない」

「いた、いだだっ! で、でも、嬉しい自分がいた!!」

ん? 俺はただ道を歩いているだけだが何か? 足元がふらつくのはあれだ、熱中症だ。

「よし、突破」

「あ、貴方の愛が、あるか……ぎり。わ、私、森野は、……ふめ、
っ……」

後ろで遺言のような変な言葉を聞いたが、空耳だということにしておこう。そうしておけば、何事もなかった事にできる気がしたから。

103、やる気のなさは、限りなく!?(前書き)

大変長らくお待たせいたしました。ついに『ドSな俺と、ドMなアイツ』再始動です!

どれだけの人が待ち望んでくださったのかは不明ですが、これから
はちまちままた更新を再開していきますので、どうぞお楽しみに!

それでは、久しぶりに本編へどうぞ!

103、やる気のなさは、限りなく!?

「おはよ、瀬川」

「おう、誰だ」

「ちょ、おま、酷くねえか!？」

誰かわかんねえもんは分からないよな。うんうん。分かりたくもない。てか、マジで誰だ。

「小橋だよ小橋!」

「あー、はいはい。隣のクラスの小橋武朗君ね」

「それこそ誰だよ!」

あれ、違うのか。じゃあ知らねえな。無視でいいや無視で。

つー訳でだ、ただ今絶賛登校中。朝の日差しが和らぐ季節、つまり秋になったよ。つい最近まで太陽の野郎はガンガンに働いてたけどさ、疲れたみたいだから弱ってやんのな。夏に頑張りすぎるからいけねえんだよ。大体バカなんだよ、ああいう熱いやつは。

「おーい、無視か?」

まだ衣替えの季節じゃねえが、長袖で暑くはないな。ちょうどいくらいだろ。まー、俺はまだ半袖でいい。クリーニングから長袖が返ってきてねえからもあるけど、なんか面倒なんだよなあ、長袖。

「瀬川ー。瀬川きゅーん」

「んだよ気色悪いな。てか誰だよ」

「小橋だってさつき言っただろ!？」

「ああ、同じクラスの小橋武朗だろ?」

「隣のクラスじゃなかったのかよ!」

「そんな事言っただかも知れねえな」

「言っただよ! 確実に言っただよ!」

朝からウゼエな。ウゼエといえ、ストーカーが珍しく貼り付いてこないな。バカでも風邪引くのか? もしくは死んだのか?

「なあ瀬川」

「んだよ」

「確か今日からじゃなかったか？」

「何がだ」

「体育大会の練習」

「知るか」

「いや、知るかじゃねえだろ。担任張り切ってたじゃんか」

「忘れた」

「お前反応が冷たいな」

「そだな」

「お前、やる気ないだろ」

「ねえな」

「……お前に聞いた俺が馬鹿だった」

今更気付いたか、武朗君。

そう、俺は体育大会が嫌いだ。嫌いなもののランキングで言うと、ゴキ○リの次の次の次くらいに嫌いだ。あと音楽会とか言うふざけたやつも嫌いだ、同じくらいに。まあ、文化祭も嫌いだけどな。

簡潔に言えば、学校行事が全体的に嫌いなんだよ。だって面倒じやねえか。いいじゃねえかよ、好きなやつが好きなやつだけで盛り上がってりゃあよ。俺は動きたくねえんだよ。働きたくもねえんだよ。できるだけ自分のペースで生きていたいんだよ。分かってくれよコノヤロウ。

「んで、それがどうしたんだよ」

「いや、練習サボったら担任がすごそうだなあって」

「あー……。まあ、大丈夫なんじゃね？」

「安直だな」

「考えるのが億劫だ」

「そこまで言うようになったか」

「俺は自由がほしい。ふりーだむ！」

「今は自由じゃねえってか」

「それなりに自由だな」

校門が見えてくる。青葉が散りつつあるが、まだ頑張ってる青葉は枝に踏ん張って張り付いてるし、力尽きたのは教頭に箒で排除されるだけだ。

「そういや、珍しくあの超絶毒舌女と会わなかったな」

「超絶毒舌女かどうかは知らねえが、ストーカーに会わないで始まる1日ほど素晴らしいものはねえよ」

下駄箱に自分の靴を入れる。何気なく会話を弾ませていた、隣の小橋も同じように靴をしまつて、上履きに履き替えた。そしてようやく、俺はピンときた。

「あ、お前小橋か。小橋泰助か」

「今更気付いたのかよ！ てか、まだ俺だと知らずに話してたのかよ！ つーかいつまでそのネタ引きずってんだよ！」

「いいか野郎共！ 体育祭は汗と涙があつてこそ成り立つ！ そこに人は感動を覚えるのだ！」

黒板にでかでかと『萌えよ、体育祭！』などと書きなぐった担任は、満足げに胸を張る。いろいろとつっこみたいんだが、今注意した方がいいのか？ ていうか、己のミスにやつは気付いているのか？ ていうか帰っていいか？

「せんせー」

「なんだ！」

名もなき登場人物Aが挙手をして、黒板を指差す。

「萌えじゃないんじゃないですかー？ 燃えるんじゃないんですかー？」

静まり返る教室。言っちゃった、アイツ言っちゃったよ。みたいな空気に満ち満ちている。あー、帰りたい。帰って今週号のジャ○プが読みてえ。

そそくさと担任は動き出した。名もなき女子生徒Aは静かにそれ

を見守る。ていうか、クラス全体で先生を目で追う。やつは黒板消しを手を取った。さりげなく萌えの字を消し、堂々と燃えに書き換えた。そして、さりげなく体育祭から体育大会へと換えた。

「お前らが出る種目は、クラス対抗リレー・大縄跳び・学年競技・騎馬戦だ」

そして当たり前のように話を進めやがった。何の問題もなかったかのようにサクサク進める。んだよ、つまんねえな。

「学級委員、あとはてきとーに決めてくれ。俺はちよつと……職員室いつてくる」

んでもって逃げた！ アイツ逃げたよ絶対！ この教室に居辛くなって逃げやがったよ！

ガラガラ、カシャン

「じゃー、適当に決めるか」

神郷が伸びをしながら席を立つ。それに合わせて阪下も立った。

「クラス対抗リレーは全員参加みたいだね」

「んだなあ。じゃ、これは順番決めるだけで良さげ？」

「長くなりそうだから、最後に考えよう」

「おけおけ。大縄も全員みたいだな。じゃー、騎馬戦と学年競技か」

「そうだね。ところで、学年競技って何だろ」

「ちよつと待てよ」

パラッパラッ パシ！

「これだこれ。短・長距離、男女3人ずつ計6名。ハードルも3人か。あとは……大ムカデってなんだ？」

「大ムカデって知らないの？」

「知らないな」

「長いロープにね、一定間隔で手ぬぐいがついててね、それを足首に巻きつけてね、ゴールまで足並みそろえて走るんだよ」

「ほえー。転んだら痛そうだな」

「そうだねえ。……他にはないの？」

「二人三脚くらいだな。これは2組だけでいいって事は、男女合わせて8人か」

「じゃあ、短・長距離、ハードル、大ムカデ、二人三脚を決めればいいのね」

「そーゆー事だな」

さすが学級委員というかなんというか。静かだから2人の会話しかねえし、しみじみとうちのクラスの学級委員はしっかりしてると思ったよ。担任はボロボロだけどな。

その後は阪下がカリカリと黒板に競技名を書いていく。神郷が競技名をいい、希望者を募る。挙手がされなかった種目は、体育委員と相談し、足の速い者は短・長距離走へまわされ、体育のハードルで成績が良かった者はそっちへまわされた。放課後だったし、練習期間でもあるからと、熱心なやつらは校庭へと出て行った。

「瀬川君はどっちがいい？」

「どっちもやだ」

「そこをなんとか頼むよ、姫君」

「文化祭のネタを引きずんな」

俺はもちろん決まってる。やる気がねえんだよ、どうしようもねえだろ？

「短距離にすればよかったのに、譲っちゃうから決まらないんだよ？」

「走る事のどこが楽しいんだ。疲れるだけじゃねえかよ」

「ゴールテープ切れると嬉しいでしょ？」

「何も感じねえ」

「え、そ、そんな事はないよ！ 一番になったって、嬉しいですよ？」

「べつつにい」

「えええ……」

「分かれ、阪下。瀬川はこういうやつなんだよ」
人聞き悪いな。

「じゃあ、俺と」

「断る」

「まだいい終わってねえし！」

「お前と二人三脚？ はっ、笑わせんな」

「ひでえ！」

小橋撃沈。そういや、コイツも出る種目決まっていなかったな。器用貧乏だからしかたねえか。

「いいじゃない、二人三脚。2人とも仲良し」

「はあ！？」

「どこがだよ、どこがどう仲良く見えんだよ」

「え、え？」

戸惑うなら言うなよ。てかなんで神郷は笑い転げてんだよ。

「それが嫌なら大ムカデだよ？」

目線で残ったやつらを見る。普段根暗で話さないようなやつばかりが集まってやがる。体育会系のやつもチラホラと混ざってるが、あの中に入りたくない。だからと言って、

「小橋と二人三脚も屈辱だな」

「おいおい、屈辱って何だ！」

「しまった、いつの間にか心の声が」

「わざとだろ？ わざとなんだろ！？」

気にするな。気にしたら負けだと思え。そうだ、お前は強い子だ。大丈夫、俺がいなくてもお前は生きていけるさ。俺はそう信じてるぜ。

「しかたねえな。二人三角でいいよ」

「二人三脚な」

「そーそー、それぞれ」

「二人三角って、何やるんだろ……」

「2人でどれだけ上手く三角が書けるかのかな？」

「よく分かんないよ、瀬川君……」

「気にすんな。んじゃ決まりって事で」

どっこらしょい。

「あれ、練習していかないの？」

「俺達仲良しだからさあ、練習とかいらねえのよ。絆つつーか、そういう紐でもう繋がれてんだよ、何年もな」

「おーい、カッコ良い事言って帰ろうとしてるぞ」

「うるさい黙れ小橋武朗君」

「だからそれ誰なんだよ！」

「さーな」

「てか帰んな！ 練習していけー！」

逃げたもん勝ち。帰ったもん勝ち。何事も先に行動した方が勝者なんだよ、小橋武朗君。

104、サボりとプリン!?

おそらく穏やかだろう空の下、流れる汗が美しく輝いていた。「イチ、ニ! イチ、ニ! イチ、ニ!」と威勢のいいかけ声と共に、足並み揃った心地よい足音が鳴り響く。また別の場所では、パンツと乾いた音が始まりを告げ、準備万端で構えていた走者達が一斉に走り出した。誰もが前へ、一番へと懸命に走る。やがて彼らの前に夢を託す仲間の姿が現れる。今の順位を守るために、さらに順位をあげるためにと助走を始めるのだ。そして合図と共にバトンを受け取り、次へ夢を託すために駆けるのだ。

汗と努力と友情が、冷えた秋空の下で今、鈍く輝き始めたばかりなのだ。彼らは走り、奪い合い、支え合うだろう。来るべき日に、この手で優勝と言う名の栄誉を掴み取るために。

「で、それなんだよ」

「知るか」

「知るかかっておま……。渡されたんだろ、先生から」

「とりあえず読んでくれ。そう言われたから仕方なく読んでやっただけだ」

「何なんだろうな」

「だから、知るかかってえの」

珍しくこの小説らしからぬ始まり方で、間違えたと思ってページ閉じたやつ。間違いじゃねえからな、正解だから安心してまた開いてくれ。

「んで、お前は何で制服なんだよ」

「お前こそ何で体育着なんだよ」

「いや、何でじゃねえからな!？」

いやいや、疑問だろ。授業が終われば帰るだろ、制服で。部活があるやつはそっちに行けばいいし。だから俺は制服なんだ。帰宅部の小橋が体育着なんて着てる方がおかしい。

「朝も言っただろ、今日は体育大会の練習するから、ちゃんと着替えておけよって」

「今日も平和だ飯がうまい」

「意味分からねえから！ 会話成り立ってねえから！」

「んだよ、平和のどこがいけねえんだよ。飯がうまいとか最高じゃねえか」

「そうだけど、そうなんだけど違うんだって！」

「じゃ、俺帰るから」

「待て待て待て待て！」

「るせーな」

俺は帰りたいんだよ。疲れたんだよ。もうやる気すら起きねえんだよ。

「とりあえずさ、ちょっとだけでいいんだ。ちょっとでいいからやってこうぜ」

「んだよ。お前、そんな趣味だったのか」

「はあ？ いや、意味分からねえって」

「俺をそんな目で見ていたなんて思わなかったぜ。これからはちよつと距離置くわ」

「おい、お前変な事想像してんじゃねえよ！」

「お前こそ変な事考えてんじゃねえよ。からかったただけだ馬鹿野郎」

隣のアホをはたく。とりあえず2発。

「おま、何すんだよっ」

「調子狂うんだよなあ」

「何がだ？ てか俺を2回も叩いた理由になってねえぞ」

はあ、疲れた。帰って寝るかあ。いや、昨日母さんが買ってきたプリンを食ってからにするか。いや待てよ。プリンは昨日食べた気がするな。クソジジイが俺の大切なプリンを食おうとしてたから、先に食べたような……。いやいや、あれはくずきりか。んや、あれは先週のか。じゃあ今冷蔵庫にあると思われる、俺様のおやつはな

んだ？

「そして無視か。てか何が調子狂うんだよ」

「るせーな。黙ってるプリン小太郎」

「プリン小太郎ってなんだよ！　つーか何考えてたんだよ！」

耳元でぎゃあぎゃあ、ぎゃあぎゃあとうるせえな。ガムテープでも貼っておくか。

「おや、瀬川。サボりかい」

どっころしよい。なんてジジ臭く腰掛ける学級委員（♂）。

「ねえ、僕の紹介なんかおかしくないか？」

「心を勝手に読むな」

そして男3人並んで座る。左から神郷、俺、プリン泰助。グラウンドへ出る昇降口の、ちょっとした階段に腰掛け続けて早数分。何もしてないのは俺らだけ。他はせっせと練習してるよ。

「で、何はなしてたんだ？」

「さあ」

「じゃあ小橋が独り言言ってたのか」

「そーだな」

「そかそか」

「納得するところじゃねえだろ！？」　瀬川が反応しめさねえから俺が一人でしゃべってるみたいになっただけだろ！？」

「つまり独り言だろ」

「つまり独り言だな」

「……お前ら揃って俺をいじめて楽しいか」

「楽しいな」

「僕は真似してるだけだね」

「薄情者め」

知ったこっちゃねえよ。

「そーいやさ」

神郷は何かひらめいたようだ。俺たちの方を見て、目を輝かせている。

「あー、なんだ。なんだっけ？」

「聞くな。てか何も考えずに発言すんな」

「言論の自由は僕にもあるよ」

胸を張って言うな。なんか腹立つ。はあ。

「なあ、さっきからなんでため息ばっかついてんだ？」

「お前の問いに答えたくない」

「それはどういふことだ！」

「だからさっきからいつてんじゃねえか。耳元で叫ぶな、プリン橋」

「プリン橋ってなんだよ？ 俺か、俺なのか？」

「今日も平和だ和食がうまい」

「だから意味分からねえって！」

「ああ！ 思い出した思い出したっ。最近お前に絡んでこないよな、隣のクラスのあの子」

ニコニコするな、気色悪い。とりあえず小橋はほっといいていいか。勝手にブルーになってりゃいい。俺は関わりたくない関わるつもりもない。

「あの子ってストーカーの事か」

「そうそう。森野だっけ？」

確かそんな名前だった気がするな。

「いつもなら瀬川にひつついてさ、漫才繰り広げてたじゃんか」
ひつついてるのは認めるが、漫才なんかしてねえぞ。

「最近静かになったなあと思ったら、瀬川が平和そうに毎日を過ごしてるせいだったんだな」

なんだそれは。俺が平和に毎日過ごすのはいけないって言いたいのか？ なあそうなのか？ どうなんだこのやろう！

「何かあったのかねえ」

ふっと視線をグラウンドに走らせる学級委員（♂）。その先で、それぞれ違うハチマキを巻いた生徒達が楽しげに談笑していた。

「なあ、（♂）っていうのはやめにしないか？」

「心を読むのやめたら考えてやる」

「なあ、俺は空気なのか？ プリンなのか？」

「お前はプリンだ。大丈夫だ、子供には人気がある」

「そうだ、お前はプリンだよ。給食で時々でると嬉しいあれだよ」

「いやそこは一応人間だと言って欲しかったんだけど？」

「お前に決める権利はない」

「まあいいんじゃない？ 人間よりは影濃いよ、プリン」

「プリンどんだけすげえんだよ！」

あゝー！ 耳元で叫ぶなっつーの！

「お前は一度死んでプリンになれ、そして帰ってくるな」

「酷くね！？」

「安心しろ、僕がおいしいプリンにして出荷してやるから」

「いやそれも酷くね！？」

キーンコーンカーンコーン

お、珍しく通常のチャイム音。まあ、普通ならこれが正しいわけなんだが、あまりにまともすぎると気持ち悪いな。

「瀬川もさあ、毎日暇そうだよな」

「暇そう？ 俺が？」

平和そうの間違いじゃねえのか？

「なんだかんだで気になっちゃってるんじゃないね、森野」

「んなわけねえよ」

「瀬川がそういうならそうかもな」

ういこらしよい。なんて変な掛け声とともに立ち上がる。ワサワサとグラウンドの生徒達がこちらに向かってくる。今日の練習はここまでか。

「さー、帰って飯食って寝るぞ」

「結局俺ら練習してなくね？」

「明日があるさ」

「明日もしないだろ」

「時と気分とノリとテンションと空腹具合で決める」

「面倒くさいやつだな」

「お前も面倒くせえよ、プリンのかせに」

「まだそのネタ引きずんのか！」

「じゃ、俺帰るわ。またな、神郷、プリン」

「おう、また明日な」

「待て！　せめてプリンを修正しろ！　そして俺の話を聞け！」
「やなこった。プリンはプリン。それ以上でもそれ以下でもなく、
プリンだろ？」

そんな事考えていたら、視界の端に見覚えのある顔。自然と視線
が追っていく。楽しそうに笑う奴は俺を見ていない。別に気になっ
たわけでもなく、ただ自然と目が追っただけだ。

一人の帰り道。静かで平和だ。ただ少し、風がやけに冷たく感じ
るだけで。

104、サボりとプリン！？（後書き）

なんだか書き方がとっても変わった気がするのは、この前完結させた小説のせいなのだろうか……。

ハイテンションが、ハイテンションが足りない！ もっとう、煮えたぎるようなテンションが！ そう、テンションが！

なんて言っても解決するわけでもないの、ちよつとシリアスを織り交ぜてみて、『この子、こんなキャラじゃない！』なんて思ったり思わなかったり。

さて、もう10月も終わりなのにこれから体育大会編へ突入するこの小説。寒くてキーボードをうつ手が震えるよ。違うキーを打つよ。余計に押しすぎるよ。誤字しまくってるよ。どうしようもないよ！

それでも地味に更新します。だって書く事は嫌いじゃないですから。それでは、またいつか更新した時にお会いいたしましょう！

105、ハイテンションとは裏腹に!?(前書き)

更新が遅くなってしまいました、すみません。
とりあえず、本編へどうぞー!

105、ハイテンションとは裏腹に!?

「いいかぁテメェら! 男は汗だ、女は涙だ!」

初っ端から何言ってるんだ、この人は。意味分からんぞ。

「負けは靴底だ! 勝利はかりんだ!」

すまん、全然意味が分からない。負けが靴底って何だよ。勝利はかりんだとかどういう事だよ。つーか何が言いたいんだよ。何をどうしたいんだよ。

「我々は勝たねばならない! そして、優勝カッパを我が教室しろに持ち帰るのじゃ!」

「うおおおお!」

いや、盛り上がるどころじゃなくね? 盛り上がる前にいろいろと訂正しないとダメだろ? なぁ、違うのか。俺が違うのか、俺が間違ってるのか。言いたい事が多すぎてうずうずするのは俺だけなのか、なぁクラスメイトよ!

「なぁ」

「ん?」

「俺にはどう盛り上がればいいのか理解不能なんだが」

「それはあれだ、お前のテンションがたりねえんだよ」

「影薄に言われたかねえな」

「テンションと影薄いのは関係ねえだろ!?!」

お前に聞いた俺がバカだった。名前もロクに思い出せないような奴に聞くんじゃないかった。あーあ、無駄な労力だった気がしてならねえや。

「今日は初のクラス合同練習だ! 我らの熱湯的強さを、他クラスのやつらに見せ付けてやろうぜ!」

「おおおお!」

何かいろいろと間違えている先生がこぶしを天高く突き出せば、ハイテンションな生徒達も同じようにこぶしを突き出す。明らかに

浮いている。ウチのクラス浮いているよ、シャボン玉のように。ふわふわ飛んでってるよ、今にも割れて消えてしまったほうが幸せなんじゃねえのか？

「なんか俺、このクラスでよく生きていけてるなって思えてきたわ」

「今更何言ってるんだよ」

「そうだよな。うん、今更だよな」

後悔した自分がバカだった。後悔はするが反省はしねえぞ。俺のせいじゃねえし。俺が好き好んでこのクラスに入ってたわけじゃねえしな。

「いいか燃えろ、燃え尽きるまで燃えるんだ。全身全霊を賭けて、この勝負、勝ちにいけ！」

「はいっ！」

なあ、先生。そしてクラスメイトよ。これは練習だよな？ 一応確かめておくけどさ、練習だよな。練習で燃え尽きてどうするよ。本番前に、本番もまだまだなのに燃え尽きていいのかよ。まだ火種はとっておかねえといけねえんじゃないか？ 燃え尽きて灰になっちゃったら、どうしようもなくね？ もう火なんて起こせないよ、助けてよ！ ってなってもさ、俺どうしようもねえんだけど。てか、全然やる気のない俺にどう火を点してくれるんだ。

なんて考えてたら、クラス合同練習始まったわけで。最初は大ムカデとか言う奴、次は大縄、んで今は全員リレーのバトン待ち。しばらくは回ってこねえけど。

「瀬川んとこ燃えてるな」

「ああ、主に担任がな」

同じ21番目の走者らしい狩燐があくびをする。そのついでといった感じで、話しかけてきたから軽く返した。

「生徒も燃えてるだろ」

「ああ、燃えてるな」

「お前以外な」

「ああ、俺以外だな。……小橋も燃えてんのか？」

「さあ？」

そんな俺らの視線の先に小橋の姿が……。いや、あれは違う。ハチマキの色が青じゃねえ。まず同じクラスじゃねえ。じゃ、あいつか？　ってあんな太ってねえや小橋。あれは猪上とかいう奴だな。じゃあどこだ。小橋どこだよ。文章的に俺らの視線の先にいるべきはずの影薄が居ないとかどういう事だ！

「いねえんだけど、小橋」

「いねえなあ」

「いるだろ！　どこ見てんだよ！」

びつくりして振り返れば、いたよ影薄。17番目くらいの走者のトコに。

「んだよ、いるんなら返事しろよ」

「呼ばれた覚えねえし！」

「呼ばれないと話せねえのか、切ないな」

「そんな哀れみに満ちた瞳で俺を見るな！」

哀れじゃねえか。サブキャラでしかも影が薄いとか。主人公の俺と仲良しな設定の癖に。

「で、お前は燃えてるの？」

「燃えてねえけど、」

「燃えてるといえばさ、昨日近所で火事があったみたいで、消防車のサイレンがすごかったんだ」

「へー、マジか？」

「おう、野次馬魂に火を点けて母さんが見に行ってたみたいだけど、そんなにすごくなかったらしいぜ」

「んだ、つまんね」

「人の不幸をつまんねとか言うなや」

「お前だってそう思うだろ？」

「思いはするが口にはしない」

「腹黒だな」

「何とでも言えればいいだろ」

「俺の話は聞く気なしか！ 話し振っというて被せて放置か！」

「おい、順番だぞ」

「なっ……！ あ、後でみてろよ！」

見てればいいんだな。OK、見ててやるよお前の勇士。

「やっぱりあいついじってる楽しいな」

「なあ狩燐、いつからSに目覚めた？」

「さあな」

それだけ言うと、うーんと伸びをしてから、また欠伸をした。

「こうも眠いとやる気とかの問題じゃなくなってくるな」

「じゃあどういいう問題になってくるんだよ」

「そーだなー」

しばらく考えるように空を見上げて固まった。動かない。突付いてみても動かない。まさかとは思うけどさ、このまま寝てたりしねえよな？

「美咲ー！ 頑張れー！」

緑のハチマキを巻いた女子が歓声を上げた。そーいや結構盛り上がってるな。俺のクラスの赤はもちろん担任のせいで盛り上がってるけど、他のクラスもテンションが上がってきたみたいだ。トップを走る青、追う黄色と赤、最後に緑が懸命に前の3人を追っていた。青から黄色は少し離れているが、お、赤が黄色を抜かしたな。そう思えば、緑がもう黄色の背後に迫っていた。なかなか見ごたえのあるレースだ。

「きつと人生に関わる気がする」

やけに重々しく口を開くと、狩燐は言った。その背後で次々と色鮮やかなバトンが次の走者へと託されていった。トップは変わらず青。追うのは赤と緑。少しずつ距離を開かれて、黄色が追う形に変わっていた。

「お疲れ、美咲！」

仲間に囲まれて、笑い声が聞こえてくる。まだ勝負は終わったわけじゃないのに、もう優勝したかのような口ぶりで、緑色女子は話していた。

「そういやさ、瀬川」

「ん？」

「お前、最近元氣なくなね？ 落ち込んでるというかさ」

「気のせいだろ」

「俺にはそうは見えないけどな」

から笑いで返すと、狩燐は不満そうな顔をした。

「俺からどうこう言うのは変かもしれないけどさ、無理はするなよ」

「だから気のせいだったの」

「おーい狩燐、位置についてくれ」

「おう！ ……まあ、お手柔らかに頼むよ」

ひらひらと手を振って、青いハチマキを巻いた友人は同じ色のハチマキを巻いた仲間の元へ戻っていった。少し談笑すると、トラツクの中に入って軽く屈伸をした。

「瀬川君も、早く準備してね！」

「ああ」

張り切る女子に背中を押されて、狩燐の隣に立った。やつはもう真剣な顔をしていて、ふざけて何か言ったとしても、静かに笑って返されるか無言で答えるだろう。

「頑張って、狩燐君！」

「負けんなよー、瀬川！」

先に青が直線を走ってくる。その隣には赤だ。狩燐が助走を始める。つられるように俺も徐々に走り出す。合図がくるまで、ゆっくりとスピードをあげていく。

「はい！」

切れのいい2つの声が少しずれて、広い校庭に響いた。掌に硬い

感触を確かに感じる。しっかりとそれを握り締めると、やけに鋭い事を言う友人に負けじと全力で走り出した。

105、ハイテンションとは裏腹に!?(後書き)

更新しよう。更新しよう。更新しよう。

そう思っていたらこんなにも時は流れていました。すみません。本当にすみません。

どうやら書き方が不安定なようで、前の日の続きを書こうとすると文に違和感があつて落ち着かない。修正を繰り返してやっと落ち着いても、更新を忘れるというね。もうバカだと言いたいようがないです。

これからも不安定な更新が続くと思いますが、生暖かい目で見守ってくださいると嬉しいですよ。

106、いじる者といじられる者!?

「いやー、やっぱ瀬川は速いなあ」

肩をバシバシ叩くな、痛えだろうが。

「なんだかんだで首位守ったくせに」

「ギリギリだったし、結構ヤバいと思って久しぶりに頑張ってみたらな」

わははと狩燐らしくなく豪快に笑うと、俺の時より力強く小橋の背中を叩いた。

「いって、痛えよバカ!」

反撃と言わんばかりに小橋は狩燐の背中を叩こうとしたが、まあ見事にかわされまくる訳で。

ちなみに今は下校中。小橋がどうしても練習して欲しいと言い、土下座もさせて、一発ギャグもさせて、今好きな子に告白させて、仕方なく練習して帰ってるところだ。……ん？ さっきの一行だけに悪意が詰まってるだど？ 気のせいだよ気のせい、気にすんな。

「ダアアーリーリイイーーン！ー！ー！ー」

は！ 久々に嫌な予感！

「お、出たなストーカー」

面白そうに狩燐がそう言ったと同時に、俺はしゃがんだ。その上を何かが通り過ぎていく。そして痛々しい衝撃音。よし、もういいだろう。

「相変わらず容赦ないな」

「俺は何もしてねえし。あのバカが勝手にバカやってるだけだろ」

「そうよ、そうよ！ 私はバカよ。恋に行き、愛に死ぬバカよ！」

「意味分かんねえよ」

頭から出てる赤い汁は気にしなくていいのか。なあ、どうでもいいのか。

「ああ、ああ。最近ダーリンが足りなくて、美咲は乾いてました

！」

いや、乾くまで放っておくのはさすがにまずいと思うぞ。まだ出てるぞ、赤い汁。

「だからねえ、今日は潤うためにい、ダーリンとイチヤイチャのラブラブしようと思ってたのお」

「語尾伸ばすな気色悪い」

「私は気持ちいいわ、貴方の罵声で潤うのよ！」
もう十分頭は潤ってんだろ、赤い汁で。

「帰ろうぜ」

「お、おう」

「てか血はスルーなのか」

何言ってるんだ狩燐、あれは赤い汁だ。きっとトマトジュース的な何かだ。

「ちょっと待って！ おいていかないで！ ああ、もうこんなにもダーリンが霞んで見える！」

そりゃそうだろうがよ。頭から血い流して平気な奴なんていねえよ。

「足元がふらつくの！ きつと、きつとダーリンが支えてくれないからよ！」

いや、原因は明らかに俺じゃねえだろ。てか、流れてる赤い汁どうにかしろよ。

「ダーリン、どこなのダーリン。目の前が真っ赤で分からないの。ココは誰、私はドコ。日本はアメリカ。アフリカはフランス」

全っ然意味分かんねえんだけど。何が言いたいのか？ 何が伝えたわけ？

「なあなあ、久しぶりに絡んでんだから、もっと優しくしてやったら？」

「お前はバカか。俺が優しくなかったらこの作品終わりなんだよ。それがいつまでたっても分からねえから影薄なんて言われんだぞ」

「それとこれとは関係ないだろ！？」

「関係大有りだよ。分からないからお前は影薄なんてあだ名が付いちまったんだぞ」

「狩燐も酷くね!？」

「はあ……。成長しねえな、影薄は」

「お前の辞書に進歩なんて字はないだろ」

「貴方だけそんなになじられるなんて、なんだか悔しいわ」

一人バカが会話に混ざってきてただけど。赤い汁は止まったみただけどき、それが流れた後は消さないのか？ 軽くホラー入ってるぞ。

「いい？ この世界でダーリンになじられていいのは私だけなの。ドSは全てこの私のものなのよ？ それを影薄に奪う権利があると思ってる？」

なあ、論点がかなりずれてると思うんだが。

「俺だって好き好んでこいつらにいじられてる訳じゃねえぞ!」

「ダーリンの愛を受け止められないから貴方はバカなのよ!」

俺だって好き好んでお前含むバカをいじってる訳じゃねえぞ。愛の欠片すらねえぞ。

「バカでも影薄でもねえよ!」

「じゃあ何よ」

「薄影だな」

「結果影薄じゃねえか! てか、狩燐っ。俺のセリフ奪うな!」
とりあえずうるさい。俺は疲れてるんだよ、察しろよ。

「ともかく、貴方はダーリンの罵声を浴びていい存在ではないの。ダーリンは私のもの! 私のものも私のも!」

軽く噛むな。私ものもってなんだよ。つーか俺はお前のものじゃねえから。ダーリンですらねえから。

「だあかあ、俺だって罵声なんて浴びたくねえから!」

俺はお前に罵声を浴びせた覚えはない。

「私が罵声だと思ったら全て罵声になるのよ!」
どんな俺様ルールだよ。

「俺のは罵声って言うか、なんとなく瀬川の真似してるだけだから関係ないな」

いや、なんだかんだでお前の方が俺より酷い時があるぞ。

「森野さーん、忘れ物ー」

「え？ はいはい」

ふらりふらりと千鳥足でバカその1が声の主の元へ走っていく。同級生と思しき人物が、森野にノートを渡していた。会話はさすがに離れているので聞こえないが、走ってきた彼女は、森野の顔をみて驚愕の表情をしていた。そしてハンカチでそれを拭こうとする、やっとな赤い汁の存在に気づいた奴は笑っていた。……笑いどころじゃねえだろ、どう考えても。

「なんだよ瀬川、その顔は」

「どの顔だ」

「森野とられてすねてるのか？」

「何バカな事言ってるんだよ」

すねるだど、この俺が。どうしてすねなきゃなんねえんだよ。

「不服そうな顔してるな。口がへの字に曲がってるぞ」

「うるせえ影薄」

「狩燐にはちゃんと答えるのに俺には冷たく返すのか！」

「ちゃんと返してるだろ、うるせえって」

「もっとこう、柔らかく返せないのか？」

「うるさいです影薄君。黙って消えてください」

「言い方だけ柔らかくしても意味ねえから！」

チッ、めんどくせえ奴だな。

「じゃあ、うるさいので黙っててくれますか影薄君でいい訳？」

「よくねえよ！ 影薄を小橋に直すつもりはないのか！？」

「だってお前影薄だし。なあ、狩燐」

「ああ、こいつは影薄だな」

「揃いも揃ってSどもめ！ いつか絶対仕返ししてやるんだからな！」

「やれるもんならやってしろ、影薄太郎」

「できるもんならやってしろ、影薄右衛門」

「お前らなんか……お前らなんか……」

拳を握ってぶるぶると震わせる小橋は、突然走り出した。

「大っ嫌いだああああああ……!!」

うわーんと典型的な弱虫方式の泣き方をして、奴の背中はどうぞん小さくなっていった。大嫌いなら明日声かけるなよ。そうすれば俺は静かに家に帰る事ができる。

「やつも足速いなあ。今から追いかけて追いつくかな？」

ワクワク、キラキラ。そんな目で狩燐は小橋が去っていった方角を見ている。随分頼りない背中では遠いが、狩燐なら追いついてまた小橋をいじめ始めるだろう。

「さすがに無理じゃね」

「そうかなあ」

「あそこ信号あるし。赤になったら絶対追いつけねえって」

「そっかあ。じゃあまたいじめるのは明日にしよう」

いじめる気だったのか。

「俺らも帰るか」

「言われなくても帰るよ」

「待たなくていいのか？」

「誰をだよ」

「赤い汁垂れ流して喜んでた変態的女子」

「誰が待つか、あんな奴」

まだクラスメイトと話している奴の背中が見える。それを見ているとなんだか胸がすっきりしないというか、イライラするとか。よく分からない気分になる。だからさっさとかって休みたい。そうすればきつと、この変な気持ちも治まるはずなんだ。変な気持ちなんてなかった事になるんだ。

「狩燐、帰ろうぜ」

「ん、ああ」

107、空振る心、生徒知らず!?

「連絡事項は特にねえ！ さあ野郎共、校庭に行きやがれ！」

なんて先生が言うセリフじゃねえだろ。連絡事項あるだろ。明日は開校記念日で休みだろうが。ちゃんと口で言えよ、黒板に書けば何でも伝わると思うなよ。てかさ、漢字間違ってるから。開港記念日じゃねえよ、開校だよ開『校』。

「今日は何の練習だっけ？」

「えっとお、大縄？」

ガヤガヤし始めた教室の中で、そんな会話が聞こえてしまった。今日は大縄なのか……。まあ、何にせよやる気はでねえわ。

「瀬川ー、行くぞー」

「……はあ」

「何でため息!？」

小橋に呼ばれて行ったみたい流れは全力で拒絶してえんだよ。分かれよ。お前の隣になんか居たくねえんだよ。

「おいこら、全部聞こえてるぞ」

なに!？ お前、いつの間に読心術なんか身に付けやがった!

「いや全部言ってるからな!？」

んだよ、つまんねえな。てかさ、最近この展開多くね？

「知らねえよ。ともかく行くぞ」

分かってるって。行けばいいんだろ行けば。あー面倒くせえ。もうやる気ねえわ。

「いい加減さ、回想で喋るみたいなのやめる気はないのか？」
それはあれだ、気分で決める。だから、

「影薄には関係ない」

「そこだけ口にするんじゃないよ!」

「いちいちうるさい奴だな、小姑か」

「お前のやる気がなさ過ぎるから、俺が仕方なくうるさく言って

るだけだよ」

「じゃあやる気出したら話しかけてこねえの？ 友達としてそれってどうよ」

冷やかな目を小橋に向けつつ、ハチマキを手にとって席を立つ。もう教室に残っているのは俺らくらいしかいなかった。あまり行動が遅いと、熱血的空回りの担任がうるさいからだ。

「だいたい瀬川はやる気を出そうがそうじゃなかろうが、うるさいと思ってるだろ」

「まあな。事実だからな」

「それこそ友達としてどうなんだよ……」

「まー、いいんじゃないね」

「良くない。俺の精神衛生的に」

「たまには頑張るかなあ。しかしなあ、やる気なんて出ねえもんは出ねえからなあ」

「俺の話は無視か」

もちろん無視に決まってるだろ。聞きたくない事は聞かない主義なんだ。やりたくない事もやらない主義なんだよ。なんだかんだで長い付き合いなんだから、そろそろ察してもいいだろ？

「なあ、影薄君」

「影薄じゃねえよ！ 小橋だよ、こ・ば・し！」

「るせーな。耳元で叫ぶな」

そんなこんなで、下駄箱に到着。せかせかと上履きを運動靴へと履き替える、働き蜂のような生徒を尻目に、俺はひとつひとつの動作をマイペースで行う。まず、自分の靴がある下駄箱の前まで来る。ロッカーのような下駄箱ではないそれには、薄汚れた上履きがそれぞれの定位置に納まっている。男女で別けられたそれは、青が男、赤が女。すでに俺のクラスメイト達は外に出ているようで、俺と小橋の靴だけがそこに入っていた。

「うげ、また一番最後じゃん」

「お前の小言がうるさいからだ」

「小言を言わせてるのはどこの誰だよ」

「そりゃ床ヶ野誰香さんだろ」
どこかのだれか

「それこそ誰だよ！」

「床ヶ野誰香さんは床ヶ野誰香さんだろ」

「知らねえよそんなやつ！」

「当たり前だろ、俺達と一緒に架空の人物だからな。てか逆に知ってたら紹介してくれ」

「知らねーよ、そんなやつ！ しかもさりげなくシビアな返答してくれてんじゃねえよ！」

ほんっと、いちいちうるさい奴だな。叫ばなくても聞こえてるっつーの。

小橋は腕を組んで、イライラと右の人差し指で左の二の腕を叩きながら、俺がのたのたと靴を履き替えるのを律儀にも待っている。それを気にせずゆっくりと靴紐を結びなおしていると、階段をものすごいスピードで下りてくる足音がしてきた。同時に、ピーとやや乾いた笛の音が校庭に響く。

「さっさとしろよ瀬川。また俺まで怒られるだろ」

「先に行ってればいいだろうが」

「俺が見張ってないとお前は」

「うばぎゃ！」

サボるからな。小橋がそう言うが早いか、重なるように奇声が廊下を響いていく。聞き覚えのある声に、思わず振り返った。

「森野だ」
ストーリー

「あら、ダーリン。奇遇ね」

鼻血を垂れ流し、不格好に廊下に倒れているバカと目が合った。何をどうすればそんなに綺麗に階段から落ちれるものか、少し聞いてみたい気もするな。

再び笛の音が響く。それから少し遅れて、乾いた土を踏む多くの足音が聞こえた。

「ふふあ！」

ガバツと立ち上がり、走り出す。俺と小橋のいる下駄箱の裏に回ると、2秒くらいで運動靴に履き替えて校庭へ消えていった。

「今のはなんだったんだ？」

「さ、さあな」

小首をかしげる小橋は苦笑いしていた。まー、正直どうでもいい。

「俺らも行くぞ」

「分かってるっつーの、うるせえなあ」

しぶしぶ立ち上がって、小橋に引っぱられるがままに昇降口を出た。パラパラと同級生達がクラスごとに別れて、整列を始めている。森野もその黒い頭の渦の中にいた。

「遅いぞー」

おそらく神郷だと思われる男子が手を振って俺らを呼ぶ。小橋はそのまま俺を引っ張っていく。これ、楽でいいかも。

「今日はギリギリセーフだな」

「いつも瀬川のせいでギリギリセーフだよ」

先に行きやすいだろ、先に。

「今日って合同練習だったか？」

「違うけど、笛がなると集まりたくなるだろ？」
「こういう理屈だ。」

「まあ、大縄は多く飛べりゃ勝ちみたいだし、簡単でいいよな」

「確かにそうだな。瀬川もこれくらいは本気出せよ」

「俺はいつでも半分くらい本気だぞ」

「ならもたもたしてないで、早く行動しろや」

「てめえに命令されたくねえんだよ」

「ねね！ 縄って誰が回すの？」

ひょっこり顔を出す学級委員長♀。

「……ねえ、その表記酷くない？」

なんでこう読心術に長けてるキャラが多いんだよ。

「口に出してるからな」

「口に出してるもんね」

「口に出す方が悪い」

とりあえず、小橋は黙ろうか。

「何で俺だけ!？」

「で、集まったはいいけど、どーすんの？」

「とりあえず、回す人決めないといけないね」

「そーだなあ。ジャンケンとかは？」

「適当に決めすぎるのも良くないと思うよ」

「回すのが何気に重要だったりするからな」

「無視かこら！」

うるせえな。何度も言ってるじゃねえか、耳元で叫ばなくても聞こえるって。

周りを見回せば、わらわらと集まったはいいものの、特に号令をする者もなしに友達同士のグループで徐々に集まっていき、ザワザワとし始めた。さすがにクラスの輪を外れて会話する者は少ないが。

「兎にも角にも、まずは行動だよね」

ぐっと右手を握り締め、学級委員♀はその目を輝かせた。

「行動しようにも縄がねえだろ」

「あ……」

考えてなかった。そんな顔をするなよ。

「せんせーが持ってきてくれるはずだな」

「そのせんせーがいねえな」

「ああ、いないね」

ニコニコ顔で言う事じゃないと思うぞ、学級委員♀。

「4組はこっちに集まってー！」

よく通る声が目を集める。緑のハチマキを頭に巻いた数人が動き出す。それにつられてか、他の緑達もぞろぞろと歩き出す。まさにそれが合図だったかのように青が動き、しばらくしてから黄色も他のクラスとぶつからない程度の距離を保って大縄の練習を始めた。相変わらず会話を続けているのは赤だけになった。

「他のクラスは縄があるのに、なんでうちにはないんだ？」

「燃えすぎてる担任が悪い」

やる気は十分あるのだろうが、それが空回りしている感が否めない。空振り3審どころじゃない。球が来るより先にバッドを振り回しているのだから、当たるわけもないのだ。

「ねえ、瀬川君」

「あ？」

「さっきから小橋君がやけに落ち込んで、背中に黒い物を背負ってるんだけど……。どうすればいいかな？」

「あー」

忘れてたな、そういや。

隣にいたはずの小橋、もとい影薄は、俺達に背を向けて座り込み、地面に∞を字をひたすらに書き続けていた。何か呪詛じみた言葉が聞こえてくる気はするが、まあそれは今回のところはスルーという事にしておこう。

「おい、かげ……小橋。縄さえあれば練習できんだけど」

「それがどうした俺には関係だろ大体生きている意味すら俺にはないんだからお前ら勝手に仲良くやってれば良いじゃないか」

なんだよコイツ、超めんどくせえ。

「どうせ俺が動いたって何か言ったって誰も耳をかさねえんだから何もしない方が俺自身傷つかないだろだったらそれで良いよもう知らねえよどうにでもなれよ」

「何勝手にネガティブになってんだよ」

パシッと小気味いい音を立てて頭をはたくと、怨めしげにかけ……小橋は俺を見上げた。

「お前が縄を空振り先生からとってきたら、そりゃもうとっても助かるんだがなあ」

「だからなんだってんだ」

「お前が動いた結果が俺らに繋がる」

砕け散ったガラス細工のハートは修復作業が終了したらしい。動かし続けていた指を止めて、何かを決意したかのように立ち上がる

と、かげう……小橋は俺の目の前に立った。

「俺、行ってくるよ！」

「おう、行ってくる来い。待ってるぞ」

「おうよ、任せとけ！」

元気なバカは昇降口へと走っていた。奴の頭は何でできてんだろ。

「よし、コレで練習はできるな」

「時々瀬川は残酷だよな」

「気のせいだ」

「で、でも、明らかにあれはただのパシリじゃ……」

言うな学級委員♀。あれはパシリではなく、小橋もとい影薄を助けるための言葉だったのだぞ。

「いーち、にー、さーん、しー、ごー」

それぞれ各色から、それぞれ違った声音が響いて空へ吸い込まれていく。自分を英雄のように思っている男は、そろそろ職員室に着いた頃だろうか。

見上げた空に、楽しげな声に、誰かを探す。

柄にもない事を考えた自分を嘲笑^{わら}って、見事にパシリとして使われた友人の帰りを待った。体を動かしたい。なぜだか無性に心が騒いでいた。

107、空振る心、生徒知らず!? (後書き)

とりあえず土下座。もう即行で土下座。頭が地面にめり込むまで土下座。

また約1ヶ月放置してしまったよ。

いろいろ忙しかった。まあ確かにそうだろうよ、受験生だからな。だけどさ、下弦鴉の前身よ。

やる事はやろう? な?

お前さ、新作の話進めすぎなんだよ。もうなんだ、10話ぐらい溜まってんだろ。そのせいでコレが下の方にいつちまってよ、執筆中小説一覧に表示されなくなっちまってよ。バカだろお前、バカなんだろ。

新しく書かなくてもあるんだよ、途中のがあんだよ。忘れてんじやねえよ。

……もうため息もでねえわ。呆れてものも言えねえ。

自分、頑張ろうか、もう少しで良いから。

そんなこんなで、だいぶ更新が遅くなってしまって大変申し訳ございませんでした。

ネタ的には潤っておりました。これまで類を見ないほどに。渴きなど知らず。ただ、進むべき道のわき道へそれてしまった。それが間違いでした。

もう何も言えません。明日がクリスマスだろうが今年が残りわずかだろうが、何も言えません。

これから不定期な更新になるでしょうが、新たな年も今までどおりにのんびりと更新を待っていただけるととても嬉しい限りでございます。

それでは皆様、良いお年を！

108、高ぶるのは体育教師だけじゃない!?

今日は朝から少し肌寒く、霧雨が優しく地面んだ濡らしていた。午後からその雨は強くなり、雷までなり始めやがった。そのため、今日の放課後するはずだった全体練習は体育館で行われる事になってしまった。別に今日じゃなくてもいいだろうに。全校生徒が集まると、体育の授業では広く感じるココも、狭くなったようだった。

「はーい、じゃー静かにしてねえ」

やけに間延びする声の主は、マイクを両手で持ってステージ中央に立っている。

「おら、静かにしろー!」

先ほどの声とは打って変わって、野太いバスボイスが静寂を促す。ざわめいていた空間が、少しずつ静けさを取り戻していった。ステージから見ても、左に1年生の1から4組は終始静かにざわめきがおさまるのを待っていたが。

「こんな狭いトコで何させる気なんだろうな」

「行進くらいだと思っけどな」

小橋に囁くと、そう返してきた。

行進なんて練習しなくてもいいだろ。そう言おうとしたら、あの間延びする声に先を越された。悔しいが、前を向いて言葉を飲み込んだ。

「これからねえ、各学年ごとに行進の練習をしてもらいまあす」
ほら、やっぱりな。そう小橋が得意げに言うものだから、後ろを振り返らずに蹴飛ばした。

「何すんだよっ」

すねあたりに当たったのか、なかなかいい蹴りごたえがあった。ざまあみやがれ。

「それじゃ、3年。お前ら後輩に手本を見せてしろ!」

太い声が指示を飛ばす。動く事を許された俺達生徒は、またざわ

めきを取り戻した。それぞれの担任が指示を飛ばし、2年はステージ向かいの倉庫などがある壁に、1年はそのままギュッと体育館右側に並ばされた。

「いいか、良く見てろよ！ 特に1年は先輩の無駄のない動きを見て、お前ら自身もそうやって動けるようにするんだぞ！」

「あの先生さ、無駄にハードル上げるよな」

「それはあれだろ」

横目に小橋の不服そうな顔見て続けた。

「体育の先生の性ってもんじゃね？」

「性ねえ……」

考えるように少し間をあけて、小橋は溜め息を吐いた。

「まあ、そうかもなあ」

ああ、そうだよ。大体の体育の先生は、体の8割が情熱と変な成分でできてるんだよ。

「てか、さっきの痛かったんだけど」

「あ？」

「あ？ じゃねえよ！」

「じゃあ『い』か」

「あいうえお順を聞ってる訳じゃねえ！」

「じゃあなんだよ。なんの『あ』だよ。しりとりか？ それともいろは歌か？」

「もういい……」

はん、影薄の分際で俺様に口で勝てると思うなよ。

「よーし、さすが上級生だ！ これくらい出来て当然だな！ 俺はお前ならできると信じていたぞ！」

まあ、そんなこんなでお手本とやらは終わっていたらしく。

「……見逃した」

「まあ、どうせまた説明すんだろうしいいだろ」

「よーし、3年は元に位置に戻れ！ 今度は全体でやるぞ！」
壮大な小橋のため息をかき消すかのように、ステージからまたウ

ザったい声が次から次へと指示を飛ばしていく。

「とりあえず、流れに身を任せてれば何とかなるだろ」

「それもそうだけどな」

そう思っただけならぐちぐち言っただけじゃねえっての。

「そーいやさ、知ってるか？」

「何をだ？ お前の本名か？」

「そりゃ知ってるだろうが！」

「え！？」

「え！？ じゃねえよ！ こっちがえって言いたいわ！」

「言えばいいだろ」

「……お前ってホント時々ムカつくよな」

「時々か。しょっちゅうじゃなくて安心したよ」

また元の位置に戻った頃には、また別の行動を命令され、忙しく動く。人というものは常に口を閉じている事ができないのか、動く度に声をする。またかよ、とか。雨止まないね、とか。

「今日の給食、デザートにヨーグルトだよ！ これで今日も生きていけるよ、やったね！」

なんて、聞き覚えのあるアホな声がアホらしく馬鹿な事を言っている声もする。別に気になった訳じゃない。断じて気にしてなどいないが、さりげなく視線をそちらにやると、アホな顔したアホが行く先を塞いでいた。

「おい、アホ」

「影薄じゃ……アホじゃねえ！」

「お前、いつも俺が同じパターンで会話を始めると言うから、そうなるんだぞ」

「いつも影薄ばっかじゃねえか」

「他にもいろいろ言っただろ。小橋とか泰助とか」

「それ本名だから！ あだ名じゃねえから！」

「なん……だと……！」

「もういいよその反応！ 飽きたよ、疲れたよ！」

そうしているうちに、声は雑音に紛れて消えた。探すつもりは元からないが、肺に溜まった空気を思い切り吐き出したい気分だ。

「おや、ため息とは珍しいですな、お姫様」

「古いネタほじくり返してんじゃねえよ。てか、さっき言いかけたのはなんだ？」

狭い体育館を、その倍近くある校庭に見立てて、体育大会当日の応援席の場へと俺達は誘導された。男女に分かれて背の順で4列縦隊。俺はその2列目の一番右端。隣には影薄だ。てか、行進とやらはまだか。

「ん？ ああ、超絶毒舌ストーカーマニアが引越すらしいぜ」
誰だそれは。

そんな思いとは裏腹に、心臓が跳ね上がった。

「アイツだよ、アイツ」

小橋がアゴでしゃくった先に、さっきアホな事を言っていた声の主が体育座りをしていた。周りの友達と楽しそうに会話している。

「アイツ、最近お前避けてただろ？ 理由はそれなんじゃねえの」
たかだかそれだけの理由で、この俺様を避けていただと？ そんなの許せる訳もねえな。

「いつだ？」

「何がだ」

「引越し」

「さあな。三大行事が終わるのが先か、引越すのが先かってトコロか」

んだよ、そんな曖昧な情報なら仕入れてくるな。間の抜けた音楽が調子外れに体育館中に響き渡る。あのウザったい声が威勢よく号令をかける。

「まあ、お前にとってはストーカーがいなくなるんだし、いいんじゃないね？」

影薄の声も叫ぶ教師の声も、間抜けた音楽さえ遠く聞こえた。

「おい、どうした。反応できないほど嬉しいってか？」

「ああ、そうだな。今日の給食のデザートにヨーグルトが出るくらい嬉しいよ」

「は？ お前、ヨーグルト好きだったっけ」

「大嫌いだよ」

「ますます意味がわかんねえよ」

もう今は何もかもどうでもいい。この高鳴る心臓を抑えつけるので精一杯だよ、全く。

108、高ぶるのは体育教師だけじゃない！？（後書き）

ホントすみません、お久しぶりです。生き残っていた下弦鴉です。
土下座で……許しませんねその目は！

ええ分かっていましたとも。ええ確信犯ですごめんなさい許してくださいマジ申し訳ございませんでした。

なんかもう、毎回謝ってばかりなきがします。たまには強気に出
てみようか。出れないだろうけど。

というか、更新すればいいって話ですよ。分かってますとも。

と、言う事で（どういう事だよ）

この作品、『DSな俺と、DMなアイツ』は月1更新とさせていた
できます。

勝手に申し訳ございませんが、今の更新状態と執筆の進行状態から
見てその方が自分的にも読者様にも良いかなと思った結果です。
月1で何曜日に更新するかはまだ未定ですが、これから考えて行こ
うと思います。

それでは、久々の更新でしたが、これにて失礼しようと思います。
またの更新をしばしお待ちくださいませー＞＜

109、お熱い夫婦の間の冷たい子!?

あー、憂鬱だ。何もかもが憂鬱だ。窓を打つ雨音も、淡々と出来事を伝えるニュースキャスターの声も、包丁が何かを刻む音も、その全てが憂鬱だ。

「なあ慎吾、そろそろお父さんの顔も見えてくれないか」

ああ、何より俺の視界に入ってこようとする、このバカが面倒で仕方がないな。

「なあなあ慎吾、ダディーかパピーって呼んでくれないか」

「ダンディーなうるせーパピー黙ってくれませんか」

「何かが違うよ慎吾。父さんはただ慎吾が好きなんだ」

意味わからねえよ。ていうかベタベタするなよ気持ち悪い。ただえさえジメジメ蒸し暑いのに、こんなおっさんに纏わりつかれたら余計に気持ちわりいんだよ。

「なあなあなあ慎吾、パパにも体育大会の日程教えてくれないか？」

結局お前はなんて呼んで欲しいんだよ。ダディーかパピーかパパかはつきりしろよ。どれも呼ばねえけど。

「やだ」

「ひどい！ 父は悲しいぞ！」
一人称ぐらい定めろや。

「なあなあなあなあ慎吾お」

「あゝうっさい！ 少しは黙れ、クソ親父！」

俺の座っている椅子の後ろから、抱え込むように寄りかかってきたバカ野郎に右ストレートをいれようとしたら、うまい事よけられた。そしてそのまま腕をつかまれた。

「放せ変態」

「変態じゃない、紳士だ」

意味わからねえっての。

「じゃあ放せバカ力」

「バカじゃない、愛だ」

だーから、意味わからねえっての！

「親父も応援に行くから、頼むから教えてくれ」

「腕が痛い放せ」

「放したら逃げそうだから断っておこうか」

クソ親父め、無駄に勘だけは鋭くてムカつく。

「放ねえなら教えねえよ」

「……慎吾」

「な、なんだよ」

真面目な顔して近付いてくるな。怖いんだよお前の顔。分かっているのかこの野郎。てか腕痛えよ。

「パパはな、ただお前を愛しているだけなんだ。純粹な愛なんだよ。純愛なんだ。だけどママも愛してるぞ。それでも慎吾もLOVEだ」

だからどうした。というか、軽く惚気るな。てかなんで最後だけ英語にした。発音良すぎるだろ。

「だから、だからな、パピーは体育大会に行きたいんだ！」

「来るな」

「そんな冷たい事言わないでくれよう」

大の大人がこれくらいのも事で泣くんじゃねえよ。てかキモいよ。つーかそろそろ放せや。

「慎ちゃん俊さん、ご飯できましたよー」

キッチンから女神が降臨なされた！ これで俺は解放される！

「俊さん、また慎ちゃんにそうやってベタベタしてると嫌われちゃいますよ」

「だけどなあ麻理。こうしてないと慎吾が逃げていくんだ……」

「大丈夫ですよ。反抗期だけなんですよ」

「そうなのか！ そうなのか、慎吾！」

「るせーな、耳元で叫ぶな」

ふふふと母さんは笑うと、再びキッチンに戻り、料理を運んでくる。肉じゃがに焼き魚、小鉢にお漬物もある。鬱陶しいバカ親父を振り払い、母さんを手伝うために席を立つ。

「ついて来るな」

「ダディーもこっちに用事があるだけだぞ」

じゃあ腰に手を回す必要はあるのか。どっからどう考えてもただの変態だろ。

「俊さん、あんまり慎ちゃんばかりかまってる、私拗ねちゃいますよ？」

「大丈夫だよ麻理。私はいつでも麻理だけを愛している！」

じゃあその手をどかさうか。俺を解放しようか。ていうか、子供の前で思い切り惚氣るな。

母さんが茶碗を手にとり、それぞれの茶碗に適量のご飯をよそっている間、俺は親父を足蹴りしながら味噌汁をよそう。手伝う気配を見せない背後のバカは、もう空気だと思って無視しよう。そうか、無視すればいいのか。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

「あーんしてやろうか、慎吾」

早く席につけ空気。いつまで俺の背中にい続けるんだ。

「俊さんも召し上がってくださいな。冷めちゃいますよ」

「……仕方ない、分かったよ」

うむ、それでいいんだよ。

「ああ、ビール飲みますか？」

「いや、いいよ」

うお、いきなり普通の夫婦の会話か。さっきまでのバカらしい会話はなんだったんだ。

それからしばらくはテレビを見ながら静かな食事が続いて、時々母さんとバカという名の空気が短い会話をするくらいで、何事もないうつものように時間が流れた。

『そーいやさ、知ってるか?』

影薄の言葉が、全ての音を断ち切る。頭の中で響くこの声は、いつも同じ言葉を繰り返す。明日絶対影薄を意味なく殴ってやる。

『超絶毒舌ストーカーマニアが引越すらしいぜ』

それは嬉しいこった。バカが1人減るだけで俺の気持ちが軽くなる事には変わりないからな。おまけにストーカーも消えるんだし、こんな吉兆はない。

『アイツ、最近お前避けてただろ? 理由はそれなんじゃねえのだからなんだって言うんだ。アイツが俺を避けたいならそれでいいじゃないか。俺はアイツに避けられて悲しくなんかねえし。逆に避けてもらえて清々する。鬱陶しいやつは嫌いなんだよ。』

「慎ちゃん?」

それなのになんだよ。この事考えるとボーツとしちまうし、目の前がぐるぐる回ってるみたいだ。

「ねえ、慎ちゃん。大丈夫?」

「え、何?」

「ボーツとしてるから、どうしたのかなって」

「ああごめん。……ちよつと気になる事が」

「恋か慎吾! どんな子だ!」

「誰がそんな事言ったバカ親父」

「バカじゃない、純粹なだけだ!」

もういい、その台詞は聞き飽きたよ。

「どうしたの? 学校で何かあった?」

「いじめか! どいつだ!」

「まだ何も言ってるねえだろ。大丈夫だよ、たいした事じゃないし」
そう、全然たいした事なんかじゃない。砂漠の砂くらい小さななどうでもいい事だ。

「でも、帰ってきてからずっとそうじゃない?」

「そうかな? いつもどーりだよ」

ただいまって言って、自分の部屋に戻って、明日の準備して、リ

ピングでのんびりする。どれもこれも、いつものように流れすぎただけだ。

「具合でも悪いのかしら。熱測ってみる？」

「大丈夫だって、元気だよ。……ごちそうさま」

「待って慎ちゃん、まだこんなに――」

母さん、ごめん。ちよつと食欲がないだけだから、大丈夫。全部美味しかったよ。

ああ、なんでこんな気持ちなんだ。どうして晴れない。どうして雨が降る。どうして傘をささない。なーんにもかわらねえ。どうしようもねえ。俺は何がしたいんだ。

家を飛び出してなんになるんだろうな。親父はいつでも無駄に心配してるからいいけど、母さんには悪い事したかな。でも帰る気もあんまりしねえわなあ。雨ってこんなに冷たいものだったのか。

「……ダーリン？」

誰だよ、アイツみたいに俺を呼ぶのは。今はやめてくれないか？今はアイツの話なんてしたくないんだ。アイツの声も顔も思い出したくねえんだよ。ほつといてくれ。そつとしておいてくれよ。

「ダーリン!？」

もう全て、消えてくれ。

109、お熱い夫婦の間の冷たい子！？（後書き）

滑り込みセーフは、きっとこの事を言うのでしよう。

3月終わる前になんとか投稿成功！ いやー、ホントよかったよかった。

そんなこんなでこんにちは。下弦です。ご機嫌麗しゅう。

月1と決めたはいいものの、曜日まで決めておかないとやっぱりグダグダ先延ばしにしてしまうようです。気付いてよかった、ホント。

そんなわけで、考えた結果。今日は水曜日ですが、次回からは土曜日に更新しようかと思えます。第2か3くらいで。それくらいの方がいいかなあと。

また約束破ったな！ って思った方もいたかもしれませんが、ギリギリセーフなのでご容赦ください。たぶん次から頑張ります（え

それでは、今回もグダグダ長文失礼しました！。

110、解決は意外と簡単に!?

何なんだこの展開は。俺にどうしろって言うんだ？ あれか、このまま窒息死しろってか。

「粗茶ですが……」

「おう」

コトつと俺の前にお茶が置かれる。ピンクのウサギが沢山描かれたそれから、湯気が立ち上っている。俺はそれを手にとって、吹き冷ます様をそいつはずっと目で追っていた。

「なあ」

「な、何？」

「やっぱなんでもないわ」

「え、あ、うん」

小さなお盆を抱えるようにして座るそいつは、身を固めたままうな垂れた。いつものように髪を束ねて、前髪をヘアピンで止めている。体育着のままなのは触れないでおくとして、俺はこの先どうすべきなんだろうか。

あえて明るく会話を振る。もしくは話題を提供する。まあ、うん。無理だと思う。この重い空気を見てみろよ。息をするのすら辛い状況とか何なんだよ。

ここは静かに相手が動くまで待つ。これも無理だから、今こんなに息苦しい状況な訳で、どうしようもないんだよ。てか、動いてくれてたらもっと楽だと思っただが。

無言で立ち上がり、家に帰る。できたらいいな。って願望になっ
てんじゃねえかよ！

「あの、ダーリン？」

「んだよ黙っとけや」

「ご、ごめんなさい」

俺のバカあああああああ！ 何言っただよお前。なんで軽くチ

ヤンスを棒に振るんだよお前。何考えてんだよお前！ 余計に空気が重くなったぞ。ぜってえにアイツもうしゃべらねえだろ。もう底なし沼にはまっただろこれ。抜け出すことなんぞ不可能だろこれっ。二人の間に流れる沈黙。時計の針の音が、心臓の音しか聞こえない。雨はもう止んだらしい。あまりに静か過ぎて居心地が悪いが、俺が動けるわけもなく、相手がまた声を掛けてくれるのを待つしかない。情けない。くそう、プライドなんかくそ食らえ！

「……なあ」

「何でしようか」

あまりに堅い答えに、喉まで厳しい言葉が上がってきた。それを突き落とし、さりげない会話へと運んでいく。

「最近、どうだ？」

「へ？」

なんだそのなんの捻りもない問いは。どうした俺、そんなに焦っているのか。

「体育大会の練習とかだよ」

「ああ、うん。楽しいよ、みんなやる気あるし」

「そか」

うん。と、会話が途絶えた。ああ俺のせいだよ悪かったな！ 終わった事は気にしたら負けだ。次だ、次へいこう。 終

「お前は何の種目に出るんだ？」

「えと、ハードルと二人三脚」

「へー。……大変そうだな」

「ハードルはあんまり得意じゃないけど、じゃんけんで負けちゃって。でも二人三脚のペアの子とはうまく行ってるよ」

「そうか。……ペアは誰だ？」

「野岬さん」

「そうなのか」

うん。とまた終わってしまった。しかしかなり頑張った方じゃないかと、自分で自分を褒める。7行分も会話したんだぜ。良くやつ

たよ。だがな、まだ燃え尽きてはいけないんだ。俺が聞きたい事は聞けてない。アイツも言おうとしてない。

「なあ」

「ダーリン」

「な、んだよ」

「えっ。ダ、ダーリンから言って」

「いいからお前から言えよ」

「う、うん」

何だこのベタベタなラブコメみたいな展開。まだどっちも告白しようなんぞ考えていないのに、このドギマギした空気は何なんだ。

「べ、別にね、あの、ね。ダーリンの事、……避けてるわけじゃないんだよ」

いきなり本題か。唐突にはいるのか。

「何だよ急に」

「だって、気にしてるみたいだったから」

久しぶりに話をする。久しぶりに顔を合わせる。そのはずなのに、森野は全部知ったような口ぶりじゃないか。

「引越しの事聞いたんでしょ？ あれ、嘘だから気にしちゃだめだよ。私のダーリンらしくない！」

「私のダーリンって何だ。いい加減にダーリンって呼ぶのやめろ」

「ダーリンはダーリンだからダーリンでありダーリンなの」

意味分からねえよ。とりあえずあれだな、気にしなくてもいいんだな。

「練習に集中したくて、ダーリンの傍にいけなかったただけなの。」

「ごめんね」

「そ。じゃ、俺帰るわ」

「え!?!」

ご馳走様を言い、湯飲みをテーブルに置いて部屋を出て行った。

最初から展開が急すぎて、俺も頭の中がぐっちゃぐちゃだ。気がついたら森野がいて、消えたと思ったら森野の家にいた。さあ帰ろうと思ったら、お茶持って森野がきて、ご馳走になってあの会話だ。急展開にもほどがあるものだろ。

それでもなぜ心がスッキリしてる。空が晴れてるみたいに気分がいい。だった一言で人というものは随分気持ちが変わるらしい。

「ただい——うわ！」

「慎吾！ 心配したんだぞ！ 死ぬほど心配して死んだんだぞ！」
じゃあこれは何だ。親父の皮被った変態か。

「つか重えよ！」

抱きついてきたバカを突き放し、体制を整える。再び抱きついてこようとしたので、とりあえず急所を蹴り上げておいた。

「ああおかえり、慎ちゃん。夕飯も残してどこか行っちゃうから、心配したのよ？」

「ごめん、ちょっと用事があった」

「一言言ってから出かけてね。俊さんが泣くほど心配するから」
やんわり笑う母さんはいいとして、足にすがりつくこの変態が邪魔すぎて家に上がれない。

「あら、俊さん。どうしたの？」

「な、なんでもないんだよ」

息子に急所を蹴られたのと言ってしまえば楽になると思うぞ。

てか、邪魔だ。

「どいてくれませんかお父様」

「なあ慎吾、何でそんなに棒読みなんだい？」

「気のせいだと思いますよ」

「何でそんなに余所余所しいんだい？」

「気にしたら負けだから早くどきやがれ」

自由な左足を使って、自分の父親を蹴って引き剥がす。靴を脱いでそいつに投げつける。ついて来ようとする前に、ついて来れない

ようにしなくてはならない。

「ああ、慎ちゃん。優しくしてあげて」

ごめんごめんと軽く謝って、俺はお風呂場へ向かった。

「慎吾！ 待ちなさい！」

刺のある言葉に思わず体が硬直する。さすがにやりすぎたか。しつかり謝ってやるかと振り向けば、興奮気味に鼻息を荒くする変態の顔がドアップで映った。

「お風呂か！ じゃあパパと一緒に」

「入って来たら二度と話さねえから」

今度は親父の動きが止まる。息をするのも忘れているようだが、まあどうでもいいや。

「風呂入ったら寝るよ、おやすみ母さん」

「ええ、おやすみなさい」

母さんに肩を抱かれて慰められる親父は、もしも母さんがいなくなったら生きてはいけないんだろうなあとなんともなく思った。

やっと一人になれた。一人は静かだし、妙な気を使わなくてすむので好きだ。ゆったりと湯船につかり、少し冷えた体を温めた。ごしごしと顔を洗い、小さく息を吐いた。

「気にしないでいいんだ」

思いを言葉にしてみる。少し反響した声は、やがて煙と共に消えていった。

「俺らしく、俺らしく」

わが道を貫いていたなら、あんなに心が乱れる事なんてなかったのだろうか。平常心を保って、アイツの事なんか考えずに毎日を過ごせていたのだろうか。てか、何で俺があんな奴の事を考えなければならなかったのが疑問だ。事の発端は影薄のはずだから、アイツにあたるでしょう。ガラスのハートにヒビが入るくらいまで。

そうだよな、よく考えてみれば俺らしくない事ばかりだ。いなくなれば楽になるだろうと思っていた奴が、いざ話しかけてこなくなると余計に疲れる。影薄から聞いたでまかせを信じて、自分を失うとは失態でしかない。俺が俺らしいという事は、森野がいろいろがいまいが変わらない事だ。小橋の嘘なんてどーでもいい事だった。何もかも気にしたら負けだった事で、気にしてしまった時点で俺は負けたのか。そう思うとなんだか悔しいな。

「でもま、これでいいんだよ」

森野は引越さない。ただ体育大会の練習を真剣に取り組んでいただけ。どうって事ないじゃないか、逆にいい事だ。

あーあ、今までのあの不思議な時間はなんだったんだろう。ポーンとしてきた頭で考えると、なんだか笑えてきた。このまま爆笑しては怪しい奴になるだけなので、そんな真似はしない。久しぶりに気分がいい。なんでだろうなあ。

「良い夢見れそうだな」

なんて柄にもない事まで言ってやがる。のぼせる前に出るとしよう。しかし、本当に良い夢が見れそうで、布団の中に入る事が楽しみだった。

110、解決は意外と簡単に!?(後書き)

先月は投稿したつもりになっただけで、投稿していなくて申し訳ないです。

なので、今日のうちにもう一話更新するつもりですので、今しばらくお待ちを。

111、影薄はスルーの方向で!?

「おー、瀬川おはよ」

今日は良い天気だなあ。空が高い。昨日の雨雲はどこにいったんだろうなあ。

「おーい、瀬川？」

しかし、来週の金曜日が体育大会本番だったとは、すっかり忘れてた。でもまあ、動きは大体覚えたとし、あとは各種目だよなあ。やる気でねえなあ。

「せーがわ、おはろー」

「おう、狩燐。おはろー」

「え、俺はスルーなのに!？」

「今日は天気いいなあ」

「そーだなー」

ああ、これだよこれ。この作品に足りないもの。のほほんとした空気。穏やかに流れる日常。それこそ学園もので大切なものだろう。事件は時々起こるけど、それを乗り越えて友情を育んでいく的な感じであ、非日常なものは排除しておくこの安心感だよ。これがあってこそその学園だよ。うんうん。

「おーい、俺の声は聞こえてないのか？」

「あ、ヤッベ。三角定規忘れたかも」

「んー、瀬川は数学何時間目？」

「確か4時間目」

「お、じゃあなかったら貸せるぜ」

「まじか！　じゃあ頼むわ」

「聞こえてないんですかそうですか」

算数は嫌いじゃないが、数学は認めん。何だよ連立方程式とか一次関数とか。どこでどう生活に役立てればいいんだよ。そんなの覚えろくらいなら、ひたすら100マス計算してる方が楽しくていい

や。

「フフ、瀬川ちゃんじゃない？」

「なあ、斎賀。お前は本当に中学生なのか？」

「フフ、失礼ね。列記とした中学一年生よ」

「お前が言うのと全て嘘に聞こえる」

「俺も瀬川にどーかん」

「フフ、それはあなた達がまだ坊やだからよ」

「俺は？ 俺はそれに含まれているのか？ てかなんでみんなしてスルーなんだ！」

ああいう発言するから、年増さに思われるんだ。普通の中学生はそんな発言なんかしねえんだよ。してたら怪しい事この上ねえわ。

「なんか全員集合って感じね」

「なんだ、葛野木か」

「なんだとは何よ、腹黒主人公」

「それが俺のキャラ風だからな」

「おう、異論はない」

「フフ、そうね」

「まー、そうねえ」

「俺は影薄い設定だけど、ここまで無視しなくてもいいんじゃないか！？」

しかし珍しいほど人が今日は集まるな。あれか、小橋がいないおかげか。そのおかげでこんなに出会いが生まれるというのか！

「やあ、お姫様」

「みんなおはよう。揃って登校なんて珍しいわね」

さすが学級委員長。普段はだらけまくって俺に迷惑をかける奴らもちやんと挨拶を返す。

しかしだな、聞き捨てならない台詞がその前にあるんだよ。

「おはよ。まあ、とりあえず神郷、一発殴らせてもらっていいか？」

「朝から痛い思いをする気はないなあ」

「それなら『お嬢様』って呼ぶのやめような」
不服そうに神郷はえーつと言う。というか、周りの奴らまで言うとは何事だ。

「フフ、でも可愛かったじゃない」

「そういう問題じゃねえんだよ」

「いやいや、そういう問題よ瀬川」

「んな事知るか！」

「知っておこうぜ、おじょーさま」

「黙れ狩燐」

「け、喧嘩はよくないよ！」

うん、バカ達と一緒になってた人にそんな事言われても困ります。
てか、説得力の欠片もねえよ。

「瀬川は女顔だもんなあ」

「あれ、そいえば小橋は？」

ふっと思いついたかのように神郷が言う。問われた俺らは、知らないと言った。
「え、俺ずっといるんですけど。てか、俺にもつつこんでくれ瀬川！」

「どうしたのかなあ」

どうしてもよさそうに葛野木が言う。

「フフ、ついに小橋消失？」

他人事だと思って楽しそうだな、おい。

「しょ、消失！？」

学級委員は何でも真に受けないようにしようか。

「影の薄さが飽和して、存在そのものが消えたみたいなの？」

影の薄さが飽和するってどういうことだか、A4の紙にまとめて俺に教えてくれ。

「うっは、それ面白そうだな！」

人の不幸は蜜の味なんだな。

「揃いも揃ってみんなひでえな」

「おお、さすが親友！ 俺のフォローを」

「奴がいてもいなくても、いつもこんな感じだろうが」

「してくれないのな！」

ああ、そうだったねえーなんて言って、みんな頷いた。やっぱりあんたら学級委員は失格だよ。一応クラスメイトなんだからかばってやろうぜ。俺も人の事言えないけどさ。

「なあなあ、そろそろ独り言みたいなのも嫌なんだけど」

一応この中では真面目な方に入る小橋が、学校を遅刻してくるなんて考えがたいし、風邪でも引いたか。いつそのこと事故ってくれると面白い。

「あー、そうそう」

狩燐は何か思い出したようで、左手の平を拳で打った。そんな古いひらめき方するなよ……。

「なんか『宇宙一の折鶴職人になるために旅支度なう』とか言つて、修行の旅に出たらしいぜ」

なんだそりゃ。間抜け以外の何者でもないな。

「そんな事言ってねえんだけど！？」

「フフ、小橋如きが『なう』だなんて生意気ね」

「いや、ツツコムところ違うだろ！」

そうだなあ。確かに小橋がなうを使うなんて生意気だ。アイツは「ナウいギャルとクラブでダンシング」とか言っていればいいんだと思う。古臭くていいんだよ、名前も存在も。

「宇宙一の折鶴職人ってなんだろう？」

「宇宙一綺麗な折鶴作る職人だよ」

「そう聞くとなんかすごそうね」

「良く聞くんだみんな、おかしいから絶対！」

てか、そもそも折鶴職人なんぞいないだろうけどな。

「み、みんなひどいよ！」

「おお、いつもより学級委員が輝いて見える！」

「小橋君だって頑張って特訓してるんだよ！ 笑っちゃいけない

よ！」

「結局そうなるのかよ！」

この学級委員、実はかなりの腹黒だと思っているのは、俺だけなんだろうか。

「まあ、小橋の事だし、気にしないでいいんじゃない？」

「お前が一番ひどいな！」

小橋が小橋である限り、奴は永遠に薄いんだろうなあ。哀れだなあ、はっはっは！

「つかいい加減に俺の存在に気付いてくれよ！」

しかし、そろそろ小橋がうるさくなってきたな。そろそろ反応してやろうか。

「星になれば目立てるぞ、小橋」

「星になんかなりたかねえよ！ 人として目立ちてえよ！ てかやっとかよ！」

「耳障りだったから」

「何がどう耳障り！？」

「フフ、全てね」

俺の台詞、斎賀にとられた……。

「全てとかどうしようもなくね！？」

「ああ、どうしようもねえ」

「直しようがないもんね」

狩燐と葛野木は相変わらず毒舌だ。

「まあ、それが小橋もとい影薄の味って事じゃない？」

神郷、それフォローじゃない。元からフォローなんてする気がないんだろうけどな。

「大丈夫だよ小橋君、いつか直るって！」

学級委員長、さすがにとどめはよくない。神郷より酷いつてか、救いようがないじゃないか。

「揃いも揃って毒舌どもめ！」

「それが普通だからな」

それを言っちゃ終わりだとか言うんじゃねえよ！

「薄情者！」

「何とでも呼べ」

「じゃあおじよ」

「神郷、それ以上言ったら道路に突き出す」

「あはは、じょーだんだよ」

冗談らしく聞こえないから困ったものだ。まあ、周りがこんなんばかりだから、それ以外も冗談にしか聞こえなくなるんだけどな。まあ、これが日常なんだ。これからなんだし、昨日の事も何もかも忘れてしまおう。森野のように、とまではいかないが、せめて真面目に練習ぐらい参加するかな。

112、体育大会、開始!?(前書き)

先週までに更新できなかったので、本日更新。
お待たせしました、やっと体育大会開催です。
無駄に長かった……うん。

では、相変わらずぐーたらやってる彼らが活躍?する、本編へ
どうぞ!。

112、体育大会、開始!?

「いいかあ、テメェら！ 耳の穴かっぽじってよく聞けよ!!」
なんなんだ朝からこのテンション。今何時かご存知ですか、先生。
知らないなら教えるけどさ、まだ7時半なんだよ。普通の人は憂鬱
な通勤・通学タイム中なんだよ。電車の中で寝ていたい時間なんだ
よ。部活だけど頑張ろうとか思っちゃってる時間なのだよ、先生。

「人の一生は燃える事にある！ すなわち、体育大会の存在その
ものが人生なのだ!!」

んなもん知るかよ。人生のまだ半分も生きてねえ俺達が、今燃え
盛ってどうするよ？ 後半の人生考えようぜ。もう燃え尽きて炭だ
よ、真っ白い炭になってるよ。

「体育大会で優勝する事は、某有名会社に入るより誇れる事だ！」
いや、分かりにくいから。てかそこまで優勝誇れねえだろ。ただ
の自慢程度だろ。普通にビリだったクラスの奴に、「俺達、〇〇点
で圧勝だったんだよなあ。で、お前らんとこどうだったっけ？」み
たいに優越感を得るものでしかねえんだよ。

「萌えろ、いや、燃えろ漢ども！ 今萌えずしていつ萌える!!」
せんせー、ところどころイントネーションが違います。

「必ず、必ずこの教室に優勝カップを持ち帰るのだああああ!!」
バンッと黒板を叩いて熱弁するのはいいが、今の一撃で時計が傾
きましたけど。もう一回叩いたら確実に落下してくるぞ。

「なあ、瀬川」

「だが断る」

「聞きもしないで断るのか!？」

小橋の話を聞いて、俺が得した記憶がないからな。

「なんだよ影薄マン」

「影薄マンって役立たなそうなヒーローみたいなあだ名やめてく
れないか？」

「用件を2秒以内に言わなければ」

「今日も無駄に熱い先生だな！」

「おいこら、誰の台詞を遮ったと思ってるんだ薄影門左衛門^{うすかげもんざえもん}」

「2秒以内って言ったの誰だよ!? てか、なんだその江戸時代にすらいなさそうな人物名……」

「気にしたお前の負けだ」

デコピンを喰らわせて黙らせる。お、そろそろ8時か。

「全ての種目で勝てとは言わない。ビリだって構わない。だが、地道に得点、友情を積み重ねて目指すのは、優勝だ！」

本人はいい事言ったみたいによ顔してるけど、俺は微妙だと思
うぞ。てか友情好きだな。

ペンポコパーポー

何この音! なんだよこのしまりのない音!!

『全校生徒の皆さん、おはろーございます。これから、グラウンドへの移動をお願いします。1年1組から順番に、自分の椅子を持って事前に指定された場所へ移動してください』

なんか聞き覚えがあるようなないような声がそう告げると、先生の火が一旦鎮火した。

「よし、じゃあ各自椅子を持ってグラウンドに出ろよ」

「はーい」

つくづく思う、従順な生徒達だと。

晴れ渡る青い空の下、と言えるような空模様でもなく。どんよりと重い雲が圧し掛かってきそうな空の下、とも言えない空模様。暑くもなく寒くもないから構わないけどさあ、こんなに中途半端な感じだと、やる気って言うものがこみ上げてこないよな。

「いえあああつ！ 体育大会だZE！」

どこかのバカは、どこかのバカらしくテンションは上がっているようだ。

「なあ、」

「ヤダ断る」

「いや、まだ何も言っていないんだけど!？」

「なあつつたじゃねえか、なあって」

「その一言にどんだけの意味が含まれてんだよ！」

「小橋を否定するに必要なもの全て」

「酷くね？ 即答って酷くね？」

知るか。どーでもいいわい。どすつと椅子に腰掛けて、しつこい小橋を無視していたら、見知った顔がすぐ傍に。

「おろ、やつふー瀬川。今日も不機嫌そうな顔してんな」

「おう、狩燐。お前は今日も能天気だな」

「ははは、だろ？」

「いや、褒めてねーよ」

今日も冷えーとか言いながら、椅子持って狩燐はどこかへ行った。

「そうそう、瀬川」

と思ったら何だ。

「今日もお手柔らかに頼むよ」

「こちらこそ、お手柔らかに頼む」

今度こそいなくなった。うん、いなくなったな。

「フフ、瀬川ちゃんおはよう」

「……なあ、斎賀。お前はもう高校生って設定でいい気がするんだ」

「フフ、嫌よそんなの。瀬川ちゃんに会えなくなるでしょ？」

俺は会えない方が嬉しい。

「まあ、今日はお互い敵同士。頑張りましょうね」

優雅に手を振って斎賀が去っていく。今度は狩燐みたいな展開にはならないようだ。

「ダーリンダーリンダー……リィイン！」

あーあー何も聞こえないぞー。俺の目には何も映ってない。そう
だ、これは幻聴だ。幻覚だ。惑わされるな、俺。きっとあれだ、こ
の前倒れた名残があるんだ。

「瀬川、あれだけ話したがってたのに無視とか、お前はツンデレ
かよ」

「なあ、小橋泰三君よ」

「泰助な」

「お前はそんなに俺に殴られたいのか？」

「殴られたいのは私です！ だけどごめんね、ダーリン。体育大
会が終わるまで、怪我はできないの！」

うるさい幻覚。黙れ幻覚。

「殴られたくねーよ」

「じゃあそういう事を言うな、汚橋改造君」

「小橋な。泰助な」

知るかつーの。

「ま、そろそろ始まるぞ」

「またねダーリン、愛してる！」

「なあ小橋、俺にはお前の声と変な声が聞こえるんだ。幻聴か？」

「……俺の声まで幻聴扱いなのか？」

え、違うのか。小橋ってしゃべらないだろ、影薄いし。

「ほら、立てえー。開会式始まるぞ」

やる気のない声に急かされて、俺らは席を立つ。練習の時と同じ
ように、ゆるーい入場音楽が流れ出した。体育委員長の号令が、拡
声機を通して響いた。

『選手、入場』

俺の周りに変人が多いだけで、この学校全体的に変人が多いわけ
じゃない。いたって真面目なやつもいるし、がり勉だってそりゃあ
いるさ。

行進だって、やる気のある奴はきびきび動いてるけど、俺と同類

の奴らはだらだら動いているし。まあ、俺は内側にいるから目立たないけどな。

えーと、行進の次は何だっけ。校長の挨拶か。来賓の紹介とか、挨拶とかマジでどうでもいいから席に速く戻して欲しいわ。それが終わったら選手宣誓。国歌斉唱。……ん、校歌が先だったっけ？ま、どっちでもいいや。後はハチマキの色に合わせて歌合戦が……あ、そういやハチマキ巻くの忘れてた。

「校長先生から挨拶。堀塚校長先生、お願いします」

へー、校長って堀塚って言うんだ。知らなかった。つか、いつも真面目に聞いてなかったから知らなくて当然か。なんて、ポケットにしまっておいたハチマキを締めながら思う。

で、まあ、案外さらっと挨拶とその他諸々が終わったわけで。

「準備体操ほど俺が嫌いなものは森野ぐらいしか思い浮かばん」

「さっくり小言いうな」

アキレス腱をのびしながら、人の話もちゃんと聞く小橋はきつと地獄耳を持ってる。

「お前、Gはいいのかよ、Gは」

「あ、それもいいやだ。準備運動と森野とGと変態親父と小橋が嫌いだ」

「俺も含むの!？」

音楽と掛け声が綺麗に途切れたところで、小橋の声だけが響いた。うん、楽しいわ。

「ちょ、おま、はめたな!」

しらねえよ。自業自得だろ？

「冷ややかな目で見られるのはお前だけで十分だろ？」

「サイテーだ、お前サイテーだ!」

何を今更言ってるのやら。さあ、あともうちよつとで終わるぞー。早く座りてえ。

「早く座りてえとか思ってるんだらうけど、大縄跳びが全体の流れて2番目なのはご存知ですか」

「知りたくなかった事実を今知らされて、猛烈に小橋を殴りたい気分だ」

「人のせいにするとはさすが瀬川だな」

「褒め言葉として受け取ってやるよ。恩は倍返ししてやるか乱心しろ」

「乱心っておま……」

読んで字の如くってやつじゃね。

そんな感じにぐだぐだやってたら、準備体操も終わったし、後は退場だけ。しかし、休めると思ったのに、比較的に早く出番が来るとかこういう陰謀だよ。

「まあ、本番くらい頑張ってくれよ。あの超絶毒舌女並にさ」

退場中に小橋がアゴで差したのは、葛野木だった。

「確かに毒舌だな」

「げ、違う違う。隣の隣、あっちだよ」

今更ながらに修正されても、俺にはそいつの姿なんて見えない。見たくもない。緑のハチマキが、やけに楽しそうに風の中を泳いでいるのだけは、視界の隅に移った。

さあ、楽しくない体育大会の始まりか……。

113、DSと大縄とアイスと!?(前書き)

ごめんなさいすみません申し訳ございません酌量の余地もございません頭も上がりません土下座しようにももう頭めり込んでこれ以上無理です勘弁してくださいげふっ……。

7月更新しなくってすみませんでした。夏休みだからって浮かれましたすみません。マジですみません。予約更新じゃなくってごめんなさい。

中途半端ではありますが、更新させていただきます。今月、もう1話更新しますので、この話は先月分になるますハイ。

待っていてくださった方、大変申し訳ございませんでした。ヘボ作者で本当にごめんなさい……。

前書き長くなってしまいました。最新話、楽しんでいただけたらと思います。

113、DSと大縄とアイスと!?

晴れ渡る空の下、4色のハチマキを巻いた選手たちが足の速さを競っている。50mという距離は、走り去ってしまえば一瞬だが、隣を走るライバルにだけは負けられない。平静を装って白い線の前に立つ。程よい緊張感が彼らを包む中、先頭の彼らは位置についた。体育委員の腕章をつけた選手が、ピストルを持った腕を耳につけて上へ向ける。耳栓をきちんとしてから、彼はよく通る声を張り上げる。

「位置について! よーい……!」

パンツ! という小気味良い発砲音と共に、クラウチングスタートで彼らは走り出す。赤が早いか、いや、緑が抜いた。

「どーでもいいからすべて終わってしまえばいい」

「お前、どこまでもやる気がないな」

「黙れ小橋。お前に用はない。体育大会と一緒に消えてしまえばいいのに」

「友人に言う事じゃなくね?」

「小橋だからいいんじゃない?」

「いやよくねえよ」

「知らんわそんなもん。小橋なんかが口答えするのが悪い」

「俺には否定する権利も拒否する権利もないのか」

もちろんだと頷けば、なぜか隣に居座る影薄はぶつぶつ文句を言い出すから無視の方向で行こう。そうだよ、こいつは幻覚のはずだ。

「そーいや、瀬川は練習を気持ちいいほどサボってくれたから知らないかもだけど」

「あーあー、俺は何も聞きたくない。聞く気もないぞ」

「いやいや、一応クラス全体のために聞いておくれよ」

どんよりしてる小橋に寄りかかる神郷よ、もう少しでそいつ完璧に潰れると思うぞ。

「で、何だよ」

「あれ、聞いてくれるんだ」

「聞いてくれて言ったのはどこの誰だよ」

「じゃあ、聞きたくないって言ったのはどこの誰だって返すのもいいよね」

「あー、そう返すのもありだな、うん。じゃあやっぱ聞かん」

「えー、せっかく聞く気になったんなら聞こうよ」

ぎゅえっ。小橋が押し潰される声がしたような気がした。屈み込んだ影薄の上に、左ひざを乗せて立つ神郷が口を尖らせる。

「きつと負けるとうるさいのは、うちの担任だと思っただよね」
確かに、50m走に出てる自分のクラスのやつらが3、4位になるたびに悲鳴に近い声上げてるしなあ。てか、なぜそこまで熱くなる。てか、ともかくうるさいから黙っててくれないものか。

「だから、うるさいのを黙らせるために頼むよ、瀬川」

ちやつかり黒い事言った気がするのは俺だけか。

「じゃ、俺にどうしろと？」

「えっと、何だっけ？」

「いや、聞くなよ」

なんかデジャヴなやりとりやめろよ。作者がネタ切れだって読者にもろバレするだろ。

「いやあ、ネタ切れは当にバレバレだと思う」

「口に出してたか」

神郷が頷くと、下敷きになっている小橋がうめき声を上げる。きつとひざがいい感じに痛いところに入ったんだと思う。ざまあみろ。
「まあ、さっくりいうと、掛け声くらいは出してほしいなあって事だよ、姫君」

「その呼び方をやめるなら考えてやろう」

「えー、楽しいのにー」

「俺は不愉快だ」

神郷の膝の隣に、俺の右膝を乗せる。下敷きの下僕が何か言って

るとか気にしない。てか気にするつもりは一切ないので安心しろ。
俺に慈悲の心なぞないわ！

「腹黒い笑み浮かべてるねえ」

「いやいや、お前ほどではねえよ」

「いやいやいやいや、そんな事はないよ。瀬川姫が一番黒い」

「さっくり姫ってつけてんじゃねえよ。俺は男だコノヤロウ」

「女装に目覚めては○な愛とかと友達になるのもいいかもよ？」

「お前の目に俺はどう写ってるのか甚だ疑問だな」

「ん、ひめぎ」

「それ以上言ったらサボって帰る」

うっわぁ卑怯。そう神郷が言うのが早いか、小橋が潰れるのが早いか、はたまた最終ランナーがゴールするのが早かったか。いや、すべて同時だったかもしれない。

「お・ま・え・ら・なあ……！」

「なんだ、いたのか小橋。椅子だと思った」

「んなところに椅子があるわけないだろ！」

「うるさいなあ、椅子は黙ってないといけないんだぞ」

「俺が椅子だったか、俺が椅子だったのか？！」

あーもう、めんどくせえ。無視でいいや、無視で。

さっきまでライバル同士だった選手たちが、仲良く並んで退場していく。その間に、体育委員がテキパキと次の競技の準備をしていた。とは言っても、邪魔な順位のついた旗とゴールテープを持ってテントに戻るだけだな。

「オイ、何も言わなくなったと思ったら無視か！」

うるさいやつは無視するに限るだろう。マジでめんどくせえし。

「人の背中を膝でぐりぐりやっておいてそれはないだろ！？」

知らねえよ。どーでもいいよ、小橋の痛みなんて。

「小学校の組体操でいやというほどわかるだろう、この苦しみ！」

すまん、俺はいつも一番上で。ぐりぐりしかやったことねえん

だわ。……おい、誰だ今痩せチビって言ったやつ。体育館裏に來いやコノヤロウ！

「そうか、瀬川は小学校からチぶふぁー！」

「小橋君、小橋君。この口どうされたいのかなぁ？」

「ずびばぜんでびだ」

あごを掴まれたあふおが、さらにあふおな顔をして謝る。なんだこれ、楽しい。

「あん？ 誰がチビだコラ」

「じびゅんでいっでぢょーずるんじゃじょ」

「ああそうさ、どうせ一番上で立たされてたさ。悪いか、ん？ 悪いか？」

「おでじょんにゃちちよいつてにゃーし」

「そうかそうか。お詫びに帰りにアイスバー奢ってくれるのか」

「にゃーでしよーにやる！？」

「そうだなあ、俺は小豆バーがいいかな」

「かつちえにはにゃし、しゅしゅめんにゃ！」

「何？ 3本まで買ってくれるのか」

「だからしよんにゃこといつて——！」

「はいはい、仲良しお2人さん。入場するから並ばないと」

神郷が間に入ったせいで、小橋のあごを離してしまった。もう一回やってやろうと手を伸ばしたが、小橋が先に逃げやがるし。

「ちえ、楽しかったのに」

「ひー、いてて……。助かった、神郷」

「お礼はカルピスバーでいいよ」

「さわやかな笑顔で言うけど、お前も結局瀬川と同類だよな……」
ニコニコするだけで神郷は何も言わなかった。代わりに俺に、「掛け声はみんなで作るから合うんだよ」と言ってきた。わあったよ、声出せばいいんだろ、声出せば。」

『次は1年生による大縄跳びです』

アナウンスがそう告げると、笛がビー——ッ！ と鳴り響いた。

入場の合図、めんどくさいが帰りに小豆バー奢ってもらえるし、頑張ってやろうじゃねえか。

校庭のグラウンドを大体4分割した位置に、それぞれ移動すると、クラス別に縄を回すやつらがその準備をする。列の前から後ろへ丈夫そうな縄がミミズのように地面に這っている。普通の大縄なら飛んで抜けてを全員で繰り返すんだが、この競技は全員で3分間飛び続ける。その飛んだ回数を競うらしい。俺はよくルール聞いてないからよく分からないが、とりあえず飛んでいればいいんだろ。引っかけたら1からやり直しじゃなく、そこからまた数え始めるらしいから、そんなに辛くないはずだ。

「いつもより早くまわすらしいから、黄色は敵じゃないな」

「小橋の情報なんて信じられないな」

「練習参加してないやつに言われたかねえよ！」

準備体操のときの悲劇を繰り返さないためか、控えめにうるさい。再び笛が鳴った。起立の合図だ。

「さて、頑張ろうか」

「お前の口からそんな言葉って出るもんなんだな」

「影薄、ガリ○リ君ソーダ追加な」

「は、え!？」

『準備はよろしいですか? それでは、始めます』

影薄の焦りを踏み潰して、アナウンスがそう告げると、三度笛が響く。それと同時に、各クラスから威勢のいい声が張り合ってた。響いた。

『せーのっ!!』

「いち、に、さん、しー!」

パシッパシッと縄が地面を打つ音がする。小刻みにジャンプしながら、周囲に合わせて声を上げる。さすがにふざけてられない。

リズムとタイミングを崩さないようにするだけで精一杯だ。

『あぁっと黄組、引っかかってしまっただけでなかなか飛べません。落ち着いて頑張ってください』

冷静な声でそんなこと言われても、周りがこうも調子よく飛び続けているのだから、落ち着くことなんてなかなかできないだろう。

『おっと、ここで緑も躓いてしまいました。あと2分です、頑張ってください』

おいおい、急かしてどうする。てか、まだ1分しか経ってねえのか。

徐々に疲れてきて、必ずどこかの組が止まる場面が増えてきた。これ、結構きついな……。誰だよ、こんな体力使う競技考えたバカは。

「61、62、63……」

『残り30秒です、皆さん、頑張ってください』

ま、まだ30秒残ってんのかよ。ダメだ、集中力切れそ。

「頑張れー、もうちょっと！」

縄を回してるやつも大変だろうに、そんなこと言ってくれやがる。確かにもうちょっと、もうちょっと頑張れ、俺。

回数が90に近づいたころ、笛が鳴った。一時経過では、青88回、赤76回、緑69回、黄52回という結果だった。もう終わりで退場したいところだが、2回目がある。合計得点で多い順から順位がついていくので、黄組にはなかなか厳しい結果だな。しかし、青組すげえな。1回くらいしか止まっていなかったんじゃないか？ ペースも変わってねえし、後半もあのペースで数とられると、俺らが1位になるのはちょっと難しいか。

「ふうー、結構いったね。練習よりいいんじゃない？」

どっかの女子がそう言い出す。

「そうだな。練習は黄色みたいに引っかかってばっかで40すら行かないときもあったし」

男子もそれに便乗してしゃべりだす。

「確かにそうだったかも。今の私たちなら1位も夢じゃないんじゃない？」

「よおし、じゃあ頑張ろうぜ！」

そんな調子よく行くもんかね。そう思いながら一緒になって「おー！」なんて言ってしまった自分がなんだか可笑しかった。

1回目のように始まる前に、少しだけペースを上げて飛ぶ事になった。今までのリズムを崩してしまうので、自信がない人は隣の人と手をつないでみようと言う事になった。影薄がニヤニヤしながらこっちを見てきたから、何か言う前に黙らせて、ハーゲン○ツツのリッチミルクを追加させた。

そして笛が鳴る。2回目が始まった。さっきより心なしか早くなった縄に、20回目くらいで引っかかってしまったが、互いに声を掛け合って再び飛び始める。今度は引っかかることなくいけそうだった。が、やはり20回を超えたあたりで誰かが引っかかってしまった。俺らが止まっている間に、緑や黄色は順調に回数を重ねていくので、焦りが出てきているのかもしれない。アナウンスが何か言っているが、気にしていられない。

「ドンマイドンマイ！ 気にしないで次ガンバろ！」

神郷がパンツと手を打った。縄を回している二人もぜえぜえ言っているが、忘れずに掛け声をかけている。1回目よりも元気になったかもしれない。

調子に乗ってきたのか、どんどん回数を重ねていく。60、70、80。もしかしたら、青より飛んでいるんじゃないか？

『ラスト30秒です』

淡白な声がそう告げる。あと30秒だ、あと30秒しかない。もう引っかからずに飛ぶしかない。さっきよりも大きな声で、掛け声をかけて互いを励ましあった。

今度こそ終了の笛が鳴った。はああと、息が零れ落ちる。みんなくたくたになって座り込んでいる。また1組から結果発表だ。そして、赤91回、青86回、黄82回、緑70回という結果になっ

た。さらに、集計した結果も発表された。

『赤組、167回。青組、174回。黄組、134回。緑、139回。結果は、青組が1位、赤組が2位——』

そう続いている間に、青組から歓声が上がる。疲れはどこへやら、跳ねたり踊ったり。勝利とは本当に不思議なものだ。

「ちえ、もうちょっとで勝ったのに」

「まあいいじゃないか、2位だぜ、2位！」

ハッハッハ、なんてジジ臭い笑い方するなよ。でも、他のやつらもこの結果は嬉しいようで、青組ほど派手ではないが喜んでいうだ。

「瀬川も素直に喜んだらどうなんだよ、このやろう」

「んだよ、絡むな、このっ！」

体育大会はまだまだこれからだったのに、肩に腕を回されて頭をむちゃくちゃにかき乱される。影薄の分際で……！ 小豆バー2本にしてやる！

「よくやったぞー！ おまいらぜーいん愛してる！！」

興奮しすぎてはしゃいでいる担任も、きっとこの輪の中に入りたいているんだろうな。俺の代わりに入れてやりたいが、そういう訳にもいかない。

『それでは、選手の皆さんお疲れ様でした。退場します』

整列を促されて、まだ綺麗に並び終えていない間に、さっさと退場しろとアナウンスが。意外とアナウンスの人鬼畜か？

「これからちょっと間があつてから、二人三脚だぞ、瀬川」

「うへ、最悪。腹痛で棄権とかありか？」

「……俺と組むのがそんなに嫌か」

「嫌だな。大縄での意外な成績の余韻に浸っていたい」

「1位は俺たちだけだなあ、ふっふっふ！」

「ってえな、狩燐」

「すまんすまん、やっぱり勝負事は勝つと気持ちいいもんだよなあ」

肩に腕を回すのは流行か？ だけど勢いがありすぎるとK・Oし
かねないんじゃないか？

「次は赤が勝つから、覚悟しておけよ」

「ふへへ、やっぱそうじゃなくっちゃな。じゃねえとつまんねえ
し」

変な笑いをされても狩燐だと違和感があまりない。それもそれ
でちょっと怖いけどな。

「ま、今の瀬川いつもどーりみたいだし、楽しくなりそうな事には
変わりねえわ」

「いつもどーりも何も、変わった覚えがねえからわからねえな」

「ハハ、まあいいさ。次も勝利搔っ攫ってくから、よろしくな」

「おう、惨敗して泣け」

自分のクラスメイトにも、俺と同じように絡んでいった狩燐の後
姿にそういった。なんだかんだで、俺も体育大会楽しんでるんだな。
「こうなったら、意地でも勝って、小橋にアイス奢らせまくって
やる！」

「は！？ ちょ、今のやり取りとアイス奢るのは関係ねえだろ！
」

知ったこっちゃねえよ。にしても、喉渴いた。早く戻ってアクエ
リ飲みたい。

「頼む、アイス関連で無視はやめてくれ、払いたくない！ 頼む
からやめてくれええ！」

113、DSと大縄とアイスと!?(後書き)

次話は来週か再来週更新予定です。

114、二人三脚は障害だらけ!? (前書き)

影薄が崩壊する場面がありますが、気にしなくてもいいんだと思います。
まふ。

小橋を好きな貴重な方はごめんなさい……。

114、二人三脚は障害だらけ!?

影薄太郎の言ったとおりに、二人しゃんきや……ごほん。二人さん・きや・くの前に、100m走、ハードル、2年生の学年競技の3つがあった。とりあえず、二人三脚のところで笑ったやつ、俺の代わりに小橋と二人三脚してこい。

「ああ、やだやだ。小橋と二人三脚なんて信じられない」

「お前はどんだけ俺のこと嫌ってんだよ……」

「ああああああ、帰りてえ」

「俺が嫌いつてか、体育大会自体嫌いだろ」

「え、いや。お前も嫌いだぞ?」

「なあ、そこ否定されると俺が辛いんだけど?」

「だって小橋だし」

「存在から否定に入るのか?!」

あーあーあー。頼むからそれ以上騒ぐな。ただでさえ片足を手ぬぐいで繋がれて、接近してんだから、普段より大きい声だすとうぜえんだよ、いつも以上に。

「てかお前、ルール理解してるよな?」

「おう。拘束を解くために、どれだけ早く相手を捻り潰せるk」

「それどこの格闘競技だ!？」

「なんだ、違うのか」

「俺ら2人で1つ。つまりチームだぜ? それをおま、捻り潰す

とか……」

ああ、なるほどなるほど。理解したぞ。

「つまりはあれだろ。より多く敵チームを潰したチームg」

「まず潰す事から離れようぜ」

ちえ、そんな冷静に返されるとつまらねえじゃんかよ。

「分かってるって。リレーみたいなもんだろ」

うんうんと頷く馬鹿が、分かり切ったルール説明してるのをがん

無視する。俺たちは2年生の学年競技が結果が出るのをおとなしく待っているいい子なんだぜ。小橋の独り言がただちよっとうるさいだけなんだぜ。

ちなみに、今2年生が行っている競技は、30人31脚みたいなもの。男女別で行われて、一番多く勝ったチームが優勝となる。30mくらいを息を合わせて横一列に走ったタイムで勝敗が決まる。まあ、黄組がやけに早かったから、そこが文句なしの優勝だった。楽しげに退散して行く2年生を、誘導の体育委員が見届けると、俺らに立つように命じる。帰りたい。まじで帰りたい。なかったことにしたい、今を。

「はああああ……」

「んな壮大にため息ついても無駄なんだから、頑張ろうぜ」

「えー、だって小橋だし」

「……なあ、瀬川。俺、お前に何かしたか？」

影薄が何か言ったような気がするときは、だいたい何か言ってるけど言っていないことにした方が楽だから、なかったことにして入場した。

「で、なんでアンカーなんだよ、クソ影薄」

「全部俺のせい！？ てか悪口に悪口プラスしてくれてんじゃねえよー！！」

「はあ？ んなこと知ったことか！」

そう、この薄らハゲ影薄のせいで、俺らがアンカーを任されてしまったんだよ。じゃんけんで順番を決めたそうだが、初っ端から負けるとかマジで信じられねえわ。

「パ○コも追加だからな」

「なんで！？」

「何でも何もお前の責任だろ」

ちなみに、もうリレーは始まっていたりする。今2番目がバトンを受け取って走ってる。

「練習に來なかつたのはどこの誰だよ！」

「勝手にやったじゃんけんで負けたのはどこの誰だよ」

「ああ、もう。俺が悪かつたって言えばいいんだろ!? そうだろ!？」

自暴自棄になるなや。扱いが余計に面倒くさくなる。こんな状態でゴールできる気がしない。こんなじゃなくてもゴールできる気がしねえけどな。

「とりあえず、仕方ないから頑張つてやるよ」

「……アンカーは障害を乗り越えてゴールしなくちゃいけないんだぜ」

いまさらそんなこと言われても、俺にはどうしようもねえんだが。「なんだ、殴ればいいのか？」

「暴力で解決はよくないぞ」

そんな会話をしながら位置につく。何気に俺らトップじゃん。

「じゃあなんだ。言葉攻めをお望みか？」

「……お前に一欠片の優しさはないのか？」

「ねえ」

少しずつ走り出す。そろそろ3番目がくるぞ。

「障害は小橋を犠牲にして乗り越えて見せるから、安心しろよ」

「そんな優しくない優しさいらねえよ！」

掛け声と共にバトンが渡される。俺らは足並みそろえて走るだけ――。

「キャハ☆ そーはさせないんだぞ♪」

「うわあ！」

「ぎゃ、ででで出た!？」

思い切り走り出した俺たちを抱きしめるように受け止めた人物は、特徴的な笑いから察するに、笑先輩に間違いない。

「キャハ☆ 私は瀬川っただけ抱きしめられればそれでよかった

んだけど、それじゃ邪魔にならないんだよね、アハハ！」

「いや、とりあえず邪魔です」

「いや、なんでお前は冷静にツッコめんだよ」

「他のやつらも同じような邪魔されてるし」

「げ、マジだ……」

それぞれ敵対チームが邪魔してる。柔道部っぽい男のゴツイ先輩に抱きしめられてる緑組に比べれば、俺らはまだ幸せなほうだよな。てか、緑が哀れすぎて楽しいな。

「まあ、うん。離してください」

「キャッハハ、無理なこと言うね君い！ 楽しい、合格う〜♪」

どこがどう楽しかった！？ どこがどう笑いのツボにハマった！

？ で、でもまあ、解放されたからよしとしようか。

俺らよりもうまく切り抜けたのか、赤が先にいた。追い越せない距離でもない。他に障害がなければ

「今度は私が抱きしめてあげるわ！ ダーリぐふっ」

何もいなかった。何もいなかった。何もいなかった。何もいなかった。何もいなかった。

「にしても小橋。よく俺が蹴り飛ばすって分かったな」

「いつも傍で見てるからな……」

障害物として選ばれたのであろう、少女Aがいたのだが、俺にとっては障害でもなんでもないんだよ。読みが甘い、宇治金時に練乳と黒蜜をかけるように甘い！

ゴールはもう目の前だ。他のやつらはまだ障害物、いや障害になる人物の処理に手間取ってる。これはもう圧勝決定だな。

「これは楽勝だぎゃ?!」

すまん、小橋。マジですまん。俺も急に脚止めて痛かったからおあいこにしてくれ。

「車は急に止まれねえんだぞ……」

「車じゃねえし。二人三脚だし」

少々奇妙な動きで立ち上がった小橋よ、今のお前の顔が最高に面

白い。綺麗に地面と濃厚なキスをしたらしい。

「いつもより存在感のある顔してるぞ……くふっ」

「顔見て笑われるような存在感なんていやだ！」

いやだって、面白いものは面白いんだぞ。誇りに思え。

「で、何で止まりやがった」

「え、だって無理だろ」

「何がだよ！」

「お前、子犬嫌いだろ」

「犬？ 犬がどこに……ぎゃわはうだがねくちえ！？」

なあ、日本語で頼む。そして声のボリュームの調整も頼むわ。

さて、ここで世界一優しい俺様から説明してやろう。もうちょつと進んだところに、杭に繋がれた子犬が数匹。正直、めちゃくちゃ可愛い。一番の俺らと遊べると思って、短い尻尾を懸命に振ってキャンキャンいつてる。隣で小橋がこの世の終わりみたいなことを言うけど、まあ気にしない。

「じゃ、忠告したから進むぞ？」

「いやいやいやいやいやいやいや！ 忠告したからって進んでもいいってわけじゃないんだぞ」

「あんな可愛い動物に、人間様が恐れをなしてどうする」

「黒き流星のGに怯えるお前は例外なのか？」

「あれは全人類の敵だからな。子犬は人畜無害だ」

「いやいや、だって噛むよあいつら。噛むんだぞ？」

「それは影薄を嫌いなだけだろ」

そういつて、引きずってでも進んでやろうと思ったら、逆に引っ張られて進めなかった。

「んだよ」

「マジ犬だけは無理なんだよ。犬はマジで無理なんだよ」

「てか動物全般苦手だよな」

「分かってるのに進もうとするのか！ 分かってるのに進もうとするのか！！」

あーもー、うつせえなあ。

「2度も言わなくなたって分かるっつーの。決心はついたな？ ついたかじゃあ進むぞ」

「頼む！
待ってくれ！」

足にへばりついて動こうとしない影薄太郎だが、これなら引きずりやすくていい。

「こわくないーい。こわくないぞー。めっちゃかわええぞー」

「棒読みでそんなこと言うなよ！ 逆にこえーよ！！」

うるせえよ。じゃあ全力で駆け抜ける努力をしろよ。何引きずられてるんだよ。なんで引きずられてるだけなんだよ。でもまあ、これなら進めそうだ。赤が第二関門抜けてきそうであつたんだよ。他のやつらも抜けてきそうなんだよ。

「ぎいやあああ！ 犬近い犬近いひいいいいいい！！」

「いだだだだだだ！ やめろ、おま、ちよ、やめろって！！」

関節があらぬ方向に曲がろうとしてゐる！ 本来曲がつてはいけな
い方向に膝が逝こうとしなさい！

「もうヤダマジ無理うわあああああ！」

「おま、人の膝で泣くなよ！　うわ、鼻水つけんな！！」

ああああつ！
我慢ならん！
こうなったら強行突破だ！！！！

「はい、わんこたち。ちよつとうるさいオマケがついてるが、通らせてもらおうぞ」

「じえぎやわあ、ぎよわいよう」

「分かったから黙ってろ」

俺、ゴールに着いたら、全力でこいつを殴ってやるんだ。もし気絶でもしてくれちゃったりしたときは、わんこの群に放り込んでやるんだ。

赤もこのわんこゾーンにやってきて、少々戸惑いながらも着実に進んでる。遊んでくれ遊んでくれと飛びついてくるわんこたちは、可愛いけどこういうときはちよつと鬱陶しいな。あ、でも今の小橋に比べればあしらい易いかもしれない。

影薄太郎が終始ウザかったが、なんだかんだでわんこゾーンを抜けて、一番でゴールすることができた。赤とはホントちよつとの差だったけどな。

「ごめんなあ、しえがわ。おりえ、ほんつといにゆは無理にやんだよう」

さあて、次の競技の前に、この馬鹿をどうしてくれようかな。

114、二人三脚は障害だらけ！？（後書き）

時々、瀬川たちが何色の組なのか本気で分からなくなる。順位とかもぼろっと忘れる。え、ナニコレ病気？

間違っているとろなどございましたら、ご報告お願いします……。。

115、舞うのはアナタ!? (前書き)

放置しまくってごめんなさい……。

久しぶりの更新、どうぞお楽しみいただけたらと思います。

115、舞うのはアナタ!?

俺たちの出番はしばらくないらしい。とりあえずウザかった小橋をさらにいたぶってから、そう聞いた。というか、聞き出してから溜まったストレスを発散させてもらった。

「さて、暇だなあ」

「やっぱ暇人だったな」

聞き覚えのある声に振り返ると、褐色肌の友人が笑っていた。

「やっぱとはなんだやっぱとは」

「いやあ、どうせ暇してるだろうから、ちょっと頼みごとをしな」

狩燐はちよつと真面目な顔でそういうと、俺の肩を叩いて豪快に笑う。

「いやはや、やっぱお嬢様ってのはこうでなくっちゃな!」

どこの変質者だ。てか俺はお嬢様じゃねえし。

「で、お前も結局暇人なんだろう」

「おう、よく分かったな」

「頼みごともないだろ」

うんうんと頷く。もっと予想外の行動をとってくれる人間は俺の傍にいないのか? てかあきれてものも言えない。

「とりま、暇つぶしにきたんだけど、小橋は?」

「俺が懲らしめてきた」

「ちえー、俺も小橋で遊びたかったのになあ」

暇つぶしで友人をいじるつもりだったお前は相当なSだな。

「てか、狩燐も出る競技ないのか?」

「たぶん、瀬川と大体種目一緒だと思うからないと思いたい」

……。そんなアバウトでいいのか? そんなやる気なくていいのか? 人の事言えないけどさ!

「分かってたつもりだけど、想像以上に狩燐も異常だよな」

「何それ、褒め言葉か？」

「そうかもしれねえしそうじゃねえかもな」

「そういう瀬川も変わってるから安心しろよ」

お前に言われたかねえよ。お前に！

「そーいえば、お前のファイア」

「ンセなんかいねえよ！」

「そんなに否定しなくてもいいじゃん。お似合いだぜ」

そんないい笑顔で言われても嬉しかねえよ！ 逆にめっちゃくちゃむかつくよ！

「で、森野がどうした？」

「みとめ」

「認めてねえよ！ 察しただけだよ！！」

「そう照れなさんな」

なんだろう、この気持ち。すごく、すごく胸が熱いです。今なら何だって破壊できる気がするよ。

「ま、ジョーダンだから。で、森野がお前を探してたみたいだぞ？」

「え？」

アイツが俺を探すⅡストーカー行為がまた始まる！？

「そういうことじゃないらしいぜ」

「心を読むな！」

「いや、口で言ってるし」

くっ……、なんだか悔しい。

「なんでまた俺なんかを——」

ハッ、この感じ！ この悪寒は！

「みiiiiiiiiつけたあああああああああつ！」

「やっぱりか！」

「おー、反応早え」

狩猟の暢気な眩きを背中で聞いて、俺は走り出した。

「待って！ 舞ってよ、愛しのダーリン！！」

「誰が舞うか！ てかダーリンじゃねえ！ つか追いかけてくんなー！！」

ハチマキをちゃんと巻いているストーカーが、なんかの紙切れを持って追いかけてくる。俺は人を上手にさけながら逃げる。

「用事があるの！ 愛の告白並に大切な用事なののおおお！！」

「知るかなもん！ てか告白なら答えはノーだ！！」

「そ、そんな！ ダーリンはYES、マイスウィートハニーって言ってくれるって信じてる！」

「信じんな！」

言いながらも逃げる。逃げる。アイツもアイツでうまい事人を避けて追いかけてくるし。くそ、これじゃキリがないな。

「用事は何だよ！」

「え！？ だ、ダーリンがデレた！？ わちよ、どうしょ！ あっ、今の表情を写メ撮らせていただいても」

「やっぱ聞かん！ そして断る！！」

「ああ、やっぱツンツンなダーリンって好き！ だけどデレたダーリンも好きよ！」

「俺の言葉は無視か！ てかキモいからやめてくれ！」

学校全体にこんなストーカーにつけられているなんて知られるのは苦痛だ！ 今日には体育大会だし、保護者の方々とか来賓的な人たちだっているんだぞ！！

「やめないわ！ 私の愛がダーリンを満たすまで！」

「満たされたかねえよ！！ 断固拒絶する！！」

さすがにしゃべりながら全力疾走はきつい。そろそろ疲れてきた……。

「もう、ちょっと疲れてるダーリンの横顔すら愛おいしいわ！」

「キモい！！！！」

急ブレーキをかけ、右ひじに全体重を任せる。おそらく追っかけているであろう、ストーカーがスピードを緩める前に、このひじをその腹に、

「めり込ませるっ！」

「ぐっは！」

狙い通りに入ったそれで、ストーカーは吹っ飛び悶絶している。

「ひ、久しぶり、この感じ……！ 美咲は、美咲は幸せです！」

「うぜえよ！ もういいよ黙っとけよ！」

「でもね、この快感に酔いしれている暇はないの」

DM発言はもう聞き飽きたよ。てか俺だってお前と追いかけるほどの暇じゃねえよ！

「ねえ、ダーリン」

いつになく真剣な顔で森野が言う。

「な、なんだよ」

思わずどもってしまったが、所詮森野は森野だった。

「借り物競争でね、『大切な人』って指令が」

「うん、葛野木に頼んどけ」

「えっ」

「えっじゃねえだろ。親友だろ、アイツ」

「で、でも、でもでも、大切な」

「家族とか来てるだろ、母親とかそのあたりでいいだろ」

「えっ」

「だから、えっじゃねえだろ！」

スパコーンと頭を叩くと、森野はにへらにへらといい笑顔をしやがった。

「ああ、やっぱりダーリンの罵声と愛のムチは心地いいわ」

うん、キモいからね。一般的であろう上級生の皆様が引いてますからね。

「じゃ」

「えっ、ちよつとまつ……ギャッ」

キモいやつに関わるべからず。さっさと立ち去るべし。運よく足もつらせて、立つのにすら手間取ってるし、今のうちに全力で逃げなきゃだろ？

そして、その後に森野が時間切れで失格になったのは言うまでもない。

「舞ってえ、舞ってよう、ダアアアリーーーーーン！」

「だから舞わねえよ!!！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3495d/>

ドSな俺と、ドMなアイツ

2011年11月20日02時57分発行